ロシア諸年代記に於ける
『過ぎし年月の物語』研究

植野修司

まえがき

『過ぎし年月の物語』《Повесть временных лет は，ロシアにキリスト教が輸入され，文字が創られてから，初めての文献として出現した『オストロミーラの福音書』《Остромирово Евангелие》と並ぶロシア最古の文献である．福音書が訳されたのは1056年から翌年にかけてであつたが，おそらく『過ぎし年月の物語』は既にその頃には出来上つていたと思われる．この『物語』を含む種々のロシア年代記の記述から考え合わせると，1037年から1039年に至る頃に，最も古いロシア年代記が創られたもののように思われるからである．一般に最古のキーエフの年代記集と考えられるこの文献は，残念ながら現存してはいない．

ところが，十一世紀の60年代に，キーエフ・ペチエルスキー修道院《Киево-печерский монастырь》の修道院長《игумен》ニコン《Никон》が，その最古のものを引きついで，1073年の記事まで書きつぐけたのであつた．そして，それから二十年ほどの後，即ち1093年から95年にかけて同じこの修道院で再び書き写され，書き加えられた．そして，これを原初の年代記集と呼んだのである．この両者の書物或はその写本もまた現在には伝えられていない．

ところが，今度は十二世紀のはじめ，正確には1112年か1113年に再び同じ修道院で修道士《монах》のネストル《Нестор》がもう一度編集して書きとめた．現在に残る『過ぎし年月の物語』の原型である．また1116年頃にもこの『物語』をミハイロフスキー修道院《Михайловский монастырь》の修道院長シリヴエストル《Силивестр》が編集して，1110年の記事まで書き加えたのであつた．『ロシア原初年代記』と言われ，或は『過ぎし

年月の物語』とも言われるこれらの写本もまた，残念ながら現在には伝わつていない．然し，この年代記の仕事は，全く聖なるものとして引きつがれていたために，その後の漠大なロシア諸年代記に見事な定着を示したのであつた．その様な諸年代記の写本は現在二百以上を数えることができるが，そのうちでも，最も古い写本である1377年のラヴレンチー年代記《Лаврентиевская летопись》を中心にすえて，その他のものを横に置きつゝ，『過ぎし年月の物語』を見つめてゆくことにしたい．其処には非常に古い古代ロシア語が文字化された十一世紀初頭には，既に高い表現力を持ち得ていたことも認められるであろうし，それ以前の遙かに遠い過去からの伝承文学の美しい投影もまた読み取ることができると思われる．或はまた十一世紀初頭の輸入キリスト教の摂取の面白さも掘り出し得るかも知れない．そして，何よりも，古代ロシア語の姿を，その話し言葉にまで及んで追求し得るであろう．

－A－

『過ぎし年月の物語』が初めて書きとめられた時期を1037年であつたとすれば，此処に書きとめられたその年以前の出来事の物語は，一体，何に由来するものなのであろうか．ビザンテンから持ち込まれた文献を除外するとすれば，文字をもたなかつたロシアにとつてはその由来を文字以前の口頭伝承に求めなければならないであろう．まして，その出来事の物語に明確な年号が設定される以前の記述に関しては，なおさらのことである．民族の歴史の深い深い過去を映し出す口頭伝承に，どれほどの歴史事実が反映しているものなのか，此処でそれを問おうとするのではない．むしろ，その伝承をおのれの民族の霧深い過去の姿と感じて，其処に物語を組み立てたその基盤からほぐし出してみようとするの

である．

さて，ラヴレンチー年代記には，ロシア最古の都キーエフ《Киевъ》の建設について，次の様な物語が読み取られる．

Поляном же живущем особе и володеющем роды своими, иже и до сее братье бяху Поляне, и живяху кождо с своим родом и на своих местех, владеюще кождо родом своим. Быша 3 братья, единому имя Кий, а другому Щек, а Третьему Хорив, сестра их Лыбедь. Седяще Кий на горе, где же ныне увоз Боричев, а Щек седяше на горе, где ныне зовется Щековица, а Хорив на третьей горе, от него же прозвася Хоревица; и створиша град, во имя брата своего старейшаго, и нарекоша имя ему Киев. Бяше около града лес и бор велик, и бяху ловяща зверь; бяху мужи мудри и смыслени, нарицахуся Поляне, от них же есть Поляне в Киеве и до сего дне. Ини же сведуще рекоша, яко Кий есть перевозник был; у Киева бо бяше перевоз тогда с оноя стороны Днепра, тем глаголяху: на перевоз на Киев. Аще бо бы перевозник Кий, то не бы ходил Царюгороду; но се Кий княжаше в роде своем; приходившю ему ко царю, якоже сказають, яко велику честь приял от царя, при котором приходив цари. Идущю же ему опять, приде к Дунаеви, възлюби место и сруби градок мал, хотяше сести с родом своим, и не даша ему ту близь живущии; еже и доныне наричють Дунайци городище Киевець. Киеви же пришедшю в свой град Киев, ту живот свой сконча; а брат его Щек и Хорив и сестра их Лыбедь ту скончашася.

イパーチー年代記，トロイツキー年代記も大体同じ文章である．

意味は，

『ポリヤネが別々に住んでいたとき，そして自分の氏族を支配していたとき，それらは，これらの兄弟たち以前にもまたポリヤネであつた．そして，おのおの自分の氏族を支配しながら自分の氏族と共に，そして自分の場所においておのおの住んでいた．三人の兄弟がいた．一人の名前はキー，もう一人はシチエク，三人目はホリフで，彼等の妹はルイベジであつた．現在ポリチエフの坂がある山に，キーが住んでいた．ところが現在シチエコヴイツアと呼ばれている山にシチエクが住んでいた．ところでホリフは三番目の山に．彼の故にホレヴイツアと名づけられた．そして最年長の兄弟の名において町をつくり，そしてその名をキエフ（「キーの」という意味である）と呼んだ．町のまわりに森と大きな森林があつた．そして（彼等は）獣の狩猟を事としていた．（彼等は）賢明で思慮深い人物たちであつた．（彼等は）ポリヤネと名づけられた．彼等から今日に至るまでもキエフにはポリヤネがいるのである．あるものは知りもせずにキーが渡し守であつたと言つた．というのはキエフのそばには当時ドニエプル（河）の対岸からの渡しがあつた．それによつて，キエフへの渡しへと言つたものである．もしもキーが渡し守であつたならば，彼はツアリゴロドへは行かなかつたであろう．しかし見られる通り，キーは自分の氏族の中で公であつたのである．彼が皇帝の所へ来たとき，人びとの言うところによれば，彼が着いたときその皇帝からおおいなる名誉を受けたと言う．彼がもどるとき，ドウナイに来たり，その地を特に愛し小さい町を建て自分の氏族と共に住もうと欲していたが，そのそばに住んでいたものたちが彼に許さなかつた．そのとりでの町を今なおドウナイの人びとはキエヴエツイと呼んでいる．キーが自分の町キエフについたとき，そこで自分の一生を終つた．ところが，彼の兄弟シチエクとホリフおよび彼等の妹ルイベジもそこでなくなつた』

というのである．この記事の中から，『現在それは何々と言われている』という註記的な部分を取り去り，且つ，渡し守ではなかつたという註記的部分をも取り去つて見るがよい．そして，其処に残つたものの中で，極端なまでに目立つ絶対与格の非常に古い使用法を冒頭に組み出してみたらどうなるであろうか．まさに，古いブイリーナ《Былина》的伝承物を思わせるのである．

そして，それよりもなお面白い傍証があることを述べよう．その手がかりは先づこの文章の用語である．一例をあげてみよう．渡し守ではなかつたという個所を註記的部分と考えずに，既に当時，この伝承にバリアントがあつた証拠だと考えて，『ツアリゴロドへは行かなかつたはずである』《не бы ходил Царюгороду》という一節を取りあげて見よう．裏から言えば，キーはツアリゴーロド（ビザンチン）へ『行つた』《ходил》のである．だから続いて『彼が皇帝（ビザンチンの）のところに着いた時』《приходившю ему ко царю》と述べられたのである．用語というのは，此処で使われた『行く』《ходити》，或は『着く』《приходити》なのである．特にこの二語を便宜上取りあげてみる．キーがビザンチンへ行つた，皇帝のところへ着いたとは一体，何を意味するのか．《(при-)ходити》という古代ロシア語は余りにその内容があいまいで，全く，やつかいである．その才一の意味は『歩行する』，才二には『動く』，才三には『歩き廻る』，才四には『歩き着く』，才五には『抜け出る』，才六には『通り抜ける』，才七には『旅行する』，才八には『出頭する』，才九には『出現する』，才十には『着く』，才十一には『対面する』，才十二には『存在する』，才十三には『生きている』，才十四には『行動する』，才十五には『実行する』，才十六には『処致する』，才十七には『衣服をつけている』，等々の内容を蔵し，且つ，この動詞の後に《на》という対格支配の前置詞を付した時にのみ，『軍勢を進める』，『攻撃する』，『進

軍する』等という軍事的意味をになうのであつた．軍事的意味において，軍勢を進めることを，多くのその後の年代記にみられる古代ロシア語では，必ず«ити на・・・»で表現しているではないか．

それにもかかわらず，この物語が書きとめられて後も，その源であつた伝承は，なお，口頭で語り伝えられ，然も，『行く』«ходити»を英雄叙事詩的に進軍するという意味に染めぬかれてしまつていた証拠がある．他の諸年代記のこの個所を比較してみるがいい．

(1) Софийская Первая Летопись:

Аще бы Кий перевозник был, то не бы ходил Царюграду; но сей Кий княжаше в роде своем, и приходившу убо ему ко царю...

(2) Новгородская Первая Летопись младшего извода:

его же нарицають тако перевозника бывша; инеи же: ловы деяше около города.

(3) Троицкий список новгородской летописи:

егоже нарицают древле перевозника бывша; инии же, яко ловы деяше около града своего.

(4) Воскресенская летопись:

Аще бы Кий перевозник был, то не бы ходил к Царюграду; но се Кий княжаше в роде своем, и приходившу бо ему к царю...

(5) Патриаршая или Никоновская Летопись:

Аще бы был Кий перевозник, не бы ходил к Царюграду с силою ратью;

(6) Тверская Летопись:

Аще бы Кий прьвозникь быль, то не бы ходил ко (царю); но сей Кий княжаше в роде своем, и приходившу (бо) (ему) ко царю...

(7) Львовская Летопсиь:

Аще бы Киев перевозник был, то не бы ходил ко Царюграду; но сей Кий княжаше в роде своем. Приходившу бо ему ко царю...

(8) Сокращенный летописный свод 1495г.

Аще бо бы Кии перевозник, то не бы ходил к Царюграду; но сеи Кий княжаше в роде своем, приходившу ему и к царю...

(9) Сокращенный летописный свод 1495 г.

тоже самое, как в своде 1493 г.

(10) Вологодско-пермская Летопись:

Аще бы Кии перевозник был, то не ходил ко Царюграду, но сии Кии княжаше в роде своем и ходившюся ему ко царю...

(11) Московский летописный свод конца 15 века:

Аще бо Кыи перевозник был, то не бы ходил Царюграду; но сеи Кыи княжаше в роде своем, и приходившу бо ему к Царю...

僅かに（５）として上にあげたニコン年代記にのみ，『軍勢を連れて』«с силою ратью»と書きとめられているに過ぎないではないか．これによれば，キーのツアリグラード行きは，旅行の如きものではない．進軍なのであつた．にもかゝわらず，其処には，いまだに『歩く』«ходити»という動詞が同いられ，然も，その直後には«к･･･(与格)»という形が用いられたのみで，攻撃することを意味した«на･･･(対格)»は，やはり用いられていない．とすれば，この一節は，«ходити»だけで進軍を現した非常に古い叙事詩的用語の精一杯の援用であつたと思わざるを得ない．

他の年代記にあつては，総て，この伝承英雄叙事詩的な全く古いまゝの語法を完全にそのまゝ踏襲したのであつた．そして，ニコン年代記だけが，内容をより明確ならしめんとして，精一杯の援用によつて，年代記の聖なる仕事を守りつゝ，なお，より民衆的な伝承叙事詩ブイリーナにみられるような，«с силою ратью ...»正確には，『力なる軍勢を伴いて』という全く庶民的な表現を組み入れる努力を見せたのだと思われる．

では，年代記にのみ影をおとして，今は消え去つたそんな英雄叙事詩が，いつの頃からロシアの祖先たちにあつたのであろうか．十世紀以後にしか文字を持ち得なかつたこの民族に，それを尋ねる可能性はほとんどない．たゞ一つだけ，次の様な事実があげられる．

即ち，七世紀のアルメニアの歴史家ゼノブ・グラク«Зенобъ Глак»が書きとめた面白い話がある．カウル«Каур»という町がポルニ«полунь»の国に建てられた．その町の創建者の名は，ゼノブによればカウル«Каур»，メンチエイ«Ментей»，ヘレアン«Хереан»であつた．カウル«Каур»⟷キエフ«Киев»，キー«Кий»；メンチエイ«Ментей»⟷シチエク«Щек»；ヘレアン«Хереан»⟷ホリフ«Хоривъ»；国名ポルニ«Полунь»⟷ポリヤネ«Поляне»と対応させて見て，この七世紀アルメニアにおける他国の町の建設の物語が，もしも，ロシアの先祖たちの英雄叙事詩の投影であつたとしたら面白い．たしかに，その頃にはスラヴ民族の氏族的軍勢即ちドルジーナ«дружина»がハザル人«хазаръ»と共に外コーカサス«Закавказье»を戦い取つていたし，また，北コーカサスにいたスラヴ民族の進取的な連中がアルメニアにも入り込んでいた．その様な連中がアルメニアに持ちこんだ叙事詩であつたとすれば，それは，たしかに，農民的な平民叙事詩でなくて，むしろ，親兵団的な軍事英雄詩であつたであろう．だからこそ，キーというキーエフの創建者をビザン

ナン襲撃の英雄にも仕立てあげていたのであろう．『歩く』«ходити»や『着く』«приходити»を以て単にそれだけで軍事行動を意味させた用法も，うなづかれる話である．

その様な親兵団的な軍事英雄詩は，『過ぎし年月の物語』が書きはじめられる十一世紀初頭には，既に鮮やかな原型をくづして，一方は農民的な渡し守の物語詩へ，または，狩猟者の物語へとバリアントを生み出してしまつていたのであろう．その様にして，親兵団的な本来の内容へ，その記録を近づけようとした努力の跡が，先にあげたニコン年代記の表現努力の手法にみとめられるのである．

ちなみに『歩く』«ходити»が始めて«на・・・(対格)»を伴つて，『進撃する』という意味に用いられたのは，年代記ではプスコフ第一年代記6538年（西暦1030年）の項に

«Ходил Ярослав Володимеричь изъ Новагорода на Чюдь»

『ヴラジミルの子ヤロスラフはノヴゴロドを出でてチュージに進撃した』

とあるのと，もう一個，同じ年代記にその後434年あとの6972年の項に

«им есми ходити на вас не велел»

『彼等には，汝等を攻めるように（我は）命じてはいなかつた』

とあるのが認められる．そして，それ以外はほとんどすべて«ити на・・・(対格)»という形で記述されているのが年代記の姿である．

«на・・・(対格)»を伴つてさえ，«ходити»はその様にしか機能しなかつた．裏から言えば，プスコフ第一年代記の6583年の項にみられる記述も，キーの場合と同様に英雄叙事詩の一節かその投影（«на対格»をつけたと考えて）であろう．そして，同じ年代記の6972年の項は，記述用語ではなくて，生きた当時の話し

言葉であつたと思われる．英雄叙事詩的な言葉の用法が，ほんの少し手を加えられて公や支配者たちの公式的な話し言葉に生れ変つていた面白い現象が，此処に一つみとめられるとしておこう．

— Б —

英雄叙事詩や民間歴史歌謡やブイリーナのようなもの以外に，『過ぎし年月の物語』は，非常に多くの伝説を利用したものと思われる．ある人物の記述の後に付け加えられた『その墓地は・・・に今日までもある』というような個所は，その多くの場合が大きな塚にまつわる伝説であつたか或は伝説の組み合わせであつただろう．或はその人物が滞在したり，利用したような遺跡にまつわる話もまたそのようなものと考えてよいであろう．叙事詩にしろ，語り物の伝説にしろ，そのようなものを『過ぎし年月の物語』の作者 —— 編者たち —— がその全部を知つていた筈はない．むしろ，日本における古事記の話のような，非常にすぐれて言い伝えの憶え手が十一世紀や十二世紀初頭のロシアにも居たものと思われる．年代記の中には，それらの物語の語り手がいたことを示す明確な個所がある．『過ぎし年月の物語』の作者 —— 編者 —— が，珍らしく『我は』«аз»という一人称主格の形で正面に顔を出して，自己を語る個所を調べてみるがよい．その様な個所は非常に少いが，その中でも6614年の項，即ち西暦で言えば1106年の項の一節は絶対に見落してはならないであろう．

即ち，ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー，等の年代記には大体同一文章で次の様な一節がみとめられる．

В се же лето преставися Ян, старець добрый, жив лет 90, в старости мастите; жив по закону Божью, не хужий бе первых праведник, от него же и аз многа словеса слышах, еже и вписах в летописаньи сем

『この同じ年にヤンが亡くなつた．立派な長老で，九十年生き，大した老令であつた．神のおきてに従つて生き，古の義の人たちに劣らなかつた．その彼から我は多くの物語を聞いた．彼から我が聞いたそれを年代記の中に書き入れもした．』

この言葉はニコン年代記にも同年の項にほゞ同じような意味で次のように記録されている．

Того же лета преставися Ань, добрый старець, жив лет 90, в старости мастите, по закону Божию, не хуже бе пръвых праведников, от негоже и аз многа словеса слышах;

此処には，ヤンから聞いたものを年代記に書き込みもしたという一節は見当らないが，同じ意味にとつて，さしつかえない．この他の多くの年代記の，この項の記事に就て引用することは，もう省略しておこう．

少くとも『過ぎし年月の物語』の作者 —— 編者 —— がヤンの口から聞いた多くの物語を書き入れたことには間違いない．ではそのヤンと言う人物は一体如何なる人物であつたのだろう．半ば職業的な説話や伝説の語り手であつたのだろうか．

再び，ラヴレンチー年代記，イパーチー年代記，トロイツキー年代記等に立ち戻つてみよう．ヤンの父《Вышата Остромилович》ヴイシヤタ・オストロミーロヴイチを書きとめた記事が見出される．即ちヤンの死の五十三年前，西暦1043年，ロシア年代記年号6551年の項に，ヤン自身の父の姿が書きとめられている．おそらく，そのほとんどはヤン自身が語つたそのまゝの内容であり，言葉であつたであろう．

В лето 6551.

Посла Ярослав сына своего Володимера на Грькы, и вда ему вой мног, а воеводьство поручи Вышате,

отцю Яневу. И пойде Володимер в лодьях, и придоша в Дунай, поидоша ко Царюграду; и бысть буря велика, и разби корабли Руси, и княжь корабль разби ветр, и взя князя в корабль Иван Творимичь, воевода Ярославль. Прочии же вои Володимери ввержени быша на брег, числом 6000, и хотяче поити в Русь, и не иде с ними никтоже от дружины княжее. И рече Вышата: "аз пойду с ними"; и выседе из корабля к ним, рек: "аще жив буду, то с ними, аще погыну, то с дружиною" и поидоша хотяче в Русь. И бысть весть Грьком, яко избило море Русь, и посла царь, именем Мономах, по Руси олядий 14; володимер же видев с дружиною, яко идуть по них, въспятився изби оляди Гречьскыя, и възвратися в Русь, оседавшеся в корабле свое. Вышату же яша с извержеными на брег, и приведоша я Царюграду, и слепиша Руси много; по трех же летех миру бывшю, пущен бысть Вышата в Русь к Ярославу. В си же времена вдасть Ярослав сестру свою за Казимира, и вдасть Казимир за вено людий 8 сот, еже бе полонил Болеслав, победив Ярослава.

『6551年.

ヤロスラフはおのれの息子ヴォロジメルをグレキに派遣した.しかして,彼に多くの軍勢を与え,また司令職をヤンの父ヴィシャタにまかせた.しかしてヴォロジメルは舟で出かけ,(人々は)ドナイに着き,ツアリグラードへ出かけた.しかして大いなる嵐があり,ルシの舟を打ちくだいた.しかして風が公の舟を打ちくだいた.ヤロスラフの軍司令のイヴアン・トヴォリミチが公を舟に引き取つた.ところでヴォロジメルの他の軍勢は岸に投げ出さ

れていた．その数六千である．しかして，（彼等は）ルシに戻ろうと欲した．しかして公の親兵団のうちには誰一人として彼等と一諸には行かなかつた．しかしてヴイシヤタは言つた．《我は彼等と共に行くであろう》と．しかして舟から彼等の方へ上陸して言つた．《もしも（我が）生きているとすれば，彼等と共であろうし，もし，倒れるのなら，親兵団と共にであろう》と．しかして，ルシへと欲して（人々は）出かけた．しかして，海がルシを打ち破つたという知らせが，グレキたちにあつた．しかしてモノマフという名の皇帝がルシを追つて十四隻の舟を派遣した．ところで，自分たちを（グレキが）追つて来るのを親兵団と共にヴオロジメルが見て，引き返してグレキの舟を打ち破つた．しかして，おのれの舟に乗つてルシに帰還した．ところで岸へ打ちあげられた人々と共にヴイシヤタを（グレキは）捕え，それらをツアリグラドに連れて来た．しかして多くのルシを盲目にした．三年後に和睦ができた時，ヴイシヤタはルシのヤロスラフのもとへ放免された．この同じ頃にヤロスラフはおのれの妹をカジミルに与えた．しかしてカジミルは結納としてボレスラフがヤロスラフを打ち負かして捕虜にしていた八百人を贈つた』

ヤンの父は，その父称から直ちに分る通り，ロシア最古の文献であるオストロミー㊀の福音書の筆者オストロミー㊁の子であり，上に引用した年代記の記述によれば，公の側近の武人であつた．いや，むしろ，公の最も信望厚い文人であつたかも知れない．軍戦や危急の折には余り役に立たず，むしろ，知性の高い人物で筋の通つた行為には勇気を持ち，耐えしのぶべきは耐え抜くだけの意志の人であつたことが，この記述から読み取られるであろう．

ヤン自身がおのれの父をどれほどかでも粉飾して年代記者に語つたものだとしても，むしろ，その粉飾を読み取ることの方が困難な文章であるかも知れない．他の諸年代記もまたほゞ同じ記述

を持つているに過ぎないからである．

では，おのれの父をその様に本質に迫つて立派に語り得たヤン自身は，その活動期に如何なる人物であつただろうか．

再び『過ぎし年月の物語』に立ち戻り，ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキの各年代記にほゞ同一の形で記述される彼自身の話を求めてみよう．年代記者がヤンから聞いたヤン自身の物語にふさわしく，その一節は非常に具体的で長い．その具体性を示すためにも，此処に引用しておかなければなるまい．即ち，彼が年代記に示される通り，1106年に九十才で死んだとすれば，その年をさかのぼること三十五年前，即ち彼が五十五才の時の出来事である．西暦1071年，年代記年号6579年の項の記述である．

В лето 6579.
Воеваша Половци у Растовыця и у Неятина. В се же лето выгна Всеслав Святополка из Полотьска. В Се же лето победи Ярополк Всеслава у Голотичьска. В си времена приде волхв, прелщен бесом; пришед бо Кыеву глаголаше сице, поведа людем, яко на пятое лето Днепру потещи вспять и землямь преступати на ина места, яко стати Гречьскы земли на Руской, а Русьскей на Гречьской, и прочим землям изменитися; его же невегласи послушаху, вернии же насмехаются, глаголюще: "бес тобою играеть на пагубу тобе". Се же и бысть ему: в едину бо нощь бысть без вести. Беси бо подътокше на зло вводять, посем же насмисаются, ввергъше и в пропасть смертную, научивше глаголати; якоже се скажем бесовьское наущенье и действо. Бывши бо единою скудости в Ростовьстей области, встаста два волъхва от Ярославля, глаголюща: "яко

ве свеве, кто обилье держить"; и поидоста по Волзе, кде придуть в погосте, туже нарицаху лучьшие жены, глаголюща, яко си жито держить, а ся мед, а си рыбы, а си скору. И привожаху к нима сестры своя, матере и жены своя; она же в мечте прорезавше за плечем, выимаста любо жито, любо рыбу, и убивашета многы жены, именье их отъимашеста собе. И придоста на Белоозеро; и бе у нее людий не 300. В се же время приключися прити от Святослава дань емлющю Яневи, сыну Вышатину; поведаша ему Белозерци, яко два кудесника избила уже многы по Волзе и по Шексне, и пришла еста семо. Ян же испытав, чья еста смерда, и ведав, яко своего князя, послав к ним иже около ею суть, рече им: "выдайте волхва та семо, яко смерда еста моего князя", они же сего не послуша. Ян же поиде сам без оружья, и реша ему отроци его: "не ходи без оружья, осоромять тя"; он же повеле взяти оружья отроком, и беста 12 отрока с ним, и поиде к ним по лесу. Они же сташа исполчившеся противу, Яневи же идущю с топорцем, выступиша от них 3 мужи, придоша к Яневи, ркуще ему; "вида идеши на смерть, не ходи; оному повелевшю обити я, к прочим же поиде. Они же сунушася на Яня, един грешися Яня топором, Ян же оборотя топор удари и тыльем, повеле отроком сечи я; они же бежаша в лес. Убиша же ту попина Янева. Ян же вшед в град к Белозерцем, рече им: "аще не имете волхву сею, не иду от вас и за лето". Белозерци же шедше яша я, и приведоша к

человек?" Онема же рекшема: "яко ти держать обилье, да аще истребиве сих, будеть гобино; аще ли хощеши, то перед тобою вынемеве жито, ли рыбу, ли ино что". Ян же рече: "по истине лжа: створил Бог человека от земле, составлен костьми и жылами от крове, несть в нем ничтоже; и не весть ничтоже, но токмо един Бог весть". Она же рекоста: "ве веве, како есть человек створен". Он же рече: "како?" Она же рекоста: "Бог мывъся в мовници и вспотився, отерься ветъхом, и верже с небесе на землю; и распреся сотона с Богом, кому в нем створити человека? И створи дьявол человека, а Бог душю в не вложи; темже аще умреть человек, в землю идеть тело, а душа к Богу". Рече има Ян: "по истине прельстил вас есть бес; коему Богу веруета?" Она же рекоста: "антихристу". Он же рече има: "то кде есть?" Она же рекоста: седить в бездне". Рече има Ян: "какый то бог, седя в бездне? то есть бес, а Бог есть на небеси, седя на престоле, славим от ангел, иже предстоять ему со страхом, не могуще на нь зрети; сих бо ангел свержен бысть, егоже вы глаголета антихрест, за величанье его низъвержен бысть с небес, и есть в бездне, якоже то вы глаголета, жда, егда придеть Бог с небес, сего им антириста, свяжеть узами и посадить и, ем его с слугами его и иже к нему верують: вама же и зде муку прияти от мене, и по смерти тамо". Онема же рекшема: "нама бози поведають: не можеши нама створити ничтоже". Он же рече има: "лжють вама бози". Она же рекоста: "нама стати пред Святославом, а ты не може-

ши створити ничтоже". Ян же повеле бити я, и потергати браде ею. Сима же тепенома и браде ею поторгане проскепом, рече има Ян: "что вама бози молвять?" Онема же рекшема: "стати нам пред Святославом". И повеле Ян вложити рубль в уста има, и привязати я к упругу, и пусти пред собою лодье, и сам по них иде. Сташа на Шексины, рече има Ян: "что вам бози молвять?" Она же реста. "сице нама бози молвять, не быти нама живым от тобе". И рече има Ян: "то ти вама право поведали". Она же рекоста: "но аще наю пустиши, много ти добра будеть; аще ли наю погубиши, многу печаль приимеши и зло". Он же рече има: "аще ваю пущю, то зло ми будеть от Бога". И рече Ян повозником: "ци кому вас кто родин убьен от сею?" Они же реша: "мне мати, другому сестра, иному роженье". Он же рече им: "мьстите своих". Они же поимше, убиша я и повесиша е на дубе: отмьстье приимша от Бога по правде. Яневи же идущю домови, в другую нощь медведь възлез, угрыз ею и снесть; и тако погыбнуста наущеньем бесовьскым, инем ведуща, а своее нагубы не ведуча. Аще ли быста ведала, то не быста пришла на место се, идеже ятома има быти; аще ли и ята быста, то почто голаголаста: "не умрети нама", оному мыслящю убити я? Но се есть бесовьское наученье; беси бо не ведять мысли человечьское, но влагають помысл в человека, тайны не сведуще. Бог един свесть помышленья человечьская, беси же не сведають ничтоже; суть бо немощни и худи взором. Яко и се скажем о взоре их и о мраченьи их. В си бо времена, в лета си, при-

клочися некоему Новгородцю прити в Чюдь, и приде к кудеснику, хотя волхвованья от него; он же, по обычаю своему, нача призывати бесы в храмину свою. Новгородцю же седящю на порозе тоя же храмины, кудесник же лежаше оцепев, и шибе им бес; кудесник же встав рече Новгородьцю: "бози не смеють прити, нечто имаши на собе, его же боятся". Он же помянув на собе крест, и отшед постави кроме храмина тое; он же нача опять призывати бесы, беси же метавше им, поведаша, что ради пришел есть. Посем же поча прашати его: "что ради боятся его, его же се носим на собе креста?" Он же рече: "то есть знаменье небеснаго Бога, его же наши бози боятся". Он же рече: "то каци суть бози ваши, кде живут?" Он же рече: "в безднах; суть же образом черни, крилаты, хвосты имуще, всходять же и под небо, слушающе ваших богом; ваши бо ангели на небеси суть, аще кто умреть от ваших людий, то възносим есть на небо; аще ли от наших умираеть, то носим к нашим богом в бездну". Якоже и есть: грешници бо в аде суть, ждуще мукы вечныя, а праведници в небеснем жилище водваряются со ангелы. Сиця ти есть бесовьская сила, и лепота, и немощь; тем же прелщають человекы, веляще им глаголати виденья, являющеся им несвершеным верою, являюшеся во сне, имен в мечте, и тако волхвують наученьем бесовьскым. Паче же женами бесовьская волъшвенья бывають, искони бо бес жену прелсти, си же мужа; тако в си роди много волхвують жены чародейством, и отравою, и имени бесовьскыми козньми. Но и мужи прелщени бывають от бесов

невернии; яко се в первыя роды при апостолех бо бысть Симон волхв, иже творяще волшьством псом глаголати человечьскы, и сам пременяшеться, ово стар, ово молод, ово ли и иного пременяше во иного образ, в мечтаны сице творяше; Анни и Мамврий волшвеньем чюдеса творящеть противу Моисиови, по вскоре не възсогоста противу Моисиови; но и Коноб твориме мечтанье бесовьско, яко и по водам ходити , ина мечтанья твориме, бесом лстим, на пагубу собе и инем. Сице бе волхв встал при Глеб Новегороде; глаголеть бо людем, творяся акы Бог, многы прельсти, мало не всего града: глаголашеть бо, яко "все ведаю", и хули веру хрестьянскую, глаголашеть бо: "яко перейду по Волхову пред всеми". И бысть мятежь в граде, и вси яша ему веру, и хотяху погубити епископа; епископ же взем крест и облекъся в ризы, ста рек: "иже хощеть веру яти волхву, то да идеть за нь; аще ли веруеть кто, то ко кресту да идеть". И разделишася надвое: князь бо Глеб и дружина его идоша и сташа у епископа, а людье вси идоша за волхва; и бысть мятежь велик межи ими. Глеб же возма топор под скутом, приде к волхву и рече ему: "то веси ли, что утро хощеть быти, и что ли до вечера?" Он же рече: "все ведаю". И рече Глеб: "то веси ли, что хощеть быти днесь?" "Чюдеса велика створю" рече. Глеб же вынем топор, ростя и, и паде мертв, и людье разидошася; он же погыбе телом и душею, предавься дьяволу.

『6579年．
ロストヴエツのほとり，およびネヤチンのほとりをボロヴエツたちが攻めた．この同じ年にフセスラフがポロツクからスヴイヤトポルクを追い出した．またこの同じ年に，ヤロポルクがゴロチチエスクのほとりでフセスラフを打ち負かした．
この頃に，悪魔にまどわされたよう術師が来たつた．（彼は）キエフに来たり，人々につたえて次のように言つた．五年目にはドニエプル河が逆流して，国々は別の所に動くはずである．グレキの国はルシの（国に），ルシのはグレキの（国になり），しかして他の国々も変るはずであると．無知なものたちは彼の言うことを聞いたが，信仰ある人々は笑つて彼に言つた．『悪魔が汝を，汝の破滅に向つてもてあそんでいるのである』と．たしかに彼はその通りであつた．即ちある夜，（彼は），音沙汰なくなつた．というのは悪魔たちは，（人々を）そそのかして，悪にみちびき込み，しかる後に，彼らを死の淵に投げ込み，物を言わせるように教え込んで，あざけり笑うものなのである．即ちそのことについて，ここで（我々は）悪魔のまどわしと所業を物語つてみよう．
ロストフの地方に，或る時，飢えがあつて，二人のよう術師がヤロスラフから立ち現れて言つた．『我々（二人）は誰が豊かな富を（かくし）持つているのかを知つている』と．しかして（二人は），ヴオルガに沿つて出かけた．（人々が）貢税納付所に来たつた折に，其処で，（人々は）美しい女たちを名指して，この（女）は，裸麦を，この（女）は蜜酒を，ところで，この（女）は，魚を，またこの（女）は獣皮をかくし持つていると言つた．しかして（人々は）二人のところへおのれの姉妹，母及びおのれの妻を連れ来たつた．二人（のよう術師）は，幻覚のうちに（彼女等の）肩の後を斬り，あるいは裸麦を，あるいは魚を取り出した．しかして（二人は）多くの女達を殺し，彼女等の財産をおのれのために取りあげてしまつた．しかして二人（のよう術師）はペロ

オゼロに来たつた．しかして彼等二人のもとには人々が三百人と言わず居た．

ところで，この時，ヴイシヤタの息子ヤンがスヴイヤトスラフから（派遣されて）貢税を集めに来るようなことが起つた．ベロオゼロの人々は彼に，二人の魔法使いが既にヴォルガ河及びシエクナ河に沿つて多くの女たちを殺し㊙，しかして，（その二人が）此処へ来たつたことを告げた．そこでヤンは，それが誰の奴隷（スメルド）であるかを調べて，それがおのれの公の（もの）であることを知つた．（ヤンは）その二人の傍にいるものたちに使者を送つて，彼等に言つた．『その二人のよう術使いをこちらに引き渡せ．（二人は）我が公の奴隷であるから』と．ところで彼等はこれをきかなかつた．そこでヤンは自から武器なしで出かけた．しかして彼の下級従士たちは彼に言つた．『武器なしでは行くな．汝を（人々は）はづかしめるであろうから』と．そこで彼は下級従士たちに武器をとるように命じた．しかして彼と共に十二人の下級従士たちがいた．しかして，彼等のいる森へ出かけた．ところで彼等は武装して対抗した．ヤンがおのをもつて進んだ時，彼等から三人の男が進み出て，ヤンのところに至り，彼に言つた．『明らかに汝は死にに来ているのだ．行くな』と．（ヤンは）彼等を或る者に打つように命じ，残りのものたちに向つて出かけた．そこで彼等はヤンに向つて，おそいかゝつた．或る者がヤンをおので打ち損じた．そこでヤンはその男へおのをかえして，みね打ちにし，下級従士たちに彼等を断り殺すように命じた．ところで彼等は森の中へ逃げた．そこで（彼等は）ヤンの一人の僧侶を殺した．

そこでヤンは，ベロオゼロ人たちの町に入り，彼等に言つた．『もしも汝等がこれら二人のよう術使いをとらえないならば，（我は）汝等から一年間でも去らないであろう』と．ベロオゼロの人々は，行つて，彼等をとらえ，ヤンのもとに連れ来たつた．

（ヤンは）彼等二人に言つた．『何故，（汝等二人は）かくも多くの人々を滅ぼしたのか？』と．彼等二人が『何となれば，彼等は富をかくしもつている，もしも我々二人がこれらの者たちを打ちほろぼすなら，その富が出て来るであろう，もしも（汝が）欲するならば，汝の前で，我々二人は，裸麦，或は魚，或はその他何なりと引き出すであろう』と言つた時，ヤンは言つた．『本当に，それはうそである．神は人間を土から創り給うた．人間は骨及び血の筋から成るのであつて，人間の中には何もない．しかして，何も知るものはなく，たゞ神のみが知り給うのである』と．そこで彼等二人は言つた．『我等二人は，如何に人間が創られたものであるかを知つている』と．そこで彼は言つた．『如何に？』と．そこで彼等二人は言つた．『神がむし風呂で体を洗い，汗をかき，ボロ布でふいた．しかして，（それを）天から地上に投げた．しかして，悪魔（サタン）は神と，いづれが人間をその中に創るべきかを争つた．しかして，悪魔が人間を創り，一方，神はその中へ魂を入れた．それ故に，もしも人間が死ねば，肉体は地の中へ行き，一方，魂は神の方へ（行く）』と．彼等二人にヤンは言つた．『本当に，悪魔が汝等をまどわしてしまつた．汝等二人は如何なる神を信じているのか？』と．彼等二人は言つた．『反キリストを』と．そこで彼は二人に言つた．『しからば，（その神は）どこにいるのか？』と．彼等二人は言つた．『奈落の中に坐つている』と．ヤンは二人に言つた．『奈落の中に坐つているのは，いかなる神であるか？それこそ悪魔である．ところで神は天上に王座に坐つて，天使たちからたゝえられて居給う．その天使たちは恐れをもつて神の前に立ち，神を見ることもできない．ところでそれらの天使たちの（一人）が引きおろされた．その天使を汝等は反キリストと名づけたのだ．彼（その天使）の傲慢さの故に天上から（その天使は）引きおろされ，しかして（今）奈落の中にいる．汝等が言つた通りである．神が天から降り来たり

給い，この反キリストを捕え給い，鎖でしばり給い，引きすえ給い，その下僕と共に彼，及び彼を信ずるものたちを捕え給うのを（それは）待つているのである．ところで，汝二人は，此処においても，我から苦しみを受けるべきであり，且つ，死後にも，あの世において』と．ところで彼等二人が『神々は，汝は我々二人に何も出来ないと，我等に言つている』と言つた時，彼（ヤン）は二人に言つた．『神々は汝二人にうそを吐いているのだ』と．そこで，二人は言つた．『我々二人はスヴイヤトスラフの前に立つべきであるが，汝は（我等に）何もなし得ない』と．そこでヤンは彼等を打ちのめし，二人のあごひげを引き抜くように命じた．ところで，これら二人が打ちすえられ，しかして二人のあごひげがそぎ抜かれた時，ヤンは二人に言つた．『汝等二人に神々は何を言つているのか？』と．彼等二人は答えた．『我々はスヴイヤトスラフの前に立つべきであると』と．

ヤンは彼等二人の口の中へ棒切れぐつわをはめ，マストに彼等をしばるように命じた．しかして，おのれの面前で舟に乗せて放ち，しかして自からは彼等の後から進んだ．シエリスナの河口にとどまつた．しかして二人にヤンは言つた．『汝等二人に神々は何と言つているか？』と．二人は言つた．『神々は我々二人に，我等は汝の故に生きてはおれないと言つている』と．しかしてヤンは彼等二人に言つた．『それこそ，それら（神々）が汝等二人に真実を伝えたのである』と．そこで二人は言つた．『しかし，もしも，汝が我等二人を放免すれば，汝には多くの善きことがあるであろう．もしも我等二人を滅ぼすならば，多くの悲しみを災を受けるであろう』と．そこで彼は二人に言つた．『もしも汝等二人を放免すれば，我には神から災が起るであろう』と．しかしてヤンは，漕ぎ手たちに言つた．『汝等のうちの誰のところで，親族の誰がこの者等のために殺されたか？』と．そこで彼等は言つた．『我には母が，他の者には妹が，また或るものには娘が』

と．そこで彼は彼等に言つた．『おのれの者たちのあだをむくいよ』と．彼等は二人をとらえて殺した．しかして，それをカシの木につり下げた．義によつて，（彼等二人は）神から罰を受けたのであつた．ヤンが家に帰りつゝあつた時，その翌日の夜に熊が這い登つて，二人をかみさき，しかして喰べてしまつた．しかして，他の人たちには教えながら，一方では，おのれの破滅を知らずに，（彼等二人は）悪魔のそそのかしによつて，この様に滅んだ．もしも（二人が）（自己の破滅を）知つていたら，彼等二人が捕えられるべき所である此処へは来なかつたはずである．また（ヤンが），彼等を殺そうと考えていた時，（二人は）何故に『我々二人は死ぬべきではない』と言つたのか？　然し，これこそ悪魔の教えなのである．というのは，悪魔たちは人間の考えを知らないのに，（人間の）秘密を知らないで，人間の中に企みを吹き込むのである．神一人のみが人間の考えを知り給い，悪魔たちは何も知らないのである．というのは，（悪魔たちは）無力であり，醜いからである．

さて，今度は，悪魔たちの外見について，及び彼等の迷言について物語ろう．

さて，この頃，この時期に，或るノヴゴロド人がチュジへ行くことになつた．しかして彼は魔法使いからの魔法を求めて，そのもとへ来たつた．彼（魔法使い）は，おのれの習慣に従つて，おのれの家に悪魔どもを呼び寄せはじめた．ノヴゴロド人がその家のシキイの上に坐つていた時，魔法使いの方は硬直して横たわつていた．しかして悪魔が彼を打つたのである．そこで，魔法使いは起きあがつて，ノヴゴロド人に言つた．『神々は来たることができない．（神々が）恐れるものを何か（汝は）おのれ（の身）につけて持つている』と．そこで彼はおのれの上にある十字架を思い起し，しかして，離れて，（それを）その家の外に置いた．そこで彼は再び悪魔たちを呼び寄せはじめた．悪魔たちは彼をま

どわし，何のために（ノヴゴロド人が）来ているのかと言つた．この後，（ノヴゴロド人は）彼（魔法使い）に尋ねはじめた．『何のために（悪魔たちは）（我が）このようにおのれの身につけているその十字架をおそれているのか』と．そこで彼は言つた．『それは天なる神のしるしである．それを我々の神々は恐れているのだ』と．彼は言つた．『しからば汝等の神々はいかなるものであるか．何処に住んでいるのか？』と．彼は言つた．『奈落に．ところで外見は黒く，翼があり，尾をもつていて，また，汝等の神々の言うことを聞いて天にもまた登るのである．というのは，汝等の天使たちは天におり，もしも汝等の人々のうちの誰かゞ死ねば，天へ運びあげられるし，あるいは，また，もし，我々の（人々の誰か）が死んで行く時には，我々の神々のいる奈落へ運ばれるものだからである』と．事柄は即ち次の如くである．即ち，たしかに罪あるものたちは，永遠の苦しみを待ちつゝ地獄にいるのであり；正しい者たちは天上の住み家に天使たちと共に定住しているのである．

悪魔の力と美しさと，しかして無力さはかくの如くである．信仰の完全でない者には，時には夢の中に現れ，また時にはまどろみの中に現れ出で来て，幻影を物語るように人々に命じたりすることで悪魔は人々をまどわすのである．しかして，かくして，悪魔のそそのかしによつて魔法使いを（彼等は）使うのである．悪魔の魔法は女たちによりしばしば現れて来る．というのは，太古，悪魔は妻をたぶらかし，彼女の方が夫を（たぶらかした）．同じく，この時代の人々の中においても，女達は，よう術によつて，また，毒薬によつて，またその他の悪魔のたくらみによつて，魔法をおこなつているのである．しかして，また，信仰なき男たちも，悪魔たちからたぶらかされているのである．丁度，これは，太古の時代に使徒たちの頃，シモンが居り，よう術によつてオス犬に人語を語らせた．しかして自分は或は老人に，或は若者に，

身を変え，また，他人をも他の形に変えていたが，幻覚を利用してそんなことを行つていたのと同じである．アンニは，しかしてマムヴリイも，モイセイに対してよう術をしかけた．然し，二人は間もなく既にモイセイに対して何も為し得なかつた．しかし，コノプもまた，あたかも水面上をも歩くような悪魔の幻覚を（人に）行い，その他の幻覚を行つた．悪魔にたぶらかされ，おのれ及び他の人たちの破滅に至つた）．

かくの如きよう術師がグレブの時代にノヴゴロドに現れたのである．神の如くよそおつて，人々に話しかけ，多くの（人々）をたぶらかし，ほとんど町全体を（たぶらかした）．彼は，あたかも，『あらゆることを知つている』如くに語るのである．しかして，キリスト教の信仰をそしり，『総ての人々の眼前でヴオルホフ（河）を（我は）渡つてみよう』と言うのである．しかして，町に反乱が起つた．しかして総ての人々は彼を信じて，主教を殺そうと欲した．主教は十字架を取り，法衣をまとい，立ち上つて言つた．『よう術師を信じようと欲するものは，彼に従つて行け．もしも，誰か信ずるものがあれば，十字架のもとに来たるべし』と．しかして，（人々は）二つに分かれた．というのは，グレブと彼の親兵団は来たりて主教の傍に立ち，人々は総てよう術師に従つて行つた．しかして人々の間に大きな反乱があつた．そこでグレブは，おのを着物のすその下にかくして，よう術師のもとに来たり，彼に言つた．『（汝は）知つているか．朝に何が起るか．何が夕方までに（起るか）』と．彼（よう術師）は言つた．『総てを知つている』と．しかしてグレブは言つた．『しからば，（汝は）知つているか．昼間に何が起ろうとしているか』と．『おおいなる奇蹟を（我は）行うであろう』と（よう術師は）言つた．そこでグレブはおのを抜いて彼を打ち割つた．しかして，（彼は）死んで倒れ，しかして人々は四散した．彼（よう術師）は，悪魔に身をゆだねて，肉体も魂も滅んだ』

その後，しばらくヤンの名の記事は出ないが，その後十八年して，即ち6597(1089)年の項に次の様にみられる．

В лето 6597.

Священа бысть церкви Печерьска святыя Богородица манастыря Феодосьева, Иоаном митрополитом, и Лукою Белогородьскым епископом, и Исаием епископом Ростовьским, и Иваном Черниговьскым епископом, и Антоньем Гурьговьским, при благороднем князя Всеволоде державному Русьскыя земля, и чадома его Володимера и Ростислава, воеводьство держащю Кыевьскыя тысяща Яневи, игуменьство держащю Иану.

『6597年．

フエオドシーのペチエルスキー修道院の聖母教会に，府主教ヨアン，ペルゴロドの主教ルカ，ロストフの主教イサヤ，チエルニゴフの主教ヨアン，及び，ユリエフの修道院長アントニーによつて，ルシの国を治める尊い公フセヴオロド，彼の子等ヴオロジメルとロスチスラフの臨席のもとで浄めの式が行われた．キエフの千人長管区をヤンが治め，修道院長の職をヨアンが持つていた時であつた』

そして，その翌々年即ち6599(1091)年の項の中程に再びヤンの名が出て来る．今度は妻の名も書きとられている．即ち，その一節は，

В лето 6599.

..... Се же повем мало нечто, еже събысть пророчесенье Феодосьево: игуменьство бо Феодосью держащю, в животе своем правящю стадо, порученое ему Богом, черноризци, нетокмо бо си едины, но и мирьскыми печашеся о душах их, како быша спаслися, паче же о духовных сынех своих, утешая

и наказая приходящая к нему, другоица в домы их приходя и благословленье им подавая. Единою бо ему пришедшю в дом Янев к Яневи и к подружью его Марьи, Феодосий бо бе любя я, занеже живяста по заповеди Господеви и в любви межи собою пребываста; единою же ему пришедшю к нима, и учашеть я о милостыни к убогым, о царьствии небеснем, еже прияти праведником, а грешником муку, о смернем часе. И се ему глаголющю о положении тела в гробе има, рече ему: "кто весть, кде си мя положить?" Рече же ей Феодосий: "по истине идеже лягу аз, ту и ты положена будеши". Се же сбысться. Игумену же бо преставльшюся преже, о 18 лето се сбысться: в се бо лето преставися Яневая, именем Марья, месяца августа 16 день, и пришедше черноризъци, певше обычныя песни, и принесше и положиша ю в церкви святыя Богородиця, противу гробу Феодосьеву, на шюей стране. Феодосий бо положен бысть в 14, а си и в 16.

『さて，此処で，フエオドシイの予言が如何に実現されたかということを少し物語ろう． フエオドシイが修道院長職にあり，生きていて，神によつて自分に托された僧の群を治めていた時に，これらの僧達のみならず，俗世の（人々たち）についても，彼等の魂に心をくだいていた．どうしたら彼等が救われるべきであるかを．特におのれの宗門の子等については，なおさらであつた．彼のもとにやつて来るものたちを慰め，教え導くのであつた．時には彼等の家にまで出向いて行つて祝福を与えるのであつた．ある時，ヤンの家へ，ヤンとその妻マリヤのもとへ彼（フエオドシ

イ）が来たつた時，というのはフエオドシイは，彼等が主の戒律に従つて生き，相互間の愛情の中にあつたからであるが，或る時，この二人のもとへ来たつた時，（フエオドシイは）二人に，貧しき者たちへの慈悲と，罪あるものが苦しみを受けるのに，義しき者たちが受け入れうることになつている天国について，死の時について教えた．しかして，彼が棺の中に二人の死体が入れられる話をした時，ヤンの妻は彼に言つた．『（人々が）この私を何処に安置するか，誰が知つているだろう？』と．そこでフエオドシイは彼女に言つた．『まことに，我が横たわるところ，其処に汝もまた安置されるであろう』と．ところで，このことは実現した．というのは，修道院長が先に死去した時，十八年目にこれが実現した．この年に，マリヤという名のヤンの妻が死去した．八月十六日である．しかして僧たちが来たり，例の如き聖歌をうたい，彼女を運び来たり，聖母教会に，フエオドシイの棺に相対して，左側に安置した．フエオドシイは，十四日に安置され，この女は十六日に安置されたのであつた』

最後に，なお，それより二年後，6601(1093)年の項にも，その中程に次の様に読み取られる記事が『過ぎし年月の物語』にはみとめられる．侵入して来たポロヴエツ人に対する戦いを始めようとするくだりである．

В лето 6601.

.....Володимер хотяше мира, Святополк же хотяше рати; и поиде Святополк, и Володимер, и Ростислав к Треполю. Придоша к Стугне. Святополк же, и Володимер, и Ростислав созваша дружину свою на съвет, хотяче поступити через реку, и начаша думати. Глаголаше Володимер: "яко сде стояче через реку, в грозе сей, створим мир с ними"; и пристояху совету сему смыслении мужи,

Ян и прочии. Кияне же не всхотеша, но рекоша;
"хочем ся быти; поступим на ону сторону реки".
възлюбиша съвет ось, и преидоша Стугну реку; бе
бо наводнилася болми тогда.

『ヴオロジメルは平和を欲していた．ところがスヴイヤトポルクは戦いを欲していた．しかしてスヴイヤトポルクは出かけた．ヴオロジメルもロスチスラフもトレポリに（出かけた）．（彼等は）ストウグナ（河）に来たつた．そこで，スヴイヤトポルクは，ヴオロジメルも，ロスチスラフも，おのれの親兵団を会議に呼びよせた．河を渡ろうと欲してゐある．しかして，人々は合議しはじめた．ヴオロジメルは言つた．『此処にこの恐怖の中にあつて河をはさんで対峙している間に，彼等と和睦しよう』と．しかして，この発言に思慮ある家臣，ヤン及びその他の者たちが同調した．ところがキエフ人たちは（それを）欲せずに言つた．『戦うことを望む．河の向う側に渡ろう』と．しかしてこの発言を（人々は），より良しとした．しかして，（人々は）ストウグナ河を渡つた．河はこの時，非常に増水していたのである』

以上が，ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー各年代記の『過ぎし年月の物語』の中に見られるヤンの名の記述された総ての個所である．その後，七年して，ヤンは死んだことになる．ノヴゴロド年代記（ボー）には1071年の記事だけがみとめられるだけで，その他の年代の項にみられる個所は出て来ない．ニコンの年代記には，ヤンの父に就ての記事をはじめとして，上に引用した総ての記事が多少補足されながら全部集録されている．リヴオフ年代記にはよう術師を引き合いに出した悪魔談義の6597年の項だけがみとめられる．

この様に少くとも，その取り扱い記事に省略や時に補足がみられるにしても，ヤンの名前は，ロシアの多くの年代記に鮮やかな影をおとしつゞけている．

それらの記事を通じて，このヤンという人物の正体は求められなければならない．

これらの記事によれば，ヤンはキーエフの国で1089年に千人長として，軍司令職にあつた．ソロヴィヨフによれば（История России; 第一巻，p.232; Москва, 1959），『千人長（Тысяцкий）は，公が親兵団の中から選び出した人物で，地方や町の軍隊の軍司令官であつた』«Тысяцкий ——— был воеводою земских, гражданских полков, выбиравшийся князем из дружины».

とすれば，『親兵団の中から選び出される』以上，彼は親兵団の一員であつたにちがいない．もし，ヤンの父も同様の身分であつたとすれば，この父に関する年代記の記録は，一層，面白く読まれる．父は，親兵団員の中でも，ずば抜けて公の信頼が厚く，同時に，それにふさわしい責任ある行動と，部下の兵卒たちへの庇護を唯一人最後まで果した人物であつた．然もそれは，ロシアに初めて福音書を訳したというオストロミールの子であつた．ヤンとはこの父の子であり，オストロミールの孫なのである．公の近側に位置した名門の武人であり，然も，代々，その高い知性と豊かな知識と，正しい信仰とを誇つた一族であつたと思われる．

そして，ヤンは，その一族の知識と知性と信仰の頂点をなした人物であつたと思われる．

だからこそ，『過ぎし年月の物語』が，悪魔談義をおこなう時，先づ誉れ高い武人としてのヤンを引き合いに出して，よう術師と対決せしめ，且つそれを征伐させたのであろう．然も，その武人であるヤンに，よう術師たちとの信仰論を受けもたせた．当代随一の正義の論客でもあつたからである．この信仰論に，本来，修道僧であつた年代記者が，その代表者であるべき高僧を誰一人論陣に立てずに，むしろ，寺院外の人物であつたヤンにそれを引き受けさせるという話の設定は，一体，何を物語るものであろう．

当時の僧たちの知性や信仰の深さや正しさと，宮廷の名門側近者のそれらとを比較して，当時の寺院僧たちの程度を此処で問いつめてみようとするのではない．むしろ，それよりも，年代記者が素直に物語つたように，これらの記事は，おそらく，ヤン自身がその記者に物語つたものとして，大きな変更を加えられずに書きとめられたのであろう．そのことの証拠こそが，この悪魔談義へのヤンの名の登場であつたと見るべきであろう．

少くとも，ほとんど総ての年代記が，この談義の記事だけは書きもらしていない以上，それは，同時に，寺院内での知性や信仰の水準を抜いていたことはたしかであろう．或は正しき信仰の姿の典型をヤンの言動にみつめることができたからであろう．

『過ぎし年月の物語』には，この様に宮廷側近貴族の，すぐれた武人・文人の直接の物語が口から耳を通して書きとめられ，その記事の源の一つをなしているにちがいない．

— B —

では，ヤンの語つた物語は，たしかに事実をふんまえたヤン自身の創作になる話であつただろうか．或はヤン自身が物語つた話であつたにしても，既にその物語には，それに先行する物語文学作品の伝承の影がおちていないであろうか．其処にはロシア民族の古い伝説のモチーフや伝承文学の色合いがみとめられないであろうか．ヤン自身がそれを語つたものであるにしろ，既にそのヤンを圧倒する古い伝承文学の力が，もう一段奥にある源としてみとめられないであろうか．先に引用した『過ぎし年月の物語』の一節を再びふり返つてみるがよい．そして，この記事以前の多くの古い年代記記事を思い起してみるがよい．

其処には，多くの類似した話が認められる．例えば，ヤン自身及びその父ヴイシヤタの功績が述べられているくだりを取りあげて

見よう．二人とも司令官として軍勢を伴つて出征し，先にあげた引用個所におけるような誉れ高い行動を示した．一族の範ともなすべき高き誉れにほかならなかつた．

その戦いの相手が時には，異民族であり，時にはよう術師であるというのは，非常に古い英雄叙事の戦いの相を思わせはしないか．舟が嵐のために打ちくだかれ，幾年か後に捕虜の境涯から免ぜられて帰国する話や，その折に多くの人々が盲目にさせられたという話は，ロシア民族の叙事詩ではなくて，遙かにホメーロスの詩に似ていないとは言えない．

また，ヤンの父ヴイシヤタがツアリグラードに進撃をはじめたのも，ヤンがベロオゼロに軍を進めたのも，実は，もとをただせば，貢税を要求してであつた．貢税獲得を目的とする遠征の物語は，これまた，非常に多くの古い源をもつものであつた．年代記には，それが度々書きとゞめられた．先づツアリグラード或はツアリゴーロド（コンスタンチノープル —— ビザンチン）への遠征は，ロシアの最も古い英雄詩のテーマであつたと思われる．即ち，既に我々が古代ロシア研究会の仕事として訳出したところからも，それが拾いあげられる．『過ぎし年月の物語』の既に引用したキエフの町の創設者キーの物語に，当のキーがツアリゴロドへ征つたという物語があつた．そして面白いのは，その物語のすぐ前の所に，キー等三人を評して，彼等は『賢明で思慮深い人物たちであつた』«бяху мужи мудри и смыслени »という言葉がある．ヤンの父及びヤン自身についても，これと同じ形容詞の評がみとめられたではないか．この同じ形容詞用語の使用の物語る所は注意しておく価値がある．

西暦862年の項（即ち6370年の項）には，『その二人は自分の一族を伴つて，ツアリゴロドへ（行く）許しを得た』«та испросистася ко Царюгороду с родом своим »（古代ロシア研究；才二号；p．18～19）という記録があり，

866年(6371年)の項にもツアリゴーロド進攻の物語がみとめられる(古代ロシア研究;才二号;p.21~23)のである.これは有名なアスコルド《Аскóлдъ》とジル《Дир》の遠征物語である.「古代ロシア研究」誌才二号に既に我々はそれを訳出したが念のため再び日本語訳と原文テキストをこゝにあげておこう.舟が嵐に打ちくだかれ,ルシが苦難に見舞われ,故里へ帰ることのできた者が少なかつたという物語の内容まで,ヤンの父ヴイシヤタの折の話と全く類似していることを認めるであろう.その一節とは

В лето 6374.
иде Асколд и Дир на Греци, и придоша в 14 лето Михаила царя. Царю же отшедшю на Огаряны, дошедшю же ему Черные реки, весть епарх посла к нему, яко Русь на Царьгород идеть, и вратися царь. Си же внутрь Суду вшедше, много убийство крестьяном створиша, и в двою корабль Царьграда оступиша. Царь же едва в град вниде; с патреярхом с Фотьем к сущей церкви святей Богородице Влахерне всю нощь молитву створиша, таже божественную святы Богородиця ризу с песньми изнесъше, в реку омочиша. Тишине сущи, морю укротившюся, абье буря въста с ветром, и волнами вельям въставшем засобь, безбожных Руси корабль смяте, к берегу приверже, и изби я, яко мало их от таковыя беды избегнути, въсвояси възвратишася.

『アスコルドとジルがグレキに進攻し,ミハイル帝の十四年に到着した.皇帝はオガリヤネに対して遠征中であり,黒い川に至つたとき,市長が彼に,ルシがツアリゴロドに進攻して来ると報せをつかわした.そこで皇帝は引返したのである.これらはスード(湾)の中へ入つて来て,キリスト教徒に多くの殺りくをなし,

二百隻の舟を連らねて，ツアリグラドを包囲した．皇帝は，ようやく町へ入り，総主教フォチイと共にヴラヘルンにある聖母教会に夜を徹して祈禱した．霊験あるけさを歌と共に運び出し，川に浸した．静かであり，海はないでいたが，突然，嵐が風を伴つて起り，大きな波が特に起り，それら異教徒のルシの舟を吹き乱し，岸に打ちつけ，うちこわしたので，それらのうち，かゝる災難からのがれるものは少なかつた．（助かつたものは）家郷へ帰つたのである』

此処には，その記述の立場が，よりギリシアの側に寄つていたことを除けば，ヤンの父についての物語の場合と同じような話が組み込まれている．ヤンの物語の背後に，おそらく，ヤンが下敷にして物語を進められたような素材があつた．そして，その素材は，この6374年の物語そのものに近い，同じように下敷役をつとめる何等かの英雄受難の叙事詩か，英雄遠征の詩的物語であつたにちがいない．そして，おそらく，その最も根底にかくされた詩的伝説は，キーのツアリゴロド遠征物語とは別の，むしろ，それよりも新しいものであつたであろう．というのは，もう其処では，進攻，遠征，出陣を意味する動詞は《ити на･･･(対格)》であつて，キーの物語の場合のように《ходити》ではないからである．そのことはまた，同じように，6370年の項の場合についても言えそうである．其処では，キーの物語の場合に用いられた『行く』《ходити》は全く消え失せてしまつているからである．但し，其処には，いまだ『進攻する』《ити на･･･(対格)》という明確な動詞は現れていない．動詞は全く省略された形で見失われてしまつている．過渡的表現であつたとも考えられる．このようなことから，年代記者が記録しはじめた当時に伝承されていた多くの類型的な英雄物語詩にも既に，いくつもの古さの層が出来あがつていたのかも知れない．そして，おそらくは，その層のうち，最も古いもので，然も同時に最も庶民の伝承によつたもの

から，ブイリーナの幾つかは今日まで詠じつづけられて来たのであろう．ブイリーナ作品におけるツアリグラード遠征の投影は，いづれ後述するとして，年代記になお，この影を求めて見ることにしよう．

西暦907年即ち6415年の項には，各年代記に次の様にみられる．詳しくは（「古代ロシア研究」才三号，p.4～ p.17）

В лето 6415.

Иде Олег на Грекы. Игоря оставив Кыеве; поя же множьство Варяг, и Словен, и Чюди, и Кривичи, и Мерю, и Поляны, и Северо, и Деревляны, и Радимичи, и Хорваты, и Дулебы, и Тиверци, яже суть Толковины: си вси звахуться Великая Скуфь. И с семи всеми поиде Олег на конех и в кораблех, и бе числом кораблий 2000. И приде к Царюграду, и Греци замкоша Суд, а город затвориша. И вылезе Олег на берег, и повеле воем изъволочити корабля на берег, и повоева около города, и много убийство створи Греком, и полаты многы разбиша, а церькви пожьгоша, а их же имяху полоняникы, овех посекаху, другыя же мучаху, иныя же разстреляху, а другыя в море вметаша, и ина многа зла творяху Русь Греком, елико же ратнии творять. И повеле Олег своим колеса изъделати и въставити корабля на колеса; и бывшю покосну ветру, успяша пре с поля, и идяше к городу. Видевше же Греце убоящася и ркоша, вы-славше ко Ольгови: "не погубляй город, имемъся по дань, якоже хощеши". И стави Олег вои, и вынесоша ему брашна и вино, и не прия его; бе бо устроено с отравою. И убояша-

ся Греце и ркоша: "несть се Олег, но святый Дмитрий, послан на ны от Бога". И заповеда Олег дань даяти на 2000 кораблий, по 12 гривне на человека, а в корабли по 40 мужь; няшася Греци по се, и почаша Греци мира просити, дабы не воевал Грецьской земли, Олег же мало отступив от города, нача мир створити с царема Грецьскыма, с Леоном и с Александром, посла к нима в город Карла, Фарлофа, Велмуда, Рулава и Стемида, глаголя: "имете ми ся по дань". И ркоша Греце: "что хочете и дамы ти". И заповеда Олег дати воем 2000 кораблий, по двенадцать гривне на ключь, и потом даяти уклады на Руские городы: первое на Киев, таже и на Чернигов, и на Переяслав, и на Полтеск, и на Ростов, и на Любечь, и на прочая городы; по тем бо городом седяху князья под Ольгом суще. "Да приходять Русь, хлебное емлють, елико хотять, и иже придуть гостье, да емлють месячину на 6 месяць, и хлеб и вино, и мяса, и рыбы, и овощем, и да творять им мов, елико хотять; и поидуть же Русь домови, да емлють у царя вашего на путь брашно, и якоря, и ужа, и пре, и елико надобе". И яшася Греци, и ркоша царя и боярьство все: "аще приидуть Русь без купли да не взимають месячины; да запретить князь словом своим, приходящим Руси, да не творять пакости в селех в стране нашей: приходящии Русь да витають у святаго Мамы, и послеть царство наше, да испишють имена их, и тогда возмуть месячное свое, первое от города Киева, и пакы из Чернигова, и

Переяславля, и прочии городи; и да входять в город одиными вороты, с царевым мужем, без оружья, мужь 50, и да творять куплю якоже им надобе, не платяче мыта ни в чем же". Царь же Леон с Олександром мир створиста с Ольгом, имъшеся по дань и роте заходивше сами крест, а Ольга водиша и мужий сего на роту; по Рускому закону кляшася оружьем своим, и Перуном богом своим, и Волосом скотьим богом, и утвердиша мир. И рече Олег: "исшийте пре паволочиты Руси, а Словеном кропийныя, и бысть тако; и повесиша щиты своя в вратех,показующе победу, и поиде от Царяграда. И въспяша Русь пре паволочитые, а Словене кропийныя, и раздра я ветер; и ркоша Словен; имемъся своим толъстинам, не даны суть Словеном пре кропиинныя". И приде Олег к Киеву, неся золото, и паволокы, и овощи, и вина, и всяко узолочье; и прозваша Ольга вещий: бяху бо людие погани и невеголоси.

『6415(907)年.
オレグはイゴリをキエフに残してグレキを攻撃した.(彼は)多数のヴァリヤギ,スロヴェネ,チュジおよび,クリヴィチ,メリヤ,ボリヤネ,セヴェロ,ジェレヴリヤネ,ラジミチ,ホルヴァト,ドゥレブ,通訳であるチベルツイを引き具した.これらすべては大スクフイと呼ばれていたのである.しかして,これらすべてと共に,オレグは馬および舟にて出発した.しかして数において二千隻であつた.しかしてツァリグラドに到着した.グレキはスド(湾)を閉鎖し,町(の門)をとざした.しかして,オレグは岸に上陸し,軍勢に舟を岸に引き上げるように命じて,町のま

わりで戦い，グレキに多くの殺りくをなし，多くの宮殿を破滅し，教会をもやした．ところで彼等（のうち）から捕虜をとらえ；あるものは切り殺し，他のものは苦しめ，別のものは投げ込み，敵軍が（通常）行うかぎりの，その他の多くの悪事をルシはなしていたのである．しかして，オレグはおのれの軍勢に，車輪を作り舟を車輪の上にのせるように命じた．順風であつたので野原から帆を張つて町へ進んで行つた．グレキは見ておそれ，オレグのもとに（使者を）遣わして言つた．『町を破滅させるな，（汝の）欲するだけの貢物を支払おう』と．しかして，オレグは軍勢をとゞめた．そこで彼に（グレキは）食物と酒を運びだした．しかし（彼は）それを受け取らなかつた．というのは毒が仕込んであつたからである．しかして，グレキはおそれて言つた．『これはオレグではなくて，聖ドミトリーが神から我々につかわされたのである』と．しかしてオレグは二千隻の舟に対し，一人につき十二グリヴナづつを貢物として支払うように命じた．ところで，（一隻の舟には四十人づつ（のつていたのである）．グレキはこれに同意し，グレキはグレキの地において戦いをしないようにと，和平を求めはじめた．オレグは町からほとんど引きさがらずに，グレキの皇帝レオン及びアレクサンドルと和平を講じはじめ，彼等二人のところへ，町へ，カルル，フアルロフ，ヴエルムド，ルラフおよびステミドをつかわして言つた．『我に貢物を支払え』と．しかしてグレキは言つた．『（汝らが）欲するものを（我々は）汝に与えよう』と．しかして，オレグは二千隻の舟の軍勢に，かいの座に対して十二グリヴナづつ与えることを命じ，その後ルシの町々に貢物を支払うように命じた．まずキエフに，同じくまたチエルニゴフに，またペレヤスラフに，またポロチエスクに，またロストフに，またリユベチに，しかして，その他の町々に．というのは，それらの町々にはオレグの配下にある公たちが座していたからである．『ルシをして来さしめ，欲するだけの穀料を

とらしめよ．商人として来るものは六ケ月に（対して）月決め糧目即ち穀物もブドウ酒も，肉も，魚も，果物をも取らしめよ．また欲するだけ入浴を彼等におこなわしめよ．しかしてルシが帰途につくときには，汝らの皇帝のもとにて，旅に対する食糧ならびに錨も，つなも，帆も，および必要なだけ（のもの）も取らしめよ』と．そこで，グレキは引き受けた．しかして，（二人の）皇帝と，すべての貴族は言つた．『もしもルシが商用なしに来ることがあれば，月極め糧目を取り立てるべし．公はおのれの言葉をもつて，ここに来るルシに禁令すべきである．わが国の村落において（ルシたちは）害をなさざるべしと．到来するルシは聖母（教会）のそばに居住すべし．わが帝国は使者を送り彼等の名を書きあげせしむべし．しかして，その時，おのれの月極め糧目をとらしむべし．まずキエフの町の（出身者），ついで，チエルニゴフの，またペレヤスラヴリの（出身者），および，その他の町々（の出身者）に．しかして一つの門より皇帝の家臣を伴い，武器をたずさえず，（一度に）五十人を町へ入らしむべし．しかして何事によらず取引税を支払わずして，彼等の必要に応じて商用をおこなわしむべし』と．レオン帝はオレクサンドルと共に貢税を支払い．相互に誓をなし，自から十字架に口づけして，オレグと和を講じた．またオレグおよび彼の家臣に誓いをなさしめた．ルシの法に従つて，おのれの武器にかけ，おのれの神ペルンに，および家畜の神なるヴオロスにかけて誓い，和平を確立した．しかして，オレグは言つた．『ルシのためにはにしきの，スロヴエネのためには絹の帆を縫え』と．しかして，そのようになつた．しかして，（彼等は）勝利を誇示しておのれのたてを門にかけた．しかして，ツアリグラドから出発した．ルシはにしきの帆を，スロヴエネは絹の帆をあげた．しかして，それらを風が裂いた．しかして，スロヴエネは言つた．『我らはおのれの粗布を取り出そう．スロヴエネには絹の帆は不相応である』と．しかして，オレ

グは金およびにしき，および果物，およびブドウ酒，およびあらゆるかぎりのものをたずさえてキエフに到着した．しかして（人々は）オレグを霊験あるものと呼んだ．というのは人々は異教徒で無学なものであつたからである．』

此処には，貢物を求める遠征のテーマとも重り合つた古い伝承の下敷が読みとれるだろう．この物語の記述された項は前述したように，907年(6415年)であるが，それから五年後，912年(6420年)の項に，グレキとルシの条約が書き取られている．その条約の下地或は前書きにも当るような内容が，このオレグのツアリグラド遠征物語には織り込められている．その部分を除外してこの物語を読めば，明らかに，それがツアリグラド遠征テーマによる物語であつたことが推察される．そして，既に其処には，『進む』，『攻撃する』，『進軍する』というような意味では，もう絶対に«ходити»という動詞は見当らない．すべて«нти»という動詞に様々な接頭詞を加えて，然も，進む目標表現には，これまた前置詞を多彩に用い，或は格用法を変えている．そして，実用には向かない絹の帆を張らしたという物語が，なお，それに花をそえて，曾つて存在したと思われるきらびやかな英雄叙事詩を思わせるのである．ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチーの各年代記に限らず，この物語は，ほゞ同一の形で非常に多くの年代記にみとめられる．それらを此処に引用することは省略しておこう．

ツアリグラード遠征テーマの物語は，その後，三十年近く時が過ぎて，941年(6449年)に今度はイゴリという英雄を介して格段に立派な花を咲かせている．その花はつゞいて943年(6451年)の記事にも見られる．おそらく，年代記中にみられる外国遠征記事のうち最も立派なものであろう．其処に働いていた英雄叙事詩的な伝承物語が，この年の記事ほどに鮮やかにすかしみられる個所は他にはないであろう．ラヴレンチー，イパーチー，トロイツ

キーの各年代記，或はその他諸々の年代記は，この年の記事を非常に詳しく伝えている．一応上記の三つの年代記から，それをまとめて次に引用してみることにしよう．この個所の異本考証その他の詳しい考察は，同じく「古代ロシア研究」才四号p．6～p．15にある．

В лето 6449.
Иде Игорь на Греки; яко послаша Болгаре весть ко царю, яко идуть Русь на Царьград скедий 10 тысящь. Иже пойдоша и приплуша, и почаша воевати Виф-аньския страны, и воеваху по Понту до Ираклия и до Фафлогоньски земли, и всю страну Никомдийскую попленивше, и Суд весь пожьгоша. Их же емше, овех растинаху, другия аки страньпоставляюще и стреляху в ня, изимахуть, опаки руце съвязываху-ть, гвозди железным посреди главы в бивахуть их; много же святых церквий огневи предаша, манасты-ре и села пожьгоша, и именья не мало обою страну взяша. Потом же придешъшем воем от въстока, Памъфир деместик с 40-ми тысяць, Фока же патрекий с Макидоны, Федор же стратилат с Фраки , с ними же и сановьници боярьст и обидоша Русь около. Съвещаша Русь, изидоща въружившеся на Греки, и брани межю ими бывши зьли, одва одолеша Грьци; Русь же възратишася к дружине своей к вечеру, на ночь влезоша в лодью и отбегоша. Феофан же устрете я в лядех со огнем, и пущати нача трубами огнь на лодье Руския, и бысть видети страшно чюдо. Русь же видящи пламянь, вметахуся в воду морьскую, хотяще убрести, и тако прочий възвратишася въсвояси. Темже пришедшим в землю свою, и

поведаху кождо своим о бывшем и о лядьнем огни: "якрже молонья", рече, "иже на небесех, Грьци имуть у собе, и сию пущающа жежаху нас; сего ради не одолехом". Игорь же пришед нача совкупляти вое многи, и посла по Варяги многи за море, вабя е на Греки, паки хоте поити на ня.

В лето 6452.

Игорь же совкупив вои многи, Варяги, Русь, и Поляны, Словени, и Кривичи, и Теверьце, и Печенеги, и тали у них поя; поиде на Греки в лодьях и на конех, хотя мьстити себе. Се слышавше Корсунци, послаша к Роману глаголюще: "се идуть Русь без числа корабль, покрыли суть море корабли". Такоже и Болгаре послаша весть, глаголюще: "идуть Русь, и наяли суть к собе Печенеги". Се слышав царь, посла к Игорю лучие боляре, моля и глаголя: "не ходи, но возьми дань, юже имал Олег, придам и еще к той дани". Таже и к Печенегом посла паволоки и злато много. Игорь же дошед Дуная, созва дружину и нача думати, поведа им речь цареву. Реша же дружина Игорева: "да аще сице глаголеть царь, то что хочем боле того, не бившеся имати злато, и сребро, и повалоки? егда кто весть, кто одолееть, мы ли, оне ли? ли с морем кто светен? се бо не по земли ходим, но по глубине морьстей; обьча смерть всем". Послуша их Игорь, и повеле Печенегом воевати Болгарьску землю; а сам взем у Грек злато и паволоки и на вся воя, и възвратися въспять, и приде к Киеву въсвояси.

『6449(941)年.

イゴリがグレキに向つて進攻した.ボルガルが皇帝に報せを送つたところによれば,一萬隻のルシがツアリグラドに向つて進攻しつゝあるという.それらは出発し航し来たり,ヴイファニアの国々を荒しはじめた.しかして,ポントに沿つてイラクリイまで,およびファフロゴニアの地まで荒し,しかしてニコムジアの国全土を押え,しかしてスド全部を焼いた.彼らをつかまえて,あるものたちをはりつけにしたり,他のものたちを的のように立たせて,彼等に矢を射かけたり,引きだして,うしろ手にしばり,鉄釘を彼らの頭の中央にうち込んだりした.また多くの聖なる教会に火をかけ,修道院や村々を焼き,(スドの)両側の少からざる財産をうばつた.その後,東から軍勢が来たつたとき,デメスチクのバムフイルが四萬人をひきいて,また,パトレキーのフオカがマキドニア(人)をひきい,また,ストラチラトのフエドルがフラキア人をひきい,また彼等と共に貴族の高官たちもルシをとり囲んだ.ルシは相談して,グレキに対して武装して出撃し,しかして,彼等の間には,はげしい戦いがあり,かろうじてグレキが勝つた.一方ルシは夕方近くおのれの親兵団のもとにもどり,夜中に舟にのり込んで逃げ去つた.またフエオフアンは火をそなえた舟に乗つて彼らをむかえ,しかして筒で火をルシの舟に放ちはじめた.しかして,おそろしい奇蹟がみられた.ところでルシは炎を見て,逃げようとして海の水の中へとび込んだ.かくして,他のものたちは,おのれの国へ帰つた.・・・・・

『6452(944)年.

ところで,イゴリは,ヴアリヤギ,ルシおよびポリヤネ,スロヴエネおよびクリヴイチ,およびテヴエリツイおよびペチエネギなど多くの軍勢をあつめ,彼らから人質をとつた.おのれの仇をうとうとして舟及び馬でグレキに向つて出発した.これをコルスニ人が聞いて,ロマンに使者をつかわして言つた.『みよ,無数の

ルシが進攻しつゝあり，海を舟でおおつた』と．また同様に，ボルガルも知らせを送つて言つた．『ルシが進攻しつつある．しかして，自分の方にペチエネギをやつている』と．皇帝はこれを聞き，イゴリに身分の高い貴族をつかわし懇願して言つた．『来たるな．しかして，オレグがとつた貢税をとれ．（我々は）この貢税をさらにまた（もつと）附け加えよう』と．同様にまたペチエネギにも絹織物と多くの黄金を送つた．ところで，イゴリはドナイまで来たり，親兵団を呼びあつめて考えはじめ，彼らに皇帝の言葉を知らせた．ところで，イゴリの親兵団は言つた．『もしも皇帝がかく言うのであれば，戦わずして黄金および銀および絹織物をとること以上の何を（我々は）欲することがあろう．誰が勝つか，我々か，彼らか，誰が知ろうというのに．誰が海と味方であるというのか？というのは，みよ，（我々は）陸地を行くのではなく，海の深みを行くのであるから．死はすべてのものに共通である』と．イゴリは彼ら（のいうこと）を聞き，しかして，ペチエネギたちにボルガルの国を改めるよう命じた．ところが，みづからは，グレキから黄金と絹織物を，全軍のためにも取り，再びもどつて，おのれの国キエフへ帰り来たつた』

此処で再び『行く』，『進む』，『攻撃する』という意味に用いられた言葉に注意を向けておこう．それらの意味で用いられたのは，総て«ити»であつた．ところが，此処には突然，キーの物語の時にだけ見られた«ходити»が二度も顔を出している．一つはギリシア皇帝の口上として，『来たるな』«не ходи»然し代りに貢物を取れという個所であり，もう一つは，親兵団の一員が，海の深みを行くのであつて，『陸地を行くのではない』«не по земли ходим»という個所である．前にも一度述べたように，この二個の«ходити»は，その両方とも〝〟印に入れるべき口上や発言の内容である．明らかに，喋り言葉の書き取られたものである．そのことに就ては既にのべたが，此処で面白いのは，用いら

れたこの二個の《ходити》が，ともに喋り言葉である以上に，否定表現であるということである．一方は直接の，他方は間接の．だから，明らかに，これらは，《ити》も《ходити》も，現代ロシア語に見られる定態，不定態の区別は見とめられない．むしろ，最も古いキーの物語は，《ходити》を用いて，口頭の物語であったことを，一層明確にする証拠をなしていると言えよう．そして，《ходити》が用いられるのは，だから，より喋り言葉への傾きの激しい折に限られたと言えるであろう．

扨て，ギリシアへの古い遠征物語が『過ぎし年月の物語』に書きとめられているのは，以上の他に，たゞもう一個認められるにすぎない．イゴリのギリシア遠征物語は，貢税取りの物語とからみ合つたものであつたが，次にみられる遠征物語はどんなものであろうか．イゴリの物語から三十年を経た後の話である．即ち，971年(6479年)の項に書きとられた物語は，どんな内容のものであろうか．前の場合と同じく三つの年代記に見られるものを次に引用しておこう．この物語は上述のいづれよりも詳しく，然も長い．既に詳しくは『古代ロシア研究』才五号の56ページ以下に異本照合を含めて訳出されたところである．

В лето 6479.
Поиде Святослав в Переяславець, и затворишася Болгаре в граде. И излезоша Болгаре на сечю противу Святославу, и бысть сеча велика, и одоляху Болъгаре; и рече Святослав воем своим: "уже нам сде пасти; потягнем мужьски, братья и дружино!" И к вечеру одоле Святослав, и взя град копьем, и послав Греком, глаголя: "хочю на вы ити, взяти град вашь, яко и сей". И реша Грьци: "мы недужи противу вам стати, но возми дань на нас, и на дружину свою, и повежьте ны колько вас, да вда-

мы по числу на главы". Се же реша Грьци, льстяче под Русью; суть бо Греци лстиви и до сего дни. И рече им Святослав: "есть нас 20 тысящь", и прирече 10 тысящь, бе бо Руси 10 тысящь только. И пристроиша Грьци 100 тысящь на Святослава, и не даша дани; и поиде Святослав на Греки, и изидоша противу Руси. Видевше же Русь убояшася зело множества вой, и рече Святослав: -уже нам некамо ся дети, волею и неволею стати противу: да не посрамим земле Руские, но ляжем костьми, мертвьи бо срама не имам, аще ли побегнем, срам имам, ни имам убежати; но станем крепко, аз же пред вами поиду, аще моя глава ляжеть, то промыслите собою; и реша вои: "идеже глава твоя, ту и своя главы сложим". И исполчишася Русь, и бысть сеча велика, и одоле Святослав, и бежаша Грьци; и поиде Святослав ко граду, воюя и грады разбивая, яже стоят и до днешняго дне пусты. И созва царь боляре своя в полату, и рече им: "что створим, яко не можем противу ему стати?" И реша ему боляре: "посли к нему даоы, искусим и, любезнив ли есть злату, ли паволокам?" И посла к ему злато, и повалоки, и мужа мудра; реша ему: "глядай взора, и лица его, и смысла его", он же взем дары, приде к Святославу. Поведаша Святославу, яко придоша Грьци с поклоном, и рече: "въведете я семо". Придоша и поклонишася ему, положиша преди им злато и паволоки; и рече Святослав, кроме зря, отроком своим: "схороните". Они же придоша ко царю, и созва царь боляры, реша же

послании: "яко придохом к нему и вдахом дары, и не зре на ня, и повеле схоронити". И рече един: "искуси и еще, посли ему оружье". Они же послушаша его, и послаша ему мечь и ино оружье, и принесоша к нему; он же прием, нача хвалити и любити, и целова царя. Придоша опять ко царю, и поведаша ему вся бывшая, и реша боляре: "лют се мужь хоче быти, яко именья не брежеть, а оружье емлеть; имися по дань". И посла царь, глаголя сице: "не ходи к граду, возми дань, еже хощеши", за малом бо бе не дошел Царяграда. И въдаша ему дань; имашеть же и за убьеныя, глаголя: "яко род его возметь". Взя же и дары многы, възратися в Переяславець с похвалою великою. Видев же мало дружины своея, рече в собе: "еда како прельстивше изъбьють дружину мою и мене", беша бо многи погибли на полку; и рече: "поиду в Русь, приведу боле дружины". И посла слы ко цареви в Деревъстр, бе бо ту царь, рька сице: "хочю имети мир с тобою тверд и любовь". Се же слышав царь, рад бысть и посла к нему дары больша первых. Святослав же прия дары и поча думати с дружиною своею, рька сице: "аще не створим мира со царем, а увесть царь, яко мало нас есть, пришедше оступять ны в граде; а Руска земля далеча, а Печенези с нами ратьни, а кто ны поможеть? но створим мир со царем, се бо ны ся по дань яли, и то буди доволно нам; аще ли почнеть не управляти дани, да изнова из Руси, совкупивше вои, умноживши, поидем Царюгороду". Люба бы-

сть речь си дружине, и посласа лепшие мужи ко цареви; и придоша в Деревъстр, и поведаша цареви. Царь же наутрия призва я, и рече царь: "да глаголють сли Рустий". Они же реша: "тако глаголеть князь нашь, хочю иметь любовь со царем Гречьским свершену прочая свя лета". Царь же рад бысть, повеле писцю писати вся речи Святославлена харатью; нача глаголати сол вся речи, и нача писець писати.

『6479(971)年.

スヴイヤトスラフがペレヤスラヴエツに着いた.しかしてボルガルは町にたてこもつた.しかして,ボルガルはスヴイヤトスラフに対する戦いをしかけに出て来た.しかして大いなる戦闘があり,ボルガルが勝ちそうになつた.しかして,スヴイヤトスラフは,おのれの軍勢に言つた.『すでに我々はこゝに倒れるべきである.勇敢に進もう,兄弟たちおよび親兵団よ!』と.しかして夕方近く,スヴイヤトスラフが勝つた.しかして町を槍で占領した.しかして,グレキへ使者を遣わして言つた.『(我々は)汝らに進攻し,この(町の)ごとく,汝等の都を占領せんと欲する』と.しかして,グレキは言つた.『我らは汝らに対して立つには弱い.しかして我らおよび我が親兵団に貢税を課せ.しかして我らに汝らが如何ほどいるかを知らせよ.頭数だけ(我々が貢税を)納めるために』と.ルシをあざむいてグレキは,かく言つたのである.というのは,グレキは今日にいたるまでも狡猾だからである.しかしてスヴイヤトスラフは彼らに言つた.『我々は二萬人である』と.(彼は)一萬人水増しをした.というのは,ルシは一萬人だけしかいなかつたからである.しかしてグレキはスヴイヤトスラフに向つて十萬(の軍勢)をととのえ,しかして,貢税を支払わなかつた.しかして,スヴイヤトスラフはグレキに進攻した.しか

して，ルシに向つて（クレキが）出撃した．ルシは（これを）見て多数の軍勢に非常におそれをなした．しかして，スヴイヤトスラフは言つた．『すでに我らには身をかくすべき所はない．欲しようが欲しまいが迎え撃たねばならない．ルシの国をはずかしめないようにしよう．しかし骨を横たえよう．死ねば（我々は）辱かしめを受けないからである．もしも（我々が）逃げるならば，辱しめを受けるであろう．（我々は）逃げずに，はげしく戦おう．我は汝らにさきがけて進もう．もし我が頭が倒れたら，自分たちで考えよ』と．しかして軍勢は言つた．『汝の頭の（横たわる）ところ，そこにおのれの頭を（我らも）横たえよう』と．しかしてルシは武装し，しかして大いなる戦闘があつた．しかして，スヴイヤトスラフが勝ち，クレキが敗走した．しかして，スヴイヤトスラフは戦い，町々を破壊しながら都へ進んだ．それら（の町々は）今日にいたるまでも荒れはてたまゝである．しかして皇帝は，おのれの貴族たちを宮殿へ呼びあつめ，しかして彼らに言つた．『（我々が）彼らに敵対することができない以上，（我々は）何をなそうか』と．しかして，彼に貴族たちは言つた．『彼に贈物をおくれ．彼をためしてみよう，（彼が）黄金や絹織物がすきであるかどうかを』と．しかして（皇帝は）彼に黄金および絹織物および賢明な家臣を（一人）送つた．（人々は）彼に言つた．『彼の眼差し，および顔付き，および彼の考えを見よ』と．そこで，彼は贈物をもち，スヴイヤトスラフのもとへ着いた．クレキが礼をつくして来たつたと（人々が）スヴイヤトスラフに伝えた．しかして（彼は）言つた．『彼らをこゝへ連れて来たれ』と．（彼らは）来たつて，彼に礼をし，彼の前に黄金および絹織物をおいた．しかして，スヴイヤトスラフは横を向いたまゝおのれの下級従士たちに言つた．『しまつておけ』と．ところが，彼等は皇帝のもとへ帰り来たつた．しかして皇帝は貴族たちを呼びあつめた．そこで使者たちは言つた．『彼のもとに着き，贈物を渡し

た．しかして（彼は）それを見ずに，しまい込むように命じた』と．しかして，ある者が言つた．『さらに彼をためせ．彼に武器をおくれ』と．そこで彼らは，彼のいうことを聞いた．しかして彼（スヴイヤトスラフ）に剣および他の武器を（人々は）送つた．そこで彼はうけとり，ほめ，見とれはじめた．しかして（彼は）皇帝に感謝した．彼らはふたたび皇帝のもとへもどり，彼にすべてのありしことどもを物語つた．しかして貴族たちは言つた．『みよ．（彼は）猛き男となるであろう．財物に関心をもたないで，武器をうけとるからである．貢税を払え』と．しかして皇帝は使者を立ててかく言つた．『都へ来たるな，欲するだけの貢税をとれ』と．というのは（彼は）ツアリゴロドに殆んど達せんばかりであつたからである．しかして（彼らは）彼に貢税を払つた．ところで（彼は）戦死者に対しても，『彼の一族がとるであろう』と言つて，（貢税を）とろうとしていた．しかして（彼は）多くの贈物をも取り，ペレヤスラベツイに大なる賞讃につつまれて帰つた．おのれの親兵団が少いのを見て（彼は）独り言をいつた．『あざむいて，（彼らは）我が親兵団および我をも殺さないであろうか』と．というのは，戦で多くのものたちが倒れてしまつていたからである．しかして（彼は）言つた．『ルシへもどり，より多くの親兵団をつれて来よう』と．しかして使者を皇帝のもとデレヴストルへ送り —— というのは皇帝はそこにいたからである —— かく言つた．『（我は）汝と堅い和平と友好を保ちたい』と．皇帝はこれを聞いて喜こんで，彼にはじめよりも多くの贈物をおくつた．ところで，スヴイヤトスラフは贈物をうけとり，おのれの親兵団と共に考えはじめてかく言つた．『もしも皇帝と和平を（我々が）結ばず，我々が少いことを皇帝が知つたら，（彼等は）やつて来て，町の中で我々を取り囲むであろう．ところでルシの国は遠く，ペチエネギは我々と戦つている．誰が我々を助けるであろうか．そうではなくて，（我々は）皇帝と和平を講じ

よう．というのは，我に（彼らは）貢税を約したではないか．それで我々は充分であるとせよ；もし（彼が）貢税をまもらなくなれば，軍勢をあつめ，多勢になつて再びルシからツアリグラドに進もう』と．この言葉は親兵団の気に入つた．しかして（人々は）主だつた家臣たちを皇帝のもとへつかわした．しかして（彼らは）デレヴストルへ到着し，皇帝に伝えた．そこで皇帝は翌朝，彼らを呼び寄せ，しかして皇帝は言つた．『ルシの使節たちに述べしめよ』と．そこで彼らは言つた．『我らの公はかく言つている．グレキの皇帝と今後すべての年月にわたり；完全なる和平を（我は保ちたい』と．そこで皇帝は喜び，書記にスヴイヤトスラフのすべての言葉を羊皮紙に書くように命じた．使者はすべての言葉をのべはじめ，書記は書きはじめた』．

以上の如くである．そして，この後には，ギリシアとの条約文が書き取られているのである．

先に引用した数個の物語と非常に似ていなかつたか？

例えば，ギリシアの皇帝が使者をたてゝロシア人に言つた口上に，先の引用例と全く同一の言葉があつたではないか．即ち，先の場合は『来たるな，しかして貢税をとれ』«не ходи, но возьми дань»，今度の場合は『都へ来たるな，しかして貢税を取れ』«не ходи к граду, возьми дань»である．口上の場合にふさわしく，ともに«ходити»が用いられて，«ити»は使われていないではないか．然も，その内容は全くうり二つではないか．完全に型通りの伝承物語の一寸した展開であつたと考えるのは決して無理ではない．そして，その展開を行つた人こそ，或はヤンであつた．上の引用文を少し注意してよめば，ヤンが註釈的に説明を入れたとおぼしき個所がみとめられる：例えば，軍司令として嘗つてギリシアに捕われた父をもち，自からもギリシア遠征の司令をつとめたヤンでしか言えない註釈部分がある．『というのは，グレキは今日にいたるまでも狡猾であるからである』

«суть бо Греци лстиви и до сего дни»とは，そのようなものの最たるものであろう．

勿論，年代記者がヤンの言葉を『過ぎし年月の物語』に口うつしのまゝ書き取つた訳ではない．年代記者特有の表現内至記述のタイプが此処には見出される．『しかして大いなる戦闘があつた』«и бысть сеча велика»という一節である．上の引用文には面白いことにその同じ一節が二度も繰り返し用いられている．同じこの言葉は，年代記のきまり文句の様に数え切れないほど出現して来るのである．ヤンの物語に年代記者の手が加えられて書きとられたものであつても，そのヤンと年代記者の二重の層の下に，やはり，英雄伝承物語の存在がまざまざと浮び上つて来るではないか．

例えば，今度の場合に，スヴイヤトスラフは『おのれの親兵団と考えはじめた』«почa думати с дружиною своею»という一節があつた．ところが面白いのは，その前の以用例にみられたイゴリの二度目のグレキ遠征にこれと同じ言葉が見られるのである．即ち，『親兵団を呼びあつめて考えはじめた』«созва дружину и нача думати»という一節である．『考える』«думати»という動詞の使い方のこの一致が物語るものも，やはり，非常に明瞭な下敷の存在なのではないか．『考える』«думати»という動詞が，今後の取るべき方策や，戦術の相談を意味したことは明らかである．しかも，この言葉が年代記に現れる個所は，多くの場合，これらの場合と同じような戦記的な，或は英雄的なものが多い．下敷であつた筈の言葉が，遂に上ににじみ出して，年代記の古代ロシア語に固つてしまつたもののように考えられる．『過ぎし年月の物語』にも，この固定化がみとめられる．年代記年号のまゝそれを次にあけてみよう．

①先づ『というのは，ヴオロジメルは親兵団を愛していたからである．しかして彼等と共に考えていた』«Бе бо Володимер

любя дружину, и с ними думая・・・・»(6504年の項)
②『しかして，ラチボルの親兵団はヴオロジメル公と共に考えはじめた』«И начаша думати дружина Ратиборя со княземъ Володимеромъ・・・»(6603年の項)
③『しかしてスヴイヤトポルクの親兵団は考えはじめ，言いはじめた』«И почаша думати и глаголати дружина Святополча・・・・»(6611年の項)
この他にも，トロイツキー年代記に④『公たちは考えはじめた』«И начаша думати князи»等にとあげればきりがないであろう．

また，イゴリの遠征の場合も，スヴイヤトスラフの遠征の場合も，その貢税の品物は，一致して，黄金«злато»と絹織物«паволоки»であつた．それは或程度まで本当に歴史的な事実であつたかも知れない．然し，もし，歴史事実だけであつたとすれば，何故，せいぜい羊皮紙の裏表にして数枚のちがいのところに，こうまで同じような事実を書きとめなければならなかつたのか，決して，イゴリの場合と同じく貢税を取つたという記事だけにとゞめなかつたのか．イゴリの場合は絹の帆に仕立てさせて物語を華やかにし，スヴイヤトスラフの場合は，同じ貢税に武器を加えて彼の武者風格を引き立てようとしているではないか．其処には幾度にも亘る度々の歴史事実が重なつていたにちがいなくても，或はヤンの口から聞いたかも知れない年代記者が書きとめる時には，既に伝承物語の手法に乗つかつてしまつていたと見るべきであろう．だから，此処には，たゞけば，幾らでも黄金と絹の出る豊かなグレキの国，その都ツアリグラド，遠征の獲物の目標，というギリシアの国のイメージが完全に説話的世界と現実の世界とに亘つてひろがつてしまつていた．この説話的世界のギリシアへのイメージを現実の世界にかぶせた張本人は，年代記者ではなくて，おそらく，ヤンであつたであろう．というのは，ツアリグラード

遠征物語は，この物語を最後にして，ヤンの死の記録以後には，もう絶対に出てこないからである．勿論，その遠征は歴史的にも存在しなかつたとすれば，『過ぎし年月の物語』に書きとられる筈もなかつたと言うことにもなるかも知れない．ヤンが語つたとおぼしきギリシア遠征の最後の物語を引き合いに出したところで，次の話に移ろう．

英雄叙事詩的な物語の，ギリシア遠征以後のもう一つのテーマは貢税集めの物語である．『過ぎし年月の物語』に果してこの下敷が見出されるであろうか．

ギリシア遠征の場合にも，貢税取りのテーマは同時に組み込まれてしまつていた．此処では単なる貢税取りの場合だけを調べあげてみよう．『過ぎし年月の物語』が年代を設定し得なかつたほど非常に古い時代の話として，ツアリゴーロドにキーが『行つた』という物語があつたように，貢税取りのテーマについても，年代設定以前の古い物語が見出される．

即ち，数個の年代記に大体同じ文章で次の様にある．（『古代ロシア研究』オ一号；p．59～p．61に異本照合も含めて詳しく訳出ずみである）

По сих же летех, по смерти братье сея, быша обидимы Древлями, инеми околними, и наидоша я Козаре седящая на горах сих в лесех, и реша Козари: "платите нам дань". Съдумавше Поляне и вдаша ото дыма мечь, и несоша Козари ко князю своему и к старийшинам, и реша им: "се налезохом дань нову". Они же реша им: "откуду?" Они же реша: " в лесе на горах, над рекою Днепрьскою". Они же реша: "что суть въдали?" Они же показаша мечь. Реша старци Козарьстии: "недобра дань, княже. Мы ся доискахом оружьем одиною стороною, рекше саблями,

а сих оружье обоюду остро, рекше мечь; си имуть имати дань на нас и на инех странах".

『これらの年の後，これらの兄弟たちの死後，（ポリヤネは）ドレヴリヤネその他の周辺の（民族）によつて，はづかしめられた．そして，これらの山々の上の森に住んでいる彼らを，コザリが攻撃した．そしてコザリは言つた．『我らに貢物を支払え』と．ポリヤネは相談して一戸から（一本の）剣を差し出した．そこでコザリは（それを）おのれの公と長老たちのもとへ運び，そして彼らに言つた．『この通り（我らは）新しい貢物を見つけた』と．そこで，彼らは彼らに言つた．『どこからか？』と．彼らはそこで言つた．『山の上なる森の中，ドニエプルの川のほとりで』と．彼らはそこで言つた．『何を人びとは差し出したか？』と．そこで彼等は剣を示した．コザリの長老たちは言つた．『善からぬ貢物である．公よ．我らは片刃の武器，すなわちサーベルによつておのれのために貢物をえた．ところが，これらの者の武器は両側が鋭い．すなわち剣である．これら（の者）は我らおよび他の国々に対して貢物を課すであろう』と．

年代設定以前の古い物語でありながら，キーのツアリグラード遠征の物語にくらべて，こちらは格段に詳しいではないか．特に会話体の部分だけを取りあげて見るがよい．そして，一般に叙事詩の書き取られるように，横に行を分けて書き並べて見たら，ますます，この一節がキーの遠征物語よりもなお古い，然も，より完全な形で当時に保存されていた叙事詩であることが判明しよう．勿論，その話の内容も非常に古い．公や長老が軍勢をひきいて行つた遠征に対して，この貢税取りの内容の物語は，むしろ，公や長老をさし置いて，血気のものたちが，勝手に相手を屈服させて獲物を集めて来たということではないか．年代記者が，この物語の記録に当つて，わざわざ，その冒頭に『これらの兄弟の死後』

«по смерти братье сея と，ことわり書きを附け加えて，この物語がキー，シチエク，ホリフの三人兄弟の物語よりも，後代の出来事であると決め込んでいても，或はまた，この物語の直後に，年代記者らしく，宗教的な議論を展開して，この物語を正当化しようと努力していても，彼自身が書き取つたこの貢税取りの伝承の古さは，おおいかくせていない．むしろ，その伝承の書き取りに，つじつまを合せたい気持が先走つて却つて，当時に伝えられていた非常に古い口碑が，むしろ生のまゝで定着してしまつたのかも知れない．

貢税取りとは名が良いだろうが，民間説話における古い宝物取りの物語ではなかつたのか．キーの物語の場合に，彼が渡し守であつたという説話のバリアントが存在したと説いたが，おそらく，そのバリアントの方を伝える民衆層が，この宝物取りの口碑をも持ちつゞけていたのであろう．そして，遠征の主人公が軍勢を指揮する公であつたような物語は，民衆層の伝承によるものではなくて，親兵団層の伝承によるものなのであつたと思われる．親兵団層の物語り手が，最も古い宝物取りの民衆説話或は民間叙事詩を取りあげて，おのれたちの層の武勇説話に仕立てあげようとした時，宝物取りの民衆説話は，公や親兵団の行なう武勇や遠征の物語と重ねられて行つた．そして，その結果が，先にあげたイゴリやスヴイヤトスラフの面白い物語になつたものだと考えられる．然し，この宝物取りの口碑が，親兵団の語り手の手腕によつて取りあげられ，遠征物語と重ねられて行くまでには，まだまだ過渡的な貢税取りだけの物語を経過しなければならなかつたらしい．

その様な過渡的な貢税取りだけの物語にも，既にその主人公は，公に置き代えられることが多かつた．時代が設定されるようになつてからも，この過渡的な貢税取りの物語は，おそらく，親兵団層の手によつて，歴史事実と混合されながら，民衆層の多くの伝承を吸いあげて，長い面白い武勇的な物語としてつくり出して行

つたようである．そして，そのうちの重要なものが，ヤンのような人物の口から，年代記者を通じて『過ぎし年月の物語』に定着したものだと考えられる．

882年(6390年)の項にみられるオレグ《Олег》の物語（既に『古代ロシア研究』才二号p.25にて照合訳出ずみである），それにつづくオスコリド《Осколд》とジル《Дир》の物語（同じく同誌同号p.26～27）を冒頭とする885年(6393年)の項までの物語には，まだまだ竹に木をつないだような，ぎこちなさが見られる．むしろ，無理に説話を拾いあげて組み込もうとしたようにも思われる．

この貢税取りの話が立派に英雄物語のようにまとまるまでには，ギリシア遠征の場合と同じように，イゴリやスヴィヤトスラフの登場を待たなければならなかつた．スヴィヤトスラフがギリシア遠征を挙行するまでの，前奏的な物語として，この貢税取りの話が立派な形に成長して組み込まれたのであつた．964年(6472年)以下の記事が即ちそのようなものである．（『古代ロシア研究』才五号p.37以下参照）念のため，ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー各年代記にみられる『過ぎし年月の物語』の同一の文章を引用しておこう．

В лето 6472.
Князю Святославу възрастъшю и възмужавшю, нача вои совкупляти многи и храбры, и легко ходя аки пардус, войны многи творяше. Ходя воз по собе не возяше, ни котьла, ни мяс варя, но потонку изрезав конину ли, зверину ли, или говядину, на углех испек ядяше, ни шатра имяше, но подъклад поставляв и седло в головах; такоже и прочии вои его вси бяху. Посылаше к странам глаголя: "хочю на вы ити". И иде на Оку реку и на Волгу, и нале-

зе Вятичи, и рече Вятичем: "кому дань даете?" Они же реша: "Козаром по щьлягу от рала даем".
В лето 6473.
Иде Святослав на Козары. Слышавше же Козари, изидоша противу с княземъ своим Каганом, и съступишася бити; и бывши брани, одоле Святослав Козаром и градъ их Белувежю взя. Ясы победи и Кастогы.
В лето 6474.
Вятичи победи Святослав, и дань на них възложи.
В лето 6475.
Иде Святослав на Дунай на Болгары. Бившемся обоим, одоле Святослав Болгаром, и взя городъ 80 по Дунаеви; седе княжа ту в Переяславци, емля дань на Грьцех

『6472(964)年.
スヴイヤトスラフ公が一人前になり成年に達したとき，多くの，しかして勇敢なる軍勢を集めはじめた．しかして，ひようの如く身軽にめぐりあるき，多くの戦争を行つていた．自分の（軍の）うしろに輜重車をつれず，大なべも（もたず），肉も煮ずに，馬肉であれ，けものの肉であれ，あるいは牛肉であれ，細かく切り刻んで炭火の上で焼いて喰べたものであつた．天幕ももたずに，あんじよくをひろげ，くらを枕にしていた．彼の他の軍勢も同様であつた．諸国に使者を立てて言つた．『汝らに向つて進攻したいと思う』と．しかしてオカ（河）およびヴオルガ（河）に向つて進攻し，ヴイヤチチに遭遇し，しかして，ヴイヤチチに言つた．『（汝らは）誰に貢税を納めているのか』と．そこで彼らは言つた．『（我々は）コザリに，スキごとに一シチリヤグ納めている』と．

6473(965)年.

スヴイヤトスラフはコザリに向つて進攻した．ところで，コザリは（これを）聞いておのれの公カガンと共に（これに）対して出撃した．しかして（彼らは）戦いはじめた．しかして，戦闘があつてスヴイヤトスラフがコザリに勝ち，しかして，彼らの町ベラベジヤを占領した．ヤスイをうちまかし，しかしてカソギをも（うちまかした）．

6474(966)年.

ヴイヤチチをスヴイヤトスラフが打ち負かし，しかして彼らに貢税を課した．

6475(967)年.

スヴイヤトスラフはドウナイのボルガルに向つて進攻した．両軍が戦つたとき，スヴイヤトスラフはボルガルを打ち負かし，しかしてドナイに沿つた町八十を占領した．（彼は）グレキから貢税をとり立てながら（公として）君臨しつゝ，その地ペレヤスラヴエツにとゞまつた」．

以上のうち，特に前半の6472年の項に注目したい．貢税取りをテーマとした物語が，ギリシア遠征をテーマにしたものより，より民衆的な口碑であつたことが，此処に，鮮かに映し出されているではないか．如何にそれを，ギリシア遠征の予備行動的なものとして，親兵団的物語に組み替えようとしても，その本質はかくしきれなかつた．オーその題材内容からして，最も古いブイリーナとそつくりではないか．ヴオリガ《Вольга》やスヴイヤトゴル《Святогор》を詠じた最古のブイリーナのもつふんいきと瓜二つではないか．

同時に，それは，その用語の上からも指摘し得るところである．例えば，しばしば取りあげた『行く』ことを意味する《ити》と《ходити》の用法だけを此処に取りあげてもよい．叙述語としては，キーの説話の時にしか用いられていなかつた《ходити》が

此処では，こんなにキーよりも後代の出来事としてのべながら，二度も重ねて用いられている．『豹のように軽々と進んだ』≪легко ходя аки пардусъ≫，『自分のうしろに輜重車をつれずに行つた』≪Ходя воз по собе не возяше≫の二個所である．勿論，この言葉の使い方の余りにも民衆口碑的な古さに気づいた年代記者は，この動詞をキーの場合のように，アオリスト形としては用いなかつた．キーとは全く時代が新しいこととして書きとめようとした以上，精一杯の努力であつたかも知れない．その努力は，アオリスト形のみならず，過去形のパーフエクトとしてもインパーフエクトとしても使用することを避けしめ，ついに，両方とも同じ副動詞現在形に変えさせてしまつている．

然も，面白いことに，この記事以前に，盛んに口上の言葉として，喋り言葉の形で数回利用した≪ходити≫を，年代記者は此処では忘れたのかも知れない．おそらく，それほどに，生の伝承からの圧力が強かつたのであろうと思われる．即ち，スヴイヤトスラフが諸国に送つた口上の言葉は，以前の様に≪ходити≫であつて然るべきだと思われるのに，此処では，≪ити≫と反対の言葉が用いられている．『汝等に向つて進みたい』≪хочю на вы ити≫となつているのである．≪ходити≫と≪ити≫の納めどころが，こんな時代まで下がつて来てから混乱を示しているのは，おそらく，古い形のまゝで生きつゞけて来た口碑伝承を此処に組み込んで話を合わそうとした時の馬脚であつたと思われる．

民衆ベースのものであるにしろ，或は，親兵団的ベースのものであるにしろ，年代記の大きな源の一つをなしたと思われる叙事詩のような伝承は，残念ながら，ロシアでは現代にはほとんど伝えられていない．たゞ，最後まで民衆ベースでの伝承として，ブイリーナだけが巨大な数量にのぼつて現代に伝えられているのみである．もしも，其処に，ツアリグラド遠征や，貢税取りや，スヴイヤトスラフの前半の物語のような内容のものが，いまだに伝

承されているとしたらどうであろう．現在集録された限りのブイリーナに就ては，既にその全部の語彙調査に至るまでの仕事を終つたが，其処に，今のようなテーマや内容のものがあつたとしたら，話はなおさら面白いであろう．それを求めて見ることにしよう．

－ Г －

ブイリーナは以下引用するように，民間庶民――むしろ，草深い田園――の中に伝承されて来たために，書きとめられることもなく，現在では，もうほとんど，現代ロシア語になりきつている・年代記のような，古代ロシア語の姿は全くない．その内容と言葉使いの調子を比較して見る以外に手がない．

スヴイヤトスラフの貢税取りとして6472年の項の冒頭に出た一節『スヴイヤトスラフ公が一人前になり，成年に達したとき，多くの，しかして勇敢なる軍勢を集めはじめた』≪Князю Святославу възрастъшю и възмужавшю, нача вои совкупляти многи и храбры≫をロシア最古のブイリーナである『ヴオルフ・フセスラヴイエヴイチ』≪Волх Всеславьевич≫[1]と題する197行に及ぶ作品の43行目以下の次の一節と比較してみるがよい．

А и будет Волх во двенадцать лет,
Стал себе Волх он дружину прибирать.
Дружину прибирать в три годы,
Он набрал дружины себе семь тысячей;
.....
.....
Со всею дружиною хороброю
Ко славному царству Индейскому

Тут же с ними во поход пошел.

『しかしてヴォルフ十二才になると
ヴォルフは自からに親兵団を集めはじめた．
親兵団を三年がかりで集めはじめた）．
彼は自分に七千の親兵団を集めてしまつた．
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・（この間八行省略）・・・・・
・・・・・・・・・・
総ての勇敢なる親兵団と共に
栄えあるインドの王国へ
そこで彼等と共に遠征に出かけた』

成長して親兵を集め始める話の一致は面白いではないか：然もその親兵団に付けられた形容詞は共は『勇敢なる』≪храбрый≫≪хоробрый≫であつた．『過ぎし年月の物語』の場合は，この形容詞の形が古代教会スラヴ語に傾き，プイリーナの場合がより民衆的な東スラヴ方言の形であるにすぎない．

このプイリーナには，もつと面白い例が見当る．『過ぎし年月の物語』が非常に古い時代の物語として，年代設定以前に織り込んだ貢税取りの物語に，公や長老がその貢物を何処から取つて来たかと尋ねた場面があつた．それに対する答えが『山の上なる森の中』≪в лесе на горах≫であつた．このプイリーナの76行目には『彼（ヴォルフ）は暗き森を針葉樹の森を走り廻り飛び走つた』≪Бегал, скакал по темным по лесам, и по раменью≫とあるではないか．

また．イゴリの遠征を受ける側の皇帝が，その遠征し来りつゝあるこの報らせを受けるという年代記の物語と，このプイリーナの113行目以下の数行とはどうであろうか．『インドの皇帝』≪Индейский царь≫をツアリグラドの皇帝と置き替えるだけ

で充分のように思われる．

А и гой еси ты, славный Индейский царь!
Изволишь ты наряжаться на Русь воевать,
Про то не знаешь, но ведаешь,---
А и на небе просветя светел месяц,
А в Киеве родился могуч богатырь,
Тебе царю сопротивничек".

『あゝ，汝，栄えあるインドの皇帝よ！
汝よ，ルシに対して戦いの武装をせよ．
（汝は）それを知らないだろうが
空には明るき月が輝き渡つて
キエフで強き勇士が
皇帝なる汝の敵対者が生まれたのだ』

しかも，ブイリーナにおけるヴォルフが遠征先で獲得した貢物はやはり『黄金』≪злато≫であつた．たゞ，ギリシア遠征の物語とはちがつて，この古いブイリーナでは絹の代りに『銀』≪серебро≫が加えられている．

同じく，キーエフ圏の古いブイリーナ『ヴォリガ』≪Вольга≫[2]を取りあげてみよう．其処にも，年代記におけるスヴイヤトスラフの如く，ブイリーナにおけるヴォルフの場合の如く，成人して親兵団を集める一節が出て来る．才十六行目から二十行目にかけて次の様にある．

А прожил двенадцать лет,
Обучался хитростям-мудростям,
Всяких языков разных.
Собирал дружину себе добрую,
Добрую дружину, хоробрую,

『ところで（ヴォリガは）十二年すごした

さまざまの武芸を習つた．
さまざまの言葉をも．
おのれのために良き親兵団を集めた．
良き親兵団を，勇敢なるを．』

然も，このブイリーナでも，ヴォリガが親兵団と共に活躍し獲物を捕える場所は森なのであつた．然も面白いことに，此処には，海を舟でギリシアへ押し渡つたイゴリやスヴィヤトスラフを思わせ，なお，絹の帆の話をさえ想記させる一節がある．自分の親兵団にヴォリガが命ずる言葉で，75行目から79行目にかけて，次の様に詠まれるのである．

Возьмите топоры дроворубное,
Стройте суденышко дубовое,
Вяжите путевья шелковые,
Выезжайте вы на сине море,

『カシの木を切るおのを取れ，
カシの木の舟を造れ，
絹の綱を結べ，
汝等，青海原に乗り出せ』

イゴリの場合の絹の帆にしろ，この場合の絹の綱にしろ，それが舟の話であつてみれば，いかほどの差異もないではないか．

『考える』《думати》という言葉が，相談協議するという意味で『過ぎし年月の物語』の中に用いられていたことは既に用例を引いて述べたが，このブイリーナで，同じような場面と用例の影が出て来る．102行目から103行目にかけて，《Проведати про думу про царскую, И что царь думы думает》『皇帝の考えを知るために，しかして皇帝が如何に物を考えているかをも』とある．民間に伝承され，詠じられるブイリーナは『考える』《думати》に同じ語幹の『考え』《дума》を補語として持ち出しているにすぎない．このブイリーナのすぐその数行後

に詠じられる文句からも，この『考える』≪дума ти≫は，決して物思いにふけることではなくて，協議することを意味したことが分る．即ちこの場合の協議の相棒は王妃≪царица≫であつた．このブイリーナでヴオリガが戦利品を親兵団と山分けする最後の節は，特に年代記の最も古い貢税取りの場面を思わせる．同じサーベル≪сабля≫という言葉さえ使われて．193行目以下に次の様に詠まれている．

Дружина моя добрая, хоробрая!
Станемте теперь полону поделять.
Что было на делу дорого,
Что было на делу дешево?
А добрые кони по семи рублей,
А вострые сабли по пяти рублей,
А оружье булатное по шести рублей,
Палицы булатные по три рубля,

『我がうるわしき勇敢なる親兵団よ！
今や，獲物を分けようではないか．
事に当つて何が価高く．
事に当つて何が価安かりしか？．
良き馬は七ルーブリとし
鋭きサーベルは五ルーブリとし
鋼の武器は六ルーブリとし
鋼のこん棒は三ルーブリとせん．』

此処でルーブリという貨幣単位は，勿論，伝承の間に新しく差し替えられたものであろう．

以上二個のブイリーナに並んで，最古のものだと考えられるものに，スヴイヤトゴール≪Святогор≫を主人公にしたブイリーナがいくつかある．『過ぎし年月の物語』の中に見られた最も古い，年代設定以前の貢税取りの物語は，山の上の森に住む者たち

からの獲物の話であつた．この，攻撃や征伐の相手が山の上の森にいるという話の筋が，どれほど古いロシアの英雄叙事詩のテーマであつたかゞ，此処で明瞭に証明されそうである．スヴヤトゴールをその地位から追い出す新しい英雄イリヤ《Илья》が，彼を見出した場所はどこであつたか？

『スヴイヤトゴールが棺を測る』《Святогор примеряет гроб》と題するブイリーナ③には，イリヤの言葉につゞいて，その場面が描き出されている．6行目以下にそれが次の様に詠じられている．

" Поеду я еще во святы горы,
Проведаю ведь я про богатырей,
Про того ли я Егора-Святогора ведь.
Есть матерой богатырь да великиих,
Есть он, был на горных,
Его-то я ведь силушки не попробовал".
Заехал-то Илюшенька Муромец
На ты ль тут горы на высокие,
Под ущелья бы ли да плотные.
Как едет чудовище, чудо ведь,
Сидит-то он еще на добром кони,
Такого чуда он да ведь не видал,
Такого ведь чуда он не слыхал.
Как тут разъехался на добром кони,
Ударил своей палицей богатырской
Прямо тут ему буйну голову.
А как то ведь чудовище да идет-то,
На кони сидит да подремливат,
Назад-то ведь чудо не оглянется,
Вперед-то ведь он колыбается.

『なお我は聖なる山々に行き，
勇士たちを我は良く知るものなり．
かのイエゴール・スヴイヤトゴールをも．
彼は強大にしておおいなる勇士なり，
彼は山々の勇士なりき．
されど彼の力をば我はいまだためさず』
イリヤ・ムーロメツは，その高き
山々に馬をかり行きぬ．
その時，不思議なる魔物の乗り進むあり．
よき馬にそれはまたがりてありぬ．
彼はいまだかゝる不思議を見ず，
かゝる不思議を耳にせしこともなし．
その良き馬を乗り廻し
勇士の如くこん棒にて
あらき馬の頭を打ちつ進みぬ．
この魔物は進み行けども
馬にまたがりて，まどろむに似て，
うしろもふりむかず
前方に揺れ動くのみに似たり』

英雄イリヤは，この巨大なスヴイヤトゴールに勝ち，その力を引きついで，新しき時代の英雄になるのである．

遠い原始の世界から文明の夜明けへの境目，深い森と野の境目が，そして，その境目を行き来する勇者たちの姿が，このブイリーナにも，先に述べた年代記の貢税取りの物語にも映し出されている．

貢税《дань》や，ツアリグラード《Царьград》などという言葉が，明らかに組み込まれているブイリーナは，これら，ヴオルフ，ヴオリガ，スヴイヤトゴール等を詠じた最古のブイリーナよりも，むしろ，多少新しい．年代記が書かれたころ，勿論，それ

らの多少新しいブイリーナは生き生きと存在していたであろうが，それに立ちまじつて，ほとんど原始から引きつがれたこの様な最古のブイリーナもまた生きていたと思われる．この最古のブイリーナの物語のような伝承から，年代記者（達）が引き写し，或は構成したものが『過ぎし年月の物語』における年代設定以前の多くの物語であつたであろう．

ブイリーナ作品の全体に亘る語彙調査の結果から，『貢税』≪дань≫，『ツアリグラード』≪Царьград≫などという言葉の登場するものに眼を通してみよう．

怪物的なスヴィヤトゴールやヴォリガというブイリーナの主人公たちから抜け出して，真に人間らしい主人公が活躍するブイリーナができたのは，原始から文明への境目を渡る時代のことであつたであろう．そういうブイリーナの代表的なものに，比較的長い作品で『ドーブルイニヤと蛇』≪Добрыня и Змей≫④と題するものがある．其処には，明瞭に『貢税』≪дань≫という言葉が初めて用いられる．即ち，公≪князь≫が，それぞれの勇士に貢税を取りに行く命令を下す個所で，例えばミハイロ≪Михайло≫には244行目から247行目にかけて，イリヤ・ムーロメツには250行目から254行目にかけて，各々その貢税取りの命令の言葉が見られるのである．その様にして，貢税取りに出かけた人物たちのうちで，主人公ドーブルイニヤの相手として設定された蛇どもを踏み散らしながら，その本陣に迫る姿は，いかにも『過ぎし年月の物語』におけるギリシア遠征の物語の原型に仕立て上げられそうではないか．数多いブイリーナ作品の中にあつて，この一節は特にその勇壮さと戦気の充実とにおいて抜群である．古い時代の戦いが庶民伝承の鏡に反映した最も典型的なものであるかも知れない．377行目から次に引用しておきたい．

Его добрый конь да богатырский
По чисту полю он стал поскакивать,

По целой версте он стал помахивать,
По колену стал в землюшку погрязывать,
Из земелюшки стал ножек он выхватывать,
По сенной копне земельки он вывертывал,
За три выстрела он камешки откидывал.
И он скакал-то по чисту полю, помахивал,
И он от ног своих змеенышев отряхивал,
Потоптал всех малыих змеенышев.
Подъезжал он ко норам да ко змеиным,
Становал коня он богатырского,
Да й сходил Добрыня со добра коня
Он на матушку да на сыру землю,
Облачался-то молоденький Добрынюшка
Во доспехи он да в свои крепкие:
Во-первых, брал саблю свою вострую,
На белы груди копье клал мурзамецкое,
Он под левую да и под пазушку
Полагал он паличку булатную,
Под кушак он клал шалыгу подорожную
И он пошел во ты во норы во змеиные.
Приходил он ко норам да ко змеиным,
Там затворами затворено-то медныма,
Да подпорами-то подперто железныма,
Так нельзя войти во норы во змеиные.
То молоденьский Добрынюшка Микитинец
А подпоры он железные откидывал,
Да й затворы-то он медные отдвигивал,
Он прошел во горы во змеиные,
Посмотрел-то он на норы на змеиные;
А й тых норах да во змеиных
Много множество да полонов сидит,

Полона сидят да все рассейские,
А й сидят-то там да князи, бояра,
Сидят русские могучие богатыря.
Похотелось-то молодому Добрынюшке,
Похотелось-то Добрыне полона считать,
Й он пошел как по норам да по змеиным,
Насчитал-то полонов он много множество,
Да й дошел он до змеинища Горынища;
А й у той-то у змеища у проклятоей
Да й сидит Забавушка Путятична.
Говорил Добрыня таковы слова:
"Ай же ты, Забавушка Путятична!
Да ставай скоренько на резвы ноги,
Выходил-тко ты со нор да со змеиных,
Мы поедем-ка с тобой да в стольно-Киев-град,
.....

『彼の良き勇士の馬は
広き野を走りはじめた．
馬は遠く尾を振りはじめた．
膝まで泥によごしつゝ
泥より足を抜いては走つた．
千草の山に土をはねかけ
三露里の彼方まで小石を飛ばした．
馬は尾を振りて野を走り，
まつわる蛇をふりおとし，
ことごとくそれらを踏みつけた．
蛇の穴にたどりつき
彼は勇士の馬をとゞめた．
しかして馬よりドーブルイニヤは

母なる大地におり立つた．
勇ましきドーブルイニヤは
おのれの堅きよろいをつけ
まず，鋭いサーベルを持ち，
胸には勇士のヤリを抱いた．
彼は左のふところに
鋼のこん棒をもち
皮帯の下には旅のムチを入れ
しかして，彼は蛇の穴に向つた．
彼は蛇の穴に着いた．
其処には銅のかんぬきが閉められ
鉄の支柱が閉め込まれ
蛇の穴へは入れない．
そこで勇ましきドーブルイニヤ・ミキチネツは
鉄の支柱をはねとばし
銅のかんぬきを動かしのけて
彼は蛇の穴へと通つた．
蛇の穴をば彼がみつめたら
それらの蛇の穴には
数多くの捕虜が坐つていた．
坐つているのは全部ロシアの捕虜．
其処には公も貴族も
ロシアの強き勇士もいた．
勇しきドーブルイニヤは
ドーブルイニヤは捕虜を数えようとした．
しかして彼は蛇の穴から穴へと進んだ．
彼は数多くの捕虜を数えあげた．
しかして彼はゴルイニシチエ蛇に至り，
見ればこの呪わしき蛇のそばに

ザバヴシカ・ブチヤチナの坐つていた．
ドーブルイニヤはこう言つた．
『さあ，汝，ザバヴシカ・ブチヤチナよ，
さあ早くしつかりと立ちあがれ，
我と共にこの蛇の穴より出でて，
二人して都なるキエフに戻るのだ』と．
・・・・・・・・・・・・・・・・・・

この作品には，非常に時代がさがつてから組み込まれた言葉がある．例えば，『勇士のヤリ』と訳しておいた≪копьe мурза-мецкое≫のмурзамецкоеなどという形容はその一つである．≪мурза≫とは実はタタールの小貴族のことである．だから，タタールの侵入以前に，この言葉があつた筈がないからである．伝承途上に，それぞれの詠誦者によつて，次才に組み替えられて行つたにしても，此処には『過ぎし年月の物語』の中から先に引用した物語部分の下敷の原型が見出せそうである．例えば，ルシの者たちが捕虜になつた話，ギリシヤ人が防衛のためにスド（湾）を閉鎖した話などである．然も，このブイリーナには，蛇が火を吹いて勇士に立ち向う一節があつて，ルシが夜中に海上で火打に会う年代記の物語に通じ，なお，この作品には，『行く』≪ходити≫という動詞まで数回用いられているのである．

この様なブイリーナは，勿論，主として農民を中心とする庶民の間に生きていた伝承物であるから，そのまゝの形で，年代記を書き始めていた知識人たちの間に存在していたとは言えないであろう．今は既に失われて無いが，ブイリーナの庶民的作品の上に，親兵団の，宮廷の，或は教会の，それぞれ向きの古い勇士物語があつたことであろう．それらの伝承作品から再構成されたものが『過ぎし年月の物語』に定着した一部の物語であつたにはちがいない．

然し，今，こゝでは，もうしばらく，遠征，（特にツアリグラー

ドへの），貢税取りを話にした古いブイリーナが，いまなお，如何に多く伝えられているかを見ておくことにしよう．そうすれば，年代記の物語の下敷が如何に広く深く強固なものであつたかゞ分るであろう．

その様な話や言葉の出現する古いブイリーナの各節の引用は省略して，その主なものの作品題名だけを次に列挙するためにとゞめる．（冒頭番号は註と参照のため）

⑤『ドーブルニヤ・ニキーチチとヴアシリイ・カジロヴイチ』
≪Добрыня Никитич и Василий Казимирович≫

⑥上と同一の題名の後に『出陣のドーブルニヤ』≪Добрыня в отъезде≫が付けられた作品．

⑦『イリヤ・ムーロメツの病気治癒』≪Исцеление Ильи Муромца≫；（このイリヤを主人公とした他の多くのブイリーナも同様である）

⑧『イリヤ・ムーロメツとキーエフの怪物』≪Илья Муромец и идолище в Киеве≫

⑨『出陣のドーブルニヤとアリヨーシヤの失敗した結婚』
≪Добрыня в отъезде и неудавшаяся женитьба Алеши≫

・・・・・・・以下省略．

年代記において，ロシアの公は，十五世紀にならなければ皇帝≪царь≫と言われることはなかつた．≪царь≫と言えば，特に『過ぎし年月の物語』のように古い年代記では必ずギリシアビザンチンの皇帝であつた．もしも，≪царь≫，≪царский≫，≪царевна≫，≪царевич≫等々の言葉をブイリーナに求めるなら，キーエフ及びノヴゴーロドで活躍する主人公を持つ古いブイリーナのほとんど総てが，それをもつていると言わなければならないであろう．

（註）

①キルシア・ダニーロフ≪Кирша Данилов≫が集録して，その第六歌として公にしたものである．1901年の出版による．

②ギリファエルジング≪Гильфердинг≫が集録したブイリーナで，レリコヴォ≪Деликово≫村で八十才の盲目の農民クジマ・ロマノフ≪Кузьма Романов≫が詠ずる作品であつた．彼のブイリーナ十集第二巻の91歌である．

③ソコロフ≪Соколов≫とチチエロフ≪Чичеров≫が集録したブイリーナ第一号である．63才であつたグリゴリー・アレクセーエヴィチ・ヤクショフ≪Григория Алексеевича Якушов≫の詠じたものである．十九世紀のブイリーナ詠誦者の代表的人物であつたという．彼は貧しい，然し勤勉な農民で背の低い肩巾の広い男であつたとチチエロフは伝えている．

④ギリファエルジングのブイリーナ集第二巻に納められた第七十九歌である．

⑤グリャエフ≪Гуляев≫が南部シベリアで集録したブイリーナの第十歌である．1871年にバルナウル≪Барнаул≫でレオンチイ・ガヴリロヴィチ・トゥピツイン≪Леонтий Гаврилович Тупицын≫の詠ずるものであつた．この詠誦者は，非常に貧しい盲目の老人であつたという．彼は二十個ほどのブイリーナを記憶していた．然し，残念ながら，南シベリアにまで流れたブイリーナで，彼から集録されたものは，この一作品にすぎない．この作品には原型の上へ後代のタタール支配期の影が色濃くしみ込んでいる．

⑥アスタホヴァ≪Астахова≫の北方ブイリーナ集第二巻134番にあるもの．有名な詠誦者リャビニン≪Рябинин≫の詠ずる作品であつた．この詠誦者はその叙事詩伝承の功によつて，ソヴエト作家同盟の会員におされた．このブイリーナにはずつと後代のタタール時代の反映が色濃いが，その貢税取り立ての物語は，原初年代記によりもはるかに古いだろう．

⑦ソコロフ及びチチエロフの集録したブイリーナ第70号で，当時58才であつたミロノフ≪Миронов≫なる人物から聞き取つたものである．二人の集録者の伝えるところによれば，この詠誦者は非常に物静かに，美しく詠じたものであつたという．このブイリーナは，非常に多くの人々が各地で聞き取つているので，おそらく，最も愛好され，最も広まつたブイリーナ作品の一つであつたであろう．

⑧ギリフエルジングのブイリーナ集第二巻の四号歌．ペヨートル・カリーニン≪Петр Калинин≫という人物からプドーグ山≪Пудожская гора≫のリーム≪Рим≫村で聞きとつたものである．

⑨ルイブニコフ≪Рыбников≫の歌謡集第一巻に第26号として出されているものでボヴエネツキー郡ゴールカ村≪Горка Повенецкого уезда≫のすぐれた詠誦者アヴラム・チユーコフ≪Абрам Чуков≫から集録したものである．

－五－

ブイリーナではイリヤ，アリヨーシヤ，ドーブルイニヤ等々の英雄が活躍するのに対して，彼等の公≪князь≫は，もつぱらキーエフの都に坐しているだけで，ほとんど動かない．むしろ，これらの英雄たちの総元締として，却つて，英雄たちによりかゝつている．多くの危機に際しては，英雄たちの判断に待ち，結婚の仲介さえも，これら勇士にしてもらうのである．これらのブイリーナにも示された伝承物語の素材――家臣に結婚の仲介をしてもらい，戦いにあつてはその判断を英雄たちに仰ぐという――は，『過ぎし年月の物語』の中に取り入れられて織り込まれた跡が歴然と残つている．公が勇士の判断に従わなかつた場合と，反対に従つた場合との結果までを年代記は述べあげているのである．そのうち，二，三の場合を例として次に述べてみよう．

ブイリーナの勇士にも当る老練な軍司令の助言を聞かずに破滅におちた場合の物語．ラヴレンチー，以下三つの年代記に見られる文章は，971(6479年)の項の最後の部分から翌年の項に亘つて，次の様にある．

Створив же мир Святослав с Греки, поиде в лодьях к порогом, и рече ему воевода отень Свендел: "поиди, княже, на конех около, стоять бо Печенези в порозех". И не послуша его, поиде в лодьях, и послаша Переяславци к Печенегом, глаголюще: "се идеть вы Святослав в Русь, взем имение много у Грек

и полон безчислен, с малыми дружины". Слышавше же се Печенези, заступиша пороги, и приде Святослав к порогом, и не бе льзе проити порог; и ста зимовати в Белобережьи, и не бе у них брашна уже, и бе глад велик, яко по полугривне глава коняча, и зимова Святослав ту. Весне же приспевъши,
В лето 6480,
поиде Святослав в пороги, и нападе на нь Куря князь Печенежьский, и убиша Святослава. Взяша главу его и во лбе его съделаша чашю, оковавше лоб его, и пьяху по нем. Свеналд же приде Киеву к Ярополку.....

『そこで，スヴイヤトスラフはグレキと和平を講じ，舟に乗つて浅瀬へ出発した．しかして彼に父の軍司令官スヴエンデルが言つた．『公よ，馬に乗つて迂回せよ，というのは，ペチエネギが浅瀬に布陣しているから』と．しかして（スヴイヤトスラフは）彼のいうことを聞かず，舟ででかけた．しかしてペレヤスラヴエツ人たちがペチエネギに使者を送つて言つた．『見よ，汝の方にスヴイヤトスラフがルシへ向つて進んでいる．グレキから多くの財物と無数の捕虜をともない，少数の従士団を引きつれて』と．そこでペチエネギはこれを聞き，浅瀬を占拠した．しかして，スヴイヤトスラフは浅瀬に着いたが，浅瀬を通り抜けることができなかつた．しかして，（彼は）ベロベレジエで越冬するためにとどまつた．しかして，彼等のところにはもはや食糧がなく，馬の頭が半グリヴナするほどの大いなる飢がおこつた．しかしてスヴイヤトスラフはそこで越冬した．春が来た時．
6480(972)年．
スヴイヤトスラフは浅瀬へ進んだ．しかしてペチエネギの公ク

リヤは彼におそいかゝり，しかして（彼らは）スヴイヤトスラフを殺した．（人々は）彼の頭をとり，彼の頭蓋骨に金を張り，彼の頭蓋骨で杯を作つた．しかして，それで（人々は）呑んだものであつた．ところでスヴエナルドはキエフへ，ヤロポルクのもとへもどつた』（古代ロシア研究；才五号；p.73～p.75参照）

これと同じような例は980(6488)年の項の冒頭より少し進んだところに，軍司令の忠告を聞かずに敵方に出かけて殺されてしまうヤロポルク≪Ярополк≫の物語がある．軍司令の名はヴアリヤジコ≪Варяжько≫であつた．

反対に，軍司令の助言によつて種々の成功を納めた話は多いが，その中でも，同じ980(6488)年の冒頭のヴオロジメル≪Володимер≫は，それにつづく記事に登場するドーブルニヤ≪Добрыня≫の助言によつてログネダ≪Рогнеда≫という妻を手に入れたように思える話は面白いし，その子ヤロスラフ≪Ярослав≫の成功の物語もまたそうである．ヤロスラフがよりかゝつた軍司令官の話はいくつかあるが，1016(6524)年の項にみられる物語とその翌年の記事に見られるものが面白い．即ち，この年（1016年）に，年代記によれば彼は二十八才であつた．親兵団と共にドニエプル河の氷上でスヴイヤトポルクの軍勢を破り，父祖伝来のキエフの王座についたのであつた．この戦いには，勿論，親兵団とその軍司令官の果した役割が大きかつたでつろう．特にそのことが面白く物語られるのは，むしろ，その翌々年の1018(6526)年の項である．ラヴレンチーをはじめとする多くの年代記の『過ぎし年月の物語』には，面白く次の様に書きとめられている．軍司令官の実戦におけるかけ引きが注目される．

В лето 6526.

Приде Болеслав с Святополком на Ярослава с Ляхы; Ярослав же совокупив Русь, и Варягы, и Словене, поиде противу Болеславу и Святославу, приде Во-

лыню, и сташа оба пол рекы Буга. И бе у Ярослава кормилець и воевода, именем Будый; нача укаряти Болеслава, глаголя: "да то ти прободем трескою черево твое толъстое". Бе бо Болеслав велик и тяжек, яко и на кони не могы седети, но бяше смыслен; и рече Болеслав к дружине своей: "аще вы сего укора не жаль, аз един погыбу". Всед на конь, вбреде в реку и по нем вои его, Ярослав же не утягну исполчитися, и победи Болеслав Ярослава; Ярослав же убежа с 4-ми мужи Новугороду, Болеслав же вниде в Кыев с Святополком. И рече Болеслав: "разведете дружину мою по городом на покоръм", и бысть тако. Ярославу же прибегшю Новугороду, и хотяше бежати за море, и посадник Коснятин, сын Добрынь, с Новгородьци разсекоша лодье Ярославле, рекуще: "хочем ся и еще бити с Болеславом и сь Святополком". Начаша скот сбирати от мужа по 4 куны, а от старост по 10 гривен, а от бояр по 18 гривен; и приведоша Варягы, вдаша им скот, и совокупи Ярослав воя многы. Болеслав же бе Кыеве седя, оканьный же Святополк рече: "елико же Ляхом по городу, избивайте я", и избиша Ляхы. Болеслав же побеже из Кыева, възма именье и бояры Ярославле и сестре его, и Настаса приставь Десятиньнаго ко именью, бе бо ся ему вверил лестью, и людий множество веде с собою, и городы Червеньскыя зая собе, и приде в свою землю. Святополк же нача княжити Кыеве, и поиде Ярослав на Святополка, и бежа Святополк в Печенегы.

『6526(1018)年.

ボレスラフはスヴイヤトポルクと共にリヤヒをひきいてヤロスラフに攻め来たつた.ところで,ヤロスラフはルシ及びヴアリヤギ,及びスロヴエネを集めて,ボレスラフ及びスヴイヤトポルクに対して出撃した.ヴオルニに着き,しかして,ブーグ河の両側にとゞまつた.しかして,ヤロスラフにはブードウイという名の養育係兼軍司令官がいた.しかして(彼は)ボレスラフを非難しはじめて言つた.『見よ,今,(我々は)くいで汝の肥えた腹を突きさしてやるぞ』と.というのは,ボレスラフは大男で重く,馬にも乗れないほどであつた.然し,賢かつた.しかして,ボレスラフはおのれの親兵団に言つた.『もしも,汝らが,この様な非難を残念に思わないならば,我は一人で死地にゆくであろう』と.馬に乗つて(彼は)河に入つた.彼の軍勢が彼に(つゞいた).ところでヤロスラフは武装する暇もなく,ボレスラフはヤロスラフを打ち負かした.そこで,ヤロスラフは四人の家臣と共にノヴゴロドに逃げた.そこで,ボレスラフはスヴイヤトポルクと共にキエフに入つた.しかして,ボレスラフは言つた.『我が親兵団を食を得させるために町々に導き分けよ』と.しかして,その通りになされた.ところで,ヤロスラフはノヴゴロドにのがれ来たり,海の向うへ逃げようと欲したが,ドーブルニヤの子である代官のコスニヤチンがノヴゴロドの人々と共にヤロスラフの舟を破壊して,言つた.『(我々は)もう一度,ボレスラフ及びスヴイヤトポルクと戦い合うことを欲する』と.しかして(人々は)家臣から四クナづゝを,また,長老からは十グリヴナづつを,また貴族からは十八グリヴナづつを集めはじめた.しかして,(人々は)ヴアリヤグを連れ来たり,彼らに金銭を与えた.しかして,ヤロスラフは多くの軍勢を集めた.一方,ボレスラフはキエフに坐していた.呪われたスヴイヤトポルクは言つた.『町にいる限りのリヤヒを,打ち殺せ』と.しかして(人々は)リヤヒを殺し

た．そこで，ボレスラフはキエフから逃げ，ヤロスラフの財産及び貴族及び彼の姉妹たちをとらえた．しかして，十人頭のナスタスを財産につけた．というのは，虚言をいつて彼に従つていたからである．しかして，多くの人々をおのれと共に連れ，しかして，チエルヴエンの町々を自分のものとして取り，しかして，おのれの国へ帰りついた．そこで，スヴイヤトポルクはキエフに君臨しはじめた．しかしてヤロスラフはスヴイヤトポルクを攻めた．しかして，スヴイヤトポルクはペチエネギへ逃げた』

これらの他にも，貢税取りの物語と重なつて，オリガ≪Ольга≫女帝の物語の項には，その軍司令官の物語が出て来る．（古代ロシア研究；才五号；p.4 以下参照）．

ところで，公に貢献し，公の勝利を導いた軍司令官の場合だけを取りあげてみると，面白いことに気づくであろう．ヴオロジメルがその軍司令官に負う所が多かつた場合の当の軍司令官はドーブルイニヤ≪Добрыня≫であつた．そして時代がさがつて，ヤロスラフがキエフの王座につく場合に貢献したのは，上に引用したようにブードウイ≪Будый≫であつたが，実はもう一人，引用文の中には重要な助言者がいた．即ち，ドーブルイニヤの息子に当るコスニヤチン≪Коснятин≫である．

年代記者がヤン≪Ян≫から多くの物語を聞いて，『過ぎし年月の物語』に書き込んだ当のヤンが，父ヴイシヤタ≪Вышата≫から二代に及ぶ軍司令経験者であるように，ドーブルニヤとコスニヤチンもまた父子二代に及ぶ公の側近であつた．

これは何を物語るのであろう．一家の血統と名門のほまれを，年代記者への語り手であつたヤンが思わず表面へ押し出そうとした結果ではなかつたのか．少くとも，父ヴイシヤタとヤン自身の物語の中には，この様なヤンの一門自慢の装飾があつたと思はなければならない．

ところが，血統や名門であることの自慢話は，或る場合には，

その一門が順調に伸びている時よりも，むしろ，左前になつて逆境におちる時により多く，なされるものである．ではヤンの場合は，どうであつたであろうか．『過ぎし年月の物語』の中には，ていねいにそれを読むことによつて，読み取れる手がかりが伏在している．

ヤンが年代記者に物語るような年令 ——— それは，人の常として決して若い壮年時代のことではなかつた筈である．おそらく老境か或は老境が近づいてからのことである．では，その頃，ヤンは，誇り高い順風の中にあり得たかどうか？ その年代頃の記事には，一つ，注目すべき文章が見当るのである．即ち，1093 (6601) 年の項に，ヴォロジメルの孫，ヤロスラフの子，フセヴォロド≪Всеволод≫大公が死んだとあり，それにつづいて，彼の生涯を讃美的にふり返る文章の一節に次の様な個所がみられる．ラヴレンチーをはじめとする年代記に ≪и нача любити смысл уных, съвет створя с ними; си же начаша заводити и негодовати дружины своея первыя,≫『しかして（フセヴォロド大公は）若き者らの知恵を愛し彼等と合議しはじめた．これら（若き者ら）は，彼をあやつりはじめ，おのれの以前の親兵団の不満をかいはじめた』とある．

曾つては，その親兵団の光輝ある名門の一員で，然も，その最右翼であつたヤンが，相当の不満と，義憤をもつて，過去の栄光を語る時，おのれの一門の自慢話と，過ぎし年月の勇壮果敢さを以て，当世風の堕落にいどもうとしたのは当然であつたかも知れない．

自分も，その父も，そして，また，昔の人々がそうであつた如く，遠い国への遠征や，貢税取りや，捕虜の獲得の如き仕事を物語ることによつて，もう既にそれの行われなくなつた ——— ひいては，既に自分が過去の不用な人間になつた ——— 時代への，やり場のない怒りと悲しみがヤンの物語には燃えていたものと思わ

れる．

このヤンの気慨のようなものに，年代記者は心から同調していたもののように思われる．当世風の不始末の記事に及ぶと，ヤン亡き後の記事には，世間の物語として，年代記者は，必ず良き時代の勇壮さを昔話として織り込むからなのである．事実また，そう言う世直し的な気慨にみちた昔物語が，その時代には世間一般に多く好み伝えられていたのかも知れない．賢明な年代記者はそれを見落さなかつたのであろう．そして，その様な昔話を年代記者はうまく書きとめて行つた．

ヤンの死後二十二年目の記事，即ち1128(6636)年の項にポロツクのログヴォロドの孫たちと，ヤロスラフの孫たちとの間の血統的な敵意を説明するために用いられた昔話もその一つである．ラヴレンチーやトロイツキ年代記には次のように書かれている．

сказаша ведущии, преже: яко Роговолоду держащю и владеющю и княжащю Полотьскую землю, а Володимеру сущю Новегороде детьску сущю еще и погану, и бе у него Добрына воевода, и храбор и наряден мужь, и сь посла к Роговолоду и проси у него дщере за Володимера. Он же рече дъщери своей: "хощеши ли за Володимера?" Она же рече : "не хочю розути робичича, но Ярополка хочю". Бе бо Роговолод перешел из заморья, имеяше волость свою Потеск. Слышав же Володимер, разгневася о той речи, оже рече: "не хочю я за робичича"; пожалися Добрына и исполнися ярости, и поемша вои идоша на Полтеск и победиста Роговолода. Рогъволод же вбеже в город, и приступивъше к городу, и взяша город, и самого яша, и жену его и дщерь его; и Добрына поноси ему и дщери его, нарек ей робичица, и повеле Володимер быти с нею пред

отцем ея и матерью. Потом отца ея уби, а саму поя жене, и нарекоша ей имя Гориславa; и роди Изяслава. Поя же пакы ины жены многы, и нача ей негодовати. Неколи же ему пришедшю к ней и уснувшю, хоте и зарезати ножем; и ключися ему убудитися, и я ю за руку. Она же рече: "сжалилася бях, зане отца моего уби и землю его полони, мене делл; и се ныне не любиши мене и с младенцем сим." И повеле ею устроитися во всю тварь царьскую, якоже в день посяга ея, и сести на постели светле в храмине, да пришед потнеть ю. Она же тако створи, и давши мечь сынови своему Изяславу в руку нагу, и рече: "яко внидеть ти отець, рци выступя: отче еда един мнишися ходя?" Володимер же рече: "а хто тя мнел сде?" и поверг мечь свой, и созва боляры, и поведа им. Они же рекоша: "уже не убий ея детяти деля сего, но въздвигни отчину ея и дай ей сыном". Володимер же устрои город, и да има, и нарече имя городу тому Изяславль. И оттоле мечь взимають Роговоложи внуци противу Ярославлим внуком.

『物識りたちは言つた．以前，ロゴヴォロドがポロチエスクの国を治め支配し公としてあつた時，また，ヴォロジメルが，ノヴゴロドにいて，幼少であり，いまだ異教徒であつた時，彼には軍司令のドーブルナがいた．しかして（ドーブルナは）勇敢で優秀な家臣であつた．しかしてこれ（ドーブルナ）は，ロゴヴォロドのもとに使者をおくり，彼の娘をヴォロジメルのために（妻として）乞うた．ところで彼は，おのれの娘に言つた．『ヴォロジメルに（嫁ぐを）欲するや？』と．そこで彼女は言つた．『奴隷の

子のはき物をぬがせることは欲しない．然し，ヤロポルクを望む』と．というのは，ロゴヴォロドは海の向うから移り来たつていたもので，ポロチエスクのおのれの権力を持つていたからである．ところでヴォロジメルは聞き知つて，（彼女が）言つた『奴隷の子には嫁ぎたくない』という言葉に立腹した．ドーブルナは，不満やる方なく，怒りにみちた．しかして，軍勢をととのえ，ポロチエスクへ進攻した．（二人は）ロゴヴォロドを破つた．ところでロゴヴォロドは，町の中へ逃げこみ，しかして，（人々は）町に攻め来たり，町を，（彼）自身をも，彼の妻をも，彼の娘をも捕えた．しかしてドーブルナは彼（ヴォロジメル）のところへ奴隷の子と言つたその娘を連れ来たつた．しかして，彼女の父及び母の前で彼女と共にあるようにヴォロジメルに命じた．その後，彼女の父を殺し，彼女自身を妻にとつた．しかして（人々は）彼女の名をゴリスラヴァと呼んだ．しかして（彼女は）イジヤスラフを生んだ．ところが再び別の多くの妻を（彼は）めとつた．しかして彼女は不満になりはじめた．　ところで，或る時，彼が彼女のところへ来たつて，寝入つた時，（彼女は）刀で彼を斬ろうと思つた．しかして，彼は偶然覚ざめ，しかして彼女の片手をつかんだ．そこで彼女は言つた．『（我は）悲しんでいた．というのは（汝は）我故に我が父を殺し，しかして，見よ，今は（汝は）我を愛していないではないか．この幼き児があるのに』と．しかして，（ヴォロジメルは）彼女の結婚の日の如くに，あらゆる皇帝流の装飾を装おうように命じ，しかして部屋の中の美しい寝床に坐するように（彼女に）命じた．（おのれが）来たつて，彼女を殺さんがためであつた．そこで彼女は，そのようになした．しかして，おのれの息子のイジヤスラフに裸のまゝの剣を手に渡し，しかして言つた．『汝の父が入つて来たら，進み出て言え．父よ，一人で行動しようと考えているか？』と．そこでヴォロジメルは言つた．『ところで誰が此処で汝を（殺そうと）思うか？』と．

しかして，おのれの剣を取りおとし，しかして貴族たちを呼びあつめた．しかして彼等に物語つた．そこで彼等は言つた．『この故に，もう，彼女の子供を殺すな．しかして，彼女の領地を再興し，おのれの息子と共に彼女に与えよ』と．そこでヴォロジメルは町をととのえ，しかして，二人に与えた．しかして，その町の名をイジヤスラヴリと言つた．しかして，このことから，ロゴヴォロドの孫たちはヤロスラフの孫たちに対して剣を取つているのである』

この様に十二世紀初頭に物識の人々に語られていた昔話は，それよりも二十数年前にヤンが年代記者に物語つたと思われるものとは，その物語性の成長度において，既に大きく変つていた．年代記者が，このヴォロジメルのりやく奪的な結婚をドーブルナの助力によつて成し得た直接の記事は，おそらく，ヤンの口に依つたか，そうでなければ，もつと古い時代の物語であつた筈である．この古い物語の方を直接に記事として書き込んだのは，各年代記における『過ぎし年月の物語』の980(6488)年の項であつた．其処には，全く骨組みだけの形で，次のように読まれるにすぎない．(ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー各年代記)

В лето 6488.
Приде Володимер с Варяги Новугороду, и рече посадником Ярополчим: "идете к брату моему и рцете ему: Володимер ти иде на тя, пристраивайся противу биться". И седе в Новегороде, и посла ко Рогъволоду Полотьску, глаголя: "хочю поняти дъчерь собе жене". Он же рече дъчери своей: "хочеши ли за Володимера?" она же рече: "не хочю розути робичича, но Ярополка хочю". Бе бо Рогъволод пришел из заморья, имяше власть свою в Полотьске, а Тур Турове, от него же и

Туровци прозвашася. И придоша отроци Володимерови, и поведаша ему всю речь Рогънедину, дъчери Рогъволожь, князя Полотьскаго; Володимер же собра вои многи, Варяги и Словени, Чюдь и Кривичи, и поиде на Рогъволода. В се же время хотяху Рогънедь вести за Ярополка; и приде Володимер на Полотеск, и уби Рогъволода и сына его два, и дъчерь его поя жене, и поиде на Ярополка.

『6488(980)年.

ヴオロジメルはヴアリヤギと共にノヴゴロドに来たつこ.しかして,ヤロポルクの代官に言つた.『我が兄弟のところに行き,彼に言え.ヴオロジメルが汝に向つて進攻した.抗して戦うために準備せよと』と.しかして(彼は)ノヴゴロドに坐した.しかして,ポロチエスクのログヴオロドに使者をおくり,言つた.『汝の娘をおのれの妻にとろうと欲する』と.彼(ログヴオロド)はそこでおのれの娘に言つた.『ヴオロジメルに(嫁ぐことを)欲するや』と.ところで彼女は言つた.『奴隷の子の履物を脱がしたくはない.ヤロポルクを欲する』と.というのは,ログヴオロドは海の彼方から到来していて,ポロチスクにおいておのれの権力を持つていたからである.しかして,トゥールはトゥーロフにおいて.ところで彼からトゥーロフ人たちがその名をえた.しかして,ヴオロジメルの下級従士たちが来たり,彼(ヴオロジメル)に,ポロチエスクの公ログヴオロドの娘であるログネダの総ての言葉を伝えた.そこでヴオロジメルは多くの軍勢ヴアリヤギ及びスロヴエネ,チユージ及びクリヴイチを集め,しかしてログヴオロドを進攻した』.

この記事に就ては,他の諸々のロシアの年代記の文章を既に『古代ロシア研究』才六号において総て紹介しておいた.

この古い記事から，既に十二世紀の初頭には，先にあげたような詳しく面白い物語が巷に成長して拡がつていたことが推察される．然も，その新しい巷間の物語には，ドーブルイニヤ，（ドーブルイナ）≪Добрыня≫ ≪Добрына≫の助力と協力の物語が強く表面に押し出されてしまつている．

何故であるか．

我々は再びロシアのブイリーナに立ちもどつて，それが好んで登場させる同名の英雄ドーブルニヤ≪Добрыня≫の姿に，注目してみなければならない．ブイリーナのにない手であつた巷間の庶民や農民のイメージが，同名の英雄を通じて如何に色濃く年代記の物語にも持ち込まれているか或はその反対に年代記の物語がブイリーナにどれほど流れ込んでいるかが分かると思うからである．

ドーブルイニヤに関するブイリーナは実に多数にのぼつて既に集録されている．然し，ここでは，それらをまとめて取りあげて見よう．それだけで話は充分だと思うからである．ブイリーナのドーブルニヤはその公ヴラジミルに戦いの功績と獲物を総てささげている．公はそれに酒宴を催してむくいるのであつた．年代記ではコザリ≪Козарь≫，即ち，ハザール人≪хазар≫に嘗つて貢税をささげていたのに，ヴオロジメルの頃から，今度は逆に，ハザール人に貢税を納めさせるようになつていた．ドーブルニヤというブイリーナの主人公の戦い――多くは蛇を中心とする怪物たちを相手にした――が，成功を納めてヴラジミル公に幸いを数多くもたらすという話の筋は，全く年代記と相通じているではないか．筆者の集録したブイリーナの数の中には見出されなかつたが，1950年版リハチヨフ≪Лихачев≫の『過ぎし年月の物語』序文では，ドーブルニヤをブイリーナではヴラジミルのオイ≪племянник≫としたものがあると伝えている．もし，そうだとすれば，年代記では，ドーブルニヤは，ヴオロジメルの伯父

とされているから，その血縁関係にまで類似点が見出されると言えるであろう．

年代記における『過ぎし年月の物語』は，このように，古いブイリーナと呼応した物語を，数多く記事として組み入れていた．

然し，『過ぎし年月の物語』の種々の記事の源には，ブイリーナ以外の多くの古い口碑や伝承詩があつたこともまた事実である．（ビザンチンから持ちこまれた文献が大きな一つの源であつたことを除いて）ブイリーナ以外の古いロシアの文字以前の伝承物語のうち，では次に，源をつとめたものは，何であつただろうか．

— E —

歴史を物語つた口頭伝承作品の中で，ブイリーナ以外に，もう一つ，親兵団の中に伝えられて愛好された伝承詩が，『過ぎし年月の物語』の中には反映されていると考えられる．

ロシアの公≪князь≫たちを取りまいていた親兵団或は高級従士団≪дружина≫は，本来，その任務が軍事行動であつただけに，過ぎし日々の先祖や英雄たちの軍事的な功績のほまれを，おそらく，どの社会層にもまして尊重し，念頭に詳しく保有しつづけていたにちがいない．親兵団たちの保有しつづけていたその伝承物語は，同時にまた，彼等の行動や道徳の規範をなしていたことであろう．その規範によつて，彼等は公を中心とした支配階級を形成していたと思われる．『過ぎし年月の物語』にはその間の事情が美しく反映した個所がある．　即ち，各年代記における955(6463)年の項の後半である．ラヴレンチーその他の年代記には次の様に読まれる．（古代ロシア研究；才五号；p．32～p．35参照）．

В лето 6463.

. . . . . Живяше же Ольга с сыном своим Свя-

тославом, и учашеть и мати крестится, и не бре-
жаше того ни во уши приимати; но аще кто хотяше
крестится, не браняху, но ругахуся тому.....
..... Ольга часто глаголашеть: "аз, сыну
мой, Бога познах и радуюся; аще ты познаеши, и
радоватися почнешь". Он же не внимаше того, гла-
голя: "како аз хочю ин закон прияти? а дружина
сему смеятися начнуть". Она же рече ему: "аще
ты крестишися, вси имуть тоже створити". Он же
не послуша матере, творяше норовы погань-
ския, ...

『6463(955)年.

.....ところで，オリガはおのれの息子のスヴィヤトスラフと共に暮しており，しかして彼に母は洗礼をうけることを教えた．しかして（彼は）そのことを気にもかけず，耳に入れようともしなかつた．しかして，もしもだれかが洗礼を受けようと欲するものがあれば（人々は）妨害しなかつたが，その人を嘲笑したものであつた．.....オリガはしばしばかく言つていたものである．『我が児よ．我は神を知つて悦んでいる．もしも汝が（神を）知れば，（汝は）悦ぶことになろう』と．ところで，彼はそれを聞かずに言つた．『どうして我のみが異国のおきてをうけ入れられようか．そうすれば，親兵団はこのことを嘲るであろう』と．ところで，彼女は彼に言つた．『もしも，汝が洗礼を受けるならば，すべてのものが同じようになすであろう』と．彼は母のいうことを聞かず，異教のならわしを行つていた』．

ノヴゴロド第一年代記その他にも，大体同じ様な文章がみとめられる．

スヴィヤトスラフはおのれを取りまく親兵団の保有する古い伝統を破ることができなかつた．むしろ，親兵団の保有する武勇一

本の半ば原始的で素朴な武者風習の前で文弱に流れることを避けたかつたのであろう．反対から言えば，その母オリガが女帝であつたからこそ，彼女だけが，まだこの古い時代にキリスト教を摂取することを許されたのかも知れない．だから，この場合の親兵団には，おそらく，非常に古い武勇伝の多くが，（いまだ文字のほとんどない時代であつたために）口碑として伝えられていたにちがいない．

その様な，文字及びキリスト教の摂取以前の古いルシ≪Русь≫の英雄伝承の内容を『過ぎし年月の物語』はその内容に数多く反映しているはずである．前述したツアリゴーロド（コンスタンチノープル）遠征の物語 —— アスコリド≪Аскольд≫，ジール≪Дир≫，オレグ≪Олег≫，イゴリ≪Игорь≫，スヴィヤトスラフ≪Святослав≫などの —— は，ブイリーナよりも，或は親兵団英雄物語に近いものであつたかも知れない．ブイリーナの方が，むしろ，その親兵団英雄物語から庶民の側へ持ち出されて創られたものと言つてもよいであろう．先には引用しなかつたものの中から，この種のものであると思われる年代記の記事を取りあげておこう．ラヴレンチー年代記をはじめとする種々の年代記に，912（6420）年の項として，その中程に次の様な一節が読みとられるのである．（古代ロシア研究；才三号；p.52～p.55.参照）

И приспе осень, и помяну Олег конь свой, иже бе поставил кормити, не сведа на нь. Бе бо преже въпрошал волъхвов кудесник: "от чего ми есть умьрети?" И рече ему один кудесник: "княже! конь, его же любиши и ездиши на нем, от того ти умрети". Олег же приим в уме, си рече: "николи же всяду на конь, ни вижю его боле того"; и повеле кормити и и не водити его к нему, и пребыв неколко лет не дея его, дондеже и на Грекы иде. И пришедшю ему к Киеву, и пребысть 4 лета,

на 5 лето помяну конь свой, от него же бяху рекли волъстви умрети Ольгови, и призва старейшину конюхом, ркя: "кде есть конь мой, его же бех поставил кормити и блюсти его?" Он же рече: "умерл есть". Олег же посмеяся и укори кудесника, ркя: "то ть неправо молвять волъсви, но все то лъжа есть; конь умерл, а я жив". И повеле оседлати конь: "да ть вижю кости его". И приеха на место, идеже бяху лежаще кости его голы и лоб гол; и слез с коня, посмеяся ркя: "от сего ли лъба смерть мне взяти?" и въступи ногою на лоб; и выникнучи змея, и уклюну и в ногу, и с того разболевся умьре. И плакашася по нем вси людие плачем великом, и несоша и, и погребоша и на горе, иже глаголеться Щековица; есть же могила его до сего дни, словеть могила Олгова.

『しかして秋が来た．しかしてオレグは，それに乗らずに飼育させておいたおのれの馬を思い出した．（オレグは）占やよう術を行うものたちに聞いて見たことがあつた．『何がもとで我は死ぬことになるか？』と．しかして彼に一人のよう術師が言つた．『公よ．馬である．それを汝が愛し，それを乗り廻している．その（馬の）ために，汝は死ぬことになつている』と．オレグは心にとめて，独り言を言つた．『決して（その）馬には乗るまい．これ以上，それを見るまい』と．しかして，それを飼育し，それを彼らのもとに遠れ来たらないように命じ，しかしてグレキに行くまでそれに触れずに数年すごした．しかして彼がキエフに（帰り）来たつたとき，四年間（そのままに）過し，五年目に，それによつてオレグが死ぬことになつていると占師たちが言つたこと

のあるおのれの馬をおもい出した．しかして馬丁たちの長を呼びよせて言つた．『我が馬はどこにいるか．それを飼育し，それを世話するように（我は）命じておいたが』と．彼は言つた．『死んでしまつた』と．オレグは笑い，よう術師を非難して言つた．『それは占師たちが正しくないことを言つているのであつて，すべて，これはうそである．馬は死んでしまつたが，我は生きているではないか』と．しかして馬にくらを置くように命じた．『その（馬の）骨を見ようではないか』．しかして，その（馬の）むきだしの骨と，むきだしの頭蓋骨が横たわつていた場所に乗り来たつた．しかして馬から降りて，笑いながら言つた．『この頭蓋骨のために我が死を受けるというのであるか？』と．しかして足で頭蓋骨を踏んだ．しかして蛇が出て来て彼の足をかんだ．しかして，それがもとで病みつき，死んだ．しかして，すべての人々は彼を悼んで激しく泣き，彼を運んでシチエコヴイツアと呼ばれる山に彼を葬つた．今日に至るまでも彼の墓があり，オレグの墓と称せられている』．

ところが，この記事をなした物語にも，既にバリアントがその頃存在していたことを思わせる証拠がある．この記事が，はめ込まれている912(6420)年から丁度十年後即ち922(6430)年の項まで時代をさげて，ノヴゴーロド第一年代記は，次の様に伝えているのである．ギリシア遠征より戦利品をもつて父のもとに帰るイゴリを述べた個所である．（この記事は他の年代記の何処にも見当らない）

Прииде Олег к Кыеву и ко Игорю, несыи злато и паволокы и вино и овощь. И прозваша и Олга вещии; и бяху людие погани и невегласи. Иде Олег к Новугороду, и оттуда в Ладогу. Друзии же сказають, яко идущю ему за море, и уклюну змиа в ногу, и с того умре; есть могыла его в Ладозе.

『オレグはキエフへ，イゴリのもとに（帰り）来たつた．黄金及び絹及びブドー酒及び果実をもつて．しかして（人々は）オレグを賢明なものと呼んだ．しかして人々は異教徒であり，文盲であつた．オレグはノヴゴロドに進み，しかして其処からラドガに（進んだ）．他の者たちの語るところによれば，彼が海の彼方へ進んでいた時，彼の足を蛇がかみ，しかして，そのために（彼は）死んだ．彼の墓はラドガにある』．

おそらく，これは，ラドガ≪Ладога≫という土地に本来伝えられていた英雄伝説であつたかも知れない．その土地にある古い塚にまつわる話であつたにちがいない．

この様な霧の彼方にその出所が埋没してしまいそうな古い古い伝説ではなくて，もう少し，新しく，もう少し，親兵団的生活を直接，にじみ出させた物語がある筈である．ブイリーナにも，公≪князь≫をとりまく，英雄主人公たちが，遠征から立ち戻つては公の催す酒宴で自慢話をし，功績を誇る物語が数多くあつたのだから，それに似た親兵団の生活があり，その伝承が生まれ，そして，年代記に反映しない筈はないと思われるからである．ブイリーナの公が常にウラジーミル≪Владимир≫であつたことに暗示をおいて，年代記では同名のヴオロジメル≪Володимер≫に就ての記事中から，そのようなものを求めてみるがよい．ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー各年代記の996(6504)年の項の後半には，次の様に，勇士の集う公の酒宴の模様が反映されている．（その他の総ての年代記のこの項に関する記事は「古代ロシア研究」才六号及び七号に全部を集録しておいた）．

В лето 6504.

....., и створи праздник велик, варя 300 провaро меду, и съзываше боляры своя, и посадникы, старейшины по всем градом, и люди многы, и раздая убогым 300 гривен. .....

.....повеле всякому нищему и убогому приходити на двор княжь и взимати всяку потребу, питье и яденье, и от скотьниць кунами. Устрои же и се, рек: "яко немощнии и болнии не могуть долезти двора моего". Повеле пристроити кола; въскладше хлебы, мяса, рыбы, овощь разколичный, мед в бчелках, а в других квас, возити по городу, въпрашающим: "кде болнии и нищь, не могы ходити?" тем раздаваху на потребу. Се же паки творяше людем своим по вся неделя, устави на дворе гридьнице пир творити и приходити боляром, и гридем, и съцьскым, и нарочитым мужем, при князи и без князя: бываше множьство от мяс, от скота и от зверины, бяше по изобилью от всего. Егда же подъпьяхуться, начьняхуть роптати на князя, глаголюще: "зло есть нашим головам! да нам ясти деревяными лъжицами, а не сребряными". Се слышав Володимер, повеле исковати лжице сребряны ясти дружине, рек сице: "яко сребром и златом не имам налезти дружины, а дружиною налезу сребро и злато, якоже дед мой и отець мой доискася дружиною злата и сребра". Бе бо Володимер любя дружину, и с ними думая о строи земленем, и о ратех, и утсаве земленем,.....

『6504(996)年・

・・・・・・・・・・・・しかして大いなる祭典を行い，蜜酒三百プロヴロを沸かした．すべての町々に及んでおのれの貴族たち，しかして代官たち，長老たち，及び多くの人々を召集し，貧しき者た

ちに三百グリヴナづつを分け与えた．・・・・・・・・・（彼は）あらゆる乞食及び貧しきものに命じ，公の屋敷に来たらしめ，あらゆる必要なるもの，飲み物及び食べ物を，しかして，金蔵から金銭でも受け取らしめた．ところで，この様に定めて，（彼は）言つた．『力なく，しかして病気のものは我が屋敷まで這い来たることはできない』と．しかして彼は荷馬車を準備するように命じた．パン，肉，魚，種々の果物，たるに入れた蜜酒，また別のたるに(入れた）クワスを積みあげて，町中を引き廻すように命じ，尋ねさせた．『歩くことのできない病人や乞食は何処にいるか？』と．それら（のものたち）に必要に応じて分け与えた．ところで，また，このことを一週間中おのれの家臣たちに行つた．屋敷の従士集会場に酒宴を行うように定め，貴族たちにしかして衛兵たちにも，百人頭にも，身分高き家臣たちにも来たるように —— 公のいる時及び公の不在の時も —— 定めた．家畜の，及び野獣の肉が多くあつた．あらゆる材料からのものがあふれるばかりであつた．ところで（人々が）充分飲んだ時（彼等は）公に対して不平を言いはじめて，言つた．『我々の頭には災難があるぞ．我々は木製のサジで食うので，銀製のではないからである』と．ヴオロジメルはこれを聞いて，親兵団の食べるべき銀のサジを鋳造するように命じた．（彼は）かく言つた．『銀と黄金を以て親兵団を（我々は）手に入れることはないであろうが，親兵団によつて（我は）銀と黄金を手に入れよう．我が祖父及び我が父が親兵団によつて黄金と銀を獲た如く』と．というのは，ヴオロジメルは，親兵団を愛し，彼等と共に国の建て方について，及び戦いについて，及び国の法規についても，合議していたからである』．

半ば武骨で，半ばお人好しで，然しあくまでも豪気な英雄の大盤振舞いではないか．ブイリーナの英雄たちの総元締めに想定されて，あくまでも英雄たちにさゝえつゞけられていたヴラジーミルは，ひとたび，ブイリーナの庶民的世界から，親兵団の武者た

ちの手に転ずる時，たちまちにして，これほどの豪気な，積極的な英雄君主に変ぼうするのであつた．そして，この物語の源をなしたものは，ブイリーナではなくて，一段と格調の高い，親兵団のもつ英雄叙事詩であつたと推察されるのである．勿論，ブイリーナ以外に現在，それらの高級な親兵叙事詩のようなものは，残念ながら，ほとんど残つていない．かすかに一つだけ残存し得た『イーゴリ遠征物語』は，然し，不幸なことにまだまだ後世のもので，ロシアの文明のあけぼのを歌うほど古いものではなかつた．古く『過ぎし年月の物語』がその記事の源や下敷になし得たような親兵団の英雄叙事は，むしろ，当の『過ぎし年月の物語』の中に組み込まれて埋没してしまつた形においてしか我々は探り出すことができないのである．おそらく，盛んに年代記が書かれた頃，特に十二世紀には，それらの記録と並んで，その源や下敷になつていた口碑伝承も同時に並列的に存在していたと思われる．たしかに，それを証拠立てるような文献がある．ペテルブルグで1894年に出された『古代ロシア教会教訓文学文献』≪Памятники древнерусской церковно-учительной литературы≫ p. 167 に引用された十二世紀の作家キリール・トゥーロフスキー≪Кирилл Туровский≫の言葉である．リハチョフもそれを引用している．

即ちキリールは当時の古代ロシア語で次の様に述べている．

.... яко же историци и ветиа, рекше летописци и песнотворци, приклоняють своа слухы в бывшая между царей рати и ополченна, да украсять словесы слышащая и възвеличать крепко мужествовавшая по своемь цари, и не давших в брани плещи врагом, и тех славяще похвалами венчають; колми паче нам лепо есть и хвалу к хвалу приложити и храбрым и великымь воеводам божиимь.....

『歴史家として，雄辯家も，年代記者及び詩人と言われ，曾つて帝王たちの間にあつた戰いや攻撃におのれの耳をそばだて，聞いたことどもを言葉でかざり，おのれの帝王のために立派に戰つたものたちや戰いにおいて敵に息つく暇もあたえなかつたものたちをほめ上げ，彼等をたたえて賞讃に浴せしめるのである．だからその様に我々もまた，神の勇敢で偉大な軍司令たちを賞讃に賞讃をついでたたえるべきである』．

ところで『曾つて帝王たちの間にあつた戰いや攻撃におのれの耳をそばだて，聞いたことどもを言葉でかざつた』詩人たちの作品は，そのまゝ，口碑の世界にもちこまれて，まざまざと人の心に生きつづけ，事あるごとに人々の行動や判断のさゝえになつたことであろう．そして重大事には常にそれが反ずうされて来たものと思われる．その様な昔話の一節を引用するなり，或はその物語の，ほんの概略を持ち出して見るだけで，もう，人々は，その小さな引用者が其処で言おうとすることを充分に察知できるような，精神の共通場に引き入れられた．その彼等の精神の共通の広場は，数多かつた（と思われる）昔話であつたにちがいない．

この，昔話の一片を通じて，精神の共通の広場へ相手を引入れ，同族意識を高め伝来の規範を示し，そのことによつて多くの効果をあげた例が，事件としても，表現手段としても，『過ぎし年月の物語』には，随所にそれが発見されるのである．いかに昔話が人の心に巨大な機能をもつて生きつゞけていたかを証明し得るものの一つであろう．例えば，その一例を此処で述べてみることにすれば，1097（6605）年の項の冒頭から三分の一ほどさがつた所に，次の様な記事がみられる．（ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチー，等各年代記）

Наутриа же хотящим чрез Днепр поити на Святополка, Святополк же хоте побегнути из Киева;
не даша ему Кыяне, но послаша Всеволожю и митрополита

Николу к Володимеру, глаголюще: "молимся, княже, тобе и братома твоима, не мозете погубити Русьскые земли; аще бо възмете рать межю собою, погании имуть радоватися и возмуть землю нашю, иже беша стяжали отци ваши и деди ваши, трудом великим и храбрьством побарающе по Русьскей земли, ины земли приискываху; а вы хочете погубити землю Русьску". Всеволожая же и митрополит придоста к Володимеру, и молистася ему, и поведаста молбу Кыяве, яко творити мир, и блюсти земле Русьские, и брань имети с погаными. Се слышав Володимер, росплакавъся и рече: "по истине отци наши и деди наши сблюли землю Русьскую, а мы хочем погубити", и преклонися на молбу кгянинину,.....

『翌朝，（人々が）ドニエプル（河）を渡つてスヴイヤトポルクを（攻めようと）欲した時，スヴイヤトポルクの方はキエフから逃げようと欲した．（人々は）彼に（そう）させずにフセヴオロド夫人及び府主教ニコラをヴオロジメルのもとにつかわして，言つた．『公よ，（我々は）汝及び汝の（二人の）兄弟に懇願するものである．（汝らは）ルシの国を亡ぼしてはいけない．というのは，もしも，汝らが互いの間に戦いを起すならば，異教徒たちは喜ぶであろうし，我々の国を取るであろう．その国たるや，汝等の父たち及び汝等の祖父たちが，大いなる労苦及び勇気を以て，ルシの国のために働きつゞけて獲得したものではないか．しかるに汝等はルシの国を亡ぼそうとしている』と．フセヴオロド夫人及び府主教（の二人）はヴオロジメルのところに来たり，しかして彼に懇願し，キエフ人たちの願いを物語つた．和平を講じ，ルシの国を守り，しかして異教徒たちと戦うようにと．ヴオロジメ

ルはこれを聞いて，泣き出して言つた．『本当に，我々の父たち及び我々の祖父たちはルシの国を守つたのに，我々は亡ぼそうとしている』と．しかして（フセヴオロド）公夫人の願いに（耳を）かたむけた・・・』

此処には，キエフ人たちの間，公夫人や府主教，そしてヴオロジメル公の間にも，共に感動を呼ぶにふさわしい祖国と父祖たちの栄光の物語が秘められていたことであろう．しかも，それが一朝事ある時の規範をもなしていたことが此処に明瞭に読み取られるではないか．おそらく，こゝに秘められた昔物語は，ブイリーナのような庶民的なものよりも，もつと質の高い，格調の高いものであつたにちがいない．そして，その物語が，民族統一の理念と重ねられていたことも推測されるところである．

生き生きと伝えられていたような，こんな昔語りの，特に規範性の強いものと，英雄性の強いものが，初期の年代記，特に『過ぎし年月の物語』には，まぶしい程に照り映えていると思わなければならないであろう．言い替えれば，ロシアの歴史の夜明けは，その様な，伝承の中の規範性と英雄性の強い詩の反映によつて書きはじめられた．そして，その様な規範性や英雄性への讃美が，その夜明けの時代の公たちの描写の中に鮮やかに読み取られるのである．即ち，その意味では，オレグ≪Олег≫，イゴリ≪Игорь≫，オリガ≪Ольга≫，スヴイヤトスラフ≪Святослав≫，ヴオロジメル≪Володимер≫などという初期の公たちの姿は，年代記が書きはじめられた十一世紀から十二世紀の頃の各社会層を通じての理想像であり規範像であつたとも言えるであろう．

反対に，その他の当世風な公たちは，それらの規範的理想像に常に照らされて，年代記の中へ批判的に織り込まれて行つたのであろう．年代記者たちの側から言えば，そのことが同時に，教会の宗教活動にもおとらない教訓垂範活動ででもあつた．年代記記述や写本造りが聖なる仕事とされた理由の一斑は此処にもあつた

と思わなければなるまい．

『過ぎし年月の物語』は，ネストルの書いたものとしては1110（6618）年の項で終っているが，この『物語』をとじる年の少し前，即ち，1097（6605）年頃の項は，今のべて来た英雄性と規範性を眼目にしたためにその記述が最高調に達して熱を帯びたのであろう．何故なら記述の対象になつた人物たちは，いまだ生存し，社会に機能していたからである．

むしろ，その英雄性と規範性を表面に押し立てゝ，その上に，新しいキリスト教の正義を重ねて，以て，半ばは警世と，半ばは文字使用階級への教訓との書にしようとしたのが『過ぎし年月の物語』であつたと思われる．ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー等の各年代記には見られないが，ノヴゴロド才一年代記の冒頭の序文には，鮮かにそのことが書きとめられている．即ち，上記三つの年代記には何も書きとめられていない年号6362年，即ち西暦854年の項からノヴゴロド才一年代記は書きはじめられるが，その直前に次の様に読まれる．

Мы же паки на последование возвратимъся, глаголюще сице о начале Русьсия земля и о князех, како откуду быша. Вас молю, стадо христово, с любовию приклоните уши ваши разумно: како быша древнии князи и мужие их, и како отбараху Руския земле, и ины страны придаху под ся; теи бо князи не збираху многа имения, ни творимых вир, ни продаж въскладаху люди; но оже будяше правая вира, а ту возмя, даяше дружине на оружье. А дружина его кормяхуся, воююще ины страны и бьющеся и ркуще: "братие, потягнем по своем князе и по Руской земле";

『ところで再び我々は義の話に戻ろう．ルシの国のはじめに就

て，しかして公たちがどこから来たかということについて物語ろう．汝等，キリストに牧される群よ．（我は）懇願する．汝等の耳を愛を以て賢く傾けよ．古の公たち及びその家臣たちが如何にあつたか．如何にルシの国が敵に対していたか，しかして，他の国々をいかにおのれの下に統一していつたかについて．というのは，それらの公たちは，多くの財物を集めはしなかつたし，罰金もかけなかつたし，人々に税をもかけなかつたのである．然し，正当なる罰金を求めるべきは取り，親兵団に武器代として与えた．しかしてその親兵団は育てられ，他の国々を戦いとり，辛労し，こう言つていたのであつた．『兄弟たちよ，おのれの公とルシの国のために貢献しよう』と』．

この様に古い，文字のない時代のロシアの物語は，勿論，先進文明国の記録などから借りて来る訳に欠ゆかなかつた．言い伝えの中から意図した垂訓の目的に少しでもなかつたものを汲み上げて来るより方法がない．種々の口碑から汲み上げて，その意図にかなつた物語を構成しながら，年代記者は，その物語の周囲に，先進国（ビザンチン）の記録や物語，或は聖書の物語，そしてまた，より多くは，汲みもれたり，意図とは正反対であつたりした伝承作品を組み込んで行つたように思われる．

—※—

年代記者は遠い昔の出来事を言い伝えだけによつて年代記に書き込んだのではない．その最も古い部分は，既に『古代ロシア研究』才一号以下で出典が明らかにされたように，ビザンチンの記録を充分手がかりにしていた．然し，『過ぎし年月の物語』においては，その様な古い出来事だけに問題をしぼりつづけることを許さないものがある．というのは，当時，生きていた人々の心に，まざまざと残りつづけていた新しい出来事の記憶をも手がかりに，

まだ冷めやらぬ種々の出来事を，その価値判断に熱つぽい情熱を傾けて書きこんだのであつたからである．過去を書いたのではなくて，当時の現代を過去に映し過去を現代に映して書いたのだと言えるかも知れない．まだ記憶に生々しい昨日の出来事のようなものが書きとられた時はなおさらのことであつた．年代記者はその記事を，過去の出来事としてよりも，その当時の同時代人たち及び未来の子孫たちへの鏡として考えた．書きあげられた公や戦士の記事を同時代人たち及び未来の子孫たちが高く評価しつゝおのれを律するものであることを期待した．もつと正確に言うならば，公や戦士という支配者たちに，かくあつてほしいという願いがこめられていた．同時代人たちや未来の子孫たちが，公や戦士の行動をおのれの手本として評価し得るような，そういう行動を公たちに年代記者は期待したのである．おおいなる『名誉』≪честь≫と『栄光』≪слава≫にふさわしく，且つその栄光を一層おおいならしめる行動を暗黙のうちに年代記者は求めていた．その理念にかなうものこそが，年代記に書きしるさるべきものに他ならなかつた．名誉と栄光を獲るためのたたかいは，多くは公と戦士の司るところであり，或は時に名もなき兵卒の参与するところであつた．その様な戦いに関与した時にのみ，宗教界の僧たちの名も大きく書きとめられ得た．むしろ，年代記者を含む僧たちは，その名誉と栄光の戦いの勝利を祈念し，後世に伝え，且つ，民衆と共にその戦士たちに讃美の花吹雪を撒くべき立場にあつた．

名もなき一介の戦士が栄誉の鏡として，年代記に書きとめられ，この祝福の花吹雪を受けることは，それほど多くはなかつたけれども，却つて，その様な折には，年代記者の筆は，その熱つぽさを増すのであつた．数少いその様な例は，だから，民族全体に華々しく伝えられた説話からの汲み取りなどではなくて，むしろ，まだまだ冷めやらずに記憶されたつい昨日の出来事であつたにち

がいない．人の口の端にはのぼつていても，英雄詩や説話の世界には入らないであろうし，いづれは消え去つて行くべき栄ある業跡であつただろう．年代記者はその業跡の本質を見落しはしなかつた．一介の戦士の記録は，その様にして年代記に書きとめられた．その数少い例から一つだけ次の様な記事を此処にとりあげておこう．イパーチー年代記の既に時代は相当さがつてからの項であるが，6769年の記事の一節に，一人の名もなきリヤヒ人の活躍を書きとめた記事がある．

Некто же от Ляхов, не боярин, ни доброго роду, но прост сый человек, ни в доспесе, за одиним мятлем со сулицею, защитився отчаяньем аки твердым щитом, створи дело памяти достойно, потече противу Татарину: како стекася с ним, тако уби Татарина, олъны другий Татарин со заду притече и потя Ляха, ту и убьен бысть Лях.

『リヤヒ人の或る一人が，貴族でもなく良き一門の出身者でもなく，普通の人間でありながら，具足もつけず，マントを着ただけで槍をもつて，決死の勇気を固い盾としてよろい，記念するにふさわしい行いをなした．タタールに向つて，突進したのである．行き合いざまにタタールを殺した．ところが別のタタールが背後から迫りこのリヤフ人を打つた．しかして，其処で，このリヤフ人は殺されたのである』

また，この記事から二十一年後，即ち6890年の項にも，今度は一人の貴族の息子の場合をとりあげて書きとめているのである．

それらは，共に，『記念するにふさわしい行いをなした』≪створи дело памяти достойно≫ ≪створиста дело достйно памяти≫からであると書かれている．即ち，年代記に書きとめて，その功をたたえ，以て現代及び未来の人の規範にすべきものと考えられたからなのである．それこそ，年代

記記述の理念の最大の要素なのであつた．年代記が戦いの栄光を賞讃しつづけ，教会の僧の手によつて書かれながら，巨大な戦記文学の集大成であつた理由は此処にあつた．以て範とすべき戦いの栄誉が，この様に最高の位置にかかげられた以上，年代記者たちがそれにつらいて関連性のある，がいせんの歌をつくり，祝賀の宴をのべたのは当然であつた．そして，それらの，がいせんのほめ歌や，祝賀の宴や即位の物語が，民族叙事詩からの汲み取りであつたのも当然であつたと思われる．英雄の栄光はその英雄個人のものではなかつた．ルシの国全体のものであり，ルシの国全体のために建てられた功績なのであつた．そして，それはまた人類全体に鳴りひびくべきものであるとさえ感じられていたことであろう．その戦いの栄誉が全世界にも鳴りひびくべき筈のものであるとした理念は，例えば，イパーチー年代記の6619年の項の終りに，次の様に鮮やかな反映を見せている．

Якоже и се, с божьею помощью, молитвами святыя Богородица и святых ангел, възвратишася Русьстии князи въсвояси, с славою великою, к своим людем; и ко всим странам далним, рекуще к Греком, и Угром, и Ляхом, и Чехом, дондеже и до Рима пройде, на славу Богу, всегда и ныня и присно во векы, аминь.

『しかして，また，神の助けと，聖母及び聖なる天使たちの祈りにより，ロシアの公たちは偉大なる栄光を以ておのれの国民たちのもとへ，家郷へ戻つた．しかして，総ての遠い国々，グレキにも，ウグリにも，リヤヒにも，チエヒにも，ローマに至るまでも，神の栄光とともに語りつがれた．常に，今もまた永遠にわたつて．アーメン』

これは，ドン地方へのヴラジミル・モノマハ≪Владимир Мономах≫の遠征からの帰還の記述である．勝利のがいせん記

事である．

年代記が口をそろえて，このヴラジミルに全世界的栄光をみつめているのは面白い．

例えば，ラヴレンチー年代記を見ると，ヴラジミルの死を記述した個所の終りに，次の様な文章がみとめられる．6633年の項の冒頭である．

В лето 6633,
Индикта третьего лета.
Преставися благоверный и великый князь Русский Володимер, сын благоверна отца Всеволода, украшеный добрыми нравы, прослувый в победах, его имене трепетаху вся страны, и по всем землям изиде слух его: понеже убо он всею душею възлюби Бога.

『6633年（1125年）
才三年のインジクト．

信仰厚いルシの大公ヴオロジメル，信仰厚い父フセヴオロドの息子が逝去した．良き心を以てかざられ，勝利の名は高かつた．彼の名は萬国をふるえさせ，彼の噂はあらゆる国々に伝えられた．彼はその全霊を以て神を愛したからである』

萬国にその名をとどろかせるという讃美の言葉は，百年以上も経過して後もなお，同じように用いられた．例えばアレクサンドル・ネフスキー一代記《Житие Александра Невского》にも，彼の『聖なる名はラテンの国々の総てにおいて，フブジの海やアララトの山やヴアリヤギの海の両側にまで，かの偉大なるローマにさえも至るまできこえたのである』《прослыся имя святаго во всех странах латынских и до моря Хупужьского и гор Араратских и обону страну моря Варяжскаго, даже и до самого того Вели—

кагo Рима≫と書かれている．このことは，この讃美手法の出処を考えさせるに充分である．年代記者の発明を一代記≪Житие≫の作者が真似たのであろうか．それとも，両方が共に真似るべき何等かの古いよりどころがあつたのだろうか．或は，自然に生まれた最大級讃美の型なのであろうか．

この讃美形式の発想法は，決して年代記者や一代記の作者の発想によるものではないことを，年代記そのものが証明している．年代記の中で，直接話法の形で書きとられている対話や，諸人物の言葉を注意して拾いあげて見るとよい．おそらくは，其処には生きた古代ロシア語の喋り言葉がかくされているであろうし，それ以上に，公や親兵団や貴族たちの，むきだしの理念や発想法が求められ得る筈である．全世界に名をとゞろかすという最大級の讃美や，或はその讃美に価する行動を取ろうとする決意の発想法が，それら直接話法による記録の中には充分よみとられるのである．

例えば，イジヤスラフ≪Изяслав≫が自分の親兵団に語りかける6660年の項の一節（イパーチー年代記）にもそれがうかがわれる．

Изяслав же рече дружине своей: "братья и дружино! Бог всегда Рускыя земле и Руских сынов в безчестьи не положил есть, на всих местех честь свою взимали суть; ныне же, братье, ревнумы тому вси, у сих землям и перед чюжими языки дай ны Бог честь свою взяти"; и то рек Изяслав дружине своей, потъче всими полкы у брод.

『ところでイジヤスラフはおのれの親兵団に言つた．「兄弟たちよ，しかして親兵団よ！神は常にルシの国とルシの子等をば不名誉の中に置き給うことはなかつた．あらゆる場所において，（人々は）おのれの名誉をえて来た．ところで，このたびは，兄

弟たちよ，こぞりて，これに見習わん．これらの国々にありても，また他国の民族の前にても，神よ，我らに名誉をえさせ給え」と．イジヤスラフは，おのれの親兵団にかく言つて，すべての軍勢にて浅瀬を突進した』．

過ぎし時代の栄光に見習い，自分たちが，これより行わんとする行動が，他国までも鳴りひびき，ほめたゝえられんことを期して，公が親兵団に語りかけ，武勇を鼓舞した生々しい言葉である．他国にまで喧伝されるとまではゆかないにしても，ロシアの全土にその栄光をたたえられんことを期した喋り言葉は，年代記の各所に散見される．とすれば，ロシアの国を超えて，他国にまでその栄光がたゝえられんとするという最大級の讃辞は，もともと，年代記者や一代記作家の発想になるものではなかつた．もつと直接的な，戦陣における公や親兵団や勇士たちの合言葉にも似た，やりとりの言葉であつた．年代記者は，むしろ，それらの言葉を直接話法によつて書き取りながら，時にはそれと同じ発想法の讃辞を栄えある公たちへのほめ言葉にも利用したのであつた．

公や親兵団が戦陣におけるおのれの武勇鼓舞のための合言葉にもなし得た発想だとしたら，その背後には，他国における祖国の栄光 —— 嘗つての古い時代の外国遠征の勝利 —— の記憶が彼等の間には生々しく記憶されていたにちがいない．『過ぎし年月の物語』の古い部分が伝えている幾多の遠征物語は，十二世紀には，まだ，鮮かに武人たちの間に，守られるべき過去の栄光の物語として躍動し，作用しつゞけていた証拠である．そして，それらの遠征物語が，その遠征先を文化の高い強い国にすればするほど，その勇壮さと，その勝利の栄光は大きく作用した．その意味で，『過ぎし年月の物語』には，ツアリグラード（ビザンチン）遠征物語だけがことのほか，幾度も大きくとりあげられたのであつただろう．

その様に考えて来ると，ロシアの中だけの世界から出て全世界

を見渡し，ロシア民族を広く世界の諸国の中に位置づけ，然も，その際に英雄的な軍事功績を関心の中心においたのが『過ぎし年月の物語』であつたということになる．これこそ，そのまゝでロシアの英雄叙事ではなかつたのか．ブイリーナを始めとする多くの軍事的説話のふん囲気と『過ぎし年月の物語』のそれとが分ち難く類似しているのは，まさに当然のことであつたと言わなければならない．歴史書であるよりも，むしろより多くは文学作品であつた．

勿論年代記者が伝承叙事詩の領域の中にとゞまつていたというわけではない．年代記者はその領域から一歩を進めて，それぞれの人物たちの内面に立ち入り，その賢明さを掘り起し，精神の豊かさを描き出すことにやぶさかではなかつた．特に戦争ではなくて文化史的な大きな仕事をした公たちの記述にも情熱をそゝいだ．文字や宗教を中心とする文明の開き手には，戦功におとらない讃辞を呈したのであつた．それらは民間伝承物にも少なく，また親兵団的説話にも少い題材なのであつたにもかゝわらずある．その巾の広さが年代記者にもたらした最大の文学態度が批判的記述というものであつた．その態度は本来説話や叙事詩にはないものであつた．

むしろ，言うべくば，年代記者は，自己の考えるロシアの文明史にとつて，肯定的な良い面だけを口碑から汲みとつたのである．その基盤の上に彼（等）は一貫した自己の民族の歴史を組み立てようとしたのであつた．

— 3 —

『過ぎし年月の物語』が歴史記録よりも，むしろ文学作品の側へ傾けば傾くほど，それが書かれている古代ロシア語の問題は一層大きく取りあげられなければならないであろう．これほどまで

に壮大で，集約的で且つ表現性の豊かな作品がものにされた以上，これが一応完成されたと見られる十一世紀及び十二世紀の時代の古代ロシア語の表現力をふり返つて見る必要が大いにあると思われる．その頃の文明全体に就ても無視できないであろう．

特に『過ぎし年月の物語』の多くの記述が，民間口碑からの取材であり汲み取りであつたとすれば，話は当時の口碑文学の言葉の成長度から，先づ始められなければならないであろう．

九世紀及び十世紀には東スラヴには既に階級社会が生まれ，太古より存在した口碑文学も非常に発達したもののようである．またそれが最大の精神文化のさゝえでもあつた．キリスト教が文字と共に輸入され，ビザンチン文化を受け入れる十一世紀には，既にその口碑文学を織り成す古代ロシア語は，それを受け入れるにふさわしい表現力をもつていた．文字を創つた当初から，その文字を以て書かれた古代ロシア語は既に充分抽象的な概念の表現に耐えるほどのものに成長していた．キリスト教思想の伝導にも充分その言葉のみで足り，祈禱文にも，勤行言葉にも，讃歌にも，あるいはまた，歴史事件の記録にも，バイブルを始めとする様々の宗教書の翻訳にも，充分事欠かないほどの表現力を既に古代ロシア語は持ち得ていた．　その様に用いられた古代ロシア語の精華を生んだものこそ，当時の発達した口碑文学の言葉そのものであつた．十一世紀当時の口碑文学の言葉が，ほとんどそのまゝ文字をえて書き言葉へ移行したものと考えてよいであろう．キーエフ・ペチエールスキー聖僧伝が文字を以て書きとめられ，聖僧伝集にまとめられるまでには幾十年も語りつがれていたし，ボリス《Борис》とグレブ《Глеб》の殺される物語 —— 年代記では6523年のヴラジミルの死の直後に書きとられている ——も，此処に書き取られる以前には永く伝承されて来た口頭の物語がその骨組みをなしていた筈である．今まで数多く引用して来た記事からそれぞれ直接明瞭な伝承のまゝの生の言葉を抜き出して見るた

めにも，その前にこのボリスとグレブの殺害される物語を，まず引用しておく必要がありそうである．ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー，フレブニツキーの年代記の『過ぎし年月の物語』には，6523年の項として，ボリスとグレブとズヴィヤトスラフの殺害が続いて記述されている．その記述の全体については，各年代記の異文の総てをも含めて『古代ロシア研究』オ七号において検討を終っているので，その記事から，キリスト教輸入後につけ加えられたと思われる説明や粉飾や正当づけらしきものを取り除いて見て，その残りの骨組みだけを此処に取り出してみよう．

Святополк же седе Кыеве по отци своем, и съзва Кыяне, и нача даяти им именье; они же приимаху, и не бе сердце их с пим, яко братья их беша с Борисом. Борису же възвратившюся с вои, не обретшю Печенег, весть приде к нему; отець ти умерел". И плакася по отци велми, любим бо бе отцем своим паче всех; и ста на Люте пришед. Реша же ему дружина отня: "се дружина у тобе отьня и вои; поиди, сяди Кыеве на столе отци"; он же рече: "не буди мне възняти рукы на брата своего старейшаго; аще и отець ми умре, то сь ми буди в отца место". И се слышавше вои, разидошася от него, Борис же стояше с отрокы своими. Святополк же..... посылая к Борису, глаголаше: "яко с тобою хочю любовь имети, и к отню придам ти". А льстя под ним, како бы и погубити. Святополк же приде почью Вышегороду, отай призва Путшю и Вышегородьскые боляръце, и рече им: "приятете ли ми всем сердцем?" Рече же Путьша с Вышегородьци: "можем главы своя сложити за тя". Он же рече им: "не поведуче никому же, шедше

убийте брата моего Бориса". Они же вскоре обещашася ему се створити..... Послании же придоша на Льто ночью, и подъступиша ближе, ... И се нападоша акы зверье дивии около шатра, и насунуша и копьи, и прободоша Бориса, и слугу его, падша на нем, и прободоша с ним; бе бо любим Борисом. Бяше отрок сь родом сын Угъреск, именем Георги, его же любяше повелику Борис, бе бо възложил на нь гривну злату велику, в ней же предъстояше пред ним; избиша же и ины отрокы Борисовы многы. Георгеви же сему не могуще вборзе сняти гривны с шие, усекнуша главу его, и тако сняша; темже послеже не обретоша тела сего в трупии. Бориса же убивше оканьнии, увертевше в шатер, взложивше на кола, повезоша и, и еще дышющю ему. Уведевше же се оканьный Святополк, яко еще дышеть, посла два Варяга прикончат его; онема же пришедшема и видившема, яко еще жив есть, един ею извлек мечь, проньзе и к сердце. И тако скончася блаженый Борис,.....

『スヴィヤトポルクはおのれの父の死後，キエフに坐した．しかして，キエフの人々を召集した．しかして彼等に財産を与えはじめた．彼等は受け取つていたが，その心は彼のもとにはなかつた．何となれば彼等の兄弟たちがボリスと共にいたからである．ボリスの方はペチエネギに出合うこともなく軍勢と共に戻つて来た時，知らせが彼のもとについた．『汝の父が死んだ』と．しかして（彼は）父を思つて大いに泣いた．というのは誰にもましておのれの父に愛されていたからである．しかして来たりて，リト

（河）のほとりにとどまつた．ところで父の親兵団が彼に言つた．『見よ，汝には父の親兵団と軍勢がある．進め．キエフの父の王座に坐せ』と．ところが彼は言つた．『我はおのれの年長の兄に手をあげるべきではない．もしも，我が父が死んだのなら，この者（兄）が我がために父の位置につくべきなのだ』と．しかして，軍勢はこれを聞いて彼から離れ散つた．そこでボリスはおのれの下級従士たちと共にとゞまつた．ところで，スヴイヤトポルクは・・・・・・・・・・ボリスのもとへ使者をたてて言つた．『汝と愛情をもつてゆきたいものと思う．しかして汝に父の（財産）を加え与へよう』と．彼をなきものにしようとして，偽つたのである．ところでスヴイヤトポルクは夜中にヴイシエゴロドに来たり，ひそかにブトシヤ及びヴイシエゴロドの貴族たちを呼び招き，しかして彼等に言つた．『我を衷心から受け入れるか？』と．ブトシヤはヴイシエゴロドの人々と共に言つた．『汝のためにおのれの首をおとしてもよい』と．そこで彼は彼等に言つた．『誰にも言うな．行きて我が弟ボリスを殺せ』と．ところで彼等はすぐにそれを為すことを彼に誓つた・・・・・・．ところで，使者たちは夜中にリト（河）に至り，しかして，より近くしのびよつた・・・しかして，見よ，天幕の周囲の野獣の如く襲つた．しかしてそれに槍を突き込み，しかしてボリスを突きさした．しかして，彼の上に倒れた従者をも，彼と共に突きさした．（この者は）ボリスに愛されていたからである．この下級従士は，ウゴル人の子でゲオルギーという名であつた．彼をボリスは大いに愛していた．（ボリスは）彼に大きな金の首輪をかけてやつていた．それをつけて彼は彼（ボリス）の前に立つていたのであつた．（人々は）ボリスの他の多くの下級従士たちをも殺した．このゲオルギーの首から首輪をただちに取りはずすことができなかつたので，彼の首を斬りおとし，しかして取つた．その後，そのために彼の死体は（多くの）死体の中に見出されなかつた．ところで呪われたる

者たちはボリスを殺し，天幕にくるみ，荷馬車に乗せて，彼を運び出した．しかして彼は，いまだ呼吸していたのである．ところで彼がまだ呼吸しているのを呪われたるスヴィヤトポルクが見てとり，二人のヴァリヤギを彼を絶命させるためにつかわした．（二人が）到着してまだ生きているのを見た時，そのうちの一人が剣を抜いてそれを心臓に突きさした．しかして，かくして至福なるボリスは逝つた・……』

同じように，グレブの殺害の物語についても，後代に付加されたと思われるキリスト教臭い所を除いて次に引用してみよう．

Святополк же оканьный помысли в собе, рек: "се убих Бориса; како бы убити Глеба?" И прием помысл....., с лестью посла к Глебу, глаголя сице: "поиди вборзе, отець тя зоветь, не здравить бо велим". Глеб же вборзе всед на коне, с малою дружиною поиде, бе бо послушлив отцю. И пришедшю ему на Волгу, на поли потчеся конь в рве, и наломи ему ногу мало; и приде Смоленьску, и поиде от Смоленьска яко зреемо, и ста на Змядине в насаде. В се же время пришла бе весть к Ярославу от Передъславы от отни смерти, и посла Ярослав к Глебу, глаголя: "не ходи, отець ти умерл, а брат ти убьен от Святополка". Се слыша-в Глеб възпи велми с слезами, плачася по отци, паче же по брате, и нача молитися с лезами.... ..... се внезапу придоша послании от Святополка на погубленье Глебу, и ту абье послании яша корабль Глебов, и обнажиша оружье. Отроци Глебови уныша. Оканьный же посланый Горясер повеле вборзе зарезати Глеб; повар же Глебов, именем Торчин, вынез ножь, зареза Глеба.....

Онем же пришедшим, и поведаша Святополку, "яко створихом поведеная тобою.....
Глебу же убьену бывшю и повержену на брезе межи двема колодама,.....

『ところで，呪われたスヴイヤトポルクは心の中で企んで言つた．『見よ．ボリスを殺した．いかにしてグレブを殺すべきか』と．しかして，悪計をとり・・・・・・，あざむいてグレブに使者をおくりかく言つた．『速かに来たれ．父が汝を呼んでいる．というのは（父は）非常に健康を害しているからである』と．ところでグレブは急いで馬に乗り，少数の親兵団と共に出かけた．というのは（彼は）父に従順だつたからである．しかして，彼がヴオルガ（河）に来たつた時，野において馬が濠につまづいた．しかして少し彼の足をいためた．しかしてスモレンスクに至り，しかして，スモレンスクから余り遠くない所へ進み，河舟でスミヤジナ（河）にとゞまつた．この時にペレドスラヴアからヤロスラフのもとへ父の死についての知らせが来ていた．しかしてヤロスラフはグレブのもとに使者をおくつて言つた．『行くな．汝の父は死んだ．一方，汝の兄はスヴイヤトポルクのために殺された』と．グレブはこれを聞いて涙を流して非常に大声をあげ，父を思つて泣き，またそれ以上に兄を思つて（泣いた）．しかして涙と共に祈りはじめた・・・・・・・・見よ．グレブを殺すためにスヴイヤトポルクによつて使わされた使者たちが急に到着した．しかして，そこで，すぐに，使者たちはグレブの舟を占領し，しかして武器を抜き放つた．グレブの下級従士たちは悲しんだ．ところで呪われた使者ゴリヤセルは速かにグレブを斬るように命じた．ところでグレブの料理人の，トルテンという名の（男が）刀を抜いてグレブを切つた・・・・・・・・彼等が帰り来たつた時，（彼等は）スヴイヤトポルクにつたえた．『汝によつて命ぜられたことを（我々は）なした』と・・・・・・・・・ところで，グレブが殺され，しか

して，岸の上の二つの丸太の間に投ぜられた時……』

『過ぎし年月の物語』にみられるこの二つの骨組みの言葉を，ほとんど口頭伝承そのまゝの生のもの，特に対話的な部分をそのようなものと考えて検討してみるがよい．如何に，十一世紀初頭の語り物の言葉が既に充分の成長をとげていたかゞ分るであろう．例えば，ボリスに向つて，残された父の親兵団が言う言葉，それに対してボリスが答える言葉，ボリスに向つてスヴイヤトポルクが偽つて語る言葉，ヤロスラフがグレブに忠告する言葉等々には，既に民俗学的伝承の表現力を遙かに超えたものがある．

年代記や聖者伝に文字を以て書きとめられる一方では，まだまだこの表現豊かな口頭物語の文化は口から耳へと当時併存的に生きつゞけていた．書きとめることは教会を中心とする僧やその仲間たちの仕事であつた一方には，宮廷や親兵団や貴族たちの中では，書きとめ，或は読むことよりも，むしろ；まだまだ，口頭による英雄物語の高い言語芸術が愛好しつゞけられていた．この口頭の言語芸術は或るものは多く年代記に書きとめられ，また或るものは武人や貴族やまたは文化度の高い人々の愛好にささえられて伝えられ，創作され書きとめられその後も永く生きつゞけていた．年代記には書きとめられなかつたその様な口頭芸術の金字塔は，『イーゴリ遠征物語』であつたと言える．

『イーゴリ遠征物語』の様な，おそらくは，公の親兵団内で特殊な才能人によつて創られ，同じ親兵団の中に於て愛好されて伝えられた叙事詩は非常に数多く存在したであろう．それらのほとんど全部はその原型を現在に伝えられないまゝ消滅してしまつた．公を中心とする親兵団の言語芸術が伝承を強くさゝえる庶民層に流れ出ざなかつたからなのかも知れない．その様な消滅以前の作品が『過ぎし年月の物語』には，前述したようにビザンチン（ツアリグラード）への遠征，オレグの物語，オリガ女帝の物語（「古代ロシア研究」才五号に総ての年代記のこの項の記事を集録し

た）などとして書きとられたものだと考えられる．だから，それらの多くの文章は，当時の芸術的な口頭語であつて，決して特殊な書き言葉などではなかつたと思われる．勿論，その芸術的な口頭語は庶民の日常語であつた訳ではなく，多くは宮廷の武人や親兵団員，下級従士たちの質の高い演説語に近いものを，物語の語り手や詠誦者が芸術的に加工した言葉であつたにちがいない．だから，年代記の『過ぎし年月の物語』の本当の意味での用語の基礎は，演説雄辯の言葉に根ざしたものであつた．開戦を控えて行われる公たちの演説の言葉，或は戦争処理のために派遣される使者の口上，或は町の広場で行われる民会，裁判，或は宮廷の祝賀の席での演説，或は公の即位や追放等の政治的演出での言葉などが，文字輸入以前に，既に『過ぎし年月の物語』を充分さゝえ得るほどに発達していたと言えるのである．十一世紀から十二世紀の古代ロシアの社会が，その様な雄辯芸術を生み出し，むしろ必要とし，発展させたのであつた．それは多くのロシア古代社会史家の説明するところである．面白いことに，この様な雄辯芸術は十四世紀には衰退しはじめ，『イーゴリ遠征物語』が発見される以前，即ち十七世紀に入る頃には完全にロシアから嘗つての姿を消し去つてしまつていたのである．文字が用いはじめられた十一世紀頃から十二世紀末にかけてが，だから，雄辯的作品の最も盛んな書き取りの時期であり，ひいては年代記文学の古事の肉付固定の時期であつた．

ともあれ，各年代記の『過ぎし年月の物語』の中でも，特におのれの軍勢を前にして，戦争突入直前或は戦野において公たちがその勇を鼓した直接話法の言葉は，その簡素な形態にもかゝわらず，形象的であり，内容豊かであり，力にあふれ，活達であるが，決して年代記者の勝手な創作などではない．文字以前の高いロシアの口頭文学の水準を直接に示すものなのである．

戦争突入直前或は戦野での公たちが軍勢に勇を鼓するために叫

んだ言葉を年代記から取りあげて見るがよい．その類似性が何よりも；以上述べて来たことを雄弁に物語つているであろう．

年代の古い順に挙げてみよう．

(イ) ——6479年—— и рече Святослав воем своим: ≪уже нам сде пасти; потягнем мужьски, братья и дружино!≫

『しかしてスヴイヤトスラフはおのれの軍勢に言つた．『すでに我々はこゝに倒れるべきである．勇敢に進もう．兄弟たちおよび親兵団よ』と．

(ロ) ——6479年—— и рече Святослав:≪уже нам некамо ся дети, волею и неволею стати противу: да не посрамим земле Русские, но ляжем костьми, мертвыи бо срама не имам, аще ли побегнем, срам имам, ни имам убежати; но станем крепко, аз же пред вами поиду, аще моя глава ляжет, то промыслите собою≫;

『しかしてスヴイヤトスラフは言つた．『すでに我らには身をかくすべき所はない．欲しようが欲しまいが迎え撃たねばならない．ルシの国をはずかしめないようにしよう．しかし骨を横たえよう．死ねば（我々は）辱しめを受けないからである．もしも（我々が）逃げるならば辱しめを受けるであろう．（我々は）逃げずにはげしく戦おう．我は汝らにさきがけて進もう．もし我が頭が倒れたら，自分たちで考えよ』と．

(ハ) ——6551年—— И рече Вышата . . . рек ≪аще жив буду, то с ним, аще погыну, то с дружиною≫

『しかしてヴイシヤタは言つた．……言つた．『もしも（我が）生きているとすれば，彼等と共であろうし，もし倒れるのなら，親兵団と共にであろう』と．

(二)—(a)——6577年—— и рече (Святослав) дружине своей: ≪потягнем, уже нам нелзе камо ся дети≫,……(ラヴレンチー，イパーチー計トロイツキー各年代記)

(二)—(б)——6576年—— рече (Святослав) к дружине своей: ≪потягнем, братие; уже нам не лзе камо ся дети≫;……(ソフイア才一年代記)

(二)—(в)—— 6576年—— и рече (Святослав) дружине своей: ≪потягнем, братиа! уже нам нельзе камо ся дети≫,……(ニコン年代記)

(二)—(г)——6576年—— рече(Святослав) дружине своей: ≪потягнем, братии; уже нам нелзе дети камо ся≫.……(トヴエーリ年代記)

(二)—(д)——6576年—— и рече(Святослав) дружине; ≪потягнем, уже нам не камо ся дети≫.……(リヴオフ年代記)

(二)—(е)——6576年—— и рече (Святослав) дружине: ≪потягнем, братие, уже ся нам нелзе камо ся дети≫.……(チポクラフ年代記)

以下他の諸年代記省略．

『しかしてスヴイヤトスラフは（おのれの）親兵団に（向つて）

言つた．『進もう．（兄弟）（たち）（よ）．既に我々には身をかくすべき所はない』と．

(ホ)—(a)——6611年—≪поидита на Половци, да любо будем живи, любо мертви≫

……（ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー各年代記）

『ポロヴエツに進攻しよう．或は生き，或は死ぬもよし』

(ホ)—(б)——6611年—≪братие, велико добро сътвори—ши Русской земле≫……≪поидите с нами на Половци, да любо будем живи, или главы своя сложим за Русскую землю≫

……（ニコン年代記）

『兄弟たちよ，ルシの国に大いなる善を為せ．』……『我等と共にポロヴエツに進攻せよ．或は生き，或はおのれの頭をルシの国のために横たえん．』

(ホ)—(в)——6611年—≪поидете на Половцы, да любо живи будем, любо мертви≫ ……（リヴオフ年代記）

『ポロヴエツに進攻しよう．或は生き，或は死ぬもよし』

(ホ)—(г)——6611年—≪брате, се аз готов есмь≫……≪много блага створиши Русстеи земли≫……≪поидета на Половци, и покладем главы по Русстеи земли≫

……（モスコ年代記）

『兄弟よ，見よ，我は用意してあり．』……『多くのさいわいをルシの国になせ．』……『ポロヴエツに進攻しよう．しかしてルシの国のために頭を横たえよう』

親兵団や軍勢を前にして公たちの勇を鼓する言葉のうち，主要なものを上にあげて見たが，それらの調子の類似性は誰の眼にも疑いを持たせないであろう．『進もう』≪потянем≫は(イ)，(ニ)—(а)，(ニ)—(б)，(ニ)—(в)，(ニ)—(г)，(ニ)—(д)，(ニ)—(е)，において同一語であり，(イ)の『すでに我々は此処に倒れるべきである』≪уже нам сде пасти≫という発想は，(ロ)の『既に我らには身を置くべき所はない』≪уже нам некамо ся дети≫へ容易に発展すべきものであろうし，然もこの(ロ)と同一語として，(ニ)—(а)にнекамоをнелзе камоに置き替えただけのもの≪уже нам нелзе камо ся дети≫がみられ，それを(ニ)—(б)，(в)，が踏襲し，(ニ)—(г)は語順を狂わせて≪уже нам нелзе дети камо ся≫，(ニ)—(д)はнелзеを単にнеとしただけ，即ち実は(ロ)の場合と全く同一文に帰つて≪уже нам не камо ся дети≫となつている．ルシの国のために死のう，頭を横たえようとする表現も，死んでも生きてもとする表現も，これらの言葉の随所にみられたのである．

それらのことごとくが年代記者の創作によらない，叙事詩的口頭語であつたことは，『イーゴリ遠征物語』の用語と照し合わせてみれば，明瞭に判明するところである．例えば，先づ，(イ)における親兵団や軍勢への呼びかけの言葉『兄弟たちおよび親兵団よ』≪братья и дружино!≫は，『イーゴリ遠征物語』でイーゴリが親兵団に語りかける言葉≪Братие и дружино!≫と全く同じである．公たちの喋る言葉が同一であるのみならず，その説明的な部分，『おのれの親兵団に言つた』≪рече (к) дружине своей≫も，(イ)から(ホ)に至るまで各所にあつたが，それとても，『イーゴリはおのれの親兵団に向つて言つた』≪рече Игорь к дружине своей≫と同一である．

『おのれの頭を横たえよう』という発想及び言葉は，そのまゝ『イーゴリ遠征物語』にも≪хощу главу свою приложити≫

と見えるし，ロシアの国のために倒れるという表現もまた≪(по-легоша) за землю Русскую≫と各所に見えている．(ロ)に見える骨となつて横たわろうという発想も，『イーゴリ遠征物語』に≪посеяни костьми руских сынов≫『ロシアの子等の骨に(野は)まき散らされ』とある．

現代に伝えられているほとんど唯一の叙事詩に，これほどまでに似かよつた表現が残つている以上，『過ぎし年月の物語』が筆をとめてから後に，年代記に書き込まれて行つたこのイーゴリの事件の物語にはなおさら同様の表現がなければなるまい．叙事詩に歌われたと同じように，年代記にも，出陣まえの日蝕を不吉なる前兆とした軍勢に，イーゴリが語りかける言葉は，先づ，同じように『兄弟たちよ，しかして親兵団よ』≪братья и дружино!≫であつたではないか．(イパーチー年代記；6693年)．或はまた，敵に後を見せ，辱かしめを受けるようなことなら，死んだ方がよいとする発想の言葉も此処に≪оже ны будеть не бившися возворотитися, то сором ны будеть пущей смерти≫『もし戦わずして我等戻るべきなら，我等にとつて死より悪しき汚辱である』と見え，『進もう』という言葉も同一の≪потягнем≫を用いて，『兄弟たちよ，これを我々は求めていたのである．さて進もう』≪братья! сего есмы искале, а потягнем≫とある．このイパーチー年代記だけを取りあげても6693年の項の中のイーゴリ公の軍勢に対する言葉には盛んに類似表現を見出し得るのである．

即ち

≪да недивно есть разумеющи, братья, умрети≫

『まさしく兄弟たちよ，死のうと考えいるのはおどろくべきことではない』

≪оже побегнем, утечем сами, ･･･ ･･но или умрем, или живи будем на едином месте≫

『もしも自から逃げ走るならば……いや，一緒に死ぬか，一緒に生きようではないか』

イーゴリ公の悲報を聞いたスヴイヤトスラフが先づ口にする言葉もまた同様に

≪о люба моя братья и сынове и муже земле Руское!≫

『親愛なるわが兄弟たち．息子たち，ルシの国の家臣たちよ！』

であつた．

そして

≪а поеди, брате, постерези земле Руское≫

『しかして来れ，兄弟よ，ルシの国を守れ』

であつた．

総て公たちのこの生きた生の言葉は，何を示しているのか．それは演説的口頭軍事用語の高い表現力を示すものではないか．例えば親兵団や軍勢を『兄弟』と呼んで，一心同体であるべき理念と，軍勢へのいつくしみと，民族意識と，敵がい心と……等々を同時に表現し込んだのであつた．そのことによつて，たゞ，それだけの言葉にも，勇敢さへの要求と，祖国の栄光と，戦士の名誉と熱血のほとばしりとがうづまいた．『過ぎし年月の物語』が文字を得て書きはじめられる頃には，その直前まで文字をもたなかつた古代ロシア語も，既に，これほどの口頭表現力を獲得していたと断言できよう．

『過ぎし年月の物語』が素材にした筈のものが既に高い芸術的表現をものにしていたことは，公たちの，もう一つの公式用語であつた使者の口上の中にもそれをうかゞうことができる．勿論，使者たちは，書き物ではなくて，口うつしの口上でその役目を果していたのである以上，その口上の言葉は，文字以前の古代ロシア語の表現力を知る上から是非取りあげておかなければなるまい．

使者たちは，いづれの国，いづれの時代においても，すぐれて

賢明なものたちがその任務についたことであろう．特に文字の無い時代の使者においてはなおさらのことであつた．使者たちは，然し，いかに賢明であつたにしても，やはり，その口上は，あくまでも簡潔にして，然も要領を得たものでなければならなかつた筈である．その上に一定の形式のようなものが必要であつた．誤解の余地を残さない厳格さも必要であつた．文字をもたない言葉の表現力を試すことのできる最適の材料が，この様な古い時代の使者の口上であると見てよいであろう．

ロシアが文字を創る以前の古い時代の記事或は文字を用いなかつた口頭だけの使者の記事から，その例を取りあげてみるとよい．年代記者が多少手を加えたにしても，おそらくは，その簡潔さと形式の故に，それらの口上は嘗つての姿のまゝに伝えられ書きとられたと考えてよいであろう．

使者たちによつて述べられた口上の言葉は，非常に数多く年代記がこれを現代に伝えている．それら使者の口上は，その内容上，出陣の際或は開戦直前或は戦闘中に発せられた武勇鼓舞の公たちの言葉よりも，その内容は多様であり複雑である．だから，武勇鼓舞の言葉などよりもその伝統的形式性は少いかも知れない．型にはまつた言い廻しは多くないと言える．然し反対にだからこそ，使者の口上には，叙事詩的な傾向よりもより喋り言葉に近い言い廻しや用語が使用される機会もすぐれて多かつた筈である．使者の口上に托されるべき内容が複雑になればなるほど，それら口上の言葉は，ますます，当時の古代ロシア語の生きた喋り言葉に近づいていたとも考えられる．叙事詩的な言い廻しや用語からは却つてますます離れたことであろう．

文字を持たなかつた頃に，古代ロシア語がどれほどの表現力の発達を示していたかを求めるには，この使者の口上として『過ぎし年月の物語』に書きとめられたものを手がかりにするのが最上の方法であろうと思われる．

ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー各年代記における使者の口上を年代順に取りあげて見よう．

6368年，ヴァリアギを支配者として迎えに行つた折の口上

≪вся земля наша велика и обилна, а наряда в ней нет ; да поидете княжит и володети нами≫

『我々の総ての土地は広大であり豊かであるが，その中に秩序がない．我々に君臨し支配するために来たれ』……（『古代ロシア研究』オ二号参照）

既にこの口上には明らかに一つの型のようなものがうかがわれる．我等の土地は大きくて豊かであるという前段につゞいて，そのコントラストをなすような形で反対に其処には秩序がないとするこの対置的述べ方は，その後永らくひきつがれて，二段構えの述べ方を完成して行くのであつた．もう一つ，『過ぎし年月の物語』の中で，古代ロシア語のスピン動詞の使用はそれほど多くはなかつた．不定法がスピンに代つて行つたのであろうが，『何々するために』という場合だけに時折不定法ではなくてスピンが用いられた．この口上で面白いのはそのスピンは『君臨するために』≪княжит≫の方だけで，『支配する』の方は≪володети≫と不定法になつている．二段構えの述べ方が，この二つの動詞の使用法にも反映したとは考えられないであろうか．スピン動詞が造格補語を持ち得なかつたからという形式的な説明では，この口上は読み尽せたとは考えられまい．即ちこの最初に登場する口上語において，古代ロシア語の行きとゞいた技巧の程度を見ることができる．

6390年，オレグがアスコリドとジルに使者を送つた折の口上．（『古代ロシア研究』オ二号参照）

≪яко гость есмь, идем в греки от Олга и от Игоря княжича; да придета к нам к родом

своим≫

『（我々は）商人である．オレグから，しかして，公の子イゴリから，グレキへ行くところである．我々のもと，おのれの一族のもとに来たれ』

此処にも二段構えの述べ方は三回も変形されて出現している．商人である，グレキへ行くところであるとするのが一つ，オレグから，イゴリからとするのが一つ，我々のもとへ，おのれの一族のもとへとするのが一つである．

これにつぐオレグのグレキ遠征の物語はいづれまた引用して述べなければならないことがあろう．其処における種々の口上も，此処に引用することを控えよう．続くイゴリのグレキ遠征の記事もまた同様である（『古代ロシア研究』才二号才三号才四号にも既に詳しく検討された）．

6453年のオリガのもとに来たドレヴリャネの口上．

≪мужа твоего убихом, бяше бо муж твой яки волк восхищая и грабя, а наши князи добри суть,・・・・・≫

『（我々は）汝の夫を殺した．というのは，汝の夫は狼の如くりやく奪し強奪していたからである．ところで我々の公たちは善良である・・・・』

その使者にオリガが伝えさせた口上．

≪не едем на конех, ни пеши идем, но понесете ны в лодье≫

『（我々は）馬でも行かぬ．徒歩でも行かぬ．我々を舟に乗せて運べ』

オリガの使者の口上．

≪нам неволя; князь нашь убьен, а княгини наша хоче за вашь князь≫

『我々にはやむを得ない．我等の公は殺され，我々の公夫人は

汝等の公に嫁がんと欲している』

オリガの召使の再度の口上

≪да аще мя просите право, то пришлите мужа нарочиты, а в велице чти приду за вашь князь, еда не пустять мене людье Киевьстии≫

『もしも汝等がまことに我を求めるのなら，大いなる名誉のうちに汝等の公に嫁ぐように，高位の家臣を遣わせ．さもなくばキエフの人々は我を行かせないであろう』．

以上の記事に関する総ての年代記の記述の模様は『古代ロシア研究』才五号に総て引用しておいたが，総て上にあげた口上には二段構えの変形が次才に三段論法的な形へ進んで行く姿が見られるのである．既に整然とした論理追求のためにも，充分，当時の文字以前の言葉で事足りていた状態がうかがわれるのである．

町の中にとじこもつて強力に敵対する敵に使者をおくつて言わせる口上．二段構えの説得の効果を然も二度の口上で求めんとするのである．そのやりとりを此処に引用しておこう．（『古代ロシア研究』才五号にも総ての年代記のそれを引用した）．

посла ко граду глаголющи:" что хочете доседети? а вси гради ваши предашася мне, и ялися по дань, и делають нивы своя и земле своя; а вы хочете изъмерети гладом, не имучеся по дань".....

..."яко аз мьстила уже обиду своего, когда придоша Киеву, второе, и третьее, когда творих трызну мужеви своему; а уже не хощю мъщати, но хощю дань имати помалу, смирившеся с вами поиду опять"..... "ныне у вас несть меду, ни скоры, но мало у вас прошю: дайте ми двора по 3 голуби да по 3 воробьи; аз бе не хощю тяжьки дани възложити, якоже и мужь мой, сего про-

шю у вас мало, вы бо есте изънемогли в осаде;
да сего у вас прошю мала".

『・・・・・町へ（使者を）つかわして言つた．『何故，こもりつゞけようとしているのか？汝等の町々は総て我に降参した．しかして貢税に同意した．おのれの畠とおのれの土地をたがやしている．ところが汝等は貢税に同意せずにが死せんとしている』・・・・・『（汝等の使者が）キエフに来たつた時，二度目にも，三度目にも，我は既におのれの夫の恥辱に報いたのである．おのれの夫に追善供養をなした時も．しかして（我は）既に復しゆうしようとは思つていない．汝等と和睦して引き返すであろう』・・・・・『現在，汝には蜜酒も毛皮もない．しかし汝等に少し求めよう．各戸から三羽づつのハトと三羽づつの雀を我に与えよ．我は汝等に我が夫のように重い貢税を課そうとは思わない．これだけを汝等に少し求める．というのは，汝等は包囲の中で弱りきつているからである．だからこれだけを汝等に少し求めるのである』

この口上には，当時の口上の最も典型的な完成されたものがあると見てよいであろう．二段構えの述べ方が三段構えに発展し，然も，その二段と三段の構えが非常にたくみに組み合わされていることに気づくであろう．例えば，汝等の総ての町々は『我に降参した』《предашася мне》，『しかして貢税条件を受け入れた』《и ялися по дань》と二段に分けて相手の仲間の帰順を報じ，続いて『おのれの畠』《нивы своя》と『おのれの土地』《земле своя》との二つをあげて，これを平和に耕作していると此処にも二段の述べ方をする．然も，『帰順した』《предашася》ことと今は平和に耕作に従事している《делають》こととを二段に重ねる．そして，まとめれば，降参し貢税を払い，耕作に従事していると三段構えをつくり出すのである．この二段構えの積み上げによる三段構えへの移行は，その説得力を一層重厚にした

のであつた．その説得力に加えて，『貢税条件を受け入れない』≪не имети ся по дань≫，『飢えて死ぬ』≪изъмерети гладом≫のは何故なのかと，これもまた，そのおろかしさを二段に問いつめるのである．これが才一段の口上．

次に続く口上とても同じである．夫のあだを報じたのは，大別して『キエフに来た時』≪когда придоша Киеву≫と『追善供養をした時』≪когда творих трызну≫だと二つに分けて述べている．そして，キエフに来た時を，二度目，三度目と計三度に重ねているのである．≪когда придоша Киеву, второе, и третьее, когда творих трызну≫という言葉は丁度中央に≪и≫という接属詞を入れて半折しながら，二段構えの複雑な組み合わせを見せている．敵に対して，既に復しゆうずみであることを重ねて説き，充分安心させようとする効果をねらつたものと考えてよいであろう．これが才二の口上．

最後の口上も一層面白い組み立て方をなしている．即ち，汝等のもとに既に無くなつたものは『蜜酒』≪мед≫と『毛皮』≪скора≫の二つである．求める貢税はハトと雀の二種類である．そしてそのハトと雀はそれぞれ各戸から今度は三羽づつである．『汝等に少し求める』は≪мало у вас прошю≫ ≪прошю у вас мало≫，≪у вас прошю мала≫と三度繰り返される．相手方との和睦のために当方が求める貢税が如何に少いものかを説得するには非常に大きな効果があつたことであろう．そして求める物が少いのだと強調するには，それぞれその三度にわたつて理由があつた．一つはろう城したために物資が汝等に欠乏している筈だという鋭い推理を含む同情であり，一つは，当方は重い貢税を求める訳ではないという温情のみせびらかしと恩の売りつけであり，最後の一つは，ろう城による相手方のつかれと弱体化を高飛車に言つてのけて自己の優越を見せつける．その一つ一つの間に，ほんの少しの貢税を求めるだけだから城の門を開いて和睦

せよという甘言がはさみ込まれる．強圧的態度と温情を見せる甘言とを二重に重ねたのである．たしかに，相手方は，その巧妙な言葉にひっかかった．町を焼かれ全員が殺されるか捕えられてしまったのである．心にくいほどの深い読みをもった口上である．古代ロシア語よりもむしろ其処には古代スラヴ語に近い『我は』《аз》という如き単語が見られるにしても，この三つの連続する口上だけからでも，既にロシア語の口頭語の技術がどれほどまでに成長していたかがうかがえるであろう．

6476年の項の終りに，キエフの人々がスヴイヤトスラフ公に使者を立てゝ進言し説得した口上がある．（『古代ロシア研究』才五号p.46～p.47）

"ты, княже, чюжея земли ищеши и блюдеши, а своея ся охабив, малы бо нас не взяша Печенези, матерь твою и дети твоя; аще не поидеши, ни обраниши нас, да паки ны возмуть, аще ти не жаль отчины своея, ни матере стары, и детий своих". (1)

『汝は，公よ，他人の国を求め，しかして守つている．ところがおのれの（国を）かえりみない．だからペチエネギは我々，汝の母，汝の子らをもほとんど捕えんばかりであつた．もし（汝が）来たらず，我らを守らなければ，そのときは，（彼らは）再び我々をとらえるであろう．汝はおのれの祖国も，年老いている母をも，おのれの子らをも，いとおしくないのであるか』

年代記には使者を派遣した主体が公であり，その派遣先の相手もまた公に比敵するほどの身分のものであることが多いが，此処ではめずらしく，民衆代表者が自分の公に注文嘆願或は進言の形で使者を立てゝの口上が書きとられている．それだけに，この口上は，当時の都市住民の少くとも上層者たちの精一杯の言葉を知る上で面白い資料であると思われる．戦陣の功績を求め，武力侵攻だけに夢中になつている戦野の公に，故里の国をかえりみよと

いう注文は，具体的な事例を引き合いに出して，特に説得力をもたなければならなかつた．然もその説得力は上から相手を説き伏せる形のものではなく，下から嘆願調をもつべきものであつた．嘆願調の中に幾分かの非難調をも含めなければならなかつた．

他人の土地を『求め守つている』≪ищеши и блюдеши≫と二本立てで公の行動を述べあげた裏には，その行動の是認よりも批判が含まれる．その非難はおのれの国を『かえりみない』≪охабив≫という言葉で確認される．ところが，公の行動を述べ，つゞいてその行動に文句をつけるという二段構えの手法は，嘆願調を出すためには，それだけの着色が必要であつた．少くとも，批判或は非難の調子を軟らげて嘆願の印象に変えなければならない．批判や非難だけでは，下級者が上級者を説得することは困難であろう．そこらあたりの呼吸を，この口上は，心にくいばかりに心得ていた．即ち『かえり見ない』≪охабив≫は直接法動詞ではないのである．副動詞過去形を用いて，非難を軟らげ嘆願的説得への途を開いたのである．この技巧は次の文章にもみられる．即ち，公が出陣した留守中に横合いから異民族のペチエネギが『我々を』≪нас≫すんでのところで捕えんばかりであつたと公に告げる．それは半ば泣き言であり，半ば非難である．故里の町をかえり見ないことがもたらした当然の結果だと言わんばかりである．非難と泣き言とは，然し，武勇にはやる相手に無視されてしまうかも知れない．此処でも述べ方は二段構えを必要とした．『汝の母及び汝の子たちをも』≪матерь твою и дети твои≫ペチエネギはすんでのところで捕えんばかりであつたとつけ加えるのである．これでは，いかなる公も戦場から故里の町へ引き返して本来の平和な生活のいとなみの保証者に戻らなければならないであろう．口上の言葉のうち此処までは批判と嘆願をたくみに組み込んだ事実報告の形である．即ち口上の才一段である．既にこの才一段において，事実報告の中に注文や嘆願への下地は充分用意さ

れてしまつていた．二段構えとして口上の後半はその下地の上に今度は遠慮のない批判 —— むしろ脅迫にちかい —— 或は非難を重ねて相手を否応なく説得してしまう．この二段目の口上は，だから，事実報告の上に，それ以上のおそろしい仮定を設定する．その仮定設定『もしも』≪аще ≫は，これも二段構えで二度使用される：才一回目の≪аще≫は戻つて来る≪пойдеши≫，故里の町を『守る』≪обраниши≫ことがなければと二重の述べ方でつゞき，ペチエネギが我々を捕えてしまうであろうと述べる．ところが二度目の≪аще≫，には，二重の述べ方では物足りず，三重に重ねて，『祖国』≪отчина≫，『母』≪матерь≫，『子供たち』≪дети≫と，公の最も弱い心の部分を突いてしまう．口上を二段構えに分け，その才一段に報告を主体に嘆願への道をひらき，才二段で公の最も痛いところを突いている．然もその各段ごとに，二重の重ね述べをし，それぞれのしめくゝりには三段の重ね述べを持つて来るという手法である．これを聞いた公が早速戦野からキエフの町に引き返したのは当然であつたと言えよう．たとえ，文字を使用しなかつたにしても，当時の古代ロシア語の表現効果とそのための技巧がどれほど発達していたかゞうかがえる一つの実例であろう．

この使者の口上の手法が『過ぎし年月の物語』の中で最も見事に開花したのが，口上ではなくて，遺言の言葉である．6562年の項に，『ルシの大公ヤロスラフが死んだ．しかしてまだ生きている時に彼はおのれの息子たちに指図をあたえて言つた』≪Преставися великый князь Русьскый Ярослав. И еще бо живущю ему, наряди сыны своя, рек им:≫につゞく次の様な言葉である．勿論，この遺言が全く文字によらない口頭だけのものであつたとは言い難いかも知れない．然し，口頭によつた使者の口上の言葉が最も典型的に行きついた高度な成果として見落してはならないと思う．

"се аз отхожю света сего, сынове мои; имейте в собе любовь, понеже вы есте братья единого отца и матере, да аще будете в любови межю собою, Бог будеть в вас, и покорить вы противныя под вы, и будете мирно живуще; аще ли будете ненавидно живуще в распрях и которающеся, то погубнете сами и погубите землю отець своих и дед своих, иже налезоша трудом своим великым, но пребывайте мирно, послушающе брат брата. Се же поручаю в собе место стол старейшему сыну моему и брату вашему Изяславу Киев, сего послушайте, якоже послушасте мене, да то вы будеть в мене место; ....." (2)

『今，我はこの世を去るのである．我が子等よ，互に愛を持て．その故は汝等は同じ父と母より出でた兄弟たちだからである．もし，汝等が相互の間の愛の中にいるならば，神は汝等の中にいますであろう．しかして，汝等のために汝等の敵を征服し給うであろう．しかして汝等は平和に暮して行けるであろう．もしまた（汝等が）内紛の内に敵意をもつて暮し争うならば，自からも滅びるであろうし，また（汝等の父祖が）大いなる労力を以て獲たおのれの父たち及び祖父たちの国をも滅ぼすことになろう．しからずして，兄弟は兄弟にきゝ従いつゝ平和に暮せ．今，（我は）我が最年長の息子にして汝等が兄なるイジヤスラフにおのれの地位なるキエフの王座をまかせる．この兄（のいうこと）を，我（の言うこと）を聞きてあるごとくに聞け．しかして，汝等にとつて彼は我の代りとなろう・・・』

『今，我は去る』≪се аз отхожю≫，『今，（我は）まかせる』≪се же поручаю≫と大きく二段の述べ方が先づ目につくであろう．この二段の述べ方の中の才一段にも，『もしも汝等

が・・・・であるなら』≪аще будете・・・・・≫≪аще ли будете・・・・・≫と更に二重の組み立てをおこなつている．その二重の組み立ての前節は友愛の生活をすればという良き仮定である．後節は仲間割れをすればという悪しき仮定である．この対称的な仮定そのものも，前者は当然そうあるべき注文として一段構えの述べ方で『互いの間で友愛の中に暮せれば』≪мирно живуще≫とあるにすぎないが，後者の悪しき仮定は，そうあつてはいけないものとして強調すべく，二段構えを取り，『仲間割れをして憎しみながら生き』≪ненавидно живуще в распрях≫，『しかして争う』≪и которающеся≫と述べられる．然し，大切なのは，それぞれの構えによる仮定の設定ではなくて，その仮定の設定から結果されるべき事柄への教訓なのであつた．遺言者の言いたいことは，仮定の後に起るべき事柄そのものへの注意であつた．だから，『もしも』≪аще≫のみちびく仮定文の直後の言葉こそが重大である．その重大の文章は，良き仮定の場合は二段構え，悪しき仮定の場合も同じく二段構えにしてはいるが，その重ね方には深い思慮がうかゞえる．友愛の内に生きる時には，『神は汝等の中にいますであろう』≪Бог будеть в вас≫と先づ一段目にのべる．実はもうそれだけで充分な筈である．何となれば，其処から総ての幸福と善は流出する筈だし，悪は退散して，つけ込むすきは無い筈であり，万事は神の義によつて進行する筈だからである．にもかゝわらず，血生臭い戦争の明け暮れに充分対処した公が同じような将来を見通して息子たちに，もう一段重ねて，自己の総てと，去り行く者の希求の総てを托しのべた．『（神は）しかして汝に敵対するものたちを汝のもとに従わしめ給うであろう』≪и покорить вы противныя под вы≫．ヤロスラフ大公の広く高く深いえい知を示すものである．

このえい知が，二段目に，仲間割れをして息子たちが生きる折

を仮定した時，巨大な宝石の如くきらめいた．この仮定に続く文章≪то погыбнете сами и погубите землю отець своих и дед своих, иже налезоша трудом своим великым≫ は，最も心して読み取られるべきである．此処に二段構えの述べ方が二段に重ねられていることに気づくであろう．即ち，一つには，『おのれら自からが破滅するであろう』≪погыбнете сами≫であり，二つには『国を破滅させるであろう』≪погубите землю≫である．おのれら自からが破滅することはそれとしても，国を滅ぼすことの方は絶対に許すことのできさい重大なことであつた．二段の注意事項は，後段に極度の重点を置く．だから後段は更に二重の圧力を加えられる．即ち，その国とは，『おのれの父たちの』≪отець своих≫『おのれの祖父たちの』≪дед своих≫国なのである．然も『大いなる労苦によつて』≪трудом своим великым≫創られた国なのである．その労苦は決して数えあげられ，一々指摘することや分類することを許さない．総てはただただ一つの束になるべき同質の労苦であつた．父や祖父の労苦の事業には意志の分裂や違背などは絶対になかつた．その志は分ち難く一体であつた．汝等兄弟はその一体性を堅持すべきである．・・・・・それは，この『大いなるおのれの労苦』という言葉を決して複数形にしていないところに，にじみ出されている．もしも良ければ，もしも悪るければと二重に仮定して遺訓を垂れ，悪しき仮定の折にはこれだけの深く高い熱を込めたのである．そして，その熱の最高調の尖端において，『然らずして，平和に暮せ』≪но пребывайте мирно≫と，最も切実な願いを述べるのである．心にくいほどの技巧であると言わなければならない．この様に頂点まで持ち上げられた高い調子からは，次につぐべき教えは自然に流れ出し，自然に相手の心へしみ込んで深く根をその心におろすであろう．遺訓の後段は，まさにそのようなものであつた．然し，それとても，おろ

そかな言葉で組み立てられてはいない．例えば，『我が最年長の息子に』≪старейшему сыну моему≫ は，やはり二段構えで，『即ち汝等の兄イジャスラフに』≪и брату вашему Изяславу≫ とのべられるのである．自分がまかせるべき『地位』≪место≫という言葉も二度用いている．この遺訓は，全く，二段構えの巧妙な複合による最高の文章であつたとも言える．年代記者の説明文や記述文の中にあつて，群を抜いて光る一節が，実は文字と文章をあやつつていた年代記者の地の文章ではなくてむしろ『――』〃――〃印に入れられるほどの口頭語に近いものであつたことを注目すべきである．古代ロシア語は文字の助けによつてその表現力を一方的に援助されたわけではない．むしろ，自から口頭によつて開発した高度な表現を定着させ，或は有効たらしめるために文字を用いたのである．年代記者は却つてそれらの発達した口頭表現の手法と力を借りた傾向が強い．

さて，再び使者の口上の検討に話を戻してみよう．使者の口上の言葉が，上に引用したような効果的な表現手法をもつまでには，勿論，そうなるべき数多くの基盤があつた．その基盤とは，年代記にしるされている雑多な短く単純な口上である．ところが，次に引用するように，それら短く単純な口上にも，二段構え及びその巧みな組合わせ，及び三段構えの発達のもとになつた形式的なタイプがあつた．そのタイプの正体は，使者の要求や請願や伝達の事項と共に常にそのアンチテーゼが組み込まれたことなのである．一つことを伝え要求し請うに際して，使者たちの口上は常に，『もしもそうでなかつたら・・・・』というアンチテーゼの言葉を持ち出した．6572年の立派な遺言の記述以後の年代記の項に書きとられているそれらの総てを此処に取りあげて見れば，その型の共通性が判明するであろう．

6576年には先づ一つの口上とそれに対する返答が書きしるされている．その口上には

"мы уже зло створили есмы, князя своего прогнавше, а се ведеть на ны Ляхьскую землю; а поидета в град отца своего; аще ли не хочета, то нам неволя: зажегше град свой, ступим в Гречьску землю"..... (3)

『おのれの公を追い出したのは，我々が既に悪をなくしてしまつたということである．ところが，見よ，（彼は）我々に向つてリヤヒの国（の人々）をひきいて来ている．そこで（汝等は）おのれの父の町へ来たれ．もしも（汝等が来たることを）欲しないならば，我々はやむを得ない．おのれの町を焼いてグレキの国に行こう』

この口上に対する返答は

"ве послеве к брату своему; аще поидеть на вы с Ляхы губити вас, то ве противу ему ратью, не даве бо погубити града отца своего; аще ли хощеть с миром, то в мале придеть дружине"..... (4)

『（我々は）おのれの兄に人を遣わそう．もしも汝等を滅ぼすべく汝等に向つてリヤヒ人と共に進攻するのであれば，彼に対して軍勢を以て（立ち向う）であろう．（我々は）おのれの父の町を滅ぼさしめることはないであろうからである．もしも（彼が）和平を以て（来たることを）欲するならば，少数の親兵団にて来たらしむべし』

再びイジヤスラフにスヴイヤトスラフとフセヴオロドが出した使者の口上

Всеслав ти бежал, а не води Ляхов Кыеву, противна бо ти нету; аще ли хощеши гнев имети и погубити град, то веси, яко нама жаль отня стола"..... (5)

『フセスラフは逃げた．ところでリヤヒ人をキエフに連れ来た

るな．というのは汝に敵対するものはないからである．もしも，（汝が）憤りを持ち，しかして町を滅ぼそうと欲するのならば，我々（二人）には父の王座が惜しいのだということを知れ．』

これら三つの引用例におけるアンチテーゼ置き方即ち『もしも』≪аще≫という言葉の使い方を注意しよう．（3）には一回，（4）には二回，（5）には一回，必ずこの言葉によつて希望とは反対のアンチテーゼを置いて，その場合の結果を示し，そうならないようにという説得効果をあげようとしている．言うまでもなく，二段構えの原型である．

『もしも』≪аще≫という仮定のもとにアンチテーゼを置かない場合にも，二段構えの述べ方は捨てられなかつた．要求が全く一本にしぼられる場合には，却つて仮定の話など持ち出さずに，直接その要求を相手に突き立てることの方が効果的であつた．その様な単一の鋭い要求の時には，アンチテーゼの設定より，むしろ，共に同じ結果を招く筈の両面の要求を述べた．二段構えの述べ方の一番深い基底である．例えば，誰かを憎悪して殺害したいとする．その相手は敵方にかくまわれている．その男を殺せという要求と，さもなくばその男を当方に引き渡せという要求を両面作戦的に採用するのである．おそらく，この述べ方が最も基本的な素朴な形の一つの使者の口上であつたであろう．スヴイヤトポルクとヴオロジメルがオレグに出した使者の口上には，例えばそれがうかがわれる．6603年の項の終りに近い個所に見られるものである．

この様な基本線を利用し，或はそれを二段構えに組み，時には三段構えに発展させ，様々な組み込み方から説得力を強化し，或は感動的な効果をあげたのが使者口上の発達であり，年代記文章の一つのよりどころであつた．その基本線をほとんど利用し得なかつたような口上が効果を発揮しなかつたこと，即ち，相手を説得し得なかつたことも，年代記は見のがさなかつた．二段構えの

基本線をもたない口上が相手を説得し得なかつた実例が，いくつかみとめられる．その一つに，ラヴレンチー，トロイツキ，イパーチー各年代記6604年の項の一節に次のようなものがある．

И посла Олег слы свое к Изяславу, глаголя:
"иди в волость отца своего Ростову, а то есть
волость отца моего; да хочю ту седя поряд
створити со отцем твоим, се бо мя выгнал из
города отця моего; а ты ли ми зде хлеба моего
же не хощеши дати?" и не послуша Изяслав сло-
вес сих, надеяся на множьство вой.....

『しかしてオレグはおのれの使者たちをイジヤスラフのもとに派遣して言つた．『汝の父の領地であるロストフに行け．ところで，それは我が父の領地である．しかして（我は）其処に坐して汝の父と条約を結ぼうと思う．というのは，見よ，（彼が）我を我が父の町から追い出したのだからである．ところで，汝は此処において我が食糧を我に与えることを欲せぬのであるか？』と．しかして，イジヤスラフは軍勢の多数をたのんでこれらの言葉を聞かなかつた』

この同じ年の項の中には同じように効を奏しなかつた同じような口上がもう一つ書きとめられている．

И посла к нему Мьстислав сол свой из Новагорода,
глаголя: "иди из Суждаля Мурому, а чюжей волости не
седи; и аз пошлю молится с дружиною своею
к отцю своему, и смирно тя со отцем моим;
Аще и брата моего убил, то есть не дивьно,
в ратех бо и цари и мужи погыбають". Олег же
не всхоте сего, но паче помышляше и Новъгород
переяти; .....

『しかしてムスチスラフはノヴゴロドからおのれの使者を彼に

派遣して言つた．『スズダリからムロムにもどれ．しかして他人の領地に坐するな．しかして我はおのれの親兵団と共におのれの父に願いの使者をたてよう．汝を我が父と和解せしむるように．我が弟を（汝が）殺したとは言つても，それは驚くべきことではない．というのは，戦いにおいては王者たちも家臣たちもたおれるのであるから』と．ところでオレグはこれを（聞くことを）欲せず，しかもその上に，ノヴゴロドを奪い取ろうとさえたくらんでいた．』

此処には≪аще≫『もしも』という言葉で仮定を設定し二段構えの述べ方をやゝ始めようとするのだが，それは口上の要求の本筋からはずれた内容の個所であり，一つの出口だけを開いておいて，そこへ向つて人を追い込んで行こうという説得的強制効果はない．二段構えは此処では至つて不完全であり，その上に的はずれであつた．これとは全く反対に，説得される相手が感動して泣き出すほどの効果をあげた使者口上がこの年の翌年6605年の項にみられる．二段構えによる両面作戦的手法の典型の一つであろうと思われる．

И ту абье посла к давыду и к Олгови Святославичема, глаголя: "поидета к Городцю, да поправим сего зла, еже ся створи се в Русьскей земьли и в нас в братьи, оже вверже в ны ножь; да аще сего не правим, то болшее зло востенать в нас, и начнеть брат брата закалати, и погыбнеть земля Руская, и врази наши Половци пришедше возмуть землю Русьскую". Се слышав Давыд и Олег, печална быста велми и плакастася,.....

『しかして，ただちに，スヴイヤトスラフの子等ダヴイド及びオレグに使者をつかわして言つた．『ゴロジエツに行け．ルシの国及び我々兄弟の間で行われたこの悪を正そうではないか．我等

の中へ刀が突き刺されたのである．しかして，もしも，これを（我々が）正さなければ，より大きな悪が我々の中に起るであろう．兄弟が兄弟を殺しはじめ，しかしてルシの国は滅ぶであろう．しかして我等の敵ポロヴエツが来たりルシの国を奪い取るであろう』と．これを，ダヴイトとオレグは聞いて，非常に悲しみ，しかして泣いた』

見事な構成をもつた口上である．先づ二段構えの才一段は注文或は要求である．才二段は，もしそうでなければという仮定の設定と，その場合に予想される結果である．然もその各段は，それぞれにまた小さく二段構えを持つている．即ち，要求は『ゴロジエツに行く』こと丶，『悪を正す』こと丶の二つである．然も正すべきその悪とは，関係代名詞で受けて，『ルシの国』と『我々兄弟』の中に起つたものである．後段においても同じような構成を一層発展させている．即ち，もしそれを正さなければとする仮定のもとで予想されるのは，実は，『より大きな悪』≪Болшее зло≫が起るだろうということである．この予想を才一段において，才二段目ではそれを具体的に展開して見せるという二段構えである．その具体的な説明的展開は，同時にその口上のしめくくりでもあつた．そのために，相手への圧力を更に増すために，二段でもよい所を三段に重ね増して，『兄弟が殺し合う』，『ルシの国がほろびる』，『敵が国を奪う』と三要素を持ち出した．此処に見られる二段から三段への発展には，その基底に，やはり二段構えが強く働いていたことがうかがい知れる．即ち，実は三要素が述べられながら，その実，内容は二要素しか持つていないことである．兄弟の争い合いが起るだろう，ルシの国がほろぶであろうという二要素なのである．三要素に見せ，三段構えに発展させるために用いられた『敵がルシの国を奪うであろう』というのは，ルシの国がほろぶであろうということへの具体的説明にすぎない．ところが，本来，その二段であつてよい所を，三段に増し，

それぞれの三要素を独立的に見せながら，それらを『より大きな悪』という言葉で前以て言いかぶせておく手腕は実に見事であつた．その口上の言葉の手法は，当然，それを書きつけた年代記者自身の言葉使いにも影響するほどのものであつた．年代記者は，やはり，二段構えでこの口上を締めくくつたのである．『非常に悲しんだ』≪печална быста велми≫『しかして泣いた』≪и плакастася≫と．悲しみ泣いた主体が二人であり，この締めくくりの文章はだからすべて雙数形による記述である．このことを単に偶然の一致であつたと言いきれるだろうか．言葉の技巧の力が影響して記述されるべき事実まで狂わせたことはなかつただろうか．それほどまでに，この年の項の記述には，筆のさえが感じられ熱気がただようのである．おそらく『過ぎし年月の物語』中，その文学的物語性において，ヴアシリコが惨酷にも盲目にされるこの項の記述は，最大の圧巻であろう．ヴアシリコの眼をつぶして盲目にしたスヴイヤトポルクに，ヴラジミル以下二人の兄弟が厳しい罪状尋問の使者を送る口上にも，この物語全体の記述者の筆の勢いをさゝえたほどのすさまじさが感じられる．そして其処に働いた技巧は，鮮やかな二段構えの組み立てと，『もしも』≪ашe≫という言葉による両面誘導の手法であつた．その古代ロシア語の原文は後に引用することとして，日本語の意味だけを此処に述べておこう．『なんたる悪を汝はルシの国において行つたのか．しかして（何故に）汝は刀を我等に突き刺したのか．何ゆえに汝はおのれの兄弟を盲目にしたのか．もしも何等かの罪が彼にあつたとしたら，我等の前で彼を摘発し，彼の罪を証拠立て，しかして事を行うべきであつたのだ．かくなつたからには，汝がかゝることを為した原因となつた彼の罪を明らかにせよ』

これらの見事な表現力と論理性を持つた使者の口上の言葉が，年代記者の記述文にまでその勢いの影響を与えたと前に述べた．

然し，それらの口上をつなぐべき記述文が本当に年代記者のものであつたかどうかは極めて疑わしい．むしろ，それら口上の言葉の創り手と同じような人物，即ち，年代記者とは全く別の人物の文章なのではなかつたか．おそらくは，口上をも大きく含むもう一つ大きな物語手の作になるものだと思われる．年代記者はその叙事詩にも似た作品を借りて来て此処へ組み込んだもののように思われる．口上と口上との間をつなぎ，そのことによつて其処に事件を記述し，物語を組み立てた構成そのものにも，口上以外の記述文そのものにも，口上の場合とほとんど同じような二段構えの立体的組み立て，或は発展した両面記述，三段構えへの技法がみとめられるからである．その文章の質の高さが，ついに，年代記者をして，借り物であることを白状しなければならなくさせたと思われる．そうでなければ，この文学性の高い物語を終つた後，同じ年代項のまゝ，次の話に進む折に，年代記者は，『しかし，我々はおのれの（物語）に戻ろう』≪Но мы на свое възвратимся≫などとは決して言わなかつたであろう．だからこの『おのれの物語に戻ろう』という言葉以前の記述は，明らかに，別の人の芸術作品であつたにちがいない．勿論，その行間には，どれほどかの説明的な加筆や，編集操作的省略の手が年代記者によつて加えられなかつたとは言えない．然し，省略の部分はともかく，加筆的な部分は，キリスト教的内容の部分であるとわざわざ指摘しなくとも直ちに見当がつくであろう．この芸術性の香り高い物語を長いけれども次に引用しておこう．（イパーチー，ラヴレンチー，トロイツキー各年代記による）6605年（1097年）の項の前半である．

В лето 6605.

Придоша Святополк, Володимер, Давыд Игоревич, и

Василко Ростиславичь, и Давыд Святославичь, и брат его Олег, и сняшася Любячи на устроенье мира, и глаголаша к собе, рекуще: "почто губим Русьскую землю, сами на ся котору деюще?" а Половци землю нашю несуть розно, и ради суть, оже межю нами рати; да ноне отселе имемъся в едино сердце и блюдем Рускые земли, кождо да держить отчину свою; Святополк Кыев Изяславлю, Володимер Всеволожю, Давыд и Олег и Ярослав Святославлю; а им же роздаял Всеволод городы, Давыду Володимерь, Ростиславичема Перемышль Володареви, Теребовль Василкови". И на том целоваша крест, "да аще кто отселе на кого будеть, то на того будем вси и крест честный"; рекоша вси. "Да будеть на нь крест честный и вся земля Русьская", и целовавшеся поидоша всвояси. И приде Святополк с Давыдом Кыеву, и ради быша людье вси; но токмо дьявол печален бяше о любви сей. И влезе сотона в сердце некоторым мужем, и почаша глаголати к Давыдови Игоревичю, рекуще сице: "яко Володимер сложился есть с Василком на Святополка и на ти". Давыд же ем веру лживым словом, нача молвити на Василка, глаголя: "кто есть убил брата своего Ярополка? А ныне мыслить на мя и на тя, и сложился есть с Володимером; да промышляй о своей голове". Святополк же смятеся умом, река: "еда се право будеть, или лжа," не веде; и рече Святополк к Давыдови: "да аще право глаголеши, Бог ти буди послух; да аще ли завистью молвишь, Бог будеть за тем". Святополк же сжалиси по брате своем и о собе,

нача помышляти, еда се право будеть? и я веру Давыдови, и прелсти Давыд Святополка, и начаста думати о Василке. А Василко сего не ведяше и Володимер. И нача Давыд глаголати: "аще не имеве Василка, то ни тобе княженья, ни мне Володимери". И послуша его Святополк. И приде Василко в 4 ноямьбря, и перевезеся на Выдобычь, было и иде поклонится к святому Михаилу в манастырь, и ужина ту, а товары своя постави на Рудици, вечеру же бывшю приде в товар свой. И наутрия же бывшю, присла Святополк, рек: "не ходи от имении моих". Василко же отпреся, река: "не могу ждати; еда будеть рать дома". И присла к нему Давыд: "не ходи, брате, не ослушайся брата старейшаго", и не всхоте Василко послушати. И рече Давыд Святополку: "видиши ли, не помнит тебе, ходя в твоею руку; аще ти отъидеть в свою волость, да узришь, аще ти не займеть град твоих Турова и Пиньска, и прочих град твоих, да помянешь мене; но призвав Кияне и ем, и дажь мне". И послуша его Святополк, и посла по Василка, глаголя: "да аще не хощешь остати до имении моих, да приди ныне, целуеши мя, и поседим вси с Давыдом". Василко же обешася прити, не ведый лсти, юже имяше на нь Давыд. Василко же всед на конь поеха, и устрете и детьский его и поведа ему, глагоял: "не ходи, княже, хотять тя яти", и не послуша его, помышляя, "како мя хотять яти? а оно мне целовавше крест; рекуще: аще кто на кого будеть, то на того будеть крест и мы и вси", и помыслив си прекрестися, рек: "воля Господня да

будеть". И приеха в мале дружине на княжь двор; и вылезе противу его Святополк, и идоша в истобку, и приде Давыд, и седоша. И нача глаголати Святополк: "останися на святок". И рече Василко: "не могу остати, братье; уже есм повеле товаром поити переди". Давыд же седяше акы нем, и рече Святополк; "да заутрокай, брате!" и обещася Василко заутракати. И рече Святополк: "поседита вы сде, а яз лезу, напяжю", и лезе вон, а Давыд с Василком седоста. И нача Василко глаголати к Давыдови, и не бе в Давыде гласа, ни послушанья; бе бо ужаслъся, и лесть имея в сердци. И поседев Давыд мало; рече: "кде есть брат?" Они же реша ему: "стоить на сенех". И встав Давыд, рече: "аз иду по нь; а ты, брате, поседи". И встав иде вон. И яко выступи Давыд, и запроша Василка в 5 ноября, и оковаша и в двои оковы, и приставиша к нему стороже на ночь. Наутрия же Святополк созва боялр и Кыян, и поведа им, еже бе ему поведал Давыд: яко "брата ти убил, а на тя свечался с Володимером, и хотять тя убити и грады твоя заяти". И реша боляре и людье: "тобе, княже, достоить блюсти головы своее; да аще есть право молвил Давыд, да прииметь Василко казнь; аще ли неправо глагола Давыд, да прииметь месть от Бога и отвечаеть пред Богом". И уведеша игумени, и начаша молитися о Василке Святополку; и рече им Святополк: "ото Давыд". Уведев же Давыд, нача поущати на ослепленье: "аще ли сего не створишь, а пустишь и, то ни тобе княжити, ни мне". Святополк же хотяше пустити и, но Давыд не хотяше,

блюдася его. И на ту ночь ведоша и Белугороду, иже град мал у Киева яко 10 вестр въдале, и привезоша и на колех, окована суща, ссадиша и с кол, и ведоша и в истобку малу. И седящю ему, узре Василко Торчина остряща ножь, и разуме, яко хотят и слепити, възпи к Богу плачем великим и стенаньем. И се влезоша послании Святополком и Давыдом, Сновид Изечевичь конюх Святополчь, и Дьмитр конюх Давыдов, и почаста простирати ковер, и простерша яста Василка и хотяща и поверщи; и боряшется с нима крепко, и не можаста его повреши, и се влезше друзии повергоша и, и связаша и, и снемше доску с печи, и възложиша на перси его; и седоста обаполы Сновид Изечевичь и Дмитр, и не можаста удержати, и приступиста ина два, и сняста другую доску с печи, и седоста, и удавиша и рамяно, яко персем троскотати. И приступи Торчин, именем Беренди, овчюх Святополчь, держа ножь и хотя ударити в око, и грешися ока и перереза ему лице, и есть рана та Василке и ныне; и посем удари и в око, и изя зеницю, и посем в другое око, и изя другую зеницю и том часе бысть яко и мертв. И вземше и на ковре, взлодиша на кола яко мертва, повезоша и Володимерю. И бысть везому ему, сташа с ним переше дше мост Звиженьский, на торговищи, и сволокоша с него сорочку кроваву сущю, и дваша попадьи опрати; попадья же оправши взложи на нь, онем обедующим, и плакатися нача попадья, яко мертву сущю оному. И очюти плачь и рече: "кде се есм?". Они же рекоша ему: "в Звиждени го-

роде". И впроси воды, они же даша ему, и испи воды, и вступи в онь душа, и упомянуся, и пощюпа сорочкы и рече: "чему есте сняли с мене? Да бых в той сорочке кроваве смерть приял и стал пред Богом". Онем же обедавшим, поидоша с ним вскоре на колех, а по грудну пути; бе бо тогда месяць груден, рекше ноябрь; и придоша с ним Володимерю в 6 день. Приде же и Давыд с ним, акы некак улов уловив; и посадиша и в дворе Вакееве, и приставиша 30 мужь стеречи и 2 отрока княжа, Улан и Колчко. Володимер же слышав, яко ят бысть Василко и слеплен, ужасеся, и всплакав и рече: "сего не бывало есть в Русьскей земьли, ни при дедех наших, ни при отцих наших, сякого зла". И ту абье посла к Давыду и к Олгови Святославичема, глаголя: "поидета к Городцю, да поправим сего зла, еже ся створи се в Русьскей земьли и в нас в братьи, оже вверже в ны ножь; да аще сего не правим, то болшее зло встанеть в нас, и начнет брат брата закалати, и погыбнеть земля Руская, и врази наши Половци пришедше возмуть землю Русьскую". Се слышав Давыд и Олег, печална быста велми и плакастася рекуща: "яко сего не бы было в роде нашем". И ту абье собравъша вое, придоста к Володимеру. Володимеру же с вои стояшю в бору, Володимер же, и Давыд, и Олег послаша муже свои, глаголаша муже свои, глаголюще к Святополку: "что се зло створил еси в Русьстей земли, и ввергл еси ножь в ны? Чему еси слепил брат свой? Аще ти бы вина кая была на нь, обличил бы и пред на-

ми, и упрев бы и створил ему; а ноне яви вину его, оже ему се створил еси". И рече Святополк: яко "поведа ми Давыд Игоревичь, яко Василко брата ти убил Ярополка, и тебе хочеть убити и заяти волость твою, Туров, и Пинеск, и Берестие, и Погорину, а заходил роте с Володимером, яко сести Володимеру Кыеве, в Василкови Володимери; а неволя ми свое головы блюсти, и не яз его слепил, но Давыд, и вел и к собе". И реша мужи Володимери, и Давыдови, и Олгови: "извета о сем не имей, яко Давыд есть слепил и: не в Давыдове городе ят, ни слеплен, но в твоем граде ят и слеплен". И се им глаголющим разидошася разно. Наутрия же хотящим чрез Днепр на Святополка, Святополк же хоте побегнути из Киева; не даша ему Кыяне, но послаша Всеволожю и митрополита Николу к Володимеру, глаголюще: "молимся, княже, тобе и братома твоима, не мозете погубити Русьскые земли; аще бо възмете рать межю собою, погании имуть радоватися и возмуть землю нашю, иже беша стяжали отци ваши и деди ваши, трудом великим и храбрьством побарающе по Русьскей земли, ины земли приискываху; а вы хочете погубити землю Оусьскую". Всеволожая же и митрополит придоста к Володимеру, и молистася ему, и поведаста молбу Кыяне, яко творити мир, и блюсти земле Русьские, и брань имети с погаными. Се слышав Володимер, расплакавъся и рече: "по истине отци наши и деди наши сблюли землю Русьскую, а мы хочем погубити". И преклонися на молбу княгинину, чтяшеть ю акы матерь, отца ради своего, бе бо

любим отцю своему повелику, и в животе и по смерти не ослушаяся его ни в чем же; темже и послуша ая, акы матере, и митрополита, такоже чтяше сан святительскый, не преслуша молбы его. Володимер бо так бяше любезнив: любовь имея к митрополитом и к епископом и к игуменом, паче же и чернечьскый чин любя, и черници любя, приходящая к нему напиташе и нанаяше, акы мати дети своя; аще кого видяше ли шюмна, ли в коем зазоре, не осудяше, но вся любовь прекладаше.

『スヴイヤトポルク，ヴオロジメル，イゴリの子ダヴイド，及びロスチスラフの子ヴアシルコ，及びスヴイヤトスラフの子ダヴイド，及び彼の弟オレグが来たり，和平を創るためにリユビイヤチに集つた．しかして互いに語つて言つた．『何故に（我々は）自からおのれに紛争を起しルシの国を破滅させているのか？一方ポロヴエツたちは我等の国に不和をよびおこし，我々の間に戦争があることを喜こんでいる．さてこそ，今後は一つの心に（我々は）まとまり，ルシの国を守ろうではないか．各自がおのれの領地を保全しようではないか．スヴイヤトポルクはイジヤスラフのキエフを，ヴオロジメルはフセヴオロドの（領地）を，ダヴイド及びオレグ及びヤロスラフはスヴイヤトスラフの（領地）を（守ろう）．フセヴオロドから町々を分け与えられたもの等はそれぞれ，ダヴイドがヴオロジメルを，ロスチスラフの子等はヴオロダリのペレムイシリを，ヴアシリコはチエレボヴリを，（各々保全しようではないか）．』と．しかして，このことを約束して十字架に口づけした，『もしも誰かが誰かに今後立ち向うならば，その者に対して（我々）全員及び聖なる十字架は立ち向うであろう』．全員は言つた．『その者に対して聖なる十字架及びルシの全国が立ち向うであろう』と．しかして互いに口づけ

して帰途についた．しかしてスヴイヤトポルクはダヴイドと共にキエフに来たり，しかして総ての人々は喜こんだ．然しながら，たゞ悪魔だけはこの友愛を悲しんだ．しかして悪魔がある家臣たちの心にしのび込み，イゴリの子ダヴイドに向つて言いはじめた．次の様に言つたのである．『ヴオロジメルがスヴイヤトポルクに対し，しかして汝に対しても，ヴアシリコと共に立ち向うように申し合わせた』と．ところで，ダヴイトは偽りの言葉を信じ，ヴアシリコに向つて非難して言つた．『汝の弟ヤロポルクを誰が殺したのか？しかも今，我に対し，しかして汝に対して企みをなし，ヴオロジメルと申し合わせをしたのは誰か？　おのれの首のことを配慮せよ』と．ところでスヴイヤトポルクは頭が混乱して言つた．『これは本当に真実であろうか．それとも偽りであろうか』と．（彼は）分らなかつた．しかして，スヴイヤトポルクはダヴイドに言つた．『もしも（汝が）真実を言つているのなら，神が汝の証人となり給うであろう．しかしてもしも（汝が）羨望を以て（これを）言つているのならば，神は相手がたの味方になり給うであろう』と．ところで，スヴイヤトポルクはおのれの兄弟をあわれみしかしておのれについて（考え），果してこれが真実であろうかと思案しはじめた．しかして（彼は）ダヴイドを信じた．ダヴイドがスヴイヤトポルクをたぶらかしたのである．しかして（二人は）ヴアシリコについて合議しはじめた．ところがヴアシリコはこれを知らず，しかしてヴオロジメルも（知らなかつた）．しかしてダヴイドは語りはじめた．『もしも（我々二人が）ヴアリコを捕えないならば，汝もキエフに君臨できぬであろうし，我もまたヴオロジメルに（君臨できぬであろう』と．しかしてスヴイヤトポルクは彼の言うことをきいた．しかして，ヴアシリコは十一月四日に来たり，しかしてヴイドビチに移り，聖ミハイルを礼拝するために修道院に向つた．しかして，其処で夕食をとり，おのれの輜重隊をルジツア（河）のほとりにとゞめた．ところで夕

方になつた時，おのれの輜重隊の所へ帰つた．しかして，ところで，翌朝になつた時，スヴイヤトポルクは使者を遣わして来たり言つた．『我が名付日を前にして去るな』と．ところでヴアシリコは，謝絶して言つた．『待つことはできない．本当に我が家郷に戦いがあるやも知れぬ故に』と．しかしてダヴイドは彼に使者を派遣し来つた．『行くな，兄弟よ．長兄の言うことを聞くな』と．しかしてヴアシリコは聞き従うことを欲しなかつた．しかしてダヴイドはスヴイヤトポルクに言つた．『どうだ，（彼は）汝のことを考えず，汝の手には従わないではないか．もしも彼がおのれの領地に去れば，彼が汝の町々トウーロフ及びピニスク，及び汝の他の町々を占領せぬかどうか，（汝は）今に分るであろう．我（の言うこと）を思いおこすがよい．然らずして，キエフ人たちを呼びよせ，しかして（彼を）とらえ，しかして我に（彼を）渡せ』と．しかしてスヴイヤトポルクは彼（の言うこと）を聞いた．しかして，ヴアシリコに使者をたてゝ言つた．『もし（汝が）我が名付日まで残ることを欲せぬのであれば，今直ちに来たれ．汝に口づけし，しかして，ダヴイドをも加えて皆で席を共にしよう』と．そこでヴアシリコは，ダヴイドが彼に対してたくらんでいたあざむきを知らずに来たることを約束した．ところでヴアシリコは馬に乗つて出かけた．しかして彼の少年従士が彼を迎え，しかして彼に告げて言つた．『行くな．公よ．（人々は）汝を捕えようと欲している』と．しかして，その言うことを（彼は）聞かなかつた．考えた．『どうして我を捕えようと（人々が）欲しているのか？　つい近頃，我に十字架を口づけして（人々は）言つたではないか．もしも誰かが誰かに対して立つならば，その者に対して十字架及び我々全員は立つであろうと』と．しかして，このことを考えて，十字を切り言つた．『主の意志のあるように』と．しかして，少数の親兵団をひきいて公の屋敷に来たつた．しかしてスヴイヤトポルクは彼を迎えに出て，座敷へ（彼等は）行

つた．しかしてダヴイドが来たり，（彼等は）坐についた．しかしてスヴイヤトボルクは言いはじめた．『祭日まで残れ』と．しかしてヴアシリコは言つた．『残ることはできない．兄弟よ．（我は）既に輜重隊に先発するように命じてしまつた』と．ところで，ダヴイドは，あたかも，おしの如く坐つていた．しかして，スヴイヤトボルクが言つた．『然らば食事をなせ．兄弟よ！』と．しかして，ヴアシリコは食事をする約束をした．しかしてスヴイヤトボルクは言つた．『汝等（二人）は此処に坐しておれ，ところで我が行つて指図をなそう』と．しかして，（彼は）外へ出た．一方，ダヴイドはヴアシリコと（二人で）共に坐していた．しかしてヴアシリコはダヴイドに向つて言いはじめた．ところがダヴイドには声もなく聞く耳もなかつた．というのは，恐れていたからであり，心に偽りをもつていたからである．しかして，ダヴイドはしばらく坐していてから言つた．『兄弟はどこにいるのか？』と．そこで彼等は彼に言つた．『二階広間に立つている』と．しかしてダヴイドは立ちあがつて言つた．『我は彼を呼びに行く．ところで汝，兄弟よ，坐しておれ』と．しかして（彼は）立ち上つて外へ行つた．しかしてダヴイドが出たとき，（人々は）ヴアシリコを閉じこめた．十一月五日のことである．（人々は）彼を二つのカセでくくりつけ，夜にかけて彼に見張り番をつけた．翌朝になつて，スヴイヤトボルクは貴族及びキエフ人たちを召集し，しかして彼等に，ダヴイドが自分に伝えたそのことを伝えた．即ち『汝の弟を（ヴアシリコが）殺し，一方，汝に対してヴオロジメルと申し合わせ，しかして汝を殺し，汝の町々を取ろうと欲しているのだ』と（いう言葉を）．しかして貴族及び人々は言つた．『汝は，公よ，おのれの首（生命）を守らなければならない．たしかに，もしダヴイドが真実を物語つたのならば，ヴアシリコに罰を受けさせよ．もしも，ダヴイドが虚言を言つたのならば，（彼は）神からむくいを受けさせよ．神の前に責めを負わしめよ』

と．しかして，修道院長たちは（このことを）知つて，ヴアシリコについてスヴイヤトポルクに懇願しはじめた．しかして彼等（修道院長たち）にスヴイヤトポルクが言つた．『ダヴイドから（出たことで）である』と．ところで，ダヴイドは（これを）知つて（ヴアシリコを）盲目にするよう教えそゝのかし始めた．『もしも（汝が）このことを為さず彼を放免するならば，汝は（公として）君臨することは出来ないであろうし，また我とてもである』と．ところで，スヴイヤトポルクは彼を放免することを欲していたが，ダヴイドは彼を危険視して（それを）欲しなかつた．しかして，その夜，彼を（人々は）ベルゴロドに送つた．その町は小さく，ギエフのそばの十露里遠くにあつた．しかして（人々は）彼をいましめられたまゝ荷馬車で運び来たり，彼を荷馬車からおろした．しかして，（人々は）彼を小さな座敷へ導いた．しかして彼が坐した時，ヴアシリコは刀をといでいるトルク人をみつけた．しかして，（人々が）自分を盲目にしようと欲していることを知つて，神に向つて大いなる泣き声とうめき声を以てさけんだ．しかして其処へスヴイヤトポルクとダヴイドによつて遣わされた者たち，即ちスヴイヤトポルクの馬丁スノヴイド・イジエチエヴイチ，ダヴイドの馬丁ジミトルが入り来たり，敷物を敷きひろげはじめた．しかして，敷きひろげ終つてヴアシリコを捕え，彼を倒そうとした．しかして，（ヴアシリコは）彼等（二人）と頑強にたたかつたので，（二人は）彼を倒すことができなかつた．しかしてその時，他の者たちが入り来たり，彼を倒した．しかして彼をしばりあげ，炉から板をはづし取り，彼の胸の上にのせた．しかして両方からスノヴイド・イジエチエヴイチ及びジミトリが（その上に）乗つた．しかして，（二人は）（彼を）押えつけることができず，しかして別の二人（の男）が近づいて来て，炉からもう一枚の板をはづし取り，しかして（その二人も）乗つた．しかして（人々は）彼を強く押えつけた．胸が裂けるほどであつ

た．しかして，スヴイヤトボルクの羊飼いで名をベレンジというトルク人が刀を手にして近づき来たり，眼を突こうとした．しかして的をはづして失敗し，彼の顔を切つた．しかしてその傷は今に至るまでもヴアシリコ（の顔）にある．しかして，この後，彼の眼を突き，眼球を引きぬいた．しかしてこの後，もう一方の眼をも．しかしてその眼球をも．この時，（ヴアシリコは）あたかも死んだ如くでさえあつた．しかして（人々は）彼を敷物の上にのせてもちあげ，死人の如くに荷馬車にのせ，彼をヴオロジメルに運びだした．しかして彼が運ばれた時，人々はズヴイジエニエ橋を共に渡り，市場において（彼と共に）とゞまつた．しかして，人々は血だらけであつた下着を彼から脱がせた．しかして僧の妻に洗わせるまう渡した．ところで僧の妻は洗つて彼にかけ── 彼等が食事をしていた時であつたが ──しかして僧の妻は死んでいる者になすが如く泣きはじめた．（ヴアシリコは）泣き声を感じ取つて言つた．『これはどこに居るということなのか？』と．彼等は彼に言つた．『ズヴイジエニエの町の中に』と．しかして（ヴアシリコは）水を乞うた．彼等は彼に与えた．しかして（彼は）水を飲みほした．しかして正気づいて気がつき，しかして，下着を手さぐり，言つた．『何故に我から（汝等は）脱がせたのか？（我は）その血だらけの下着をつけたまゝ死を受けて，神の前に立つべきであつたのに』と．ところで彼等は食事を終つた時，彼と共にまもなく荷馬車で出かけた．しかし堅い道に沿つてであつた．というのはその時は所謂十一月，グルデン月であつたからである．しかして（人々は）彼と共に六日にヴオロジメルに到着した．ところでダヴイドもまた，あたかも何か獲物をとらえたかの如くに到着した．しかして（人々は）彼をヴアケイの屋敷に置きすえた．しかして三十人の家臣及び公の下級従士ウラン及びコルチコを見張りにつけた．ところでヴオロジメルはヴアシリコが捕えられ盲目にされたことを聞いて，おどろき，しかして泣き出し

て言つた．『こんなことはルシの国には嘗つて無かつたことである．．．我々の祖父たちの時代にも，我々の父たちの時代にもかかる悪は（なかつた）』と．しかしてその場ですぐにスヴイヤトスラフの（二人の）子，ダヴイド及びオレグに使者をたてゝ言つた．『ゴロジエツに行け．ルシの国及び我々兄弟の間で行われたこの悪を正そうではないか．我等の中へ刀が突き刺されたのである．しかして，もしもこれを（我々が）正さなければ，より大きな悪が我々の中に起るであろう．兄弟が兄弟を殺しはじめ，しかしてルシの国は滅ぶであろう．しかして我等の敵ポロヴエツが来たりルシの国を奪い取るであろう』と．これをダヴイドとオレグは聞いて，非常に悲しみ，しかして泣いて言つた．『これは我々一族において嘗つてなかつたことである』と．しかして，その場ですぐに軍勢を集め，（二人は）ヴオロジメルのもとに到着した．ところで，ヴオロジメルが軍勢と共に松柏林の中にとゞまつていた時，ヴオロジメルは，しかして，ダヴイドも，オレグも，おのれの家臣を遣わしてスヴイヤトポルクに言つた．『何故に（汝は）かゝる悪をルシの国において行い，しかして我々に刀を突き刺したのか？　何のためにおのれの兄弟を盲目にしたのか？　もしも，何等かの罪が彼にあつたのだとしたら，彼を我々の前において摘発し，しかして，彼を非難し，彼に（それを）行うべきであつた．かくなつた今は，汝が彼にかゝることをなした（原因である）彼の罪を明らかにせよ』と．しかして，スヴイヤトポルクは言つた．『ヴアシリコが汝の弟ヤロポルクを殺したこと，しかして汝を殺し汝の領地のトウロフ，及びピネスク，及びペレスケエ及びボゴリナを占領せんと欲していること，一方，ヴオロジメルと誓いをたてゝヴオロジメルはキエフに坐し，ヴアシリコはヴオロジメルに坐するように約したことを，イゴリの子ダヴイドが我に告げた．我はおのれの首（生命）を守らなければならなかつたのである．なお，彼を盲目にしたのは我ではなくて，ダヴイド

であつた．（彼が）（ヴアシリコを）おのれのもとに連れて来たのである』と．しかしてヴオロジメル，及びダヴイド及びオレクの家臣たちは言つた．『ダヴイドが彼を盲目にしたのだと言つて，それについての辯解をするな．ダヴイドの町で（彼が）とらえられたのでもなく，盲目にされたのでもない．そうではなくて，汝の町においてとらえられ盲目にされたのだ』と．彼等はこう言つつて，それぞれ散り去つた．ところで，その翌朝（彼等が）スヴイヤトポルクに向つてドニエプルを越えて（攻めよう）と欲した時，スヴイヤトポルクはキエフから逃げようと欲した．キエフの人々は彼にそうさせなかつた．反対にヴオロジメルのもとにフセヴオロド夫人と府主教ニコラを派遣して言つた．『公よ，汝及び汝の（二人の）兄弟に（我々は）懇願する．ルシの国を滅ぼすことなかれ．というのは，もしも（汝等が）お互いに戰いをおこなうならば，異教徒たちは喜ぶであろう．しかして，汝等の父たち及び汝等の祖父たちが大いなる労苦及び勇気によつて獲得した我々の国を（異教徒たちは）奪い取るであろう．（汝等の父祖たちは）ルシの国のために防衛し，他の国を求め取つていたのではないか．しかるに汝等はルシの国を滅ぼそうとしている』と．フセヴオロド夫人は，また府主教は，ヴオロジメルのもとに到着し，（二人で）彼に懇願した．しかして（二人は）キエフの人々の願いをつたえた．和平を講じ，しかしてルシの国を守り且つ異教徒と戰えと．ヴオロジメルはこれを聞いて泣き出して言つた．『本当に我等の父たち及び我々の祖父たちはルシの国を守つたのに，我々は滅ぼそうとしている』と．しかして公夫人の願いに耳を傾け，おのれの父のために，彼女を母の如くあがめた．というのは（彼は）おのれの父に大いに愛され，（その）生存中にもまた死後にも，如何なることにおいても彼（父）の言うことに背かなかつたからである．それと同様にまた彼女の言うことにも，あたかも母の如くに従い，また府主教をも，その牧者としての位をあが

め，彼の願いをないがしろにはしなかつた．というのは，ヴオロジメルは極めて愛情深かかつたからである．府主教たちに対して，及び主教たちに対し，また修道僧たちに対して愛情をもち，なおまた僧の位を愛し，僧たちを愛し，彼のもとへ来たる僧たちには母がおのれの子たちに（なす）如く飲食をさせていた．もしも彼が誰かを騒々しいと見たり，或は誰かをいたづらなるものと見ても，（彼は）非難せず，あらゆるものを愛に置きかえていた』

この直後に，『我々は然しおのれの（話）に戻ろう』という言葉が続く．そして，話の筋はやはり，その後の，ダヴイド，ウアシリコの物語へ続くのである．ところが，『おのれの』≪cвoe≫語に戻ろうと断りながら，再び年代記者の筆は，多くの口上や対話を織り込み始め，そのことによつて，記述文もまた同時に熱を帯びて来る．その織り込まれた口上や対話は，実は，年代記者の言う『おのれの』≪cвoe≫言葉ではなくて，『おのれの』≪cвoe≫ではない別の物語手の口からの――おそらくは非常に叙事詩的な物語に織り込まれたそのまゝの口上や対話そのものであつたように思われる．上に引用した6605年の項の文章は，この項の前部三分の一にすぎないが，そのあたりで，話の調子を単に更める必要上，或は，これ以後の物語により真実味をもたせるために，『おのれの物語に戻ろう』と年代記者は断りを入れたのであろう．そして，それでも，やはり，続けるべき物語は，決して，『おのれ』の物語ではなかつた．前部三分の一とは別の人間層――おそらくは，より教会に近い人たちの層――に伝えられ，熱つぽく物語られていた説話であつたとも考えられる．後三分の二が非常に豊かな物語性に満ちながら，盲目になつたヴアシリコのザンゲを含む自己反省などに高い宗教性がみとめられるのも，その理由の一つであろう．『過ぎし年月の物語』の記者が僧であつた以上，それはまた同時に，やはり『おのれの』≪cвoe≫物語だと言い得たかも知れない．あくまでも，『おのれの』とは作者だけの

ものを指したのではなくて，彼を含む層全体にとつての『おのれの物語』であつたろう．この6605年の項に語られ記録されたヴアシリコを中心とする人物たちについては；だから，非常に多くの物語が多くの層に伝えられていたもののように思われる．そして，上に以用した前三分の一の部分においては，例えば，ダヴイドの人間像をその行動描写において見事に示す手腕が生まれ，後の三分の二においては，宗教的内面の心理描写の手腕がまた別の層で創られたと思われる．年代記の『過ぎし年月の物語』全体を通じてこの年代項に見られるほどの各方面からの充実した多彩な物語の集録或は統一がみられた個所は他には多くなかつた．おそらくはヤンが語つたという物語はこの辺にもあつたことであろう．引用しなかつた後三分の二の宗教的内面への掘り下げの物語手法については，いづれ後にふれることがあろう．それにしても，この後部三分の二には『過ぎし年月の物語』の生成要素を解く重大な一つの鍵が含まれている．年代記者が『我』≪аз≫という言葉で記述文の中に顔を出すことは，『過ぎし年月の物語』全体を通じて，ヤンという人物から多くの物語を聞いて，それを年代記に書き込んだという註記以外には，ほとんどなかつたことである．まして，『過ぎし年月の物語』の話の重要な主役級の人物として自からを登場人物の一員に組み込むことは絶体になかつた．それにもかゝわらず，この6605年の項の後半には，その重大な例外が大きく認められるのである．其処だけには，堂々と一人称を用いて，事件の当事者の一員として顔を出している．だが，果して，それが当の年代記者の顔であつたかどうかが問題である．『過ぎし年月の物語』がその冒頭に明記したように『ネストル』≪Нестор≫の編集になるものであつたにしても，或は6618年の項の最終に書かれたように，シエリヴエストル≪Селивестр≫が書いたものにしても，其処に大きく顔を出す『我』≪аз≫という人物が，ネストルやシエリヴエストルその人であつたとは思われな

い．使者をつとめ，口上を述べる人物の典型的な代表者が修道院の高級僧侶であつたと果して考えられるだろうか．年代記そのものに書きつけられた使者派遣の物語全体を通じて見た時，此の項の使者だけを僧がつとめたとは素直には考えられない．むしろ，此処で使者をつとめ，自から『我』≪аз≫という一人称で登場人物の一員に自からを組み込みつゝ，物語を展開したのは，非常に言葉の達者な人物で，使者をもつとめ，事件の当時者にもなり，且つまた，自己の体験を物語にして，口でそれを人々に語り聞かすことのできたほどの人間ではなかつただろうか．一人称で語られるその物語だけでも，一つの独立した物語であつたと思われる．言葉の上からは，その総てが書き言葉ではなくて，ほとんどが口頭の物語言葉であつたと思われる．その注目すべき一節を次に引用しよう．

Василкевич же сущю Володимери, на прежереченем месте, и яко приближися пост великый, и мне ту сущю Володимери, в едину нощь присла по мя князь Давыд. И придох к нему, и седяху около его дружина, и посадив мя и рече ми: "се молвил Василко си ночи к Уланови и Колчи, рекл тако: се слышю, оже идеть Володимер и Святополк на Давыда; да же бы мене Давыд послушал, да бых послав мужь свой к Володимеру воротиться, веде бо ся с ним что молвив, и не поидеть, да се, Василю, шлю тя, иди к Вавилкови, тезу своему, с сима отрокома, и молви ему тако: оже хощеши послати мужь свой, и воротится Володимер, то вдам ти которой ти город люб, любо Всеволожь, любо Шеполь, любо Перемиль". Аз же идох к Василкови, и поведах ему вся речи Давыдовы. Он же

рече: "сего есм не молвил; но надеюся на Бог, пошлю, да быша не прольяли мене ради крови; но сему ми дивно, даеть ми город свой, а мой Теребовль, моя власть". Пождавши и ныне якоже и бысть; вскоре бо прия власть свою. Мне же рече: "иди к Давыдови и рци ему: пришли ми Кульмея, то пошлю к Володимеру". И не послуша его Давыд, и посла мя пакы река: "нету Кулмея". И рече ми Василко: "поседи мало", и повеле слузе своему ити вон, и седе со мною, и нача ми глаголати.....

『ヴアシルコがヴオロジメルの前述した場所にいたとき，項度また大斎戒が近づいた．しかして我もまたヴオロジメルにいた時であつた．しかして或る夜，ダヴイド公が我を迎えに使者を遣し来たつた．しかして（我は）彼のところへ来たつた．（彼の）傍には彼の親兵団が坐つていた．（彼は）我を坐らせて我に言つた．

『今夜，ヴアシルコがウランとコンテにこんなことを言つたのである．それによれば，〃今，ヴオロジメルとズヴイヤトポルクがダヴイドに向つて進攻するところだと聞く．今，もしダヴイドが我が言うことを聞くならば，我はヴオロジメルに対して我が家臣をつかわしたいものだ．（そうすれば彼は）引き返すであろう．我は彼に何を言うべきかを知つているから，（彼は）進んで来れないであろう〃という．そこで，さて，ヴアシリよ．我は汝を派遣しよう．この下級従士と共に，汝の同名者なるヴアシルコのもとへ行け．しかして彼にかく言え．〃もしも（汝が）おのれの家臣を遣わしてヴオロジメルを引き返えさせようと欲するならば，フセヴオロジにせよ，シエポリにせよ，ペレミリにせよ，汝に気に入る任意の町を汝に（我は）与えるであろう〃と』と．そこで我はヴアシルコのもとに行つた．しかして，ダヴイドの総ての

言葉を彼に伝えた．ところで彼は言つた．『我はかかることは言わなかつた．然し神に期待をかける．我の故に血を（人々が）流さぬように使者を立てよう．然し，（彼が）我におのれの町を与えようとしていることは我には不思議である．ところで，我がチエレボヴリは我が領地である』と．しばらくして，今，事はその通りになつた．というのは，間もなく（彼は）おのれの領地を受けとつたのである．ところで（彼は）我に言つた．『ダヴイドのもとに行け．しかして彼に言え．〃我がもとへクリメイを遣わせ〃．と．そうすれば，（彼を）ヴオロジメルのもとに遣わすであろう』と．しかしてダヴイドは彼の言うことを聞かなかつた．しかして，我を再び遣わして言つた．『クリメイは居らぬ』と．しかしてヴアシリコは我に言つた．『しばらく坐せ』と．しかしておのれの従者に外へ出るように命じた．しかして（彼は）我と共に坐り，我に語りはじめた』

これだけの記事に登場する『我』がそれ以前の多くの記事における軍事一点張りの使者とは多少その目的を異にしていることは否定できない．然し，以前よりの使者の立て方から考えて，この場合だけ特に，宗教人である年代記者その人であつたなどと言う単純な結論は導き出せないであろう．多くの物語や古事を知り，誰からも尊敬される年令に達し，公たち最高権力者の間を使者として往復し，その口上を相方或は三方に間違いなく伝え，然も，そのいづれにも信頼と愛情と，いくばくかの尊敬の念を抱かせ得た人物とは果して誰であつたのか．人情の機微を充分知つた上で，それが出来た人とは，そして，おのれの使者勤めの事件を，この様に集約的にまとめて語り得た人がヤンであつたとは，にわかに速断はできないであろうが，彼が90才で死んだと記録される6614年から見て，この年はそれよりも九年前の話なのである．ヤンであつたとすれば81才の元老であつたということになる．勿論，ヤンでなかつてもよいであろう．少くとも，公たちが使者に

立てたほどの人物であり，相手方にも信頼され，口上の技術を身につけ，然もその口上の表現技術を一つの土台として自から一人称で立派に事件を語り得るほどの人物であつたにはちがいない．然も，その人物は年代記者に物語つて聞かせることができ，その物語を書きつける教会内の年代記者が宗教的にも，人格的にも，物語そのものの高度な技術にも，満腹の信頼と敬意をもつていた人物であつたことであろう．宗教人が宗教的に尊敬し得るほどの人物とは，けだし，戦陣をかけ，人生の荒波を越え，政治の峠をこえ，充分，人の立場に立つて感じ考え得るほどの文化的大人物であつたにちがいない．武人の最高権力者である公たちの間を往復し得たと同時に，宗教人にも一目置かれたほどの人物であつたが故に，盲目にされたヴアシリコが，彼を相手にざんげにも似た告白を長々と述べ得たのではなかつただろうか．もしも，『我』≪аз≫と一人称で顔を出したこの人物が，単なる僧としての年代記者であつたとしたら，ヴアシリコは，下に引用するような告白などする筈がない，その告白は，人払いをして，静かに行われる宗教的内容のざんげとは全く異質なものであることがそれを証明しているように思われる．上に引用した一人称の物語の最終個所に，『我に語りはじめた』と記された，その内容をなす総ての言葉が次の告白である．

се слышю, оже мя хочеть дати Ляхом Давыд; то се мало ся насытил крове моея, а се хочеть боле насытитися, оже мя вдасть им, аз бо Ляхом много зла творих, и хотел есмь створити и мстити Русьскей земли, и аще мя вдасть Ляхом, не боюся смерти; но се поведаю ти: по истине яко на мя Бог наведе за мое възвышенье, яко приде ми весть, яко идуть ко мне Берендичи, и Печенези, и Торци, и рекох в уме своем: оже ми будуть

Берендичи и Печенези и Торци, реку брату своему Володимереви и Давыдови: дайта ми дружину свою молодшюю, а сама пийта и веселитася; и помыслих: на землю Лядьскую наступлю на зиму, и на лето и возму землю Лядьскую, и мышю Русьскую землю; и посем хотел есм переяти Болгары Дунайскые, и посадити я у собе; и посем хотях проситися у Святополка и у Володимера ити на Половци, да любо налезу собе славу, а любо голову свою сложю за Русскую землю, ино помышленье в сердци моем не было ни на Святополка, ни на Давыда, и се кленуся Богом и его пришествием, яко не помыслил есм зла братьи своей ни в чем же, но за мое възнесенье низложи мя Бог и смири.

.....

『リャヒ人たちに我をダヴィドが引き渡そうとしていることを（我は）聞いている．そうだとしたら，これは，我が血で以て（彼が）満足し足らなかつたことであり，（彼が）我を彼等に渡そうというのは一層充分の満足を求めているということだ．我は多くの悪をリャヒ人たちに為した．しかして，為してかつまたルシの国に復しゆうしようと思つていたのである．しかして，もし（彼が）我をリャヒ人たちに渡すなら，（我は）死を恐れはしない．汝に，見よ，（我は）本当のことを伝えよう．本当に神が我が思いあがりのために我が身に（このことを）みちびき給うたのである．ペレンジチ人及びペチエネギ人及びトルツイ人が我がもとに来たりつゝあるという報告が我がもとにとゞいた．しかして（我は）我が心の中で言うた．ペレンジチ人及びペチエネギ人及びトルツイ人が我がもとに至るならば，おのれの兄弟ヴォロダリとダヴィドに言おう．おのれの下級親兵団を我に与えよ，しかして汝

ら（二人は）自から（酒を）のみ，たのしんでいるがよいと．しかして我は考えはじめた．冬に向つてリヤヒの国を攻め，夏に向つてリヤヒの国を占領し，ルシの国に復しゆうせんと．しかして，（我は）その後ドナイのボルガレを領有し，彼等をおのれのもとに従い住ませようと思つていた．しかして，その後，ポロヴエツに進攻することの許可をスヴイヤトポルク及びヴオロジメルにえようと（我は）欲していた．おのれのために栄光を獲るか，また或はおのれの首をルシの国のために横たえようと．スヴイヤトポルクに対しても，ダヴイドに対しても，それ以外の別のたくらみが我が心の中にあつたわけではない．しかして，見よ，神及び神の来迎をかけて（我は）誓おう．いかなることにおいても，（我は）おのれの兄弟にたくらみなどもつてはいなかつたと．然らずして，我が思いあがりのために神が我をおとしめ，温順ならしめ給うたのである』

この告白を不遜な以前の態度や思いあがりや，そのための企畫が押しつぶされた後の，僧に対するざんげだと読み取れるだろうか．むしろ，野心に燃え，絶対に自信をもつていた作戦を誤解され，遂には眼をつぶされて盲目になつた失意の将が，兄弟や父や側近たちよりも，むしろより深く信頼し得る昔つての老名将に切々と訴えた言葉なのではなかつたか．その切々なる訴えを聞き取つてやる『我』≪a'3≫とは果して一体，誰なのであつたのか．

軍事上の名作戦を樹てたこともあり，戦場に血生臭い生活を送つたこともあり，且つまた，敗戦の失意をもかみしめたことがあり，勝つべき自信のあつた戦いの企畫をつぶされて唇をかんだこともあり，そして白髪の老将として生き残り，最高権力者たちの群から身を引いて，今は，それらの権力者たちからも絶大な信頼と尊敬をよせられ，過去の栄光の権化であると同時に，本当に心の底を打ちあけてしみじみと語り合える相手 —— おのれらの精神的支柱であると考えられていた人物，その人物に使者の役を勤

めてもらえば，最も困難な仲間割れの問題も氷解しそうだと期待された人物 ――― それは決して僧ではなかつただろう．ヤン或はそれに近い人物であつたにちがいない．

使者の口上が，古代ロシア語の表現力の一つの大きなさゝえをなしていた事情は，この一事をもつて，その証拠のしめくくりにするのがよいであろう．キリスト教と共に文字がロシアに持ち込まれ，文字を借りての書き言葉へ発展する以前に，既に，古代ロシア語の表現力は，文字をもたない口頭だけの世界で，以上の様な高度な水準を示していた．

然し，口頭の世界だけにおける古代ロシア語の姿を，口上の言葉にのみ限つて，それ以外のものを問題にしないで通りすぎるわけにはゆかないであろう．使者の口上以外に，ロシア古代社会には，口頭言葉が果すべき別の巨大な役割があつた．その一つは，公のおこなう重要会議や，都市住民のおこなう民会や，或は相談などにおける発言であつた．年代記は，それを相当多く書きとめている．年代記々述の言葉の基盤が口頭語の高い表現力にあつたとする以上，それらの発言の言葉は当然此処で検討されておかなければならないであろう．

会議や集会での発言は，一対一の対話でないことは勿論である．言うならば，複数の人々，多くは民会などでは群衆に対して述べられる筈のものであつた．そのためには，聞き手の耳に容易に入るような形のものでなければならなかつた．圧縮され然も強烈な力をもち，それでいて，理解され易く，説得的であり，自己の心の中の意図やプログラムを明瞭に表現し得る言葉でなければならなかつた．『過ぎし年月の物語』が書きとめている，そのような発言を取りあげて見るとき，それら会議発言の口頭語が単純な形式を持ちつゝ，どれほど古代ロシア語の表現力進展に益していたかが推察されるであろう．それらの発言のうち，親兵団と公との会議で軍事的な議題に関する主要な発言は，先に武勇鼓舞の発言

として取りあげたものと重なることもあろう．例えば，6452年の項のうち，次の様な一節はその種のものであつた・

Игорь же ..... созва дружину и нача думати.....
Реша же дружина Игорева: "да сице глаголеть
царь, то что хочем боле того, не бившеся имати
злато, и сребро, и паволоки? егда кто весть,
кто одолееть, мы ли, оне ли? ли с морем кто
светен? Се бо не по земли ходим, но по глубине
морьстей; обьча смерть всем". Послуша их Игорь,
.....

『ところでイゴリは・・・・・親兵団を集め，しかして合議しはじめた・・・・イゴリの親兵団は言つた．『皇帝がかく言つている以上，（我々は）その上なにを欲するのか．戦わずして金と銀と絹とを獲るであろうのに，我等と彼等と，そのいづれが勝つか，いづれが海と味方であるか，誰が知つていよう．地上を（我々は）行くのではなくて，海の深みに沿うて行くのではないか．すべての者に死は共通である』と．イゴリは彼等の言うことを聞いた』．

この発言のうち，特に≪ли≫という小詞の使用，≪то≫ ≪но≫等の接属詞，≪се≫などの代名詞の使用，そして，それらの使用を含んだ短い文節の区切りの利用など，明らかに書き言葉ではないことを示すものであつた．疑問形を多くして同意を求め，一人称複数形の動詞を用いて自己の考えの協同性を示そうとした．≪кто≫の用い方のうち『誰が知つているか』≪кто весть≫，『誰が勝つか』≪кто одолееть≫はともかくとして，『誰が海と味方であるか』≪ли с морем кто светен≫という一句の≪кто≫と≪ли≫との組み合わせに感じられる一見奇異な語順は，却つて，会議における発言そのまゝのはくとつさを感じさせると共に，実は，『というのは，これは』≪се бо≫という締めくゝりの巧みさを予想してのことだと思われる．平原における

戦いではなくて，海上における戦いの不利を述べ，敗北と死を暗示し，且つまた死をいとうものではないことをも示そうとする．相手が既に貢物を示して和を求めている以上，あえて勝利のおぼつかない戦を開くにあたらないとする主張である．ぼくとつな個所はあつても，既に意のあるところは充分表出されたのである．然もその理論の展開はちよ突的なイゴリを納得させるほどのものであつた．公が武勇を鼓するために親兵団に語る言葉や，或は反対に親兵団員や近側者が公の心の方向に同調して激励する言葉や，或は相手方に既にその目的が充分予想できた使者の口上の言葉などとは異つて，この様な会議発言は，行動及び処致の方向が全く予想されない折の会議であればあるほど，主張の焦点の合理性を説く必要があつたであろう．発言者の主張の焦点は，あらかじめ決して聞く側の者たちには予想できなかつた筈である．その様な白紙に近い状態から発言して，説得的である形で主張の焦点を示さなければならなかつた．そのためには，たとえ，ぼくとつであつても，冗慢であることは避けなければなるまい．『過ぎし年月の物語』は，多く，主張の焦点だけを短く記述して話を進めてはいるが，注意深く点検すれば，時に，この様なほとんど生のまゝ伝承されたと思われる発言をも記録している．年代記中，最も時代の古いこの会議発言の記述は，だから，非常に古い時代の口頭による古代ロシア語の表現力を示すものとして，充分注意しておくべきであろう．会議における発言であつても，その言わんとする焦点が至つて明瞭である場合がある．予め判明している焦点を確認するような目的の会議やその折の発言においては特にそうである．その様な時には，発言の言葉は，使者の口上におけるように理路整然たるものにちがいない．6495年の項でヴォロジメルが貴族と長老たちを召集して，多くの宗教のうちいづれを採るべきかを問うた折の返答の言葉は，まさにその様なものであつた．

"Вѣси, княже, яко своего никтоже не хулитъ, но

хвалить; аще хощеши испытати гораздо, то имаши у собе мужи: послав испытай когождо их службу, и како служить Богу".

『知れ．公よ，おのれのものは，誰とても悪しざまには言わず，ほめるものだと．もしも汝が一層よく試みようと欲するならば，（汝は）おのれのもとに家臣をもつているではないか．派遣して試せ．それぞれのもとにおける勤行と，及びいかに神に仕えているかということを』

この発言は，理路整然たる形と，意図の焦点の明確さにおいて，前記の発言とは全くその様相を異にしている．予め判明している意図の焦点の確認にすぎないような会議での発言は，時にはその会議を主催する権力者への提灯もちを演ずることさえあろう．正面きつて堂々と権力者を支援するような会議発言が追従的であればあるほど，その言葉は，ますます公約数的な表現をとるであろう．だから，次才にその言葉は，さりげない書き言葉に似て来る筈である．此処に引用した古代ロシア語の一節は，まさにそのような典型であつた．言うならば，年代記者の記述文と少しも変るところがない．そのことまでも考慮に入れて，年代記者はこれを記録したものであるのか，それとも，おのれの記述文と同じペースで，話の筋をとゝのえるために，つい書いてしまつたものであるか，それとも，その通りに伝承されて来たものを，うのみのまゝ書きつけたものであるか，その点は判然とは分らない．少くとも，全く対象的な会議発言が上記二つの引用文に見られることはたしかである．少くとも年代記者は，そのヴアラヤテイーの多さを充分承知の上で書きとめていたことであろうと思われる．別の言い方をすれば，既に，古代ロシア語はそれだけの大きな表現の巾をもち得ていたということになるであろう．

たゞ，これから先は，結果において記述文と選ぶところのないような会議発言の言葉はその引用を極力省略して話を進めて行く

ことにしたい．

上に引用した会議発言は貴族や親兵団員の言葉であつたが，次には一般民衆の言葉を注目しよう．特に都市においては，重大問題の決定に必ず『民会』《вече》が開かれた．其処における発言は，だから，宮廷の会議における発言よりも，より民衆的日常語に近い言葉であつた筈である．年代記が初めてそれを書きとめたのは6505年の項であつた．古いロシアの民衆の日常語に近い言葉の記録として注目しなければならない．言いかえれば，文字化される以前の古代ロシア語の一般的な表現力をさぐるためにも見のがされてはならないであろう．

ヴオロジメルがノヴゴロドに出向いた留守中にペチエネギ人たちに包囲されて，町の人々が飢えに襲われた時の民会の記録である．

и бе глад велик, и створиша вече в городе, и реша: "се уже хочем померети от глада, а от князя помочи нету; да луче ли ны померети? Вдаимыся Печенегом, да кого живять, кого ли умертвять; уже помираем от глада". И тако свет створиша.

しかして大いなる飢えがあつた．しかして（人々は）町において民会をひらき，しかして言つた．『見よ，既に我々は飢えのために死のうとしている．ところが公からは援助がない．我々は死んでしまつた方がよいというのか？　ペチエネギに降服しようではないか．（彼等は）或る者は生かし，或る者は殺すであろう．（いづれにせよ）（我々は）もはや飢えのために死にかかつているのだ』と．しかしてかくの如く，（人々は）相談をおこなつた．

この一節の各年代記における種々の文章は『古代ロシア研究』才六，七号に記載しておいた．宮廷ではない一般の町中の人たちの典型的な言葉としてこの発言の言葉を注目しよう．此処には，

権力者への追従発言の様相は少しもない．むしろ，公から援助がないことへのうらみさえ見られる．然も，言葉使いの調子をあげ過ぎたための混乱もみとめられない．至つて平静で論理的でさえある．民会において貴族的な言葉使いをすれば，その効果は予期したものとは異つて現れるかも知れない．むしろ，民会は民会らしく都市庶民の言葉による発言が効を奏するであろう．その技術は充分此処で利用されたと思われる．『我は』≪a з≫などと言わずに総てを『我々は』≪мы≫に続く文法形態で述べ立てゝいるし，公から援助がないという多少の不平を含む発言には，最も民衆言葉の利用を大きくして，『無い』≪нет≫を≪нету≫と変えている．前記二つの発言中にみられた『然し』≪но≫という接属詞は完全に姿を消して，此処では民衆的な≪а≫が用いられている．ちなみに，プイリーナでは一度として≪но≫という接属詞は用いられず，全部≪а≫ばかりであつたことをつけ加えておこう．接属詞がその≪а≫でない場合は，もつと民衆口語的に≪да≫であつた．なるほど古代ロシア語の≪да≫は接属詞としてよりも，命令法や使役法を構成する言葉であることが多かつたが，この一節の≪да≫の二回の使用をそれに近いものとしては理解しない方がよいであろう．むしろ，非常にくだけた古い口語における使いぶりであつたと見るべきである．その様な口語でありながら，既に高い表現技術をもつていたことは，この表言の冒頭と締めくくりの二個所を見れば充分わかることであろう．敵に降服しよう．敵は降服した我々を殺すかも知れない．殺されるものも生かされるものもあるであろう．然し，もうそれはどうでもよいではないか．『既に我々は飢えのために死んでしまいそうなのである』≪уже хочем помереть от глада≫と冒頭でのべ立て，再び締めくゝりで，『既に我々は飢えのために死につゝあるところだ』≪уже помираем от глада≫と述べている．要するにどちらにしてもわか

らないのだという発言意向の焦点である．一方は，『死んでしまう』≪помереть≫の未来形，他方は，『死んで行く』≪помирать≫の現在形を使い分けているのである．古代ロシア語は現代ロシア語のような『体』の区別を極めてほのかにしかもつていない．にもかゝわらず，此処では，そのほのかなるものを最大限に拡大して利用しようとしたのである．それを冒頭と締めくくりに設定し，締めくくりは，聞き手への説得力のための余音を残すべく不完了体的動詞を，然も，不定法ではなくて一人称複数形で直接法として使用しているではないか．また完了体的な≪помереть≫の方は，『死んでしまいそうなのである』と冒頭にのべただけにはとゞめなかつた．『死んでしまうこと』≪помереть≫の方が良いとでもいうのかと，こちらは完了体的であるが故に二度も使用している．死の覚悟をかためよと説いて，なお安全の可能性が少しでも多い降服を主張した言葉として，この表現力は高く評価されてよいであろう．古代ロシア語の民衆口語における表現力の高さを知り得る立派な手がかりの一つであると言える．その意味では，この年（6505年）の項の物語は，その全体にわたつて，宮廷・武人的な物語であるというよりは，より民衆的な物語であつたように思われる．この物語の源そのものが，上流階級の伝承ではなくて，民会に群れる人々の側の伝承物であつたように思われる．各種年代記におけるこの項の記述の様相は『古代ロシア研究』才六，七号にその全部を直接引用しておいた．さて，民会での発言が高度な表現力をもちはじめ，萬人の意見を代表し得るような内容を盛り，然も，集約されて簡潔な形式にまとめあげられる時，その言葉は同時に使者の口上に似て来ることは理の当然であつた．勿論，その様にみがきあげられた発言の言葉の結晶は，もはや庶民の話し言葉ではなくなつて行つたかも知れない．自然，それは口上の言葉に移行し，或は物語言葉に似て，且つ，記述文或は書き言葉の領域にまで近づいたことであろう．民会の

発言の言葉はその様な場合，同時に会議の結論をつたえるものであり，同時に，その結論を伝えるべき使者口上と同じであつた．『過ぎし年月の物語』は，その辺の事情を実に上手に物語に組み込んでいる．例えば，盲目にされたヴァシルコの物語の終末に近い個所の一節に次の様にある．6605年の項である．

Посем же придоста к Володимерю, и затворися Давыд в Володимери, и си оступиша град. И послаша К володимерцем, глаголя: "ве не приидохове на град ваш, ни на вас, но на врагы своя, Туряка, и на Лазаря, и на Василия, ти бо суть намолвили Давыда, и тех есть послушал Давыд и створил се зло; да аще хощете за сих битися, да се готови; а любо дайте врагы наша". Гражане же се слышав, созваша вече, и реша Давыдови людье: "выдай мужи сия, не бьемся за сих, а за тя битися можем; аще ли, то отворим врата граду, а сам промышляй о собе", и бысть выдати я. И рече Давыд: "нету их зде", бе бо я послал Лучьску; онем же пошедшим Лучьску, Туряк бежа Кыеву, а Лазарь и Василь воротистася Турийску. И слышаша людье, яко Турийске суть, кликнуша людье на Давыда и рекоша: "выдай, кого ти хотять; аще ли, то предаемыся". Давыд же послав приведе Василия и Лазаря, и дасть я; ....

『ところでこの後（ヴァシルコとヴォロダリの二人は）ヴォロジメルに来たつた．しかしてダヴィドはヴォロジメルにたてこもつた．しかしてこれらの人々（ヴァシルコとヴォロダリの軍）は町を包囲した．しかしてヴォロジメルの町の人々に使者をおくつ

て言つた．〃（我々が）攻め来たつたのは汝等の町に対してではない．汝等に対してでもない．然らずして，おのれの敵，即ちトゥリヤクに，及びラザリに，及びヴァシリに対してなのである．というのは，それらの者たちがダヴィドに（我々のことを悪しざまに）言いつけ，ダヴィドが彼等の言うことを聞いて，この悪をなしたからなのである．もしも（汝等が）その様な連中のために戦うことを欲するならば，見よ，（我々は）（戦いを）辞さぬのである．さもなくば，我々の敵を引き渡せ〃と．ところで町の人々はこれを聞いて，民会を召集した．しかして人々はダヴィドに言つた．〃それらの家臣たちを渡せ．（我々は）そのようなものたちのために戦つているのではない．汝の為に戦うことはできるが．もしも（汝がそう）しないのならば，（我々は）町の門を開くであろう．汝はみづからおのれのことを考えよ〃と．しかして彼等を引き渡さざるを得なくなつた．しかしてダヴィドは言つた．〃彼等は此処にはいない〃と．というのは彼等をルチスクへ送つてしまつていたからである．彼等がルチスクへ出発した時，トゥリヤクはキエフに逃げ，ラザリとヴァシリはトゥリスクに戻つた．しかして，彼等がトゥリスクにいることを人々が聞いて，人々はダヴィドに向つて叫んで言つた．〃（彼等が）汝に求めているその者を引き渡せ．もし（それを）なさぬならば，（我々は）降伏するであろう〃と．そこでダヴィドは使者を立てゝヴァシリとラザリを連れ来たり，その二人を引き渡した・・・・』

『過ぎし年月の物語』の文章が立脚していた一つの大きな基盤が，民会における都市庶民の発言にみられる言葉使いにあつたことがこの点からも知り得られるであろうし，別の言い方をすれば，文字に依存しない古代ロシア語が口頭によつて既に相当高度な表現を生み出していたことの傍証にもなるであろう．都市住民の行う民会が支配権力者である公に対して，どれほどの発言力をもち，政治や軍事にどれほどの圧力をかけ，ひいては，この時代の政治

や社会の機構の様相を，歴史家は此処に読み取り得ることであろう．だが，それにもまして，この一節が此処に書きとめられたその言葉自体の基盤をこそ，我々は注意深く読み取るべきであろう．民会の総意にもとづく結論が，ダヴイドという公に伝えられる折には，民会での発言という口頭語が見事にまとめ上げられて，使者の口上に近づき，例えば，≪аше≫『もしも』という口上語につきものであつた用語をも取り入れられ，その述べ方もまた，二段構えから，両刀論法を創り出し，相手への強制力を増していることなどは決して見落されてはならないであろう．文字以前の古代ロシア語の表現力発達史の一こまが此処にもみとめられるのである．

多くの年代記が，特に『過ぎし年月の物語』がよりどころとし，利用した古代ロシア語の口頭語の高い表現力を示しているものに，もう一つ宴会の席での言葉や，武人の死を供養する際の言葉などがある．宴会は公の宮廷だけに限らず，教会でも，商人の間でも農民の間でも古くから行われていた．一方の供養は，特に，キリスト教輸入以前のスラヴ原始宗教時代のものだけに限つてみても，年代記の非常に古い部分に既に現れるのである．その原始宗教時代の武人の供養を古代ロシア語は≪тризна≫と言つた．その異教的供養の模様はオリガ≪Ольга≫女帝の物語を記録した個所に詳しく書きとめられ，既に各年代記のその項は『古代ロシア研究』オ五号に集録しておいた．年代記の中にみられる異教的供養はこの項においてしか見られないが，古くは実際に数多く実施されていた筈であるし，その折には供養のための言葉も多く口にされたものだと考えられる．ラヴレンチー年代記をはじめとする各種年代記には，然し残念ながら，それらの言葉はほとんど記録されていない．たゞ一つ皇統記≪Степенная Книга≫にのみ，その名残りをうかがい知ることができる．『古代ロシア研究』オ五号p.127～p.128にみられるオリガの言葉がそれである．日本語訳をつけなかつたので再び此処に訳語と共に引用しておこう．

Ольга собра воинество, поиде в Деревы и прииде на троб Игорев и плачеся по нем плачем велиим, источники слез от очию проливающи, жалостно глаголющи: "О свете мой милый, о драгий мой животе, како оплачю тебе или что сотворю тебе? Самодержець всей Русской земли был еси; ныне же мертв и землею покровен и киним же не владеещи и многи страны примирита ти ся и самый Царский град дани и выходы дароваху ти, и многи победы на супротивныя показал еси. Ныне же где что? Все мину. Где великое государство самодръжства твоего? Где слава и красота мира сего? Где багряница брачныя и ризы многоценныя? Где злато и сребро, и вина, и меды, и брачныа честная, и быстрии кони, и домове велиции, и имения многая, и дани, и чести бесчисленныя, и гордения в боляpех своих? Уже тебе не будет сего никогда же; всех сих лишен ести; се бе, яко вижу, с перстию смесился ести, о милый мой господине, великий княже; како скрыся в землю и к нам не возвращаешися; и звери земныя на ложа своя идут и птицы небесныя ко гнездом летят; ты же, самодржавне, свой дом оставив и зде пришел, идеже от безумных Древлян кровь твоя царская пролияся, и тело твое погребению предастся; и аз тебе светлейшаго живота и царя лишена бых и сира вдова со единым сыном оставаюся, и за веселие и радость плачь и слезы постигоша мя, аз утеху же и покой сетование болезнено; и многия труды скорбныя обыдоша мя, и не вем, како врагы смирити и всякая вражда утолити и како в тишине

мирны дни видети, в них же бы истиннаго взыскати. И кто, когда, каково утешение дарует ми и ум мой на лучьшее утвердит и желание мое исполнити? И кто обряшется возвещая ми, аще будет некая жизнь, или другий мир? Сей бо мир преходит, яко же вижу и несть хитрости, еже убежати смерти. Егда же како и мене постигнет смерть, и кто будет память мою творя по смерти? Все бо естество человеческое в небытие расходится и забитию предается. И что ныне успеем, косняще господоубийцам врагом ненавидящим над ними царския власти; и того ради да приимут месть, и да престанет дерзость в Рустей земли помышлающих злое на самодержавных; да и прочии не навыкнут убивати государьствующих ими в Руси, но со страхом да повинуюся величию царствия Руския державы начальником. Мы же паки по сих егда мирно время улучим, и тогда паче потщатися имамы добрейшая и полезная уведати". И ина многа плачевная притворяше глаголы и повеле могилу сыпати над Игорем.....

勿論此処の言葉は後世に多く手を加えられたものであろう．例えば『皇帝』≪царь≫，『皇帝の』≪царский≫などという言葉は古くはビザンチンの皇帝にしか用いられなかつたものであるのに，此処ではロシアの『公』≪князь≫に相当するものとして用いられてしまつている様に，語彙の面からもそのことは充分うかがうことができる．後世の追悼文的な加工で色濃く着色されているにはちがいなかろうが，少くとも，異教的供養の折の言葉の名残りはとゞめられていようし，或は全くそれが無いにしても，この種の言葉が供養の折に語られたことだけはたしかであろう．その語ら

れた言葉の後々における成長発展の結果がこのようなものであつたと考えればよいかも知れない．訳語をつければ，次の様なものになろう．

『オリガは軍勢を集め，ジエレヴリヤネに向つて進発し，しかしてイゴリの墓に着いた．しかして彼を思つて大泣きに泣いた．涙の泉を眼から流し，悲しく言つた．〃おゝ我がやさしき光よ．我が価値高き光よ．いかに（我は）汝（の死を）いたみ，汝に何をなそうや？（汝は）全ルシの国の君主にてありき．されど今，（汝は）死して，土に埋められ，誰をも支配せざるなり．多くの国々は汝に服し，ツアリの町（ビザンテン）さえ汝に貢物と税を納めていたり．しかして汝は多くの勝利を敵対するものたちに示したり．されど今や如何に？　総ては逝きて帰らず．汝の力の大いなる国はいづこにありや？　この世の栄光と美は何処にありや？婚儀の御衣と価高き王服はいづれにありや？　黄金と銀は，しかしてブドー酒は，しかして蜜酒は，しかして聖なる絹衣は，しかして足速き馬は，しかして大いなる家は，しかして多くの財は，しかして貢税は，しかして数限りなき栄誉は，しかしておのれの貴族たちの自慢の種は，今いづこにありや？　既に再びこれを汝に求むべくもなし．（汝は）これら総てを失いたればなり．見やれば即ちこれは土と混じてやみぬ．あゝ，我がやさしき君よ．偉大なる公よ．いかなれば地にかくれ，我等がもとには戻ることなき？地なる獣はおのがふしどに戻り，空なる鳥は巣に飛び帰るものを．君よ．汝はおのが家を残して此処に来たり，かくして，愚かなるドレヴリヤネのために汝の皇帝なる血は流されぬ．しかして汝の体は埋葬に引き渡されぬ．しかしてぞ我が汝が光輝ある生命を失い，帝を失い果てゝ，よるべなき後家として一人の息子と共に取り残されぬ．しかして，よろこびにつけ，うれしさにつけ，泣きの涙が我をおそい，我は慰めをもいこいをも，患い嘆くなり．多くの悲しき事どもが我をとりまき，敵をいかに押えるかを我は

知らず，あらゆる敵意をしづめるによしなく，静けさのなかに平和の日々を見るすべとてなし．平和の日々にこそ真なるものを求め得べきに，しかして，誰が何時，如何なる慰めを我に与え，我が考えを光明に向わせ，我が望みをかなえくれん？　別の生命があり別の世界があればとて，そも，誰が我にそれを伝え呉れん？この世は過ぎ行きて，見てやれば，死をのがれん良きすべとてなきものを．いつ，いかにかして，死が我を襲うときは，死後，我が記念をば誰がなし呉れんとするや？あらゆる人間の業は忘却の中に散り失せ忘れ果てるにまかるるものなるを．皇帝の権力をうかがい憎む主殺しの敵に向いて，今，我等何をなすべきや？そのためには彼等報いを受けるべく，且つまた（我等が）王国に悪をたくらめるものどもの思い上りはルシの国には絶えて消え果てしむべし．かくなりて，はじめて，ルシにありて，自からを治めるものを殺すごときことを他の者たちはやめとゞむならん．しかして，はじめて（人々は）恐れを抱きてルシの国の首長の偉大さに従い伏すべきなり．されば，我等は再び平和なる時をその後にはじめて得て，その時にぞ，たのしみに満ち，良き有益なることどもを知り得んゞど．しかして，多くの泣きとむらいの言葉をのべ，イゴリの上に墓を造ることを命じた』・・・・・

この様な追悼の言葉の原型をなすべき数々は，キリスト教輸入以前のロシアで，戦いの栄光の内に死んだ公や勇士に対しては勿論のこと，それぞれの戦士や名士の死に対して，常に述べられていたにちがいない．年代記は残念ながら，それらを原型のまゝ伝えることがほとんどない．その古い異教的な供養追悼の模様をさえ，ほとんど書きとめていない．キリスト教輸入後の教会で，異教排斥の立場から書かれた年代記の性格によるものなのであろう．だが，その排斥した筈の異教的供養の折の追悼の言葉が，古代ロシア文語の大きな一つのさゝえになったことは想像に難くない．キリスト教輸入後にキリスト教的追悼文の中にその表現技術

が数多く取り入れられて，バイブル的表現に組み込まれ公たちの死後の讃美の言葉として年代記に書き入れられたも多かつたように思われる．死者へのその様な讃美の言葉については，また，後にふれるであろうが，此処ではその様な讃美の言葉としてではなくて，戦死せる父の葬式にその子が泣きながらその遺体に語りかける言葉を一つだけ引用しておこう．イジヤスラフの遺体を戦場からキエフの町に運び移し，葬式を挙行した折に，息子ヤロポルクが口にした言葉である．此処には明らかに古くからの武将の供養の折の言葉の反映を読み取ることができるからである．

Ярополк же идяше по нем, плачася с дружиною своею: "отче, отче мой! Что еси пожил без печали на свете, многы напасти приим от людий и от братья своея? Се же погыбне не от брата, но за своего положи главу свою."

『ヤロポルクは彼（彼の遺体）におのれの親兵団と共は従い進みながら泣いた．〃父よ，我が父よ！何故に汝はこの世に悲しみなしには暮せなかつたのか．何故に家臣たち及びおのれの兄弟たちから多くの攻撃を受けたのか？見よ，（汝は）弟によつて身を滅ぼしたのではなくして，おのれの弟のためにこそおのれの生命を捨てたのである』

さて，口頭による古いロシアの言葉の表現水準を示すものに，もう一つ，宴会での発言があつた．年代記は公の主催する酒宴について数多くの記録を書きとめている．民間ベースではブイリーナの主要なものが，その酒宴の存在をことごとく詠みこんでいる．新しい公の即位に際しても，新しい建物が完成した折にも，戦いに勝利をおさめた時には勿論のこと，外交的使節の接見の折にも，公の宮廷では事々に酒宴が開かれた．『過ぎし年月の物語』の中だけに限つてみても，宴会を伝えている記事は相当多く見出される．特にヴオロジメル公には宴会の物語が集約的に書きとめられ

ている．

В лето 6504. ..... и створи праздник велик в тъ день боляром и старцем людьскым, и убогим раздая именье много.

..... и створи праздник велик, варя 300 провар меду, и съзываше боляры своя, и старейшины и по всем градом, и люди многы, и раздая убогим 300 гривен.....

Се же пакы творяше людем своим по вся неделя, устави на дворе в гритнице пир творити и приходити боляром, и гридем, и съцьскым, и десяцьскым, и нарочитым мужем, при князи и без князя: бывше множьство от мяс, от скота и от звериины, бяше по изобилью от всего.....

『6504年．・・・・しかして，この日に，貴族たちや臣下の長老たちに大いなる祭典をおこなつた．しかして，貧しき人々に多くの財を分け与えた．

・・・・・しかして，大いなる祭典をおこない，蜜酒三百プロヴアラを沸かした．しかして，おのれの貴族たち及び長老たち及びすべての町々からの者たち，及び多くの家臣たちを呼びあつめ，しかして貧しき人々に三百グリヴナを分け与えた・・・・

ところで一方，また再び同じことをおのれの家臣たちに毎週おこない，衛兵集合所の屋敷において酒宴も催し，貴族も，護衛兵も，百人長も，十人長も，身分高い家臣たちも，公のいる時にも不在のときにも来るように定めた．家畜及び野獣の肉が多量に出され，あらゆるものが豊かであつた』

勿論，前述したように，これは伝承を書きとめたものにちがいない．然し，少くとも，ウオロジメルに限らず，多くの公たちのもとで，種々のことに事よせて酒宴が催されていたことにちがい

ない．だから酒宴を素材にした物語も当然生まれたことであろう．例えば，6573年の項には，次の様な面白い話が書きとめられている．

Единою же пьюшю Ростиславу с дружиною своею, рече Котопан: "княже! хочю на тя пити"; оному же рекшю: "пий". Он же испив половину, а половину дасть князю пити; достиснувъся палцем в чащю, бе бо имея под ногтем растворенье смертное, и вдасть князю, урек смерть до дне семаго. Оному же испившю, Котопан же пришед Корсуню поведаше, яко в сий день умреть Ростислав, якоже и бысть; сего же Котопан побиша каменьем Корсуньстии людье.

『ある時，ロスチスラフがおのれの親兵団と共に酒宴を張っていた時，間者は言った．〃公よ，（我は）汝のために飲もうと思う〃と．ところでその者に言った．〃飲め〃と．彼は半分飲みほし，ゆびをさかずきの中へ入れてから半分を公に飲むように渡した．というのは（彼は）爪の下に死の毒薬をつけていたからである．しかして，公に渡した．八日目に死ぬであろうと予言した．彼（公）が飲みほしたとき，間者はコルスニに来たり，今日ロスチスラフが死ぬであろうと伝えた．しかしてその様になった．この間者をコルスニの人々は石で打ち殺した』

此処には，かすかに，酒宴の席での発言の片鱗がうかがわれる．公を祝福して酒はいをのみほそうというたぐいの言葉である．こゝでは≪княжю! хочю на тя пити≫という言葉として書きとられている．宴会でのこの様な発言の根跡は年代記にはほとんど記録されていない．然し，讃辞や祝福の言葉や，威勢のよい自慢や，時には巧みな権力者への追従の言葉が多くのべられたことであろう．愛想言いの役目をもつたものたち≪ласковьци≫や

お祝いを述べる役目の連中≪праздьнословьцы≫，時には宴会の出席者を笑わせて会を陽気にさせる連中≪смехословьцы≫などがいた．『豊かなる者及び貧しきものについての物語』≪Слово о богатом и убогом≫の伝えるところである．或はまた．ダヴイドの子ヴオロジメル（1139～1151）の銀製の酒はいに彫り込まれている次の様な文章からも，宴会での発言の模様がうかがわれる．

≪А се чара князя Володимирова Давыдовича, кто из нее пьет, тому на здоровья, а хваля бога своего и осподаря великого князя≫

『これはダヴイドの子ヴオロジメル公がそれより飲んだ酒はいである．健康を祝し，おのれの神と君主なる大公をたゝえて』

ブイリーナが伝えるヴラジーミル公のもとにおける酒宴での自慢話などはともかくとして，少くとも，その席が乱れる前には形式的な一定の発言があつたにちがいない．その様な言葉が，多くは公たちへの讃美や祝福の言葉であつたことは当然であろう．年代記にはその言葉が直接には反映しなかつたにしてもその表現形式や手法が年代記文章の一部のさゝえになつていた筈である．口頭だけによるこの様な酒宴での讃美の言葉が，『イーゴリ遠征物語』の結びの一節に力強く反映したことは既に周知のことである．即ち，その一節とは，

Солнце светится на небесе, Игорь князь в Руской земли. Девици поют на Дунаи, вьются голоси чрез море до Киева. Игорь едет по Боричеву к святей Богородици Пирогощей. Страны ради, гради весели. Певше песнь старым князем, а потом молодым пети: Слава Игорю Святъславличю, буй туру Всеволоду, Владимиру Игоревичю. Здрави князи и дружина, побарая за христьяны на поганыя плъки!

Князем слава , а дружине!

『太陽は天に輝き，イーゴリはルシの国に． 乙女たちはドナイ河に歌い，その声は海を越えてキエフに及ぶ． イーゴリは馬を進めてボリチエフをのぼり，聖母教会にと進み進く．国々はあげて喜び，町々は歓呼しぬ．古き公たちに歌をばさゝげ，つゞいては若き公たちにも歌いつぐべし．スヴイヤトスラフの子イゴリに栄あれ．荒々しきおの子なる，フセヴオロドに，イーゴリの子ヴラジミルに栄あれ．公及び親兵団よ，すこやかなれ．キリスト教徒のために異教の軍勢を戦い散らせし者たちよ．公に栄あれ，親兵団に栄あれ！』

この様な歌をさゝげ得られた詩人は，勿論，一世の天才であつただろうが，ひるがえれば，彼こそ，実に，古くからの公たちの酒宴の席に欠かせぬ讃美の言葉の述べ手たちの頂点に位するものであつた．勿論，多くは，親兵団の一員か，さもなくば，常にその周辺にいた誇れ高い文人たちであつただろう．『イーゴリ遠征物語』の締めくくりの一節を頂点に押し立てるまでには，実に数多くの同種の讃辞が多くの酒宴で述べたてられたことであろう．その場合，もとより，その酒宴は公の家数に公を交えて催されたものであつた．然し，その様な酒宴での言葉が公の宮廷の場合だけに限られた筈はなかつた．また，公への讃美が酒宴の席だけでおこなわれた筈もなかつた．権力者への讃美の言葉は，もつと広く種々の場合に述べられた筈である．それはもう，単なる口頭の言葉ではなくて，歌唱せられるべき歌であつたかも知れない．例えば，『過ぎし年月の物語』にもその事情の断片が読み取られるのである．6575年の項の終末近くに次の様な一節が読み取られる．

Людье же кликнуша и идоша к порубу Всеславлю;
Изяслав же се видев, со Всеволодом побегоста
с двора, людье же высекоша Всеслава из поруба,

в 15 день сентября, и поставиша и среде двора княжа; двор же княжь разграбиша, безчисленое множьство злата и сребра, кунами и белью. Изяслав же бежа в Ляхы.

『そこで人々は叫び声をあげて，しかして，フセスラフの牢に向つて進んだ．ところで，イジヤスラフはこれを見て，フセヴォロドと共に屋敷から逃げた．そこで人々はフセスラフを牢から連れ出した．九月十五日であつた．しかして（人々は）彼を公の屋敷の中央にすえた．そこで（人々は）公の屋敷をりやく奪した．黄金と銀，貨幣と獣皮の無数を．ところでイジヤスラフはリヤヒに逃亡した．』

この一節は或は何気なく読み過されるかも知れない．然し，訳文中に下線をほどこした『すえた』≪поставиша≫という一語は注意を要するところである．民衆が捕われの身である領主を牢から救出し，公の『屋敷の中央に』≪среде двора княжа≫すえたとは何であるのか．この者こそ我等の領主であり，公たる者であるということを示す象徴的行為に過ぎなかつたと考えてよいであろうか．この『すえた』≪поставиша≫という複数三人称アオリスト形は，単にそれだけのことを意味したにすぎないであろうか？　この点は随分昔から年代記者が迷つた個所であつたと思われる．というのは，写本によつて見れば，この言葉が種々のバリアントをもつているからである．例えば，トロイツキー年代記は≪поставиша≫とせずに≪преставиша≫と書きとつている．明らかに，単に『すえた』のではなくて，王者或は公としてすえたことを語りたかつたのであろう．по—という接頭詞がпре—と変えられているからである．また，ラジヴイロフスカヤ写本≪Радзивиловская рукопись≫では≪прославиша≫という言葉になつている．明らかに『讃えた』ことであり，ほめ歌を歌つたことである．勅令による年代記全集才一巻；1846年版

では，このпрославиша は誤記であると考えられているらしいが，おそらく，単なる誤記ではなかつたであろう．поставиша にしろ，преставиша にしろ，прославиша にしろ，おそらくは同じことを表現しながら，その用語だけを違えていたものに相違ない．屋敷の中央にすえ，そのことによつて真の公であると萬人が承知し，且つまた，即位或は復位の折のほめ歌のようなものをフセスラフに全員がささげ唱したのであろう．それは，あわたゞしい戦いの中での，とりあえずの行事であつたために，内容よりも表現用語の上だけにても，あわたゞしさを示そうとして，『すえた』≪поставиша≫とだけ書きとめたのであつたにちがいない．即位や勝利の折における公への讃め歌が広く行われ，然も，その歌のにない手たちが民衆であつたことを示すに充分な証拠である．

この様に，用語の点にまで深いさぐりを入れなくても，用語の額面通りの受け取り方で明らかにこの証拠を示す記録がある．例えばネストルのテキストが終つてから後の記事であるが，イパーチー年代記の6759年終末の一節に詳しく然も直接的に次の様な文章が書きとめられているのである．

Оттуда же князь Данил приде ко Визьне и прейде реку Наров, и многи крестьяны от пленения избависта, и песнь славну пояху има, Богу помогшу има, и приидоста со славою на землю свою, наследивши путь отца своего великаго Романа, иже изоострился на поганыя, яко лев, им же Половци дети страшаху.

『ところでダニール公は其処からヴイジナに到着し，ナロヴイ河を越えた．しかして，多くのキリスト教徒（農民）を捕われの身から救つてやつた．しかして，（人々は）彼等二人，及びこの二人を救い給いし神に向つて，ほめたゝえの歌を唱つた．しかし

て，（二人は）栄与にかがやいておのれの国に帰りついた．おのれの大いなる父ロマンの道をついだ．彼（父ロマン）こそは，ライオンの如く異教徒たちに対峙し，ポロヴエツの者共は彼をおそれていたのである』

此処には戦勝に際しての公への民衆のほめ歌の存在が鮮かに書きとめられている．『過ぎし年月の物語』がその様なほめ歌の文句を直接に書きとめている個所は勿論一個所も見当らないが，少くとも，口頭民衆語を『物語』が大きな基盤にし，素材にしていたことは充分うかがい知ることができる．『物語』が基盤にし素材にした民衆の口頭語とは，日常の言葉使いではなくて，民衆なりの芸術的表現をもつ口頭語であつた．或は民衆の上に立つ公たちの言葉使いであつた．この多少とも芸術的な口頭語の表現力の豊かさや彫りの深さを感じさせる年代記の記事が幾つか求められるのである．表現力の彫りの深さは，ほめ歌よりも，むしろ，悲しみにあふれる事件の嘆きの言葉に現れるであろう．或は深刻で尊厳なる誓いの言葉にも現れるであろう．事情そのものが口頭語に高い表現力とその彫りの深さとを要求する場合が多かつた．その様な事情の場面と，其処で語られた言葉とを書き取つている個所は年代記の中に数多く発見し得る．

例えば，ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー各年代記の6527年の冒頭の記事は，とむらい合戦の話であるが，此処には，開戦に当つて悲痛な声が生のまゝ躍動しているように思われる．

В лето 6527.
Приде Святополк с Печенегы в силе тяжьце, и Ярослав собра множьство вой, и взиде противу ему на Льто. Ярослав ста на месте, идеже убиша Бориса, въздев руце на небо, рече: "кровь брата моего вопьеть к тобе, Владыко! мьсти от крове праведнаго сего, якоже мьстил еси крове Аве-

левы, положив на Каине стенанье и трясенье; тако положи и на сем". Помоливъся и рек: "брата моя! аще еста и телом отсюда, но молитвою помозета ми на противнаго сего убийцю и гордаго". И се ему рекшю, поидоша противу собе, и покрыша поле Летьское обои от множьства вой. Бе же пяток тогда; въсходящю солнцю, и сступишася обои, бысть сеча зла, яка же не была в Руси, и за рукы емлюче сецяхуся, и сступашася трижды, яко по удольем крови тещи; к вечеру же одоле Ярослав, а Святополк бежа.....

『6527年.

スヴイヤトポルクはペチエネギ（人）と共に大いなる軍勢をひきいて来たり，しかして，ヤロスラフは多くの戦士を集め，彼に向つてリト（河）に出陣した．ヤロスラフはボリスの殺された場所に立ち，天に向つて両手をあげて言つた．〃わが弟の血が汝に向つて号泣するのである．主よ！　この正しき人の血の復しゆうをなせ．汝がカインに叫びとおそれを与えて，アヴエルの血の復しゆうをなした如くに，このものに対しても同じことをなせ〃と．祈つて言つた．〃我が兄弟よ．たとえ，汝等の肉体が我等から離れたとしても，祈りを以て我が傲慢なる敵，殺人者に抗して我に助力を致せ〃と．しかして彼はかく言つて，（彼等は）それぞれに兵を進め，しかしてリトの野を両方より多くの戦士で蔽つた．その時は金曜日であつた．太陽が昇るとき，両軍は相会した．ルシには無かつたほどの激戦があつた．取り組み合いの戦いを行い，三度相会した．血が谷間に流れたほどであつた．ところで夕方近くにヤロスラフが打ち勝つて，スヴイヤトポルクの方は逃走した・・・・』

此処における〃　〃中内の言葉は，『過ぎし年月の物語』全体

を通じての最も熱つぽい言葉の一つである．キリスト教が年代記によれば，この年よりも十年ほど以前にヴラジミルによつて公式に受け入れられているから，この台詞の中のカインとアヴエルの比喩は，おそらく，そのまゝの言葉通りのものであつたであろう．後代の書き加えではないように思われる．激烈にして沈痛な生の言葉であつたと考えてよいであろう．この生の言葉が年代記者の記述の書き言葉の表現を突き抜け，むしろ，その言葉のつなぎ或は説明としての役割を記述文がつとめている感さえ抱かせる．そして，この生の言葉の力に押された記述文さえも，全体的に抱括して見るとき，この一節がロシアの古い戦記物語の中でも才一級に位し得るほどのものに引きあげているのに気づくであろう．おそらくは，この記述文も，〃　〃印内の生の言葉を生かすために，共に伝えられた戦争叙事詩の一節であつたにちがいない．金曜日であつたという話も，後の『イーゴリ遠征物語』が同じく金曜日の戦いをのべているのと照合するとき，今は失われた叙事詩のかすかなタイプを見せられるように思われる．ともあれ，切実な場面での口頭の古代ロシア語の表現力の高さは此処に充分示されているとすべきである．不幸な兄が同じく不幸な弟をなぐさめて，兄弟のきづなの強さを示し，激励し，涙ながらに立ちあがろうとする場面での彫りの深い言葉を，『過ぎし年月の物語』は，6586年の項の前半のところで書きとめている．これもまた，その一句一句の短かさや，語りかけの呼吸から見て，ほとんど語られたまゝの生の言葉であつたであろう．弟フセヴロド≪Всеволод≫を慰さめ励ます兄イジヤスラフ≪Изяслав≫の言葉である．

И рече ему Изяслав: "брате! не тужи; видиши ли, колико ся мне сключи? первое, не выгнаша ли мене и именье мое разграбиша? и пакы кую вину вторую створил бех, не изгнан ли бех от ваю брату

своею? не блудил ли бех по чюжим землям, именья лишен бых? не створих зла ничтоже, и ныне, брате, не туживе; аще нама причастье в Русскей земли, то обема, аще лишена будеве, то оба, аз сложю главу свою за тя".

『しかして，イジヤスラフは彼に言つた．〃弟よ！　悲しむな．見るがよい．わが身には，いくばくの災禍が起つたことであろう．先づ才一に，我は追放されたではないか．また．我が財産はりやく奪されたではないか．さてまた才二には，我はいかなる罪をおかしたというのか．我は，汝等わが兄弟によつて追放されたではないか．我は見知らぬ国々をさまよつたのではなかつたか．いかなる悪をも（我は）なさざりしに，財産を失つたではなかつたか．しかして，今，弟よ，悲しむではない．もし，我等二人にルシの国において領地が与えられるならば，（我等）二人に（与えられるの）であり，もし，（我等二人が）（分前を）失うならば，二人ともが（失うの）である．我は汝のためにおのれの生命をすてるであろう〃と』

才一に気づくことは，この一節における否定表現の豊かさである．その数から見て，≪не≫は実に六個をかぞえるのである．記述文にしろ，直接話法的な語り文にしろ，これほどの否定表現の連続は，今まで一度として出現したことがなかつた．この否定表現がその数を豊かに持つていることだけに眼を奪われてはならない．否定表現による命令法を『悲しむな』≪не тужи≫と二人称単数形で始めた語りかけは，多くの否定形を内包しつゝ，最後に同じ命令法を今度は≪не туживе≫と変形して結んでいる．この先頭と末尾における否定形での命令法の間に組み込まれた否定表現と肯定表現の交替の見事さを注目しよう．

『人々が我を追放したのではなかつたか？』

≪не выгнаша ли мене ?≫

という否定表現による問いかけは，『我は人から追放されたのだ』という事実を相手に確認させる最高の手段であつただろう．反論し難く説得的であると同時に，相手の不幸よりも，我が不幸を否応なしに大きく印象づける．同時にまたそれは，この上ない強力な慰めと，不幸にめげない激励の用を達し得るものであつた．然も，この否定表現による問いかけは，その直後に，今度は肯定表現で

『我が財産を人々はりやく奪しただろう？』

≪именье мое разграбиша ?≫

と続ける．否定表現の問いかけと肯定表現の問いかけを重ねることによつて，その表現効果は極度に増大したのである．否定と肯定の一対を以て問いかけた言葉は，当然，『私は何の罪も犯していないのに』と否定表現がつゞくべき筈の所を，更に逆にひねつて，

『では才二に如何なる罪を私が犯したというのか』

≪кую вину вторую створил бех≫

と肯定表現を用いた．逆にひねられただけ，この自然の勢いに反した表現は相手の胸に突きささつたであろう．この様にして才一段を終つた語り手は，次の才二段でも，二度の否定表現を用い，その間に一つの肯定表現を組み込んでいる．この二段に分かれた内容を，前後に否定の命令法で締めくゝり，その表現力によつて，相手を完全におのれの土俵に入れる．そして，二人のきづなを説き，協力を約し，最後に生命の献上をも辞さない決意の表明によつて，慰めと励ましと協力の心と一挙に述べきつたのである．

喋り言葉の切実さによる彫りの深さは，此処で完全に詩的表現をも超えた．叙事詩の域をもぬきんでたと言えるであろう．古代ロシアの喋り言葉の到達し得た表現力の高さを示す絶好の例であろうと思われる．

この喋り言葉の到達点は，日常口頭用語の域を脱して，高揚し

た雄辯術的な用語へと進み，口頭文語とも言うべき位置にあつたと考えてよいであろう．そして，この口頭文語は年代記者によつて直接そのまゝに近い形で織り込まれ，或はまた間接的にその表現術を利用されることによつても，色濃く『過ぎし年月の物語』の中に反映したのであつた．反映したというよりも，年代記者の記述が，そのような口頭語を何にもまして最も大きな文章基盤にしていたのであつた．だから，『過ぎし年月の物語』の文章の皮を一枚はぎ取つて見ると，その下には，庶民の生活が創り出した庶民の言葉の臭いが発散している．特にキリスト教にまつわる多くの物語を除外した個所に，その臭いは強烈である．『過ぎし年月の物語』が立脚し利用したそれら庶民の創造になる言葉を実際に求めてみよう．

— И —

明瞭に庶民の言葉を書きとめているものの一に諺が数えられる．『過ぎし年月の物語』が年号を設定する以前の個所に，『オブレは体が大きく，心がたけだけしかつたので，神が彼らをほろぼし給うた．ことごとく死に，一人のオブリ人も残らなかつた．今日に至るまでもルシには，オブレのようにほろびたというたとえがある』≪Быша бо Обърѣ тѣломъ велици и умомъ горди, и Богъ потреби я, помроша вси, и не остася ни един Обърин; есть притъча въ Руси и до сего дне: погибоша аки Обре≫という一節がある．此処に引用された『諺』或は『たとえ』≪притъча≫は，年代記者がわざわざ断り書きをしているように，庶民に流布した言いならわしであつた．『オブレのようにほろびた』≪погибоша аки Обре≫とは，全く端的な庶民語の原型のまゝの反映であつた．（『古代ロシア研究』才一号，p.42～p.43参照）．

オブレ≪Обре≫という種族名は，その後の『過ぎし年月の物

語』には一度も出現しないが，『ほろびた』≪погибоша≫――≪погынути, погыбнути, погибнути, погинути≫――は，例えば以前に引用したヤンの父の言葉にも見受けられたところである．（6551年の項）．

また6411年の項の末尾に，（『古代ロシア研究』才三号，p.16～p.17参照）『人々はオレクを霊験あるものと呼んだ』≪прозваша Ольга вещий≫という一節にみられる形容詞≪вещий≫『霊験あるもの』という言葉も，人々の間の言葉であつたであろう．同時にこの言葉は『イーゴリ遠征物語』においてバヤン≪Боян≫への讃辞として用いられるほどの，熱つぽい叙事詩言葉でもあつた．

6453年の項にも，鮮やかな庶民の言い廻しの反映がみとめられる．それは，イゴリに攻められるドレヴリヤネの公マルを中心とした相談の言葉である．（『古代ロシア研究』才五号，p.3参照）『もしも狼が羊たちのもとへ絶えず訪れるならば，もしそれを（人々が）殺さなければ，群全部をくわえ出すものである．これもまたそうである．もしも（我々が）彼を殺さなければ，我々すべてを（彼は）滅ぼすであろう』≪аще ся въвадить волкъ въ овцѣ, то выносить все стадо, аще не убьють его; тако и се, аще не убьем его, то вся ны погубить≫ この一節の前半はおそらく当時の諺のような言い廻しであつたであろう．然もそれは，武人たちの言葉ではなくて，牧畜者や農民たちの言葉であつたにちがいない．狼にもたとうべきイゴリの攻撃を憎悪し，イゴリを殺して禍を排除しようという相談の決定に際して，その様な言葉を正当化のために使用したということは，同時に，この庶民の言葉の中に含まれた高い規範性にあやかろうとしたためであろう．この庶民の言い廻しは既にそれだけ高い水準に達していた．年代記者は，それを決して見過さなかつたのである．でき得る限り利用したのであつた．

高度な庶民用語による表現を年代記者が利用した個所は，普通の記述文の中にも数多く認められる．先にも引用した6479年のスヴイヤトスラフの物語の一節に，『しかして夕方近くスヴイヤトスラフは勝つた．しかして，槍でもつて町を取つた』≪И къ вечеру одолѣ Святославъ, и взя градъ копьемъ≫という言葉があつた．『槍でもつて町を取つた』≪взя градъ копьемъ≫とは，実は，『突撃によつて町を占領した』という意味なのである．これが純粋の話し言葉から出た用語であることをイパーチー年代記だけが物語つている．話し言葉から出た用語であることの断層を，如何にも埋め合わしたいもののように，其処には『見よ，町は我がものなりと言いつゝ』≪рькя: Се городъ мой≫と話し言葉そのものを直接話法で書き加えているのである．突撃を槍で以て言い替える庶民的表現の巧みさを，『過ぎし年月の物語』の記者は，利用しながら，おそらく忘れ得なかつたのであろう．再び6605年の項でも，同じ表現を用いて，ヴオロダリとヴアシリコの二人が『槍でもつて町を取り，火でもつて焼いた』≪взяста копьемъ градъ и зажгоста огнемъ≫と記述したのであつた．或は忘れ得なかつたというよりも，その様な用語が既に普及していたのだと考えた方がよいであろう．

これよりも，もつと庶民的な言い廻しが普通の記述文の中に利用されたのが，6476年の項の末尾の一節である．『スヴイヤトスラフはこれを聞いて，おのれの親兵団と共に急ぎ馬に乗り，キエフに来たつた』≪То слышавъ Святославъ, вборзѣ всѣде на конѣ съ дружиною своею, и приде Кіеву≫『馬に乗つた』≪всѣде на конѣ≫という言葉に注目してみよう．親兵団と共に馬に乗つたのに，何故『乗つた』≪всѣде≫は三人称単数アオリスト形なのか．『馬に』≪на конѣ≫は理論通り複数対格形ではないか．親兵団を引きつれて，何頭もの馬に乗つたのは，スヴイヤトスラフ公たゞ一人であつた筈

がない．一人は一頭の馬にしか乗れない．年代記がそんな文法上の誤謬を犯すとは考えられない．実は『馬に乗つた』とは，庶民的な表現による『出陣した』という意味なのである．引き具した親兵団と，多数の馬にそれぞれまたがつて，先頭に立ちつゝ出陣して行つたのは，英雄スヴイヤトスラフであつた．三人称単数アオリスト形は，だから庶民の表現を持ちこみつゝ心にくいばかりのレトリツクであつたというべきである．『過ぎし年月の物語』の原型記者に見習つたその後の年代記者たちは，この庶民表現利用の見事さに麦々あやかつたもののように思われる．例えば，ノヴゴロド第一年代記には，6738年の項に，直接話法による言葉で≪Как отець твои рекль быль въсѣсти на коне на воину≫『汝の父は，馬に乗りて戦いにいでよと言つたが』とあり，6848年の項にも，今度は記述文として，≪быша Новогородци всели на коня в Торжекъ≫『ノヴゴロド人たちはトルジエクに出陣した』とある．プスコフ第一年代記にも≪на конь всѣсти и воевати Нѣмець понти≫『馬に乗りネメツを撃ちに行かんと』とある．いづれも，出陣することを内容として，時には，実際に馬上の人となることの映像を強く，時にはその映像を弱くして，それぞれに勇壮さをみせようとした記述であつた．だから『馬に』という言葉が，時には前置格に，時には対格に，また同じ対格であつても，時には主対格に，時には生対格に動いていた．此処には，まだ，古代ロシア語の全き自由さが思いのまゝに活用されていたのである．そのことによつて，表現の軟かさとふくらみとが存分に発揮された．庶民表現の成句のようなものを，年代記者が文学用語に汲み取つて来る時の脈前を見せつけられるように思われる．

『過ぎし年月の物語』が記述する年号順に拾いあげれば，庶民の諺が次に引用される個所は6488年の項である．『しかして町に大いなる飢えがあつた．今日に至るまでもノロドニヤにおける

ような災厄〃というたとえがある』≪и бѣ гладъ великъ въ немъ; есть притча и до сего дне: бѣда аки в Ролѣ.≫(『古代ロシア研究』才六号p.14～15参照)

つづいて,同じ6488年の項に,要求をいれられなかつたヴァリヤーグ人≪Варяг≫がヴラジミルに言う言葉が記されている.『しかしてヴァリヤギは言つた.〃汝は我々をあざむいた.我々にグレキへの道を示せ〃と』≪и рѣша Варязи: 〃сольстилъ еси нами, да покажи ны путь въ Греки〃≫この中の庶民表現『道を示す』≪показати путь≫とは,何であつたか? 『お前の出て行く方向はこちらである』と言つて,退出の道を指し示すことから発した成句であつただろう.やとい兵ヴァリヤーグがヴラジミル公に『道を示せ』とは,だから,やとい兵の任を解除して,ギリシアへ行かせて呉れという要求であつたにちがいない.やとい兵の任を解除して自由行動にまかせることを≪показати путь≫『道を示す』という庶民の言葉であらわしたものである.然し,この成句がそれだけのことをしか意味し得なかつたのではない.『馬に乗る』場合と同じように,この『道を示す』という言葉は,もつと大きなふくらみをもつていた.不行跡な,時には無能な公を王座から追放する時にも『道を示す』という言葉を年代記者たちは利用したのである.例えば,ノヴゴロド才一年代記6678年の項には≪И, съдоумавъше, Новъгородьци показаша путь князю Романоу≫『しかして,ノヴゴロド人たちは相談して,ロマン公に道を示した』とあり,明らかに公の座から追放したことなのであつた.イパーチー年代記6682年の項にも,今度は,直接話法の言葉として≪Брата нашего Романа вывелъ еси изь Кыева, а намъ путь кажеши и изь Русьскои земли безъ нашеѣ вины≫『汝は我等の兄弟ロマンをキエフから導き出しておいて,我々の罪はないのに,ルシの国からさえ我々に道を示

すのだ』とある．これもまた，追放することであつた．おそらくは，追い出すという庶民の成句を『過ぎし年月の物語』の記者は，やとい兵の放免という意味に採用したのであろう．この活達な表現への水準の高い内容の豊かな素材こそが当時の庶民の言葉であつたように思われる．

庶民の言葉使いを援用し或は成句を利用しながら，且つ，その言葉の裏側に秘められた過ぎし日の物語をも年代記者は発掘したように思われる．その代表的な個所が『過ぎし年月の物語』6492年の項である．(『古代ロシア研究』才六号 p.36 参照) 其処には，庶民の間に流布した言葉『ピシチヤナ人たちは狼の尾をこわがる』≪Пищаньци волъчья хвоста бѣгають≫という民間の諺のようなものが書きとめられ，それが，ルシ人がラジミチをののしる言葉であると記されている．そして実は，この言葉の由来が，その直前に書き出されているのである．即ち，ラジミチをヴオロジメルが攻撃した折の軍司令官≪воєвода≫の名がヴオルチイ・フヴオスト≪Волъчий Хвост≫（そのまゝ日本語訳をつければ『狼の尾』という意味）で，この軍司令官がピシチヤナ河のほとりでラジミチを打ち負かしたことに由来するというのである．この意味では，庶民の言葉が記述や表現に大きく利用されたというよりも，庶民の言葉そのものが記述の対象であつた．成句には成りきらない庶民の言葉と，その由来を書きとめた典型的な個所を6496年の項に見ることができる．『今日までもその様に呼ばれている≪ペルンの浅瀬≫とはこゝから名づけられた』≪оттолѣ прослу Перуняна рѣнь, якоже и до сего дне словеть≫にみられる『ペルンの浅瀬』という言葉である．古くドニエプル河にあつた幾つかの早瀬の下流にあつた中州のようなものを当時の人々が個有名詞的にそのように呼びならわしていたのであろう．ヴオロジメル公が洗礼を受けた後，キエフに戻り，丘の上のペルン（―― スラヴ原始宗教の主神；

おそらくは雷神で，木造）の像をはじめ多くの神像を破棄した折，河に流されたペルンの像が，早瀬を越えた直後，この中州に（或は文字通り浅瀬に）打ちあげられた．然し，早瀬を過ぎた後には，もう何処かの岸についても，再び突き離して流すことを命ぜられていなかつたので，ペルンの像は，おそらく，この浅瀬に流れついたまゝであつた——そういう記事の締めくくりに出て来る言葉であつた．歴史家は，或は，当時の古いキエフ文化圏の境界線を其処に見ようとするかも知れないが，むしろ，年代記者（たち）のあくことなきまでの説話の採集と庶民の言葉の利用と，そして，その掘り下げこそが此処では読み取られるべきであろう．

人々に言いならわされた個有名詞と，それにまつわる説話の採集で最も面白く，最も華やかな『過ぎし年月の物語』の記事は6500年の項である．ペレヤスラヴリ≪Переяславль≫という町の名の由来についての物語である．この町の名を≪Перея≫と≪славль≫とに分けて，前者を相手から『奪い取つた』と続み，後者を『栄光』と続みとつた．そして，何の栄光を，いつ，誰が，どの様にして，手に入れたかという物語を，おそらくは，既に現在には伝えられていない古いブイリーナ的な叙事詩によつて構成されたものを，年代記者は再編集しながら記録したものであろう．この6500年（西暦992年）の項の記事とは，次の様なものである．ラヴレンチー，イパーチー，フレヴニツキー，トロイツキー等の年代記によれば，

В лето 6500.
Иде на Хорваты. Пришедшю бо ему с войны Корватскыя, и се Печенези придоша по оной стороне от Сулы; Володимер же поиде противу им, и срете и на Трубежи на броде, кде ныне Переяславль. И ста Володимер на сей стороне, а Печенези на оной, и не смяху си на ону страну, ни они на

сю страну. И приеха князь Печенежьский к реке, возва Володимер и рече ему: "выпусти ты свой мужь, а я свой, да ся борета; да аще твой мужь ударить моим, да не воюем за три лета, аще ли нашь мужь ударить, да воюем за три лета". И разидостася разно. Володимер же приде в товары, посла биричи по товаром, глаголя: "нету ли такого мужа, иже бы ся ял с Печенежом?" И не обретеся никдеже. Заутра приехаша Печенези и свой мужь приведоша, и в наших не бысть. И поча тужити Володимер, ся по всем воем, и приде един стар мужь ко князю и рече ему: "княже! есть у мене един сын меншей дома, а с четырми есмь вышел, а он дома; от детьства бо его несть кто им ударил: единою бо им и сварящю, и оному мьнущю усние, разгневавъся на мя, преторже череви рукама". Князь же се слышав рад бысть, посла по нь, и приведоша и ко князю, и князь поведа ему вся; се же рече: "княже! Не веде, могу ли ся, и да искусять мя: нету ли быка велика и силна?" И налезоша бык велик и силен, и повеле раздраждити быка; возложиша на нь железа горяча, и быка пустиша, бык мимо и, и похвати быка рукою за бок, и выня кожю с мясы, елико ему рука зая; и рече ему Володимер: "можеши ся с ним бороти". И наутрия придоша Печенези, почаша звати: "не ли муда? Се нашь доспел". Володимер же повеле той нощи облещися в оружье; и приступиша ту обои. Выпустиша Печенези мужь свой, бе бо превелик зело и страшен; и выступи мужь Володимерь, и узре и

Печенези и посмеяся, бе бо середний телом. И размеривше межи обема полкома, пустиша я к собе, и ястася, почаста ся крепко держати, и удави Печенезина в руку до смерти и удари им о землю; и кликнуша, и Печенези побегоша, и Русь погнаша по них секуще, и прогнаша я. Володимер же рад быв, заложи город на броде и нарече и Переяславль, зане перея славу отрок от. Володимер же великим мужем створи того и отца его. Володимер же възвратися в Кыев с победою и с славою великою.

『6500 (992)年.

(ヴオロジメルは) ホルヴアトに進攻した. 彼がホルヴアートの戦いからもどつて来たとき, 見よ, ペチエネギがスラ河の対岸から来たつた. そこで, ヴオロジメルは彼等に向つて進攻し, しかして, トルペジ河のほとりの, 現在ペレヤスラヴリのある所の浅瀬で彼等にまみえた. しかしてヴオロジメルは此方の岸にとゞまり, ペチエネギは対岸にとゞまつた. しかして味方は対岸に進むことを, また敵は此方の岸に進むことを敢えてなし得なかつた. しかして, ペチエネギの公が河に(馬を)乗り進め来たり, ヴオロジメルを呼び出して彼に言つた. 〃汝は汝の家臣を出せ, 我は我が家臣を出すであろう. 二人を相斗かわそうではないか. もし, 汝の家臣が我が家臣を打ちまかすならば, 三年の間, 戦わぬことにしよう. もしも, 我々の家臣が打ちまかすならば, 三年の間戦うことにしよう〃と. しかして, (二人は) 別々の側に分かれた. そこで, ヴオロジメルは陣営の中にもどり来たり, 各陣営へ布告者たちをつかわして言つた. 〃ペチエネグ人との(力くらべ)を引き受けるような家臣はいないか? 〃と. 何処にも名乗り出る者はいなかつた. 翌朝ペチエネギが来たり, おのれの勇士を連れ来

たつたが，我々の中には（誰も）いなかつた．しかして，ヴオロジメルは悲しみはじめ，すべての戦士たちのもとへ使者をたてた．しかして，一人の老令の家臣が公のもとに来たつて彼に言つた．〃公よ！我がもとには末の息子が一人家に残つている．ところで（我は）四人の（息子）と共に（戦いに）出で来たのであるが，彼は家に残つたのである．幼時から誰一人として彼を打ち得たものはない．或る時，我は彼をののしつたところ，彼は皮をなめしていたが，我に向つて激怒し，両手で腹の（部分）を引きさいだ〃と．ところで公は，これを聞いてよろこび，彼を迎えに使者をたてた．しかして，（人々は）彼を公のもとへ連れ来たつた．しかして公は彼に総てを物語つた．彼はこの様に言つた．〃公よ，我は（彼と力くらべをすることが）できるかどうかを知らない．我を試みさせよ．大いなる，しかして強き雄牛はおらぬか？〃と．大いなる，しかして強き雄牛を（人々は）見出した．しかして，（ヴオロジメルは）雄牛を怒らせるように命じた．（人々は）雄牛の上に焼けた鉄をのせ，しかして雄牛を放つた．雄牛は彼の傍を（走つた）．しかして（彼は）雄牛を片手で脇腹をつかみ，彼の片手がつかみ得るだけ，肉ごと皮をつかみ取つた．しかして，ヴオロジメルは彼に言つた．〃（汝は）彼と斗うことができる〃と．しかして翌日，ペチエネギが来たり，よばわりはじめた．〃勇士はいないのか？見よ，我々の（勇士）は準備がととのつた〃と．ところで，ヴオロジメルは，その前夜，武器を身につける事を命じておいた．しかして，すぐさま両者は相接近した．ペチエネギはおのれの勇士を出した．（その勇士は）きわめて背高く，おそろしかつた．しかして，ヴオロジメルはおのれの勇士を出した．しかしてペチエネギの勇士は彼を見て笑つた．というのは（こちらの勇士は）中位の体格だつたからである．しかして，両軍の間の場所をはかつて，彼等（二人）をそれぞれに向わしめた．しかして彼等（二人）は取り組み合つた．（二人は）互いに，し

つかりと取り組み合つた．（こちらの勇士は）ペチエネギ（勇士）を片手で死ぬほどしめあげ，地上に彼をたたきつけた．しかして，ペチエネギ人たちは叫び声をあげ，逃げ出してしまつた．ルシはその後を追つて斬り殺し，しかして彼等を追い払つた．そこで，ヴォロジメルは喜こび，（その）浅瀬のところに町を建て，それをペレヤスラヴリと名づけた．というのは，（その）下級従士が栄光を奪い取つた（ペレヤ・スラヴア）からである．ヴォロジメルはそこで彼及びその父を大いなる勇士にした．ところで，ヴォロジメルは，勝利と大いなる栄光と共にキエフにもどつた』．

この一節は，ペレヤスラヴリの町にちなんだ物語であると共に，その物語は，公や武人や，支配階級の伝承ではなく，完全に，ブイリーナに近い，全くの民衆の伝承作品であつたにちがいない．物語られている題材からして，ブイリーナの話をまざまざと思い出させる．年代記者たちが，この物語の一節に，どれほど手を加えて，『過ぎし年月の物語』の中へ織り込んだにしても，その表現のほとんどすべてが，庶民の言葉に由来することをかくせなかつた．語彙が何よりもそれを有力に証明しているし，文節の区切りにしても，そうである．年代記の中に古い庶民の言葉使いの最も鮮やかな反映を求めるとすれば，この一節を除いて，他にその典型を求めることは困難であろう．この一節のほとんど総ての言葉使いは，古いロシアの庶民の言葉から生まれたものであると考えてよい．『死ぬほど』《до смерти》などという一つ一つの庶民的表現をこの一節から抜き取つて来て説明する必要はないであろう．年代記者の手が加えられなかつたとも見られるほど，言葉使いの端々までが，庶民的表現を思わせるからである．

庶民的な言葉使いが巧みに記述文の中で利用された個所には，この他に，例えば，6527(1019)年の項の後半を取りあげることができるであろう．多くの年代記は，この項をヤロスラフ《Ярослав》とスヴイヤトポルク《Святополк》の戦いの記述に

当てている．スヴイヤトポルクを年代記者たちは，『呪われたる』≪окаянный≫と呼び，グレブ≪『хлеб≫を殺害した彼を憎悪して『この呪われたる悪しきもの』≪съ окаянный и злый≫と名づけて記述して来たが，遂に彼がヤロスラフに追いつめられて生命を絶つ個所に及ぶ．憎悪の念が庶民の間にこそ深かつたことを年代記者は説明的に記述することを避けて，此処で，庶民の口の端にのぼつている言葉をそのまゝ利用するのである．即ち，『ところで，彼の墓は今日に至るまでも荒野にあり，そこからは悪しき臭気が発散している』≪Есть же могыла его въ пустыни и до сего дне, исходить же отъ нея смрадъ золъ≫とある．これこそ，全く庶民が口頭で物語る説話の結びの言葉そのまゝではないか．

ところが，このスヴイヤトポルクを打ち果したヤロスラフが，都キエフに戻つて落ち着く最後の結びにおいても，再び，鮮やかに庶民の表現が利用される．『ところで，ヤロスラフはキエフに坐した．勝利及び大いなる功績を示して；おのれの親兵団と共に汗をぬぐつた』≪Ярославъ же сѣде Кыевѣ, утеръ пота с дружиною своею, показавъ побѣду и трудъ великъ≫とある中の『汗をぬぐつた』≪утеръ пота≫こそ，典型的な庶民表現の利用である．この言葉は決して単に汗をぬぐう動作だけをあらわしたものではない．先づ汗とは何であつたか．十一世紀初頭のロシア最古の文献である古代スラヴ語訳のオストロミールの福音書を以てこれを見ると，そのルカ伝中の≪ιδρως≫の訳語に当てゝいるから，たしかに『汗』であつたにちがいない．ところが，この言葉は非常に古くから面白い成句をなし易かつたものだと思われる．『功績』，『汗の結晶』，『遺産』という方向に意味の内容が転回して行つたように思われる．例えば，イパーチー年代記6648(1140)年の項には，その様な方向での意味で『見よ，偉大なるミスチスラフは，おのれの父，偉

大なるヴォロジメル・モノマハより，汗を引きついだ』≪Се бо Мьстиславъ великыи наслѣди от отца своего пть Володимера Мономаха великаго≫とある．汗とは即ち汗の結晶であり，政治的な遺産であつた．勿論，この場合の遺産とは，安楽を保証するようなものを意味せず，むしろ，より大きな苦労や努力を要求するような，マイナスの遺産である．『苦労を引きついだ』ことになるとも言えよう．だから，それは『偉大なる』≪великыи≫を冠して『大きな苦労』≪великыи потъ≫という成句にもなつて，同年代記の6788年の項には≪взяти с великимъ потом≫『大いなる汗を以て占領する』という言葉として用いられた．とすれば，『汗をぬぐう』とは，『苦労を終る』ということであると同時に，野戦から勝利をおさめて家郷にがいせんすることであつたと思われる．戦いに勝つて一段落し，ほつとすることであつた．『汗をぬぐう』≪утерети пота≫とは，少くとも，『過ぎし年月の物語』のこの項に関する限りでは，その意味で良いであろう．この言葉が如何にも労働庶民的な成句であるということの実証のためには，残念ながらこれだけでは不充分であるように思われる．文字を使いこなす古代ロシアの文人たちが創り出した文語的成句であつてもよいからである．だが，面白いことに，それを否定する実例がある．文語的成句であれば，意味の内容が大きくくずれることは少いと考えられようが，『汗をぬぐう』という成句は，『過ぎし年月の物語』のように，『ほつとする』というから，時によつて，とんでもない意味にずれ動いているのである．この意味の大きなずれ動きを，年代記者たちが，その時々に，勝手気まゝに利用していたとすれば，その成句は，決して彼等の文語的成句ではなかつたはずである．年代記者は，この成句を『ほつとする』という意味とは全く正反対に用いたことさえあつたのである．例えば，イパーチー年代記の6648(1140)年の項である．其処には，次の様な一節が

読み取れる．

『ヴォロジメルは，おのれ自からドン（河）に立ち，ルシの国のために多くの汗をぬぐつた』≪Володимиръ самъ собою постоя на Дону и много пота утеръ за землю Рускую≫

此処における『汗をぬぐう』とは，『困難に耐える』，『苦労する』，『努力する』という意味ではないか！　『過ぎし年月の物語』の場合とは全く正反対である．勝利をおさめてがいせんしたり，一段落の後ほつとすることでは決してない．≪утереть≫という動詞は，現代ロシア語ならば，完了体であろうが，古い時代には，『ぬぐい終る』，『ぬぐいつゞける』という体の区別はほとんど認められない．だから，体の区別の使い分けによつて，『苦労しつゞける』と『ほつとする』とを表現し分けることはできなかつたであろう

また，いづれの国にもまして，非常に長期間年代記が書きつがれ，書き写されて来たロシアでは，その仕事が文字通り聖なる業であつた以上，文人たちの文語による表現ならば，そのわくの内で正しく踏襲されたはずであつた．決して反対の意味で用じ成句が用いられることはなかつたと思われる．庶民の中に生きていたきわめて自由な成句が，年代記者たちによつて，それぞれの場所で効果的に汲み上げられて使用されたのであつた．だから，もし，裏から言うことを許されるならば，『過ぎし年月の物語』が1019年の項で『一段落してほつとする』という意味に用い，イパーチ一年代記が1140年の項でその反対の意味で用いた以上，この『汗をぬぐう』という庶民の成句は，少くとも，それぞれの作品が書きとめられた間，おそらくは百年ほども，庶民の間に変転しながら用いられていた成句であつたと言うことができよう．そして，その庶民の言葉使いを充分効果的に年代記者が利用し得るほどに，既に古代ロシア語の庶民の口頭語は高い表現力の水準に達してい

たと言える．

この民衆の言葉使いの高い表現力が先に引用した力比べや一騎打ちのような豪傑話をさえていた．その様な古い豪傑話は数多くの民衆の中に語りつがけられて，キリスト教輸入の時代を迎えた．教会や寺院の建立にまつわる寺伝のようなものに，この豪傑話がたくみに織り込まれたこともあつた．語りつがれた寺伝の中に，その典型的なものを『過ぎし年月の物語』は，いくつか書きとめているが，そのうちで，豪傑話を基礎にし，言うならば，キリスト教的文人の言葉ではなくて完全に民衆の言葉になる物語を求めてみよう．6530(1022)年の項は即ちそれであろう．

В лето 6530.
Приде Ярослав к Берестию. В си же времена Мьстиславу сущю Тмутороканю, поиде на Касогы. Слышав же се князь Касожьскый Редея, изиде противу тому, и ставшема обема полкома противу собе, и рече Редея к Мьстиславу: "что ради губиве дружину меэи собою? Но съидеве ся сама борот; да одолееши ты, то возмеши именье мое, и жену мою, и дети мое, и землю мою; аще ли аз одолею, то възму твое все". И рече Мьстислав: "Тако буди". И рече Редея ко Мьстиславу: "не оружьем ся бьеве, но борьбою". И ястася бороти крепко, и надолзе борющемася има, нача изнемагати Мьстислав, бе бо велик и силен Редея; и рече Мьстислав: "о пречистая Богородица! Помози ми; аще удолею сему, сзижю цеоклвь во имя твое". И се рек удари им о землю, и вынзе ножь, зареза Редею; шед в землю его, взя все именье его, жену его

и дети его, и дань възложи на Касогы. И пришед Тмутороканю, заложи церковь святыя Богородица, и созда ю, яже стоить и до сего дне Тмуторокани.

『6530(1022)年.

ヤロスラフがベレスチエに来たつた.この同じ時に,ミスチスラフはトムトロカニにいて,カソギ(人たち)を攻撃した.これをカソギの公レデジヤが聞いて,彼に向つて出撃した.しかして両軍が互に相対峙した時に,ミスチスラフに向つてレデジヤが言つた.〃何のために(我々二人は)お互いの間で親兵団を亡ぼすのか?むしろ(二人)自身が相会して戦おう.もしも汝が打ち勝つならば,わが領地,及び我が妻,及び我が子等を取るがよい.もしも我が打ち勝つならば(我が)汝のものを総て取ろう〃と.しかしてミスチスラフが言つた.〃さようにしよう〃と.しかしてレデジヤはミスチスラフに向つて言つた.〃武器で以て打ち合わず,取り組み合いで(やろう)〃と.しかして(二人は)激しく取り組み合いにかゝつた.しかして,永い間,彼等二人が戦つていた時,ミスチスラフは疲れはじめた.というのは,レデジヤは大きくて強かつたからである.しかして,ミスチスラフが言つた.〃おゝ,いと清き聖母よ! 我を助け給え.もしも(我が)この者に打ち勝つたらば,汝の名において教会を建てよう〃と.しかして,かく言つて,彼を大地に打ちつけ,しかして刀を抜いて,レデジヤを斬り殺した.彼の土地に侵入し,彼の総ての財産,彼の妻及び彼の子等を取り,カソギ(人たち)に貢税を課した.トムトロカニに帰り来たり,聖母教会の基礎をおき,しかしてそれを築造した.その教会は今日に至るまでもトムトロカニに立つている.』

これは,キリスト教輸入後に宗教人や文人の創つた寺伝的物語ではない.明らかに,先に引用したヴオロジメルの家臣が牡牛を

も打ち殺し得た力で敵の代表者と一騎打ちをする物語と全く同質のものである．いづれはその豪傑によつて打ち負かされる相手が巨漢で力が強かつたという内容まで同じであり，一騎打ちによつて勝負を決めようとする物語の内容も同じである．力が強く，巨漢である相手を味方の豪傑は小柄な体でありながら，『大地に打ちつける』≪ударити им о землю≫というくだりまで同一である．面白いことには，その打ちつける折の言葉使いまで完全に同じではないか．即ち≪им о землю≫……そのまゝに訳せば，その男をもつて大地を打ちすえるというのである．寸分違わないような内容を，これまた寸分違わない用語で述べているのである．

然も，この後者の一騎打ちの物語には，まざまざと庶民的表現が数多く顔を出している．例えば，ミスチスラフにレデジヤが提案する言葉≪не оружьем ся бьевѣ, но борьбою≫『（我々二人は）武器を以て戦おう』という個所の如きものはそれである．『（我々二人は）お互いに自分で取り組み合いをして相まみえよう』≪съидевѣ ся сама боротъ≫に見えるスビン形 боротъもまたこの同じ言葉使いであることに気づくであろう．普通，記録文献にみられる≪бороти≫という動詞は総て，『戦う』≪воевать≫ことであつて，あくまでも戦争をすることであつた．決して，素手での取り組み合いを意味したことはなかつた．勿論，例えば，古代スラヴ語 брати，古代高地ドイツ語perjan, berjan,（うつ），ラテン語ferio, ferire，サンスクリットbhara（戦）に対応する言葉ではあつても，取り組み合いでの優劣決定を意味するために古代ロシア語の文献がこの言葉を用いたことはなかつた．動詞としてではなくて，名詞の形≪борь≫或は≪борьба≫としては，多く，ラテン語の≪certamen≫に当るものとして用いられて来た．その内で，≪борь≫という形は，古代ロシア語文献に数多く用いられて，やはり，『戦闘』を

意味したが，不思議なことに，≪борьба≫という形では，ほとんど，出現しなかつた．スレズネフスキーさえも，この形での用例を，『過ぎし年月の物語』のまさにこの個所だけをしか示し得なかつた．そして，肉体だけでの取り組み合いを意味するものとして，そのために，彼はラテン語だけでcertamenという註をつけるにとどめたのであつた．古代ロシア語の文献には出現することの少い内容の言葉とは，即ち，文献語からは遠い庶民の口頭語であつたと考えてよいであろう．そして，何よりも，そのことは，年代記者が，これを直接話法の『』印の中だけでしか用いなかつたことによつて確認されるとしてよいであろう．ともあれ，庶民の口頭語が見事に一つの戦いの術語をさえ創り得ていたことを知ることができる．

戦争の決定的な勝利を誇らしく物語り，敵の完全な敗北をあざ笑うような，至つて直接的表現を取つた言葉使いが，庶民の言葉から汲み取られて，物語の結び言葉に用いられることがあつた．惨々に敵は敗退し，打ちひしがれ，残つたものは，いまだに『今日に至るまでも逃げ廻つているという』という結びの言葉である．おそらくは，子供だましに近い民衆説話の結びの言葉がそのまゝ用いられたものであろう．『過ぎし年月の物語』の中には，しばしば，この庶民の結びの言葉が用いられている．ラヴレンチーをはじめとする各年代記の，例えば，① 6544(1036)年の項の終り及び，② 6568(1060)年の項にある次の様な個所は各々その典型的なものである．

(1)..... и бысть сеча зла, и одва одоле к вечеру Ярослав. И побегоша Печенези разно, и не ведяхуся камо бежати, тоняху в Сетомли, ине же в инех реках, а прок их пробегоша и до сего дне.

『……しかして激烈な戦いがあつた．夕方近くになつて，ヤロスラフはかろうじて勝つた．しかして，ペチェネギ(人たち)

は，四方八方に逃げた．しかして，何処へ逃げるべきかを（彼等は）知らなかつた．（彼等は）セトムリ（河）に，他の者たちは他の河でおぼれ死に，彼等の残余の者たちは今日に至るまでも逃げ廻つている』

この≪пробегоша и до сего дне≫『今日に至るまでも逃げ廻つている』という庶民の言葉が，この引用文の冒頭の一節『しかして激烈な戦いがあつた』≪и бысть сеча зла≫という完全に文献記録語，特に年代記特有の決り文句に対応して締めくゝりに用いられたことは注目しておきたい．冒頭の一節が，もしも，締めくゝりの一節と同じく庶民的口語なら，『しかして大いなる戦いがあつた』≪и бысть бой велик≫となつたはずである．ところが，そうしないで，高い文体のまゝ≪и бысть сѣча зла≫とし，締びを庶民口語表現でとめたのはどうしてだろう．庶民口語表現が，冒頭の高い文体に充分対応し得るほどまで表現水準を高めていたからにほかならない．だからこそ，締めくゝりの決り文句のようにも使用されたのである．

(2) В лето 6568,

Преставися Игорь, сын Ярославль. В сем же лете Изяслав, и Святослав, и Всеволод, и Всеслав, совокупивше вои безчислены, поидоша на конех и в лодьях, безчислено множьство, на Торкы. Се слышавше Торци, убояшася, пробегоша и до сего дне.....

『6568(1060)年．

ヤロスラフの子，イゴリが死去した．この同じ年，イジヤスラフは，スヴイヤトスラフも，フセヴオロドも，フセスラフも，無数の戦士を集め，馬及び船で，数えきれぬほどの大軍を以て，トルク（人たち）に向つて進攻した．トルク（人たち）はこれを聞いて，驚怖した．（彼等は）今日に至るまでも逃げ廻つている』

この様に庶民の言葉は既に高い文体に組み込まれるまでに成長し，時には特別の術語にさえ生まれ変り得ていた．古い庶民の古代ロシア語は，年代記が書きはじめられる以前から，即ち，キリスト教文化の輸入以前から，キリスト教文化を摂取し，表現するに充分な発達と成長をとげていたと言えよう．キリスト教の教義は勿論のこと，主流的な文化をも，時には，主流の外側にまとわりつく民俗学的文化をも，古代ロシア語は充分に訳し込み得たし，また表現し得た．ビザンチンから伝わる文献上の，或は口うつしによる説話をまで楽々と充分に消化し得たのである．年代記者だけが消化し得たのではなくて，多くの人々が消化し得たものをこそ，年代記者が書きとめたのである．6572(1064) 年の項の後半に書きとめられた天兆の物語は，その恰好の例であろう．其処には次の様に書きとめられている．

В си же времена бысть знаменье на западе, звезда превелика, луче имущи акы кровавы, въсходящи с вечера по заходе солнечнем, и пребысть за 7 дний. Се же проявляше не на добро: посем бо быша усобице много и нашествие поганых на Русьскую землю, си бо звезда бе акы кровава, проявляющи кровопролитье. В си же времена бысть детищь вверьжен в Сетомль, сего же детища выволокоша рыболове в неводе, его же позоровахом до вечера, и пакы ввергоша и в воду, бяшеть бо сице: на лици ему срамнии удове, иного нелзе казати срама ради. Пред сим же временем и солнце променися, и не бысть светло, но акы месяць бысть; его же невегласы глаголють снедаему сущу. Се же бывають сица знаменья не на добро, мы бо по сему разумеем. Якоже древле,

при Антиосе, в Иерусалиме, случися внезапу по всему граду за 40 дний являтися на вздусе на коних рящющим, в оружьи, златы имуща одеже, и полкы обоявляемы, и оружьем двизающимся; се же проявляше нахоженье Антиохово на Иерусалим. Посем же при Нероне цари в том же Иерусалиме возсия звезда, на образ копийный, над градом; се же проявляше нахоженье рати от Римлян. И паки сице же бысть при Устиньяне цари, звезда возсия на западе, испущающи луча, юже прозываху блистаницю, и бысть блистающи дний 20, посем же бысть звездам теченье, с вечера до заутрья ,яко мнети всем, яко падають звезды, и пакы солнце без лучь сьяше; се же проявляше крамолы, недузи, человеком умертвие бяше. Пакы же при Маврикии цари бысть сице: жена детищь роди без очью и без руку, в чересла бе ему рыбий хвост приросл; и пес родися шестоног; в Африкий же 2 детища родистася, един о 4-х ногах, а другый о двою главу. Посем же бысть при Костянтине иконоборци, сына Леонова, теченье звездное бысть на небе, отторваху бо ся на землю, яко видящим мнети кончину; тогда же въздух възлияся повелику. В Сурии же бысть трус велик, земли разседшися трий поприщь, изиде дивно из земле мъска, человечьскым гласом глаголющи и проповедающи наитье языка, еже и бысть: наидоша бо Срацини на Палестиньскую землю. Знаменья бо в небеси, или звездах, ли солнци, ли птицами, ли етером чим, не благо бывають: но

знаменья сиця на зло бывають, ли проявленье рати, ли гладу, ли смерть проявляють.

『この同じ時に西方に天徴があつた．血の如き光をもつ，極めて大きな星が夕方から，日没の後に，登つて，七日間あつた．このことは善きことをあらわすものではなかつた．というのは，この後には，多くの内乱と，異教徒たちのルシの国に対する来襲があつたからである．ところで，この星は，流血をあらわして，血のよう（な色）であつた．この同じ時に，一人の子供がセトムリ（河）に捨てられた．この子供を，漁師たちが網で引きあげた．この子供を夕方まで（彼等は）見物して，再び彼を水の中へ投げ捨てた．というのは，（この子供は）かようなものであつたからである．（即ち），その顔には恥づべき器官が（あつた）．その他のことは恥の故に言うことができない．ところでこの時に先だつて，太陽も変化した．しかして，（太陽は）明るくなくて，あたかも月のようであつた．それを，文盲（の人々）はむしばまれていると言つている．ところで，これは良きことへの前兆ではないものだ．というのは，我々は次のことによつて知つているからである．即ち，昔，アンチオフの時代に，イエルサレムにおいて，突然，起つたことなのだが，全市にわたつて四十日間，馬に乗つて疾走し，武器をよろい，黄金の着物を着て，軍隊が空中に現れ，しかして，武器を振り動かして（見えた）．これは，イエルサレムに対するアンチオフの来襲を予告したのである．その後，ネロ帝の時代に，この同じイエルサレムで，町の上に槍の形をした星が輝き出した．これはローマからの軍勢の来襲を予告したのである．しかして再びウスチャン帝の時の時代に，こんなことがあつた．（即ち）星が西方において輝きだし，（人々が）それを燈明と名づけた光を発しつゝ，二十日の間，輝いていた．このことの後，夕方から翌朝にかけて，（諸々の）星の流れがあつた．（多くの）星が落ちるのだと総ての（人々）には思われたほどであ

る．しかして再び太陽が光線なしに輝いた．ところで，このことは，反乱，人々の病気及び死を予告するものであつた．ところで，また，マヴリキー帝の時代に次の様なことがあつた．（一人の）女が，眼もなく，手もない子を生んだ．この子の股部には魚の尾が生えていた．しかして，六本足の牡犬が生まれた．アフリキー（フラキヤ）では，また，二人の子供が生まれ，一方は四本足で，他方は二つ頭であつた．ところで，この後，レオの子で聖像破壊者であるコスチヤンテンの時代に，天に星の流れがあつた．（それが）地上に落ちて来たので，見た人々は（世界の）終りだと考えたほどであつた．その同じ時に，空気は非常に乾いた．スリヤ（シリヤ）では，また，大きな地震があり，大地が三ポブリシチエも裂け，地下から，不思議にもラバが出て来て，人間の言葉で物を言い，民族の進攻を予言したが，それは，（その通り）実現した．と言うのは，スラツイン（サラセン人）がパレスチナの地を進攻したからである．天における，或は星々における．或は，太陽における，或は鳥たち，或は他の何物かによる前兆は，善きことではないのである．しかし，かくの如き前兆は災厄を示すものであり，或は，軍勢の出現，或は飢え，或は死を予告するものなのである』．

さて，庶民の言葉が，特定の術語をさえ創り得るほどに発達していたことを示す例に話を戻してみよう．6601(1093)年の項に，ラヴレンチー年代記をはじめとする各年代記は，面白い言葉を用いている．それは，ポロヴエツ人たちの侵入を記録した一節である．

≪ и Половци пришедше къ валови, поставиша стяги своѣ, и налегша первое на Святополка и взломиша полкъего≫

『しかして，ポロヴエツたちは土塁に近づき来たり，おのれの旗を立て，しかして，先づ才一にスヴイヤトポルクに向つて攻撃

を加え，彼の軍隊を打ち破つた』

此処における『軍隊を打ち破る』≪взломиша полкъ≫という言葉に注目したい．полкъには『戦争』，『遠征』を始めとして『軍隊』，『軍勢』から『部隊』，『部分』，『陣営』，『人々』，『集団』に至るまで多くの意味を古代ロシア語は含んでいた．その内の『軍隊』という意味を取りあげて，それを『打ち破る』≪взломити≫とする表現は，多くの古代ロシア語の文献の中で，この一個所を探し出すのが精一杯であつた．具体的には，軍隊をほとんど皆殺しにするように打ち破つたことを意味したのではない布陣し，統制され，有機的に各部署が動いていた軍隊を，攻め込むことによつて，大混乱にまき込んだということである．打ち殺して，全滅させたということではなかつた．『打ち破つた』≪разбити≫，≪ударити≫，≪убити≫，≪удавити≫，≪раздавити≫のではない．≪взломити полкъ≫とは，全く古代ロシア語が独自に創り出した見事な術語であつた．イパーチー年代記に見える≪бѣгу ятися≫『逃亡を摂る』——→『逃亡する』『逃亡し出す』，同じ年代記の≪не время≫『時ではない』——→『不適当である』，ラヴレンチー年代記にみられる≪вести за кого≫『誰々のところへ連れて行く』——→『嫁にやる』，≪водити ротъ≫『喜いにみちびく』——→『喜わせる』，≪воевати≫『戦う』——→『破壊する』，等々，或は，例えば『戦争』≪война≫を使用して，≪ити на воину≫，≪ити в воину≫，≪выходити на(в) воину≫，≪ехати на(в) воину≫，≪ходити воиною≫，≪наѣхати воиною≫，≪принити воиною≫等に組みかえる言葉なども，総て，庶民用語に発した術語的な言葉であつた．この様な例を，『過ぎし年月の物語』の中に拾いあげて行けば，おそらくきりがつかないほど多いであろう．

これは要するに，ロシア年代記，中でも，最古の『過ぎし年月

の物語』の用語は，非常に多く，古い口頭語に依存していたということなのである．年代記は，勿論，古いロシア社会の歴史的な現実を反映したものにはちがいないが，むしろ，それ以上に，その現実の中で実際に喋られていた言葉を生き生きと伝えるものなのである．実際に喋られていた口頭語の最も直接的な影響を，我々は，直接引用で『』印をつけるべく年代記者が書きとめた個所に，また，年代記者が時には一人称で進める物語の個所にも，充分認めることができたのであつた．そして遂には，古い当時の術語の中にさえ，民衆口頭語の強い影響のあとを見ることができたのである．

『過ぎし年月の物語』を歴史書であるとするにしても，文学書であるとするにしても，或は古代ロシア語の宝庫であるとするにしても，それぞれの語学，文学，歴史の面での最も独自な，最も核心に近い，最も興味ある内容は，結局，古いロシア社会の各層の口頭による文化を基礎にしたものであつた．

しかし『過ぎし年月の物語』が基礎にし，よりかゝり，或は素材として利用したものの総てが，口頭による古い文化だけであつたわけではない．十一世紀から十二世紀にかけての，文字による文献もまた此処には多く利用されている．口頭文化から文字文化への，まさに，過渡期に創られた作品であつた以上，次には文字文化の面での検討を行わなければならないであろう．

— K —

伝承作品を中心とし，庶民の言葉使いまでも含めた文字以前の古いロシアの口頭文化が，文字とキリスト教の輸入後，文字文化へ移行しても，全く変質してしまうはずはなかつた．『過ぎし年月の物語』の検討を口頭文化的な面から，文字文化的な面へ移すにしても，其処に全く異質的なアプローチが生まれることはない．

古代ロシア語による，正確には中世ロシア文献文学は，口頭伝承文学にさゝえられながら，文献文学としての独自性を永い間かゝつて創り出しつゝ，年代記へ数々の投影を示して行つたのである．

『過ぎし年月の物語』を時には部分的に，時にはほとんど全部を含み，或は，ほとんど含むことなく，書きつがれた多くのロシア年代記は，文字以前の口頭文学から素材と内容を汲み取りつゝ，思想的にも，用語や文体の上からも，最後まで，口頭伝承文学の色合いを保ちつゞけた．輸入されたキリスト教的文化と，それにまつわる文学文化或は説話文化は主として，中世文献的なワクを古くからのロシア伝承にはめこんだに過ぎない．特に年代記者は聖書をはじめとするビザンチン的書物文化に通じた僧であつたために，その書物文化のワクの中へ記述を押し込もうとしたのである．或は，ロシアの物語をキリスト教的に正当化し，批判し，非難し，或は説明した．何よりも，記述に際して取捨選択した．その折に，多くの古いロシアの伝承文学は捨て去られたであろう．然も，年代記者たちは決して一人ではなかつた．それぞれの記者たちの好みによつて，その取捨選択の手法や質が多少は異つていた．そして，その状態は何百年も続いた．当然，ルシ（Русь）の古い文学作品（口頭伝承物であると，文字以後の文献的作品であるとを問わず）は，そのために，決して，原初の形態のまゝで現在に残存し来ることはなかつた．年代記に限らず，世俗的物語も，聖者伝や一代記も，単一の作家のものとしてではなくて，それらを転写し，転写させた愛読者たちの手をくゞりつ抜けている間に，その作品の著者は，遂に単数から集団へ移つた．多くの人が，時には数百年に及んで，その作品の編集加工者になり，著述委員会を形成し，集団的な著者群を勤めた．だから，今更，『過ぎし年月の物語』の著者（編集者）をネストルであつたとしてみたところで，彼の書きしるした原型テキストを再構成してみることは，およそ，不可能であるし，そうすることへの努力にはいかほどの

価値もないであろう．『過ぎし年月の物語』にしろ，それを含む数多くの年代記にしろ，種々様々の時代の，種々様々な作品の集成でしかない．

然し，『過ぎし年月の物語』をはじめとする多くの年代記の編集加工者たちには，重要な一つの共通的な特長があつたことを忘れてはいけない．それは彼等の独特の歴史観とでもいうべきものの共通性である．年代記の形成は実にその共通的な歴史観にさゝえられて一貫的であり得たのである．年代記を書き写し，再構成し，書き抜き，書き加える折に彼等は，以前の古い物語や記憶や記録を，まず保存することに主眼を置いたのである．それらの，より以前の資料を彼等は揃つて，先づ何よりも，おのれの文化の栄えある過去の事実記録だと考えて尊重した．多くは年代記記録に参画する者であると共に，より古いものの愛読（聴）者でもあつた彼等は，それらの古い物語や記録を文学作品と知りつゝ（或は知らずに），その中に歴史事実をみつめ，求め，その物語や記録における写実性をではなくて，事実に注目しつゞけたつもりでいた．彼等が関心をもつた対象は，それらの物語や記録の物語的な筋にあつたのではなくて，其処に語られる事件そのものにあつた．天啓的な奇跡や，天空に現れる奇跡的な前兆や，或は超自然的な出来事に就てさえ，彼等の多くは，それを現実の事件と考えた．そして，自分が生きている時代の，自分が直接目撃し，直接参与し或は，当事者から聞いた多くの出来事の物語を書き加えていつたのである．そして，その様な新しい書き加えの部分は，多くの場合，各年代記の終末の一部分だけに限られた．十六世紀に至るまで，その様にして，編集されながらも，各々の終末の一部分だけが書き足されて，結局は，現在に残るような実にぼう大なロシア年代記が積みあげられた．だから，各年代記の各写本のそれぞれの終末の一部分こそは，それ以前の文章の書き抜きや再編集ではなくて，それぞれ独自の言葉で綴られた新しい作品なの

であつた．そして，それはまた．次の時代の次の年代記者には，尊重されるべき事実記録とみなされて書き抜かれ再編集されて行つた．

だから，どの年代記者も，おのれの年代記を編集し書きつける折には，先づ，先人たちの伝え書き残した作品を入手することに最大の労力を費したのである．入手すべき対象は，既に書かれた年代記は勿論のこと，歴史上の記録文書，条約文，使節のたづさえた文書，公や貴族たちの覚え書き，そしてまた，歴史的な事件を主題にした文学的な物語，聖者伝，その他，あらゆる古きものの記憶であつた．その様な資料は，時には余りにも数多く，余りにも多彩であつた場合もあろうし，時には限られた少数のものであつたこともあろう．各年代記を読み比べて見るとき，その辺の事情は，まざまざと想像できる．然し，今，そのことは，しばらくおくとしよう．年代記者たちは，その様にして集めた資料(!)を年代順に結びつけ，書き抜き，重複を避けながら，年代順にそれらの資料を配置した．例えば，聖者の一代記のようなものは，その聖者の死亡した年に，数年連続してつゞいた戦争などの物語は（―― 多くの場合，古い年代記ほどそれは伝承作品であつたが ――），年毎に分割して，それぞれに話の山場を設けつゝ，各年に振り当てゝ配置して書き込んだ．年毎に分割・配置して，古い物語や資料を記述し，書き写し編集して行くという，この年代記記述の構成は　却つて，その年々の項への分割のために，次々に新しい物語や記録を持ち込んで書き加えるには，実に都合のよい役割を果したのである．勿論，年代記者たちは，単に書き足し，記録の量をふくらませるだけを仕事としていた訳ではない．時には，物語や資料の配置記述に際して，その間に起る矛盾を排除し，時には，相互間の連繋を求めて，つじつまを合わさなければならなかつた．勿論，その際には，各年代記者の属する地域社会の利害等から起る政治的感覚や，宗教的傾向によつて，取捨選択や解

択の違いが生まれ，各年代記のバリアントを生んでいつた．かくして，年代記の古い部分は，古ければ古いほど，種々様々なジャンルの作品と，種々様々な時代の種々な傾向や好みが積み重なり，結局，『過ぎし年月の物語』の如き最古の部分は，特に，形の上では，雑多な，錯綜した，異質同居の作品の集大成の趣きを呈するに至つたのである．勿論，思想的にも其処には一貫性などあり得る筈はなかつた．もし，あるとすれば，それは単に中世ロシアのギリシア正教的感覚の共通性にすぎないであろう．或は，文字使用階級の封建的思想の共通性であつたであろう．だから，『過ぎし年月の物語』に書きしるされた数々の物語は，その個々の物語を個々のものとして検討すべきものであるかも知れない．そして，その個々の物語における特別な共通性を求めることによつて，それぞれの物語の出所が明らかに推察されるであろう．例えば，ロシアに初めて福音書を訳したオストロミールの子であつたヴィシヤタ≪Вышата≫や，その子ヤン≪Ян≫の語つたと思われる物語を先に引用したが，それらは，古い親兵団の感覚にさゝえられた物語で，古い親兵団員たちの中に生きていた数々の伝承や物語の一部分を反映し，彼等のイデオロギーを最も直接的に示すものであつた．この親兵団的イデオロギーの反映ということに尺度を置いて，これを特別な一つの共通性に設定してみる時，『過ぎし年月の物語』の中には，この類型での作品は，この他にもまだ数個を数えあげることができるのである．即ち，ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチー，その他の年代記の各々6479(971)年，6504(996)年，6524(1016)年，6581(1073)年，6583(1075)年の各項には，鮮やかな親兵団的イデオロギーの反映を読み取り得る部分があるのである．年代の古い順にその個所を具体的に引用しておこう．　上記各年代記の6479年の項．

..... и созва царь боляре своя в полату, и
рече им: "что створим, яко не можем противу

ему стати?" И реша ему боляре: "посли к нему дары, искусим и, любезнив ли есть злату, ли паволокам?" И посла к нему злато, и паволоки, и мужа мудра; реша ему: "глядай взора, и лица его, и смысла его". Он же взем дары, приде к Святославу. Поведаша Святославу, яко придоша Грьци с поклоном, и рече: "възведете я семо". Придоша и поклонишася ему, положиша преди им злато и паволоки; и рече Святослав, кроме зря, отроком своим: "схороните". Они же придоша ко царю, и созва царь боляры, реша же послании: "яко придохом к нему и вдахом дары, и не зре на ня, и повеле схоронити". И рече един: "искуси и еще, посли ему оружье". Они же послушаша его, и послаша ему мечь и ино оружье, и принесоша к нему; он же приим, нача хвалити и любити, и целова царя. Придоша опять ко царю, и поведаша ему вся бывшая, и реша боляре: "лют се мужь хоче быти, яко именье не брежеть, а оружье емлеть; имися по дань". И посла царь, глаголя сице: "не ходи к граду, возми дань, еже хощеши". За малом бо бе не дошел Царяграда. И въдаша ему дань; имашеть же и за убьеныя, глаголя: "яко род его возметь". Взя же и дары многы, и възратися в Переяславець с похвалою.....

「……しかして，皇帝はおのれの貴族たちを宮殿へ呼びあつめ，しかして彼等に言つた．〃（我々が）彼等に敵対することができない以上，（我々は）何をなそうか〃と．しかして彼に貴族たちは言つた．〃彼に贈物をおくれ．彼をためしてみよう．（

彼が）黄金や絹織物が好きであるかどうかを〃と．しかして，（皇帝は）彼に黄金および絹織物および賢明な家臣を（一人）送つた．（人々は）彼に言つた．〃彼の眼差し，および顔付き，および彼の考えを見よ〃と．そこで彼は，贈物をもち，スヴイヤトスラフのもとへ着いた．グレキが礼をつくして来たつたと（人々が）スヴイヤトスラフに伝えた．しかして（彼は）言つた．〃彼らをこゝへつれて来たれ〃と．（彼等は）来たつて，彼に礼をし，彼の前に黄金および絹織物をおいた．しかしてスヴイヤトスラフは横を向いたまゝおのれの下級従士たちに言つた．〃しまつておけ〃と．ところで，彼等は皇帝のもとへ帰り来たつた．しかして皇帝は貴族たちを呼びあつめた．そこで使者たちは言つた．〃彼のもとへ着き，贈物を渡した．しかして（彼は）それを見ずに，しまい込むように命じた〃と．しかしてある者が言つた．〃さらに彼をためせ．彼に武器をおくれ〃と．そこで，彼等は彼の言うことを聞いた．しかして彼（スヴイヤトスラフ）に剣および他の武器を（人々は）送つた．そこで彼はうけとり，ほめ，見とれはじめた．しかして（彼は）皇帝に感謝した．彼等はふたたび皇帝のもとにもどり，彼にすべてのありしことどもを物語つた．しかして，貴族たちは言つた．〃みよ．（彼は）猛き男となるであろう．財物に関心をもたないで，武器をうけとるからである．貢税を払え〃と．しかして皇帝は使者を立ててかく言つた．〃都へ来たるな，欲するだけの貢税をとれ〃と．というのは，（彼は）ツアリゴロドに殆んど達せんばかりであつたからである．しかして（彼らは）彼に貢税を払つた．ところで（彼は）戦死者に対しても，〃その一族がとるであろう〃と言つて，（貢税を）とろうとしていた．しかして（彼は）多くの贈物を取り，ペレヤスラヴエツに大いなる賞讃につつまれて帰つた』．

この一節が最も底にもつ素材が既に失われた親兵団の古い英雄叙事詩であつたことは既に述べたところである．これが，書物向

きに幾度か編集される内に，この形にまとめられた．そして，スヴイヤトスラフという光輝ある公の物語の一斑を形成し，親兵団の理念を映し出した．財物や富や華美さへの軽視と，武人としての剛気で素朴な実際行動への重視とが，武器愛好の物語として定着したのである．親兵団の高い理念となるべき『富への軽視』を年代記者は，この様に古い叙事詩を書き取り，或は他の書物から編集して，幾度か『過ぎし年月の物語』に定着させている．スヴイヤトスラフのこの物語より二十五年後の，即ち6504(996)年の項に，次の様な一節がある．酒宴で不平を鳴しはじめた親兵団にヴオロジメルが答えるところである．富にもまして武人たちを大切にするという形で

Се слышав Володимер, повеле исковати лжице сребрены ясти дружине, рек сице: "яко сребром и златом не имам налезти дружины, а дружиною налезу сребро и злато, якоже дед мой и отець мой доискася дружиною злата и сребра". Бе бо Володимер любя дружину.....

『これを聞いたヴオロジメルは，親兵団が食うために銀のさじをきたえ造るように命じてかく言つた．〃銀及び黄金を以て親兵団を求めることは（我々は）できないであろうが，親兵団を以て（我は）銀や黄金を求めるものである．我が祖父及び我が父は親兵団を以て黄金と銀を求めた〃と．というのは，ヴオロジメルは親兵団を愛していたからである・・・・』

また6524(1016)年の項の，ヤロスラフがキエフの王座につく物語の中にも，次の様な個所を読み取ることができる．先にはラヴレンチー年代記をはじめとする数個の年代記からこの同じ年代の項を引用したが，其処には読み取れなかつた一節をノヴゴロド第一年代記から此処に引用しておこう．

И в ту же нощь ис Кыева сестра Ярославля Передслава присла к нему весть: "отець ти умерл, а братья ти избиена". И се слышав, Ярослав заутра собра новгородцов избыток, и сътвори вече на поле, и рече к ним: "любимая моя и честная дружина, юже вы исекох вчера в безумии моем, не топервое ми их златом окупите". И тако рече им: "братье, отець мои Володимер умерл есть, а Святополк княжить в Киеве; хощю на него понти; потягнете по мне".

『しかしてその夜，キエフからヤロスラフの妹ペレドスラヴァが彼に報らせをつかわした．〃汝の父が死んだ．しかして汝の兄弟も殺された〃と．しかして，これを聞いてヤロスラフは翌朝多くのノヴゴロド人たちを集め，しかして，野において民会を催した．しかして（彼は）彼等に言つた．〃我が愛する，しかして，名誉ある親兵団をば，汝等よ，昨日，我がおろかさの故に，打ち果した．我はかくなりて今彼等（親兵団）をば黄金にて買うことはできぬ〃と．しかしてまた（彼等に，彼は）かく言つた．〃兄弟よ，我が父，ヴオロジメルは死んでしまつた．しかして，スヴイヤトポルクがキエフに公として坐している．彼に向つて進攻しようと思う．我があとにつゞけ〃と．』

このノヴゴロド第一年代記にあつては，親兵団と公との関係及び親兵団と公の周囲にあつた他の軍隊との関係が鮮かに書きとめられている．意気投合し，正義に相通ずることによつて，善のためにこそ親兵団は公に奉公していたもののように読み取れる．親兵団とは金銭によつて，或は，権力によつて，集められた武人たちではなかつた．正義に相通ずるところなくしては，公は親兵団をかゝえることはできなかつた．まして，金銭の如きものでは到底招集などできるものではなかつた．親兵団の心意気こそが最も重要なきづなであつた．そのような親兵団を或は打ち果し，或は

散じさせたことをヤロスラフは愚かなことであつたと後悔するのである．親兵団がどのような内容の人たちから成り，どの様な機能をもつていたかを知る上で，ノヴゴロド第一年代記のこの年号の項は非常に面白い．特にやとい入れられたゲルマン系の外人部隊であつたヴアリヤギ≪Варяг≫たちとの関係などもこゝには端的に描き出されているので，ついでに引用しておくことにする．上に引用した一節の直前の部分である．（ラヴレンチー年代記，トロイツキー，イパーチー，その他の年代記にはこの二つの部分は書きとめられていない）．

В Новегороде же тогда Ярослав кормяше Варяг много, боясь рати; и начаша Варязи насилие деяти на мужатых женах. Ркоша новгородци: "сего мы насилья не можем смотрити"; и собрашася в ночь, исекоша Варягы в Поромоне дворе; а князю Ярославу тогда в ту ночь сущу на Ракоме. И се слышав, князь Ярослав разгневася на гражаны, и собра вои славны тысящу, и, обольстив их, исече, иже бяху Варягы ти исекле; а друзии бежаша из града.

『ところでその時ヤロスラフはノヴゴロドにおいて多くのヴアリヤギを，戦争をおそれて，養つていた．しかしてヴアリヤギたちは，既婚の女性たちに暴行をはたらきはじめた．ノヴゴロド人たちは言つた．〃この暴行を我々は見ていることができない〃．と．しかして，夜中に会し，ポロモンの屋敷でヴアリヤギたちを斬り殺した．ところで，（それは）ヤロスラフがその時，その夜には，ラコムに居たときのことであつた．しかして，これを聞いて，ヤロスラフ公は町の人々に対して激怒した．しかして栄えある軍勢千人を集めて，しかして，彼等をたぶらかして，かのヴアリヤギたちを殺したものたちを斬り殺した．ところで，他の者た

ちは町から逃げた』

この，殺され，或は町から逃げて散つた者たちを，黄金では買えないと嘆いたのである．それと共に，もとより親兵団がヴアリヤギたちの如く金銭で集つたものではないことを述べ，且つまた，親兵団気質にみられる財や富への軽蔑を惜しみたゝえたのであつた．この個所がノヴゴロド第一年代記にのみあつて，他の古い年代記に見当らないのは，ノヴゴロドという特殊な商業自由都市で書きとめられた（編集された）年代記であつたことにもよるであろう．と同時に，かりに，古い伝承詩を素材にしたとしても，年代記は，やはり，相互に文献とをり合いながら，編集され，書かれ，或は削られて出来上つて行つたものであることを物語るものであろう．再び親兵団的理念の話に戻ろう．親兵団が金銭などで集められるものではないことを書きとめたのは，ラヴレンチー年代記をはじめとする多くの年代記の 6581(1073) 年の項である．

Изяслав же иде в Ляхы со именьем многым, глаголя, "яко сим налезу вои", еже все взяша Ляхове у него, показавше ему путь от собе.

『ところでイジヤスラフは多くの財産をもつてリヤヒ人たちのところへ行つた．〃これで，戦士たちを集めよう〃と言いながら．その（財産）を全部リヤヒ人たちは彼からうばい取り，彼におのれのもとから道を示した（追放した）』

また，この記事より二年後の 6583(1075) 年の項には，富にもまさるものこそが親兵団であるという内容が書きとめられている．同じくラヴレンチーをはじめとする各年代記である．

Се же лето придоша сли из Немец к Святославу, Святослав же, величаяся, показа им богатьство свое; они же видевше безчисленое множьство, злато, и сребро, и паволокы, и реша; "се нивчтоже есть, се бе лежить мертво; сего суть кме-

тье луче, мужи бо ся доищють и болше сего"....

『この同じ年に，ネメツからスヴイヤトスラフのもとに使者たちが来たつた．そこで，スヴイヤトスラフは，誇つて，おのれの富を彼等に示した．ところで彼等は数限りなく多くの黄金を，しかして銀をも，また絹をも見て言つた．〃これはつまらないものである．と言うのは，これは死んで横たわつているからである．こんなものよりも，勇士の方がまさつている．というのは，家臣たちは，これ以上のものをも獲得するからである〃と・・・・・』

如何なる富にもまして貴重なるものこそが親兵団であり，武人であるとする思想は，おそらく，その親兵団をかゝえていた公たちの側から，同時に，かゝえられていた親兵団そのものの内側から発出されて，公たちの考えに重なり，一層，鮮やかに，『過ぎし年月の物語』の中に映し出されたものであろう．年代記が，武勇賞讃の作品集であつたとしたら，この反映は，至極当然のことであつた．然し，年代記の当面の目的は決して武人たちの古い栄光と，武人たちの理念の賞揚にあつたわけではない．年代記が修道院において書かれたものであることを忘れてはならない．少くとも書き手（写し手）（編集者）の主観的な目的は宗教活動の一部であつたにちがいない．とすれば，今まで述べて来た多くの素材や基盤や，そして，何よりも，事件に対する親兵団的武人理念のようなものが，どうして修道院的世界の中へ入り来たのであろうか．それに対する解答こそ，『過ぎし年月の物語』の正体を説く一つの重要な鍵になるであろう．『過ぎし年月の物語』がネストルの作品であると書かれているにしても，そのネストルと言う人物が，文字以前の世界から素材を汲み上げて，全く独創的に書きとめたものかどうかを解く重要な手がかりを一つ此処に求めてみよう．最後に引用した前述の6583年の項の一節には，実は，その前後に各々次の様な前書きと後書きがつけられていたのである．此処から話をほぐし出してみるとよい．即ち，その前書きとは，

В лето 6583.
Почата бысть церкы Печерьская над основаньем Стефаном игуменом: из основанья бо Феодосий почал, а на основанье Стефан поча; и кончана бысть на третьее лето, месяца июля 11 день.

であり，後書きは，

Сице ся похвали Иезекий, царь Июдейск, к послом царя Асурийска, его же вся взята быша в Вавилон. Тако и по сего смерти все именье разсыпася разно.

である．前書きの意味は『6583(1075)年．修道院長ステファンの（建てた）基礎の上にペチエルスキー教会がはじまつた．というのは，フエオドシイが基礎から始め，しかして（その）基礎の上にステファンが始めたからである．しかして，三年目に完成した．七月十一日のことである』となり，これは完全に，寺伝とでも言うべきものである．そして，後書きの意味は，『これと同じように，ユデイの王イエゼキイも，アスリアの王の使者たちに向つて自慢した・ところで，彼の（もの）全部は，バビロンに総て奪われてしまつた．同様にまた，この者（スヴイヤトスラフ）の死後には，総ての財産は四散してしまつたのである』となり，バイブル（旧約）の世界の物語である．そして面白いことに，そのバイブルの物語を，ロシアのスヴイヤトスラフ公の物語の批判的説明に利用した．富にもまして親兵団や武人が最も価値高きものであるという武人的理念は，武人は富に関心を持つべきではないという本来の出発点から曲折して出て来たものであるのに，なお，それから遙かにかけはなれて，武人の理念を消し去ることによつて，富の無価値であることを宗教的な意味で述べ立てる題材に利用した．本来の出発点から曲折逆転した理念構成であつた．然もなお，ユデイの王イエゼキイが自慢した相手をアスリヤ（アッ

シリヤ）王であるとしているが，バイブルによれば，本来，それは，バビロンの王でなければならなかつたはずである．

これらの点を考察する時，この年号の項の物語は，実は三つの別々の出所から出たものであると言わなければならないであろう．一つは，前書をつとめた寺伝，中程のものは，ブイリーナ等にも見られる多少愚かしい富の自慢話と，親兵団的理念の反映した武人物語及びネエメツという言葉から見られるような外国（ドイツ）の流入した物語の混成であり，後書きの教訓的締めくくりは，バイブルの物語の誤謬をおかす程度の，たよりない造り替えである．即ち，『これは，ペチエルスキー・フエドシー修道院の修道僧（ネストル）の年毎の物語である』≪Се повѣсти временныхъ лѣтъ (черноризца Ѳедосьева манастыря Печерьского — Нестера)≫と銘打つていても（『古代ロシア研究』才一号 p. 1～p. 2 参照）『過ぎし年月の物語』は，また如何に，『原初』≪Первоначальный≫なものだと言い張つてみても，明らかに，多くのものからの構成作品であり，編集本であることを示している．だからこそ，親兵団的伝承や理念も，民間的説話や伝承も，或は寺伝も，また，宗教的思想も，また公たち支配階級の政治理念も，此処には容赦なく入り込んで来たのである．もしも『過ぎし年月の物語』をはじめとする年代記が或る一つの統一的な目的 —— 例えば宗教活動，或は政治的支配の正当化等々のうちのいづれか —— にしぼられた所から生まれたものであるとすれば，全く不器用で下手くそな編集構成であつたと言わなければなるまい．『過ぎし年月の物語』をはじめとする年代記を全体的に均一な作品と誤解し，一つの観点からだけ問いつめようとすることの愚かしさは，呉々も注意されなければならないであろう．

さて，かくて，『過ぎし年月の物語』及びそれを含む年代記は，種々の題材と種々の出所から汲み取られ，且つ，種々の文体及び

用語を持つた作品集である．のみならず，その題材や出所に由来する種々のイデオロギーの集大成でもあつた．勿論，その種々な題材と内容とイデオロギーを雑然と並べたてたものであるというわけではない．其処には或程度一貫したそれぞれの年代記者の眼があつた．例えば，十一世紀末の親兵団が保有し，古い栄光をかゝげ，歌いあげた彼等の思考ポーズは，それぞれの作品として汲みあげられて年代記に納められ，当世風の支配者（主として公たち）への警告と物言いや注文の役目を果すべく期待された．おそらくは，キーエフ・ペチエールスキー修道院で書かれた最初の年代記のものは特にそうであつたであろう．当世風の支配者とはその場合，多分，スヴイヤトスラフ公であつたであろう．そして，この年代記は，キエフからノヴゴロドに伝わり，ノヴゴロドという商業的自由都市では，その物言いのポーズが一層，反支配者的な発言として利用されつゝ，書き加えられ，編集し直されたもののように思われる．勿論，その間における修道院の僧たちであつた年代記者たちにとつては，公を中心とする各地の権力分野が，自己の汲み取つた題材や物語を通じて，どのように批判され，物言いをつけられていたかというようなことは，大して重要な問題ではなかつたであろう．修道僧である年代記者にとつて，重要なことは，公の権力への一定の批判ではなくて，いかなるものであれ，批判そのものが重要なことなのであつた．当世風の公たちの政治に対する古い親兵団の理念に根ざした論拠こそは，期せずして，修道院の僧たちにとつても，また，自由を求める新しい貴族文人たちにとつても，利用価値の高いおあつらい向きの素材であつたのである．政治や権力にまつわるイデオロギーのみならず世界観という広い視野に立つて見ても，同じようなことが言えるであろう．勿論，年代記者たちは修道僧であつたために，その世界観は，総ての出来事を神の意志によるとする神意（摂理）説≪провиденциализм≫に依つていた．しかし，もしも，年代記

の総ての記事が，神意説を基礎とする世界観に完全に統一されて，首尾一貫していたものであるならば，ビザンチン神学を解く手だてとしての重要性だけに『過ぎし年月の物語』の価値がしぼられ得るであろう．ところが，其処における物語の記述や，事件の取りあげ方は，しばしば，その世界観のわくをはみ出しているから面白い．そして，そのはみ出した所においてこそ，却つて，ロシアの古い文化が大きく裸の姿をさらけ出したのである．公たちと貴族，文人，武人，或は庶民の息吹きや生の言葉は，むしろ，其処に聞きとられる．

年代記者たちの，年代記々述における態度は，ビザンチンより輸入された出来合いの世界観に依りながら，それが出来合いのものであつた為に，まともには彼等の骨肉になりきらず，おのれの国の出来事を追うに際して，常にちぐはぐな効用をしか果さなかつた．おのれの国の出来事を，ほぐし，解説し，組み立てゝ統一的に記述するには，彼等の借り物の世界観は余りに借り物であり，余りに貧弱すぎた．おのれ自身の思考や行動でさえ，キリスト教的輸入世界観では統率しきれないものがあつた．そのちぐはぐさこそが『過ぎし年月の物語』を却つて，裸のロシア文化の映し手に仕立てあげた．その様にして映し出された多くの事件のうちで，本当に年代記者たちの意図する神意説的解説が板についていたのは，兇作，飢，疫病，大火，敵の来襲による荒廃，人の急死，或は日蝕をはじめとする天変などにすぎなかつた．かくして，年代記，特に『過ぎし年月の物語』における宗教的モーメントの如きものは，記述された事件や物語の内容をゆがめるほどの力は決してもつていなかつた．世俗の人たちの思考や感情や言葉が良く保存され伝えられている理由である．年代記の価値は，だから，むしろ，年代記者たちの意図の失敗から生まれたと言えるかも知れない．年代記が年号別或は項目別に綴られながら，その間に統一性或は均一性がなく，モザイクの様に多くの素材や物語や文献か

らの集成物であるのは，もう一つ，一人の記者によつて，冒頭から終末まで通して書き綴られたものではないことにも理由をもつている．それぞれに書き加え，書き抜き，書き続けた年代記者が，例えば，文体或は用語の上での手法の統一性を必要とは考えなかつたようだし，世界観の上からも，政治的思想の上からも一貫性をもたせるべきだとも思わなかつた．年代記は，この様に均一なものでもなく，一つの年代記について均一でない複数の書き手を想定することの必要なものである．年代記者の強い個性によるものではなくて，当時のロシアの時代，現実の動きが，そのまゝ，複雑に矛盾をはらみつゝ，結局は，モザイク鏡のように反映されたものであると言わなければならないだろう．其処にもし，何等かの一貫性があつたとしたら，ロシアの文化の歴史のわくという一貫性であつたであろう．最古の年代記『過ぎし年月の物語』とて，やはり，そのようなものである．『過ぎし年月の物語』が決して単数の著者の手になつたものではないことは，既に先に数多く引用した文章の質からも充分推察されるべき筈である．勿論，それらの引用文は，文献ではなくて伝承や口頭の作品によるものであつたし，著者ではなくして，編者が単数であつたとすれば，編者自身が編集に当つて一貫性をもたなかつたと考えるより仕方がないであろう．実はその編者でさえ，単数であつたとは考えられないが，それはさておき，編者らしきものが寄せ集めて来たものの内で，文献から持ち込んで来たものを次に具体的に検討してみることにしよう．

—II—

先づ，『過ぎし年月の物語』が書かれた修道院の宗教的感覚とは全く無縁な内容のものとして目立つているのは，グレキ（ビザンチン）との間に結ばれた条約の記録である．おそらくは，ギリシア語と，当時のキエフの公たちの古代ロシア語との両語によつ

て書かれた条約文が，此処に間接的に書きとめられたのであろう．勿論，その条約文は既に『過ぎし年月の物語』の中にだけしか古い形としては残つていない．そしておそらくは，最初ギリシア語によつて書かれたものを，次に当時のロシア語に訳し，両者が互いに，それぞれのものを持つたのであろうが，その折の，古代ロシア語への訳そのものが，非常に不たしかであつたかも知れない．最初に書かれたギリシア語に対する理解さえ不たしかであつたであろう．その様な羊皮紙による現物が何度か書き写された末に，『過ぎし年月の物語』の中へ持ち込まれる時には，もう，本来の現物も，其処に書かれたと思われる文章の本来の意味の正確さも，年代記者にどれほど理解され得たであろう．最も文献的なものであつたが故に，最も理解に苦しみ，重要だと思いながら，やはり，最ももてあました資料であつたにちがいない．口頭伝承によるものならば，聞き手の側に理解され得るように言葉使いは少しづつ組み替えられて来たことであろうが，文献的であつたために，書きとめられた条約文は固定し，理解の域外に出た部分は，書き写し誤られ，書き落され，文節の切り方さえ不たしかになつた．そうなつてしまつてから，『過ぎし年月の物語』の中に織り込まれたのであろう．言葉の層としては最も古い部分であるとするにしても，実は，もともと，それはぎこちない翻訳語であつたと思われる．古い年代の条約文は，だから，極端に崩壊して，既に物語の一部分に組み込まれたものもあつた．例えば，6415(907)年の項の後半はその様なものである．明らかに，伝承と条約文文献の混合である．その後半に，条約文の名残りを書きとめようとして，この年の項は前半に伝承的物語を設定し，且つ，その設定に先立つて，英雄オレク≪Олег≫が引き具した多くの種族名を列挙しつゝ，その中に『通訳であるチベルツイを』≪Тиверци, яже суть Толковины≫を加えた．(『古代ロシア研究』才三号；p.4～p.5参照)．そして，後半にみられる条約文の名残りとは，

次の様なものである．（『古代ロシア研究』才三号；p.11～p.14参照）

да приходять Русь, хлебное емлють, елико хотять, и иже придуть гостье, да емлють месячину на 6 месяць, и злеб, и вино, и мяса, и рубы, и овощем, и да творять им мов, елико хотять: и поидуть же Русь домови, да емлють у царя вашего на путь брашно, и якоря, и ужа, и пре, и елико надобе.

この文章の直後に『グレキはこれを引き受けた』≪И ясася Греци≫と続いて，ギリシア側からの口上のように書きつづけられるのである．とすれば，常識的には，和平交渉のロシア側からの要求文のようにも受け取られる．意味は『ルシをして来らしめ，欲するだけの穀料をとらしめよ．商人として来るものは六ケ月に（対して）月決め額目即ち穀物も，ブドウ酒も，肉も，魚も，果物をも取らしめよ．また欲するだけ入浴を彼らにおこなわしめよ．しかしてルシが帰途につくときは，汝らの皇帝のもとにて旅に対する食糧ならびに錨も，綱も，帆だ，および必要なだけ（のものも）取らしめよ』

これに対して，次の一節には，ギリシア側の言い分のような形で，幾つかの条項が一まとめにされている．この年号の項はロシアの年代記であり，ロシアの軍勢の遠征の物語でありながら，この一節だけが，当のロシアの側を突然『彼等』とし，ビザンチンの側を『我等』と呼んで，物語りをつづけようとするチグハグさが，余りにも目立ちすぎる．この一貫性の無さは，何よりもこの一節が，物語自体にはそぐわない機械的な文献利用であったことを示している．明らかに，ギリシア側のもっていた条約文の断片訳を押し込んだものにちがいない．その一節とは即ち，

аще придидуть Русь без купля да не взимають

месячины; да запретить князь словом своим, приходящим Руси дзе, да не творять пакости в селех в стране нашей: приходящии Русь да витають у святаго Мамы, и послеть царство наше, да испишють имена их, и тогда возмуть месячное свое, первое от города Киева, и паки из Чернигова, и Переяславля, и прочии городи и да входять в город одиными вороты, с царевым мужем, без оружья, мужь 50, и да творять куплю якоже им надобе, не платяче мыта ни в чем же.

『もしもルシが商用なしに来ることがあれば，月極め糧目を取り立てざるべし．公は己れの言葉をもつて，こゝに来るルシに禁令すべきである，わが国の村落において（ルシたちは）害をなさざるべしと．到来するルシは，聖母（教会）のそばに居住すべし．わが帝国は使者を送り，彼等の名を書き上げせしむべし，しかして，その時，己れの月極め糧目をとらしむべし．まずキエフの町の（出身者），ついでチエルニゴフの，またペレヤスラヴリの（出身者），および他の町々の（に）．しかして一つの門より皇帝の家臣を伴い，武器をたずさえず，（一度に）五十人を町へ入らしむべし，しかして，何事によらず取引税を支払わずして，彼等らの必要に応じて商用をおこなわしむべし』

この様な古い文献資料の素朴なはめ込みを全く正直に白状している個所が，次の五年を経た6420(912)年の項である．即ち，同一のオレグ≪Олег≫をロシア側に登場させ，同じ二人の皇帝レフ≪Лев≫とアレクサンドル≪Александр≫をギリシア側に登場させて，『他の協約の写し』≪равно другаго свѣщания≫を書き取つているのである．勿論，其処には多少の物語性を持たせるべく，『オレグはグレキとルシの間に和を講じ条約を結

ぶために己れの家臣を遣わした．彼は人を遣わして同じレフとアレクサンドル帝の治世にあつた他の協約の写しを述べさせた』と前書きで話をつないでいる．その協約の各条は計十五条と後書きからなり，既に『古代ロシア研究』才三号のp.19～p.50にその検討を終つた．

『過ぎし年月の物語』が次に再度ギリシアとの条約文を書きとめるのは6453(945)年の項である．此処には，物語性を持たせようとする努力の跡は全くなくて，たゞ，如何にもその前後の事情を事実らしく述べ捨てるのである．そして，初めて文献から取り出したもとのものが羊皮紙であつたことを確認するのである．即ち，条約文の書き写しに当つての前書きの形で，次の様に読み取れる．

В лето 6453. Присла Роман, и Костянтин, и Стефан слы к Игореви построити мир перваго; Игорь же глагола с ними о мире. Посла Игорь муже своя к Роману, Роман же созва боляре и сановники. Приведоша Руския слы, и велеша глаголати, псати обоих речи на харатье, равно другаго свещанье, бывшаго при цари Романе, и Костянтине, и Стефане, христолюбивых владык:

『6453年．ロマンが，およびコスチャンチンも，およびステファンも，イゴリに，はじめの(もとの)和平を樹立するために使者たちを遣わして来た．ところで，イゴリは彼らと和平について語つた．イゴリはおのれの家臣たちをロマンのもとへ送り，一方ロマンは貴族および高官たちをよびあつめた．(彼らは)ルシの使者たちを連れ来たり，しかして(口上を)述べるように，双方の言葉を羊皮紙に書くように命じた．(すなわち)キリストを愛する君主たちであるロマン帝およびコスチャンチンおよびステファンの治世にあつたもう一つの条約文の写しである』(『古代

ロシア研究』才四号；p.15～p.17参照）.

そして，この直後に計十五条の条項が書きとられ，その条項につゞく後書きも書き取られている．『古代ロシア研究』才四号では，その後書きの部分を才十六条としたが，おそらくは，ギリシア語で書かれていたと思われるものの直訳であつたであろう．この後書きのような部分の前半から，それら総てがギリシア側でギリシア語で書かれ，ロシア側を二人称，ギリシア側を『我々』，『我が帝国』として，ロシアへとゞけられた文章そのまゝの訳文掲載であつたように思われる．

Мы же елико нас хрестилися есмы, кляхомься церковью святаго Илье в сборней церкви, и предлежащем честным крестом, и харатьею сею, хранити все, еже есть написано на ней, не преступити от него ничтоже; а иже преступить се от страны нашея, ли князь, ли ин кто, ли крещен, или некрещен, да не имуть помощи от Бога, и да будеть раб в сий век и в будущий, и да заколен будеть своим оружьем,.....

『我々は，我々のうちの洗礼を受けている限りのものは，大本山の教会における聖イリア教会にかけて，また前にある聖なる十字架にかけて，また，この羊皮紙にかけて，それに書かれてあるすべてのことをまもり，それから何（において）も背かないことを誓う．ところで，我々の側からこれを犯すものは，公であれ，他の誰であれ，洗礼されているものであれ，洗礼されていないものであれ，神から助けをうけざるべく．この世でも，あの世でも奴隷たるべく，自からの武器によつて突き殺されるべし・・・』

ところが，6479(971)年の項まで時代がさがると，さすがに彼我の混合は無くなり，ロシア側に視点を固定させた引用をおこなうようになる．引用された条約文の羊皮紙の書かれた日附ま

で此処には明記される．引用した文献の非常に具体的な由来をも条約文の序文の形で書きあげているのである．

Равно другаго свещанья, бывшаго при Святославе велицем князи Рустем и при Свеналъде, писано Фефел синкеле и к Ивану, нарицаему Цемьскию, царю Гречьскому, в Дерестре, месяца июля, индикта в 14, в лето 6479.

『ルシの大公スヴイヤトスラフおよびスヴエナルドの時にあつたもう一つの条約文の写しが，シンケル（僧の階級）のテフエルのときに，グレキの皇帝ツエミスキーと呼ばれるイヴアンにあてゝ，デレストルにおいて，6479(971)年，インヂクトの十四年，七月に書かれた』（『古代ロシア研究』才五号；p.66～p.67参照）

以前の三つの条約は，多くはギリシア側にイニシアチヴを取られて創られ，先づギリシア語で書かれた文章であつたと思われる．そして，そのギリシア語からの訳文であつたと思われるのに対して，今度の条約は，おそらく，ロシア側が主体的に創り，ギリシア側へ差し出した文章であつたであろう．そのために，945年の条約文のように詳しく多項目にわたつて，細かい規定などは此処には見当らず，項目分けにして見ても，わずか，四ケ条にしかならず，その才四条は，むしろ，後書きだと見なすべきものでさえある．この様なものであつたために，この年の項の物語（スヴイヤトスラフの遠征の物語）の中へ非常にうまくとけ込んでいる．勿論，本来，口頭伝承的な英雄物語であつたものの中へとけ込ませてはいても，この部分だけが，明らかに，別の次元の文献からの引き写し引用であることは，年代記者自身が明らかにそれを先に引用した序文の形の個所で指摘していた．年代記者は，この様に生の歴史的資料を裸のまゝで持ち込んで来ていた古い時代のことを書きとめるために，伝承と，生の歴史的資料とだけが主要

な素材をなしていたのではない．文献的には，多くの外国の文献の翻訳物が『過ぎし年月の物語』の重要な素材をつとめていた．『過ぎし年月の物語』に限らず，多くの年代記の多くの記者たちは，外国，主としてビザンチンからの多くの翻訳物を利用していた．それらの翻訳物から自分たちの祖国であるロシアの古い歴史にまつわる個所を細心に，綿密に抜き出して来て，自からの過去を再構成したのであつた．宗教的な内容を持つたものに就て，聖書や神学書から抜き出されて年代記にはめ込まれたものは，一応，此処では除外して，純粋に歴史事実だと彼等が考えたものの内で，最も大きな翻訳物の文献は，勿論，ハマルトルスの年代記≪Хроникъ Геория Амартола≫であつた．『過ぎし年月の物語』におけるハマルトルスからの抜き書きの部分がいづれであるかは，既に『古代ロシア研究』オ二号以下にその一部が検討されたところである．それ以外にも，例えばイパーチー年代記では，6622（1114）年の項に，年代記者自らが，わざわざ，自分が準拠した著作を示して，『もしも，誰かがこのことを信じないならば，フロノグラフ（ハマルトルス年代記）を読ましめよ』≪Аще ли кто сему вѣры не иметь, да почтеть Хронографа:≫と書き，フロノグラフを疑う余地のない過去の真実の書だとしている．勿論，この年の天変の前兆たる所以を説明しようとして詳しくハマルトルスから古い天変の物語を引用するわけである．或は，『パトリアルフ或はニコンの年代記』≪Патриаршая или Никоновская лѣтопись≫にも，年号をつけて記事を書きはじめるよりも遙かに古い時代の記事に，『というのは，ゲオルギー（ハマルトロス）が年代記で言つていることだが』≪Глаголеть бо Георгий в лѣтописании:≫と断つて書きつけている個所がある．（1862年版；ロシア年代記全集オ九巻；p.6）．此処に書き抜かれている内容は，リヴオフ年代記≪Львовская Лѣтопись≫その他の年代記でもほとんど変

りたく，ラヴレンチー年代記をはじめとする各年代記の『過ぎし年月の物語』中では≪Глаголеть Георгий въ лѣтописаньи: ибо комуждо языку овемъ исписанъ законъ есть, другимъ же обычаи; зане безаконьникомъ отечьствие мнится≫となつているものと同一である．その大体の意味は，『ゲオルギーは年代記の中で言つている．なぜなら；おのおのの民族には，或ものには書かれたおきてがあり，他のものには慣習がある．なぜなら法をきものたちにとつては先祖の習慣が（善しと）思われているからである』となるが，これにつゞく，相当長い文章は総て，ハマルトロス年代記からの書き抜きである．その部分は古代ロシア語とギリシア語の原文とを対比し得る．『古代ロシア研究』才三号；p.79以下にこの部分に当るギリシア語の原文とその訳註が示された．然し，実は，年代記者たちが，抜き取るべき素材にしたものがギリシア語によるハマルトロス年代記の原典であつた訳ではない．むしろ，彼等が出典としたものはその年代記の古代スラヴ語による訳本であつた．現存するその訳本と，『過ぎし年月の物語』中にみられる記事との対応の仕方の方がむしろ興味ある問題である．ハマルトルス年代記の古い古代スラヴ語訳本として，此処では，シノダーリ本≪Рукопись Синодальной библиотеки≫の百四十八号本を用いて見る．

ラヴレンチー，トロイツキーその他の年代記にみられる『過ぎし年月の物語』が『さて，この物語をはじめよう』≪Се начнем повѣсть сию≫と書き出したその直後から，それは実は既にハマルトロスからの抜き書きであつた．

即ち，『過ぎし年月の物語』にある文章とは；

По потопе первие сынове Ноеви разделиша землю,
Сим, Хам, Афет. И ася въсток Симови: Персида,
Ватрь, тоже и до Индикия в долготу, и в ширину

и до Нирокурия, якоже реши от въстока и до полуденья, и Сурия, и Мидиа по Еффат реку, Вавилон, Кордуна, Асуряне, Мисопотамира, Аравия старейшая, Алмаис, Инди, Аравия силная, Кулии, Комагины, Финикия вся. Хамови же ася полуденьная страна: Еюпет, Ефивопья, прилежащия ко Индом, другая же Ефивопья, из нея же исходить река Ефиопьская Чермна, текущи на въсток, Ливия прилежащи до Кириния, Мармария, Сурите, Ливуи другая, Нумидья, Масурия, Мавританья противу сущи Гадире; сущим же ко востоком имать Киликию, Памъфилию, Писидию, Мосию, Лукаонию, Фругию, Камалию, Ликию, Карию, Лудья, Масию другую, Троаду, Еолиду, Вифунию, старую Фругию; и островы неки имать: Саръдани, Крит, Купр, и реку Геону, зовемую Нил. Афету же яшася полунощныя страны и западныя: Мидия, Алъванья, Армения малая и великая, Кападокия, Фефлагони, Галат, Колхис, Воспории, Меоти, Дереви, Сармати, Тавриани, Скуфия, Фраци, Макидонья, Далматия, Молоси, Локурия, Пелония яже и Полопонис наречеся, Аркадия, Ипирония, Илюрик, Словене, Лухития, Аньдриакия, Оньдреятиньская пучина; имать же и островы: Британию, Сикилию, Евию, Родока, Хиона, Лезвона, Кофирана, Закуньфа, Кефалинья, Ифакину, Керькуру, часть Асийски страны, нарицаемую Онию, реку Тигру, текущую межю Миды и Вавилоном;

というものである．ノアの子等三人が分け取った国や土地の名前

の羅列である．（『古代ロシア研究』オ一号，p.1～p.10参照）．日本語訳は省略して，シノダーリ本のハマルトルス年代記スラヴ語訳本の，これに対応する個所を次に引用しよう．

По размешени убо и стльпу разорения, разделише трие сынови Ноеви всех иже от-нихь рожденнымь, и даше имь съписаниемь места по уставу, иже от-отца Ноя приемше; и суть коегождо и колень и отечьство, и места и наслеиа, и страны и острови и реки, по предлежещому уставу. И дастьсе убо вь наследие прьворожденому сыну Ноеву Симу от Персыди, и Вакьтронея, и Индискаа, и Риконурурь до Гадирь, яже кь югу; и Иафету же от Мидие даже до Гадирь, яже кь северу; и прочее же страны Симовы суть сии: Персись, Вактриани, Иркания, Вавулиония, Кордина, Асуриа, Месопотамия, Аравиа древняя, Елимаись, Индикы, Аравиа иевдемононь, Кылисирна, Коммагины, и Финикиа всея, и река Ефрарь. Хаму же: Егупть, Ефиопиа зрещи кь Индии, другая Ефиопиа, отнюдьже исходить река Ефиопьскаа Ефифра, зрещиа на вьстокь, Фиваида, Ливия простирающеясе до Кириные, Мармариа, Суртиа, Ливия ина. Нумидия, Массурия, Мавритания, яже премо Гадирь; кь северу же поморие имать: Киликиа, Памфилиа, Писидна, Мисиа, Ликаония, Фригиа, Камалиа, Ликия, Кариа, Мимиа другаа, Троада, Еолида, Вифания, древняя Фригиа; и острови пакы имать: Сардиа, Крить, Кипрь, и реку

Гионь, иже и Ниль нарицаемыи. Иафету же: Мидиа, Алзания, Армения малаа же и великаа, Кападокия, Пафлагония, Галатия, Колхисъ, Вопрорь, Меоть, Дервия, Сарматия, Тавриания, Вастарния, Скифиа, Фракия, Македония, Далматия, Молосия, Фесалия, Локрия, Воотия, Етолия, Еттикиа, Ахана, Пелиния яже и Пелопония, Аркадия, Ипоротия, Илирия, Лихнытия, Андриакиа, от-нее же Ардиакиа пучина; имат-же и островы: Вретанию, Сикелию, Евию, Родосъ, Хионь, Лесвинъ, Кифара, Закириа, Кефалиниа, Ифакиния, Керкира, и страна Асиискаа, нарицаемаа Иоания, и река Тигрь, разделяющиа между Мидиею и Вавулониею.

この様に，ハマルトロス年代記から，ほとんど直接的に書き抜かれた所が見られる一方では，『過ぎし年月の物語』は，内容の重点だけを汲み取つて書き入れた個所をも，相当多く含んでいる．『シムは，ハムも，アフエトも，土地を分けて，兄弟の分前へは誰にも，ふみ込むべきものではないとして，サイを投げ，それぞれ自分の土地に住んでいた』と書きとめた直後，『言葉は一つであつた．そして地上に人々が増えた時，ネクタンとフアレクの時代に，塔を天に至るまで建てようと考えた．そして，塔を天に至るまで建て，そしてその回りにヴアヴイロンの町を建てるべく，セルナの野に共に集つた．そして，四十年にわたつて塔を建てた．できあがらなかつた』とある個所は，旧約聖書の一節とハマルトルスの一節とを巧みに組み合わせたのであつた．即ち，ハマルトルスの，これに当る一節は，次の様な古代スラヴ語に訳されていたからである．

От-нею же единогласьнь сьи родь человечь,
якоже рече Йосиппь, събираетесе въ едино место,
глаголемое Сенарь, таже стльпь до небесь здати
помыслыше, и окресть его градь иже и Вавулонь,
еже есть мльва; ихже дело не съвръшено, от-
врьжено бысть..... Стльпь убо създан бывь
в 40 лет, пребысть поль несъвръшен; .....

いづれにしても，これらは，旧約聖書創世紀オ十章及びオ十一章に由来する物語である．文献的なものの出所をつきつめれば，ハマルトルス年代記の古代スラヴ語訳からハマルトルス年代記のギリシア語原典へ，そして，最後には旧約聖書に至りつくであろう．『過ぎし年月の物語』の記事の中で，新旧両聖書に由来するものに就ては，いづれ後述する機会があろう．今，しばらく，ハマルトルス年代記との照合を進めてみよう．

上に引用した個所より相当さがつて，『過ぎし年月の物語』が，明瞭に，ハマルトルスの年代記からの一節であることを断り，『年代記の中で，ゲオルギーは言つている』≪Глаголеть Георгий въ лѣтописаньи≫と述べてから，書き進んだ一節を注意しよう．ラヴレンチー年代記をはじめとする各年代記には大体次のように読まれるところである．（『古代ロシア研究』オ一号；p.51以下参照）

ибо комуждо языку овем исписан закон есть, дру-
гим же обычаи; зане безаконьником отечьствие
мнится. От них же первие Сирии, живуще на конець
земля, закон имуть отець своих обычаи: не любо-
деяти и прелюбодеяти, ни красти, ни оклеветати,
ли убити, ли злодеяти весьма. Закон же Нуктри-
риан, глаголеми Врахмане и Островьници, еже
от прадед показаньем, благочестьем мяс не яду-

ще, ни вина пьюще, ни блуда творяще, никакоя же злобы творяще, страха ради многа. Ибо яве таче прилежащим к ним Индом, убиистводеици, сквернотворяще, гневливии паче естьства; в нутрьнейшей стране их человек ядуще, и страньствующих убиваху, паче же ядять яко пси. Етер же закон Халдеем, Вавилоняном, матери поимати, с братними чады блуд деяти, и убивати; всякое бо студное деянье яко детелье мнятся деюще, любо далече страны своея будуть. Ин же закон Гилион: жены в них орють, зижють храми, мужьская делаа творять, но любы творять елико хощеть, не въздержаеми от мужий своих весьма, ни зазрять; в них же суть храбыя жены, ловити зверь крепко; владеють же жены мужи своими и добляють ими. Во Вретаньи же мнози мужи с единою женою спять, и жены с единым мужем похотьствують, безаконьная законе отець творять независтьно, ни въздержаньно. Амазоняне же мужа не имуть, но и аки скот без словесный единою летом к вешным днем озесьствени будуть, и с сочтаются с окрестными мужи; яко некоторое им торжьство и велико празденьство время тем мнять. От них заченшим в чреве, паки разбегнутся отсюду вси: во время же хотящим родити, аще родится отроча, погубять; аще девоческ пол, то въздоять, прилежне въспитають.

『何故ならおのおのの民族には，或ものには書かれたおきてがあり，他のものには慣習がある．なぜなら法なき者たちにとつて

は，先祖の習慣が〔善しと〕思われているからである．彼等のうちの最初のものは地の涯に住むシリイであり，おのれの父祖たちの慣習をおきてとしてもつている．すなわち，姦いん及び姦通をせず，盗まず，中傷せず，あるいは殺さず，あるいは全く悪業をせざることである．ブラフマネおよびオストロヴィニツイと言われるヌクチリアネのおきて，それは先祖からの訓えによるものである．（先祖への）崇敬の念によつて，多くのおそれのために，肉を食わず，酒を呑まず，いん乱をなさず，いかなる悪事をもなさないというものである．ところで一方，明らかなことであるが，インド人たちは彼等に接しているが，〔彼等は〕殺人者であり，けがれを行い，常ならず怒りやすかつた・彼等の（国の）奥地では人間を食べ，旅人たちを殺し，その上に犬のように食べさえもするのである．ハルデア，ヴァヴィロニヤネには他のおきてがある．母をめとり，兄弟の子たちといん乱をなし，（人を）殺すことである．というのは，あらゆる恥ずべき行いをあたかも徳行をなしているかの如くに（彼等には）思われているからである．あるいはおのれの国からより遠くにあるときにすら（そうである）．ギリには他のおきてがある．すなわち，彼等の間では女たちが耕し，家を建て，男の仕事をなしている．しかし，全く自分たちの夫から妨げられることなく，また非難されることもなく，好きなだけいん行をなす．彼らの間には獣を見事に捕える女たちもおり，それらの女たちは，おのれの夫たちを支配し，権力をふるう．ブレタニアでは，多くの男たちが一人の女と寝て，また女たちは，一人の男と情交している．不法なることをほしいまゝに妨げられもせず，父祖のおきてとしている．アマゾニヤネは，男をもたないが，言葉なき家畜のごとく年に一度春が近づくと，郷を出で近隣の男たちと交わるのである．その時をあたかも彼女らにとつて一種の祝典および大いなる祭日と考えている．男たちによつて腹に種を宿したとき，そこからすべて再び散りもどる．そこで（生

むことを）欲する者たちに生むべき時（が来た時）もし，男の子が生まれたら殺す．もし女性ならば，ほいくし，熱心に育てるのである』．

この長文に亘る一節は，シノグリ本一四八号写本には，対応して，次の様にある．

И велыкыи Кесарие, брат великаго Григориа, разлычныихь езыкь и обычаи и образы же и законы споведае, вькратце таковаа сказуеть: вь кое-иждо бо стране и зыце, вь овехь убо писань законь есть, вь овех-же обычаи; законь убо безаконнымь отечьскаа мнитсе. Отных-же прьвыи Суре, иже на коньць земле живущеи, законь имуть отечьскые обычае: блуда не творити, илы прелюбы деяти, илы красти, ли уничижати, ли убыти, ли злодеяти отнудь. Закон-же и вь Виктрианех, или Врахманехь и Островенехь, от прародителии наказание же и благочьстые, меса не ясты, ли вина пити, ли блудьствовати, или всаку злоду творити, многааго ради страха Божия и веты. И откресть техь живущемь Инденомь, скврьнна убыиста творещемь, упивающемсе, срамнаа делающиимь, крьвыи проливающемь, и презьествьна делающемь; а иже вь вьнутрьныихь странахь сыихь, человекы ядуще и туждихь убывающе, паче ядуть якоже псы. Инь законь Халдеомь и Вабулоняномь: сь матермы блудь творить, братняя чеда растлевати, и скврьне убывати, и всакое зло дело якоже добродетель сьтвараати, аще и далече от-страны ихь суть.

Ин-же вь Галилеихь законь: женамь землю делати, и зидати, и мужьскаа дела делати, нь и блудь творити якоже аще хотеть, не вьзбраняемии отнудь оть мужии, ли завидими; вь ных-же иже на рати брань творе, и ловити иже не зело крепка вь зверехь; обладають паче своими мужмы и господують. На праздньцех-же идольскыихь множьство мужии сь единою женою осмешаютсе, и многыи жены на единого мужа вьседають, и безаконное яко законь добрь и отечьскы сьдевають незавыстно и невьзбранно. Амазоне же муже не имуть, нь яко бесловесна живота, единою лета вь креме весны отлучаютсе, и сьвькупляющесе сь ближными мужии суседными; якоже трьжьство некое и великь праздникь време оно нарицають. От-ных-же в чреве приемше, пакы потекуть вь своихь домохь все: вь време же рождения ихь мужьскы поль убывають, женское же оживляють и прилежно вьспитають. （日本語訳省略）

この様に見て来ると，『過ぎし年月の物語』が年号を設定して物語を綴る以前の，古い時代に関する記事は，その重要な骨組みの個所はほとんど，ハマルトルス年代記に由来するものであることが分る．そして，その間に，既述したように，非常に古いキー≪Кий≫の伝説などを織り込んで行ったのである．この様なハマルトルス年代記からの引き写しは，勿論，6360(852)年という年号を始めて設定して物語りつづけた以後の記事にも，この記述方法は変更されなかった．例えば，6374(866)年の項に組み込まれたアスコルド≪Асколдъ≫とジル≪Диръ≫のギリシア遠征の説話は，めずらしく，たくみに，ハマルトルスの文章と組み合

わされて出来たものである．ラヴレンチーをはじめとする年代記のこの年号の項には，次の様に読まれる．（『古代ロシア研究』才二号；p.21～p.23参照）．

В лето 6374. Иде Асколд и Дир на Греки, и придоша в 14 лето Михаила царя. Царю же отшедшю на Огаряны, дошедшю же ему Черные реки, весть епарх посла к нему, яко Русь на Царьгород идеть, и вратися царь. Си же внутрь Суду вшедше, много убийство крестьяном створиша, и в двою сот корабль Царьград оступиша. Царь же едва в град вниде; с патреярхом с Фотьем к сущей церкви святей Богородице Влахерне всю нощь молитву створиша, таже божественную святы Богородиця ризу с песньми изнесъше, в реку омочиша. Тишине сущи, морю укротившюся, абье буря въста с ветром, и волнам вельям въставшем засобь, безбожных Руси корабль смяте, к берегу приверже, и изби я, яко мало их от таковыя беды избегнути. Въсвояси възвратишася.

『6374(866)年．アスコルドとジルがグレキに進攻し，ミハイル帝の十四年に到着した．皇帝はオガリヤネに対して遠征中であり，黒い川に至つたとき，市長が彼に，ルシがツアリゴロドに進攻して来ると報せを遣わした．そこで皇帝は引き返したのである．これら（ルシたち）はスード（湾）の中へ入つて来て，キリスト教徒に多くの殺りくをなし，二百隻の船を連ねてツアリグラドを包囲した．皇帝はようやく町へはいり，総主教フオチイと共にヴラヘルンにある聖母教会に夜を徹して祈とうした．霊験あらたかさを歌と共に運び出し，川に浸した．静かであり，海はたいでいたが，突然，嵐が風を伴つて起り，大きな波が特に起り，それ

ら異教徒のルシの船を吹き乱し，岸にうちつけ，うちこわしたので，それらのものたちのうちで，かゝる災難からのがれたものは少なかつた．（助かつたものは）家郷へ帰つたのである』．

この一節は，ハマルトルスの訳本では，

Царь же изыде воевати на Агаряны, оставль вь граде Орифа ипарха, иже не у цареви ни от-нижже поучаваашесе и вь уме имеаше твориму, безбожныихь Русь вьзвести нашьствие, бывшу уже у Мавропотама; и царь убо и пришьствия пути удрьжасе, и чесо деля сия остави, ничесоже царьско и мужьско сьдела. Руси же приспевше вьнутрь быти церкве, много сьделаше убииство христианомь и неповинну крьвь пролияше; беху же корабле 200, иже окрочише градь и многь страхь вьнутрь сущиимь сьтворише. Царь же уведавь, едва вьзможе преити, и сь патриархомь Фотиемь вь Влахерну приидоста, и ту Бога моляаху; таже сь песньми святыи Богородице изнесше омофорь. вь море краи омочише. И тишине сущи, абие ветромь наитие, и мору вьзмутившусе, вльнамь вьстание често бысть; и безбожныхь Русь корабле погрезоше, малемь убегшем от-беды.

（日本語訳省略）

とある．また，6410（902）年の項は，『過ぎし年月の物語』において，次の様に読まれる．

В лето 6410. Леон царь нася Угры на Болгары, Угре же нашедше всю землю Болгарьскую; Семеон же уведав на Угры възвратися, Угри противу поидоша и победиша Болгары, яко одва Семеон в

дерьстер убежа.

『6410(902)年．レオン帝はボルガルに対してウグリをやとつた．ウグリは攻撃して，ボルガル全土を席捲しつゝあつた．セメオンはこれを聞いて，ウグリに向つて引きかえした．ウグリは（これに）向つて進み，ボルガルを打ち破つたので，セメオンは，かろうじて，デルステルに逃れることができたほどであつた』（『古代ロシア研究』才三号；p.2参照）．

この一節中の『ウグリ』≪Угри≫をトウルツイ≪Турци≫と呼びかえ，『ボルガルの』≪Болгарский≫という形容詞を『グレキの』≪Гьчьский≫と変えただけの，ほとんど同一文章が，ハマルトルス年代記の前記の訳写本にみられるのである．即ち，

Прешьдше убо Турци, Сумеон-же упражньсе ратуе
войску Грьчьскую, плениште Турци Вльгарьскую
землю. Сия увѣдевь Сумеонь, подвижесе на Туркы;
они же прешьдше брань сътвориште сь Вльгары, и
побѣждень бысть Сумеонь.

（日本語訳省略）

とある．

6420(912)年の項でオレグ≪Олег≫が占師の予言通り馬のがい骨から出て来た蛇にかまれて死去し，シチエコヴイツア≪Щековица≫と呼ばれる山に埋められ，其処に今日まで彼の墓があるという物語の直後に，『過ぎし年月の物語』は，『うらないから，よう術が実現するのは不思議なことである』≪Се же дивно есть, яко отъ волхвования сбыстся чародействомъ≫と書き足して，一つの長い物語を述べている．占いやよう術の物語を，そつくり，ハマルトルイスから借用して来たのである．相当長い文章であるし，その古代ロシア語の原文は既に『古代ロシア研究』才三号のp.56以下に示したので，此処では，その日本語での意味だけを述べて，ハマルトルスの訳文

と対応してみよう．

『デメチアンの在位時代にアポロニチヤニンという名前のある占い師がいて，有名であり，旅をして，いたるところ町々や村々で悪魔的な奇跡を行つていた．ところで（彼は）リムからウイザンチヤにやつて来て，そこに住んでいる人々から，これらをなすことをこん願されて，町から多くの蛇やさそりを，それから人間たちが咬まれたいように，追い出した．貴族たちが集つて来たときに，馬の狂暴さを鎮めた．（彼は）同時にアンチオヒヤにもやつて来て，さそり，および，蚊によつて，アンチオヒヤ人が苦しめられていた時，彼等から頼まれたので，銅のさそりを作り，それを地面に埋めた．しかして大理石の小さな柱をその上に建てた．しかして，人々は杖をもち，町をあるきまわり，杖をふりまわしながら叫ぶように命じた．『町に蚊が居なくなれ』と．かくして町から，蚊，及び，さそりが消えた．また，ふたゝび，町に地震がよくあるので，（その）地震からまぬがれるように（人々が）たのんだ．（彼は）ためいきをついて，板に次のように書いた．「あゝ汝，呪われたる町よ．（汝は）多くゆれ，火によつてとらえられ，シオリチの岸辺においても汝を（人々が）包囲するであろうから」と．彼について神の町の大いなるアナスタシイもまた言つた．「アポロニーに実現されたものは現代に至るまでなお若干の土地において実際に起つている．つまり，あるものは四足の動物の駆逐に対して，人に危害を与える強い鳥に対して，また別には妨げられることなく流れている川の流れをせき止めることに対して．しかしてまた他のことは，人間に対してあるところの滅亡と害に対して，（それらを）打ち負かすためにある．というのは，彼の存命中にまさしくかくの如きことを悪魔たちが彼のためになしただけでなく，また，彼の死後にも，彼の名において彼の墓に留まつている（あやしい）しるしを行つていた．しかも，悪魔によつて，そういうことに対してより強く誘惑される，呪われ

たる人間たちに対するたぶらかしのため（である）」と．誰が一体魔術を行うものたちについて何を言うであろうか．愚かにも哲学的な知恵を我身に求めているといつて物知りのアポロニーを常に非難していたようなものが魔術的な誘惑をすることに巧みであつたとは．私も（人が）欲していたものを言葉だけで行うことができるのであつて，人から命ぜられるものを行動でもつて行うのではないと彼（アポロニー）が言つてもよかつたのであるから．これらのことは総て神の思召しと悪魔の仕業である．このようなことがらによつて我々の至高な信仰が強く堅固であるかどうか，我々が主の許に在り，まぼろしの奇跡や悪魔の所業の故に彼（悪魔）の悪意の奴隷と下僕によつて作られた敵によつて引きつけられないかどうかが試されるべきである．しかして，さらに主の御名によつてヴアラムおよびサウル，およびカイヤフアのような者たちが予言し，ふたたび悪魔をイユダやスケヴアのような者たちが予言し，ふたたび悪魔をイユダやスケヴアの子等のように追い出した．ところで，（主は），価しないものにも，他のものたちを助けるために，しばしば恩ちようを与え給うのである．なぜなら，ヴアラムは（正しい）生活と信仰の両方に無縁であつたが，それにもかかわらず，（主は）他人の世話のために，彼に恩ちようを示したのであるから．フアラオンもかくの如き人であつた．しかし，この者にも（主は）未来を示し給うた．しかしてナヴホドノソルは，おきてに背いていた．しかし，この者にも，後にある多くの世代の後（のこと）をひらいて見せ給うた．多くの敵対的なものたちが才智をもつていることをこれによつて示しながら，善きことを考えない人々に対する誘惑のために，他のごまかしをもつて，フリストスの像の前でしるしを行うのである．占師シモンおよびメナンドルその他のものも，そうであつたように，そのようなもののために，奇跡によつて（人を）まどわすなということはまことである」

この一節の一部は，当然，文献的に旧約聖書にまでさかのぼるべき内容のものである．然し，此処では，直接の参照文献として，ハマルトルス年代記の古代スラヴ語訳の対応個所を示しておこう．

И Аполлоние Тиане всь знаемь бе, обходе и вьсуду творе вь градехь и странахъ творения. И кь Вузантии от-Рима пришьдь, сътвори ту многа твореиа, умолень бывь от-Византень, яко изгнати множьство змии и скорпии от-града и никомуже от-нихь вредитисе, ни от-многаго бесчиния конемь ристающемь, вьсънети властеломь. Такожде же и вь Антиохию шьдь, сътвори, умолень бывь, скорпиамь и комаремь творения, томими бо Антиохиане беаху от-скорпии и от-комареи зело; и створь медну скорпию, и погребь ю в земль, и маль поставивь пад-нею стльпь, повеле трьстие носити людемь и обходещем скрозе градь звати, трьстиемь махающе: без комареи градь; и та ищезоше от-града скорпие и комаре. Умолен-же бывь и о нале(жа)щиимь граду труса, постенавь, написа на щите сия: горе тебе, окаянный граде, яко трусы многыми и запаленмы обеть бысть, поплачет-же-ся о тебе и иже приморскыи Реитие. О нем-же убо что и великии Анастасие от-Божия града рече: Аполлониева же даже доныне вь некоторыхь местахь деиствують творения, стоюща ова убо на вызбранение скотомь четвреногыимь и птицамь, вредити могущиихь человекы, ова же на вьзлияние струямь речниимь,

бесчинно носимомь, и инаа вь другая некая на пагубу и вредь человекомь суща поборительна стоеть; и убо не тькмо при животе ему сия и таковаа съделаше бесове его ради, нь убо и по скончании его пребывающе у гроба его, знамениа некая сътворише о имены его на прельщение человекомь, иже удобь украдаемымь вь таковая от диавола. Что аще кто речеть о иже-от-Манефона отравныихь даель, иже таковь бысть до конца на отравную прельсть, яко присно заяпеаше яве Аполониа, яко неизвестно иже от-него любомудриа искусь имуща: лепо убо беше тому, рече, якоже азь, словомь тькмо творити яже хотеаше, а не творенмы повелети, иже от-него сътворенимь. Сия же вса, попущениемь Божиемь, деиством бесовскыимь бывають, кьеже тацеми вещмы искусити нашу православную веру, аще тврьда есть и крепка пръбывающии о Господи, а не отводима отврага мьчьтними знаменмы и сотрониньскыми делы, делаемомь от-рабь и служителей злобе. Не тькмо же, нь и именемь Господнымь пророчьствовавше, яко Валаамь, и Сауль, и Каиафа, и бесы паки изганяаху, якоже и Иуда и сынове Скевовы. Вь сицевыихь-же и еже неции от-шую Христа вьзвещають, и прочая, темже убо и вь недостоиныихь благодать деиствуеть многащи, да инемь добро створить. Ибо Валаамь от-обоюду туждь беше, от-житиа изредна и веры: нь обаче деиствовавь немь благодать инехь ради устроения. И Фараонь таковжде беше: нь и тому бу-

бущая проявы. И Навуходоносорь пребезаконьнь:
нь убо и сему паки яже по мнозехь послежде
бываемаа родехь откры. Темже яве, яко мнозии
супротивьнь имуще разумь, образомь Христовемь
знамениа твореть, иною хытростию некоею, на
прельщение человекомь неискусныимь о добре;
якже бысть Симонь влъхьвь, и Менандрь по
онемь, и иныи таковыи, о них-же вь правду рече:
не чюдисе прельститисе подобиемь, ниже изветомь
явления искусити, иже глаголемымь истину.

（日本語訳省略）

以上の様に，ハマルトルス年代記古代語訳本と，ほとんど同一文章の引用個所を，『過ぎし年月の物語』は含み込んでいるが，それとならんで，内要だけを汲み取つて来たもの，或は，ロシア側に伝わる伝承を書きながら，それが，ビザンチンの記録と面白いほどに照合しあうものなどがある．ロシアの伝承とビザンチンの（ハマルトルスの）記事を組み合わせた明らかな例である．例えば，先に述べた6449(941)年のイゴリのギリシア遠征の記述は，その最も典型的なものである．『過ぎし年月の物語』の中には大体次の様に書かれていた．即ち，『イゴリがグレキに向つて進攻した．ボルガルが皇帝に報せを送つたところによれば，一万隻のルシがツアリグラドに向つて　進攻しつゝあるという．それらは出発し航し来たり，ヴイファニアの国々を荒しはじめた．しかして，ポントに沿つてイラクリイまで，およびファフロゴニアの地までを荒し，しかしてニコジアの国全土をおさえ，しかしてスド全部を焼いた．彼等をつかまえて，あるものたちをはりつけにしたり，他のものたちを的のように立たせて，彼等に矢を射かけたり，引きだして，うしろ手にしばり，鉄の釘を彼らの頭の中央にうち込んだりした．また多くの聖なる教会に火をかけ，修道

院や村々を焼き，（スドの）両側の少なからざる財産をうばつた．そののち，東から軍勢が来たつたとき，デレステクのフオカがマキドニア（人）をひきいて，また，ストラテラトのフエドルがフラキア人をひきい，また彼らと共に貴族の高官たちもルシをとり囲んだ．ルシは相談してグレキに対して武装して出撃し，しかして，彼等の間には，激しい戦いがあり，かろうじてグレキが勝つた．一方ルシは夕方近くおのれの従士団のもとにもどり，夜中に船にのり込んで逃げ去つた．また，フエオフアンは火をそなえた船に乗つて彼等をむかえ，しかして筒で火をルシの船に放ちはじめた．しかして，おそろしい奇跡がみられた．ところで，ルシは炎をみて逃げようとして海の水の中へとび込んだ．かくして，他のものたちは，おのれの国へ帰つた』．（古代ロシア語原文省略）．

ハマルトルス年代記古代スラヴ語訳によれば，これに相当する一節が次の様に読まれる．

Июния же месяца 11 низьидуше Руси на Константинь градь сь корабли 10 тысущь. Послан-же быста на нихь сь всеми корабльми, елико прилучишесе вь Цариграде, патрикие Феофань, и корабле наредивь и уготовавь, и постом и сльзами себе оградивь яко паче, на Руси поиде братисе сь ними кораблехь. И понеже они приидоше и близь Фара быше, сь кь Евксинскому Понту вь устии лову, вь Иеро глаголемое, вьнезапу нападе на не, и убо своимь прьвее кораблемь приплувь, от-Русскагаго плъка множаишихь порази, и устрсеннемь огнемь множаишее корабле пожеже; прочии же корабле побегоше. Имже последующе, и прочии корабле велиции потекше, сьврьшену сътворише победу, и многы убо

кораблѣ потопише съ самеми мужи, многы же низложище, другых-же живыихъ еше; ети же бывшеи убо въ въсточную страну, въ Згоры глаголемые, преведени быше. Посланъ-же бысть тогда и Варда Фока по суху на конехъ брьзиихъ претещи ихъ; и убо сихъ плъку мнозехъ пославшу къ Вифинии-сцеи стране, яко пищу себе и ину потребу купити, и обрѣть плъкъ ихъ реченный Варда, зле сихъ порази, победивъ и поклавъ ихъ. Сьниде же тогда и Йоанъ магистръ съ всеми въсточными вои, и многы от-сихъ искази. Многа же и велика зла сии сътворище, прежде не сниде Грьчьская воиска: ибо Стенонъ глаголемыи въсь пожегоше, и ихже поемааху пленникы, овехъ убо распинааху, овех-же по земли протезааху, овех-же якоже белегы поставляюще, стрѣлами състрелааху, елико же отъ священникъ поемааху, наопеть руце свезающе, гвозды железны на средь главы имъ прибываху; многыи же святыи церквы огневи предаше. Зиме же уже настающе и пищу не имуще, тогда нашьдь воиска боещесе убо, и въ кораблѣ же свое въшьдше, хотеаху въ своя отити и утаитисе кораьлеи тьщешесе. Септемврия месяца, 15 ендикто, отплути устрьмившемсе въ Фракийскую страну, от-реченнаго Феофана патрикия сретени бывше, ибо не могоше утаитисе бьдрьливне оны и добрые душе; абие убо въторую брань съвькупи, и многы кораблѣ потопи, и многы от-нихъ поби реченный мужь; малом-же от-кораблеи спасщемсе, въ

ноши наставши побегоше. Феофан-же патрикие с победою светлою възвращьсе, и чьстне и велико-лепне прието быть, и паракимоменскымь саномь почтень быть.

『ところで，六月十一日にルシがコンスタンチンの町を一万隻の船と共に破壊した．彼等に対して，ツアリグラドに居合せた限りの総ての船と共に総主教フエオフアンが派遣された．しかして（彼は）精進及び涙を以て，できる限り強くおのれを守り，ルシに向つて，それらと戦うべく船に乗つて出かけた．しかして，彼等が到着し，フアルの近くにいた後，この者は，エヴクシオンのポント（湾）へ，イエロといわれる網の口に（至り），突然，ルシたちを襲つた．しかして，先づおのれの船でこぎ来たり，ルシの軍勢から多くの者たちを打ち果した．しかして設備した火で以て多くの船を焼いた．その他の船は逃亡してしまつた．彼等が追跡していた時，その他の大きな船は流れ，完全なる勝利を獲た．というのは，多くの船は家臣を乗せたまゝ沈み，また多く（の船）をこわした．その上に，まだ生きていたものたちを（打ち果した）からである．とらえられたものたちはズゴルイと言われる東の国へ連れ移された．ところで，その時には，ヴアルダ・フオカが彼等をきるために陸路を早馬で派遣された．しかして，これら多くの者たちを，軍勢が，おのれの食べ物及び他の必要なものを買うためにヴイフイニイクの地方へ遣わした時に，上記のヴアルダが彼等の軍勢を見つけ，これらの者たちを多いに殺し，打ち勝ち，しかして彼等を打ち果した．ところで，その時，騎士団長のイオアンもまた総ての東方の軍勢と相まみえて，それらのものたちの多くを破つた．これらの者たち（ルシ）は，グレキの軍が以前には会いもしなかつたほどの多くの大きな悪をなしたのであつた．というのは，所謂スチエノンを全部焼き，捕虜として捕えたものたちを，あるものたちは，はりつけにし，またある者たちを大地

にひきすえ，またある者たちを的のように置いて矢を射かけたのである．僧を捕えた限りでは，両手を逆手にしばりあげ，鉄の釘を彼等の頭の中央に打ち込んだのである．多くの聖なる教会もまた火にかけた．ところで既に冬がはじまり，食べ物を持たなかつたので，その時，襲つて来たる軍勢を，おそれた．しかして，おのれの船に乗り込み，おのれの（国）へ帰ろうと欲し船を引きさげようと望んだ．九月のインジクト十五に，前述したフエオフアン総主教によつて守られたフラキアの国へ急ぎ航した．彼等の勇敢な者たちや良き生命を守ることができなかつた．再び才二回目の戦いに入り，多くの船をしづめ，彼等の多くの者たちを上記の士が打ち果した．（それらの）船のうちで少数のものだけが助かり，夜中に，（船に）乗り，逃亡した．ところで総主教フエオフアンは立派な勝利をおさめて戻り，しかして，礼をつくし，壮重に迎えられ，しかして，パラキモメンの位に任ぜられた．』

この様に，明らかに，『過ぎし年月の物語』の中にハマルトルスの年代記の一節が書き抜かれ，或は，直接的に反映している個所を，もう一個所あげておかなければならない．それは，『過ぎし年月の物語』が年号を設定して記録をはじめる以前の個所にみとめられる．人類の祖であるアダムから，現在の時代に至る間を手短かに記述するところである．勿論，文献的に最終段階にまでさかのぼるとすれば，旧約聖書をもち出さなければなるまいが，年代記者は，決して自分で旧約聖書を要約したのではなかつた．次の様なハマルトルスの文章を要約したのである．前のものと同じくシノダーリ写本一四八号の古代スラヴ語訳によることにする．（『過ぎし年月の物語』の原文と日本語訳は省略）．

Сказание вькратце сущимь от-Адама до днешняго времене.

Адамь роды Сифа, Сифь Еноса, Енось Каинана, Каинань Малелеила, Малелеиль Иареда, Иаредь

Еноха, Енохь Мафусала, Мафусаль Ламеха, Ламехь Ноя, Ное Сима. Суть убо от-Адама до потопа 2042. По потопе же Симь, сын Ноевь, роди Арфаксада, Арфаксадь Каинана, Каинань Сала, Саль Евера, Фалека, Фалекь Рагава. Вь дни Фалековы разделена бысть земля; при семь стльпотворение сьтворисе. По Фалеце Рагавь роди Серуха, Серухь Нахора, Нахорь Фара, Фара роди Авраама; вькупе леть 3512. Авраамь роди Исаака, Исаакь Иакова, Иаковь Левиа, Левий Каафа, Кааф Аврама, Аврамь Моусея пророка; сьи изведь люди от-Егупта. От-Авраама до исхода Израилева леть 509, от-потопа же леть 1579; вькупе от-Адама до Давыда леть 4470. Давыдь роди Соломона, дрьжавь царство за 40 леть, Соломонь роди Роваама, царствовавь леть 40, Роваамь царствова леть 17, Авиа лета 3, Аса леть 40, Иоасафать леть 39; при семь пророчьствова Михей, и Илиа, и Елисей; Иорамь леть 9, Охозиа лето 1, Гофолиа мати Охозиева леть 7, леть 40, Амесия леть 29, Азариа леть 59, Иоафь лето 1, Ахазь леть 16, Езекиа леть 29, Манасия леть 52, при немь сьздесе Византиа; Амось лете 2, Иосие 31, Иоахазь лето 1, Иоаким леть 14, Иехониа лето 1, Седекие леть 14; сего ослепивь Навуходоносорь, пленника вьзе, и храмь огнемь попалень бысть от-Навузардана. От-начала царства Соломонова до пленения Иудова, иже вь Вавулоне, леть 519. Навуходоносорь леть 24, Улемардахь сынь его леть 5, Валтасарь лета 3, Дарие леть 17, Кирь

леть 31, Камвись леть 29, Дарие другый леть 28, Артаксерскь леть 33, Дарие леть 9, Артаксерксь дльгорукый леть 34, Охось 21, Арисохь 2, Дарие Арсамь 6. Сего убивь Александрь Македонянинь, и разорь Перское царство, царствова леть 12 и скончасе вь Вавулонии, сый леть 32; покори же варварскыхь езыкь 42 и колена Еллиска 18, Вьпуне от-Адама до Александра леть 5188. По скончани же сего, Египтомь и Александриею царствова Птоломей леть 24, Птоломей Филаделфь леть 30; при семь Еврейскые священные книгы в Елладьскый езыкь преписашеся; Птоломей Евергеть 25, Птоломей Филопаторь 17, Епифань 23, Филомиторь 35, другы Евергеть 29, Фискь 16, Сидирить 9, Александрь 3, Птоломей Сотирь 8, Дионисие 28, Клеопатра 22. Вь третие лето сего прьвее единоначельствова по закону Гаие Иуль Кесарь, от него же кесари прочии царие начеше зватисе, просиггигь лета 4; Кесарь Августь 56. В 15 лето царствова его Клепатру убивь, прьвее низложи Птоломеово царство, иже царстоваше леть 208. Бывають убо от-Адама до начела царства Августова, по известных летописьць, леть 5457.
Вь 43-е лето царства его родисе плътию Господь нашь Исус Христос от-святые Девы Богородице, Куриинь же съветомь велмужии послань бысть вь Иудею, отьписание сътвори имениемь и жителемь. От-Адама до вьчеловечения Христова леть 5500. Тиверие царствова леть 22; вь 15 лето царства его еуангильское учение начеть Господь, и вь

1,-е лето пострада насъ ради волную страсть. Сут-же от-Адама до Господня вьзнесения леть 5533. Гаие лета 4. Клавдие 14. Неронь 14, и бежать себе погребе жива. Уеспаниянь 10; в 2-е лето царства его бысть пленение Иерусалиму от-Римлянь, по 40-хь летехь Господа нашего Исуса Христа вьзнесени. Тить лета 3. Доместиянь 15. Неруи лето 1. Траиянь 18. Адриань 21. Тить Антонинь месяца 2. Александрь Мамаль 13. Максиминь 6. Филипь 6. Декие 1. Аврилианъ 6. Провь 7. Карь 2. Диоклитиянь 20. Константинь великый 31; при семь бысть 1 сьбор. Суть убо от Господа нашего вьчеловечения до 1-го сьбора 318 святых отець. Скончавсе сый леть 65 великый Константинь, остави тремь сыномь своимь царство: Косте, Константину и Константию, иже царствоваше леть 24. Иулианъ преступникь 2. Иувианъ 9 месяць. Иуалентиниань великый 10. Уаль Гратианъ 6. Уалентиниань 15. Феодосие великый 16; при нем-же бысть второй сьбор. Аркадие 4. Феодосие малый 42, при немь-же бысть третий сьборь. Маркианъ 6; при нем-же бысть 4 сьборь. Львь великый 18. Зинонь 17. Анастасие 27. Иустинь Фраксь 9. Иустинь другый 13; при нем-же бысть 5 сьборь. Триверие 3. Маврикие 20. Фока 8. Ираклие 30. Константинь сынь Ираклиавь 17. Иустинь 10. Львь 3. Тиверие Апсимарь 7. Иустиниань 6. Филиппикь 2. Анастасие Артемь 2. Феодосие 1. Львь Кононь 1. Иконоборьць Константинь сынь его 18. Львь сынь Костантиновь 5. Константинь

съ православною материю своею Ириною 3; при сихъ бысть 6 съборь. Константинь единь 8. Михаиль и мати его 5 и месяця 2. Никифорь 7. Ставракие лето 1 и месяца 2. Михаиль лето едино и месяць 9. Львь 7 и месяць 5. Михаиль леть 8 и месяць 9. Феофиль Трофорь леть 17 и месяць 9.

『アダムから今日の時に至るまでにあつた簡略な物語．アダムはシフを生んだ．シフはエノスを，エノスはカイナンを，カイナンはマレレイルを，マレレイルはヤレドを，ヤレドはエノフをエノフはマフサルを，マフサルはラメフを，ラメフはノエを，ノエはシムを（生んだ）．アダムから洪水まで二〇四二年である．洪水の後，ノエの息子シムはアルフアクサドを，アルフアクサドはカイナンを，カイナンはサルを，サルはエヴエルを，エヴエルはフアレクを，フアレクはラガフを（生んだ）．フアレクの時に，国が分けられた．この（者の）時に塔建設が行われた．フアレクの後，ラガフはセルフを生み，セルフはナホルを，ナホルはフアルを，フアルはアヴラアムを生んだ．計，三三一二年．アヴラアムはイサアクを生み，イサアクはイアコフを，イアコフはレヴイイを，レヴイイはカアフを，カアフはアヴラムを，アヴラムは予言者モウセイを（生んだ）．この者は，人々をエグプトから導き出した．アヴラアムからイスライルの出エジプトまで五〇九年，洪水からは一五七九年であり，アダムからダヴイドまで計四四七〇年である．ダヴイドは，四〇年間帝国を統治してソロモンを生んだ．四〇年間統治してソロモンはロヴオアムを生んだ．ロヴオアムは十七年統治し，アヴイヤは三年間，アサは四〇年間，イオアサフアトは三九年間（統治した）．この者の時，ミヘイ，イリアも，エリセイも予言を行つた．イオラムは九年間，オホジアは一年，オホジアの母ゴフオリアは七年，イオアスは四〇年，アメシヤは二九年，アザリアは五九年，イオアフは一年，アハジは十六

年，エゼキアは二九年，マナシヤは五二年（統治した）．彼の時に，に，ヴイザンチアが創られた．アモスは二年，イオシエは三一年，イオアハズは一年，イオアキムは十四年，イエホニアは一年，セデオエは十四年（統治した）．この者をナヴホドノソルは捕えて盲目にし，神殿もまたナヴザルダンのために火にやかれた．ソロモンの統治の始めからヴアヴロンにおけるイユドの捕囚まで五一九年である．ナヴホドノソルは二四年，彼の息子ウレマルダフは五年，ヴアルタサルは三年，ダリエは十四年，キルは三一年，カムヴイスは二九年，もう一人のダリエは二八年，アルタクセルクスは三三年，ダリエは九年，手の長いアルタクセルクスは三四年，オホシは二一年，アルシソフは二年，ダリエ・アルサムは六年（統治した）．この者をアケドニアのアレクサンドルが殺し，ペルスの帝国を滅ぼし，十二年統治し，ヴアヴロニヤで死んだ．この者は三二年（統治した）．（彼は）野蛮な種族二二及び異教十三種族を平定した．アダムからアレクサンドルまで計五一八八年である．この者の死の後エギプト及びアレクサドリアをプトレメイが二四年間統治し，プトレメイ・フイラデルフは三十年間（統治した）．この者の時に，エヴレイの聖なる書物がエルラドの言葉に書きかえられた．プトレメイ・エヴエルゲトは二五年，プトレメイ・フイロパトルは十七年，エピファンは二三年，フイロミトルは三五年，もう一人のエヴルゲトは二九年，フイクスは十六年，シジリトは九年，アレクサンドルは三年，プトレメイ・ソテルは八年，ジオニシエは二八年，クレオパトラは二二年（統治した）．この者の三年目に，はじめて，ガイエの法に従つてイユリ・ケサルが独裁し，彼から他の皇帝たちが（皇帝と）呼ばれはじめた．プロシグギグは四年（統治した）．ケサル・アヴグストは五六年（統治した）．彼の統治の十五年目にクレオパトラを殺し，はじめて，プトレメイの帝位を廃した．二〇八年間帝位がつゞいていたものである．アダムからアヴグストの統治の始まりまで，有名

な年代記者たちによれば，五四五七年である．彼の統治の四三年目に主は肉体として我々のイススフリストスを聖なる処女の聖母によつて生み給うた．貴族たちの相談によつてクリンがイユデヤに派遣され，領地及び住民たちに布告した．アダムからフリストスの誕生まで五五〇〇年である．チヴエリエは二二年間統治し，彼の統治の十五年目に主は福音の教えを始め給うた．十九年目に，我々のために進んで受難を嬢給うた．アダムから主の昇天まで五五三三年である．ガイエは四年，クラヴジエは十四年，ネロジは十四年（統治し），ウエスパンヤンは十年（統治した）．彼の統治の二年目にローマ人たちによるイエルサリムの捕囚があつた．我々の主イススフリストスの昇天の後四十年のことである．テトは三年，ドメチヤンは十五年，ネルイは一年，トライヤンは十八年，アドリアンは二一年，チトアントンは二十年，彼の息子マルコは十六年，アントニエヴイルは七年，コモドは十二年，もう一人のアントニエは四年，セヴイルは十八年，アントニジは二ケ月，アレクサンドル・ママルは十三年，マクシミンは六年，フイリプは六年，ジエキエは一年，アヴリリアンは六年，プロヴは七年，カルは二年，ジオクリチヤンは二十年，コンスタンチン大帝は三一年（統治した）．この者の時に才一回宗総会議があつた．我々の主の誕生から才一回宗総会議までに三一八人の聖なる父たちがいる．このコンスタンチン大帝は六五才で逝去し，おのれの三人の息子に帝国を残した．即ち，コスチヤ，コンスタンチン，コンスタンチイーの三人である．二四年統治したのである．異人ユリアンは二年，イウヴイアンは九ケ月，イウアレンチニアン大帝は十年．ウアリ・グラチアンは六年，ウアレンチニアンは十五年，フエオドシエ大帝は十六年．この者の時，才二回宗総会議があつた．アルカジエは四年，小フエオドシエは四二年．彼の時才三回宗総会議があつた．マルキアンは六年．彼の時に才四回宗総会議があつた．レフ大帝は十八年，ジノンは十七年，アナス

タシエは二七年，イウステン・フラクスは九年，もう一人のイユステンは十三年．この者の時に第五回宗総会議があつた．テヴエリエは三年，マヴリキエは二十年，イラクリエは三十年，イラクリエの息子コンスタンチンは十七年，イウステニは十年，レフは三年，チヴエリエ・アブシマルは七年，イウステニアンは六年，フイリピクは二年，アナスタシエ・アルテムは二年，フエオドシエは一年，レフ・コノンは一年，彼の息子コンスタンチン聖像破壊者は十八年，コンスタンチンの息子レフは五年，コンスタンチンはおのれの正教の母エリナと共に三年統治し，この二人の時に第六回宗総会議があつた．コンスタンチンは一人で八年，ミハイルと彼の母が五年と二ケ月，ニキフオルが七年，スタヴラキエが一年と二ケ月，ミハイルが一年と九ケ月，レフが七年と五ケ月，ミハイルが八年と九ケ月，フエオフイル・トロフオルが十七年と九ケ月（統治した）．

この様に，『過ぎし年月の物語』は，度々，ハマルトルスの年代記を利用していたのである．その後，各年代記でも，おそらくは，一々，ギリシア語の原典へは帰らずに，上に引用したような，古代スラヴ語訳にまでしか立ち帰らなかつたことであろう．

然し，年代記者がよりどころとした古い文献が，実際はビザンチンのハマルトルス年代記であつたかどうかは決して明言できない．というのは，『過ぎし年月の物語』が，年代不明なほどの古い昔話に終止符を打ち，初めて年号を設定し，6360年(西暦852年)として更めて記事を書きはじめたとき，その前書きには，次の様に書かれた．

В лето 6360. Индикта 15, наченшю Михаилу царствовати, начася прозывати Руска земля. О сем бо уведахом, яко при сем цари приходиша Русь на Царьгород, якоже пишется в летописаньи Гречьстем: темже отселе почнем и числа по-

локим.

『6360(852)年,すなわちインジクトの十五にミハイルが統治し始めたとき,ルシの地と呼び始められた.このことについて我々が知つたのは,この皇帝の治世にルシがツアリゴロドに(攻め)来たり,(そのことについて)グレキの年代記に誌されているからである.それゆえに,ここから始めて,年代を誌そう』

この様に,年代記者がギリシアの年代記を参照していることを明らさまに述べながらも,この文章に続く一節は,本当は,ハマルトルスの年代記であつたというよりも,むしろ,宗法集≪Номоканон≫からの書き抜きであつたように思われる.ソフイア羊皮紙本によれば,この宗法集の冒頭には『年代記者ツアリグラードの総主教ニキフオルの要約』≪Никифора патриарха Цариграда летописець въскоре≫となつているので,それに引かれて,『過ぎし年月の物語』では,簡単にグレキの年代記としたのではないだろうか.

トロイツキー,ラヴレンチー,イパーチー各年代記の『過ぎし年月の物語』では,年号設定に続く文章が,次の様に読まれる.

от Адама до потопа лет 2242. а от потопа до Оврама лет 1000 и 82; а от Аврама до исхоженья Моисеева лет 430; а от исхоженья Моисеева до Давыда лет 600 и 1; а от Давыда и от начала царства Соломоня до плененья Иерусалимля лет 448; а от плененья до Олексендра лет 318; а от Олександъдра до Рожества Христова лет 333; а от Христова Рожества до Костянтина лет 318; от Костянтина же до Михаила сего лет 542. А от перваго лета Михаилова до перваго лета Олгова, Рускаго князя, лет 29; а от перваго лета Олгова, понеже седе в Киеве, до

перваго лета Игорева лет 31; а от перваго лета Игорева до перваго лета Святьславля лет 33; а от перваго лета Святославля до перваго лета Ярополча лет 28; а Ярополк княжи лет 8; а Володимер лет 37; а Ярослав княжи лет 40. Темже от смерти Святославли до смерти Ярославли лет 85; а от смерти Ярославли до смерти Святополчи 60. Но мы на прежнее возъвратимся, скажем, што ся удея лета си; якоже преже почал бяхом первое лето Михаилом, а по ряду положим числа.

『アダムから洪水まで2242年，洪水からオヴラムまで1000と82年，オヴラムからモイセイの出エジプトまで430年，モイセイの出エジプトからダヴイドまで601年，ダヴイドから，またソロモンの統治の初めからイエルサリムの陥落まで448年，捕囚からオレクサンドルまで318年，オレクサンドルからフリストの生誕まで333年，フリスト生誕からコスチャンチンまで318年，コスチャンチンからミハイルまで542年，である．
ところで，ミハイルの才一年から，ルシの公オレグの才一年まで29年，オレグの才一年，即ち，キエフにおいて即位してからイゴリの才一年まで，31年．イゴリの才一年から，スヴャトスラフの才一年まで33年．スヴャトスラフの才一年からヤロポルクの才一年まで28年．ところでヤロポルクは8年間公としてあつた．ヴォロジメルは39年間，ヤロスラフは40年間公としてあつた．このゆえに，スヴイヤトスラフの死からヤロスラフの死まで85年，ヤロスラフの死からスヴャトポルクの死まで60年である．しかし，我々は初めに戻り，これらの年に何がなされたかを物語ろう．さきに我々は，ミハイルをもつて最初の年としたので，順に従つて年代を記そう』

年代記は，この様にして，此処から年代順に記述が始められるが．この文章の前半の年号や歳月の計算は，既に引用したハマルトルスにも詳しく書きとめられていた．だから，この前半はハマルトルスからの抜き書きで，後半のロシアの公たちの場合の歳月の勘定の場合は，ギリシアの文献ではなくて，ロシア本来の文献か或は記憶からの書き取りであると一応は考えられるかも知れない．

然し，実はそうではない．ロシアの公たちの場合の歳月の勘定の仕方までも含めて，この一節の更に詳しい記事が，ソフィアの羊皮紙の宗法集にあるのである．『過ぎし年月の物語』の記者（編者）は，此処では，ギリシア語による原典へなどへは立ち帰っていないかもしれない．宗法集（もとをただせば，これとても，ビザンチンの物からの訳本でなお古くは旧約聖書に由来する個所もあつた）からの簡略な書き抜きをおこなつたものであつたと思われる．宗法集≪Номоканон≫には，その前半にハマルトルスの年代記の訳本の場合と同じく，アダムから年を勘定しはじめるが，ビザンチンの皇帝コスチャンチン≪Костянтин≫にまで至ると，ロシアの公イゴリ，ヴォロジメル，オレグ，ヤロポルク等に就ても詳しく年を勘定しているのである．そして，面白いことに，此処には，ルシによるヴァリヤーギ招へいの折の口上の一節まで読みとれるのである．このあたりから後の部分は後代にロシアで書き加えられたものであろうか．『過ぎし年月の物語』の6360(852)年の先にあげた文章に対応すべき，宗法集の文章は非常に長いが，その全部を下に書きあげて，また，後に書き加えられたかも知れない後半のロシアの公たちにまつわる部分まで通して日本語訳をつけておこう．

Адам пьрвыи человек быв лет 230, роди Сифа и
живе леть 700 до Малелеила, живе всех лет 930.
Сиф быв лет 200 и 15, роди Еноса и живе лет

912. Енос же быв лет 107, роди Каинана и жи всех лет 900. Каинан быв лет 170, роди Малелеила и жи всех лет 909. Быв Малелеил лет 165, роди Ареда и жи всех лет 885. Аред быв лет 162, роди Еноха и жи всех лет 962. Енох быв лет 165, роди Мафусала и жи всех лет 345; и угоди Енох Богу и не обреташеся, яко престави и Богь.
Мафусал быв лет 167, роди Ламеха и жи всех лет 969. Ламех быв лет 178, роди Ноя и жи всех лет 406. Ной быв 500 лет, роди 3 сыны, Сима, Хама, Афета; и в 600-е лето живота Ноева потоп бысть на земли, и жи по потопе лет 380, и бысть всех лет 980.
А от Адама же до потопа лет 2242.
Сим быв лет 100, роди Арфаксада в 2-е лето по потопе, и жи всех лет 500. Арфаксад быв лет 135, роди Каинана и жи всех лет 303. Каинан быв лет 130, роди Салу и жи всех лет 403. Сала быв лет 135, роди Евера и жи всех лет 270. Авер быв лет 130, роди Фалека и жи лет 209. Фалек быв лет 134, роди Рагава; при Фалеце бысть разделение языком.
От потопа до разделенья язык лет 500 и 3о.
Рагав быв лет 137, роди Серуха и живе лет 207; то Серух и пьрвое нача кумиры творити. Серух быв лет 132, роди Нахора и жи лет 200. Нахор быв лет 79, роди Фару и живе лет 129. Фара быв лет 70, роди Аврама. Аврам быв 100 лет, роди Исака.
От разделения язык до Аврама лет 552.

Исак быв 60 лет, роди Иякова. Ияков быв 87, роди Левгию. Левгия быв лет 45, роди Каафа. Кааф быв лет 60, роди Амврама. Амврам быв лет 73, роди Моисея. Моисии быв лет 80, изведе люди из Еюпта, и посемь водяше в пустыни лет 40.

От Аврама до исхода лет 500 и 5.

Исус Навгин всеводьствова лет 32. Старци судиша лет 23. Гофоил племене Иудина лет 50. Еглому царю Моавьску работаше ему лет 8. Аод племене Ефремова лет 80. Иноплеменьници обладаху лет 18. Самагарь лет 7. Вараk и девора лет 40. Под иноплеменьникы лет 20. Мадияне же лет 7. Гедеон лет 40. Авимелех лета 3. Фола лето 31. Аир лет 30. Аманати лет 18. Ефтаи лет 6. Есевон лет 7. Елом лет 10. Лавдон лет 8. Под иноплеменьники лет 40. Самсон лет 20. По Самсоне не бысть судье лет 40; темь и велико бысть зло. Илии жрьць лет 20. Пророк Самоил лет 30. Саул, пьрвыи царь в Израили, лет 40. Давыд лет 40.

От исхода до давыда лет 600 и 30.

Соломон лет 40. Ровоам лет 17. Авия лет 6. Асавет 40 лет. Исафат лет 25; при томь пророчьствоваша Михеи, Илия, Елисеи. Ирам лет 8. Охозия лето 1. Ахав 16 лет. Оховия, мати Хозеова, лет 7. Оас лет 40. Амасия 29 лет. А Захария и Охозия лет 52; при томь пророчьствоваша Иосия, Амос, Исаия, Иона. Иафа лет 16. Ахаз лет 6. Иезекия лет 29. Манасия недею; при томь Вузантии създан бысть. Амос лет 12. О-

сия лет 31; при томь пророчьствова Еремея, и Варух, и Софония. Ахаз 3 месяце. Иоким лет 11. Охония 3 лета. Седекия лет 11; при семь Навоходоносор царь Вавилоньскыи воева Иерусалима, Седекию плени и ослепи, и многы Жиды веде в Вавилон по 1000 в единомь ужищи, с-ними же и Данил пророк и 3 отроци, и церкы пожежена бысть по 5 месяць от-Наурдана повара.

Пребы отнележе създан бысть Иерусалим до пленения 648.

То Навходъносор царьствова в Вавилоне 20. Улемардах сын его лет 5. Валтосар брат его лета 3. Дарии Мидянин лет 17. По Дарии Кюр Персянин лет 32. Камбуси лет 18. Спереди вълхв месяць 7. Дарии Остапьянин лет 20. Артаван месяць 7. Артаксерекс долгоруким лет 41. Другыи Артаксерекс месяца 2. Дарии Иарсаманин лет 6; сего уби Александр Македонскыи, и раздруши Пьрьское царство, у умре в Вавилоне, царствова лет 12, а всех лет царьства его 35. И раздели царство 4-м мужем своим: Филипу, Селевку, Антиоху, Птоломею.

От Адама до умертвия Александрова лет 5167.

Птоломеи царствова в Еюпте и в Александре, и нарицашеся братолюбив, при томь священыя книгы на Елиньскыи язык преложены быша, лет 38. Птоломеи благодатель лет 25. Птоломеи унеиши лет 29. Птоломеи явлены лет 7, 6 месяць. Птоломеи Залчичь лет 10. Птоломеи брат его лет 8. Селевк, иже Никанор наречен бысть, лет 20. Сын Селе-

вков Антиох славный лет 15; то мучи Елезара и Соломонию и 7 отрок. Антиох сын его лет 23; при томь Иулия Кесаря выпороша из утробы мьртвое матери его. Птоломеи двоостровный лет 30. Клеопатрия Тполомеева лет 22. В 23-е лето ея нача в Риме пьрвое царствовати Иулии Кесарь лет 18; то закон до индикта и висикость обрет; в-то время Ирод царемь бе в Иерусалиме. Иулии Август сыновець его, Октавин сын, иже и севаст наречен, царствова лет 57 и месяць 6 и 2 дни; оттуде Антиохьяне лета их чтуть сиче: в 15 лето царства того вселенеи пьрвое написание бысть; Клеопатру убив раздруши Птоломеискую власть, иже царствоваша лет 295.

От Адама до Августа лет 5457.

В 42-е царствия его родися по плоти от-святые Богородице Марие Господь нашь Исус Христос; послан бысть от Августа Кесаря в-то время Кюринеи написание створити всеявласти Иудеиския. Всех лет от-Адама до въплощения Господня 5000 и 500; написание же бе от-Августа трии деля вин. От въплощения Господня до пришьствия до волхов лета 2, а до смерти Иродовы лета 8, а до Архилаевы смерти 9 лет, а 15 до смерти Августовы, жил бяше лет 88; до крещения Господня лет 30, до учечения Иоанова при Иродидовемь лето, по преставлении Иванове до смерти Господня месяць; а от крещения до страсти Господня лета 3, от въскресения до възнесения на небеса днии 40, от възнесения до съшествия святого Духа

на апостолы днии 10; от възнесения до побиения пьрвомученика Стефана лет 7, от побиения Стефанова до света явлешагося с небесе Павлу месяць 6. А Богородици от-рожества до въведения в церковь лета 3, в церкви бы до 14 лет, в дому Иосифове месяца 4; и потом благовещение прия от-архангела Гаврила, и зачьноши роди нетьленьно Господа нашего Исус Христа, бе лет 15, живе до страсти Господня лет 33, по възнесении и в-Ерусалиме в дому Иоана евангелиста живе с ученикы лет 11; живота ея всех лет 59.
От-Адама до страсти Господне лет 5533.
По Августе царствова в-Риме сын Иулиев Тиверии лет 23. Агаи лета 3 и 8 месяць. Клавдии лет 13, 8 месяць, днии 20. Перон лет 13 и днии 8, погребе собе живого; при семь Петр и Павьл, Ияков брат Господень мучени. Галв 1 месяць, и заколен бысть. Офон день 1, и зарезася. Иутилии месяць и 5 днев, и убиша и в-Риме пьяного. Успасьян лет 10; в 2-е лето царства его пленьн бысть Иерусалим Титом, сыном его, по възнесении 46 лет. Тит лета 2 и месяца 2, и заколен бысть в полате. Домептиян лет 15 и месяць 5; то гонение въздвиже, Иоан Богослов в-Патем поточен. Неруя лето 1 и месяць 4. Троян лет 19 и 6 месяць; при семь Игнат Богоносець мучен. Андриян лет 20; и съ раздруши Иерусалим, Елии град нарече, водным трудом отрудоват, убиен бысть. Тит Антонин, нареченыи благочестивыи, с детми своими лет 22 и месяце 3. Марко, сын

его лет 12 и месяць 14; при том Иустин философ мучен. Антонин же Ивир лета 2. Комод 13. Елин Протинакс месяць 6, заколен бысть в-полате. Севир лет 18; при томь Леонид отець Оригеонов мучен, Иполит Римьскыи, ростяше же и Григории чюдотворьць. Антонии сын Севиров лет 7, заколен бысть. Маркин лето 1, и заколен бысть Антонин Галп лета 4, заколен в-Риме. Альксандр 13, заволен бысть. Максим лета 3, и заколен бысть. Гордии лет 6, и удавися в Африкии. Филип лет 7, и заколен бысть в оградех. Декии лето 1 и месяце 3, и заколен бысть на торгу. Гал и Улусиян лето 1 и месяце 4. Увалерьян и Ган лет 15, и заколена быста. Клавдии лето 1 и месяць 9. Авриан лет 5 и месяць 6, и заколен бысть. Такит месяць 6, и заколен бысть. Прол лет 6 и месяце 4, заколен бысть. Кар со отрокома своима, Карин и Нумерьян, лета 2, и заколени быша. Диоклитиян и Максемьян лет 20.
От-Адама до умьртвия Диоклитияня лет 5766; от страсти же Господня до начала Диоклитьяня лет 276.
Крестьяньское царство. Костянтин сын святыя Олены лет 31; в 12 лето царства его сбор бысть в-Никеи 300 и 18 отець на Арья попа Альксандрьскаго, разделяющаго божества; от възнесения Христова до 1 сбора лет 318, а от-Адама до умьртвия Костянтинова лет 5836, всего живота его лет 65. Остави же 3 сыны, Косту в-Риме, Костянтина Царигороде, Костянтия в Антиохии, се ство-

ри ипатин; царствоваша же лет 24. Иулиян преступьник лета 2 и месяць 6, и убиен бысть в Персиде. Увалентиан новый и Феодосии великии лет 16; при семь 2 сбор бысть в Цариграде отець 150 на Македония духоборца; от 1-го сбора до 2-го лет 60. Аркадии сын Феодосьев лет 13 и месяце 3. Феодосии сын его лет 42 месяца 2; при семь 3-и сбор бысть в Ефесе отець 200 на Несторья человекослужебника; от 2-го сбора до 3-го лет 58. Маркиан и Увалениян лет 29; при сею же 4 сбор бысть в-Халкидоне отець 630 на Евтуха и Диоскора и Севгира, смущение и размешение въводлщем; от 3-го сбора до 4-го лет 10. Леон великыи лет 16. Леон малыи лето 1. Зинонь лет 17. Анастасии лет 27 месяце 4. Иустин волосатый лет 9 и днии 23. Иустияиин лет 38 месяць 7; при семь 5-и сбор бысть в Цариграде отець 164 на бладьства Оригеонова; от 4-го сбора до 5-го лет 100. Устьян лет 12 месяць 10 днии 20; в 7 лето, Иустин нетии его, скончася круг святыя Паскы лет 532, отнюду же Господь распяся. Тиверии лет 5. Маврикии лет 20 месяце 4. Фока лет 8. Ираклии с сыномь лето 31; в 3-е лето царства его болшая часть Римьское власти Пьрси прияша, Иерусалим пожьгоша, и честьныи крест и Захарию патриарха и много людии в Персы ведоша; в 12 лето Хоздрои убиен и пленение възвращено бысть. Костянтин сын Ираклиев лет 28, в Сикелии убиен бысть. Костянтин внук Ираклиев лет 17; в лето 6 сбор бысть Цариграде отець 285 на Ария, и Кюра, и

Макария, единоя воля ересы; от 5-го сбора до 6-го лет 130. Иустиньян лет 10. Леонтии лета 3. Тиверии же Иапси лет 7. Иустьянин 2 лет 6. Филикс лета 2. Анастасии же Иаремии лета 2. Федосии лето 1. Лев Конин лет 25 месяце 3 днии 8. Костянтин, сын львов, с материю лето 31 и месяца 2 и дни 2; при тою в 8-е лето 7 сбор бысть в Никеи второе отець 367 на иконоборце; от 6-го сбора до 7-го лет 122, а от-Адама в лето 6305, а от-Спаса нашего Бога лет 805; Костянтин убиен бысть на торгу. Ирина мати лет 5 и месяца 2 и дни 12. Никифор лето 1 и месяць 9. Ставракии сын его месяца 2. Михаил зать его лето 1 и месяць 9 дни 11. Лъв лет 7 и месяць 5 и дни 14, заколен бысть в полате. Михаил лет 8 лет и месяць 9. Феофил лет 12 месяце 3 днии 20. Михаил сын его, с Феодорою матерью его и с Феклою сестрою его, лет 14. Михаил лет 12, с Вавильемь лето и месяце 4, заколен бысть; при сего царстве придоша Русь, Чюдь, Словене, Кривичи к Варягом, реша: "земля наша велика и обилна, а наряда в-нем нетуть, поидете княжит и володет нами", и избрашася три браты с-роды своими, стареи Рюрик седе Ловегороде, Синеус на Белеозере, Трувор в Изборьске; от-Адама лет 6370; по двою лету Труфор и Синеус умре, и прия всю власть в-Руси Рюрик. По Михаиле царь Василии лет 18 и месяць 11; в 2-е лето царства сего крещена бысть Болгарская земля; а от-Адама лет 6377; в 12-е лето царства его Рюрик умре,

дасть княжение Олгови, сроднику своему, и сына малаго Игоря. Льв и Ольксандр, сына Василья царя, лет 26; в 12 лето царства ею преложены быша книгы от Грьчьскаго языка на Словеньскыи; есть же от-крещения Болгарского до преложения книг лет 30, а от 7-го сбора до преложения книг лет 77, а от-Адама 6405. Костянтин, сын Львов, зять Романов, царствова лет 7; а в-Руси княжити Игорь, а Олег умре. Роман царстова лет 36; 27-е лето царьства его убьен Игорь, поча княжити Олга с сыном Святославомь. Иван рекомыи Цемьскыи царстова; в 1-е лето царства его иде Олга Царюгороду и крестися; от-Адама лет 6463; Святъслав княжи лет 18, и убьен бысть, и остави 3 сыны, Ярополка, Олга, Вълодимера; седе Ярополк Кыеве и уби Олга, а Ярополка уби Володимер и седе Кыеве. Костянтин и Василии царствова. При сею крестися Володимер и всю Русь; от-Адама лет 6496; живе по крещении лет 28, и умре. Томь же лете Святополк уби Бориса и Глеба, седе Кыеве 3 лета, бьяся с Ярославом, възбеснев и умре. Ярослав седе Киеве лет 38; а царь бе Манамах. Изяслав сын его лет 24, убьен бысть; при семь Федосии игумен Печерьскыи бысть. Всеволод сын его седе в Киеве лет 15, и умре. Святополк лето 21, и умре. Володимер лет 13; в 2-е лето княжения сего пренесен Борис и Глеб; от-Адама лет 6623; в-то время бе царь в Грьцех Ольксии, и умре, и по нем бысть сын его Иван Порфирогент. По Володимере седе Киеве

сын его Мьстислав лет 6. Ярополк его брат лет 7. Всеволод Олгович лет 7. Изяслав Мьстиславичь лет 6. Юрье Володимеричь Манамаха княжи Кыеве 3 лета. Андреи, сын его от-отца иде Суждалю в лето 6663, княжи в Володимери лето 21; поотне смерти нача быти Киевьское княжение в воли его; в-то время царь бе Мануил; в лето 6681 убиен великыи князь Андреи. Михаило брат его седе в Володимери лето 1, и умре. Киеве седе Ростислав Мьстиславичъ лет 9; Глеб Юрьевич 2 лета; Роман Ростиславичь. А Володимери седе по Михаилце брат его Всеволод Юрьевич лет 37, владея всею землею Русьскою. По нем седе сын его Костянтин лет, а по Костянтин брат его Юрье седе в Володимери, а Костянтиновичи Василко в-Ростове, Всеволод в Ярославле; в 5 лето княжения Юрьева явишася Татарове, и многы страны плениша, и князии Русьских избиша на Калцех; в 15 лето княжения Юрьева, а от-Адама лето 6746, Татарове плениша землю Суждальскую; в-лето 6746 Татарове убиша князя Юрья и Василка, и инех Много. В-то же лето седе в Володимери Ярослав брат Юрьев лет 9, а Ростове седе княгыни Василковая с сыном Борисомь и Глебомь; Ярослав умре в Татарех. По нем седе в Володимери Святослав брат его лето 1; и прогна Андреи сын Ярославль, и княжи лет 5, и приде Неврюнь от-Адама лето 6760, и прогна и за море. Того же лета седе Олъксандр брат его лет 12; в 4 лето княжения его число бысть, от-Адама 6765. По смерти Олъксандрове брат его Ярослав лет 10, и умре. Василии брат его лета 4, и умре. В 1-е лето княжения его 2-е число бысть, от-Адама 6781. И нача ведати великое княжение Дмитрии Олъксандровичь. Борис Ростовьскыи княжи лет 40, и умре в Татарех; и седоста в Ростове сына его Дьмитрии и Костяньтин; а Глеб приехав ис-Татар, княжив 7 месяць, и умре.

.....

『最初の人間アダムは二三〇年生きた時にシフを生み，マレレイルまで七〇〇年生き，全部で九三〇年生きた．シフは二〇〇と十五年した時，エノスを生み，九一二年生きた．またエノスは一〇七年してカイナンを生み，全部で九〇〇年生きた．カイナンは一七〇年してマレレイルを生み，全部で九〇九年生きた．マレレイルは一六五年してアレドを生み，全部で八八五年生きた．アレドは一六二年してエノスを生み，全部で九六二年生きた．エノスは一六五年してマフサルを生み，全部で三四五年生きた．しかしてエノスは神につかえ，神が彼をとりたるために居なくなつた．マフサルは一六七年してラメフを生み，全部で九六九年生きた．ラメフは一七八年いて，ノイを生み，全部で四〇六年生きた．ノイは五〇〇年して三人の息子シム，ハム，アフエトを生んだ．しかしてノイの生命の六〇〇年目に地上に洪水があつた．しかして，洪水の後，三八〇年生き，全部で九八〇年であつた．

アダムから洪水まで二二四二年．

シムは一〇〇年して洪水の後二年目にアルフアクサドを生み，しかして全部で五〇〇年生きた．アルフアクサドは一三五年して，カイナンを生み，全部で三〇三年生きた．カイナンは一三〇年してサラを生み，しかして全部で四〇三年生きた．サラは一三五年してアヴエルを生み，全部で二七〇年生きた．アヴエルは一三〇年してフアレクを生み，しかして二〇九年生きた．フアレクは一四五年して，ラガフを生んだ．フアレクの時に言葉の分裂があつた．

洪水から言葉の分裂まで五〇〇と三十年である．

ラガフは一三七年して，セルフを生み，しかして，二〇七年生きた．そのセルフは初めて偶像を創りはじめた．セルフは一三二年して，ナホルを生み，しかして二〇〇年生きた．ナホルは七九

年してフアラを生み，一二九年生きた．フアラは七十年してアヴラムを生んだ．アヴラムは一〇〇年してイサクを生んだ．

言葉の分裂からアヴラムまで五五二年．

イサクは六十年してイヤコフを生んだ．イヤコフは八七年してレヴギヤを生んだ．レヴギヤは四五年してカアフを生んだ．カアフは六十年してアムブラムを生んだ．アムヴラムは七三年してモイセイを生んだ．モイセイは八十年して，人々をエユプトからみちびき出した．しかしてこの後，四十年間，荒野をみちびいた．

アダムから出エジプトまで五〇〇と五年．

イスス・サヴギンは三二年間指導者であつた．長老たちが二三年間裁いた．ユドの種族をゴフオイルが五十年，モアフの王エグルに仕えて八年，アオドはエフレの種族と八十年．異種族が支配して十八年．サマガルが七年，ヴアラク及びデヴオラが四十年．異種族の下に二十年．マジヤンが七年．ゲデオンが四十年．アヴイメレフが三年．フオラが三一年．アイルが三十年．アマナテが十八年．エフタイが六年．エセヴオンが七年．エロムが十年．ラヴドンが八年．異種族の下に四十年．サムソンが二十年．サムソンの後，四十年間は士師はいなかつた．それにもかゝわらず偉大であつた．イリイが二十年間神官であつた．予言者サモイルは三十年間．イスライルの最初の王サウルは四十年，ダヴイドは四十年．

出エジプトからダヴイドまで六〇〇と三十年．

ソロモンは四十年．ロヴアムは十七年．アヴイヤは六年．アサヴエトは四十年．イアサフアトは二五年．この者の時，予言者であつたのは，ミヘイ，イリヤ，エリセイ．イアラムは八年．オホジヤは一年．アハフは十六年．ホゼの母オホヴイヤは七年．オアスは四十年．アマシヤは二九年．ところで，ザハリヤ及びオホジヤは五二年．この者の時予言者であつたのはイオシヤ，アモス，イサヤ，イオナである．イアフアは十六年．アハズは六年．イエ

ゼキヤは二九年．マナシヤは一週間．この者の時に，ヴイサンチーが創られた．アモスは十二年．オシヤは三一年．この者の時に予言者であつたのは，エレメヤ，及びヴアフル及びソフオニヤである．アハズは三ケ月．イオキムは十一年．オホニヤは三年．セデキヤは十一年．この者の時にバビロンの皇帝ナヴオホドノソルがイエルサリムを戦いとり，セデキヤを捕えて盲目にした．しかして，多くのジドをバビロンに連れ去つた．千人づつ一つの網につないで．それらの者たちと共に予言者ダニルも三人の子供もいた．しかして，五ケ月後に，炊事夫のナウルダンによつて教会が焼かれた．

エルサレムが創られてから捕囚まで六四八年．

ナヴホドノソルはバビロンに二十年君臨した．彼の息子ウレマルダフは五年．彼の弟ヴアルトサルは三年．ダリイ・メジヤニンは十七年．ダリイの後ペルシヤ人のキユルが三二年．カムブシが十八年．それ以後は魔法使いが七ケ月．オスタピイのダリイが二十年．アルタヴアンが七ケ月．手の長いアルタクセレクスが四一年．もう一人のアルタクセレクスが二ケ月．ヤルサマンのダリイが六年．この者をアケドニアのアレクサンドルが殺し，ペルシヤの王国を破壊し，十二年間君臨してバビロンで死んだ．ところで彼の君臨は全部で三五年である．しかしておのれの四人の息子，フイリプ，セレヴク，アンチオフ，プトロメイに王国を分けた．

アダムからアレクサンドルの死まで五一六七年．

プトロメイはエユプト及びアレクサンドリヤに君臨し，兄弟を愛するものと呼ばれた．この者の時代に聖なる書物が，ギリシア語に訳された．三八年である．慈善者プトロメイは二五年．若い方のプトロメイは二九年．素直なプトロメイは七年と六ケ月．ザヤチの子プトロメイは十年．その弟のプトレメイは八年．ニカノルと言われたセレフクは二十年．セレフクの子の栄えあるアンチホフは十五年．この者はエレザル及びソロモニヤ及び七人の子供

を苦しめた．彼の息子アンチオフは二三年．この者の時，ユリイ・ケサリは彼の死せる母の胎内より引き出された．二つの島のプトロメイは三十年．プトモレイの妻クレオパトリヤは二二年．彼女の二三年目にローマでは初めてイウリイ・ケサリが君臨しはじめた．十八年である．このとき γνῶστος 及び βίοεξτος の法ができた．この時代にイエルサリムではイロドが皇帝であつた．イユリイの後，その息子アヴグスト，息子オクタヴインはヤヴアストとも言われたが，（二人で）五七年六ケ月と二日君臨した．このためにアンチホフの人々は彼等の年を次の様に数えている．即ち，その君臨の十五年にはじめて世界の書きとりがあつた．クレオパトラを殺し，二九五年間支配していたプトロメイの国を破壊した．

アダムからアヴグストまで五四五七年．

彼の在位の四二年目に聖母マリヤから我々の主イスス・フリストスが肉体を以て生まれ給うた．その時アヴグスト・ケサリからキユリネイがイユデイの全権力の書きうつしをなすために派遣された．アダムから主の肉体化誕生まで全部で五〇〇〇と五〇〇年．アヴグストによる書きうつしは三つの罪の故であつた．主の誕生から魔法使いたちへの到着まで二年，イロドの死まで三年，ところが，アルヒライの死まで九年，アヴグストの死まで十五年．（彼は）八八年生きていたのである．主の洗礼まで三十年．イロドの時にイオアンの切られるまで一年，イヴアンの即位から主の受難まで一ケ月．洗礼から主の受難まで三年．復活から天国への昇天まで四十日，昇天から使徒たちへ聖霊のおりるまで十日．昇天から最初の受難者スチエフアンが打たれるまで七日，スチエフアンが打たれてからパヴエルへ天から光が現れるまで六ケ月．降誕から聖母が教会へ入れられるまで三年．教会に十四年までいて，イオシフの家に四ケ月いた．しかしてその後，アルハンゲルのガヴリールから祝福を受けて，しかしてみごもり，我々の主イスス・

クリストスを地上のものとしてではなく生んだ．十五才であつた．主の受難まで三三年生き，昇天の後はエルサリムの福音者イオアンの家に受難者と共に十一年生きた．彼女の一生は全部で五九年であつた．

アダムから主の受難まで五五三三年．

アヴグストの後ローマではイウリイの子チヴエリイが二五年君臨した．テガイは三年と八ケ月．クラヴジイは十三年八ケ月と二十日．ネロンは十三年及び八日．生きたまゝ自からをほうむつた．この者の時，ピョートル，パーヴエル，主の弟イヤコフが受難した．ガルヴは一ケ月，しかして殺された．オフオンは一日，しかして切られた．イウチリイは一ケ月と五日．彼を（人々は）ローマで酔つている時に殺した．ウスパシヤンは十年．彼の治世の第二年目にテト及びその息子によつてイエルサレムが捕囚された．昇天後四六年である．テトは二年及び二ケ月，しかして宮殿で殺された．ドメンチヤンは十五年と五ケ月．この者は迫害を行い，神学者イオマンはパテムへ追われた．ネルヤは一年と四ケ月．トロヤンは十九年と六ケ月．この者の時，神の体現者イグナトが受難した．マンドリアンは二十年．しかして彼はイエルサレムを破壊し，エリイの町と呼び，水槽をわずらつて，殺された．敬虔なる者と呼ばれたテト・アントニンは，おのれの子供たちと共に二二年と三ケ月．マルコ及びその息子は十二年と十一ケ月．この者の時，哲学者イウスチンが受難した．アントニン・イヴイルは二年．コモドは十三年．エリン・プロテナクスは六ケ月で，宮殿で殺された．シヴイルは十八年．この者の時，オリゲオンの父レオニドが受難し，ローマのイポリト，奇跡を行うグリゴリイも殺された．シヴイルの息子アントニイは七年して殺された．マルキンは一年して殺された．アントニン・ガルプは四年してローマで殺された．アリクサンドルは十三年して殺された．ゴルジイは六年して，アフリキヤで殺され，フイリプは七年してさくの中で殺

された．ジエキーは一年と三ケ月．しかして，市場で殺された．ガルとウルシヤンは一年と四ケ月．ウヴアレリヤンとガンは十五年．しかして（二人は）殺された．クラウジーは一年と九ケ月．アヴリアンは五年と六ケ月．しかして殺された．タキトは六ケ月．しかして殺された．プロルは六年と四ケ月で殺された．カルはおのれの（二人の）子供カリン及びムメリヤンと共に二年．しかして（三人は）殺された．ジオクリチヤン及びマクセミヤンは二十年．

アダムからジオクリチヤンの死まで五七六六年．主の受難からジオクリチヤンの始めまで二七六年．

キリスト教徒の国．

聖オレナの息子コスチヤンチンは三一年．彼の治世の十二年目にニキヤで才一回宗総会があつた．神性を分裂させたアリクサドリヤの僧アリイに対して三〇〇と十八人が（集つた）．キリストの昇天から才一回宗総会まで三一八年で，アダムからコスチヤンチンの死まで五八三六年である．彼の一生は六五年で（あつた）．（彼は）三人の息子，ローマにコスタを，ツアリゴロドにコスチヤンチンを，アンチオヒヤにコスチヤンチイを残した．執政官がこれをなしたのである．（三人は）二四年治世していた．罪人イユリヤンは二年と六ケ月してペルシドで殺された．新しいウヴアレンチアン及び偉大なフエオドシーは十六年．この者の時に才二回宗総会がツアリゴロドであり，聖霊否定論者マケドニイに対して一五〇人の僧たちが（集つた）．才一回宗総会議から才二回まで六十年．フエオドシイの息子アルカジイは十三年と三ケ月．彼の息子フエオドシイは四二年と二ケ月．この者の時に才三回宗総会がエフエスであり，人間礼拝者ネストリイに対して二〇〇人の僧が（集つた）．才二回宗総会から才三回まで五八年．マルキアン及びウヴアレニヤンは二九年．この二人の時に才四回宗総会がハルキドンであつた．エヴトウフ，ジオスコル，セヴギルの伝

導混乱に対して六三〇人の僧が（集つた）．才三回宗総会から才四回まで十年．偉大なるレオンは十六年．小さなレオンは一年．ジノンは十七年．アナスタシイは二七年と四ケ月．毛深いイユスチンは九年と二三日．イユスチヤニンは三八年と七ケ月．この者の時に才五回宗総会がツアリゴロドであり，オリゲオンの不節義に対して一六四人の僧が（集つた）．才四回宗総会から才五回まで一〇〇年．ウスチヤンは十二年と十ケ月二十日間．彼のおいイウスチンは主が十字架にかけられてから五三二年に聖パスカの近くで死んだ．チヴエリイは五年．マヴリキイは二十年と四ケ月．フオカは八年．イラクリイは息子と共に三一年．彼の治世の三年目にローマの国の大部分をペルシヤ人が取り，イエルサリムを焼き，聖なる十字架及び総主教ザハリヤ及び多くの人々をペルシヤに連れ去つた．十二年目にボスドロイは殺され，持ち去られたものは戻された．イラクリイの息子コスチヤンテンは二八年でシケリヤで殺された．イラクリイの孫コスチヤンチンは十七年．この十三年目にツアリグラドで才六回宗総会があつた．異端者であるアリイ，キユル，マカリイに対して二八五人の僧が（集つた）．才五回宗総会から才六回まで一三〇年．イウスチニヤンは十年．レオンチーは三年．チヴエリイ・イアプシは七年．イウスチヤニンは二年六ケ月．フイリクスは二年．アナスタシイ・イアレミイは二年．フエオドシイは一年．レフ・コノンは二五年三ケ月八日．レフの息子コスチヤンチンは母と共に三一年と二ケ月と二日．このものの時才八年目にニキヤで聖像破壊者に対して三六七人の僧の才七回宗総会があつた．才六回宗総会から才七回まで一二二年，しかしてアダムからは六三〇五年目で，我々の救世主なる神からは八〇五年である．コスチヤンチンは市場で殺された．母イリナは五年と二ケ月と二日である．ニキフオルは一年と九ケ月．彼の息子スタヴラキイは二ケ月．彼の娘むこミハイルは一年と九ケ月と十一日．レフは七年と五ケ月と十四日．しかして宮殿で殺され

た．ミハイルは八年と九ケ月．フエオフイルは十二年と三ケ月と二十日．彼の息子ミハイルは彼の母フエオドラ及び彼の妹フエクラと共に十四年．ミハイルは十二年，ヴアシリイと共に一年と四ケ月．しかして殺された．この治世の時に，ルシ，チユジ，スロヴエン，クリヴイチがヴアリヤギのもとへ来たり，言つた．『我々の国は大きくて広い．ところがその中には秩序がない．君臨し，我々を治めるために来たれ』と．しかして，三人の兄弟がおのれの一族と共にえらばれ，最年長のリユリクはノヴゴロドに坐し，シネウスはベロオゼロに，トルヴオルはイズボリスクに（坐した）．アダムから六三七〇年である．二年後にトルヴオル及びシネウスは死に，ルシにおけるすべての権力をリユリクが摂つた．ミハイルの後，ヴアシリイ皇帝が十八年と十一ケ月．この者の治世の才二年目にボルガルの国が洗礼された．しかしてアダムからは六三七七年である．彼の治世の十二年目にリユリクが死に，（彼は）おのれの一族のオレグに公国を与えた．及び幼少の息子イゴリをも．レフ及び，ヴアシリイ帝の息子オリグサンドルは二六年．この二人の治世の才十二年目にグレキの言葉からスロヴエンの言葉に（聖）書が訳された．ボルガルの洗礼から（聖）書訳まで三十年．しかして才七回宗総会から（聖）書訳まで七七年，しかしてアダムから六四〇五年である．レフの息子でありロマンの娘むこであるコスチヤンチンは七年君臨した．しかしてルシにおいてはイゴリが公として君臨しはじめ，オレグは死んだ．ロマンは三六年君臨した．彼の在位の二七年目にイゴリが殺され．オルガが息子のスヴイヤトスラフと共に公として君臨しはじめた．ツエムスキーといわれるイヴアンが君臨した．彼の在位の才一年目にオルガがツアリゴロドに来たり洗礼を受けた．アダムから六四六三年である．スヴイヤトスラフは十八年在位し，しかして殺された．三人の息子ヤロポルク，オレグ，ヴオロジメルを残した．ヤロポルクはキエフに坐し，オレグを殺し，ヤロポルクをヴオロジメル

が殺し，しかして，キエフに坐した．コスチャンチンとヴァシリイが皇帝であつた．この二人の時に，ヴォロジメルは洗礼を受け，全ルシを（洗礼した）．アダムから六四九六年である．洗礼の後，二八年生きて，（ヴォロジメルは）死んだ．その同じ年にスヴィヤトポルクは，ボリスとグレブを殺し，ヤロスラフと戦いながら三年間キエフに坐した．発狂して死んだ．ヤロスラフはキエフに三八年間坐した．しかして皇帝はマナマフであつた．彼の息子イジヤスラフは二四年（坐して）殺された．この者の時に，ペチエルスキーの修道院長はフエオドシイであつた．彼の息子フセヴォロドはキエフに十五年坐して，しかして死んだ．スヴィヤトポルクは二一年（坐して）しかして死んだ．この者の在位の才二年目にボリスとグレブが（遺がいを）移された．アダムから六六二三年である．この時にグレキの皇帝はオリクシイであり，しかして彼は死んだ．彼の後は彼の息子イヴアン・ポルフイロゲントが（皇帝であつた）．ヴォロジメルの後キエフには後の息子ムスチスラフが六年間坐した．彼の弟ヤロポルクは七年．オレグの子フセヴォロドは七年．ムスチスラフの子イジヤスラフは七年．ヴォロジメルの子ユリエ・マナマハはキエフに三年間公としてあつた．彼の息子アンドレイは父からスズダリに六六六三年に行き，ヴォロジメルに二一年間公としてあつた．父の死後，キエフの公国は彼の自由になりはじめた．この時代に，皇帝はマヌイルであつた．六六八一年にアンドレイ大公が殺された．彼の弟ミハルコはヴォロジメルに一年間坐して，しかして死んだ．キエフにはムスチスラフの子ロスチスラフが九年間坐した．ユリエの子グレブは二年間．ロスチスラフの子ロマンも．しかして，ヴォロジメルにはミハルコの死後彼の弟フセヴォロド（ユリエの子）が三七年間坐し，全ルシの国を統治した．彼の後にはその息子のコスチャンチンが坐し，コスチャンチンの後にはその弟ユリエがヴォロジメルに坐し，コスチャンチンの子のヴァシルコがロストフに，フセヴォロドが

ヤロスラフに（坐した）．ユリエの在位の五年目にタタールが現れ，多くの国々をおさえ，ルシの公たちをカルカ（河）で殺した．ユリエの在位の才十五年目は即ちアダムからの六七四六年である．タタールはスズダリの国をおさえた．六七四六には公であるユリエ及びヴアシルコ及び他の多くの者たちを殺した．この同じ年にヴオロジメルにはユリエの弟ヤロスラフが坐した．一方，ロストフにはヴアシルコ夫人が（二人の）息子ボリスとグレブと共に坐した．ヤロスラフはタタールの中にあつて死んだ．彼の後にはその弟のスヴイヤトスラフがヴオロジメルに一年間坐した．しかして，ヤロスラフの息子アンドレイが（これを）追放し，五年間君臨した．しかして，アダムから六七六〇年にネヴロンが来つた．しかして，海の彼方に彼を追放した．この同じ年に，彼の弟オリクサンドルが十二年間に及んで坐した．彼の在位の才四年に目録がつくられた．アダムから六七六五年である．オリクサンドルの死の後，彼の弟ヤロスラフが十年（君臨）して，しかして死んだ．彼の弟ヴアシリイは四年して，しかして死んだ．彼の在位の一年目に才二回目の目録がつくられた．アダムから六七八一年である．しかして，オリクサンドルの子ドミートリイが大公国を統治しはじめた．ロストフのボリスは四十年間公としてあり，タタールの中で死んだ．しかして，ロストフには彼の（二人の）息子ドミートリイとコスチヤンチンが坐した．しかしてグレブはタタールより来たつて七ケ月間公としてあり，しかして死んだ』

この中にあつて，特に末尾の相当個所は，或は後代にロシアで書き加えられたもので，ビザンテンの物からの直接の訳ではなかつたであろう．然し，『過ぎし年月の物語』が各年号に分けて，それぞれの年号順に書き入れた内容と，此処における年号における内容とは全く一致することに驚くであろう．例えば，『過ぎし年月の物語』が，6494(986)年以下6497(989)年の項として長々と書きあげたヴオロジメルの記事の中にも，再びこの内容と

同じものがギリシアから来た哲学者の言葉として書きとめられているのである．その他に，この≪Номоканон≫『宗法集』の古代ロシア語訳本の中の各年号の内容が，総て『過ぎし年月の物語』の各年号の項の物語の骨子になつていることを強調しておきたいと思う．勿論ラヴレンチー年代記に納められた所謂『ネストルの年代記の古いテキスト』≪Древний текст Лѣтописи Нестора≫は6618(1110)年の項で終つているから，『宗法集』の記録した6781年の項までは書きつがれていないことになつて，『宗法集』の末尾の部分の新旧の差はみとめておかなければならないであろう．ともあれ，ビザンチンから持ち込まれた『宗法集』≪Номоканон≫或はその古代ロシア語訳本が非常に大きな下敷として『過ぎし年月の物語』の中に持ちこまれていたことには疑いをはさむことはできない．

この様なものは，抜き書きしたり，下敷にしたりした出典が案外明瞭に察知し得るものであるが，(――これを余り上手でない編集と言うとすれば ―――)，非常に巧みに引用を変化させて組み込んでいるために，ほとんど見落してしまいそうな下敷がある．その最もよい例は6523(1015)年の項の中程から6525(1017)年に至る『過ぎし年月の物語』の記事である．実に此処には，古代スラヴの古い金言集 (―― 旧約全書のものに，おのれの国の物語を織り込んでつくられたもの ―――) が，たくみにすかし彫りされているのである．金言集或は俚言集≪Паремейника≫は，ペルガミン本≪Рукопись пергаминная≫を以て，6523年から6525年の項の物語の対応個所にあてゝ，すかし彫りの個所を調べてみることにしよう．

『過ぎし年月の物語』に次の様な一節がある．

Святополк же съ окаяньный и злый уби Святослава,
послав, в горе Угорьстей, бежащю ему в Угры;
и нача помышляти: "яко избью всю братью свою,

и прииму власть Русьскую един". Помыслив высокоумъем своим, не ведый, яко Бог даеть власть, ему же хощеть; поставляеть бо царя и князя Вышний, ему же хощеть, даеть. Аще бо кая земля управится пред Богом, поставляеть ей царя или князя праведна, любяща суд и правдуц и властеля устраяеть, и судью правящего суд. Аще бо князи правьдиви бывають в земли, то многа отдаются согрешенья; аще ли зли и лукави бывають, то болше зло наводить Бог на землю, понеже то глава есть земли; тако бо Исаия рече: согрешиша от главы и до ногу, еже есть от царя и до простых людии. Люте бо граду тому, в нем же князь ун, любяй вино пити с гусльми и с младыми светникы. Сяковыя бо Бог даеть за грехы, а старыя и мудрыя отъиметь, якоже Исаия глаголеть: отъиметь Господь от Иерусалима крепкаго, исполина, и человека храбра, и судью, и пророка, и смерена старца, и дивна светника, и мудра хитреца, разумна, послушлива; поставляю уношю князя им, и ругателя обладающа ими.

『ところで，この呪われたる悪しきスヴイヤトポルクは，スヴイヤトスラフがウグルへ逃げる途中，人を遣わしてウゴルの山中で彼を殺した．しかして考えはじめた．『おのれの兄弟たちを総て殺し，ルシの権力を一人で摂ろう』と．神は自からの欲し給う者に権力を与え給うものであり，至高なる（神は）自からの欲し給う者を皇帝及び公に定め給うものであることを，（彼は）知らず，おのれの高慢さを以て（このように）考えたのである．というのは，もしも，いづれかの国が神の御前において治められるな

らば，（神は）その国に，裁きと正義を愛する正しき皇帝或は公を定め給うものであり，しかして，権力者をも，裁判を治める裁き手をも定め給うものである．国において，もしも公たちが正しければ，多くの罪が取り除かれる．もしも（公たちが）悪しく，ずるければ，大きな悪を神は国に導き給うのである．というのは，（彼は）国の頭だからである．即ち，イサヤはこう言つている．罪を犯かせしものたちの頭から足に至るは，皇帝から庶民に至るに似たり．その町における公が，若くして，琴をひき，若き相談相手たちと共に酒を呑むことを好むには，その町はわざわいなるかな．かかるものたちを神は罪の故に与え給う．しかして，老いて賢明なるものたちを取りあげ給うのである．即ち，イサヤは言つている．堅固にして偉いなるもの，勇敢なる人間，裁き手，予言者，恭順なる長老，素晴らしき相談相手，賢き才能者，明知なるもの，従順なるものを神はイエルサレムから取り給う．彼等には若き公を定め，彼等を支配する口悪しき者を定めんと』．

勿論，この一節は，年代記者の主観によれば，ビザンチンからキリスト教と共に流入した国家統治の宗教的理念を此処に書きとどめ，且つは，ロシアの公たちへの宗門的ないましめとしたものであろう．スヴイヤトスラフ大公を殺したスヴイヤトポルクの悪業をあばき立てると共に，キリスト教理念にさゝえられた最高支配者の統治理念を教えさとしたかつたのであろう．但し，その発想も，また，説かんとした統治理念も，或は此処に用いられた言葉も年代記者独自の創造になるものばかりではなかつた．というのは，これに対応する《Паремейник》『金言集』の一節をうかがつてみるがよい．例えば，ルシで権力を一人占めにしようと考える個所の言葉は《Паремейник》では，ボリス《Борис》とグレブ《Глеб》の兄弟の物語へ場面を移しているものの，やはり同じような形でみとめられるのである．

О люте души твоей! понеже зло света на праведъ-

ную братью свою, рек бо тако: избию братью свою и буду един властель в-Руси, не ведый, яко мечь Божий поострится на нь.

『おゝ，汝の魂は呪われてあれ！　おのれが正しき兄弟に悪をたくらみたればなり．（汝は）かく言えり．〃おのれの兄弟を打ち殺さん．しかして，ただ一人ルシの権力者にならん〃と．神の剣はその者の上にかざされてあるを知らざればなり．』

相手を皆殺しにして自分一人がロシアの権力を一人占めにしようというスヴイヤトポルクの言葉と，この一節の言葉とは，今までになく実に見事な重ね方がなされていると言わなければならない．

さて，この悪者スヴイヤトポルクがキエフに，一方ヤロスラフがノヴゴロドにあつて，対峙し，ヤロスラフの方が悪者退治をする物語が『過ぎし年月の物語』にも『金言集』の方に平行して続いている．ところが，『金言集』の方には，面白いことに，先に引用した年代記の一節 —— ヤロポルクを非難しつゝ，国家統治理念を権力者に説かんとする —— が，ほとんど，その言葉通りに出現しているではないか．先に引用した文章の各字句をほとんど全部，次の『金言集』の中から拾い出すことは，きわめて容易であろう．『金言集』の相当長いこの節の文章を先に書きあげてみよう．

Слыша Ярослав, яко отець ему умре, а Святополк сел в Киеве, избиваеть братью свою, иже бо бе Бориса убил, а на Глеба послал, печален бысть велми о отци и о брате; уби бо Бориса на Алте, а Глеба на Днепре, об-сю сторону Смоленьска, на Смядине. Съжалися велми по отци и по брату своем, и созва Новгородьце, и рече им:

"братья моя милая! отець мой умерл, а Святополк седить в Киеве, избивая братью мою"; бе бо о то чин и сам рагозен с-Ноугородьци, и не хотяху ему помагати на Святополка. Помянуша Апостольское писание. Братье! Бога бойтеся, князя чтите; Божий бо слуга есть, не туне бо мечь носить, но в-нем злодеем, в-похвалу же добродеем; и рекоша ему: "можем, княже, боротися по тебе". И собра Ярослав Варяг 6000, а прочих вой 30 тысящь, и приде на Святополка, въприим Аврамлю доблесть. Слышав бо Авраам, яко пленен бысть Лот, сыновець его, и собра люди своя 300 и 18, и погна в след их до Дана, и постиже я на Хаволе, и изби я, и отполони вся стада Содомьская, и Лота Ароновича шюрина своего, и жену его, и имение его; бе бо Аврамуу Лот шюрин и братень сыне, Аврам бо бяше поял братню дщерь, Ароновну дщерь Сарру. Тако и сь Ярослав, новый Аврам, поиде на Святополка, нарек Бога: "не аз почах избивати братью, зане без-вины пролия кровь праведную"; глагола бо ему Борис и Глеб: ве ся, брате, не противеве, ни въпреки глаголеве. Господь гордым противится, смереным-же даеть благодать; праведных бо душа в-руку Божию. По звавшему ваю святому, и вы свята еста о всем житии ваю, зане пишеть: святи будите, яко аз свят есмь. В страсе бо Божии пожиста лета своя, ведуще, яко нетленномь сребром и златом избавлена бы-

ста от-суетнаго житья сего, братом своимь
предана на убийство; но драгою кровию, яко
агньца непорочна и пречиста, приведостася
своему Владыце.
Стенам твоим, Вышегороде, устроих сторожа весь
день и всю нощь, иже не уснета, ни въздремле-
та, храняша и утвержающе отчьну свою Русьску
землю от супостатных поган и от-усобьныя рати;
праведник бо и по смерти жив есть. Сею бо кровь
и до кончины века не престаеть вопиющи к Богу
на безаконнаго и гордаго Святополка, паче же
реку Поганополка, безъглавнаго звери. Но до-
воляше бо ему то, но и приложи еще убити Свято-
слава в горе Угорьстей, и бежащю ему в Угры;
нача помышляти: "яко избию всю братью свою, и
прииму власть Рускую един". И помысли в высо-
коумьи своемь, не ведый, яко Бог даеть власть,
ему же аще хощеть; поставляеть бо князя и царя
Вышний, ему же хощеть даеть. Аще бо кая любо
земля управится пред-Богом, поставляеть ей
царя или князя праведна, любяща суд и правду,
и властеля устраяеть, и судию правяща суд. И
аще князи праведни бывають в-земли, то многа
отдадятся съгрешения; аще ли зли и лукави бы-
вають, то болшее зло наводить Бог на землю ту,
понеже то глава есть земли. Люте бо граду тому,
в-нем же князь ун, любяй вино пити с-гусльми с
молодыми светникы. Сяковыя Бог даеть за грехи,
а мудрыя и старыя отъиметь; отъят от-нас Во-

лодимера, а Святополка наведе грех ради наших, якоже наведе на Иерусалим Антиоха. Исаия бо глаголеть: отъиметь Господь от Иерусалима крепкаго исполина, и человека храбра, и судию, и пророка, и дивна светника, и смерена старца, и мудра хитреца, и дивна послущника; и поставлю унощу князя им, и ругателя обладающа ими. Ярослав же приде в-силе тяжьце, и приде на Алту и ста на месте, идеже убиша Бориса; въздев на небо руце, и рече: "кровь брату моею Романа и давыда въпиеть к-тебе, Владыко! Мьсти кровь праведною сею, якоже мьстил еси кровь Авелу, положив на Каине трясение; и тако положи на семь окаьнем Святополце". Помолився рече: "брата моя! Аще еста и телом отсюду далече, то молитвою помозита ми на противнаго сего и убийцю гордаго". И се ему рекшю, поидоша противу себе, и покрыша поле Летьское обои от-множьства вой. Бе же пяток тогда; въсходящю солнцю, и приспе о то чин Святополк с-Печенеги, и съступишася обои, и бысть сеча зла, ака же не бывала в-Руси емлюще сечахуся, и по удолиемь кровь течаше; и съступишася трижды, и омеркоша бьющеся. И бысть гром велик и тутен, и дожчь велик, и молньям блистания; егда же облистаху молния, бльщахуться оружия в-руках их, и мнози верни видяху ангелы помагающа Ярославу. Святополк же дав плещи побеже. Его же по правде, яко не праведна, суду пришед-

шю, по отцествии сего света прияша же муки окаяннаго Святополка: показавши пагубная послана рана, в смерть немилостивно въгна, и по смерти вечно мучим есть, связан в дно аду, понеже ведый братоубийства створи. 7-м бо мстий прия Каин, убив Авеля, брата своего, а Лямех 70 мьстий, понеже бо Каин не ведый мщения прияти от-Бога, а Ламех ведый казнь, бывшюю на прародителю его; а Святополк ведая же се створи, и обою сею горшу ему бысть мука. Рече бо Ламех к своима женама: мужа убих в вред мне, и уношю в язву мне; темже рече, 70 мьстий на мне есть, понеже, рече, ведая створих. Се Ламех уби два брата Енохова, и поя себе ею; се же Святополк, новый Авимелех, иже ся родил бе от-прелюбодеяния, иже изби братью свою 70 сынов Гедеоновых, последи же сасаго жена с-города уломком жернова уби под городом; тако и сь Святополк. Ярослав-же пришед в Киев, с дружиною своею утер пота, показая победу и труд велик по брату своею.

以上の『金言集』の文章を訳しながら，その都度，『過ぎし年月の物語』における6523(1015)年以後の記事の文章と対応させて見ることにしよう．

『ヤロスラフは，自分の父が死に，スヴィヤトポルクがキエフに坐し，おのれの兄弟を殺していること ―― というのは，ボリスを殺し，グレブには（殺すべく）人を遣わした ―― を聞いて，父及び兄弟たちのことを非常に嘆いた．というのは，（ヤロポルクは）ボリスをアルタで，グレブをドニエプルのこちら側のスミ

ヤジナで殺したからである．（ヤロスラフは）父及びおのれの兄弟を非常にいたみ，しかして，ノヴゴロドの人々を集めて彼等に言つた』

これに対して，各年代記の『過ぎし年月の物語』では，英雄叙事詩的に，

В ту же ночь приде ему весть из Кыева от сестры его Передъславы: "си отець ти умерл, а Святополк седит ти Кыеве, убив Бориса, а на Глеба посла; а блюдися его повелику". Се слышав, печален бысть о отци и о дружине; заутра же собрав избыток Новгородець, Ярослав рече:

『その同じ夜彼のもとにキエフから，彼の妹のペレドスラヴァから知らせが来た．〃汝の父は死んだ．しかして，スヴイヤトポルクが汝のキエフに坐しており，ボリスを殺し，グレブに向つては（殺すべく）人を遣わした．彼をできるだけ充分警戒せよ〃と．（ヤロスラフは）これを聞いて，おのれの父及び親兵団のことを嘆いた．ところで翌朝，残りのノヴゴロド人たちを集めて，ヤロスラフは言つた』　となつている．もしも，同じ伝承作品からの汲みあげであつたとすれば，この一節は，『過ぎし年月の物語』の方がより直接的であり，『金言集』の方が，より記録的であるといわなければなるまい．『金言集』の方が説明的解説的であり，『過ぎし年月の物語』の方が物語的であり文学的である．勿論，『金言集』は，これを教訓の素材にして，聖書的教訓を目的とし，他方は，物語そのものを伝えようとしたのであるとも言えよう．

次に続く『金言集』の一節は，

『〃我が愛する兄弟たちよ．我が父は死に，スヴイヤトポルクが，我が兄弟たちを殺しつゝキエフに坐しているぞ〃と．それに就ての集会があり，しかして（彼は）自からノヴゴロドの人々と対

立し，（人々は）スヴイヤトポルクに対して彼に協力することを欲していなかつた．（ところで人々は）使徒の書物を思い起した．兄弟たちよ！　神をおそれ公を敬え．神の召使なればなり．（公が）剣を帯びるは故なきにあらず．悪者には報復を，善行者には賞讃を与えんためなり．と．しかして，（人々は）彼に言つた．〃公よ．汝のために戦うことができる〃と．しかしてヤロスラフはヴアリヤギ六千人，他の戦士三万人を集め，アヴラムの勇気を摂つてスヴイヤトポルクに向つて進攻した．アヴラムは，おのれの息子ロトが捕えられたのを聞いて，おのれの家臣三百と十八人を集め，ダンまで彼等のあとを追い，ハヴオルで彼等を捕捉して殺した．しかして，ソドムの総ての群を，及びおのれの妻の兄弟アロンの子ロトを，また，彼の妻を，及び彼の財産をとり返した．というのは，アヴラムにとつてロトは妻の兄弟であり，兄弟の息子であつた．というのは，アヴラムは兄弟の娘，アロンの娘サラをめとつていたからである．かくの如く，新しいアヴラムなるこのヤロスラフはスヴイヤトポルクに向つて進攻した．（彼は）神に向つて言つた．〃兄弟たちを打ちはじめたのは我ではない．何となれば故なくして正しき血を（彼が）流したからである〃．と．というのは，ボリスが，またグレブも彼に言つた（ことがある）．兄弟よ，我々二人は敵対することなく，抗言することもないと．主はたけき者に反対し給い，恭順なるものに恩ちょうを与え給う．というのは，正しきものたちの魂は神の御手に（入る）からである．汝等の聖と呼びしものによりて，汝等は汝等の一生を通じて聖ならん．その故は，かくの如く書かれたればなり．我，聖なる如く，（汝等も）聖ならんと．神のおそれの中におのれが年月を生き，この空しき世より，くさらざる白銀や黄金の如くまぬがれるを知り，おのれの兄弟の殺人に身をゆだねたり．しかれども，汝等（二人）は，罪なく清き子羊の如くおのれの主のもとに導かれたり．』

この一節の後半は，明らかに，何時かボリスとグレブの追悼文にさゝげられたものが此処に書きとめられたのであろう．ところで，この一節に対して，『過ぎし年月の物語』は，次の様に書かれている．即ち，筋書きだけを，伝承的英雄叙事詩の粗筋に近づけているかのように，

"О люба моя дружина, юже вчера избих, а ныне быша надобе". И утре слез, и рече им на вече: "отець мой умерл, а Святополк седить Кыеве, избивая братью свою". И реша Новгородци: "аще ,княже, братья наша иссечена суть, можем по тобе бороти". И събра Ярослав Варяг тысячю, а прочих вой 40, и поиде на Святополка, нарек Бога, рек: "не я почах избивати братью, но он; да будеть отместьник Бог крове братья моея, зане без вины пролья кровь Борисову и Глебову праведною; еда и мне сице же створих? Но суди ми, Господи, по правде, да скончается злоба грешнаго".

『〃おゝ，我が親兵団よ！（我は）昨日汝等を殺したが，今は（汝等は）必要になつた〃と．しかして，涙をぬぐつて，民会において彼等に言つた．〃わが父は死んだ．しかして，スヴイヤトポルクはおのれの兄弟を打ちつゝキエフに坐している〃．と．しかして，ノヴゴロドの人々は言つた．〃もしも，公よ，我々の兄弟たちが打ち殺されてしまつているにしても，（我々は）汝のために戦うことができよう〃と．しかして，ヤロスラフはヴアリヤギ一千人と他の軍勢四千人を集め，しかしてスヴイヤトポルクに向つて進攻した．神に向つて言つた．〃兄弟たちを打ち殺しはじめたのは我ではなくて，彼である．神が我が兄弟の血の報復者であり給うように．というのは，ボリスとグレブの正しき血を（彼

が）故なくして流したからである．いつ，（彼が）この同じことを我に対して為すであろうか？　主よ，我を裁き給え．正義について．罪ある憎悪の終りますよう〃と．』

此処で面白いことに気がつく．例えばその一つの例をあげてみよう．ヤロスラフが集めた軍勢の数が『金言集』ではヴァリャギ六千人，他の軍勢三万人であるのに対して『過ぎし年月の物語』では，ヴァリャギ一千人，他の軍勢四千人であつた．この数字の相違を出発点にして，そのいづれが真実に近い数であつたのかを問うよりも，むしろ，共に，修辞的な述べ方であると見ておこう．そう言うことよりも，『金言集』に≪бъ бо о то чинъ≫とある言葉 —— ≪というのは，このことについて集会があつた≫ —— が，『過ぎし年月の物語』では≪Ярославъ рече имъ на вѣчи≫ ——≪ヤロスラフは民会において彼後に言つた≫—— と対応していることの方が面白い．即ち，≪чин≫『集会』と≪вѣче≫『民会』との対応である．明らかに語彙的な相違を示している．では，『金言集』の場合と『過ぎし年月の物語』の場合とでは，おしなべて，統一的に語彙や表現の相違があると考えてよいかどうか．語彙も文体もおしなべて相違していると言えるかどうか．面白い一節を此の個所からもう一個所引用しよう．即ち，『金言集』には≪Божий бо слуга есть, не туне бо мечь носить≫『（公は）神の召使いである．故なくして剣を帯びるにあらず』という言葉があつた．ところが，『過ぎし年月の物語』の記事では，この一節に相当する言葉は全く見当らないが，それに代るもののように，ラヴレンチー年代記では6683(1175)年の記事まで読み下ると，其処に，全く同じ文章で，たゞ『公』≪Князь≫という言語を入れて，≪Князь бо не туне мечь носить, Божии бо слуга есть≫『公は故なくして剣を帯びるにあらず．神の召使である』と組み込まれているのである．年代記が決して語彙や文体の統一など眼

目にしていなかつたことの証拠となるであろう．『過ぎし年月の物語は決して一貫した文体などもつていない．それぞれの年代の項によつて，いや，同一の年代項の記事中においても，語彙も文体も様々にちがつていることを注意しておく必要があるであろう．先にあげた≪чинъ≫『集会』に立ち戻つて見ると．古代ロシア語には，これに様々な意味があつて，例えば≪въ чинъ≫『ついでに』，『折よく』という成句で，『過ぎし年月の物語』が6488年の項で使用し，6599年の項で≪в то чинъ≫『その時に』と用い，6605年の項にも≪о се чинъ≫『その頃に』と用いているが『集会』という意味では，どうやらこの言葉を用いなかつたらしい．イパーチー年代記の6705，6758両年の項，プスコフ年代記の6780年の項などでは，これが集会という意味で用いられている．そうして見ると，案外，この言葉は『民会』≪вѣче≫よりも余程新しい言葉であつたかも知れない．或は方言の相違であろうか．実は『金言集』の≪чинъ≫が『集会』としての意味をもつていたのは，もともと，教会用語内においてであつた．宗教的集会を指す言葉なのであつた．年代記に世俗の集会を意味する言葉としては，やゝ，組み込まれ難かつたであろう．年代記者が僧であつたためである．『過ぎし年月の物語』の場合の方が『金言集』における場合よりも，やゝ，用語の選択において厳密であつたと言うことはできるであろう．

扨て，続いて『金言集』に書かれていた内容は次の様なものである．

『ヴイシエゴロドよ．汝の城壁に，昼は一日，夜は全部，見張りをたたせた．彼等は寝込むことなく，まどろむことなく，いまわしき敵より，仲間裏切りし軍勢より，祖国なるおのれのルシの国を固め守つた．正しきものは，死後もまた生きてあるものである．無法にして高慢なるスヴイヤトポルクをば，二人の血は世の果てるまでとゞまることなく神に訴えつゞけるものである．いま

わしきボルク，愚かなる獣と言つて．これにて充分であつたのになほ，加えて，（スヴイヤトボルクは）スヴイヤトスラフがウグルに逃げる時にウゴルの山で彼を殺したのである．（彼は）考えはじめた．〃おのれの兄弟を全部殺そう．ルシの権力を一人で摂ろう〃と．しかして，おのれの思いあがりのために考えたのである．神はもし欲し給うならばその者に権力を与え給うものであり，主はそれを与えんと欲し給う者を公及び皇帝になし給うことを知らない（男なの）であつた．もしも，どこかある国が神の前において統治されているならば，（神は）その国に正しき皇帝或は公を，裁きと正義を愛するものをおき給い，権力者を，裁きをつかさどるものを置き給うのである．もしも，国において公たちが正しければ，多くの罪は許され，もしも，（公たちが）悪く，ずるければ，より大きな悪を神はその国に導き給う．それは国の頭だからである．その町において公が若くて，琴をまじえて，若き相談相手たちと共に酒を飲むことを好む公なれば，その町はわざわいである．かくの如きものを神は罪の故に与え給うのであり，賢きものたち及び長老なるものたちを取りあげ給うのである．我々からヴオロジメルを取りあげ，我々の罪の故にスヴイヤトポルクをくだし給うたのである．イエルサリムにアンチオフをくだし給うた如くに．イサヤは言つている．主はイエルサリムから堅固なる大人，勇敢なる男，裁き手，予言者，素晴らしき相談相手，恭順なる長老，賢明なるたくみの人，素晴しき聴聞者をとりあげ給う．彼等には若き公を，彼等を支配するののしり手を定めんと』

この一節に対応する『過ぎし年月の物語』の記事は，順序を変えて物語の先頭に出されている．その対応の一節は既に先に引用したので此処では省略しておこう．そして『金言集』の文章の方をつけよう．

『ところで，ヤロスラフは大軍をひきいて来たり，アルタに到着し，ボリスが殺された場所に立つた．手を天にあげて，しかし

て言つた．〃ロマン及びダヴイドの我が兄弟の血が，主よ，汝に嘆き訴えるのである！　汝がカインにふるえを与えてアヴエルの血をむくいし如く，これら正しき（二人）の血をむくい，しかして同じく，この呪われたるスヴイヤトポルクに（ふるえを）与え給え〃と．　祈り終つて言つた．〃我が兄弟よ！　もしも汝等二人が肉体にては此処より遠くにありとせば，祈りによりて，このいまわしき敵にして高慢なる殺人者に対して我を助けよ〃と．

既に殺された兄弟の死場所に来つて，神に報復を祈り仇うちの誓いと祈りをささげる個所は『過ぎし年月の物語』にも美しく書きとめられている．たゞし，それは多くの文章をとばして，6527（1019）年の項にさがつてからである．

先づは，『金言集』の話をつゞけよう．

『しかして彼がかく言つた時，（彼等は）互に兵を進め，レタ河の野は両側から多くの軍勢でおおわれた．その時は金曜日であつた．太陽がのぼつた時，スヴイヤトポルクはペチエネギと会合を終え，両軍は相会した．しかしてルシにはいまだなかつたほどの激烈な戦いがあつた．（人々は）取り組み合いで戦い，しかして血は谷に流れた．しかして（両軍は）三度相会した．しかして戦い合いつゞけ夕方になつた．しかして，大いなる烈しき雷が鳴り，大いなる雨が降り，稲妻のかゞやきがあつた．稲妻の輝く時，彼等の手の中なる武器は映えかゞやき，信心ある多くの者たちは天使たちがヤロスラフを助けているのを見たのであつた．スヴイヤトポルクは逃げ腰になつて逃亡した．』

二つの区切に分けて訳したこの二節は，6527年の項の冒頭として『過ぎし年月の物語』の中にほとんど全部が同文でみとめられる．但し，『金言集』の最終の部分――即ち，雷が鳴るという記述から，天使が助けているのを人々が見たという部分――は，おそらく，非常に後代に書き加えられたものかも知れない．というのは，この叙述形式が，クリコフ戦争の記述と非常に似て

いるからである（『古代ロシア研究』才四号～才六号参照）．勿論，『過ぎし年月の物語』にはその部分はない．それ以外は，ほとんど同文であるので，此処に原文を引用することは省略しよう．

さて，『金言集』の最後の部分は次の様な意味である．

『彼（スヴイヤトポルク）は正しからざるものとして，正義に照らされ，裁きの来たりし時，この世の態度にふさわしく，この呪われたるスヴイヤトポルクの苦しみがはじまつた．破滅的な受けたきずが示され，容赦なく死に追い込まれ，死後もまた永遠に苦しめられているのである．地獄の底につながれているのである．知りつゝ兄弟殺しをしたが故である．カインはおのれの弟アベルを殺して七つのむくいを受け，ラメフは七十のむくいを受けたのである．何故なら，カインは神からむくいを受けることを知らざりしが故に，ラメフはおのれの太祖の上にあつた罰を知つていたが故に．しかして，スヴイヤトポルクは知りつゝこれをなしたのである．しかして，この両面によつて，彼の苦しみは一層激しいのである．ラメフはおのれの二人の妻たちに言つた．〃我，わがいたでのために人を殺す．我がきづのために少年を殺した〃と．しかしてまた言つた．〃七十のむくい我にあり．〃　即ち，曰く，〃知りつゝ為したればなり〃と．　かくの如く，ラメフはエノフの二人の兄弟を殺し，彼等二人の妻をおのれのものに取つた．さて，新しきアヴイメレフなるスヴイヤトポルクは，かんいんより生れたるものにして，おのれの兄弟たち，ゲデオンの息子たち七十人を殺し，その後，おのれ自からの妻は町より（連れ出して）町はずれにてウスの破片にて殺した．スヴイヤトポルクはかくの如き者である．ヤロスラフはキエフに来たり，おのれの親兵団と共に汗をふき（――　がいせんして　――）おのれの兄弟のための偉大なる労と勝利を示した．

この最後の一節もまた，『過ぎし年月の物語』では6527年の

しめくくりの一節としてほとんど同文で出て来るのである．たゞ，『過ぎし年月の物語』の方が少し簡略であるのと，途中に『彼の墓は今日に至るまでも荒野にあり，其処からは悪臭が発散している』≪Есть же могыла его в пустыни и до сего дне, исходить же от нея смрад зол≫以下二，三の字句が異つているだけである．

以上の様に明らかに『金言集』の文句と『過ぎし年月の物語』の文句とはお互いに交錯している．これに就ては，ハマルトルス年代記からの抜き書き利用の場合とは異つて，各年代記に見られる『過ぎし年月の物語』のほゞ大体の原形が何時頃に完成していたものなのかを検討しなければ，いづれがいづれの台本になつているのかを決定することはできないかも知れない．現代に伝わる『金言集』の写本と，各年代記の『過ぎし年月の物語』との各々の原形の成立年代を確定することは非常に困難だと思われる．然し，それらのことに就ては，いづれ，まとめて後にふれることにして，次の問題に移ろう．

ラヴレンチー年代記，トロイツキー，イパーチ一各年代記の『過ぎし年月の物語』は，6559(1051)年の項が次の様な言葉で始められている．

≪Поставн Ярославъ Ларнона митрополитом Русина в святѣй Софьи, собравъ епископы. И се да скажемъ, что ради прозвася Печерскый манастырь ≫

『ヤロスラフは，主教たちを集めて，聖ソフイア（教会）におけるルシの府主教としてラリオンをたてた．しかして，（我々は）何のためにペチエルスキー修道院と呼ばれたかに就て物語ろう』

年代記者が時に一人称単数主格形で≪аз≫≪язъ≫『我は』という言葉を用いて直接記述へ顔を出したことは以前にもふれた．然し，此処では，単数形ではなくて，複数一人称の動詞≪ска-

жемъ≫ 『物語ろう』という言葉が用いられている．明らかに，年代記者個人だけではなくて心ある僧ならば誰でも知り得ている話を書きつけようとしたものにちがいない．即ち，実は明らかにペチエルスキー修道院の寺伝なのである．少くともこの場合≪с-кажемъ≫『我々は物語ろう』と書いた年代記者は，たしかにペチエルスキー修道院の僧であつたにちがいない．『過ぎし年月の物語』の書き出しに≪Се повѣсти времянныхъ лѣтъ (черноризца Ѳедосьева манастыря Печерьскаго≫『これは（ペチエルスキー・フエドシー修道院の修道僧の）年毎の物語である』と銘打つた言葉に間違いないであろう．信ずるとすれば，『過ぎし年月の物語』のうちで，この6559年の項は完全にこの修道僧の書きつけたものであつた，但し，彼が独創的に書きつけたものではなくて，僧たちの間に伝わる寺伝を此処に書きつけたにすぎないと思われる．とりあえず，『過ぎし年月の物語』における．ペチエルスキー修道院の寺伝だと思われる部分を下に引用してみよう．

Боголюбивому князю Ярославу любящю Берестовое, и церковь ту сущюю Святых Апостол, и попы многы набдящю, в них же бе презвутер, именем Ларион, муж благ, книжен и постник; хожаше с Берестоваго на днепр, на холм, кде ныне ветхый манастырь Печерьскый, ту молитву творяше, бе бо ту лес велик. Ископа печерку малу, двусажену, и приходя с Берестового, отпеваше часы и моляшеся ту Богу втайне. Посем же Бог князю вложи в сердце, и постави и митрополитом в святей Софьи: а си печерка тако оста. И не по мнозех днех бе некый человек, именем мирьскым от града Любча; и възложи сему Бог в сер-

дце в страну ити, он же устремися в Святую Гору, и зиде ту манастыря суща, и обиходив, възлюбив чернечьскый образ, приде в манастырь ту и умоли игумена того, дабы на нь възложил образ мнишьскый. Он же послушав его, постриже и, нарек имя ему Антоний, наказав его и научив чернечьскому образу, и рече ему: "иди в Русь опять, и буди благословенье от Святыя Горы, яко от тебе мнози черньци быти имуть"; благослови и и отпусти его, рек ему: "иди с миром". Антоний же приде Киеву, и мысляше, кде бы жити, и ходи по манастырем, и не възлюби, Богу не хотящю, и поча ходити по дебрем и по горам, ища кде бы ему Бог показал; и приде на холм, идеже бе Ларион ископал печерку, и възлюби место се, и вселися в не, и нача молитися Богу, со слезами глаголя: "Господи! утверди мя в месте сем, и да будеть на месте сем благословенье Святыя Горы и моего игумена, иже мя постригал". И поча жити ту, моля Бога, ядый хлеб сух, и то через день, и воды в меру вкушая, копая печеру, и не да собе упокоя день и нощь, в трудех пребывая, в бденьи и в молитвах. Посем же уведеша добрии человеци. и приходяху к нему, приносяще же ему, еже на потребу бе; и прослу якоже великый Антоний, приходяще к нему просяху у него благословенья. Посем же преставльшюся великому князю Ярославу, прия власть сын его Изяслав и седе Кыеве, Антонии же прославлен бысть в Русьскей земли; Изяслав же

уведав житье его, приде с дружиною своею, прося у него благословенья и молитвы. И уведан бысть всеми великый Антоний и чтим, и начаша приходити к нему братья, и нача приимати и постригати я; и собрася братьи к нему числом 12. Ископаша печеру велику, и церковь, и кельи, яже суть и до сего дне в печере под ветхым манастырем. Совъкуплене же братьи, рече им Антоний: "се Бог вас братья совъкупи, и от благословенья есте Святыя Горы, им же мене постриже игумен Святыя Горы, а яз вас постригал; да буди благословенье на вас перво от Бога, а второе от Святыя Горы; "и се рек им: "живете же собе, и поставлю вы игумена, а сам хочю в ону гору ити един, якоже и преже бях обыкл, уединився". И постави им игуменом Варлама, а сам иде в гору и ископа печеру, яже есть под новым манастырем, в ней же сконча живот свой, жив в добродетели, не выходя из печеры лет 40 никдеже, в ней же лежать мощи его и до сего дне. Братья же с игуменом живяху, и умножившимся братьи в речере, и помыслиша поставити вне печеры манастырь; и приде игумен и братья ко Антонью, и рекоша ему: "отче! умножилося братье, а не можем ся вместити в печеру; да бы Бог повелел и твоя молитва, да быхом поставили церковьцю вне печеры", и повеле им Антоний. Они же поклонишася ему, и поставиша церковьцю малу пещерою во имя святыя Богородица Успенье. И нача Бог умножати черноризце, молитвами

святыя Богородица, и съвет створиша братья со игуменом поставити манастырь; и идоша братья ко Антонию, и реша: "отче! братья умножаются, а хотели быхом поставити манастырь". Антонии же рад быв, рече: "благословен Бог о всем, и молитва святыя Богородица и сущух отець иже в Святей Горе да будеть с вами". И се рек, посла единого от братье ко Изяславу князю, река тако: " княже мой! Се Бог умножаеть братью, а местьце мало; да бы ны дал гору ту, яже есть над печерою; "Изяслав же слышав и рад бысть, посла мужь свой, и вда им гору ту. Игумен же и братья заложиша церковь велику и манастырь огородиша столпьем, келье поставиша многы, церковь свершиша и иконами украсиша. И оттоле почася Печерскый манастырь; иже беша жили черньци преже в печере, а от того прозвася Печерскый манастырь; есть же манастырь Печерскый от благословенья Святыя Горы пошел. Манастыреви же свершену, игуменьство держащю Варламови, Изяслав же постави манастырь святаго Дмитрия, и выведе Варлама на игуменьство к святому Дмитрию, хотя створити вышний сего манастыря, надеяся богатьству. Мнози бо манастыри от царь и от бояр и от богатьства поставлени, но не суть таци, каци суть поставлени слезами, ношеньем, молитвою, бденьем: Антоний бо не име злата, ни сребра, но стяжа слезами и пощеньем, якоже глаголах Варламу же шедъшю к святому Дмитрию, съвет створше братья, идоша к старцю Антонью и

рекоша: "постави нам игумена". Он же рече им: "кого хощете? Они же реша: "кого хощеть бог и ты". И рече им: "кто болий в вас, ак же Феодосий, послушьливый, кроткый, смереный; да сь будеть вам игумен". Братья же ради бывше, поклонишася старцю, и поставиша Феодосья игуменом братье числом 20. Феодосу же приемшю манастырь, почаимети въздержанье, и велико нощенье, и молитвы с слезами; и совокупляти нача многы черноризьци, и совокупи братье числом 100. И нача искати правила чернетскаго, и обретеся тогда Михаил чернець манастыря Студийскаго, иже бе пришел из Грек митрополитом Георгием, и нача у него искати устава чернець Студийскых; и обрет у него, и списа, и устави в манастыри своем како пети пенья манастырьская, и поклон как держати, и чтенья почитати, и стоянье в церкви, и весь ряд церковный, на тряпезе седанье и что ясти в кыя дни, все с уставленьем. Феодосий все то изъобрет, предасть манастырю своему. От того же манастыря переяша вси манастыреве устав: темже почтен есть манастырь Печерьскый старее всего. Феодосьеви же живущю в манастыри, и правящю добродетелное житье и чернечьское правило, и приимающю всякого приходящаго к нему, к нему же и аз придох худый и недостойный раб, и приятмя лет ми сущю 17 от роженья моего. Се же написах и положих, в кое лето почал быти манастырь и что ради зоветься Печерьскый; а о Феодосове житьи пакы скажем.

この文章は，『過ぎし年月の物語』の最大の母たいであつた．おそらくは，この様な記事が中心に置かれて，その他のものが各年代をつなぐ埋め草に役立たされた上に『過ぎし年月の物語』が構成されたものだと考えられるからである．そして，この母たい自身が実はペチエルスキー寺院の聖僧伝≪Патерик≫の一節なのである．ノヴゴロド・ソフィア文庫蔵A集№578号による羊皮紙本，或はペテルブルグ（レニングラード）公共図書館本による『ペチエルスキー聖者伝』≪Патерик Печерский≫は，ほとんど同じ文章で綴られたこの一節をもつているのである．即ち，後者の写本によつてこれを対比すると次の様な相異点だけしかない．左側に『過ぎし年月の物語』の方を，右側に後者の写本によるペチエルスキー聖者伝の方を，その相違点だけに限つて書き示そう．（綴字法の相異は取りあげない）．

Берестове ----------Берестово
церковь ту ----------церковь
Берестоваго ----------Берестова
И ископа себе печерку малу
----------И ископа себе ту печерку малу
и приходя с Берестового, отпеваше часы
----------"нет"
постави и ---------- постави его
"нет" ----------събрав епископы, в лето 6559;
некый человек ----------некто человек
именем мирьскым ---------- мирьский

в сердце ---------- на ум

в страну ити ---------- в страну итти Гречьскую

устремися в Святую Гору

---------- устремися и в Святую Гору дойде,

виде ту манастыря суща

---------- виде монастыря сущая ту

и обиходив, възлюбив

---------- и възлюби

приде в манастырь ту

---------- и прииде в един монастырь от сущих тамо монастырев

умоли ---------- моли

образ мнишьский -------- чернечьский образ

послушав его ---------- послушав

нарек ---------- нарече

научив чернечьскому образу

---------- научи его черноченскому житию

иди в Русь опять-------- иди пакы в Русию

буди благословенье от Святыя Горы

-------- буди благословение имея от Святыя Горы

"нет" ---------- и рече ему

от тебе мнози черньци быти имуть

---------- мнози от тебе черноризци имуть быти

благослови и и отпусти его

---------- благословив его отпусти и

приде Кыеву ---------- прииде в град Киев

ходи ----------походи

и не възлюби, Богу ------- и не възлюби ни в едином
же где бы жити, Богу

Бог показал ---------- Бог показал жити

ископа печерку ---------- печерку ископал

место се ---------- местьце то

в не ---------- в нем

в месте сем ---------- в местьци сем

и моего игумена ---------- и молитва моего игумена

поча жити ---------- нача жити

то через день ---------- того же через день

копая печерку ---------- и копаше печеру

и не да ---------- и не дасть

день и нощь ---------- в дне и в нощи

в трудех ---------- и в трудех

уведеша добрии человеци
---------- уведаша его людие

приносяще же ему, еже на потребу бе
---------- приносяще яже на потребу

седе Кыеве ---------- седе в Киеве

Изяслав же ---------- князь же Изяслав

приде с дружиною своею
---------- прииде к нему с дружиною
своею

и чтим ---------- и почитаем всеми

и начаша приходити к нему братья, и нача приимати
и постригати я
---------- и начяша приходити к нему
боголюбивии людие, он же приимаше их и постри-
заше

братьи ---------- братии бывши
Антоний ---------- великый Антоний
совъкупи ---------- совокупил
а яз ---------- аз же
постригал ---------- постригох
перво от Бога ---------- прьвое от Бога и пречистыя Богородица
и се рек им ---------- и рече им сице
живете же себе, и ---------- живете себе, и аз
вы ---------- вам
ити един ---------- ити и тамо сести един
постави им игуменом Варлама ---------- постави им игумана, именем Варлама
Братья же с игуменом ---------- Игумен же и братиа
Умножившимся братьи в печере ---------- умножившимся братии и не могущим в печеру вместитися
помыслиша поставити вне печеры манастырь ---------- помыслиша вне пещеры поставити монастырь
умножилося братье ---------- умножилося есть братии
Бог повелел и твоя молитва ---------- Бог повелел и пречистая Богородица и твоя молитва
Антоний ---------- преподобный
поклонишася ему ---------- поклонишася ему до земли и отъидоша
святыя Богородиця ---------- святыя Богородица и пре-

подобнаго Антониа

и идоша братья ---------- и идоша пакы

реша ---------- реша ему

а хотели ---------- и хотели

И се рек ---------- И сиа рече

княже мой! ---------- княже господине!

да бы ны дал гору ту

---------- да бы еси ѡжаловал нам дал гору ту

Изяслав же слышав---------- князь же Изяслав сиа слышав

посла мужь свой ---------- посла к ним болярина своего

и оттоле почася Печерский манастырь

---------- и оттлое начаша звати Печерьский монастырь

иже беша жили ---------- понеже беаху жили

Изяслав же ---------- князь же

вышний сего манастыря ----- выше Печерьскаго монастыря

надеася богатьству ---- надеяся на богатьство

таци ---------- тако

каци ---------- акови же

ни ---------- и

рекоша ---------- глаголаша

постави нам игумена ------- Отче! постави нам игумена

реша ---------- глаголаша

Бог и ты ---------- Бог, и пречистаа Богородица и ты честный отче!

рече им	----------	рече им великый Антоние
ак	----------	аков
Феодосий	----------	великый Феодосий
поклонишася старцю	---------	поклонишася ему до земля
братье числом 20	---------	братии же тогда суши числом 20
имети въздержанье	---------	имети въздержание велико
и велико пощенье	-------	пощение
совокупи братье числом 100.		
	-------	съвокупи всех братий числом 100.
старее всего	----------	и старей всех, и честию болий всех

以上の様な差異を見渡してみるとき，それらは，単にその時々の筆の勢いで揺れ動いただけのもので，別に意味を大きく左右するものではないことが分る．明らかに，聖者伝の中の寺伝の書き抜きである．そしてまた，実は，その寺伝の作者 —— 記録者 —— こそが，或はその文章から明らかに年代記者であつたかとも思われる．ともあれ，『過ぎし年月の物語』におけるこの一節の意味は次のように訳せる．

『神を愛する公ヤロスラフはベレストヴォ（村）を愛し，其処にある聖なる使徒たちの教会を愛し，多くの僧たちを援助していたが，彼等（僧たち）の中にその名をラリオンという僧がいた．（彼は）善良で書物に通じた士で精進者であつた．現在，古いペチエルスキー修道院のあるドニエプル河の丘へベレストヴォ村から（彼は）よく出かけて，そこで祈りをさゝげていたのである．というのは其処には大きな森があつたからである．（彼は）2サージェンの小さな洞穴を掘り，ベレストヴォからやつて来て，勤行を行い，しかして其処でひそかに神に祈つていた．ところでそ

の後，神が公の心に暗示し給い，しかして（公は）彼を聖ソフイヤ（教会）の府主教にすえた．しかして，この洞穴はそのまゝに残つた．しかして多くの日数を経ずして，町から出て，その世俗の名をリユブチヤという或る男がいた．神はこの男の心に外国へ行くように暗示し給うた．彼は聖なる山へ急いだ．しかして其処にある修道院を見て，（その廻りを）歩き，修道僧の形が好きになり，その修道院に入り来たり，僧の姿を自分の上に負わせて呉れるように修道院長にたのんだ．修道院長は彼の言うことを聞いてやり，彼を得度してやり，彼の名をアントニイと呼んだ．彼を教え，しかして，修道僧の形を習わせ，彼に言つた．〃ルシに引きかえせ，聖なる山より祝福があろう．汝から多くの修道僧が生まれるであろうように〃と．彼を祝福し，しかして彼を行かせて，彼に言つた．〃平和と共に行け〃と．ところで，アントニイはキエフに来たりついた．しかして，何処に住もうかと考えていた．しかして修道院を歩き廻つたが，気に入らなかつた．神が望み給わなかつたからである．神が彼に示し給う場所を求めて，（彼は）密林や山々を歩き廻りはじめた．しかしてラリオンが洞穴を掘つていたその丘にやつて来た．しかして，この場所を愛し，その洞穴に坐り込み，神に祈りはじめて涙と共に言つた．〃主よ！（汝は）我をこの場所に定め給いぬ．聖なる山と，我を得度せし我が修道院長の祝福がこの場所にありますように〃と．しかして（彼は）神に祈りながら其処に暮しはじめた．乾いたパンを食べ，しかも一日置きにし，水も必要なだけしか飲まず，洞穴を掘りつゞけ，昼も夜もおのれに憩いを与えず，労苦の中に時をすごし，勤行と祈りに（昼夜を送つていた）．しかしてその後，善良な人々が聞き知つた．しかして彼のもとへよくやつて来ては，必要であつたものを彼に持参したのである．偉大なるアントニイとして名がひろまり，（人々は）彼の祝福を求めてよくやつて来た．その後，ヤロスラフ大公が死去した時，その息子イジヤスラフが権

力を受けつぎ，キエフに坐した．アントニイはルシの国に名をうたわれた．イジヤスラフは彼の生活を聞き知つて，おのれの親兵団と共に来たり，彼に祝福と祈りを乞うた．しかしてアントニイはすべての（人々）に知られ，尊敬された．しかして兄弟たちが彼のもとに来たりはじめた．（彼は）彼等を受け入れて得度してやつた．彼のもとには十二人の兄弟たちが集つた．（それらの人々は）大きな洞穴を，教会を，僧房を掘つた．それらは現在に至るまでも古い修道院の近くの洞穴の中にある．ところで兄弟たちが集まつた時，アントニイは彼等に言つた．〃見よ，神は汝等兄弟を集め給うた．（汝等は）聖なる山の祝福によるものである．その祝福によつて我を聖なる山の修道院長が得度してくれたのである．しかして我は汝等を得度したのである．汝等の上に祝福あれ．先づは神より，次には聖なる山より〃と．しかして彼等はこう言つた．〃自分たちで暮せ．（我は）汝等に修道院長を定めよう．しかして（我）自からは一人でかの山に行きたく思う．（我は）以前にも世をのがれて（そのことに）關れていたからである〃と．しかして彼等にヴアルラムを修道院長と定め，しかして自からは山に入り，洞穴を掘つた．それは新しい修道院の近くにある．その中で（彼は）善行の中に生きて四十年間洞穴を出ることなくおのれの生涯を終つた．その中には今日に至るまでも彼の遺体が横たわつている．ところで，兄弟たちは修道院長と共に暮していたが，兄弟たちの数が洞穴の中にふえたので，（人々は）洞穴の外に修道院を建てようと思つた．しかして，修道院長と兄弟たちはアントニイのもとに来たり，しかして彼に言つた．〃父よ！兄弟たちがふえた．ところで（我々は）洞穴の中に身をおくことができない．神が命じ給いますよう．しかして汝の祈りがありますように．洞穴の外に（我々が）修道院を建てられるよう〃と．しかしてアントニイは彼等に命じた．彼等は彼に頭をさげた．しかして，洞穴のほとりに聖母昇天という名の小さな修道院を建て

た。しかして神は聖母の祈りによつて修道僧たちをふやしはじめ給うた．しかして兄弟たちは修道院を建てようと修道院長と相談をなした．しかして兄弟たちはアントニイのところへ来たつて言つた．〃父よ！　兄弟たちはふえつゝある．しかして（我々は）修道院を建てようと欲していたのである〃と．ところでアントニイは喜こんで言つた．〃総てに祝福されている神，しかして聖母の祈りも，聖なる山にいる父たちの（祈りも），汝等と共にあるように〃と．しかして，こう言つて，兄弟たちの一人をイジヤスラフ公のもとに遣わし，かく言つた．　〃我が公よ！　見よ，神は兄弟たちをふやし給う．しかして場所は小さい．洞穴の上にあるかの山を我々に与えよ〃と．　ところでイジヤスラフは聞いて喜び，おのれの家臣を遣わし，彼等にその山を与えた．ところで修道院長及び兄弟たちは，大いなる教会を基礎づけ，しかして修道院を堵でかこみ，多くの僧房を建て，教会を完成し，聖像で飾つた．　しかして此処からペチエルスキー（洞穴の）修道院がはじまつたのである．その修道僧たちは以前は洞穴に住んでいたので，そのためにペチエルスキー（洞穴の）修道院と呼ばれたのである．ペチエルスキー修道院は聖なる山の祝福から出たものなのである．修道院が完成し，修道院長の席をヴアルラムが占めた時に，イジヤスラフは聖ドミイトリイの修道院を建て，ヴアルラムを聖ドミイトリイへ修道院長として連れ出した．富に期待してこの修道院よりも一層高いものを造ろうと欲したのである．というのは，多くの修道院が皇帝たちや，貴族たちや，富によつて建てられたからである．しかし涙によつて，精進によつて，祈りによつて，勤行によつて建てられたもののような（そんな教会）はない．というのは，アントニイは，黄金も銀ももたなかつた．しかし，言われている如く涙と精進によつてなし得たのである．ヴアルラムが聖ドミトリイ（修道院）に来たつた時，兄弟たちは相談をして，長老アントニイのもとへ行き，言つた．〃我々に修道院長を立てよ〃

と．ところで彼は彼等に言つた．〃（汝等は）誰を欲しているのか？〃と．そこで彼等は言つた．〃神及び汝が欲するものを〃と．しかして（彼は）彼等に言つた．〃汝等の内でより卓越したもの．フエオドシイの如く，謙恭にして温順，温和なるもの：その者が汝等の修道院長になるがよい〃と．兄弟たちは喜び，長老に頭をさげ，しかして，その数二十人なる兄弟たちの修道院長としてフエオドシイを立てた．フエオドシイは修道院を受け，節制，大いなる精神，及び涙と共にする祈りをおこないはじめた．しかして多くの修道僧を集めはじめ，その数百人に及ぶ兄弟たちを集めた．しかして修道僧の法規を求めはじめた．その時，ストジイの修道院の修道僧ミハイルが見出された．彼は，グレキから府主教グレゴリイと共に来ていたのであつた．彼のもとでストジイの修道僧たちの規則を（フエオドシイは）求めはじめた．彼のもので求め得て，書き取り，おのれの修道院において，如何に修道院の歌をうたい，いかに礼拝をおこない，如何に読み上げをおこない，教会の中に如何に立つかということ，及び教会のあらゆる定約，食堂における坐り方，如何なる日に何を食べるかということ，（それら）総てを規定と共に定めた．すべてこれをフエオドシイは定めておのれの修道院に課した．この修道院からすべての（他の）修道院は法規を採用したのである．そのことによつて，ペチエルスキー修道院は総てよりも高位であるのである．フエオドシイが修道院に暮し，善行の生活とペチエルスキーの法規を行い，彼のもとに来る者を誰でも受け入れていた時に，彼のもとへ，悪しく，しかして価値なき奴隷である我も来たつたのである．しかして，我が生後十七才であつた時に私は受け入れられた．かくして，いかなる年に修道院が始まつたものなのか，しかして何のためにペチエルスキーと呼ばれているのかを此処に（我は）書き示して，（その年を）定めたのである．ところでフエヒドシイの一生に就ては，再びまた語ることがあろう』．

『我が書き示して（年号）を定めた』≪написах и положих≫という一人称単数アオリスト形を，此処に年代記者が堂々と用いているのはどうしたことであろう．ペチエルスキー修道院の聖者伝のこの一節と，『過ぎし年月の物語』のこの一節は完全に同一人物で，然もその人物が，『過ぎし年月の物語』の原型の書き手であつたと考えてよいであろうか．もし，そうだとすれば，『過ぎし年月の物語』の冒頭にある言葉『これは（ペチエルスキー・フェドシイ修道院の修道僧の）年毎の物語である』≪Се повѣсти времянных лет(черноризца Ѳедосьева манастыря Печерьскаго)≫と完全に符合する．ところが，6618(1110)年の最終個所に明らかに次の様に書かれているのはどうしたことであろう．ネストル≪Нестор≫の年代記と言われる≪Нестор≫という人物名はどうしたのであろう．ともかく，この最終個所にはラヴレンチー其の他の年代記では，

Игумен Селивестр святаго Михаила написах книгы си летописець, надеяся от Бога милость приняти, при князи Володимере, княжащю ему Кыеве, а мне в то время игуменящю у святаго Михаила, в 6624, индикта 9 лета; а иже чтеть книгы сия, то буди ми в молитвах.

とある．

『聖ミハイル修道僧セリヴエストルが年代記者たちのこれらの書物を書いた．神から恩ちようを受けることを期待しながら．キエフに公としてあつたヴオロジメル公の時代であり，私はその時，聖ミハイルにあつて修道していた．6624(1116)年，インヂクトの九年である．ところで，この書物を読む者は，私に対して祈りの中にあれ』

これによれば，少くともラヴレンチー其の他の年代記に見られる『過ぎし年月の物語』の記者はネストルではなくて，1116年

にこれを書いたとするセリヴエストルである．だが，彼は『これらの書物』を書いたと，複数形でのべていて，決して『この書物』とは言つていない．とすれば，セリヴエストルによれば，『過ぎし年月の物語』とは，決して単一な書物ではなかつたということになる．書物の寄せ集めであつた．いづれ，このことに就ては詳しくふれる機会があるであろう．少くとも，セリヴエストルは1116年に，『過ぎし年月の物語』を写したか或はまた写しながら書き加えたかして，例えば，先にあげた聖者伝の一節をも書物と呼んでいたらしいことはたしかである．もし，その様な明白な出典を書物と呼ぶとすれば，『過ぎし年月の物語』は，まだまだ多くの書物を含み込んでいるのである．例えば同じペチエルスキー聖者伝から，この他に，なお数ケ所抜き書きされた部分を見出すことができる．ペチエルスキー聖者伝のペルセネフ羊皮紙本によつて，それを見よう．『過ぎし年月の物語』の6582(1074)年の項の最初より三分の一ほどさがつた個所に，次の様にある．聖者たちのことを述べる個所である．

Таци бо беша любовници, и въздержьници, и по-
стници, от них же наменю неколико мужь чюдных.

『というのは，信奉者たちは，帰依者たちも，精進者たちも，かくの如くであつたのである．ところで，彼等から，すぐれた人々を若干，（我は）示そう．』

そして，先づ冒一に書きつけられたのは，次の様な文章であつた．

се первый Демьян презвутер: бяше тако постник
и въздержник, яко развье хлеба и воды ясти ему
до смерти своея. Аще кто коли принесяше детищь
болен, кацем любо недугом одержим принесяху
в манастырь, ли свершен человек, кацем любо
недугом одержим, приходяше в манастырь к бла-

женому Феодосию: повелеваше сему Дамьяну молитву створити болящему; и абье створише молитву и маслом помазаше, и приимаху исцеленье приходящии к нему. Разболевшю же ся и конець прияти лежащю ему в немощи, приде ангел к нему в образе Феодосьеве, даруя ему царство небесное за труды его; посем же приде Феодосий с братью, и приседяху у него, оному же изнемагающю, възрев на игумена рече: "не забывай, игумене, еже еси обещал"; и разуме великый Феодосий, яко видел, и рече ему: "брате Дамьяне! еже есмь обещал, то ти буди". Он же сомкарив очи, предасть дух в руце Божии; игумен же и братья похорониша тело его. Такъже бе и другый брат, именем Еремия, иже помняше крещенье земле Русьскыя. Сему бе дар дарован от Бога: проповедаше предибудущая, и аще кого видяше в помышлены, обличаше и втайне и наказаше блюстися от дьявола; аще который брат умышляше ити из манастыря, и узряше и, пришед к нему, обличаше мысль его и утешаше брата; аще к нему что решаше, ли добро, ли зло, сбудяшется старче слово.

『才一人者は —— これは，長老のデミヤンである．（彼は）パンと水以外はおのれの死まで食べなかつたような精進者であり帰依者であつた．もしも誰かが，或る病気にとりつかれた病気の子供をたづさえて修道院にその子供を連んで来たり，或は或る病にとりつかれた大人が至福なるフエオドシイの修道院へ来るようなことがあると，彼は病人のために祈りをなすようこのデミヤンに命じたものであつた．しかして，すぐに，（彼は）祈りをおこ

ない，油を塗つた．しかして彼の所へ来たるものは回復をえていたのである．ところで彼が病みついて，終末を受けるべく病の床に横たわつていた時，天使が彼のもとへフエオドシイの形で来たり，彼の労苦に対して彼に天国をめぐんだ．ところで，この後に，フエオドシイが兄弟たちと共に来たり，彼のそばに坐つた．彼は，弱り果てゝいたが，修道院長をみあげて言つた．〃修道院長よ！（汝が）約束したことを忘れ給うな〃．と．彼が幻想をみていることを偉大なるフエオドシイは知つて，彼に言つた．〃兄弟デミヤンよ！（私が）約束したことは汝に実現するであろう〃と．ところで彼は眼をとぢ，神の御手におのれの生命を引き渡した．修道院長と兄弟たちは，彼の遺体を葬つた．同じように，その名をエレミヤという別の兄弟がいた．彼はルシの国の洗礼を憶えていた．この者には神から才能が与えられていたのである．（彼は）未来を予言していた．しかして，もしも沈思して誰かを見ると，その者をひそかに非難し，悪魔から身を守るように教えたのである．もしも兄弟たちの誰かが修道院から去ろうと企てると，そのことをエレミヤは気づいて，その者の所へ来たり，彼の企てを非難し，その兄弟を慰めたのである．もしも彼（エレミヤ）が誰かに何かを言うと，良きにつけ悪しきにつけ，（この）長老の言葉は実際に起つだのであつた．』

この一節を前記のペルセネフ羊皮紙本に比較して見ると，ただ，次の様な個所の相違だけしか出て来ないのである．（左側は『過ぎし年月の物語』，右側は聖者伝）．

Демьян презвутер: бяше тако постник и въздер-
жник, яко разве..... ------- Демьян прозвутер
беяше так постник, яко разве .....
Аще кто коли ---------- И аще бо коли кто
одержим , ---------- одержим беаше
принесяху в манастырь----- "нет"

и абье створиме молитву ---- "нет"

разболевшю же ся и конець прияти лежащю ему в немощи -------- Единою же ему разболевшюся и конець прияти хотящю,

еже еси обещал -------- еже ми еси в-сию нощь обещал

еже есмь обещал -------- еже ти есмь обещал

сомжарив очи -------- смежав очи свои

и узряще и ---------- "нет"

аще к нему что решаше ---- аще кому речаше что

この相違とても，単なる筆の勢いのちがいだけにすぎないし，多かれ少なかれ古写本には付き物の相違の範囲を越えるものではない．『過ぎし年月の物語』の6582(1074)年の項には，今，上に引用した一節についていて長々とした文章が出て来る．然し，実はこれとても，聖者伝の一節を書き抜いたものにすぎない．シノダリ図書館本№216とこの長い一節を比較して見ても，其処には，上記二つの場合ほどの文章のちがいしか見当らない．だから，両方の原文を此処に取りあげる必要はあるまい．念のためにその内容の日本語訳を次に示そう．

『ところで，その名をマトフエイというもう一人の長老がいた．彼は洞察力があつた．ある時，彼が教会の自分の場所に立つていたとき，唱歌隊の席で両側に立つて歌つていた兄弟たちを，眼をあげて見た．しかして，リヤフ人の形をして，マントを着て，レボクと言われる花を裾につけて，その兄弟たちの周りを歩いている悪魔を彼は見つけた．しかして（悪魔は）兄弟たちをめぐりながら，ふところから花をとり出しては，任意に誰かに投げていた．兄弟たちの中の歌つている者たちの誰かに花が着くと，（その者は）しばらく立つていて，しかして思考が弱まり，何かある口実をもうけて，教会から出て，僧房に行き，眠り込んで，勤行が終

るまで教会に戻つて来なかつた．もしも，別の者に（花を）投げ，その者に花が着かなければ，（その者は）唱歌しつゝしつかりと立つていた．朝の勤行を歌い終るまで．　そして，その時に，おのれの僧房へさがつたのである．ところで長老はこれを見て，おのれの兄弟たちにつたえた．ところで，再び，長老はこんなことを見たのである．即ち，この習慣によつて長老が朝の勤行をつとめあげて，あかつき前に兄弟たちがおのれの僧房へさがつた時，さて，長老は，最後に教会から退出したのであつた．彼が一人で歩いていた時，信号板の下で休もうとして坐した．というのは彼の僧房は教会から遠かつたからである．すると彼は群が門から出て来るのを見た．彼が眼をあげて，見ると，一人の男が豚に乗つていて，他のものたちは彼をとりかこんで動いていた．しかして長老は彼等に言つた．〃どこへ行くのか？〃と．しかして豚に乗つた悪魔が言つた．〃ミハル・トリベコヴイチを迎えに〃と．そこで長老は十字架のしるしで我が身に印しづけ，しかしておのれの僧房にかえりついた．夜が明けた時，長老は気づいて侍者に言つた．〃行きてたづねよ．ミハルは僧房にいるやを〃と．しかして人々は彼に言つた．〃（彼は）朝の勤行の後，もうずつと前に，かこいから飛びにげた〃と．しかしてこのことを長老は修道院長及び兄弟たちにつたえた．この長老の時に，フエオドジイが死去し，ステフアンが修道院長になり，ステフアンの後にはニコンが（修道院長になつた）．ところでこの長老がまだ生きている時であつた．或る時，朝の勤行を彼がつとめていた時に，（彼は）修道院長ニコンを見ようとして眼をあげた．しかして，修道院長の位置にロバが立つているのを見た．しかして，まだ修道院長は立つてはゐなかつたことに気づいた．この様な別の多くの幻を長老は見た．しかして，この修道院の中で，非常に老令にたつて死亡した．

ところでまた，その名をイサキイという別の修道僧がいた．し

かして，いまだ彼が俗世にて，即ち，世俗生活にあつて，トロプチヤニンの生まれの商人であつたために，裕福であつた時，僧になろうと思つた．しかして，自分の財産を欠乏している者たち及び修道院に分け与え，しかして，洞穴にいる偉大なるアントニイのもとへ行つた．自分を修道僧にして呉れるように彼にたのんだのである．しかして，アントニイは彼を受け入れ，修道僧の衣を彼に着せ，彼の名をイサキイと言つた．というのは，彼の以前の名前はチエルニであつたからである．この様にしてイサキイは，厳しい生活を受け入れた．（苦行者用の）剛毛製緊衣をおのれの身にまとい，自分に雄山羊を買つて呉れるように命じ，しかして，苦行者服にするために皮を取り，生の毛皮を我が身につけて乾かした．洞穴に，一つの出入通の中の，四ロコテの広さの小さな僧房にこもり，其処で涙と共に神に祈つていたものである．彼の食べ物は聖餅だけであり，それさえも一日置きであつた．水は適当にしか飲まなかつた．偉大なるアントニイが彼に（食べ物を）もつて来て，彼に手をさし入れるだけの大きさの窓ごしに与えると，（彼は）食べものを受け入れたのであつた．　このことを（彼は）七年間実行した．光の当るところへは出ず，横ばいになることもなく，ただ坐つたまゝですい眠をとつていたのである．ある時，例によつて，夕方が近づいた時，頭をさげ（礼拝し）はじめた．詩編を誦した．夜中に至りさえした．彼が苦業していた時は自分の座に坐り通していたのである．或る時，例によつて彼が坐つていて，ローソクを消した時，光が急にかゞやき出した．あたかも，洞穴の中で太陽が輝き出した如くであつた．あたかも人間の眼をくらませるばかりであつた．しかして，うるわしい二人の青年が彼のところへ来たり，二人の顔は太陽のようにかゞやいた．しかして，（二人は）彼に言つた．〃イサキイよ！　我々二人は天使である．見よ，汝のもとへフリストスが来給う．ひざまづきて彼に礼拝せよ〃と．ところで彼は（これが）悪魔の仕業であること

を知らず，十字を切ることも忘れていた．フリストスに向つてなす如く，悪魔の仕業に向つて進み出て礼拝した．悪魔どもは呼んで言つた．〃汝は我々のものなり．イサキイよ！既に〃と．（悪魔どもは）彼を僧房の中へみちびき込み，彼を坐らせ，彼の近くに坐りはじめた．しかして僧房は彼等で一杯になつた．しかして洞穴の通路も．フリストスと言われる悪魔の一人が言つた．〃笛，太鼓及び琴を取りて奏せよ．我々にイサキイを躍らせよ〃と．悪魔どもは笛，琴，及び太鼓を奏して彼をもてあそびはじめた．しかして彼をつかれさせ，彼を半死半生のまゝ，捨てて，彼をののしつて去つてしまつた．翌朝，暁になつて，食物をとる時になつた時，例によつて，アントニイが小窓のところへ来て言つた．〃主よ祝福し給え．父イサキイよ！．〃と．しかして答えはなかつた．しかしてアントニイは言つた．〃これは既に（彼が）死去してしまつているということだ〃と．しかして，修道院のフエオドシイ及び兄弟たちを迎えに使者をつたわした．入口が埋められてしまつていたところ（の入口）を掘り出して，中に入り，（人々は）イサキイをかゝえ，死んだものと考えて運び出し，洞穴の前に彼を置いた．しかして（人々は）彼が生きているのを見た．しかして，フエオドシイ修道院長が言つた．〃これは悪魔の仕業によつて起つたのだ〃と．しかして（人々は）彼を寝床に置き，彼のためにアントニイが勤行した．この時に，イジヤスラフがリヤヒからやつて来て，フセスラフのことでアントニイに対してイジヤスラフは立腹した．スヴイヤトスラフは使者をつかわして，チエルニゴフへアントニイを夜中に出頭させた．そこでアントニイはチエルニゴフへ来たつた時，バルジンの山々が好きになつた．洞穴を掘つて其処に（彼は）住みついた．其処，バルジンの山々には今日に至るまでも聖母修道院がある．フエオドシイはアントニイがチエルニゴフに行つたのを知つて，兄弟たちと共に行き，イサキイを手にとり，彼をおのれの僧房へ連れて来て，彼の面倒

をみた．というのは，彼は肉体的に弱り果てていて，寝返りをうつことも，起きあがることも，坐ることもできないほどであり，一方のわき腹の方を下にしただけで横たわり，ほんの傍を這い廻るだけであつた．彼のこのわき腹の側の下には度々ウジ虫がわき出していた．ぬれていたためであり，横になつたまゝであつたためである．フエオドシイは自からおのれの両手で彼を洗つてやり，着替えさせてやつた．二年の間，彼の世話してこの様になした．次の様なことは不思議であり驚くべきことであつた．即ち，この男は二年の間横たわつて，パンも食わず，水も（飲まず）いかなる食べ物も果物も（取らず），一言葉も言わずに二年間，おしでつんぼになつて横たわつていた．フエオドシイは彼のために神に祈つていた．彼の上に昼も夜も祈りをなしていた．（この男が）三年目に口をきき，物を聞きとり，幼児のように両足で立ち，歩きはじめるまでずつと．彼は教会へ通うことを意に介しなかつた．（人々は）彼を力ずくで教会へ引張つて行つた．しかして，この後，彼は僧院食堂へ通うことを憶えた．（人々は）彼を兄弟たちから離して坐らせていた．彼の前にパンが置かれていたのに，彼の手の中へ入れてやらなければそれを取ろうとはしなかつた．

ところで，フエオドシイは言つた．〃彼の前にパンを置け．しかし，彼の手には持たせてやるな．（彼が）自から食うにまかせよ〃と．しかして（彼は）一週間の間食べようとはしなかつた．しかして少し周囲を見廻して，パンをかぢつていたのである．この様にして彼はパンを食べることを憶えた．この様にしてフエオドシイは悪魔の策略から（彼を）救つたのである．ところでイサキイは再び苛酷な節制をはじめた．フエオドシイが死去し，しかしてステフアンがその地位にあつたとき，，イサキイは言つた．〃見よ，悪魔よ，（汝は）既に我をたぶらかした．一個所に坐りつゞけていた（我を）．ところが，既に，（我は）洞穴の中にはこもろうとは思わない．反対に修道院の中を歩き廻りながら汝に

打ち克つであろう〃と．しかして苦行者服を着て，苦行者服の上に粗布の布着をつけて，白痴を装いはじめた．兄弟たちのために物を煮て，料理人たちに協力しはじめた．しかして朝の勤行には誰よりも早く通い，しっかりと身じろぎもせずに立っていた．冬がやって来て，厳しい寒さがはじまると，ふみつぶされたカガトの靴をはいて立っていた．だものだから，彼の両足は石に凍りついて，朝の勤行がつとめ終えられるまで，足を動かすことができなかったほどである．しかして朝の勤行の後には料理場へ行き，火を，水を，たき木を用意していたのである．兄弟たちのうちの他の料理人たちが（然る後に）やって来たのであった．ところで一人の料理人がいた．その者の名前は同じくイサキイであった．しかして（彼は）笑いながらイサキイに言った．〃そら，あそこに黒い烏がとまっている．行きて，あれをとらえよ〃と．ところで彼は，彼に地面まで頭をさげ，行って，烏をとらえ，総ての料理人たちの前で彼に持参した．しかして（人々は）おそれ，修道院長と兄弟たちに知らせた．兄弟たちは彼を尊敬しはじめた．ところで彼は人間の栄与を欲せず，白痴の真似をしはじめ，或は修道院長に，或は兄弟たちに，或は世俗の人々に迷惑をかけはじめた．他の人々が自分に打ちきずを与えてくれることを目的にしていたのである．しかして自からを白痴とみせて，世間を乞食して廻りはじめた．以前にいた洞穴に住みついた．というのは，アナトリイが既に死去していたからである．しかして，おのれに，若者たちを集め，彼等に修道服を着せ，時には修道院長ニコンから；時には，それらの子たちの親たちから打ちきずを受けていたのである．ところで，この様なことを総て耐えしのび，昼も夜も，打ちきずを受け，裸と寒さを（耐えていた）．ある夜，洞穴の傍の小屋の中で炉をたいた．炉がもえた時，古かったので，炎が隙間を越えて立ちのぼりはじめた．（隙間を）ふさぐものがなかったので，（彼は）はだしの足で進み出て；炎の上に立って，炉が

もえきつて，それから，這いおりたのである．彼に就てはこの他多くのことが物語られていた．（我は）その他のことについて実際に見た者である．しかして，かくして（彼は）悪魔に打ちかつた．ハエなどのおどしや，そゝのかしを何とも思わなかつたように．悪魔たちに向つて彼は言つていた．〃もしも，（汝等が）最初，私を洞穴の中でたぶらかしたにしても，（それは）（私が）汝等の策略とずるさを知らなかつたからである．ところが，今は，（私は）主なるイスス・フリスト及び我が神及び我が父フエオドシイの祈りとをもつているので，うち勝つであろうと期待している〃と．何度も悪魔たちは彼に害をして言つたものである．〃（汝は）我々のものだ．我々の長老及び我々に（汝は）既に頭を下げたではないか〃と．そこで彼は言つたものである．〃汝等の長老は反キリスト（アンチフリスト）であり，汝等は悪魔である〃と．おのれの顔を十字架の形で（彼が）影らせるとすぐに（悪魔たちは）消えて行つたのである．また或る時は，夜中に彼の所へ（悪魔たちが）来たり，幻想の中で彼に恐怖をあたえ，あたかも，今，多くの民衆がシヤベルとツルハシをもつて進み，次の様に言つているように（みせた）．〃この洞穴を掘りくづし，この男を此処に埋めよう〃と．また別の人々は言つていた．〃イサキイよ，逃げよ．埋めようと（人々は）思つている〃と．ところで彼は彼等に言つたものである．〃もしも（汝等が）人間であれば，日中に来るがよかろう．どころで，汝等が闇であれば，闇の中を歩け．闇が汝等を裏るであろう〃と．しかして，彼等を十字架でしるしづけた．（人々は）消えた．また別の時には，熊の形をして，或は猛獣の形をして，或は去勢牛の形をして，或は蛇の形で彼のもとへ這い来つて，或はひきがえるや，ネズミやあらゆるハ虫類の形をして（悪魔たちは）彼をおどした．何も彼にしでかすことができず，（悪魔たちは）彼に言つた．〃イサキイよ！（汝は）我々を打ちまかした〃と．そこで彼は言つた．〃イスス・フリスト

ス及び天使たちの形をして，（最初に）汝等は我に打ち勝つた．その様な形は汝等には価しないものである．然し，見よ，今度は汝等は，本当にちようど，汝等自身が見たところ，いやらしく，兇悪であるように，獣や家畜や蛇やハ虫類の形をして，出現して来ている〃と．　すると，直ちに，悪魔たちは彼から立ち消えた．しかしで，それからは，彼には悪魔たちからの害がなかつた．このことを（彼）自からが次の様に語つていた．　〃これは，この戦いが私には三年に及んでいた〃と．その後，彼は信心深い生活をはじめ，節制と精神と誡めを守りはじめた．しかして，かくの如く生きて，彼はおのれの生涯を終つた．洞穴の中で病みつき，（人々は）彼を修道院に運んだ．しかして七日目に主のもとに死去した．ところで修道院長イオアン及び兄弟たちは彼の遺体をとり，彼を埋葬した．フエオドシイ修道院の修道僧たちは，かくの如くであつた．彼等は，死後もなお燈明の如く輝き，この世にいる兄弟たちの為，世俗の兄弟たちの為に神に祈り，修道院へ寄附する人々のために祈つているのである．その修道院の中には，現在まで，善行の生活を人々は送り，全員一致共同して，歌い，祈り，聴聞して，全能の神をたゝえ，フエオドシイの祈りに守られているのである．フエオドシイに栄光あれ．　アーメン．』

『ペチエルスキー聖者伝』と対応するものとして最後に，もう一個所だけ引用しておこう．同じく，シノダリ図書館本№216にある聖者伝には，次の様に読み取られる．

Лета 5599, индикта 14, иже бе в 18 лето по преставлении преподобнаго отца нашего Феодосиа, игумен и черноризци съвет сътвориша; "не добро есть лежати преподобному отцю нашему Феодосию кроме монастыря и церкви своеа, понеже тъи есть основал церковь и черноризца съвокупил; и съвет совторше, повелеша устроити

место, идеже положити мощи святаго, и раку камену поставиша. И приспевшю празднику Успениа святыя Богородица, и преже триех дней праздника, повеле игумен копати, идеже мощи святаго отца нашего Феодосиа; его же повелению и аз грешный Нестор сподоблен бых, и прьвое самовидець святых его мощей, по повелению игумена; еже и скажю, не слухом бо слышах, но сам началник бых тому делу. Пришед бо игумен ко мне и рече ми: "поидеве в печеру в преподобному Феодосию"; аз же идох с игуменом в печеру, не сведущю никомуже. Расмотривше же, куде копати, и назначенавше место, где копати, кроме устиа, рече же к мне игумен: "не мози никомуже поведати от братиа, да не уведаеть ни един; попоими его же хощеши, да поможеть ти". Аз же пристроих в садмый день рогалиа, имже копати, и в вторник, вечер глубок, поях с собою два брата, не ведущу никомуже, и приидохом в печеру. И отпевше псалмы, начах копати, и трудився много, вдах другому брату, и копахом до полунощи, и трудившеся много не могохом докопатися; и начах скорбети, еда како на страну копаем. Аз же взям рогалию, начах прилежно копати, подругу моему опочиващу пред печерою; и рече им: "удариша в било"; аз же в то время прокопах над мощьми святаго, и оному глаголющю ко мне: "уже удариша в било", мне же рекшю: "прокопах уже". Егда же прокопах, абие страх обьят мя и начах звати: Господи помилуй! В то

же время седяста два брата в монастыри, стрегуша, егда игумен утаився несъкым, и принесть его стай, и зряста прилежно к печере; и егда удариша в било, видеша три столпы, аки дуги зарнии стоавше приидоша над верх церкве, идеже положен бысть святый Феодосий. И се видеша вси мнися и мнози в граде, им же възвещено бысть, и реша: "се уже приносять преподобнаго Феодосиа от печеры"; утру же бывшю, множество людий приидоша с Киева, с свещами и с фимианом. В то же время виде и Стефан, иже бысть в него место игумен, иже в то время бысть епископ, видев з своем манастыри чрез поле зарю велику над печерою, мнев, яко несуть святаго Феодосиа, бе бо ему възвещено преже пред единем днем, съжалився зело, яко без него преносять мощи святаго; и в той час всед на конь, вборзе поеха к печере, поим с собою Климента, его же постави игуменом в себе место; грядуще же видяху зарю велику над печерою, и яко приидоста близ, видеста свеща многи над печерою, и приидоста близ к печере, и не видеста ничтоже, и приидоста к дверем печеры, нам же седящим у мощей святаго. Егда бо прокопах, послах у игумену, глаголя: "приими, да изнесем святаго", игумен же прииде с двема братома; и прокопах велми, и преклонше ся видехом его лежаща мощьми святолепно, но и состави его цели бяху всяко и тлению непричастни, власи же главнии присъхли бяху к главе его; и възложивше на одр святыа его

мощи, изнесохом пред печеру. В другый же день съвъкупльшеся епископи, вси вкупе приидоша в печеру, им же суть имена: Ефрем Переяславьскы, Стефан Володимерьский, Иоан Черниговьский, Марин Юрьевский, Антоний Пороский, и игумени вси от всех манастырев с черноризьци приидоша, и людие благоверний; и взяша мощи святаго Феодосиа от печеры, с свещами и фимианом, и принесше его положиша в своей ему церкви, в притворе на десной стране, месяца августа 14, в день четверток, в 1 час дне, и призноваша светло в той день. Се же повем вам мало нечто, еже ся и сбысть пророчение святаго отца нашего Феодосиа: еще бо живу сущу великому Феодосию, и игуменьство обдержащу, и правящу еже Богом порученное ему стадо, иже нетокмо черноризца едины, но и мирьскими печашеся о душах их, како бы спаслися, паче же о сынех своих духовных, утешаа и наказаа приходящаа к нему, иногда же и в домы их приходя и благословение им подаваа. Единою же пришедшю ему в дом Янев, к Яневи и к подружию его Марии, бе бо любя их блаженый Феодосий, понеже живяста в заповедех Господних и в любви межю собою пребываста; единоюже пришедшю ему к нима, и учаще их о милостыни к убогым и о царствии небеснем, еже приати праведником, а грешным муку, и о смертнем часе; еще же и се ему глаголющю има о положении тела в гробе има, и рече ему Яневаа: "кто повесть, где мя положать?" Рече же ей Феодосий: "по истине идеже

лягу аз, ту и ты положена бужеши". Сие же сбысться по 18 лет преставления святаго: преподобному бо Феодосию преставльшуся преже 18 лет пренесения честнаго телеси его, егда же пренесоша мощи его, и тогда того же лета и месяца преставися Яневаа, именем Мария, месяца августа в 16 день; и пришедше черноризьци, певше обычныя песни, и принесше положиша ю в церкви святыя Богородица Печерьскиа, противу гробу Феодосиеву на шюей стране. Феодосий бо положен бысть в 14 августа, а сиа в 16. Сие же сбысться пророчение преподобнаго Феодосиа, добраго пастыря, иже пасяше словесныя овца нелицемерно, с кротостию и с расмотрением, съблюдая их и бдя за ня, и молясь за порученное ему стадо и за вся православныя християны и за землю Русскую, иже и по отшествии своем от сеа жизни молится за люди верныя и за своа ученикы, иже взирающе на честную его раку и поминающе учение его и въздержание, прославляють Бога. Аз же грешный и недостойный раб его и ученик Нестор недоумею, како похвалити добраго его жития и въздержания: но сиа реку мало нечто. Радуйся, отче нашь и наставниче, мирьскиа плища отринув, и млъчание възлюби, Богу послужил еси в тишине, и в мнишьском житии свяко себе принесение божественое принесл еси, пощением превъзвышься, плотьскиа сласти възненавидев и мирьскую красоту и желание века сего отринув, последуа стопам, высокомыстеным Отцем ревнуа,

молчанием възвышаася и смирением украшаася, в словесех книжных веселуася. Радуйся, укрепивыйся надежею вечных благ, ихже приал еси, умертвив плотское желание и истояник безакониа и мятежь, преподобне, и бесовьских козней избег и сетей его, с праведными, отче, почил еси, въсприим противу трудом своим възмездие, Отцем снаследник быв, последовав учению их и нраву и въздержанию, и правило их правя. Паче ревноваше великому Феодосию, нравом и житием подобяся житию его, и въздержанию ревнуя, и последствуа обычаю его, и преходя от дела в труды уншаа, обычныя молбы Богу въздаа и в воню благоуханиа принося вадило молитвеное, фимиан благовонный, победив мирьскиа похоти, и миродръжца князя тмы века сего супротивника поправ диавола и козни его, победник явися противным его стрелам и крепким помыслом став супротивно, укрепився оружием крестным, и верою непобедимою, и Божиею помощию. Темже, о честный отче и пастырю Христова стада, помолися и за мя недостойнаго раба твоего Нестора, избавлену ми быти от сети неприазнины, и от противнаго врага съблюди мя твоими молитвами, о Христе Исусе о Господе нашем, ему же подобаеть слава и честь и поклаяние, с безначалным его Отцем, с пресвятым и благым и животворящим Духом, и ныне и присно и в векы веком, аминь.

此処には，前に少しふれた年代記者の名前≪Нестор≫ネストルが数回読み取られる．然も，自分を一人称単数形でこの文章に出頭させているのである．ラヴレンチー年代記その他に見られる『過ぎし年月の物語』が『ネストルの』≪Нестора≫という名前を冠せられることから考えて，これは見のがすことのできない個所である．ところが，この文章が実は，『過ぎし年月の物語』の同じ6599(1091)年の項にその冒頭から，全くうり二つの形で書きとめられているのである．たゞ，『聖者伝』で『罪ある我，ネストルは』≪аз грешный Нестор≫と明らかに自分の名前を書きとめているのに対して，『過ぎし年月の物語』では単に『罪ある我』≪аз грѣшный≫とのみ書いて，ネストルという自分の名をあげていない．その他の大きな差異は両文には多くはみとめられない．『過ぎし年月の物語』の文章における意味は次の通りである．

『6599(1091)年．修道院長及び修道僧たちが会議をひらいて言つた．〃我々の父なるフェオドシイがおのれの教会の修道院の外に横たわつているのは良くない．何故ならば，(彼は)教会を基礎づけたのであり，修道僧たちを集めたのであるから〃．と．相談をして(彼等は)彼の遺体を置くべき場所をとゝのえるように命じた．三日後，聖母昇天祭の日が来たとき，修道院長は，我々の父なるフェオドシイの遺体の横たわつている所を掘るように命じた．ところで彼の命令の先づ最初の実際目撃者は(この)罪ある我であつた．そのことを(私は)人づてに聞いて語るのではなくて，自分がこのことに就ての発端者なのである．修道院長が私のところへ来て〃(汝と二人で)フェオドシイの洞穴へ行こう〃と言つた時，私は修道院長と共にやつて来て，誰にも知られずに，掘るべき場所をしらべて見て，掘るべき場所を入口のわきのところに標示した．私に向つて修道院長が言つた．〃誰も知ることのないように，兄弟の内の誰にも言うな．然し汝に協力で

きるような好きな者を連れて来たれ〃と．私はそれで掘るためのシャベルを七日間で用意した．しかして火曜日に夕方，誰にも知られず，二人の兄弟を連れて洞穴に来たり，詩篇を誦し，掘りはじめた．つかれると別の兄弟にまかせ，（我々は）真夜中まで掘つた．（我々は）努力した．しかして掘りつくすことができなかつた．（我々が）わきの方を掘つていることを悲しみはじめた．私は，シャベルを取つて熱中して掘りはじめた．洞穴の前で我が友が眠つて，しかして私に言つた．〃拍子木を打て〃と．しかして私はその時，フエオドシイの遺体に掘りついた．彼が私に〃拍子木を打て〃と言つた時，私は言つた．〃既に掘りついた〃と．（私が）掘りついた時，私を恐怖がとらえた．しかして，さけびはじめた．〃主よ，あわれみ給え！〃と．ところがこの時，二人の兄弟が修道院の中に坐し，修道院長が彼の遺体を誰によつて運ぶかを秘していたので，（二人の兄弟は）洞穴の方を見つめていた．（人々が）拍子木を打つた時，三本の柱が輝ける弓の様であり，しかも，教会の頂きの上に来たり立つのを（二人の兄弟は）見た．其処へフエオドシイが置かれた．フエオドシイの代り修道院長であり，この時府主教であつたステエフアンが，この時に，おのれの修道院の中で，野原の向うの洞穴の上に大きな輝きを目撃した．彼には一日前に知らされていたので，（人々が）フエオドシイを運んでいるのだと思い，自分のいない時に（人々が）彼を運び移していることを悲しみ，急いで馬に乗つて出かけた．クリメントをつれて．クリメントとは自分の代りに（彼が）修道院長に任じた者であつた．しかして（ステエフアンとクリメントの二人は）大きな輝きをみながら進んだ．近くへやつて来たとき，（二人は）洞穴の上に多くの燈明を見た．しかして，洞穴へ来りついて見ると何も見えなかつた．（彼等二人は）我々が彼の遺体のそばに坐していた時に洞穴の底へ来りついた．（私が）掘りあてた時，我々は修道院長に使者をたてた．〃来たれ．しかして彼

を〔我々は〕引き出そう〃と．ところで修道院長は二人の兄弟と共に来たつた．〔私は〕広く掘りひろげ，しかして〔我々は〕這いり込んだ．しかして〔彼は〕遺体となつて横たわつていた．しかして関節は〔いまだ〕バラバラにならず，頭の髪の毛はくつついてしまつていた．彼〔の遺体〕を修道僧マントの上におき，それを洞穴の前に〔人々が〕運び出した．ところで翌日に，主教たち，ペレヤスラフのフレム，ヴォロジメルのステファン，チエルニゴフのイオアン，クルゲフのマリン，及び，あらゆる修道院から修道院長が修道僧たちをつれて，やつて来た．しかして，信心厚き人々も．しかして〔人々は〕香と燈明とをもつて，フエオドシイの遺体を持ち，運んで来て，彼を彼自身の教会へ，その上り段の右手においた．八月十四日木曜日午後一時であつた．インジクトの十四年の．　この日には，壮重に〔人々は〕式典をおこなつた．

ところで今，〔私は〕フエオドシイの予言が実現したことについて少しあることをつたえよう．――〔このあと数行はその原文を先に引用したことがある〕――フエオドシイが修道院長職にあり，生きていたとき，神によつて自分にまかされた〔修道僧〕についてのみならず，世俗の人たちに就てもその魂のことを配慮して，どうしたら救われるかを心配していた．特にまた，おのれの宗門の息子たちに就ては〔配慮し〕，彼のもとに来たる者たちをなぐさめ，教え，或る時には彼等の家へやつて来ては彼等に祝福を与えていたものであつた．或る時，ヤンの家へ，ヤン及びその妻のもとへフエオドシイが来たことがあつた．彼は実は彼等を愛していた．〔この二人が〕主の教え通りに暮し，互いに愛しながら時を過していたからである．この二人の所へ彼が来て，貧しき者たちへのほどこしについて，〔また〕正しきものが受けるべき天なる王国について，罪人たちは苦しみを〔受けることに就て〕，死の時について，この二人に教えていた．さて，二人の棺にお

ける遺体の場所について彼が語っていた時，ヤン夫人が彼に言った．〃私が埋葬される場所を誰が知っていようか？〃と．そこで，フエオドシイは彼女に言った．〃本当に，私が横たわるところに，汝もまた葬られるであろう〃と．ところで，このことは実現した．修道院長は（彼女より）先に死去した．十八年目にこれは実現した．というのは，この年にマリヤと言う名のヤン夫人が死去した．八月十六日である．しかして，修道院僧たちが来たり；習慣通り歌を歌い終り，運んで来て，聖母教会のフエオドシイの棺の向い，左側に彼女を置いた．フエオドシイは十四日に，しかしてこの（女性）は十六日に埋葬された．この様に我々の父フエオドシイの予言は実現したのである．彼は良き牧者であり，言葉ある羊たちを偽りなく牧し，温順さと注意とを傾けて羊たちを守り配慮したのである．彼にまかされた群のため，キリスト教徒の人々のため，ルシの国のために祈ったのであった．また彼は，おのれがこの世を去ってからも，信仰厚き人々のため，おのれの弟子のために祈っているのである．彼等（弟子たち）は汝の棺を見あげて汝の教え及び汝の節制を思い起し，神をたゝえているのである．ところで罪ある汝のしもべにして弟子なる私は，如何にして汝の良き生涯と節制をほめるべきかを知らない．しかし，此処に何かを少し語ろう．喜こべ．我が父にして教訓者なる者よ．世俗の騒音を拒み，祈りをより愛し，汝は僧の生活にあつて静けさの中で神に祈ったのであった．神の与え給うものを総ておのれに取り，精進によつて称揚され，肉体の情欲とそそのかしを憎み，この世の美と望みを捨て，至賢なる父たちの跡を守り，きそい，沈黙によつて高まり，温順によつてまた身をかざり，書物の言葉に我が心を喜こばせた．喜こべ．永遠の幸を受けようとの希望に心をかため，肉体の欲望と，不法及び反逆の源を断ちし，汝，尊師よ．悪魔の策略及びそのあみの目をのがれ，正しきものたちと共に（汝は）永眠した．おのれの労によつて（良き）むくいをえて，父たちの後継

者となり，父たちの教えと習慣をつぎ，父たちの節制と彼等の法とを（汝は）守つたのである．特に，その習慣と生活において偉大なるフエオドシイに見習い，彼の生活におのれの生活を近づけ，その節制に見習い，彼の慣習のあとをつぎ，一つ仕事より次の仕事に移りつゝ，神への定められた祈りをあげ，良き香りのために祈りの香炉をさゝげ，良き香りの香をさゝげたのである．俗世の欲望及びこの世の世俗支配の公に打ち勝ち，敵なる悪魔及びその策略をたゞし，勝利者として現れたのである．悪魔の敵対的な矢及び高慢な考えに反対して立ち，十字架の武器と，破れざる信仰と，神の御助けによつて確固たるものとなつたのである．敵なる悪魔のあみの目よりまぬがれ得られるよう，誠なる父よ，我が為に祈れ．敵なる悪魔より我を守るに汝の祈りを以つてせよ』

ほとんど完全に一致するような形で『聖者伝』から書き取られているのは以上の個所である．然し，『過ぎし年月の物語』が，汲み取つて来て利用した『文献的なもの』が，これだけであつたのではない．例えば6604(1096)年の項の中程よりやゝ後に，年代記者が一人称単数形で顔を出して，『ノヴゴロド人ギユラチヤ・ロゴヴイチ』≪Гюрята Роговичь Новгородец≫が『私に』≪мн≫話したことを語ろうという一節がある．ところが，その内容を，人から口うつしに聞いたまゝのものであつたとは正直に考えられない．おそらくは，人に聞いた話であつたにちがいなかろうが，その内容は，むしろ，文献から流出したものであつて，根本的に口頭伝承だけの作品であつたとは考えられないからである．それなればこそ，途中で，『パタリヤのメフオジイが彼等について語つているところによれば』≪Якоже сказаетъ о нихъ Мефодий Патарийскый≫という一節を入れたのであろう．『語つている』≪сказаетъ≫という現在形の動詞は，彼の書物に書かれているものだということを正直にのべている言葉にちがいない．特に，『パタリヤのメフオジイが彼等につ

いて語つているところによれば』という言葉に続く文章は，メフオジイの著作からの書き抜きであつたにちがいない．

年代記の中に組み込まれている非常に多くの独立的な物語――たとえば，オリガの洗礼を受けた物語，彼女の死の物語，（『古代ロシア研究』オ五号参照），ヴオロジメルの洗礼以前にルシに来ていたキリスト教徒のヴアリヤギの受難の物語（『古代ロシア研究』オ六号参照），ヴオロジメルのルシ洗礼の物語，ボリスとグレブの物語等々――が，どこまで伝承で，行きつくところ源の文献は何で，然も，年代記者が直接口頭で聞いたものを書きつけたのか，源の文献を多少知つていたり利用して書いたものなのか――この決定は実に困難な問題である．『過ぎし年月の物語』の編集者，或は編集者よりも先に原型になる幾つかの物語を書いた『過ぎし年月の物語』の先駆をなした年代記が，では，誰であり，何であり，何を利用していたかを決定することもまた容易ではないであろう．『過ぎし年月の物語』の先駆をなしたような年代記的物語が何を編集し，如何なる出典から構成されていたものであるのか？　また，それらの年代記的物語が編集された時に，年代記者たちの一人一人が，どのような年代記以外の文献を素材として利用したのであるか？　これらの問題に対しては，実証する術はないので，なるだけ論理的に推測するより手がないであろう．然しながら，その論理的推測にもその基盤をなすような幾つかの記述が『過ぎし年月の物語』それ自身の中に存在しなければならない．推測可能にするような記述個所が多ければ多いほど，論理的推測は推測の域を脱して真実に近づくであろう．かくして，その様な記述個所は丹念に読み取られなければならない．できるだけ多く．年代順にそれを読み取つてみよう．

『過ぎし年月の物語』が年号を設定するまでの部分のほとんどがハマルトルス年代記にとつたものであることは既に『古代ロシア研究』においても，此処でも幾度か述べられた．然しそれ以外にも，例えば≪бѣ путь изъ Варягъ в Греки≫『ヴァリヤギからグレキへの道があつた』という一節は，ビザンチン帝コンスタンチヌス（905～959）の『帝国統治論』才九章（『独木舟に乗つてコンスタンチノーポリに来たるルスについて』）の中に詳しく記述されている．また≪Онъдрѣю учащю в Синопии и пришедшю ему в Корсунь・・・≫『オニドレイがシノピヤで教へ，しかしてコルスニに来つた時に』と言う一節も，使徒アンドレイがロシアに来たという物語であるが，実際には，その事実はない．然し，年代記者の創作ではなくて，十一世紀のビザンチンで一般に俗説としてそう信じられていたことがロシアに流入して来たものを書きとめたのであろう．ところが，このオニドレイ（アンドレイ）という使徒の話が始まる一つ前の節の冒頭に≪Поляномъ же живщимъ особь≫『ポリヤネが別々に住んでいた頃』という言葉があり，然も，使徒オニドレイの話が終つた一つ後の節の冒頭にも全く同じく≪Поляномъ же живщимъ особь≫と記述されているのは何を意味するのであろう．明らかにこれは，ロシア（ルシ）の記述が織り込まれた使者アンドレイの説話が，『過ぎし年月の物語』よりも古い何等かの文献テキストに入れられたことの証拠ではないであろうか．おそらく，もともとは最初一回だけこの言葉が用いられて話が進められた古いテキストがあつて，其処に，後で余計な物語を組み込んだために，もう一度，もとのテキストへ話を戻すために，この同じ『ポリヤネが別々に住んでいた頃』という個所へ立ち帰つたのであろう．そのために，そつくり同じ言葉が中間に一つの物語をへだてて繰り返されたと考えられる．だから，古いテキストに後で組み込まれた物語とは，或は，この全文の言葉の間の物語

自体であつたかも知れない．即ち，ロシアをおとずれた使徒アンドレイの物語なのである． 実際，そんな歴史事実はない．この物語は，おそらく，比較的後代の説話であつた．というのは『過ぎし年月の物語』よりも古いノヴゴロド第一年代記には，このアンドレイの物語は記述されていないからである．然も，『過ぎし年月の物語』それ自体が後になつて，この使徒のロシア訪歴の物語を否定しているではないか．『ボリヤネが別々に住んでいた頃』という同じ言葉につゞく二つの物語の間のコルフニに来たアンドレイの話を，つじつまの合わない矛盾だとする如く，6491(983)年の項の終りに，次の様に記述している．(『古代ロシア研究』第六号；p.34～35参照)．

Бяху бо тогда человеци невеголоси и погани; дьявол радовашеся сему, не ведый, яко близ погибель хотяше быти ему. Тако бо тщешеся погубити род хрестеяньскый, но прогоним бяше хрестом честным и в онех странах; сде же мняшеся оканьный : яко сде ми есть жилище, сде бо не суть апостоли учили, ни пророци прорекли. Не ведый Пророка глаголюща; и нареку не люди моя люди моя; о апостолех бо рече: во всю землю изидоша вещанья их, и в конець вселеныя глаголи их. Аще и телом апостоли не суть сде были, но ученья их аки трубы гласять по вселеней в церквах. Им же ученьем побежаем противнаго врага, попирающе под нози; якоже попраста и си отеника, приемше венець небесный с святыми мученики и праведники.

明らかにこれは，使徒アンドレイがルシに来たことを否定して，この頃まだ使者が実際にロシアには足をふみ入れていないことを

述べている一節ではないか．念のため，この一節の意味は次のようである．

『というのは，その時には人々は無知で異教徒であつたからである．悪魔は自分に破滅が近くおこるであろうことを知らず，この事を喜こんでいた．というのは，（悪魔は）このようにしてキリスト教徒の民を滅ぼすことを楽しんでいたが，尊い十字架によつて他の国々においても追い払われてしまつたのである．ところで此処（ロシア）では，呪われたる悪魔は，此処が自分にとつて住み家とすべき所である —— というのは，此処では使徒たちが教えたことはなかつたし，予言者たちも予言を行つたことはなかつたからである —— と考えた．予言者が次のように言つているのを知らなかつたからである．　即ち，〃しかして我が民ならざる民を我が民と（我は）呼ばん〃と．というのは，使徒たちについて〃彼らの教えが国中にひろまり，宇宙の果てまで彼等の言葉がひろまつた〃と言われているからである．もしも，使徒たちが肉体としては此処に来なかつたにしても，彼等の教えはラッパの如く世の果てまで，教会の中で高鳴つているのである．彼等の教えによつて，（我々は）はむかう敵をうちまかし，足の下にふみつけるのである．ちょうど，これらの父子が（悪魔を）ふみつけ，聖なるじゅん教者と正しき人々とともに天の冠をうけたように』

とすると，少くとも，この一節を書いた人は，年号設定以前の古い使徒アンドレイのロシア訪問を信じていない．いや，おそらく，書いた人は別々であつたであろう．全部を通じて見た時の矛盾に気づかずに，後代に誰かが，使徒アンドレイがロシアに来たことを書き込んだのであろう．使徒アンドレイがロシアに来たことはないと信じて書かれた文章が『過ぎし年月の物語』にはもう一個所存在する．同じくヴォロジメル公についての物語で，公がルシを洗礼した時，やはり，追われた悪魔が語る言葉として，6496(988)年の項の三分の二ほどの所に次の様にある．上に引

用した文章と似ていることを注意しよう．

а дьявол станя глаголаше: увы мне, яко отсюда прогоним есмь! сде бо мнях жилище имети, яко сде не суть учнья апостолька, ни суть ведуще Бога, но веселяхъся о службе их, еже служаху мне; и се уже побежен есмь от невеглас, а не от апостол, ни от мученик, не имам уже царствовати в странах сих.

『ところで悪魔はうめいて言つた．〃あゝ，我は悲しいことだ．ここから追いはらわれるとは！　というのは，ここに住み家を持つことができると思つていた．こゝ（ロシア）には使徒の教えがなく，神を（人々は）知りもしないから．ところで，（我は）我に仕えて来た彼等（ルシ人）の勤めをよろこんでいた．しかして見よ．すでに（我は）無知なるものたちによつて，打ちまかされたのであつて，使徒たちからもじゅん教者たちからも（打ちまかされた）のではない．すでに，これらの国々において（我は）君臨することができない〃と．』

この二つのよく似た文章は，完全に使徒アンドレイのロシア訪問の記事を否定している．アンドレイの記事は後代に別人によつて書き込まれたものに相違ない．少くとも，6491年の項と6496年の項とを書いた原作者とは別の人が書いたものであろう．その人は，『過ぎし年月の物語』全体を通じて話のつじつまを合わす程の才能はもち合わせていない人物であつたであろう．たゞ，組み込んだ個所の，ほんの前後だけの筋を合わせるために≪Поляномъ же жившим особь≫という当時の原本の言葉をキズ口の前後に書き出したにすぎないと言えるであろう．

さて，ハマルトルスの年代記から取つて来られた言葉は≪отскуфъ, рекше от козаръ≫,≪Си бо угри почаша быти пр—Ираклии царн, иже находиша на Хозд—

роя≫, ≪Въ си же времяна быша и обри, иже ходиша на Ираклия царя и мало его не яша≫, 等々があり, ≪Глаголеть Георгий в лѣтописаньи≫ 以下に書きとられた一節は明らかにハマルトルス年代記からの書き抜きである.（『古代ロシア研究』オ一号参照）

さて, 年代設定以後を, より深く注意しながら読んでみよう.

先づ初めて年代を設定した年, 即ち『6360年(852)年・インジクトの十五・ミハイルが君臨しはじめた時』≪Въ лето 6360, индикта 15, наченшю Михаилу царствовати≫に『ルシの国が呼ばれはじめた』≪начася прозывати Руска земля≫という言葉がある. 然し, 他の文献と比べて見るとき, この年号は, そのまゝうのみにするわけにはいかない. 『過ぎし年月の物語』の台本よりも, なお古い台本をもとにしたと思われるノヴゴロドオ一年代記では6360年ではなくて6362年としているではないか. ノヴゴロドオ一年代記の台本と『過ぎし年月の物語』(ラヴレンチー, イパーチー, トロイツキー各年代記の)の台本とは明らかに別物である. 実際にミハイル帝が即位したのは842年で, 年代記的に言えば十年前の6350年であつた. 何故, 十年の間違いが生まれたのであろう. 準拠した文献によると考えなければなるまい. 事実, 南スラヴの諸年代記は間違つた方の6360年を採用している. 総主教ニキフオル≪Никифор≫の簡略年代記≪Летописец вскоре≫≪Χρονογραφικὸν σύντομον≫オ二本には, 『キリストの誕生から最初の正教の皇帝コスチヤンチンまで318年, コンスタンチン帝からミハイル・キリシア帝まで542年』≪От Христова рождьства до пръваго правовернаго царе Костянтина лет 318, от Константина царе до Михаила царе Греческаго лет 542≫とあつて, 世界創造からキリスト誕生までの5508年を加えると, たしかに, 6360年になつてしま

う．即ち，西暦852年になつて，歴史事実とは合わない．このニキフオルの簡略年代記にパレア≪Палея, Палѣя, Παλαία≫の古い訳文が重ねられた．シノダリ本№211には，次の様なパレアの一節が読まれる．『しかして，この者（ミハイル）の治世の時代に，彼の治世才二年目にボルガルの国が洗礼され，哲学者キリルがメフオジイと共に6363年に，ボルガルのボリス公の時代にギリシア語から（聖）書をスロヴエンの言葉に訳した』≪и при сего царствии, в второе лето царство его, крещена бысть Болгарьская земля, и преложиша книгы от греческа языка на словеньскый Кирил философ с Мефодием в дето 6363, при Борисе князи болгарьстем≫とある．おそらくは，これらの文献の年代算定が『過ぎし年月の物語』の年代決定の基礎になつていたのであろう．少くとも，その年代記者はニキフオルの簡略年代記やパレアを知つていて，それに準拠したものにちがいない．

さて，この様にして年号が決定された後にも，『過ぎし年月の物語』は再びニキフオルの簡略年代記を利用している．アダムからコスチヤンチン帝までの年数をこの年の項で算定する個所である．簡略年代記才二本がアダムからニキフオルの死までを算定している個所からの抜き書きである．簡略年代記才一本では，洪水からアヴラハムまで1072年となつていて『過ぎし年月の物語』におけるように1082年とはなつていないので，この十年の相違が才二本にあつて，その才二本がよりどころにされたのであろう．

扨て，次に，6415(907)年の年号のもとに，グレキにオレグ≪Олег≫が進攻した物語が『過ぎし年月の物語』に書きとられている．然し，この年号は，ノヴゴロド才一年代記の年号6430(922)年とは一致しない．前述したように，『過ぎし年月の物語』の台本よりも，一層古い台本（現存しないが一般に『原初の集』≪Начальный свод≫と言われている）をもとにしたのが

ノヴゴロド第一年代記であつた．ところで，そのノヴゴロド第一年代記では，6428年にイゴリがグレキに進攻して成功しなかつた物語が書かれ，続いて，6429年にはそのイゴリとオレグが二人で軍勢を集め，6430年にイゴリがグレキへ進攻すると書かれている．そして，『過ぎし年月の物語』が，6415年にグレキに進攻し，和を講じたとして，条約文の断片を書き取つている個所も，年号も，ノヴゴロド第一年代記には全く見当らないのである．ノヴゴロド第一年代記は少くとも6430年のオレグのグレキ遠征を，前々年のイゴリの遠征の復しゆうだと見ている．ところで，『過ぎし年月の物語』がオレグの遠征に事よせて書きとめたルシとグレキの条約文は，ノヴゴロド第一年代記の書かれた時，或はその台本であつた『原初の集』が書かれた時には，いまだ，その書き手なり，編集者の手には入つていなかつたということになるであろう．ところが，この条約文と似たものが，『過ぎし年月の物語』には，これから五年後の6420(912)年の項に，もう一度オレグが講じた条約文が書きとられているのである．『原初の集』や ノヴゴロド第一年代記の記者には，知られていなかつたこの二つの条約文を『過ぎし年月の物語』の記者（編集者）は，あとになつて何処からか探し出して来たのであろう．そして，新しく独自に手に入れた資料を余りに誇らしく年代記編集の中心におきすぎた．そして，彼は，6420(912)年の項に書き入れるべきその資料の冒頭の言葉『もう一つの協約の写し』≪равно другаго свѣщания≫という言葉（『古代ロシア研究』；第三号；p.17～p.18参照），なおそれに冠せられた『アレクサンドル帝の治世にあつた』という前書きにとまどつた．そして，その一部分を五年前の6415(907)年の項に組み込んだのであろう．少くとも，『過ぎし年月の物語』における6415年及び6420年の両項に書きとられたルシとグレキとの条約文は，以前の年代記的作品には無かつたものだと考えてよいであろう．その様な新

資料を『過ぎし年月の物語』の記者（編集者）がどこから入手したかは知る由もない，然し，では，何故に五年前の6415(907)年に組み入れたのであろうか．此処には伝承の及ぼした面白い作用を認めることができそうである．オレグ≪Олег≫が馬の頭蓋骨を足にかけたために，その頭蓋骨から出て来た蛇にかまれて死んだという説話が書かれ，然も，その死は，馬のために死ぬであろう≪княже! конь, его же любиши и ездиши на нем, от того ти умерети≫『公よ，それを愛し，それに乗つている，その（馬）によつて汝は死ぬであろう』——というよう術師の予言が的中した物語が書きとめられている．そして，これが如何にも，叙事詩的説話伝承であつたことを示す如く，『しかして，彼の在位のすべての年は三十三年であつた』≪И бысть всех лет его княжения 33≫という言葉で締めくくつている．というのは，三或は三十三という数は，ロシアの伝承作品に名染みの数であつたからである．この数が叙事詩的な数であつて事実を反映したものではないことが，他の年代記から推察される．ノヴゴロド第一年代記，ウスチュグ年代記によれば，オレグの死は6420(912)年ではなくて6430(922)年になつているし，『過ぎし年月の物語』自身も，6360(852)年の項で『オレグの第一年，すなわちキエフにおいて即位してからイゴリの第一年まで三十一年』≪а от перваго лета Олгова, понеже седе в Киеве, до первого лета Игорева лет 31≫としている．『過ぎし年月の物語』自体が，その様に三十一年としながら，此処で伝承作品に引つぱられて三十三年として，矛盾をおかしながら，そのことをケロリとして知らぬ顔をきめ込んでしまつている．文献的素材の利用と，伝承作品の利用との組み込みがもたらした断層であると言えよう．その断層のために，実は本来一つのものであつた6415(907)年及び6420(912)年の条約文が，あたかも別物の二つのものであるかの如

くに両年に分けて書き込まれた．いくら，この両年に分割して見ても，6415年から6420年の間には，何等書き込むべき事件を『過ぎし年月の物語』の記者は見出さなかつた．たゞ，6419(911)年の項に『西方にヤリの形をした大きな星が現れた』≪Явися звезда велика на западе, копейным образом≫と天文現象を書きつけられるにすぎなかつた．何の事件も起らないのに，別の条約文が生まれる道理がない．『原初の集』を，よりたしかに反映したノヴゴロド第一年代記はこの点について実に正直であつた．オレグが勝利をおさめて，帰途につく前のくだりを，ノヴゴロド年代記は，次の様にのべている．

И заповеда Олег дань даяти на 100, 200 корабль, по 12 гривне на человек, а в корабле по сороку мужь; сам же взя злато и паволокы, и возложи дань, юже дають и доселе княземь рускым.

『しかしてオレグは百・二百隻の船に対し，一人につき十二グリヴナづつを貢税として支払うように命じた．ところで（一隻の）船には四十人づつ（のつていたのである）．ところで，自からは，黄金と絹織物を摂つて，しかして，現在までも（彼等が）ルシの公たちに支払つている貢税を課したのである』

このうち，≪И заповеда Олег……мужь≫という前半の文章は，船の数を二千隻と変えるだけで，そのまゝ，『過ぎし年月の物語』の中にもみとめられる．ところが，後半の文章を『過ぎし年月の物語』は書きとめることをせず，たゞちに，条約締結の話に移るのである．そして，6415(907)年の条約文第一条で，再び，この『四十人づつ乗つている船二千隻の一人づつに対して十二グリヴナを支払う』ことと言う内容を取りあげるのである．前文を再び第一条に組み込む不器用さを，再びもう，此処で取りあげるのはやめておこう．それよりも，6415(907)，

6420(912), 6453(945)の各年代の項に書きとめられた条約文を相互に比較してみるがよいであろう．例えば，6453(945)年の項の条約文の前書きには『過ぎし年月の物語』には次の様に書かれている．

В лето 5453. Присла Роман, и Костянтин, и Стефан слы к Игореви построити мира перваго; Игорь же глагола с ними о мире. Посла Игорь муже своя к Роману, Роман же созва боялре и соновники. Приведоша Руския слы, и велеша глаголати, псати обоих речи на харатье, равно другаго свещанья, бывшаго при Романе, и Костянтине, и Стефане, христолюбивых владык..... ..... послании от Игоря великаго князя Рускаго, и от всякоя княженья, и от всех людий Руския земля. И от тех заповедано обновити ветъхий мир, ненавидящаго добра и враждолюбьца дьявола разорити от мног лет, и утвердити любовь межю Греки и Русью.....

『6453(945)年．ロマンが，およびコスチヤンチンも，およびステファンも，イゴリに古い和平を樹立するために使者を遣わして来た．ところでイゴリは彼等と和平について語った．イゴリはおのれの家臣たちをロマンのもとへ送り，一方ロマンは貴族および高官たちを，よびあつめた．(彼等は)ルシの使者たちを連れ来たり，しかして(口上を)述べるように，双方の言葉を羊皮紙に書くように命じた．(すなわち)キリストを愛する君主たちであるロマン帝およびコスチヤンチンおよびステファンの治世にあつたもう一つの条約文の写しである．・・・・・・(ルシから派遣された人々の名前の列挙)・・・・・・ルシの大公イゴリ，および

あらゆる公たち，およびルシの国のあらゆる人々からつかわされたものである．しかして，これらのものたちによつて古い和平を新たにし，多年にわたつて善をにくみ悪を愛する愛慾を破滅させ，しかしてグレキとルシの間の友好を確立することが命ぜられたのである』

此処にも『もう一つの条約文の写し』≪равно другаго свиданья≫という言葉が出て来る．実際，6415(907)，6420(912)，6453(945)の三つの項目に記述されている条約文のそれぞれ三つの資料を『過ぎし年月の物語』の記者（編者）がもつていたのではなかろう．上にあげた引用文でも分る通り，6453(945)年の条約は『古い和平』を更新確立することであつた．『古い和平』≪ветхии миръ≫とは6415(907)年と6420(912)年の項とに書き取られているものを指し，6453(945)年の項では『定められている如く』≪якоже установлено есть≫という言葉を二度も繰り返したのである．この『定められている如く』と言われた実際の内容は決して，6420(912)年の条約文にあるものに限られず，6415(907)年の項に出て来る内容をも反映しているのである．とすれば，6415(907)年の項で書き取られた条項は，実際は6420(912)年の項に入れるべきものであつたかも知れない．ともあれ，その二つは実は同一のものなのであり，且つ，6453(945)年の条約文の下書きになつたものなのである．だから，6415(907)年の条約文（の断片）と6420(912)年の条約文（の断片）とは，用語も文体も同一であり，これを下書きにして更新した6453(945)年の条約文は，前二者と用語及び文体を異にしているのである．

ところで，6415(907)年と6420(912)年の両項に分割されながら実は一つのものであつた条約文の中間に，空白な年号だけを入て，単に6419(911)年の項に天文現象だけを書きとめていることは前に述べた．即ち，ヤリの形をした大きな星が西空に現

れたという記事である．これは，ロシアの古い伝承や或は何等かの古い文献によつたのではない，ビザンチンのハマルトルス年代記の続編によつたまでのことであつた．天文学的には，この星は実は912年即ち『過ぎし年月の物語』がしるした年の翌年の七月十九日に近日点を通過したはずである．ちなみに989年にもホウキ星が現れているが，この記事は『過ぎし年月の物語』には全く記録されていない．

さて，条約を結んだオレグが，馬の頭蓋骨から這い出した蛇にかまれて死去したという伝承が書き取られた．然し実は，その直後に，『占からよう術が実現するのは不思議なことである』≪Се же дивно есть, яко от волхвования сбывается чародейством≫という言葉があつて，その例を『過ぎし年月の物語』の記者は相当長々と書き込んでいる．実は，ハマルトルス年代記の逐字訳にすぎない．その古代ロシア語の原文と日本語訳は，既に先に引用しておいた．

6421(913)年の『オレグの後にイゴリが（公として）君臨しはじめた』≪Почa княжити Игорь по Олзе≫という一節につゞく『この時に，レオンの子，ロマンのむこ，コスチセンチンが（皇帝として）君臨しはじめた』．≪В се же время почa царствовати Костянтин, сын Леонтов, зять Романов.≫とあるのは，ハマルトルス年代記の続編からの取材であり，翌，6422(914)年に『この同じ年に，ボルガルのセメオンがツアリグラドに来たり，しかして和平を講じ帰途についた』≪В то же лето приде Семеон Болгарьскый на Царьград, и створив мир, иде въсвоясн.≫とあるのも，次の年の6423(915)年に『この同じ時代に……』として下に記すような記事があるのも，総て，ハマルトルス年代記続編から取られたものである．

В лето 6423.....

В си же времена приде Семеон пленяя Фракию, Греци же послаша по Печенегы, Печенегом же пришедшим и хотящим на Семеона, разсваришася Грецкыя воеводы; видевше Печенези, яко сами на ся рать имуть, отъидоша въсвояси, а болгаре с Грекы съступишася, и посечени быша Греци. Семеон же прия град Оньдьреянь, иже первое Орестов город нарицашеся, сына Агамемнон, иже первое в трех реках купався, недуга избы, ту сего ради град в свое имя нарече. Поселе же Андреян Кесарь обновины и, в свое имя нарече Андреян, мы же зовем Ондреянем градом.

『またこの時代にセメオンがフラキヤをおさえつゝ来たつた．グレキもまたペチエネギを迎えに使者を遣わした．ペチエネギが来たり，セメオンに向つて（進攻）しようとしたとき，グレキの司令官たちが争いを起した．ペチエネギは（彼等が）互に相対立しているのを見ておのが国へ立ち去つた．ところがボルガルはグレキと交戦し，グレキが斬り殺された．ところでセメオンはオニジレヤニという町を取つた．それは，はじめアガメムノンの子オレストの町と呼ばれていた．彼ははじめ三つの川で水浴し，病からまぬがれて，其処に，このために，おのれの名にちなんで町を名づけたのである．後にはアンドレヤン帝がそれを復興して，おのれの名にちなんで，アンドレヤンと呼んだ．我々もオンドレヤニ町と呼んでいるのである．』

ところで，ハマルトルスの年代記の続編から取材したもので；面白いのは6428(920)年の項である．其処には単に『ロマンがグレキにおける皇帝にすえられた．ところでイゴリはペチエネ

ギに対して戦っていた』≪В лето 6428. Поставлен Роман царем в Грецех. Игорь же воеваше на Печенегы≫とだけしか書かれていない．勿論，この文章の前半はハマルトルスからの取材である．『過ぎし年月の物語』が基礎にしたものよりも一層古い『原初の集』を基礎にしたと思われるノヴゴロド第一年代記には，同じ6428(920)年の項として次の様に書き取られている．

В лето 6428. Посла князь Игорь на Грекы вои Русь скыдеи 10 тысящь. И приплыша ко Цесарюграду, и многа зла створиша Русь: Суд бо вес пожгоша огнем; а их же имше пленникы, овех растинаху, иныя же к земле посекаху, другыя же поставляюще, стрелами стреляху; елико же ратнии творят, изъломяше опакы руце и связающе, гвозды железны посреде глав вбивающе; и многыи церкви огневи предаша. В время же то царствующю во граде Роману, и абие посла Роман цесарь патрикыя Феофана с вои на Русь, и огненым строем пожьже корабля рускыя. И възвратишася Русь в своя. Том же лете препочиша и другое, на третьее идоша.

これは，実に，『過ぎし年月の物語』が，それよりも二十一年後の6449(941)年の項に書き取っているイゴリのギリシア遠征の物語ではないか．(既にその日本語訳も原文も先に引用したのでノヴゴロド第一年代記のこの部分の日本語訳も省略しておこう)．ロマン帝の名前だけが，『過ぎし年月の物語』にもノヴゴロド第一年代記にも共に同年の項に出て来る唯一の共通点である．ノヴゴロド第一年代記が設定した年号とイゴリのギリシア遠征の

物語とは，現存する古い文献の何に一致するであろう．ペテルブルグ（レニングラード）公共図書館にあるシノダリ本№210及び№211の≪Палея≫『古代ロシア史物語』と一致するのである．おそらく，Палеяが，『原初の集』をおのれの中に吸収して反映させているのであろう．『過ぎし年月の物語』の記者はそれには準拠しなかつたかも知れない．ハマルトルス年代記の続編では，ルシの攻撃の年を6428ではきくて，6449年だとしている．と言えば，年号設定に関して，ノヴゴロド才一年代記は『原初の集』を基礎にしつゝ，ハマルトルスの続編を無視し，『過ぎし年月の物語』の記者は『原初の集』に寄らずに，ハマルトルスの続編だけによつたということになる．『過ぎし年月の物語』がハマルトルスの年代記，或はその続編から取材し或は抜き書きにしたものは実に多い．例えば，6437(929)年，6442(954)年の両項の全文はそれである．

ところが，『過ぎし年月の物語』の記者（編者）は，ハマルトルスのものだけに準拠したのではない．ハマルトルスに他の二，三のものを組み合わせて物語を構成している所も見受けられるのである．例えば6449(941)年の項は，最終の一行ほどを除いてその全部が三種類のよりどころから構成されている．才一のよりどころは，勿論，古いロシアの伝承であつた．文献的には何をよりどころにしたのであろう．それよりも先に，再び，その文章を下に引用してみよう．

В лето 6449. Иде Игорь на Греки; яко послаша болгаре весть ко царю, яко идуть Русь на Царьград скедий 10 тысящь. Иже пондоша и приплуша, и почаша воевати Вифаньския страны, и воеваху по Понту до Ираклия и до Фафлогоньски земли, и всю страну Никомидийскую попленивше, и Суд весь пожьгоша. Их же емше, овех растинаху

, другия аки страпь поставляюще и стреляху в ня, изимахуть, опаки руце съсязывахуть, гвозди железныи посреди главы въбивахуть их; много же святых церквий огневи предаша, манастыре и села пожьгоша, и именья не мало обою страну взяша. Потом же пришедъшем воем от въстока, Памъфир деместик с 40-ми тысящь, Фока же патрекий с Макидоны, Федор же стратилат с Фраки, с ними же и сановьници боярьстии обидоша Русь около. Съвещаша Русь, изидоша въружившеся на Греки, и брани межю ими бывши зъли, одва одолеша Грьци; Русь же възратишася к дружине своей к вечеру, на ночь влезоша в лодью и отбегоша. Феофан же устрете я в лядех со огнем, и пущати нача трубами огнь на лодье Руския, и бысть видети страшно чюдо. Русь же видящи пламянь, вметахуся в воду морьскую, хотяще убрести, и тако прочии възвратишася въсвояси. Темже пришедшим в землю свою, и поведаху кождо своим о бывшем и о лядьнем огни: "якоже молонья", рече "иже на небесех, Грьци имуть у собе, и сию пущающа жежаху нас; сего ради не одолехом им".

『 6449(941)年．イゴリがグレキに向つて進攻した．ボルガルの皇帝に報せを送つたところによれば，一万隻のルシがツアリグラドに向つて進攻しつゝあるという．それらは出発し就し来たり，ヴイファニアの国々を荒しはじめた．しかしてポントに沿つてイラクリイまで，およびフアフロゴニアの地までを荒し，しかしてニコミジアの国全土をおさえ，しかしてスド全部を焼いた．彼等をつかまえ，あるものたちをはりつけにしたり，他のものた

ちを的のように立たせて，彼等に矢を射かけたり，引きだして，うしろ手にしばり，鉄の釘を彼らの頭の中央にうちこんだりした．また多くの聖なる教会に火をかけ，修道院や村々を焼き，（スド）の両側の少からざる財産をうばつた．そののち，東から軍勢が来たつたとき，デメステクのパムフイルが四万人をひきいて，また，パトレキーのフオカがマキドニア（人）をひきいて，また，ストラテラトのフエドルがフラキア人をひきい，また彼等と共に貴族の高官たちもルシをとり囲んだ．ルシは相談して，グレキに対して武装して出撃し，しかして彼らの間には，はげしい戦いがあり，かろうじてグレキが勝つた．一方ルシは夕方近くおのれの親兵団のもとにもどり，夜中に船にのり込んで逃げ去つた．またフエオファンは火をそなえた船に乗つて彼らをむかえた．しかして筒で火をルシの船にはなちはじめた．しかしておそろしい奇蹟がみられた．ところで，ルシは炎をみて逃げようとして海の水の中へとび込んだ．かくして他のものたちはおのれの国へ帰つた．これらのものたちがおのれの国へ到着したとき，各々自分の（身内）に，ありしこと及び船の火について，物語つたものであつた．（彼等が）言うには〃空にあるいなづまのようなものを，グレキはおのれのもとにもつており，しかして，これを放つて我々を焼いたものであつた．このために（我々は）彼等に勝てなかつたのである〃と．』

此処には，伝承による素材以外に，ハマルトルスの年代記の続編と，ギリシアの聖者『新しきヴアシリイ』≪Василий Новый≫の一代記の物語が素材として組み込まれている．伝承からは勿論イゴリというロシアの英雄の名前が取つて来られた．ヴアシリイの一代記にはロシア人の来襲の話が相当詳しく物語られている．この聖者伝≪Житие Василия Новаго≫は少くとも十一世紀前半以前にはルシの言葉に訳されていた．さて，『過ぎし年月の物語』の文章とこの聖者伝の古い訳の文章との相似している個所

は，数多く指摘し得るであろう．例えば，リハチョフは一九五〇年版『過ぎし年月の物語』の註において，そのことにふれている．(p.285～ p.286)．ヴァシリイ一代記の古代ロシア語訳における対応部分を次に引用して見よう．下線の部分は『過ぎし年月の物語』内の言葉と見事に対応する個所である．

Отътоле же прииде весть цареви от тех, яко уже идуть. По неколицех же днехь прииде весть о сих и от болгар, ино по мнозех възвести и корсунский стратиг уже темь явившемся и ту ся им приближившем. И потом приидоша в Стегеру и потом устретшем имь воелодиныя цареви, по глаголу чловека божиа, отгнани быша к реце Риве, и ту в тихости им ставшем выходяаше пленоваху, простершемся до Понта Ираклиа и до Пефлагоньскиа земля и в всю страну Никомидийскую поплениwше и многи язвы сътворивше, пожгоша все Стегерско, яко же рече предварив угодник божий, монастыря же и села вельможь все огневи предаша, имениа не мало обою страну съвокупиша. Потом же пришедшем воем на них от востока, Панфир доместик воинский с четырми десятми тысущьми, Фока патрикей с македоныня, Феодор же святейший стратиг с фракисианы, с ними же и сановницы болюстии иже по прирочному Спогарис, и обыдоша их окрест и не даяху им к тому въсходяще пленовати. И обдержаше их страх и съвещаваху отай побегнути, но бояхуся вой морских, нощную стражю около их имуще. Дрьзнувше же Русь изидоша на греки въоружившеся, и брани межю ими бы-

вши, побежени бывша Русь и биша их греци бежащих дондеже убо възвратишася до дружины своея. И вечеру достигшю, отай влезше в ладиа своа отбегоша. Боя же царевы стоаща в Стегеру и стражем уведавшем бежание их, дондеже всем уведавшем воемь, боле ихь отидоша. Обаче убо достигоша и постигоша их и последнихь и съвокупившемся олядем огнь имущем достигающе ихь пожигааху. И бысть видети страшное чюдо, како боящеся пламене огненаго, волею метааху себе в пучину морску, изволивше паче утонути в водах или попалену быти огнем, но обыче обои погибоша: овии пожжени быша огнем, а друзии сами ся ввергоша в глубину морскую, мняще бродию избежати, друзии от нихь копии прободени быша от грек; ови в пучине утоноша, в друзии от них живи яти быша. И тако скончася от нихь. Болестию же чревною убежавших Руси мановением господним падоша, дондеже доидуть в свояси. Мнози же от нихь на пути изомроша. Тем же пришедшим в землю свою, поведахуть кождо своим о бывшем и о оляднемь огни: "яко молъниа, рече, иже на небесех, греци имуть у себе, сию попущающе жжахуть нас, и сего ради не сдолехомь им".

この古代ロシア語への訳文を日本語に直してしまえば，『過ぎし年月の物語』と余りにも似てしまうであろう．

『ところでその後，それらの者たちから，既に（ルシたち）が来りつゝあるとの知らせが皇帝のもとにとゞいた．ところで数日の後に，これらの者たちについての知らせがボルガルからも来た．

また，多くの日々の後，コルスニの軍司令も，既に彼等が出現し，其処に近づいたことを宣言した．しかしてその後，（ルシたちは）スチエゲラに到着し，しかして，その後，皇帝の船軍を彼等が迎えたとき，神の子の言葉によつて，リヴア河へ追われた．しかして其処で平静にとゞまつていたときに，（彼等は）出撃しては（人々を）捕えたのであつた．イエラクリイの湾にまで，ペフラゴニの地にまでも，来たり，ニコミジイの全国を捕え，多く悪をなし，スチエゲルの沿岸をことごとく焼いた．神の下僕が予言して言つた通りであつた．修道院を，そしてまた貴族の村々を総て火にかけ，両側の財産を少なからず集めた．その後，東方から彼等に対して軍勢が来たつたとき――ドメスチクの将軍パンフイールが四万の軍勢をひきい，バトリキヤのフオカがマケドニヤ人たちをひきい，至尊なる軍司令フヨードルがフラキヤ人たちをひきい，また，彼等と共に貴族の高官たちも共に（来たつたとき）――彼等を取りかこみ，それ以上，彼等が勝手に捕え廻ることを許さなかつた．しかして，彼等は恐怖にとりつかれ，ひそかに逃げる相談をした．然し，海軍をおそれ，夜の警備を彼等のまわりにつけていた．ところで，ルシたちは武装してグレキに対して出撃し，しかして，彼等の間には戦いが起り，ルシは打ち負かされ，しかして，逃げる彼等をグレキは打ち，おのれの親兵団まで（彼等が）もどるまで（追つた）．しかして，夕方が近づく頃，ひそかに（彼等は）おのれの舟に乗り込み，逃げ去つた．ところで皇帝の軍勢はスチエゲラにとゞまり，彼等の逃亡を見張りが知り，総ての軍勢が知つてから，彼等よりも多数で出撃した．さて再び（グレキたちは）追いつき，彼等の後部の者たちをとらえ，火を備えている船が集まり，彼等を捕捉して焼いた．火の炎をおそれて，勝手に海の深みに飛び込むのを見るのはすさまじい光景であつた．水の中に沈み，或は火に焼かれるのをまぬがれたものたちも，然

し多くは共に滅んだ．というのはある者たちは火にやかれ，また他の者たちは歩いてにげようとしておのれ自から海の深みに身を投げ，また彼等のうちの他の者たちはグレキのために槍で突き殺された．あるものは深みでおぼれ死に，また彼等のうちの他のものは生きたまゝ捕えられた．かくして，彼等のものたちは死んだ．腹の病気で逃げたルシのものたちは，おのれの家にたどりつくまでに主の指図によつて倒れた．彼等のうちの多くのものたちは途中で死んだ．ところで彼等がおのれの国へたどりついたとき，それぞれのおのれの（親族たち）に，あつたことに就て，船の火のことについて，物語つて言つた．〃空にある稲妻のようなものをグレキたちがおのれのもとに持つており，これを放つて我々を焼いた．しかして，このために，彼等に勝てなかつた〃と』

この新ヴアシリイ一代記の内容が年代記に移され，『過ぎし年月の物語』という形で定着した時には，その表現が多少ロシア臭く味方びいきになつたことは勿論である．例えば上に引用した文章の内で≪и брани межю ими бывши, побежени : быша Русь и биша их грецы бежащих≫『しかして，彼等の間には戦いがあり，ルシは打ちまかされ，しかして，グレキは逃げる彼等を打つた』という表現は，『過ぎし年月の物語』では≪и брани межю ими бывши зле, одва одолеша греци≫『しかして彼等の間には激しい戦いがあり，グレキはやつと勝つた』となつている．然し，実は，上に引用した新ヴアシリイ一代記の最後の部分 —— 即ち，家郷に帰りついたものたちが，ありしことや船の火の話を仲間に語つたという一節 —— は，古代ロシア語訳本にあるだけで，ビザンチンの原典にはない．おそらくは，訳者が書き加えたものであろうという．（リハチヨフ）．とすれば，その部分と，年代記にみられる『過ぎし年月の物語』のそれに当る部分とは，共に同一の源（おそらくはロシアに伝わつていた伝承）からの書き取りであつたと言い得る

であろう．ともあれ，上に引用した新ヴアシリイ一代記の古代ロシア語の訳文が，『過ぎし年月の物語』の一つの下敷になつていたことは，次の6452(944)年の項からも実証し得るであろう．『過ぎし年月の物語』の記者（編者）は上に引用した一代記の訳文を，二つに分散するかの様に此処でも利用したと思われる．例えば，ゴルスニハがビザンチンの皇帝ロマンに，ルシが攻め来たることを通報する物語や，同じように，『海の深み』≪плубина морьская≫などという言葉が此処にも盛んにみられるからである．一つの条約文を二つに分けたために，その間に，6452(944)年の項として，負け戦の報復戦をイゴリが実行した如くに，此処へ話を創り込んだものなのであろう．おそらくは実際には無かつたこの報復戦の物語は，だから，案外，年代記者の創作であつたかも知れない．むしろ，それよりも，負け戦だけでは納得しなかつたロシアの人々によつて創られた．報復戦の伝承を年代記者が書きとめたのであろう．たゞその際に，用語の主要な部分を，再び，前記の一代記の訳本に求めたものかも知れない．

次にオリガ女帝の物語に移ろう．（各年代記のオリガ女帝に関する記事は総て『古代ロシア研究』才五号に集録した）．イゴリは即ちオリガの夫であつた．彼女が夫のためにあだうちを行う三つの物語は明らかに伝承から取材したものであるが，『過ぎし年月の物語』が，その直後に書き込んだツアリグラード（ビザンチン）行きは，少くとも，その年代（6463年——955年）は，文献を参考にして考えたものであつた．『過ぎし年月の物語』よりも古く，原初の集よりもなお古かつたと思われる最古のロシア年代記（——何処にも既に現存しない——）——が反映した作品であると考えられるヴラジーミル公の『記念と賞讃』≪Память и похвала≫によれば，オリガの死は6477(969)年である．そして，これをキリスト教洗礼後十五年であつたとしているから6462(954)年に彼女は洗礼を受けたことになる．またコンスタ

ンチンの帝国統治論によれば，オリガのビザンチン訪問は6475(957)年であつた．後代のロシアの諸年代記は，これによつてオリガのツアリグラード行きを6475(957)年として，『過ぎし年月の物語』におけるように6463(955)年とはしていない．とすると，少くとも『過ぎし年月の物語』の記者は帝国統治論には準拠しなかつたと考えられる．むしろ，今はなき最古のロシア年代記に拠つて，年の更めを古い九月から十月に移して，その結果，これよりも一年さげて翌年の6463(955)年に決定したのであろう．たゞし，この年号の中に書かれた『過ぎし年月の物語』の記事は，ほとんど伝承であつたであろう．ところが，このオリガが6477(969)年に死去し，埋葬されたことを『過ぎし年月の物語』が書きつけた直後，彼女の功績と栄誉をたゝえる文章が書き加えられている．ところが，この年代よりも46年後の6525(1015)年の冒頭にヴォロジメル公の死を記し続いて，彼を讃美した文章があるが，この両者を比較して見ると面白い相似性を発見するであろう．文体的にも内容的にもこれほど一致する文章は『過ぎし年月の物語』の中には，ほとんど見当らない．共に，おそらくは同一者，或は型通りの同系者による後代の追悼文の一節であつたにちがいない．後代の追悼文であつたために，この両者には盛んに聖書（セプタギンタ）からの引用が盛り込まれているし（——オリガの追悼文に就ては『古代ロシア研究』第五号p.49～p.53に既に訳註をつけ，セプタギンタの原典ギリシア語の部分をも示した．ヴォロジメルのものに就ては，同じく第七号に示される）その上に，内容及び文体の相似性に就ては，先づ，その冒頭の部分から，それを指摘し得るであろう．例えば，オリガの方には『この（司祭）が至幸なるオリガを埋葬したのである．この（オリガ）は太陽の前の朝映えのごとく，また夜明け前の空やけの如くキリスト教の国の先駆者であつた』≪сей похорони блаженую Ольгу. Си бысть предътекущия крестьянь—

стей земли, акы деньница предъ солнцемъ и аки зоря предъ свѣтомъ≫とあるのに対してヴオロジメルの方には『(人々は)彼,至幸なる公を泣きながら埋葬した.これは偉大なるローマの新しいコスチヤンチンである』≪схранища тело его с плачемь, блаженаго князя, Се есть новый Костянтин великого Рима≫とある.また,オリガの方に『この(オリガ)をルシの子らは,先達者としてたゝえているのである……ところで見よ,すべての人々は,永年にわたり肉体の中にある(もの)を見て,たゝえているのである』≪сію бо хвалять Русtie сынове, аки началницю:……Се бо вси человѣци прославляють, видяще лежащая въ тѣлѣ на многа лѣта≫とあるのに対して,ヴオロジメルの方には,≪Сего бо въ память держать Русьстии людье, поминающе святое крещенье, и прославляють≫『ところで,この(者)の記憶をルシの人々はとゞめ,聖なる洗礼を思いつゝ,しかしてたゝえているのである』とある.オリガをエレナにたとえ,ヴオロジメルをコスチヤンチンにたとえたのも同一手法である.ヴオロジメルがオリガのあとをかえりみて,自からも洗礼を受け,ロシアをも洗礼した物語には,明らかに,オリガの先駆的役割が手本として言挙げられていた.そこから考えて見ると,この二つの追悼文は,案外,前後一つゞきのものなのであつたかも知れない.いつの時にか,先王たちを祭る折に一連の長い追悼文が読まれ,その文献的な文書の断片を,年代記者が『過ぎし年月の物語』の969年の項と1015年の項とに分けて書き込んだものとも考えられる.

『過ぎし年月の物語』が伝承にしろ文献にしろ,多数の源から汲み取られて来た作品集であつて,均一な一貫した著作ではないことから,その一項目一項目が,それぞれ他の項目の文献的参考

資料に成り得る可能性もあるのである．その意味では6485(977)年の項の物語は面白い．おそらくは，非常にドラマチックな伝承的物語を題材にしたものであろうが，其処には，兄弟殺しの次の様な物語が読まれるのである．

В лето 6485. Поиде Ярополк на Олга, брата своего, на деревьску землю, и изиде противу его Олег, и вполчитася; ративше́мася полкома, победи Ярополк Ольга. Побегъшю же Ольгу с вои своими в град, рекомый Вручий, бяше гроблю мост ко вратом градным, тесня́чеся друг друга пихаху в гроблю; и спехнуша Ольга с мосту в дебрь, падаху людье мнози, и удавиша кони человеци. И въшед Ярополк в град Ольгов, перея власть его и посла искати брата своего; искавъше его не обретоша, и рече един Деревлянин: "аз видех, яко вчера спехнуша с мосту". И посла Ярополк искат брата, и влачиша трупье из гробли от утра и до полудне, и налезоша и Ольга высподи трупья, внесоша и, и положиша и на ковре. И приде Ярополк, над нем плакася, и рече Свеналду: "вижь сего ты, еже еси котел". И погребоша Ольга на месте у города Вручего, и есть могила его и до сего дне у Вручего.

『ヤロポルクがおのれの弟オレグに向つてジェレヴァの國へ進攻した．しかして，彼に向つてオレグが出撃した．しかして，互いに対峙した．両軍が戦つた時，ヤロポルクがオレグを負かした．オレグがおのれの軍勢と共にヴルチイといわれる町の中へ逃げたとき，堀にかゝつている町の門への橋があつたが，（彼らは）ひ

しめき合つてお互いに堀の中へ突き落し合つた．しかして（人々は）オレグを橋から堀へ押し落した．多くの人々が落ちた．しかして馬が人を圧しつぶした．しかして，ヤロポルクはオレグの町へはいり，彼の権力をうばい，おのれの弟を探すために人をつかわした．彼をさがしたが（人々は）見出せなかつた．しかして一人のジエレヴア人が言つた．〃我は昨日（人々が）橋から（彼を）突き落すのを見た〃と．しかしてヤロポルクは弟を探すために人をつかわした．しかして，（人々は）朝から昼まで堀の中から死体を引き出した．しかして，オレグも死体の下から見つけ出し，彼を（町へ）運びこみ，しかして，彼をじゆうたんの上においた．しかして，ヤロポルクが来たり，彼に涙し，スヴエナルドに言つた．〃汝，これを見よ．これこそ，汝が欲していたことである〃と．しかして（人々は）オレグをヴルチイの町のそばの場所に埋めた．しかして，彼の墓は今日に至るまでもヴルチイのそばにある．（『古代ロシア研究』オ六号，p.3～p.6参照）

面白いというのは，最後の『彼の墓は今日に至るまでもヴルチイのそばにある』という結びの言葉である．『過ぎし年月の物語』の記者が，いつの時代にこの文章を書き込んだものであるかという答えは，実は簡単には出てこないであろう．というのは，『過ぎし年月の物語』が，この項より六十七年後の項に話を進めるとき，既に其処には，実は，もう墓は無くなつていた筈だからである．即ち，6552(1044)年の項には，≪Выгребоша 2 князя Ярополка и Ольга, сына Святославля, и крестиша кости ею, и положиша я в церкви святыя Богородица≫『二人の公，ヤロポルク，及びスヴイヤトスラフの息子オレグを（人々は）掘り起し，彼等（二人）の骨を洗礼し，しかして，人々はそれを聖母教会の中においた』と書かれている．この遺体発掘・洗礼の項がいつの時代に書かれたものかはともかくとして，墓が今日まで町のはずれにあるとする6485(

977）年の項は，少くとも1044年より以前に書かれたものであり，1044年の項は，それよりも後に書かれたものである．単一に見え，或は単一に見せようとした『過ぎし年月の物語』は，この様に，わずか六十七年間の記事を書きつゞける間に，前後の矛盾をおかしてしまつている．洗礼以前の異教的な墓は，発掘・洗礼・移転の後には存続を許されなかつたはずである．少くとも，だから，977年の項と1044年の項とは，書かれた時代が完全にちがう．同一人物が編集したとしたら，全く無神経な編集であつたと言わなければなるまい．もし，そうでなかつたとしたら，前者977年の項は，余りに不要心な伝承採取であつたと言えるかも知れない．

これとは反対に，古い年号のところに書かれている一節を，ほとんどそのまゝ下敷にして，後続の物語の一節を創りあげる場合があつた．この場合には前者が後者の出典的文献をなすものであると考えてよい．例えば，6491（983）年の項で，ヴオロジメルがいまだ洗礼を受けない時，異教の神への犠牲として二人のヴアリヤグの青年を捕えようとし，キリスト教徒であつた二人の青年はそのために殉教したのであつた．この物語の結びの一節に，キリスト教の入り来たつていることを知らなかつた悪霊が，ひそかにそれを喜こんでいたという文章があつた．そして，この文章は，6496（988）年にヴオロジメルが全国を洗礼する物語の折にも亦二つの形で出現しているのである．

即ち，6491（983）年の項には

≪сде же мняшеся окаиьный: яко сде ми есть жилище сде бо не суть апостоли учили≫

6496（988）年の項には

≪сде бо мняхъ жилище имети, яко сде не суть ученья апостольска,≫

とある．即ち，共に，いまだこの地には使徒の教えが流入してい

ないので悪魔は此処が自分の住み家であると考えていたという意味である．

また，6491(983)年の項には

≪не суть то бози, но древо·····грьци и кланяются, иже створил небо и землю, звезды и луну, и солнце, и человека·····≫

とあり，6496(988)年の項には

≪кляняемся богу, иже створил небо и землю, звезды, месяць и всяко дыханье, а бози ваши древо суть≫

とある．共に，異教の神はその像が立つていても，それは像の素材の木に過ぎない．キリスト教の神は，天と地と月と人間（生命）を創り給うたものであるという意味である．

此処は，単に五年間の期間内での記述であるために，矛盾を冒すこともなく，むしろ，反対に，前の文章を，そのまゝ少しもじつただけで五年後の記述にも利用したのであろう．案外，一人の人物が何かに書いたキリスト教流入の物語の一部分が年代記者の手によつて『過ぎし年月の物語』へ抜き取られて来たのかも知れない．そしてそれは，おそらく，6491(983)年の項の物語を形成したものであろう．年代記者は再びその文章の一節を利用して6496(988)年の項の一節を書き足したものだと想像される．

さて，ロシアの文化史上にあつて，キリスト教の輸入は画期的な事件であつた．あらゆる年代記は，このキリスト教の輸入とロシアの洗礼を総てヴラジーミル公（現代語Владимир；古代語ヴオロジメルВолодимер）に結びつけて記録している．然し，実際は一人の英まいな君主だけによつて一挙に行われたはずのものではない．『過ぎし年月の物語』が，それをどれだけ強弁しようとしても，やはり事実には勝てないで馬脚を出さざるを得なかつた．『古代ロシア研究』オ六号及びオ七号には，ヴラジーミル

公に関する総ての年代記の記事を古代ロシア語原文のまゝ集録したが，此処では，イパーチー，ラヴレンチー，トロイツキー各年代記のみによる『過ぎし年月の物語』の問題点を二三とりあげてみよう．

先づ，ヴラジーミル公がスラヴ原始宗教を脱して，新しい宗教をそのおきてと共に摂取しようとするのを聞き伝えて，各地から各宗教・各宗派の伝道者たちが，おのれの宗教を伝えようとして，彼のもとにやつて来る物語が書きとめられている．中でも，6494(986)年の項には，マホメット教を信ずるボルガル，ローマの宗教を信ずるネムツイ(ドイツ)人に続いて，コザルのジド(ユダヤ)人が伝導に来る話が書き取られている．繰返して言うが6494(986)年の出来事として書かれている記事である．さて，このジド(ユダヤ)人に対してヴラジーミル公が尋ねる個所から，『過ぎし年月の物語』の記事を引用しよう．

И рече Володимер" что есть закон вашь?" Они же реша: "обрезатися, свинины не ясти, ни заячины, суботу хранити". Он же рече: "то где есть земля ваша? Они же реша: "в Ерусалиме". Он же рече: "то тамо ли есть?" Они же реша: "разгневася Бог на отци наши, и расточи ны по странам грех ради наших, и предана бысть земля наша Хрестеяном".

『しかして，ヴオロジメルは言つた．〃汝らのおきてはどのようたるものであるか〃と．ところで彼らは言つた．〃割洗をし，豚肉も，うさぎの肉も食べず，安息日を守ることである〃と．ところで彼は言つた．〃それでは汝らの国はどこにあるのか〃と．そこで彼等は言つた．〃エルサリムに〃と．そこで彼は言つた．〃それでは，そこに(今も)あるのか〃と．そこで彼らは言つた．

〃神が我々の父たちに対して怒り給い，しかして我々の罪のゆえに我々を国々に散らし給うた．しかして我々の国はキリスト教徒たちにゆだねられた〃と』（『古代ロシア研究』才六号 p.42～p.43参照）．

キリスト教徒がエルサレムを占めたのは，この記事によれば，6494(986)年以前ということになる．986年に，ユダヤの伝導師がそう語つたのだと『過ぎし年月の物語』が記録しているからである．然し，実際は，エルサレムがキリスト教徒によつて占められたのは最初1099年から1187年の期間であつた．『過ぎし年月の物語』は少くとも十三年以上のサバを読んで，986年の項に既に過去形でこの事実があつたように書きこんでいる．矛盾もはなはだしいと言うべきである．キリスト教徒がエルサレムを初めて占めた1099年以前に，『我々の国はキリスト教徒にゆだねられた』≪предана бысть земля наша Хрестеяном≫などゝ言う言葉が生まれる（——或は古代ロシア語によつて表現される——）はずはない．少くとも，この一節は，1099年以後にヴラジーミル公の記事を豊かにするために強引に組み込まれたものにちがいない．

ヴラジーミル公のもとに最後に来たり，詳しくギリシア正教の教義を説く哲学者≪Философ≫の言葉は，そもそもの世界創造から始まるが，おそらく，これは，昔つて独立した大きな教義作品であつたであろう．勿論，その言葉は旧約聖書に多くの出典を求めることができるが，それだけを実施して事が終つたとして見たところで，実は何の役にも立たないであろう．『過ぎし年月の物語』におけるこの哲学者の言葉は，決して年代記者が直接バイブルから引用しながら構成して書きつけたものではないからである．直接の出典は決してバイブルではなくて他にあつたと思われるからである．出典と言つて悪ければ，『過ぎし年月の物語』の中にまとめ上げるに際して，その記者が用いた参考文献の如きも

のは，直接にバイブルであつたというよりも他の『ロシアの』書物であつた．旧約聖書にもとずく古代ロシアの歴史物語は，既にその頃，僧を中心とする読書人に多く読まれ引用されていた．或は年代記の記述を利用しつゝ，このバイブル的ロシア歴史物語は成長しつゞけていた．バイブル的ロシア歴史物語を一般にパレヤ≪Палея≫と言うが，≪Толковая Палея≫にも，≪Краткая Палея≫にも，『過ぎし年月の物語』の『哲学者の言葉』と対応する平行的文章は実に数多く指摘することができる．≪Палея≫自身も，年代記的作品を利用しつゝ成長していたものだとすれば，大きく成長した≪Толковая Палея≫よりも，骨組み的であつた≪Краткая Палея≫の方が一層古い基盤層をなしていたものであろう．そして，この古い基盤層であつた≪Краткая Палея≫の一節と，『過ぎし年月の物語』の哲学者の言葉ともよく対応するのである．或は，だから，≪Краткая Палея≫と『過ぎし年月の物語』とが，共に，利用した一層古い出典素材があつたのかも知れない．然し，その最も古い出典素材がバイブルであつたと考えるのは余りにも早計である．バイブルよりも，むしろ，アポクリフ及びハマルトルスの年代記に近く準拠していたことは，その内容によつて明らかである．だから，出典は非常に雑多な（――異端的物語をも含めて――）民間の宗教的物語をも含めて考えて置く必要があるであろう．　世界創造から始まる哲学者の言葉は，バイブルに無い，バイブルに矛盾する，或は，バイブルにとつては余計な言葉を数多く組み込んでいるのである．

だから，哲学者の言葉として，長々と『過ぎし年月の物語』に書きとめられた文章は，そのうちのどれがバイブルの文章と対応するかという問題からではなくて，バイブルとの対応から見た時に余計なものとして，はみ出す部分からこそ，カラクリを解く鍵は求められるべきである．バイブルから，はみ出す言葉の点検こ

そ重要である．特に，既に久しく圧殺されてしまつたロシアの古いアポクリフや，異端的物語や民間の宗教的説話などは，今，再び，再構成し難いものだとしたら，――そして，聖書が利用されたとしても，その聖書が今では，これまたその総てを復元し得ないセプタギンタの古代語訳であつた以上，今更，現在各宗派のもつ現代語バイブルを，はかない手がかりにして，出典を其処に求めて見るよりも，其処に求められない個所こそ，一層大切にされなければなるまいし，むしろ，そういう個所にこそ多くの『古代ロシア』を解く鍵は伏在しているはずだからである．

天地創造の四日目に，神は太陽，月，星を創り，『しかして神は天を飾り給うた』≪и украси бог небо≫と書かれているが，この一節は，聖書には求められない．また，『しかしてアダムは楽園にあつて，天使たちがたゝえていた時には神を見，しかして（神を）たたえていた』≪И бѣ Адамъ въ рай, видяше Бога и славяше, егда ангели славяху≫，『しかしてソトナは大地の呪われたことを喜んだ』≪и порадовася Сотона о проклятьи земли≫，『（カインは）彼をいかに殺すべきかを知らなかつた．しかしてソトナは彼に言つた．〃石をとつて彼を打て〃と』≪и не умяше, како убити и; и рече ему Сотона: 〃возми камень и удари и.〃≫などという一節もバイブルには見当らない．これらは，一般にアポクリフと言われているものよりも，もつと庶民化した物語を利用したものであつたと思われる．或は，非常に物語性を豊かにした庶民向け伝導説教の手法からの借用であつたかも知れない．ロシアに持込まれ，読み物となり，庶民向け伝導説教の道具にもなつて，アポクリフは，その周囲に多くの半ば著作的な物語の枝葉を出して行つた．比較的ビザンテン直輸入のアポクリフに近い形で，『哲学者の言葉』（『古代ロシア研究』才六号；p．49～p．94 参照）に組み込まれたものが，アダムとエヴ

ガが，カインによつて殺されたアヴエリを嘆く物語に続いて，このアヴエリの死体が腐らなかつたと語られ，埋葬の仕方を知らなかつた折に，二羽の鳥が飛び来たつて，その内の一羽が死に，他の一羽が穴を掘り，埋葬の仕方をそれとなく人に教えたという物語がある．このような二羽の鳥によるアダムとエヴガへの埋葬手法教授の物語は，明らかに本来的なアポクリフからの借用であつた．

ところがノアの洪水の物語に及んで，神に建造を命ぜられた箱舟の大きさを，『過ぎし年月の物語』は，長さ300ローコチ，巾50，しかして高さ30ローコチとしている．そして，その註釈のように，『というのは，サージエンがローコチと呼ばれているからである』≪ибо локтемъ сажень зовуть≫と述べている．ラヴレンチー年代記以外のイパーチー，トロイツキー，フレブニコフ等の年代記では，そのように『呼んでいる』のはエジプトであるという言葉がつけ加えられている．これは，明らかに，ハマルトルス年代記のエジプトの尺度を解説した個所を利用したものである．ハマルトルス年代記が利用し始められると，『哲学者の言葉』の中でも，その利用はとめどなく拡がつて行くのである．例えば，物語がバベルの塔の建設に及ぶ時にも，その時の長老はネヴロドであつた ——『しかして長老のネヴロドがいた』≪и бѣ старѣшина Невродъ≫ ——と述べられるが，バイブルにはそんな人名などない．バビロンにおける塔の建設などではなくて，バビロンという町の建設者として，また，天文学の創始者として，このネヴロドの伝説的な名前を持ち出しているのは，バイブルなどではなくて，これまたハマルトルスの年代記なのである．

また，塔の建設をくづした神によつて，本来一つであつた人間の言葉が七十二に分けられたという聖書の物語がつづくが，その後に『そこでアダムの言葉はアヴエルからは奪われなかつた．と

いうのは，そのもののみが彼らの愚かしさに加わらずに……』
≪Адамовъ же бысть языкъ не отять у Авера;
ты бо единъ не приложися къ безумью ихъ……≫
とある．ところが，この一節に相当する部分は，聖書にはない．同じくハマルトルスの年代記によつたものである．

ところが，モーゼのくだりに話が移ると，今度は別のものが大いに活用された．例えば，モーゼの幼少の時の物語がそれである．ファラオンの娘に育てられた四才のモーゼが，王にすがりつき，王冠を落すところである．ファラオンの御用学者 ——— 魔法使い ≪волъхвъ≫ ——— が，この不吉な王冠脱離を見て，エジプトがこの者に滅されると予言し，モーゼを殺せと進言する．バイブルにはこのくだりは見当らない．勿論，ハマルトルスにもない．アポクリフにおけるモーゼ一代記の古代ロシア語訳にこの部分がある．即ち，其処には，次の様な物語がみとめられるのである．

三才のモーゼはファラオンに近づいて，その頭から王冠を取り，自分の頭にのせた．これを見ていた神官が後ほど，モーゼを殺すように進言したが，神はその時天使アルハンゲルのガヴリーラを遣わし，ガヴリーラは一人の貴族の形象をもつて王に近づき，宝石と燃える炭を以てモーゼの知恵を試せと説得する．もしも，モーゼが宝石を取るなら，彼は知恵あるものとして，王は危険視する必要があろうが，もしもモーゼが燃えている炭の方にひかれるのなら，生かせておいても別条ないであろうというのである．そして，ガヴリーラはモーゼを炭の方に進ませ，モーゼはそのために燃えている炭を取つて口に入れ，舌をやいたが，実は，そのために，おのれの生命を全うすることができたというのである．

このアポクリフのモーゼ一代記は，つづいて，成人したモーゼが，エヴレイ人をはずかしめているエジプト人を殺し，逃亡して，マジャンの国に来たという記述の直後にも利用された．即ち『過ぎし年月の物語』の『哲学者の言葉』に　次の様にある個所であ

る．

и ходи по пустыни и научися от ангела Гавриила
о бытии всего мира и о первемь человеце, яже
суть была по нем и по потопе, и о смешеньи
язык, аще кто колико лет был, звездное хоженье
и число, землену меру и всему мудрость.

『しかして荒野を歩きまわり，しかして天使ガヴリールから学んだ．――― 全世界のなりたちについて，最初の人間について，彼ののちに，洪水ののちにあつたことについて，言葉の混乱について，だれがどれだけの年月いたか，星の運行と数，土地の測り方およびあらゆる知恵を』

この様に見て来ると，『哲学者の言葉』が如何にもバイブルの要約の如く見えながら，実は，むしろより多くハマルトルスやアポクリフによつていたことが明らかになつて来るであろう．そして，『哲学者の言葉』が，キリスト誕生に移ると，もう其処に新約聖書の台本を求めるよりも，我々は，その論説を当時のロシアのキリスト教教義の精一杯の要約と読み取るべきなのである．教義の精一杯の要約であつたればこそ，年代記者は，其処で『哲学者の言葉』をわざわざ二分して，ヴラジーミル公を登場させ，哲学者に対して，ここぞという時を見はからつて質問させるのである．（これ以下の『過ぎし年月の物語』の記事は『古代ロシア研究』才七号p.1以下参照）．だから『哲学者の言葉』の，新約への移行以後のこの後半の部分には，たとえ，多くの聖書の言葉が引用されていようとも，それはあくまでも引用であつて，本質は，当時の彼等のもつたギリシア正教の最も典型的な教義の心髄なのであつた．一言一句をゆるがせにできないほどにつめられた神学の要約であつた．ロシア十一，十二世紀のギリシア正教の骨組みはこの神学的論義の中にことごとく含まれていた．ギリシアの哲学者がヴラジミル公に布教的に語り聞かせた言葉などではなくて，

僧である年代記者が，最も厳粛にまとめられた信仰哲学を此処に書きとめたものである．文献的なものだと言うのなら，これほど厳粛な，これほど熱つぽい，これほど真剣な文献はなかつたであろう．それが，一本の教義の書物や，神学書にはまとめられず，或は，聖僧の一代記になどには組み込まれず，年代記の中に組みこまれたのは面白い現象である．『過ぎし年月の物語』には，いくつかの熱つぽい頂点がみとめられるが，宗教書としての頂点を此処に求めるとすれば，それは，『哲学者の言葉』の，この後半の部分であろう．即ち，それは次の様なものである．

Рече же Володимер: "то кое время сбыться, и было ли се есть? Еда ли доперво хощеть быти се?" Он же ответав рече ему:

"Якоже преже сбыться все, егда Бог воплотися. Якоже бо преже рекох, Жидом пророки избивающим, царем их законы преступающим, предасть я в расхищенье, и в плен ведени быша во Осурию, грехь их ради, и работаша тамо лет 70; и посем възратишася в землю свою, и не бе у них царя, но архиереи обладаху ими до Ирода иноплеменьника, иже облада ими. В сего же власть, в лето 5500, послан бысть Гавриил в Назареф к девице Марии, от колена Давыдова, рещи ей: радуйся, обрадованая, Господь с тобою. И от слова сего зачат Слово Божье в утробе, и породи сына, нарече имя ему Исус. И се волъсви придоша от въстока, глаголюще: кде есть рожийся царь жидовеск? Видехом бо звезду его на въстоце и придохим поклонитися ему. Услышав же се царь Ирод, смятеся, и весь Ерусалим с ним; призван книжники и старци людьския, и въпраша их: кде Христос ражается? Они же

реша ему: в Вифлеоме жидовьстем. Ирод же се слышав, посла, рек: избийте младенца, сущая 2 лет. Они же шедше, избиша младенца. Марья же убоявшися съкры отроча; Иосиф же с Марьею, поим отроча, бежа в Еюпет и бысть до умертвия Иродова. В Еюпте же явися ангел Иосифу, глаголя: въстав пойми отроча и матерь его, иди в землю Израилеву. Пришедъшю же ему, вселися в Назареф. Възрастъшю же ему и бывшю 30, нача чюдеса творити и проповедати царство небесное, и избра 12, яже ученик собе нарече; и нача чюдеса велика творити, мертвыя въскрещати, прокаженыя очищати, хромыя ходити, слепым прозренье творити, и ина многа чюдеса велья, якоже быша пророци прорекли о нем, глаголюще: то недуги наша ицели, и болезни подъя. И крестися в Ердане от Иоана, показа новым людем обновленье. Крестившю же ся ему, и се отверзошася небеса, и Дух сходящь зраком голубиным на нь, и глас глаголя: се есть Сын мой възлюбленый, о нем же благоизволих. Посылаша ученики своя проповедати царство небесное, покалнье в оставленье грехов; хотя исполнити пророчество, и нача проповедати, яко подобаеть сыну человечьскому пострадати, распяху быти и в третий день воскруснути. Учащю же ему в церкви, архиереи, книжници исполнишася зависти, искаху убити и, и имъше и, ведоша к гемону Пилату. Пилат же испытав, яко без вины приведоша и, хоте испустити и; они же реша ему: аще сего пустиши, не имаши быти друг кесареви. Пилат же повеле, да и распнуть. Они же поимше

Исуса, ведоша на место Красньево, распяша и ту: бысть тьма по всей земли от 6-го часа до 9-го, и при десятом часе испусти дух Исус, церковная запона раздрася надвое, мертвии всташа мнози, им же повеле в рай ити. Сънемше и со креста, положиша и в гробе и печатьми запечатьлеша гроб люди Жидовьстии, стражи поставиша, рькуще: еда украдуть и ученици его. Он же в 3-й день воскресе; явися учеником воскрес из мертвых, рек им: идете во вся языки, и научите вся страны крещенью во имя Отца и Сына и святаго Духа. Пребысть с ними 40 дний, являяся им по воскресеньи. Егда исполнися 40 дний, повеле им ити в гору Елевоньскую, и ту явися им, благословив я, и рече им: сядете в граде Ерусалиме, дондеже послю обетованье Отца моего. И се рек, възношашеся на небо; они же поклонишася ему, възратишася в Ерусалим, и бяху воину в церкви. Егда кончашася днье 5 ---- десятьнии, сниде Дух святый на апостолы; приимше обеванье святаго Духа, разидошася по вселеней, учаще и крестяще водою".

Рече же Володимер: "Что ради от жены родися, и на древе распятся, и водою крестися?" Он же рече ему:

"сего ради, понеже испервa род человечьскый женою съгреши, дьявол прельсти Евгою Адама и отпаде рая, такоже и Бог отместье дая дьяволу: женою первою побеженье бысть дьяволу, женою бо первое испаде Адам из рая, от жены же воплотився Бог повеле в раи внити верным. А еже на древе рас-

пяту быти; сего ради яко от древа вкусь, и испаде породы: Бог же на древе страсть прия, да древом дьявол побежен будет, и от древа животнаго приимуть праведнии. А еже водою обновленье; понеже при Ное умножившемъся грехом в человецех, наведе Бог потоп на землю, и потопи человеки водою. Сего ради рече Бог: понеже погубих водою человеки грех их ради, ныне же паки водою очишю грехи человеком, обновленьем водою. Ибо жидовьский род в мори очиститься от Еюпеть-скаго злаго нрава, понеже вода из начала бысть первое; рече бо: Дух Божий ношашеся верху воды. Еже бо и ныне крестяться водою и духом. Преображенье бысть первое водою, якоже Гедивон преобрази посем. Егда приде к нему ангел, веля ему ити на Мадимьян; он же искушая рече к Богу, вложив руно на гумне, рек; аще будеть по всей земли роса; а на руне суща, и бысть тако. Се же прообрази, яко иностраньни беша преже суща, а Жидове руно, после же на странах роса, еже есть святое крещенье, а на Жидех суща. И пророци проповедаша, яко водою обновленье будеть. А Апостолом же учащем по вселеней веровати Богу, их же ученье мы Грьци переяхом; вселеная веруеть ученью их. Поставил же есть Бог един день, в не же хощеть судити, пришед с небесе, живым и мертвым, и въздати комужждо по делом его: праведным царство небесное, и красоту неизчереньну, веселье без конца, и не умирати в веки, грешником мука огнена, и червь неусыпаяй, и муце не будеть конца. Сица же бу-

дуть мученья, иже не веруеть к Богу нашему Исусу Христу; мучими будуть в огни, иже ся не крестить".

『ところで，ヴオロジメルは言つた．〃このことはいつ起つたか？　しかして，これはあつたことなのか？　或はまた，これは今や実現しようとしているのか？〃と．そこで彼（哲学者）は答えて彼に言つた．

〃以前，即ち神が受肉し給うた時，すべては実現した．というのは，以前に（我が）言つたように，ジドたちが予言者たちを殺し，彼等の皇帝たちがおきてをおかした時に，（神は）彼等を略奪にまかせ給い，しかして彼等の罪の故に（彼等は）オスリヤへ捕虜として連れて行かれ，しかして，其処で七十年間奴隷であつた．しかして，この後（彼等は）おのれの国にもどつた．しかして彼等には皇帝がなく，彼等を支配した異種族のイロドまで，祭司長が彼等を支配していた．この者が支配していたとき，5500年にガヴリールがダビドの子孫である処女マリヤのいるナザレフへ遣わされて彼女に言つた．〃よろこべ．喜ばされた女よ．主は汝と共にいます〃と．しかして，この言葉によつて，神の言葉が体内に宿つた．しかして，（マリヤは）息子を生み，彼の名をイススと名づけた．　しかして見よ，占師たちが東方から来たつて言つた．〃ジドの皇帝として生まれ給える者は，いづれにありや？というのは，東方に彼の星を（我々は）見たので，彼を拝せんとして来たつたのである〃と．ところで，これをイロド帝がきいて，なやんだ．しかしてエルサリム全体も彼と共に．　学者たち及び人々の長老たちをよびよせ，しかして，彼等にたづねた．〃どこにフリストが生まれたのか？〃と．　そこで彼等は彼に言つた．〃ジドのヴイフレヴオムに〃と．　ところで，これを聞いてイロドは使者をつかわして言つた．〃二才である子供を皆殺しにせよ〃と．ところで彼等（使者たち）は来たり，子供を皆殺しにした．ところで，マリヤはおそれて，子供をかくした．ところでヨシフ

はマリヤと共に子供を連れ，エヂプトへのがれ，しかしてイロドの死まで（そこに）いた．ところでエヂプトにおいてヨシフに天使が現れて言つた．〃立つて子供およびその母を連れてイスライリの国へ行け〃と．ところで，彼が来たつた時，（彼は）ナザレフに住みついた．ところで彼が成長し，しかして三十才になつたとき，奇跡を行い，天国を教えのべはじめた．しかして，十二人をえらび，彼等をおのれの弟子とよんだ．しかして，大いなる奇跡を行いはじめ，死せる者たちをよみがえらせ，ライを病めるものたちを清め，足なえを歩ませ，盲人たちの目をひらかせ，しかして他の多くの大いなる奇跡を（行いはじめた）．ちようど，予言者たちが彼について予言して言つていたように．〃そうすれば我々の病を治し給い，しかして患いを引き受け給うであろう〃と．しかして（イエスは）エルダン（河）でイヨアンから洗礼を受け給い，新しき人々に悔い更めを示した．彼が洗礼を受けた時，しかして見よ，天は開き，しかして御霊が彼の上へハトの姿でおり来たり，しかして，声が言つた．〃これが我が愛する子である．彼について（我は）よろこんだ〃．と．（イエスは）天国をのべつたえ，罪をまぬがれるために悔い更めることを（のべつたえる）ために（各方面に），おのれの弟子たちを派遣した．予言を実現することを欲し給い，しかして，人の子は苦しみを受け，はりつけになり，しかして，三日目に復活すべきはずのものであるとのべた．ところで彼がつどいの中で教えていた時，祭司長たち，学者たちは憎しみに満ち，彼を殺すためにさがしていた．しかして，彼をとらえ，総督ピラトのもとへ連れ来たつた．ところでピラトは，（人々が）彼を罪なくして連れ来たつたことを知つて，彼を放免しようと欲した．ところで彼等は彼に言つた．〃もしも汝がこの者を放免すれば，皇帝の友であることはできないであろう〃と．ところで，彼をはりつけにするようにピラトは命じた．ところで彼等はイエスを連れてクラニの場所へつれて行き，そこ

で彼をはりつけにした．六刻（十二時）から九刻（三時）まで地上全体が闇になつた．しかして九刻（三時）にイススは息絶え給うた．聖処の幕は二つに裂け，死者たちの多くが生きかえり，（神は）彼等に楽園へ行くことを命じ給うた．ジドの人々は彼（キリスト）を十字架からおろし，彼を墓におき，墓を封印を以て封じ，見張りをたてゝ言つた．〃そうでないと，彼の弟子たちが彼をぬすみ去るであろう〃と．ところで彼は三日目に復活し給うた．（キリストは）弟子たちに死人の中よりよみがえつて現れ給い，彼等に言い給うた．〃すべての国民たちの中へ行き，父と子と聖霊の名によつて，すべての国々に洗礼を以て教えよ〃と．（キリストは）復活の後，彼等に現れ給いて四十日間彼等と共に居給うた．四十日がみちた時，（彼は）オレヴオンの山へ行くように彼等に命じ給い，しかして，そこで彼等に現れ給い，彼等を祝福して彼等に言い給うた．〃わが父の約束を（我が）おくるまで，エルサリムの町にとゞまれ〃と．しかして，天に昇りながらかく言い給うた．　ところで彼等は彼を礼拝し，エルサリムにもどつた．しかして常に集りをもつていた．五十日が終つた時，聖霊は使徒たちの上におりた．聖霊の約束を受け入れて（人々は）世界に散り，教え，しかして水を以て洗礼をほどこした〃．

そこでヴオロジメルは言つた．〃何故に（神は）女から生まれ，しかして木の上ではりつけにされ，しかして水で以て洗礼を受けたのか？〃と．　ところで彼（哲学者）は彼（ヴオロジメル）に言つた．

〃この故に．――　何故なら古より太初に人類は女によつて罪をおかした．悪魔がエヴガによつてアダムをまどわし，しかして（人類は）楽園を失つた．かくして神は悪魔に復しゅうをなし給うた．最初の女によつて悪魔には勝利があつた．というのは，女によつて，はじめにアダムが楽園から落ち，また，女から神は肉体を以て現れ給い，信ずる者たちに楽園へ入るように命じ給う

たからである．ところで，木の上ではりつけられたことについては―― 木からの（実）を食べたので天国からおちた，ところで神は木の上で苦しみを受け給うた，悪魔が木によつて打ちまかされ，しかして生命の木から正しきものたちが（実を）とらんがために．ところで，水による再生については．―― 何故ならノエの時に人間たちの中に罪がふえたので神は洪水を地上におこし給い，しかして人間たちを水で沈め給うた．この故に神は言い給うた．〃人間たちを彼等の罪の故に（我は）水で亡ぼしたので，今や，再び水による再生で以て人間たちの罪を清めよう〃と．何となればジドの種族は海の中でエユペトの悪い習慣から清められた．というのは先づ最初からあつたのだから．というのは次の様に言われているからである．〃神の霊は水の上をたゞよつていた〃と．その故に今もまた（人々は）水と精霊によつて洗礼を受けているからである．変貌が先づ水によつて行われた．ゲジヴオンが次の様な形で変貌した時に．彼のもとに天使がやつて来て，彼にマジミヤンへ行くことを命じた時，彼はためして神に向つて言い，羊毛を穀物小屋の上において言つた．〃もしもこの地上全体につゆがおりて，なお羊毛の上は乾いていたら〃と．しかしてその様になつた．これは次のことの前兆になつた．即ち以前には外国の乾いた場所が，そしてジドの羊毛があつたが，その後には聖なる洗礼である露が国々におり，ジドたちの上には乾きがあつた．しかして水による再生が行われることを予言者たちは予言した．ところで神を信ずるように，この世界中に使徒たちが教えていた時に，彼等の教えを我々グレキたちが摂取した．全世界は彼等の教えを信じている．ところで，神は或る一日の日を定め給うた．その日に，（神は）天より来たり，生けるものたちにも，死せる者たちにも，裁きをなし，しかして各々にその行いによつてむくい給うであろう．正しきものたちには天国及び言い難き美しさ，終りなきたのしさを，しかして，永遠に死なざることを．罪人たちには

火の苦しみが，ねむることなきうじ虫が，しかして，苦しみには終りがないであろう．神なる我々のイスス・フリストを信じないもの（には）この様な苦しみがあろう．洗礼を受けざるものは，火の中で苦しめられるであろう』と．

年代記者は，此処でヴラジーミル公をコルスニへ出撃させ，ビザンチンの皇女を妻に迎えさせて（——これはベチョラ河河口近くの古い伝承によつたものであろう——）洗礼を受けさせる．その様な一つの物語を織り込んだ後，再び，洗礼に際してビザンチンの人から彼が説教を受けた言葉として，年代記者は再び長々と信仰論を展開する．その前半の三位一体論を兼ねた信仰象徴論は，よく似た形で1073年のスヴイヤトスラブ《Святослав》の文集にも見られる通り，一つの独立した神学論文であつたものが此処へ持ち込まれたものであるにちがいない．それは次の様な内容のものである（古代ロシア語の原文は省略しよう；『古代ロシア研究』才七号参照）．

『全能なる父，天及び地の創造者なる唯一の神を（我は）信ずる．永遠にこの信仰を（信ずる）．しかして，また，（人によつて）生み出されたものではない父なる唯一の神及び（人によつて）生み出された唯一の子，（父に）発する唯一の聖霊を（我は）信ずる．三つの位は完全なもので，精神的なものであり，本質の数によつて分けられるものであつて，神の（数）によつて（分けられる）のではない．というのは分かち難く分かたれていて，混合することなしに統一されているからである．父即ち父なる神は永遠なるものにして，父の位にあり，（人によつて）生み出されたものではなくて，初めなきものであり，あらゆるものの始めであり原因であり，（人によつて）生み出されるものではないということのみによつて，これは子及び聖霊よりも古い．ところで彼（父）から，すべての時よりも以前に子が生まれ，聖霊は時及び肉体なしに発している．父も，子も，聖霊も，共にあるものである．子

は父に同様なものである．生み出されるということによつてのみ，父と聖霊とから区別されるものである．霊は至聖なるものであり，父と子に同様なものであり，永遠なるものである．というのは父には父の位が，ところで子には子の位が，また霊には発出がある．というのは父は子を或は霊をおかすことなく，子も父及び聖霊を，しかして霊は子或は父を（おかすことはない）．各本質は不動なるものである．三つの神ではなくて，一つの神である．その神によつて唯一の神性が三つの位において（現れるのである）．ところで，父及び霊の，おのれの創造物を救わんとする望みによつて（神が）父のふところというそのものから離れずに天下り，しかして処女のけがれなきふしどに神の種として入り，霊化された．そして言葉のある，しかして賢明な，以前にはなかつた肉体を摂り，肉体化されて神が出で来たり，説明し難く生まれ給い，聖母の処女性を永遠に守り給うたのである．融合も混合も変化も受けずに，ありしまゝにとゞまり，かつて無かつたものになつた．空想としてではなくて，真実のものとして奴隷の形をとり，罪を除いては，あらゆる点で我々に似たものであつた．というのは，（神の）みこゝろによつて生まれ，みこゝろによつて飢え，みこゝろによつて渇き，みこゝろによつて悲しみ，みこゝろによつておそれ，みこゝろによつて死んだのである．空想としてではなくて，真実のものとしてである．すべてのものは必然的であり，非難されるべきはずのない人類の受難なのである．十字架にかゝつて罪もないのに死（の味）を味わい，おのれの肉体において復活し，腐敗をみずに天にのぼり，父の右手に坐し給うた．ところで再び栄光と共に生けるもの及び死せる者を裁きに来たり給うであろう．栄光及び肉体と共に（天に）のぼり給うた如くに，天下り給うであろう．かくて，（我は）水と霊による唯一の洗礼を奉じ，いと清き聖餐を受け，真に肉と血を信じ，教会の教えを受け入れ，しかして聖なる聖像に礼拝し，聖なる木及びあらゆる十字架，聖な

る遺体及び聖なる器に礼拝するものである』．

年代記者はこの論文の組み入れに続いて，今度は間に物語を入れず，直接別の文章を継ぎ足して来るのである．それは才一回世界宗教会議が318人の人々によつてニキヤで開かれ，アリイを呪つたことにはじまり，順を追つて才七回世界宗教会議の出席者数と目的と内容を簡略に述べて行く文章である．然もこれは次に一続きになつて，ローマ・カソリックに対す批判の文章をなしている．年代記者が，ヴラジーミル公が洗礼を受けた時に受けた説教のように見せかけてみても，それは決して988年（この論文の組み込まれている『過ぎし年月の物語』の年号—— 6496年）ではなくて東西教会の分裂後にしか現れなかつた内容であり，文章であるはずである．おそらく，十一世紀末か十二世紀初頭の文章を988年のヴラジーミル公にことよせて無神経に此処に組み込んだものであろう．才七回世界宗教会議にちなんでこの論説が生まれたにしても，決して十世紀などには考え出される文章内容ではない．その文章とは次の様なものである．

Не преимай же ученья от Латын, их же ученье развращено; влезъте бо в церковь, не поклонятся иконам, но стоя поклонится, и поклонився напишеть крест на земли и целуеть, въстав прост станеть на нем гогами; да лег целуеть, а встав попираеть. Сего бо апостоли не предаша; предали бо суть апостоли крест поставлен целовать, и иконы предаша. Лука бо еуангелист первое написав посла в Рим, якоже глаголеть Василий; икона на первый образ приходить. Паки же и землю глаголють материю. Да аще им есть земля мати, то отець им есть небо, искони бо створи Бог небо, таже землю; тако глаголють: Отче нашь, иже еси на небеси. Аще

ли по сих разуму земля есть мати, то почто плюете на матерь свою, да семо ю лобъзаете, и паки оскверняете? Сего же преже Римляне не твориху, но исправляху на всех сборех, сходящеся от Рима и от всех престол. На первом бо сборе, еже на Арья в Никеи, от Рима Силевестр посла епископы и презвутеры, от Олександрея Офонаси, от Царягорода Митрофан посла епископы от себе; тако исправляху веру. На втором же сборе от Рима Дамас, а от Олександрия Тимофей, от Ентиохия Мелетий, Курил Ерусалимьскый, Григорий Богословець. На третьем же сборе Клестин Римьский, Курил Олександрьский, Увеналий Ерусалимьский. На четвертом же сборе Левонтий Римьский, Анасталий Царягорода, Увеналий Ерусалимьский. На пятом сборе Римьский Вигилий, Автухи Царягорода, Анолинарий Олександрьский, Домнин Антиахъский. На 6-м сборе от Рима Агафон, Георгий Царягорода, Феофан Антиохьский, от Олександра Петр мних. На 7-м сборе Оньдреян от Рима, Тарасий Царяграда, Политиан Олександрьский, Федорит Антиохьский, Илья Ерусалимьский. И си вси с своими епископы сходящеся исправляху. По сем же сборе Петр Гугнивый со имени шед в Рим и престол въсхватив, и разъврати веру, отвергъся от престола Ярусалимьска, и Олександрьскаго, Царяграда и Онтиахийскаго. Възмутиша Италию всю, сеюще ученье свое разно: ови бо попове единою женою оженевся служать, а друзии до семый жены поимаючи служать. Их же блюстися ученья: пращають же грехи на дару, еже есть злее

всего. Бог да схранить тя от сего.

『ラトウイニから教えを受けるなかれ，彼等の教えは道にはづれている．というのは（彼等は）教会に入つて，聖像に礼拝せず，立つたまゝ礼拝する．しかして，礼拝して地上に十字を書き，接吻し，立上つてその十字の上に平気で立つているからである．然もまた伏して接吻し，しかして立ち上つてふみつけている．というのは，このようなことを使徒たちは教えなかつた．というのは，使徒たちは，置かれた十字架を接吻するように教えつたえ，しかして，聖像をつたえたのであるから．というのはヴアシリイの言うところによれば，福音をつたえたルカは（聖像を）はじめて書いてリム（ローマ）に送つたのであるから．（その）聖像はもとの姿に似ている．また大地をも（人々は）母と呼んでいる．ところで，もしも彼等にとつて，大地が母であるならば，その時は彼等にとつて父は天である．というのは太初に神は天を創りたまい，しかして，大地をも（創り給うたのである），（人々は）次の様に言つている．〃天にまします我等の父よ〃と．　もしも，これらの者たちの理解するところによつて大地が母であるならば何故に（汝等は）おのれの母の上へつばをはき，更にそれを口づけし，しかしてまたけがしているのか？　この様なことを以前にはリム人たちは為してはいなかつた．しかして，リムから及びすべての総主教の座から（人々が）集り来たり，総ての総会議において（人々は）訂正したものであつた．アリイに対してニケヤで行われた最初の総会議で，リムからシレヴエストルが主教たち，および，長老たちを送り，オレクサンドレイからはオフオナシイが，ツアリゴロドからはミトロフアンが，おのれのもとから主教たちを送つた．かくして信仰を正して来たのである．二度目の総会議では，リムからダマスクが，しかして，オレクサンドレイからはチモフエイが，アンチオヒイからはメレチイ，エルサレムのクリル，神学者のグリゴリイが．　ところで三回目の総会議ではリムのケレス

チンが，オレクサンドリイのクリルが，エルサレムのウヴエナリイが．才四回目の総会議ではリムのレヴォンチイ，ツアリゴロドのアナタリイ，エルサレムのウヴエナリイが．　才五回目の総会議ではリムのヴイギリイ，ツアリゴロドのエクトウヒイ，オレクサンドリイのアポリナリイ，アンチオフのドムニンが．才六回目の総会議ではリムからアガフオンが，ツアリゴロドのゲオルギー，アンチオフのフエオフアンが，オレクサンドリイからは僧のペトルが．　才七回目の総会議ではリムからオニドレアン，ツアリグラドのタラシイ，オレクサンドリイのポリチアン，アンチオフのフエドリト，エルサレムのイリヤが．　しかして，これら総てのものたちが，おのれの主教たちと共に集つて（教えを）正したのであつた．ところで，この総会議の後に口下手のペトルが他の者たちと共にリムに行き，しかして教皇々座を取り，信仰をゆがめ，エルサレムの，及びツアリゴロドの，及びアンチオフの，およびオレクサンドリイの坐からはづされた．イタリヤ全土を混乱させ，おのれの教えを様々に布教した．というのは，あるものたちは，おのれの妻をめとつて（神に）仕え，また別のものたちは七人目の妻までめとり（神に）仕えている．ところで，彼等の教えを用心すべきである．（彼等は）罪を贈物によつて許している．その様なことは，あらゆるものよりも悪いことである．神が汝をかゝることから守り給うように〃と．』

この文章は，引用した直前に十数行の文章が組みこまれ，其処では，才一回から才七回に至る宗教総会議の出席者数とそれぞれの目的とが書きとられている．全部を含めて，この引用文の後半の僧たちの名前と合わせて，この文章は半ば宗教総会議の略記をも勤めるような文章であつた．ビザンチンから伝つて，古いロシアの教会で訳され書きとめられた文献と神学文との折半的な組み込みであつたと思われる．この様にヴオロジメルにちなんで，一挙に古いロシアのギリシア正教の教義を書きつけた以上，年代記

者は，いきおい，この個所で，その教義のありつたけを書きつけてしまいたくなつたものの様に思われる．ヴラジミル公にまつわる多くの伝承（―― 妻をめとり，ロシア全土を洗礼し，ペンル（ロシア原始宗教の主神）の像を河に流し，教会を建て，貴族の子弟に書物を教え，等々）を組み込みながら，盛んにその行間に，聖書の言葉と共に，おそらくは，もつと後代に創られた教義的言説を織り込んだのである．かくして，6500（988）年の項は埋めつくされる結果となつた．勿論，ヴオロジメル（ヴラジーミル）公に関する伝承は，教義のツマにするよりも多く豊かであつた．年代記者は，その内から6497（989）年，6499（991）年の項にみられる教会建設と町の建設を汲みあげて定着させ，つゞいて，その後の年号に及び，彼の軍事行動の物語を書きつけた．そのヴラジーミル公が歿する頃には，ロシアには充分ギリシア正教の教義も勤行形成も板につく頃であつたにちがいない．それを利用して，年代記者はヴラジミル公の死んだ年に設定された6523（1015）年に，独立したヴラジミル公への宗教的讃美の言葉を書きつけたのである．この一節は非常に後代になつてから，ヴラジミル記念祭のような折に書かれ，読まれた文章を此処へあてはめたもののように思われる．このヴラジミル公讃美の文章に年代記者が如何に手を加えて見ても，アレクサンドル・ネフスキー≪Александр Невский≫によつて1240年にノヴゴロドでヴラジミル記念祭が挙行されるまで，これほどの追悼名文が生まれて，読みさゝげられる筈はなかつたし，ヴラジミル公を聖者だとする考えが，彼の死の直後からあつたわけでもない．ロシアの聖者たちの仲間へヴラジミル公が教え入れられたのはイパーチー年代記≪Ипатьевская летопись≫によれば1254年にもなつてからであつた．巨大な政治家や軍事的支配者（―― アレクサンドル・ネフスキーの様な ―― ）によつて国家的行事として記念祭が行われる以前に，教会の僧たちの内部で，時にヴラジミル公への讃

美の文章が勤行的に創られて読まれていたとしても，おそらくは，それとてもまたそれほど古いことではなかつたであろう．少くとも，十二世紀末以前には，こんな文章はあり得なかつた．それ以後に『過ぎし年月の物語』の中へこの一節が一人の年代記者によつて組み込まれたものであろう．その一節とは，次の様なものである．

Се есть новый Костянтин великого Рима, иже крестив ся сам и люди своя: тако и съ створи подобно ему. Аще бо бе и преже на скверньную желая, но послеже прилежа к покаянью, якоже Апостол вещаеть: идеже умножиться грех, ту изобильствуеть благодать. Аще бо преже в невежьстве етера быша сгрешения, последи же разсыпашася покаяньем и милостынями. Якоже глаголеть: в чем тя застану, в том ти и сужю. Якоже Пророк глаголеть: жив аз Аданаи Господь, якоже не хощю смерти грешника, но якоже обратитися ему от пути своего и живу быти; обращением обратитеся от пути своего злаго. Мнози бо праведнии творяще и по правде живуще, к смерти совращаються праваго пути и погыбають; а друзии развращено пребывають, и к смерти въспомянуться, и покаяньем добрым очистять грехы. Якоже Пророк глаголеть: праведный не возможе спастися в день греха его. Егда реку праведному: жив будеши, съи же уповаеть правдою своею, и сотворить безаконье, вся правда его не въспомянеться в неправде его, юже створи, и в ней умреть; и егда реку нечестивому. Смертию умреши, ти обратитьоя от пути своего и створить суд и

правду, и заим суд лъжю отдаеть, и въсхищение възвратить, вси греси его, яже сгрешил есть, не помянуться, яко суд и правду створил есть, и жив будеть в них; комужьдо вас сужю по пути его, доме Израилев! Съи же умер во исповедании добрем, покаяньем разсыпа грехы своя, милостынями, иже есть паче всего добрый. Милости бо хощю, рече, а не жарьтве. Милостыня бо есть всего луче и вышьше, възводящи до самого небеси пред Бог. Якоже ангел Корнильеви рече: молитвы твоя и милостыня твоя взиидоша в память пред Богом. Дивно же есть се, колико добра створил Русьстей земли, крестив ю. Мы же, хрестьяне суще, не въздаем почестья противу оного възданью. Аще бо он не крестил бы нас, то ныне были быхом в прелсти дьяволи, якоже и прародители наши погыбнуша. Да аще быхом имели потщанье и мольбы приносли Богу за нь, в день преставленья его, и видя бы Бог тщанье наше к нему, прославил бы и: нам бо достоить за нь Бога молити, понеже тем Бога познахом. Но дажь ти Господь по сердцю твоему, и вся прошенья твоя исполни, его же желаше царства небеснаго: дажь ти Господь венець с праведными, в пищи райстей веселье и ликъствованье с Аврамом и с прочими патриархы; якоже Соломон рече: умершю мужю праведну, не погыбаеть упованье. Сего бо в память держать Русьстии людье, поминающе святое крещенье, и прославляють Бога в молитвах и в песнех и в псалмех, поюще Господеви новии людье, просвещени святым Духом, чающе надежи великаго Бога и Спаса нашего Исуса

Христа, въздати комуждо противу трудом, неизреченьную радость, юже буди улучити всем христьяном.

「これは，おのれ自から及びおのれの民たちを洗礼した偉大なるローマの新しいコスチヤンチンである．そのように，この者もまた，彼に同じく為したのであるから．というのは，（この者は）もしも以前に，みにくい慾望に心を向けていたとしても，然し，後程には悔悟にはげんだのである．使徒がつたえている如くに．罪の増すところには，めぐみもいや増すのである（新訳；ロマ書；才五章二十節後半……筆者註）と．（これ以下はイバーチー年代記，フレブニコナ年代記のみに読み取られる文章である……筆者註）．というのは，もしも以前に多少文盲であつたために罪をおかしていたにしても，ところが後程には悔悟とめぐみによつて（その罪は）四散したのである．（我が）汝に行きつくところにおいて（我は）汝を裁くであろうと言われている如くである．また予言者が次の様に言つている如くである．主アダナイは（言い給う）我は生きている．（我は）悪人の死ぬのを欲しない．然し，彼（悪人）がおのれの道から離れることを（欲している）．また（彼が）生きることを（欲している）と．（エゼキエル書；才三十三章，十一節前半……筆者註）というのは，多くの正しきことをなしながら，しかして，義によつて生きながら，（人々は）正しき道より（それて）死へ変り，しかしてほろびているのである．ところで他の者たちは間違つた生き方をし，しかして死への迷いがさめ，しかして，よき悔悟によつて罪を清めているのである．予言者が次の様に言つている如くである．正しきものは，彼（正しきもの）の罪の日に救われることはできない（エゼキエル書；才三十三章；十二節後半……筆者註）．（我が）正しきものに，（汝は）生きるであろうと言う時，この者（正しき者）がおのれの正しさをたのんで，しかして不法をなすならば，

彼の総ての正しさは，（彼が）なした彼の不正において忘れられ，しかして（彼は）その不正において死ぬであろう．（エゼキエル書；才三十三章；十三節・・・・・筆者註）しかして（我が）悪人に，（汝は）死ぬであろうと言う時（にも），その者がおのれの道から離れ，罪をみとめ正義をなし，しかして，いつわりをわきまえて（質物・・・・・バイブル・・・・・筆者註）もとへもどし，しかして，うばいしものをもどすなら，おかしてしまつた彼の罪は総て，ことあげされないであろうし，公道と正義を（彼が）行つていたのなら，それらの中において彼は生きるであろう．（エゼキエル書；才三十三章；十四節から十六節・・・・・筆者註）．イズライルの家よ，（我は）その道によつて汝等の各々を裁くであろうと．ところで，この者（ヴオロジメル）は，良き信仰の内に死んだ．おのれの罪を悔悟によつて，また総てにましていた情け深さによつて，四散したのである．というのは，情け深さは総てよりも良く，高く，神の御前の天そのものまでも（人を）みちびきあげるものであるからである．天使がコルニリに次の如く言つたように．汝の祈りと，汝の情け深さが神の御前に記念されるべく昇つたと．（・・・・此処までの文章はイバーチー，フレブニコフの各本以外には無い・・・筆者註）彼（ヴオロジメル）がルシの国を洗礼し，ルシの国に如何ほどの善をなしたかということは，おどろくべきことなのである．ところで，我々は，キリスト教徒として，彼の事業にふさわしいほどの賞讃を行い得るものではない．というのは，もしも彼が我々を洗礼しなかつたとしたら，（我々は）今，我々の先祖たちがほろんだような悪魔のかどわかしの中にいたことであろう．なおまたもしも（我々が）彼のために彼の死の日に熱心さと祈りとを神にさゝげるならば，神は彼（神）に対する我々の熱心さをみとめられ，彼をたゝえ給うであろう．我々は彼のために神に祈らなければならない．というのは，彼によつて（我々は）神を知つたのだからである．されど，主が汝の望むところ

に従つて汝にむくい給い，汝の総ての願いをかなえ給うように！天なる王国を（汝は）望んでいたのだが．主が汝に正しきものたちと共に冠を与え給うように．楽園の食べものの楽しみと，アヴラム及び他の総主教たちと共にあるよろこびをも．ソロモンが次の様に言つている如く．正しきものが死する時にはそのよろこびはほろぶことなしと．（箴言；才十一章才七節・・・筆者註・・・）というのは，この者の記念をルシの人々は心にとゞめ，聖なる洗礼を思い起しつゝ，祈りにおいて，歌において，詩篇において神をたゝえているのであり，聖霊によつて洗礼された新しい人々が主をほめ歌うのである．偉大なる神及び我等の救世主イスス・クリストがキリスト教徒の総てが受けるべき玄妙なる喜びを，その労苦によつて各人にくだし給うべく来たらんものと望みつゝ．』

さて，『過ぎし年月の物語』の編者は，此処で（6523年——1015年の項）でヴラジーミル公の記事をとぢ，それと共に，ボリスの殺される物語を伝承によつてこの年の項に書き加えたのであつた．その伝承を『過ぎし年月の物語』以前に既に書きとめて物語的作品書としていたものがあつたとしたら，それは，年代記の個々の物語の原型をなすような英雄や聖者の一代記であつたであろうし，ロシアの原型的なキリスト教的物語の書きものであつたであろう．もしも，『過ぎし年月の物語』が，この1015年のボリス殺害の物語（その一部は原文と共に既に先に引用した）をなまの伝承からではなくて，伝承を作品化したより古い文献から写し取つたものだとしたら，この記事の直接の発祥源もまた文献的なものであつたと考えなければならないであろう．それに就ては，いづれ更めて後述することにしよう．ボリスとグレブの殺害の物語は，『過ぎし年月の物語』の中にあつて，最もドラマチックな物語的頂点を形成する個所であるので，其処に構成や出典のからくりがあるとすれば，後に更めて取りあげられなければならないからである．

ところで，考察の時代を6527(1019)年まで下げよう．実は，この年の項に書かれた『過ぎし年月の物語』は，ヤロスラフがボリスのとむらい合戦に勝つ話である．その一節に，打ちまかされたスヴイヤトポルクの死を書きとつた後に，年代記者は次の様な一節をつゞけている．即ち，スヴイヤトポルクの墓は今に至るまで荒野にあつて悪臭を放つているという言葉に及ぶ直前の文章である．

Его же по правде, яко неправедна, суду нашедшю на нь, по отшествии сего света приняша мукы оканьнаго: показоваше яве посланая пагубная рана, в смерть немилостивно въгна, и по смерти вечно мучим есть связан.

『ところで，義によつて彼を正しからざるものとして，その上に裁きが来つたとき，この世を去つた後も呪われたる者の苦しみを受けたのである．明らかに示された亡滅的な傷が（彼に）送られて，（彼を）情け容赦なく死においやつた．しかして，死後もまた（彼は）いましめられたまゝ永遠に苦しめられている』

正義によるかたき打ちの物語を書きとゞめ，且つ，結びの文句に，余り庶民的なほどの墓地の臭気の話を書き込む行間に，年代記者は，この一節を入れたのである．悪者に対するきびしい批判の言葉として．英雄的伝承，聖者物語，或はそれを書きとゞめた文献，及び，墓地にまつわる庶民の余りにも素朴な伝説をまとめて構成しながら，その上に『過ぎし年月の物語』の記者は，この一節を別のところから持つて来て組み込んだ．実はハマルトルス年代記の古代ロシア語訳がイロド≪Ирод≫王の所業にふれ，口ぎたなく非難する文章の一節を，そのまゝ此処へ持ち込んだのである．その折に，ハマルトルスの文章が，どれほども手を加えられていないことに気づくであろう．日本語訳を省略して，ハマルトルスの古代ロシア語訳の一節を次に引用しておこう．

его же по правде яко неправеднаго суду пришедшю,
по отшествии сего света прияша мукы оканьнаго;
показавше яве образ абье прият сего от бога
послана рана пагубная в смерть немилостивно
въгна

この1019年の項がその結びの正当化の言葉や教義的な言葉までも含めて，いかに雑多なもののつぎはぎから構成されているものであるかゞ分るであろう．そして，其処にもまたハマルトルスが顔を出していた．

では，その様なハマルトルスの年代記を中心とするビザンチンの文献は，綜合的統一的に，何時，ルシの言葉に訳されたのであろうか．勿論，個々にはそれぞれ古くから断片的にしろ訳されていなかつたとは言えないが，統一的な翻訳事業を，『過ぎし年月の物語』自身が語つている．ヤロスラフ公の業跡をたゝえた6545(1037)年の項である．

И при сем нача вера хрестьяньская плодитися и
разширяти, и черноризьци почаша множитися, и
манастыреве починаху быти. И бе Ярослав любя
церковныя уставы, попы любяше повелику, изли-
ха же черноризьце, и книгам прилежа и посита я
е часто в нощи и в дне; и собра письце многы, и
прекладаша от Грек на Словеньское писмо, и списаша
книгы многы, и сниска, ими же поучащеся верни
людье, наслажаются ученья божественнаго.....
.....

『しかしてこの者の時に，キリスト教の信仰が実り，広まりはじめた．修道僧が増加しはじめ，修道院が起りはじめていたのである．しかして，ヤロスラフは教会の規定を愛し，僧たちを非常に愛し，それにもまして修道僧たちを愛し，書物に心を傾け，し

かして，それらを夜も昼もしばしば読んでいた．彼は多くの書き手を集め，（人々は）グレキからスロヴェンの文字に訳し，しかして多くの書物を書き写し，しかして集めた．それら（の書物）によつて信仰ある人々が学び，神の教えをよろこんでいるのである．』

此処に述べられた内容に当るものが，ヴラジーミル公によるロシア洗礼の折に貴族の子弟を集めて書物を教えたという6496（988）年の物語に振り替つて先出していたのであろうと思われる．年代記の文献的な素材や原型になるような作品も，また，この時代に前後して創られたものであつたにちがいない．だからこそ，『過ぎし年月の物語』の記者は，時宜を得て，こゝぞとばかりに，この年の項に書物の効用を書き立てたのであろう．勿論，その文章の原型は現在に伝わつていないが，おそらくは，僧たちや貴族の子弟たちに，読み書きを教える折の前置きのような，説教めいた文章であつたにちがいない．教育のすすめの文章であつたであろう．そして，それは教える側にも，教えられた側も，おそらくは頭にこびりついていたほどの教訓的文章であつたであろう．『過ぎし年月の物語』は，その文章を次の様な形でとゞめているのである．

Велика бо бываеть полза от ученья книжного; книгами бо кажеми и учими есмы пути покаянью, мудрость бо обретаем и въздержанье от словес книжных; се бо суть рекы, напаяющи вселеную, се суть исходиша мудрости; книгам бо есть неисчетная глубина, сими бо в печали утешаеми есмы, си суть узда въздержанью. Мудрость бо велика есть, якоже и Соломон хваля е глаголаше: аз премудрость вселих, свет, разум и смысл, аз призвах страх Госпобень; мои съвети, моя мудро-

сть, мое утверженье, моя крепость; мною цареве царствують, а силнии пишють правду, мною вельможи величаются и мучители держать землю; аз любящая мя люблю, ищющи мене обрящють благодать. Аще бо поищеши в книгах мудрости прилежно, то обрящеши великуб ползу души своей; иже бо книгы часто чтеть, то беседуеть с Богом, или святыми мужи; почитая пророческыя беседы, и еуангельская ученья и апостолская, житья святых отець, въсприемлеть душа велику ползу.

『というのは書物の教えからの利益は大きい．というのは（我々は）書物によつて悔い改めの道を示され，しかして教えられているからである．書物の言葉から（我々は）英知を見出し，しかして節制を（見出しているからである）．というのは，これは全世界を養つている河である．これは英知の源泉である．というのは，書物には測り切れない深みがある．それらによつて（我々は）悲しみの中で慰さめられているのである．これら（書物）は節制のクツワである．英知は偉大である．ソロモンもそれをほめて次の様に言つている． 我，英知を，光を，理性を，思慮を定着せしなり（箴言；才八章十二節‥‥‥筆者註）． 我，主のおそれを呼びよせしなり．我がはかりごと，我が英知，我が才知，我が能力なり．我によりて王者たちは政治をなし，しかして強きものは正義を書き，我によりて，貴族たちはたたえられ，さばき人は世を治めるものなり．われを愛するものは，我，これを愛す．我を求むるものは恩ちようにあわん（箴言；才八章，十三節より十七節‥‥‥筆者註）と．というのは，もしも（汝が）書物の中に熱心に英知を求めるならば，おのれの魂のための大いなる利益を（汝は）見出すであろう．というのは，書物をしばしば読むものは，神或は聖なる人々と対話するのであるから．予言者の対

話を，しかして福音書の教えを，また使徒の（教え）を，聖なる父たちの一代記を読むものは，魂の大きな利益を摂取するのである』

そして，この後には，この時代の英まいな君主ヤロスラフ公の二三の業跡を書きとめただけで，『過ぎし年月の物語』は，『多くの物語を知つていて，それを語り，私も，それを年代記に書き込んだ』という語り手ヤン≪Ян≫の父を登場させているのである．その個所に就ては既に前述したところである．ところで，その後の年代，即ち，6559(1051)年の項に，ペチエルスキー修道院にまつわる話が書きとられている．その文章の出典或は対応文献と見られるものについては，その原文をあげて先に述べたところであるが，実は，この文章の出来た年代に就て面白いことが考えられる．即ち，前にも用いた『フエオドシイ一代記』≪Жития Феодосия≫によれば，この洞穴の上に建てられたこの新しい修道院は1073年から翌年頃にかけて建てられたことになつている．とすると，この1051年の項の文章は1073年或は1074年より以前に存在したはずがないということになる．『過ぎし年月の物語』はだから全部が通して一挙にある時期に書きあげられたものではなく，随分の年月の間にそれぞれの項目が或る原型の上に書き加えられて行つたもののようである．そして，6559(1051)年の項は，たしかに，少くとも1073年以後に書かれたものである．

一見，一つの年号項目にまとめられ，一貫した一つの文章の様に読まれるものとても，時に二つ或は三つの古い作品の一部分の組み合わせからなつていることがある．例えば，その最も良い例が6575(1067)年・・・・・（ラヴレンチー年代記による．イパーチー年代記ではこの同じ文章は6576(1068)年になつている）・・・・・・・の記事である．

即ち其処には冒頭に『異種族たち即ち多くのポロヴエツ人たち

がルシの国に来たつた．ところでイジヤスラフは，スヴイヤトスラフも，フセヴオロドも彼等に向つてレタ（河）に出撃した．しかして夜であつたが，相互に兵を進めた．ところで我々の罪の故に神は我々に異教徒たちを放ち給うたのである．しかして，ルシの公たちは逃げ，ポロヴエツ人たちが勝つた』という文章がある．そして，続いて相当長文の教訓めいた敗戦の理由づけといましめがあり，その後，『我等は前の話にもどろう』という言葉がつゞいて，今度は，逃げたルシの公たちのその後の消息に記事を及ぼしている．これだけのところにも，記事としては三つの異質的なものが組み合わされていると考えられる．然し，一項目の物語が実は寄木細工であつたことを単にこれだけから実証して見ても，それほど面白くない．ロシアの公たちの物語がそれを前後にはさんでいる，中間の教訓的な敗戦の理由づけやいましめの文章自身が，異質的なものに前後をはさまれながら，実はそれ自身もまた異質的なものの寄木細工だからこそ面白いのである．自からが寄木細工でありながら，その上に前後から，これまた異質的な文章にサンドイツチされた教訓的いましめの文章とは次の様なものである．

Наводить бо Бог по гневу своему иноплеменьникы на землю, и тако скрушеным им въспомянутся к Богу; усобная же рать бываеть от соблаженья дьявол. Бог бо не хощеть зла человеком, но блага; а дьявол радуется злому убийству и кровопролитью, подвизая свары и зависти, братоненавиденье, клеветы. Земли же согрешивши которей любо, казнить Бог смертию, ли гладом, ли наведеньем поганых, ли ведром, ли гусеницею, ли инеми казньми, аще ли покаявшеся будем в нем же ны Бог велить жити. Глаголеть бо Пророком

нам: обратитеся ко мне всем сердцем вашим, постом и плачем. Да аще сице створим, всех грех прощени будем: но мы на зое възвращаемся, акы свинья вь кале греховнем присно валяющеся, и тако пребываем. Темже Пророком нам глаголеть: разумех, рече, яко жесток еси, и шия железная твоя. Того ради удержах от вас дождь, предел един одождих, а другаго не одождих, исше, и поразих вы зноем и различными казньми; то и тако не обратистеся ко мне. Сего ради виногради ваше, и смоковье ваше, нивы и дубравы ваша истрох, глаголеть Господь, а злоб ваших не могох истерти; послах на вы различныя болезни и смерти тяжкыя, и на скоты казнь свою послах, то и ту не обратистеся, но реете: мужаемъся. Доколе не насытистеся злоб ваших? Вы бо уклонистеся от пути моего, глаголеть Господь, и соблазнисте многы: сего ради буду сведетель скор на противьныя, и на прелюбодейца, и на кленушаяся именем моим во лжю, и на лишающая мьзды наимника, насильствующая сироте и вдовици, и на укланяющая суд криве. Почто не въздержастеся в грех ваших, но уклонисте законы моя и не схранисте? Обратитеся ко мне, и обращюся к вам, глаголеть Господь, и аз товерзу вам хляби небесныя и отвращю от вас гнев мой, дондеже все обилуеть вам; и не имуть изнемощи виногради ваши, ни нивы. Но вы отяжасте на мя словеса ваша, глаголюще: суетен работаяй Богу. Темже усты чтуть мя, а сердце их далече отстоить мене. Сего ради ихже

просим не приемлем: будеть бо, рече, егда призовете мя, аз же не послушаю вас, взищете мене зли, и не обрящете; не всхотеша бо ходити по путем моим, да того ради затворяется небо, ово ли зле отверзается, град в дождя место пуская, ово ли мразом плоды узнабляя и землю зноем томя, наших ради злоб. Аще ли ся покаем от злоб наших, то акы чадом своим дасть нам вся прощенья, и одождить нам дождь ран и позден, и наполнятся гумна ваша пшенице, пролеются точила виная и масльная, и въздам вам за лета яже пояша прузи, и хрустове, и гусеница, сила моя великая, юже послах на вы, глаголеть Господь Вседержитель. Си слышаще, въстягнемъся на добро, взищете суда, избавите обидимаго; на покаянье придем, не воздающе зла за зло, ни клеветы за клевету, но любовью прилепимся Господи Бозе нашем, постом и рыданьем, слезами омывающе вся прегрешенья, не словом парицающеся хрестьяни, а поганьскы живуще. Се бо погански ли живем, аще усрести верующе? Аще бо кто усрящеть черноризца, то възвращается, ли единець, ли свинью, то не поганьскы ли се есть? Се бо по дьяволю наученью кобь сию держать, друзии же и закыханью верують, еже бываеть на здравье главе. Но сими дьявол лстить, и другыми нравы, всячьскыми лестьми превабляя ны от Бога, трубами и скоморохы, гусльми и русальи. Видим бо игрища утолочена, и людий много множьство, яко упихати начнуть друг друга, позоры деюще от беса замышленнаго дела,

а церкви стоять; егда же бываеть год молитвы,
мало их обретается в церкви. да сего ради казни
приемлем от Бога всяческыя, и нахоженье ратных;
по Божью повеленью приемлем казнь грех ради наших.

『というのは，神はおのれの怒りによつて異種族たちを（わが）国にみちびき給うのである．しかして，かくして人々が打ちくだかれたとき，（人々は）神に向つてめざめることであろう．また内乱の戦いは悪魔のそそのかしによつて起るものなのである．というのは，神は人間たちに悪を欲し給うのではなくて，幸を（欲し給うのであるから）．一方，悪魔は悪しき殺人と流血を喜こび，争論及び羨望，兄弟憎悪，誹謗を起しながら．ところで，それがいづれのものにしろ，国が罪をおかすと，神は，死或は飢え，或は異教徒の来襲，或はひでり，或はいなご，或は他の罰によつて罰し給うのである．我々に神がその様に生きよと命ぜられた悔後に，我々が向うようになし給うために．というのは，（神は）予言者によつて次の様に言い給うているからである．汝ら，断食となげきと（悲しみと）をなし，心をつくして我に帰れ（ヨエル書；才二章十三節・・・・筆者註）．ところで，もしも（我々が）この様になすなら，（我々は）総ての罪から許されるであろう．然し，我々が，永遠に罪深いけがれの中に豚が転げ廻つているように，悪へ戻るのであれば，（我々は）そのようにありつゞけるであろう．（神は）予言者によつて次の様に言い給うている．いわく，（我は）知つている．汝は苛酷にして，汝の首は鉄の如しと．そのために，（我は）汝に雨をとゞめ，一つの境には雨をふらし，しかして他の（境には）雨をふらさず，それは乾きたり．しかして（我は）汝等を暑さ及び種々の罰にて打ちのめしたり．しかるに汝等は我に向わず（アモス書；才四章六節から八節・・・・筆者註）と．このために，（我は）汝等のブドウ畠と，しかして汝等のイチヂクと，畠と森とをほろぼしたり．主は言い給う．

しかれども，汝等の悪を我はほろぼし得ざりき．（我は）汝等の上に，様々の病及び重き死をおくり，しかして家畜の上におのが罰を送りしなり．されど，其処でも（汝等は我に）向わずして言えり．（我等）勇を鼓せりと．いかなるまで（汝等は）汝等の悪にあきざるや？　主は言い給う．汝等は我が道よりはずれ，多くの者たちをまどわせたり．このために，（我は）速やかなる証人にならん．敵に対して邪慳なる情交に対して，偽りて我が名によつて誓う者たちに対して，やとい人たる者の働きに支払わざるものに対して，みなし児及び未亡人たちを強圧するものたちに対して，よこしまなる裁きをなすものに対して：何故に（汝等は）汝等の罪を自制せずして，我がおきてを曲げ，それを守らざるや？我が方に向え．しからば（我は）汝等の方に向くであろう．主は言い給う．しかして我は，天国なる深淵を汝等に打ち開こう．しかして汝等から我が怒りを除こう，汝等に総てが豊かになるまでは．しかして；汝等のブドウ畠は，また畠も，つきることはないであろう．されど汝等は，次の様に言いつゝ，汝等の言葉を我が上に負かした．神につかえ励むはいたづらなりと．また，その故に（人々は）我を口にては尊べど，彼等の心は我より遠く離れ立つなりと（イザヤ書；オ二十九章十三節・・・・筆者註）．この故に，（我々が）望むものは，（我々は）入手し得ないであろう．次の様になるだろうと言われている．汝等が我を寄びよせるとき，我は汝に耳をかさないであろう．ひたすらに，（汝等が）我を探し求めようとも，汝等は（我を）見出さないであろう（箴言；オ一章二十八節・・・・筆者註）と．というのは，（人々は）我が道を歩むことを欲しなかつた．そのために，天はとざされ，或はまた，きびしく打ちひらかれて，雨の代りにひようをふらし，また，寒さによりて木の実を打ちのめし，また，暑さによつて大地を苦しめるのである．我々の悪業の故である．我々の悪業を（我々自からが）悔悟するならば，（神は）おのれの子供に対する

如く我々に総ての許しを与え給うであろう，しかして，早きにつけ，おそきにつけ雨を我々にふらせ給うであろう．しかして，汝等の穀場は，穀物で満されるであろう．ブドウ酒及び油のしぼり機は動き出し，しかして，（我は），イナゴ及び毛ばつ及び青虫が取りあげたものを汝に与えるであろう．汝等に（我が）向けた我が力は偉大である，と，全能の主は言い給うている．（ヨエル書；才二章，二十三節後半より二十五節・・・・筆者註）．

これらを聞いて，我々は善に進もう．義きを求めよ．はづかしめられている者を許せ．悔悟に向かおう．悪に悪を以てむくい，そしりにそしりを以てむくいることをなさず，我々の主なる神に愛を以て身をよせ，精進と涕泣と涙を以て総ての罪を洗い，言葉で以てキリスト教徒と呼ばれながら，異教徒のように生きていることのなきように（しよう）．もしも（我々が）出会いを信じているのならば，果して異教徒のように生きていないと言えるだろうか？もしも誰かが僧と出会うなら，（彼は）（家へ）戻るのであり，世捨人或は豚に（出会うなら），（同じようにするというのは），これは異教徒的ではないか？というのは，これは，悪魔の教えによつてこの迷信判断を（人々が）持つているからなのである．また他の者たちは，生命の健康のためにあるクシャミを信じているのである．然し悪魔は，これらのことを以て（我々を）たぶらかしているのであり，しかして他のずるい方法によつて，あらゆる甘言によつて，ラッパ及びスコモロフ，グースリ（琴）及びルサリイ（異教的死者追善祭）によつて我々を神から離しているのである．本当に（我々が）見るところでは，足ぶみする遊びがあり，しかして，多くの人々が群をなして今にもお互いを圧殺しそうになり，悪魔によつて企てられた所業の光景を呈しているのである．一方，教会は空虚になつている．祈りの時が来る時にも，（人々は）少数しか教会には来ない．このことのために，（我々は）神からあらゆる罰を受けているのであり，しかして，（

敵)軍の来襲をも(受けているのである).神の命令によつて,我々の罪の故に罰を(我々は)受けているのである.』

一読して,この文章が寄木細工であることが分る.この文章全体が『神の罰について』という一つの一貫した作品で,その作者がペチエルスキー寺院のフエオドシイ≪Феодосий≫であつたと考えられるにしても,年代記に持ち込んだのも彼であつたかどうか.或はまた,もしそうであつたにしても,この文章の作者自身が,どれほどの素材から寄木細工を創つたかということの方が,実は,問題の中心をなさなければなるまい.訳文の中に下線をつけた部分がバイブルからの抜き書きであつたというだけでは答えにはならないであろう.この寄木細工の教訓がレタ河におけるロシアの公たちの敗北の年即ち1068年以後に創られたことはたしかであろう.さて,これが寄木細工であつた証拠の一つは,この長い文章における一貫的な主語の定着が見当らないことであり,人称の使い分けの混乱である.日本語訳を一読しただけでは,余りに混乱が多きいために,話のつじつまが分らないほどである.それは,バイブルの文句を不器用に織り込もうとしたことにもよつた.例えば上に引用したラヴレンチー,イパーチー,トロイツキー等の年代記の文章に比べて,ノヴゴロド第一年代記の6576年の項では,混乱した人称の取り扱い方が美しく整理されて,余程,話のつじつまが合つている.ちなみに整理されている個所とは次の様なところである(左側はラヴレンチーその他の年代記,右側はノヴゴロド第一年代記)

от соблажненья	.....	от сваженија
человеком	.....	в человецех
подвизая	.....	въздвизая
которей	.....	коеи
ли	.....	или
нам	.....	к нам

железная твоя	железныя выя твоя
виногради ваше	винограда вашего
различныя болезни и смерти тяжкыя	различныя напасти и болезни, смерти тяжькы
мужаемъся	мужа есмя мы.
именем моим во лжю	во лжу именем моим
въздержастеся	сдерзаетеся
словеса ваша	словеса тяжка
суетен работаяй Богу	суетно работая богу
сердце их	сердце ваше
(------)	глаголеть господь
Сего	Того
приемлем	улучим
пуская	пущаеть
мразом плоды узнабляя	сланою плоды ознобляя
от злоб наших	о злобах своих
дасть нам	подаст бог нам

以上，此処までの相異は，実は，上に引用した文章の前半を成す部分のものである．信仰うすき当時の民衆の異教的迷信や，村祭り的な娯楽を悪魔的なものだときめつけた後半の文章には，大きな相異点はほとんどない．これだけの証拠からも，前半が如何に固苦しい，然も，下手なつぎはぎの文章であり，後半がほとんど手を加えることの出来ないほどの完成された文章であるかゞ分かるであろう．その様なつぎはぎの文章であり，且つまた，単独の別の文章であつたために，ソフイア第一年代記は，これを全部記事から消し去つて，6576年の項を埋めたのであろう．ニコン年代記は余程文章を分りやすく統一したが，エルモリンスキー年代記は完全に無視し，トウヴエル年代記もまた全くこれを無視し

て書きつけてはいない．リボフ年代記もまた一言もこれにはふれていない．エルミタージュ写本によるモスコ年代記集にも，この文章は見当らないし，ヴオロゴドスコ・ペルム年代記にも，ニカノロフ年代記にも，ウヴアロフ年代記にも，全く見当らないのである．さて，其処で，もとの上記引用文に戻つて見るとき，我々は，『ところで異教徒のように生き』≪а поганьскы живуще≫という言葉の前と後の文章が異質であることに注意しよう．一見して，≪а поганьскы живуще≫以下の文章は，かみくだいて『異教徒のように生き』ることを説明しているにすぎない．非常に風俗描写的な，庶民の生活描写の文章である．前半の文章の結びだけでは物足らなくて，或はその結びに註釈をつけるための，非常に安易で，身近な文章である．前半の文章が結ばれた直後に，誰かゞ，その意味をかみくだいて説明的に庶民の身近な例を引きつゝ書き足したものではなかつたか．とすると，まことに文献利用的な文章とは≪а поганьскы живуще≫以前の前半文であると言える．そして，その前半文自身が，誠に不器用なバイブルの言葉のつぎはぎであつた．その為に文体は固くなり，文勢は凹凸をきわめ，後半文と余りに鮮かな対象をなしたのである．その文勢の凹凸は，『過ぎし年月の物語』の中へ持ち込まれた時に，その記者の不器用さによつてなされたものか，或は，本来，余りに生硬なものの転写であつたのか ——ノヴゴロド第一年代記との字句の相異から見て，おそらくは，記者の不器用さによつたものであろう．少くとも，バイブルの言葉の内容が，後半文にみとめられるほどの域にまで生活化していなかつた頃に，幾分かは特権的態度で，ジレッタントな姿勢で書かれたものであつたにちがいあるまい．だからこそ，庶民の生活に例を取つた後半文の註釈的な書き加えが必要となつたのであろう．

この様に，①バイブルのつぎはぎに基礎を置き，②ルシの実体に近づけようとして神からの背反行動のいましめ文となしたもの

を，—— こゝまでは，おそらく僧たちの間における教訓的文献であつたであろう．—— ③庶民的な例を引いて，具体的に註釈をつけて，結局三段構えで，この文章は構成されていた．そして，この積み重ねの文章を，外敵侵入の記事の中間にサンドイツチし，『我々は前の（話）に戻ろう』≪Мы же на предежащее въз-вратимся≫として，ルシの公たちの敗北後の物語を書き取つたものがラヴレンチー年代記6575年，その他の年代記6576年の項にみられる『過ぎし年月の物語』の一節なのである．そして中間にはさまれていた上記引用文中，前半の固い文体の教訓は，実に，ズラトストルイ≪Златоструй≫からの抜き取りであつたと思われる．既にこの教訓集はシメオン≪Симеон≫帝（9～10世紀）の頃に古代スラヴ語に訳されていたのであつた．文献的に出処を求めてさかのぼるとすれば，バイブルに至るよりも，むしろ，≪Златоструй≫の古代スラヴ語訳に至るであろう．

さて，次にラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー等の年代記における6601(1093)年の項を注目しよう．この年の項の記事は非常に長い．此処では先づその前部十分の一ほどを取りあげて検討してみよう．前部十分の一だけでも，出典的には単一な文章ではないからなのである．

В лето 6601, индикта 1 лето. Преставися великый князь Всеволод, сын Ярославль, внук Володимерь, месяца априля в 15 день, а погребен бысть 14 день, недели сущи тогда страстней и дни сущю четвертку, в онь же положен бысть в гробе в велицей церкви святыя Софья. Сий бо благоверный князь Всеволод бе издетьска боголюбив, любя правду, надбя убогыя, въздая честь епископом и презвутером, излиха же любяше черноризи, подаяше требованье им, бе же и сам въздержася от пьяньства и от похоти,

тем любим бе отцем своим, яко глаголати отцю к нему: "сыну мой! Благо тобе, яко слышю о тобе кротость, и радуюся, яко ты покоиши старость мою; аще ти подасть Бог прияти власть стола моего, по братьи своей, с правдою, а не с насильем, то егда бог отведеть тя от житья сего, да ляжеши, идеже аз лягу, у гроба моего, понеже люблю тя паче братьи товее". Се же сбысться отца его, якоже глаголал бе: сему приимшю послеже всея братья стол отца своего, по смерти брата своего, се же Кыеве княжа быша ему печали болше, паче неже седящю ему в Переяславли, седящю бо ему Кыеве, печаль бысть ему от сыновец своих, яко начаша ему стужати, хотя власти, ов сея, ов же другое; се же смиривая их, раздаваше волость им. В сих печаль всташа и недузи ему, приспеваше старость к сим. И нача любити смысл уных, съвет створя с ними; си же начаша заводити и негодовати дружины своея первыя, и людем не доходити княже правды, начаша тиуни грабити, людий продавати, сему не ведущю в болезнех своих.

「6601(1093)年. インジクト才一年. ヤロスラフの息子, ヴォロジメルの孫であるフセヴォロド大公が四月十三日に死去し, 十四日に葬られた. その時は受難週であり, しかして木曜日であつた時に, その日に, 聖ソフィヤ大教会の中で棺に安置された. (ここまで年代記一般にみられる事実記録の典型的な文章……編者註). ところで, この信仰厚いフセヴォロド公は, 幼い頃より神を愛し, 正義を愛し, 乞食たちに気を配り, 主教及び僧たちに栄誉を与え, ところで時に修道僧たちを愛していて, 彼等

の求めに応じていた．ところで，自からもまた，飲酒及び慾情を節し，そのことによつておのれの父に愛された．（ここまでは教会内で死者の追善と表彰を兼ね，故人の栄誉をたゝえ，記念する折の，過去帳的文章であつたと思われる……筆者註）．彼に向つて父が言つたところによれば，〃我が息子よ！　汝に幸いあれ．（我は）汝の柔和さについて聞いている．しかして，我が老境を（汝が）安んじてくれているのを（我は）喜こんでいる．もしも，汝に，おのれの兄たちの後に我が王座の権力を暴力によらずして正義によつて取ることを神が許し給うならば，神が汝をこの世から去らしめ給う時，我が横たわるところ，即ち，我が棺のかたわらに（汝は）横たわるがよい．というのは，（我は）汝の兄たちにもまして汝を愛しているからである〃と．（この言葉は，宗教的な世界への傾きにおいて書かれた遺書のようなものであつたであろう．勿論，それは，使者の口上のようなものから発達した表現タイプをもつていた……筆者註）．（父王が）語つた，彼の父の言葉は実現した．この者が，おのれの父の王座を，おのれの兄の死後，総ての兄弟の後に受け取つた時，見よ，キエフに（公とし）坐したが，彼には，彼がベレヤスラヴリに坐していた時にもまして悲しみが多かつた．彼がキエフに坐していたとき，彼にはおのれのおいたちのために悲しみがあつた．（彼等は）領地を望み，或者はこれを，他の者はあれを（望み），彼に苦労をかけはじめたからである．ところが見よ．（彼は）彼等をしづめながら，彼等に領地を分け与えていたのである．かくの如き悲しみの内に，病気もまた彼に立ち現れていた．この者に老境が来りつゝあつたのである．（賢者の一代記の文章であろう……筆者註）．しかして彼は若き者たちの考えを愛しはじめ，彼等と相談をしていたのである．これらの者たちは，（彼が）おのれの年長親兵団を軽視するように彼を仕向けはじめた．しかして，人々は公の正しき裁にありつくことができなかつた．（若者たちは）

略奪を行い，人々を売りはじめた．（しかして公は）おのれの病の中にあつてこのことを知らなかつたのである．』

訳文中に( )印で註を付けず，下線をほどこした部分もまた，その前の部分と同じく一代記的文章にはちがいないが，この下線の部分には明らかに照応する文章が古くみとめられるのである．特にこの部分について考えてみよう：この部分は，どうやら，『過ぎし年月の物語』以前の年代記的作品『原初の集』≪Начальный сводъ≫（現在には伝えられていない）にあつた文章の照り返しのように思われる．というのは，ノヴゴロド第一年代記は；初めて年号を設定してルシの国の始まりを6362(854)年とするが，その年号設定の直前；即ち，第一年代記の序文に相当するところで，この文章と照応し得る文章を先づ書きとめているからである．また；ソフィヤ第一年代記も同様に，ノヴゴロド年代記とほゞ同一文を，年号設定直前の序文にもつているからである：此処では，ソフィヤ第一年代記の序文を引用してみよう．特に下線の部分と先に引用した文章の下線の部分とを注意しよう：ノヴゴロド第一年代記の序文の一部分は嘗つて引用して日本語訳をつけたことがあつたので；此処では下線の部分だけに日本語訳をつけることにして：

О НАЧАЛѢ РУСЬСКЫЯ ЗЕМЛЯ И О КНЯЗЕХ,КАКО И ОТКУДУ БЫША.

Вас молю, стадо Христово, с любовию, приклоните ушеса ваша разумно: како быша древнии князи и мужи их, и како отбараняху Русьскыя земля, и иныя страны приимаху под ся. Ти бо князи не сбираху многа имения, не творимых вир, ни продажь въскладаху на люди; но оже будяше правая вира, и ту возма, даяше дружине на оружие. А дружина его кормляхуся, воюющи иныя страны,

бившися: "братие! потягнем по своем князи и по Русьской земли". Не жадаху: "мало ми есть, княже, 200 гривен"; не кладаху на свои жены златых обручей, но хожаху жены их в серебре, и росплодили были землю Русьскую. За наше несытьство навел Бог на ны поганыя, а и скоти наши, и села наша, и имения за теми суть; а мы злых своих не останем. Пишеть бо ся: богатьство неправдою сбираемо, скоро извеется. И паки: собираеть, и не весть кому сбираеть. И пакы: лучше малое праведнику, паче богатьства грешных многа. Да отселе, братия възлюбленая моя, останемся от несытьства своего; доволни будите урокы вашим. Яко и Павел пишеть: ему же дань, то дань, ему же урок, то урок; никому же насилия творяще, милостынею цветуще, страннолюбием в страсе Божии и правовернии свое спасение съдевающе, да и зде добре поживем, и тако вечный жизни причастници будем. Се же таковая. Мы же от начала Русьской земли до сего лета и вся по ряду известно да скажем, от Михаила царя до Александра и Исакия.

ところで下線をつけた部分では『多くの財産をも集めず，罰金をも取り立てず，人々に売却（刑）をも課しはしなかつた』とある．扨て，これを先にあげた文章の下線の部分と比べて見るがよい．老年の公が病の中にあつて気づかなかつた折に，相談相手として重宝がられた若い者たちが，増長してなしていたことは，『公の正しき裁きに会うことができない』ように人々を妨害することであつた．というのは，即ち，税は取り立てられ，罰金は取り

立て，罪をおかしたものを奴隷として売つて着服することであつた．ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチー各年代記にみられる『過ぎし年月の物語』のこの年代の項のこの文章の記入者は，或は作者は，明らかに，ノヴゴロド年代記や，ソフイヤ年代記の序文にもなるほどの古い教訓的文章を知つていた．そして，その文章の一節と全く裏腹のことを此処に書き出して，フセヴオロド大公をないがしろにして，道からはずれた増長者たちを厳しく非難したのであつた．だから，其処には，文献的には，尊重さるべき古い中軸的教訓が倒立的に映し出されたと言わなければなるまい．ちなみに，倒立的映像の文章ではなく，古いまゝの立像的文章を序文に用いたノヴゴロド第一年代記及びソフイヤ第一年代記では，この6601年の項は，単に≪Всеволод преставися; и сѣде Святополкъ въ Киевѣ. В то же лѣто побѣдиша Половци Святополка≫『フセヴオロドが死去した．しかしてスヴイヤトポルクがキエフに坐した．ところでこの同じ年にポロヴエツたちがスヴイヤトポルクを打ち負かした』（ノヴゴロド第一年代記の場合）とあるか，或は，教訓的文章の倒立も，追悼的文章も，全く見当らず，単に普通の年代記的記録を次の様に書きつけているにすぎない（ソフイヤ第一年代記の場合）．

В лето 6601. Преставися князь великый Всеволод месяца априля в 13 день, и положен бысть в святой Софеи в Киеве. Рече же Володимер: "аще сяду на столе отца своего, то рать имам с Святополком", яко стол преже отца его бысть. И посла по Святополка к Турову, а сам иде к Чернигову. Того же лета седе Святополк Изяславичь в Киеве на столе отца своего; си же много пострада за землю м погаными Печенегы. Приидоша на Рус-

ьскую землю, Святополк же и Володимер Всеволодичь Монамах бишася и ними об ону страну Стугны; и бысть брань велика зело, и побежени быша от Половцев грех ради наших; овии от оружия и мечя изомроша, а друзии истопоша. Тогда же князь Ростислав Всеволодичь утопе, и мало Володимер не утопе, хотя помощи брату своему; и многое множество паде за Русьскую землю. Святополк же прииде к Киеву сам третий, а Володимер к Чернигову; и бысть плачь велик, а не радость. Половци же взяша град Торчьскый.

『6601(1093)年．四月十三日にフセヴオロド大公が死去した．しかしてキエフの聖ソフイヤ（寺院）に安置された．ところでヴオロジメルは言つた．〃おのれの父の王座に，もしも（我が）坐すならば，スヴイヤトポルクと戦うであろう〃と．王座は以前彼の父のものであつたからである．しかしてスヴイヤトポルクを迎えにトウロフへ使者をたてた．一方，自分はチエルニゴフに行つた．その同じ年，イジヤスラフの息子スヴイヤトスラフがキエフのおのれの父の王座に坐した．この者はルシの国のために異教徒のペチエネギと（戦つて）多くの労苦をなした．ルシの国にポロヴエツ人たちが進攻し来たり，スヴイヤトポルクは，またヴオロジメル・フセヴオロジチ・モナマフは，ストウグナ（河）の対岸で彼等と戦つた．しかしてきわめて大きな戦があつた．しかして，我々の罪の故にポロヴエツ人たちに打ちまかされた．或者は武器及び剣によつて死に，また他の者はおぼれた．その時，ロスチスラフ・フセヴオロジチ公はおぼれた．しかして，ヴオロジメルはおのれの弟を助けんとして，あやうくおぼれるところであつた．ルシの国のために多くの人たちが倒れた．ところで，スヴイヤトポルクは自分で三度目にキエフに帰り来たつたが，ヴオロジ

メルはチエルニゴフに（もどつた）．大いなる涙があつて，喜びはなかつた．ところで，ポロヴエツ人たちはトルチスキイの町を占めた．』

さて，次の記事へ読み進んでみよう．『過ぎし年月の物語』（ラヴレンチー年代記による）の6604(1096)年の項も非常に面白い組み合わせの文章になつている．即ち，その初めには，例によつて，公たちを中心とする政治的支配層がポロヴエツによる攻撃を受け，防戦する記録を書きとめる．スヴイヤトポルク≪Свя-тополк≫とヴオロジメル≪Володимер≫の二人の公が中心をなした物語である．それは，戦争物語であり，前述した使者の口上のやりとりであり，一部はまた武勇伝の変形でもあつた．だから，この初めの部分に文献的出典を求めることはないであろう．ところが，それに続いて，外敵ポロヴエツによる教会の焼打ちの物語がつづいている．然し，それも，文献的な寺伝によるものではなくて，僧たちの間に伝えられた受難伝承によるものなのかも知れない．ところが，神のいます教会まで焼打ちにする非道な異教徒たちの発生源に話が及ぶと，其処には明らかに古い文献が照り映えるのである．然も面白いことに照り映える文献は一つではない．即ち，その一節には，次の様にある（ラヴレンチー年代記）．

Исшьли бо суть си от пустыня Нитривьскыя, межю востоком и севером; исшьли же суть их колен 4; Торкъмени и Печенези, Торци, Половци. Мефодий же сведетельствуеть о них, яко 8 колен пробегли суть, егда исече Гедеон, да 8 их бежа в пустыню, а 4 исече. Друзии же глаголють: сыны Амоновы. Се же несть тако: сынове бо Моавли, Хвалиси, а сынове Аммонови болгаре, а Срацини от Измаила творяться Сарини, и прозваша имена собе

Саракыне, рекше: Сарини есмы. Темже Хвалиси и Болгаре суть от дочерю Лотову, иже зачаста от отца своего, темже нечито есть племя их: а Измаил роди 12 сына, от них же суть Торкъмени, и Печенези, и Торци, и Кумани, рекше Половци, иже исходять от пустыне. И по сих 8 колен к кончине века изидуть, заклепении в горе Александром Македоньским, нечистыя человеки.

『というのは，これらの者たちは東と北の間のニトリフ（エトリフ）の荒野から出て来たものであつた．彼等は四つの血統として出て来ているのである．即ちトリクメニ及びペチエネギ，トルツイ，ボロヴエツである．彼等についてメフオジイは証言している．即ち，八つの血統が，（彼等を）ゲデオンが斬り殺したとき逃げのびたのである．しかして彼等八つ（の血統）は荒野に逃げた．しかして四つ（の血統）を（ゲデオンは）斬り殺したと．ところで，他の者たちは言つている．即ち（彼等は）アモンの息子たちであると．ところで，これは左様ではない．（これらは）モアフの息子たちのフヴアリシであつて，アモンの息子たちはボルガレなのである．ところで，サラツエンたちはイズマイルからサリニ（サラの息子たち）をなし，自からの名をサラキネと呼んだ．曰く．（我々は）サリニであると．かくして，フヴアリシ及びボルガレは，おのれの父によつて身ごもらされたロトの娘たちから（発している）のである．その故に彼等の種族はけがれている．ところでイズマイルは十二人の息子を生んだ．彼等から（出た）ものがトルクメニ，及びペチエネギ，及びトルツイ，及び，ボロヴエツというクマニであり，彼等は荒野から来つているのである．これらの八つの血統の後に，この世の終る時に，マケドニヤのアレクサンドルによつて山中にとじこめられた不浄なる人間たちが出て来るのである』．

年代記者は，此処では明瞭にメフオジイが証言している≪Мефодий же свѣдѣтельствуетъ≫，『他の者たちは言つている』≪Друзии же глаголютъ≫と二つの出典を引き合いに出している．メフオジイとは小アジアのリキヤ≪Ликия≫のパタル≪Патар≫という町の主教であつたと言われる三世紀から四世紀頃の人物を指している．彼の手になる『天啓』（――一般にロシアでは≪Откровение Мефодия Патарского≫として知られている――）に準拠して，それ以下の数語を書きつゞつていると思われる．メフオジイの『天啓』にはアダムから始まつて，世界創造七千年にして世が終るという所までの物語が書かれ，特に世界が終る最後の部分はロシアの古代文学では盛んに利用されていた．この『天啓』は古代ブルガリヤで古代スラヴ語による二つの訳書が造られていた．その内の一つは十三世紀から十四世紀にかけて消失し，一つだけ残つて来たが，それによれば，年代記者が『メフオジイは証言している』として，それ以下に書いた数語は，『天啓』の次の部分に当るであろう．

На коньчину бо седмыа тысяща разоритися царство Перьсьско, и тогда изыидеть племя Измаилево от пустыня Етрива, и ишедъше ис пустыня соберутся вси вкупе..... и власти почнуть до входа и до исхода севернаго и до востока и запада и будуть вси под властию их..... и престанеть служба божия и устанеть всяка песнь церковная.....

『というのは，七千年の世の終りにペリシの王国は亡ぶであろう．しかして，その時には，エトリの荒野からイズマイルの種族が出て来るであろう．しかして荒野から出て来て，総て（彼等は）一つにまとまるであろう．・・・・しかして，入口まで及び北の出口まで，及び東まで，及び西まで権力をふるいはじめ，しかして，総ての（者たち）は彼等の権力の下にあるであろう・・・・しかし

て，神への勤行は中止され，教会のあらゆる歌はとまり……』

この一節を文献的な下敷にした年代記者は，続いてルシの外敵——東方遊牧民族をバイブルにおけるイズマイルから出たものたちであるとし，今度はハマルトルスの年代記から引き出して来て，イズマイルには十二の息子がいたとし，其処からゲデオンに殺された四人を除いて八つの血統を考えた．メフオジイの『天啓』には八つの血統のこと以外には何もふれられていないから，十二マイナス四即ち八という計算はハマルトルスによつたのであろう．だからこそ，それを『他の者たちが言つている』と断り書きしたものだと言わなければならない．この様に，年代記者は『過ぎし年月の物語』を構成して来て，アレクサンダー大王によつて山にとじこめられた異教的蛮人の話に及んだ．そして，この物語は，山にとじこめられた人間たちの物語へ続くべきであつた．ところが，ラヴレンチー年代記だけは，その間に一つの教訓を差し込んでしまつて，話の流れを途切らせているのである．然も，その教訓は馬鹿に長い．ヴラジミル・モノマハ≪Владимир Мономах≫の教訓である．ラヴレンチー年代記だけが，本来単独であるべき教訓を何故かこの1069年の項に差し入れてしまつた．（そのことについては，シャフマトフの考察がある）『過ぎし年月の物語』の文献的な基盤をたずねる以上，この問題は素通りできないであろう．この教訓は完全に独立的な別の文献であつたはずだからである．ともあれ，その教訓とは次の様なものである．

Поучение

Аз худый дедом своим Ярославом, благословленым, славным, нареченем в крещении Василий, Русьскым именем Володимер, отцем възлюбленым и матерью своею Мьномахы.....
..... (Далее пробыл в четыре строки с половиною; нечто пропущено и продолжение речи без начала) .....

.....

.....

.....

.....и хрестьяных людий деля, колико бо сблюд по милости своей и по отни молитве от всех бед. Седя на санех, помыслих в души своей и похвалих Бога, иже мя сих днев грешнаго допровади. Да дети мои, или ин кто, слышав сю грамотицю, не посмейтеся, но ому же любо детий моих, а приметь е в сердце свое и не ленитися начнеть, такоже и тружатися. Первое, Бога деля и душа своея, страх имейте Божий в сердци своем и милостыню творя неоскудну, то бо есть начаток всякому добру. Аще ли кому не люба грамотица си, а не поохритаються, но тако се рекуть: на далечи пути, да на санех седя, безлепицю си молвил. Усретоша бо мя слы от братья моея на Волзе, реша: "потъснися к нам, да выженем Ростиславича и волость их отъимем; иже ли не поидеши с нами, то мы собе будем, а ты собе". И рех: "аще вы ся и гневаете, не могу вы я ити, ни креста переступити". И отрядив я, взем Псалтырю в печали, разгнух я, и то ми ся выня: вскую печалуеши, душ? Вскую смущаеми мя? И прочая. И потом собрах словца си любая, и складох по ряду, и написах: аще вы последняя не люба, а передняя приймайте. Вскую печална еси, душе моя? Вскую смущаеми мя? Упова на Бога, яко исповемся ему. Не ревнуй лукавнующим, ни завиди творящим беззаконье. Зане лукавнующии потребятся, терпящии

же Господа, ти обладають землю. И еще мало, и не будеть грешника; взищеть места своего, и не обрящеть. Кротции же наследять землю, насладяться на множьстве мира. назираеть грешный праведнаго, и поскрегчеть на нь зубы своими; Господь же посмеется ему, и прозрить, яко придеть день его. Оружья извлекоша грешьници, напряже лук свой истреляти нища и убога, закалати правыя сердцем. Оружье их внидеть в сердця их, и луци их скрушатся. Луче есть праведнику малое, паче богатства грешных.многа. Яко мышца грешных скрушится, утвержаеть же праведныя Господь. Яко се грешници погыбнуть; праведныя же милуя и даеть. Яко благословящии его наследять землю, кленущии же его потребятся. От Господа стопы человеку исправятся. Егда ся падеть и не разбьеться, яко Господь подъемлеть руку его. Ун бех и ~~х~~старехся, и не видех праведника оставлена, ни семени его просяща хлеба. Весь день милуеть и взаим даеть праведный, и племя его благословлено будеть. Кулонися от зла, створи добро, взищи мира и пожени, и живи в векы века. Внегда стати человеком, убо живы пожерли ны быша; внегда прогневатися ярости его на ны, убо вода бы ны потопила. Помилуй мя, Боже, яко попра мя человек; весь день борася, стужи ми. Попраша мя врази мои, яко мнози борющися со мною свыше. Возвеселится праведник, и егда видить месть; руце свои умыеть в крови грешника. И рече убо человек: аще есть плод праведника, и есть убо Бог судяй земли. Измий мя от

враг моих, Боже, и от втсающих на мя отъими мя. Избави мя от творящих безаканье, и от мужа крови спаси мя; яко се уловиша душю мою. И яко гнев в ярости его, и живот в воли его; вечер водворится плачь, а заутра радость. Яко лучши милость твоя паче живота моего; и устне мои похвалита. Яко благословлю тя в животе моем, и о имени твоем въздею руце мои. Покры мя от соньма лукаваго, и от множьства деляющих неправду. Възвеселитеся вси праведнии сердцем. Благословлю Господа не всяко время воину, хваля его, и прочая. Якоже бо Василий учаше: собрав ту уноша, душа чисты, нескверни, телеси худу, кротку беседу и в меру слово Господне, яди, питью без плища велика быти; при старых молчати, премудрых слушати, старейшим покарятися, с точными и меншиими любовь имети; без луки беседующе, а много разумети; не свереновати словом, ни хулити беседою, не обило смеятися, срамлятися старейших, к женам нелепым не беседовати, долу очи имети, а душю горе, пребегати, не стрекати учить; легких власти ни в кую же имети, еже от всех честь. Аще ли кто вас можеть инем услети, от Бога мьзды да чаеть и вечных благ насладится. О Владычице Богородице! Отъими от убогаго сердца моего гордость и буеть, да не възношюся суетою мира сего в пустошнем сем житьи. Научися, верный человече, быти благочестно делатель. Научися, по евангельскому словеси, очима управленье, языку удержанье, уму смеренье, телу порабощенье, гневу погубленье, помысл

чист имети, понужаяся на добрая дела, Господа ради: лишаем не мьсти, ненавидим любо гоним, терпи, хулим, моли, умертви грех, избавите обидима, судите сироте, оправдайте вдовицю. Придете, да сожжемъся, глаголеть Господь; аще будеть греси ваши яко оброщени, яко снег обелю я, и прочее. Восияёть весна постная, и цвет покаяеья; очистим собе, братья, от всякоя крови плотьскыя и душевныя, Святодавцю вопьюще рцем: слава тобе, человеколюбче! По истине, дети моя, разумейте, како ти есть человеколюбець Бог милостив и премилостив. Мы человеци грешни суще и смертни, то оже ны зло створить, то хощем и пожрети и кровь его прольяти вскоре; а Господь нашь, владея и животом и смертью, согрешенья наша выше главы нашея терпить, и пакы и до живота нашего яко отець чадо свое любя, бья, и пакы привлачить е к собе. Такоже и Господь нашь показал ны есть на врагы победу, 3-ми делы добрыми избыти его и победити его: покаяньем, слезами и милостынею; да то вы, дети мои, не тяжька заповедь Божья, оже теми делы 3-ми избыти грегов своих и царствия не лишитися. А Бог деля не ленитеся, молю вы ся, не забывайте 3-х дель тех: не бо суть тяжка; ни одиночьство, ни чернечьство, ни голод, яко инии добрии терпять, но малым делом улучити милость Божью.Что есть человек, яко помниши и? Велий еси, Господи, и чюдна дела твоя, никакъже разум человеческ не можеть исповедати чюдес твоих. И пакы речем: велий еси, Господи, и

чюдна дела твоя, и благословено и хвално имя твое в векы по всей земли. Иже кто не похвалить, ни прославляеть силы твоея и твоих великых чюдес и доброт, устроеных на сем свет; како небо устроено, како ли солнце, како ли луна, како ли звезды и тма и свет, и земля на водах положена, Господи, твоим промыслом! Зверье розноличнии, и птица и рыбы, украшено твоим промыслом, Господи! И сему чюду дивуемъся, како от персти создав человека, како образи розноличнии в человечьских лицих, аще и весь мир совокупить, не вси в один образ, но кый же своим лиць образом, по Божии мудрости; и сему ся подивуемы, како птица небесныя из ирья идуть, и первее наши руце, и не ставяться на одиной земли, но и силныя и худыя идуть по всем землям, Божиим повеленьем, да наполнятся леси и поля. Все же то дал Бог на угодье человеком, на снедь, на веселье. Велика, Господи, милость твоя на нас, яже та угодья створял еси человека деля грешна. И ты же птице небесныя умудрены тобою, Господи, егда повелиши, то вспоють и человекы веселять тобе; и егда же не повелиши им, язык же имеюще онемеють. А благословен еси, Господи, и хвален зело! Всяка чюдеса и ты доброты створив и сделав, да иже не хвалить тебе, Господи, и не веруеть всем сердцем и всею душею во имя Отца и Сына и святаго духа, да будеть проклят. Си словца прочитаюче, дети моя, божественая, похвалите Бога, давшаго нам милость свою, и се от худаго моего безумья наказанье. Послу-

шайте мене, аще не всего приимете, то половину. Аще вы Бог умякчить сердце, и слезы своя испустите о гресех своих, рекуще: "яко блудницю и разбойника и мытаря помиловал еси, тако и нас грешных помилуй. И в церкви то дейте и ложася. Не грешите ни одину же ночь, аще можете, поклонитися до земли, али вы ся начнеть не мочи, а трижды; а того не забывайте, не ленитеся, тем бо ночным поклоном и пеньем человек побежаеть дьявола, и что в день согрешить, а тем человек избываеть. Аще и на кони ездяче не будеть ни с кым орудья, аще инех молитв не умеете молвити, а "Господи помилуй" зовете безпрестани, втайне; та бо есть молитва всех лепши, нежели мыслити безлепицю. Всего же паче убогых не забывайте, но елико могуще по силе кормите, и придавайте сироте, и вдовицю оправдите сами, а не вдавайте силным погубити человека. Ни права, ни крива не убивайте, ни повелевайте убити его; аще будеть повинен смерти, а душа не погубляете никакоя же хрестьяны. Речь молвяче, и лихо и добро, не кленитеся Богом, ни хреститеся, нету бо ти нужа никакоея же; аще ли вы будеть крест целовати к братьи, или к кому, али управивше сердце свое, на нем же можете устояти, тоже целуйте и целовавше блюдете, да не приступни погубите душе своее. Епископы и попы и игумены, с любовию взимайте от них благословенье, и не устраняйтеся от них, и по сиде любите, да приимете от них молитву от Бога. Паче всего гордости не име-

йте в сердци и в уме, но рцем: смертни есмы, днесь живни, а заутра в гроб; се все, что ны еси вдал, не шане, но твое, поручил ны еси на мало дний. И в земли не хороните, то ны есть велик грех. Старыя чти яко отца, а молодыя яко братью. В дому своем не ленитеся, но все видите; не зрите на тивуна, ни на отрока, да не посмеются приходящим к вам, и дому вашему, ни обеду вашему. На войну вышед, не ленитеся, не зрите на воеводы, ни питью ни еденью не лагодите, ни спалью; и стороже сами наряживайте, и ночь отвсюду нарядивше около вой тоже лязите, а рано встанете; а оружья не снимайте с себе, вборзе не розглядавше, леношами внезапу бо человек погыбаеть. Лже блюдися и пьяньства и блуда, и том бо душа погыбаеть и тело. Куда же ходяще путем по своим землям, не дайте пакости деяти отроком, ни своим ни чюжим, ни в селех, ни житех, да не кляти вас начнуть. Куда же поидете, идеже станете, напойте, накормите унеина; и боле же чтите гость, откуду же к вам придеть, или прост, или добр, или сол, аще не можете даром, брашном и питьем; ти бо мимоходячи прославять человека по всем землям, любо добрым, любо злым. Болнаго присетите; над мертвеця идете, яко вси мертвени есмы; и человека не минете не привечавше, добро слово ему дадите. Жену свою любите, но не дайте им над собою власти. Се же вы конець всему, страх Божий имейте выше всего. Аще забываете всего, а часто прочитайте: и мне будеть без сорома, и

вам будеть добро. Его же умеючи, того не забывайте доброго, а его же не умеючи, а тому ся учите; якоже бо отець мой, дома седя, изумеяше 5 язык. В том бо честь есть от инех земль. Леность бо всему мати, еже умееть, то забудеть, а его же не умееть, а тому ся не учить; добре же творяше, не мозите ся ленити ни на что же доброе. Первое к церкви: да не застанеть вас солнце на постели. Тако бо отець мой деяшеть блаженый и вся добрии мужи свершении: заутреною отдавше Богови хвалу, и потом солнцю въсходящю, и узревше солнце, и прославити Бога с радостью и рече: просвети очи мои, Христе Боже, и дал ми еси свет твой красный; и еще, Господи, придожи ми лето к лету, да прок грехов своих покаявъся, оправдив живот, тако похвалю Бога и седше думати с дружиною, или люди оправливати, или на лов ехати, или поездити, или лечи спати: спанье есть от Бога присужено полудне, от чина бо почиваеть и зверь и птици и человеци. А се вы поведаю, дети моя, труд свой, оже ся есмь тружал пути дея и ловы 13 лет. Первое в Ростову, скозе Вятиче, посла мя отець, а сам иде Курьску, и пакы 2-е к Смоленьску со Свавком Скордятичем, той пакы и отъиде к Берестию со Изяславом, а мене посла Смолиньску; то и Смолиньска идох Володимерю. Тое же зимы то и посласта Берестию брата на головне, иде бяху пожгли, то и ту блюд город тих, та идох Переяславлю отцю, а по Велице дни из Переяславля та Володимерю, на Сутейску

мира творит с Ляхы. Оттуда паки на лето Володимерю опять. Та посла мя Святослав в Ляхы: ходив за Глоговы до Чешьскаго леса, ходив в земли их 4 месяци; и в то же лето и детя ся роди старейшее Новгородьское. Та оттуда Турову, а на весну та Переяславлю, таже Турову. И Святослав умре, и яз паки Смолиньску, а и смолиньска той же зиме та к Ковугороду, на весну Глебови в помочь; а на лето со отцем под Полтеск, а на другую зиму с Святополком под Полтеск, ожгоша Полтеск, он иде Новугороду, а я с Половци на Одрьск, воюя, та Чернигову. И паки и Смолиньска к отцю придох Чернигову; и Олег приде из Володимеря выведен, и позвах и к собе на обед со отцем в Чернигове, на Краснем дворе, и вдах отцю 300 гревен золота. И паки и Смолиньска же пришед, и придох сквозе Половечьскыи вои бьяся до Переяславля, и отца налезох с полку пришедше. То и паки ходихом, том же лете, со отцем и со Изяславос битъся Чернигову с Борисом, и победедихом Бориса и Олга. И паки идохом Переяславлю, и стахом во Оброве. И Всеслав Смолнеск ожьжк, и аз вседъ с Черниговци о двою коню, и не застахом в Смолиньске; тем же путем по Всеславе пожег землю и повоевав до Лукамля и до Логожьска, та на Дрьютьск воюя, та Чернигову. А на ту зиму повоеваша Половци Стародуб весь, и аз шед с Черниговци и с Половци, на десне изъимахом князи Асадука и Саука, и дружину их избиша; и назаутрее за Новым городом рез гнахом силны вои Бел-

катгина, а се мечи и полон весь отяхом. А в Вятичи ходохом по две зиме, на Ходоту и на сына его, и ко Корьдну ходих 1-ю зиму, и пакы по Изяславичих за Микулин, и не постигохом их; и на ту весну к Ярополку совкупляться на Броды. Том же лете гонихом по Половьцих за Хорол, иже Горошин взяша. И на ту осень идохом с Черниговци и с Половци, с Читеевичи, к Меньску: изъехахом город и не оставихом у него ни челядина, ни скотины. На ту зиму идохом к Ярополку совокуплятися на Броды, и любовь велику створихом. И на весну посади мя отець в Переяславли перед братьею, и ходихом за Супой; и едучи к Прилуку городу, и сретоша ны внезапу Половечьские князи 8 тысячь, и хотехом с ними ради битися, но оружье бяхом услали наперед на повозех, и внидохом в город: толко Семцю яша одиного живого, ти смерд неколико, а наши онех боле избиша и изъимаша, и не смеша ни коня пояти в руце, и бежаша на Мулу тое ночи. И заутра, на Госпожин день, идохом к Беле вежи, и Бог ны поможе и святая Богородица: избиша 900 Половець, и два князя яша Багубарсова брата Асиня и Сакзя, а два мужа толко утекоста. И потом на Святославль гонихом по Половцих, и потом на Торческый город, и потом на Гюргев по Половцих. И паки на той же стороне у Красна Половци победихом. И потом с Ростиславом же у Варина веже взяхом. И потом ходив Володимерю, паки Ярополка посадих, и Ярополк умре. И пакы по отни смерти и по Святополце на Суле бившеся с

Половци, до вечера, быхом у Халепа, и потом мир створихом с Тугорканом и со имени князи Половечьскыми. И у Глебови чади пояхом дружину свою всю. И потом Олег на мя приде с Половечьскою землею к Чернигову, и бившася дружина моя с ним 8 дний о малу греблю, и не вдадуче им в острог. Съжаливъси хрестьяных душь и сел горящих и манастырь, и рех: "не хвалитися поганым". И вдах брату отца своего место, а сам идох на отця своего место Переяславлю. И внидохом на святаго Бориса день из Чернигова, и ехахом сквозе полкы Половьчскые не в 100 дружине, и с детми и с женами; и облизахутся на нас акы волци стояще, и от перевоза и с гор; Бог и святый Борис не да им мене в кориcть, невредени доидохом Переяславлю. И седев в Переяславли 3 лета и 3 зимы, и с дружиною своею, и многы беды прияхом от рати и от голода. И идохом на вои их за Римов, и Бог ны поможе, избиша и,а другия поимаша; и пакы Итлареву чадь избиша, и вежи их взяхом, шедше за Голтавом. И Стародубу идохом на Олга, зане ся бяше приложил к Половцем. И на Бог идохом, с Святополком на Боняка за Рось. И Смолиньску идохом, с Давыдом смирившеся. Паки идохом другое с Воронице. Тогде же и Торци придоша ко мне, из Половець Ичитеевичи, идохом противу им на Сулу. И потом паки идохом к Ростову на зиму, и по 3 зимы ходихох Смолиньску; и се ныне иду Ростову. И пакы с Святополком гонихом по Боняце, по ли оли убиша, и не постигохом их, и потом по Боняце же гонихом

за Русь, и не постигохом его. И на зиму Смолинску идох, и Смоленска по Велице дни выидох. И Гюргева мати умре. Переяславлю пришед на лето, собрах братью. И Боняк приде со всеми Половци к Коснятиню, идохом за не из Переяславля за Суду; и Бог ны поможе, и полкы их победихом, и князи изъимахом лепшии. И по Рожестве створихом мир с Апою, и поим у него дчерь, идохом Смоленьску; и потом идох Ростову. Пришед из Ростова, паки идох на Половци на Урубу с Святополком, и Бог ны поможе. И потом паки на Боняка к Лубьну, и Бог ны поможе. И потом ходихом в войну с Святополком, и потом пакы на Дон идохом с Святополком и с Давыдом, и Бог ны поможе. И к Выреви бяху пришли Аепа и Боняк, хотеша взяти и: ко Ромну идох со Олгом и с детми на нь, и они очитивше бежаша. И потом к Меньску ходихом на Глеба, оже ны бяше люди заял: и Бог ны поможе, и створихом свое мышленое. И потом ходихом к Володимерю на Ярославля, не терпяче злоб его. А из Чернигова до Кыева нестишь ездих ко отцю, днем есм переездил до вечерни; а всех путий 80 и 3 великих, а прока не испомню менших. И миров есм створил с Половечьскыми князи без одиного 20, и при отци и кроме отца, а дая скота много и многы порты свое. И пустил есм Половечскых князь лепших из оков толико: Шаруканя 2 брата, Багубарсовы 3, Овчины братье 4, а всех лепших князий инех 100; а самы князи Бог живы в руце дава: Коксусь с сыном, Аклан, Бурчевичь, Таревьскый князь Азгугуй, и

инех кметий молодых 15, то тех живы вед, исек, вметах в ту речку в Влавлии, по чередам избьено не с 200 в то время лепших. А се тружахъся ловы дея: понеже седох в Чернигове, а из Чернигова вышед, и до ..... (здесь, на средине листа, прорвана дирочка.) ..... лета по сту угневал и им даром, всею силою, кроме иного лова, кроме Турова, иже со отцем ловил есм всяк зверь. А се в Чернигове деял есм: конь диких своима рукама связал есмь, в пушах 10 и 20 живых конь, а кроме того иже по рови ездя имал своима рукама те же кони дикие. Тура мя 2 метала на розех и с конем, олень мя один бол, а 2 лоси, один ногама топтал, а другый рогома бол, вепрь ми на бедре мечь отял, медведь ми у колена подъклада укусил, лютый зверь скочил ко мне на бедры, и конь со мною поверже: и Бог неврежена мя съблюде. И с коня много падах, голову си розбих дважды, и руце и нозе свои вередих, в уности своей вередих, не блюда живота своего, ни щадя головы своея. Еже было творити отроку моему, то сам есмь створил дела, на войне и на ловех, ночь и день, на зною и на зиме, не дая собе упокоя. На посадники не зря, ни на биричи, сам творил что было надобе, весь наряд и в дому своем, то я творил есм. И в ловчих ловчий наряд сам есмь держал, и в конюсех, и о соколех и о ястрябех, тоже и худаго смерда и убогые вдовице не дал есм силным обидети, и церковнаго наряда и службы сам есм призирал. Да не зазрите ми, дети мои, но ин кто прочет: не хвалю

бо ся ни дерзости своея, но хвалю Бога и прославляю милость его, иже мя грешнаго и худаго селико лет сблюд от тех час смертных, и не ленива мя был створил худаго на вся дела человечьская потребна. Да сю грамотицю прочитаючи, потъснетеся на вся дела добрая, славяще Бога с святыми его. Смерти бо ся, дети, не боячи, ни рати, ни от звери, но мужьское дело творите, како вы Бог подасть. Оже бо яз от рати и от звери и от воды, от коня спадаяся, то никтоже вас не можеть вредитися и убити, понеже не будеть от Бога повелено; а иже от Бога будеть смерть, то ни отець , ни мати, ни братья не могуть отъяти. Но отче добро есть блюсти, Божие блюденье леплее есть человечьскаго. О многострасный и печалны аз! Много борешися сердцем, и одолевши душе сердцю моему, зане тленьне сущи, помышляю, како стати пред страшным Судьею, каянья и смеренья не приимшим межю собою. Молвить бо, иже Бога люблю, а брата своего не люблю, ложь есть. И пакы: аще не отпустите прегрешений брату, ни вам отпустить Отець ваш небесный. Пророк глаголеть: не ревнуй лукавнующим, ни завиди творящим безаконье, что есть добро и красно, братья вкупе! Но все дьяволе наученье! То бо были рати при умных дедех наших, при добрых и при блаженых отцих наших; дьявол бо не хоче добра роду человечскому, сваживаеть ны. Да се написах, зане принуди мя сын твой, его же еси хрестил, иже то седить близь тобе, прислал ко мне мужь свой и грамоту, река:

ладимъся и смеримся; а братцю моему суд пришел; а ве ему не будеве местника, по възложиве на Бога; а станут си пред Богом; а Русьскы земли не погубим. И аз видех смеренье сына своего, сжалихси и Бога устрашихся, рекох: он в уности своей и в безумьи сице смеряеться, на Бога укладаеть; аз человек грешен есмь паче всех человек. Послушах сына своего, написах ти грамоту: аще ю приимеши с добром, ли с поруганьем, свое же узрю на твоем писаньи. Сими бо словесы варих тя переди, его же почаях от тебе смереньем и покаяньем, хотя от Бога ветхых своих грехов. Господь бо нашь не человек есть, но Бог всей вселене, иже хощеть, в мегновеньи ока вся створити хощеть, то сам претерпе хуленье и оплеванье и ударенье, и на смерть вдася, животом и смертью; а мы есмы человеци грешнии? Ли си день живи, а утро мертви, день в славе и в чти, а заутра в гробе и без памяти, ини собранье наше разделять. Зри, брат, отца наю: что взяста, или чим има по роте! Но токмо оже еста створила души свои. Но да сими словесы, пославше бяше переди, брат, ко мне варити мене. Егда же убиша дети мое и твое пред тобою, и бяше тебе узревше кровь его и тело увянувшю, яко цвету нову процветшю, якоже агньцю заколену, и рещи бяше, стояще над ним, вникнущи помыслы души своей: увы мне! что створих? И пождав его безумья, света сего мечетнаго кривости ради налезох грех собе, отцю и матери слезы; и рещи бяше Давыдскы: аз знаю грех

мой, предо мною есть боину. Не крове деля пролитья, помазаник Божий Давыд прелюбодеянье створи, посыпа главу свою и плакася горко в от час: отда ему согрешенья его Бог. А к Богу бяше покаятися, а ко мне бяше грамоту утешеную, с сноху мою послати ко мне, зане несть в ней ни зла, ни добра, да бых обуим оплакал мужа ея и оны сватбы ею, в песний место; не видех бо ею первее радости, ни венчанья ею, за грехы своя; а Бога деля пусти ю ко мне вборзе с первым словом, да не с нею кончав слезы посажю на месте, и сядеть аки горлица на сусе древе, желеючи, а яз утешюся о Бозе. Тем бо путем шли отци наших: суд от Бога ему пришел, а от тебе. Аще бы тогда свою волю створил, и Муром налезл, а Ростова бы не заимал, а послал ко мне, отсюда ся быхом уладили; но сам разумей, мне ли бы послати к тебе достойно, ци ли тобе ко мне? Да же еси велел детяти: "слися к отцю", десятья есм послал. Дивно ли, оже мужь умерл в полку ти? Лепше суть измерли и роди наши. Да не выискывати было чюжего, ни мене в сором, ни в печаль ввести. Научиша бо и паропци, да быша собе налезли, но оному налезоша зло. Да же начнеши каятися Богу, и мне добро сердце створиши: послав сол свой, или попа, и грамоту напиши с правдою, то и волость възмешь с добром, и наю сердце обратиши к собе, и лепше будем яко и преж; несм ти ворожбит, ни местьник. Не хотех бо крови твоея видети у Стародуба: Но не дай ми Бог крови от руку тво-

ею видети, ни от последенья своего, ни которого же брата. Аще ли лжю, а Бог мя ведаеть и крестъ честный. Оли то буду грех створил, оже на тя шед к Чернигову, поганых деля: ли того ся каю, да то языком братьи пожаловах, и паки е победах, зане человек есмь; аще ти добро, да с тем, али ти лихое, да то ти седить сын твой хрестьный с малым братом своим, хлеб едучи дедень, а ты седиши в своем. А о се ся ради; али хочеши тою убити, то ти еста, понеже не хочю я лиха, но добра хочю братьи и Русьскей земли. А его же то и хощеши насильем, тако выдаяла у Стародуба и милкуяюча по тебе отчину твою: али Бог послух тому, с братом твоим радилися есве, а не поможеть радитися без тебе. И не створила есве лиха ничтоже, ни рекла есве: сли к брату, дондеже уладимъся, оже ли кто вас не хочеть добра, ни мира хрестьяном, а не буди ему от Бога мира узрети на оном свете души его. Не по нужи ти молвлю, ни беда ми которая, по Бозе сам услышашь: но душа ми своя лутши всего света сего; на страшней при без суперник обличаются, и прочее. Премудрости наставниче, и смыслу давче, несмысленым казателю и нищим заступниче! Утверди в разуме мое сердце, Владыко! Ты дажь ми слово отче, се бо устнама моим не въздрани впити ти: милостиве, помилуй падшаго! Упованье мое Бог, прибежище мое Христос, покров мой святый Дух. Надеже и покрове мой, не презри мене, благая! Тебе бо имуще по мощницю в печали и в болезни и от злых всех, и

тебе славлю, препатая! И разумейте и видите, яко аз есмь Бог, испытая сердця и сведый мысли, обличаяй дела, опаляяй грехы, судяй сироте и убогу и нищю. Всклонися, душе моя, и дела своя помысли, яже сдея, пред очи свои принеси, и капля испусти слез своих, и повежь яве деянья и вся мысли Христу, и очистися. Андреа честный, отче треблаженый, пастуше Критьскый! Не престай молися за ны чтущая тя, да избудем вси гнева и печали и тля и греха и бед же, чтуще память твою верно. Град свой схрани, Девице Мати чистая, иже о тебе верно царствуеть, да тобою крепимся и тобе ся надеем, побежаем вся брани, испрометаеть противныя и творить послушенье. О препетая Мати, родьшая всех святых пресвятаго Слова! Приимши нынешнее приношенье, от всякия напасти заступи и грядущия муки, к тебе вопьющих; молим ти ся раби твои и преклоняем си колени сердця нашего, приклони ухо твое, чистая, и спаси ны в скорбех погружающася присно, и сблюди от всяко плененья вражья твой град, Богородице! Пощади, Боже, наследья твоего, прегрешенья наша вся презри, ныне нас имея молящих тя на земли, рожьшю тя без семене, земную милость, изволив облещися, Христе, в человечьство; пощади мя, Спасе рождься, и схрань рожьшю тя нетленну по рожестве, и егда сядеши судити дела моя, яко безгрешен и милостив, яко Бог и человеколюбець. Дево пречастая, неискусна браку, Богообрадованная, верным направленье! Спаси мя погыбшаго, к Сыну си вопьющи. Помилуй мя, Господи,

помилуй, егда хощеши судити, не осуди мя в огнь, ни обличи мене ярости си. Молит тя Дева чистая, рожшая тя, Христе, и множьство Ангел и Мученик сбор. О Христе Исусе Господи нашем, ему же подобаеть честь и слава, Отцю и Сыну и святому Духу, всегда и ныне, присно, век.

『教訓』

悪しき我は，至福なる，栄えある，おのれの祖父ヤロスラフによつて洗礼の折にヴアシリイと呼ばれ，ルシの名をヴオロジメルと言われ，愛された父及びおのれの母モノマハたちによつて・・・・（この間，四行半は余白になつていて読めない。）・・・しかして洗礼された人々のために，おのれの情深さによつて，また，あらゆる災厄から父なる祈りによつて，どれほどそれらを守つたことであろう！　そりの上に坐しつつ，我はおのれの心の内に思いて，神への讃美を奉つた。神は我を今日まで罪深き者にもかゝわらず守り給うたのである。我が子たちよ，また他の誰にても，この遺訓を聞いて笑わざれ。もしも誰かに（この遺訓が）気に入れば，おのれの心にそれを受け入れて，怠ることなく，また労苦せよ。先づ，神のために，また，おのれの魂のために，神のおそれをおのれの心に持ち，多くの恩情をつくせ。それはあらゆる善の初めである。もしまたこの遺訓が気に入らないものがあるなら，その者たちは噛けることなくかく言うがよい。道は遠し，そりの上に坐しつゝ，彼はうつろなることを言いしと。ヴオルガ河において，我が兄弟たちからの使者が我を迎えて，かく言つたことがあつた。即ち〃我々に味方せよ。ロスチスラフの子等を追放し，彼等の領地を取りあげるために。もしも（汝が）我々と共に行かないたら，我々はおのれの行動をとり，汝はおのれの行動を取れと〃と。しかして（我は）言つた。即ち〃もし，たとえ汝等が

怒るとも，我は汝等と共に行くことはできない．十字架（苦い）をおかすことは（できない）〃と．しかして（我は）使者たちを行かせ，詩篇を手にして，悲しみつゝそれを開いた．我に読まれたのは――魂よ，何を悲しみ，何故に我をまどわせるか云々――という言葉であつた．しかしてその後我はこれらのうるわしき言葉を選び出して，それを順番に並べて書きあげたのである．もしも汝等に終りの所が気に入らなければ，最初の部分をとるがよい．（これより以下詩篇の言葉……筆者註）．我が魂よ，何を悲しむや？　何故に我をまどわせるや．神に安んでよ．我は総てを神に打ちあけたればなり．（XLI，12）ずるき者たちと争うなかれ．不法をなすものたちを羨むなかれ．ずるきものは滅され，神に耳を傾けるものは大地を占めるであろう．（XXXVII，1）なおまた言わん．罪人はほろびんと．そはおのれの位置を求めて，見出し得ず．温順なるものは大地をたのしみ，平和の多きに楽しみをなさん．罪深きものは正しき者を見ておのれの歯を彼に向つてきしませ，神はそれを笑い給い，彼（罪深きもの）の（死の）日の来るを予言し給う．罪深きものは武器を抜き，おのれの弓を引きしぼりて，貧しきもの及び不幸なる者を射んとし，正しきものを心痛めんとする．彼等の武器は彼等の心を打ち破り，彼等の弓は打ちこわれるのである．罪深きものたちの多き富より，正きものの少き（富）はまさる．何故ならば，罪深き者たちの力はやぶれ，主は正きものたちを確保し給う．これぞ罪深き者のほろぶ故なり．正き者を（主は）あわれみて彼等にほどこしを為し給う．主をたゝえるものは大地をつぎ，主を呪うものはほろぼされん．主によりて，人の足取りは正されるものなり．人は落ちてなお打ち割られざるは，主が人の手をさゝえ給う故なり．我若かりき．しかして老いぬ．しかして，正しきものの捨ておかれ，その子等のパンを求め歩くをいまだ見ざりき．正しきものは如何なる日にも情をかけ，人に貸し与え，しかして，彼が子孫は祝福されん．

悪をさけて善をなせ．平和を求めて（悪を）追い払え．されば，とわに生きるべし（XXXVII．9～17，19，21～27），人々が立ちあがるとき，（人々は）生きたまゝ我等を食いつくすであろう．主の怒りが我々にもえさかるとき，水は我等を沈めるであろう．神よ，我をあわれみ給え．我は人にふみつけられたればなり．（人は）終日攻め立てつゝ，我を圧迫し，我が敵は我をふみにじりたり．我に向いて上より攻めるもの多し．（LV，1－2）正しきものは喜こび，復しゅうを見るとき，おのれの手を罪深き者の血に洗い浄めん．しかして人は言いたり．もし，正しき者にむくいあれば，即ち，地上に裁き給う神のいますなりと．（LVII，11～12）我が敵の手より我を救い出せ，神よ，しかして，我に向いて起てるものたちより我をまぬがれさせ給え．法を犯せる者たちより我を救い，血に飢えし人々より我を救い給え．彼等は我が魂をあざむきたればなり．（LVIII，1－4）彼が憤りにおける怒りの如く，彼が御心における生命もまた然り．夕には涙の来たるとも朝には喜びの湧くあり．我が生命より汝の恩情はすぐれたり．我が口をして汝をたゝえしめよ．我が生命のあらん限り汝をたゝえ，汝の名において我が手をあげん．（LXII，4～5）ずるき者たちの群より，また道ならぬことをなせる多くの者たちより我を守り給え．（LXIV，3）．心正しきものは総てたのしみ喜こべ．常に日頃主を（我は）たゝえん．主の讃美のとこしえなれ，云々（XXXIII，2）．

ところで，ヴァシリイは教えている．若者たちを集めて，清く，けがれなき魂と，悪しき肉体と，温和なる対話と，主の言葉を手本とすべきことを．食し飲するは，大いなる騒ぎのあるべからず．年長者のものにては沈黙し，賢き者の言うを聞き，年長者には従い，同年輩者及び若年者には愛を持ち，悪しきたくらみなしに語らい，より多く物を思え．言葉にては荒々しく言うことなく，口にて裁きをなさず，多くは笑わず，年長者をおそれ，愚かしき女たちとは語らず，眼を下に向け，魂を高め，女たちをさけよ．

あらゆる者たちより尊敬されるものであろうとも，権力を望むに敢えさとすことを止めざれ．もしも汝等の内の誰かが他の者に奉仕し得たらば，神よりのむくいを望み得べく，永遠の幸を楽しみ得べし．おゝ，聖母マリヤよ！我が貧しき心よりたかぶりと荒々しさを取り去り給え．我等がいやしき一生にありて，この世のうつろさを我がほこらざらんがためなり．信仰ある人よ．心正しく行動するものであることを学べ．福音書の言葉によりて学べ．眼の管理，舌の抑制，智の温順，肉体の制圧，怒りの押殺，思考の清純順守，主のための善行への渇望，これなり．奪われしものは復しゆうするなかれ，憎まれし者は，愛せよ．追われし者は耐えよ．非難されし者は祈れ．罪を禁ぜよ．はづかしめられたる者は許せ．みなしごに（正しき）裁きをなせ．夫なき女を弁明せよ．来たれ，合流せんためにと主は言い給う．もし汝等の罪が紫なりとも（我は）それを雪の如く色染めよう云々と．（イサヤ伝；1，18）精進の春及び悔悟の花はかゞやき，兄弟よ，自からを清めよう．肉体及び魂のあらゆる血より．光を与え給うものによびかけて，人間を愛し給う者よ，汝に栄光あれと言わん．まことに，我が子等よ，人間を愛し給う神が如何に情厚く，深きかを知れ，我々は罪深き，死すべきものなるに，もし誰ぞ我等に悪をなさば，（我等は）（我が罪を）省みず，速かに彼の血を流さんものと欲す．しかれども我等が主は生命及び死をつかさどりつゝ，我等が罪を我等が一生に及びて耐え給う．しかしてまた，おのれが子を愛する父の如く，我等が一生に及びて，打ちつゝもまた再びおのれのもとに引きよせ給う．しかしてまた，我等が主は敵に対する勝利をば我等に示し給い，三つの良き事を以て敵からまぬがれしめ，且つ，敵に打ち勝たせ給う．（三つとは即ち）悔悟，涙及び喜捨なり．しかして，これは，我が子等よ，三つの事によりておのれの罪からまぬがれ，天の王国を失わざるとは，神の教えは汝に困難なるものにあらず．しかして神のために怠ることなかれ．

願わくば，この三つの事を忘れることなかれ．困難なるものにあらざればなり．閑居にあらず，修道院生活にあらず，飢えることにもあらざればなり．他の善行者たちの耐えているに比べれば，これらがさゝやかなことにて神の恩ちようを受けようとは，人間とは如何なるものなりや．人間を汝は如何に思うや？（詩篇；Ⅷ，6）主よ，汝は偉大なり．しかして汝の業は不思議なり．人間の知恵はいかにすれども汝が不可思議を物語り得ざるなり．また我々は言う．主よ，汝は偉大なり．汝の業は不思議なり．この地の果てまで永遠に汝の名は祝福されほめられてあるものなりと．この世にたてられし汝が偉大なる奇蹟と善と，汝の力をば，誰ぞたゝえほめざるものなき．天がとゝのえられ，陽があり，また月があり，また星があり，闇が，光があり，水の上に地が置かれたるは，主よ，汝の考えによりてなり！　様々なる獣及び鳥及び魚は，主よ，汝の考えによつていろどられてあり．しかして，この不思議に（我等は）おどろくものなり．土より人間を創り給い，人間の類の形の様々なるも，もし一つにまとまりて見れば，一様ならざるものもありて，それぞれにおのれの形をなせるは，神の英知によるものなり．しかして，また（我らの）驚くべきは，天なる鳥の楽園より出でて，先づ我等の手に来たり，一つの国には住むことなく，強きものも弱きものもすべての国々に住みたるは，神の命によりて，おのれの森と野を満たさんがためなり．すべてこれをば神は人間の幸のために，食べ物として，楽しみとして与え給いしものなり．主よ，我等に対する汝の恩ちようは偉大なり．罪深き人間のために，これらをば（汝は）なし給いたればなり．かの天なる鳥は，主よ，汝によつて知恵あり．主よ，（汝が）命じ給うとき，（鳥は）歌いて，人を楽しませるなり．しかして，（汝が）鳥どもに命ぜざるときは，舌をばおしの如くとゞめるものなり．主よ，汝は祝福され，きわめてたゝえられたり．（汝は）あらゆる不思議とかの善をなしつくり給いぬ．汝をたゝえざるも

のもは，主よ，父と子と聖靈の名をば，心をつくし，魂を傾けつゝも信ぜざるものなり．そは呪われてあるべし．これらの言葉を読みつゝ，我が子等よ，我等に，おのれが恩ちようを与え給いし神をたゝえよ．しかして，これは弱き我が才智より出でし教訓なり．我が言うことを聞け．たとえ総てを受け入れずとも，半ばを（受け入れよ）．もしも汝等の心を神が軟らげ給わば，おのれが涙をおのれの罪を思いつ流せ．言うべし．邪いんなる者及び盗賊及び取税吏をば汝が許し給いし如く，罪深き我等をも許し給え．と．しかして，教会の中でそれをなして地に伏せ．一夜とても罪を犯すべからず．もし為し得れば，地につくまで頭をさげるべし．もし汝等が病におかされなば，三度（これをおこなえ）．しかしてこれを忘れるなかれ．怠るなかれ．夜中の礼拝及び祈りによりて人は悪魔に打ち勝つものにして，日中に人の犯せし罪は，それによりて許されるものなればなり．もしも馬にて進み行く折，誰とも事をかまえることなかりせば，もしも他の祈りの言葉を言い得されば，〃主よあわれみ給え〃と絶えまなくひそかに言うべし．その祈りは総てにまさり，進みつゝ，エソラゴトを考えるにまされればなり．また何にもまして貧しき人々のことを忘るべからず．しかして能う限り，力の及ぶ限り，みなしごに食を与えほどこしをなすべし．しかして夫なき妻をば自から釈明してやるべし．力強きものが人をほろぼすを許すべからず．正しきものをも，罪ある者をも殺すべからず．また，殺すべく命ずることなかれ．もしもその者が死に価すとも，一人たりともキリスト教徒の魂をほろぼすべからず．会話においては，愚かなると良きとを問わず，神を以て誓うべからず，十字を切るなかれ．そのことに汝には如何なる必要をもなければなり．兄弟たち或は他の誰かが十字架に口づけする（誓う）ことあらば，おのれの心に問いて守り得るものを誓うべし．一度誓いなば，違反しておのれの魂をほろぼさざるよう，（誓いを）守るべし．主教，僧及び修道僧は愛情を以て彼等

の祝福を受け，彼等を遠ざけるべからず．力の限り彼等を愛し且つ配慮せよ．彼等より神への祈りを受けんためなり．胸にも頭にもたかぶりをもつべからず．然らずして言わん．我等は死すべきものなり，今日生きてあれど，明日は棺の中なり，これら総て汝の我等に与えしものは，我等のものにあらずして，汝がこれをただ一時我等にまかせしものなり．と．しかして，地中に(富を)かくすべからず．これは我等にとつて大いなる罪なればなり．長老なるものを父の如くあがめよ．若き者たちをば兄弟の如く(愛せよ)．おのが家にて怠るなかれ．然らずして総てに目をくばるべし．汝等の客人たちが汝等の家及び汝等の食事をば笑わざらんがために家令にも或は下僕にも頼るべからず．いくさに出でては怠るなかれ．軍司令に頼るべからず．飲み物をも，食べ物をも，眠りをも不注意に見過すべからず．見張りの守りをば自から指図すべし．しかして夜中，戦士をば四方に散ぜしめて伏すべし．しかして朝は早く起きるべし．しかして，いそぎて周囲を見渡さず我が身より武器をはづすべからず．人は怠惰のためにほろびるものなり．虚言に用心せよ．飲酒と邪いんに用心せよ．それによりて魂は，肉体もまたほろぶものなればなり．おのれの国をいづれになりと行軍するに際しては，汝等が呪われざらんがためには，おのれの下僕にも他人の下僕にも，住家や田地に害をなさしめるべからず．いづこに行き，いづこにとゞまるとも，巡礼には飲まし食を与えるべし．しかして，何にもまして客を敬え．何処から来たるものであろうとも，それが平民なりとも貴顕なりとも，或は使者たりとも．それを贈物にて敬する能わざれば，食べ物及び飲み物を以てせよ．彼等は途中にて各地に良き者或は悪しきものとて人を言いひろめる者なればなり．病める者を見舞い，死せるものを見送れ．我等総て死するものなればなり．ひとりの人間たりとも愛相をつくし良き言葉を贈り，ないがしろにすべからず．おのれの妻を愛せよ．されど女たちにおのれを律する権力を与えるべか

らず．しかして汝等に総ての最終のものとは，即ち，何物にもまして神のおそれを持てということなり．もしもこれらを総て汝等が忘れなば，くり返して（これを）読むべし．されば我は恥ずることなく，また汝等にも良きことならん．汝等が為し得る良きことは忘れず，為し得ざるものについては学ぶべし．汝の父は家に坐しては，五つの言葉を学び，それによりてこそ他の国々よりは受けしものなるを．怠惰はすべての母なり．為し得るものは忘れ，為し得ざるものについては学ばざるとは．良きことを為すに当りては，善きことに向いて怠るべからず．先づ何よりも教会に対して然り．床にある内に汝等を太陽の訪れることなからしめよ．我が至福なる父は及び総ての名なる士は長所に満ちつゝかく振舞いたればなり．朝の勤行にありて神に讃美を奉り，然る後日の出に太陽を見て，神をうれしくたゝえて言うべし．神なるフリストよ，おのれがうるわしき光を我に与え給い，我が眼を開かせ給いぬと．しかしてまた言え．主よ，おのれが残せし罪を今後は悔いつゝ，おのが生命を正さんがため，願わくば我に年を年についでめぐみ給えと．かくの如く我は神をたゝえおればなり．しかして，坐して親兵団と協議し，或は人々に裁きをなし，また，狩りに行き，貢税集めに，或は寝につくべし．眠りは神によりて正午に定められたり．しかして獣も鳥も，人々もこの定めによりて眠るものなり．しかして今，汝等に我は十三才の時より行軍や狩において我が味わいしおのが苦難について物語らん．はじめ我はヴヤチチの国を経てロストフに行きたり．父が我をつかわしたればなり．しかして父自がらはクルスクにおもむきぬ．しかして二度に及びて（我は）スモレンスクに行きぬ．スタヴク・ゴルチヤチチと共にして，彼はその後にイジヤスラフと共にペレスチエに戻り，我はスモレンスクにつかわされたればなり．しかしてスモレンスクよりヴオロジメルに行きぬ．その同じ冬に我は兄弟たちによりてペレスチエのやかれし焼跡につかわされぬ．其処において（我

は)町の静もれるを見，しかして，ペレヤスラヴリの父のもとに行き，復活祭の後，ペレヤスラヴリからステイスクのヴオロジメルに行きぬ．ポリヤキと和平を結ぜんためなり．其処よりして再びヴオロジメルに夏を迎えて戻りたり．その後スヴイヤトスラフは我をポリシヤにつかわしぬ．我はグロゴフを越えてチエヒの森に至り，彼等が国を四ケ月にして歩きぬけたり．しかしてその同じ年，ノヴゴロドの長兄たる我が息子，我に生れぬ．しかして其処より我はトウロフに行き，春に向いてペレヤスラヴリに，然る後にトウロフにと行きぬ．しかしてスヴイヤトスラフは死し，我は再びスモレンスクに行き，スモレンスクよりその冬にはノヴゴロドに行きぬ．春にはグレブを助けに行きぬ．しかして夏には父と共にポロツクの近くにおり，次の冬にはスヴイヤトポルクと共にポロツクの近くにおり，しかして我々はポロツクを焼払いたり．スヴイヤトポルクはノヴゴロドに行き，我はポロヴエツと共に軍勢をひきいてオルデクスへ，然してチエルニゴフへ行きぬ．

しかして再び我はスモレンスクより父のもとなるチエルニゴフに来たりぬ．しかしてオレグも其処に来たりぬ．ヴオロジメルより導かれ来たりしなり．しかして我は父と共に彼を食事にまねきたり．チエルニゴフの赤き屋敷においてなり．しかして我は父に三百グリヴナの黄金を運びさゝげたり．しかして今一度，スモレンスクより戻り来たりて，ポロヴエツとの戦いを経てペレヤスラヴリにたどりつき，遠征より戻りし父を其処にたづね合わしたり．然る後に我等は再び父およびイジヤスラフと共にその同じ年，ポリスと戦うべくチエルニゴフに行きぬ．しかしてポリス及びオレグに対し勝利をおさめぬ．再びまたペレヤスラヴリに行きてオブロフにとゞまりぬ．しかして，フセスラフはスモレンスクを焼き，我はチエルニゴフ人たちと共に二頭の馬にまたがりて追へどもスモレンスクではたづね合わず，フセスラフを追うその道すがらその国を焼き，クコムリにまで戦い至り．ロゴジスクに至る．な

お戦いてトリコツクに至り，またチエルニゴフに着きぬ．しかしてその冬には，ポロヴエツたちがスタロドウブを総て戦い取りたれば，我はチエルニゴフの人々及びポロヴエツと共に進み，ジエスナ河においてアスクド公及びサウク公を捕え，彼等の親兵団をば打ちくだきぬ．翌日，ノヴゴロドの近くにてベルカトギンの強き部隊を散ぜしめ，剣をも捕虜をもすべてを手に入れぬ．しかしてヴイヤチチの国にはホドト及びその息子に向いて二冬に及びて征き，しかしてコリドンには一冬を征きぬ．再び我等はイジヤスラフの子等を求めてミクリンに進みたれど，彼等をとらえざりき．しかしてその春にはブロドに集らんがためにヤロポルクに向つて進みぬ．その年にゴロジンを奪い取りしポロヴエツを追いてホロル河に至りぬ．しかしてその秋にはチエルニゴフの人々及びポロヴエツと共にミンスクに進みぬ．町を占領してその町に奴隷をも家畜をも残さざりき．その冬にはブロドに集まらんがためヤロポルクに向つて征き，大いなる友情を結びぬ．その春，父は我を兄弟たちに先んじてペレヤスラブリにすえたり．しかして（我等は）スパに進みぬ．プリルクの町への途中，不意にポロヴエツの公たちが八千の兵と共に我等を迎えぬ．我等は彼等と戦うに喜びはあれど，武器は先に輸送されいて，我々は町に入りぬ．（彼等は）たゞ一人のセメツを生け捕りにし，若干の奴隷をもとらえたるのみなり．我が方はより多くのポロヴエツを殺し，また捕えぬ．しかしてポロヴエツたちは馬より降りる能わず，その夜の内にスラ河に逃げぬ．然して翌日，聖母昇天祭に我等は白きベイジヤに進みぬ．神及び聖母の我等を助け給いたればなり．九百人のポロヴエツを打ち殺し，二人の公を捕えたり．バグバルスの兄弟なるオセニ及びサクジ即ちこれなり．二人の男のみ，逃げて生きのびたり．しかしてその後，スヴイヤトスラヴリに向いてポロヴエツを我等は追い，その後，トルチエスクの町に向い，また，ユリエフを望んでポロヴエツを追いぬ．しかして再び対岸にてクラス

ヌイのほとりにポロヴエツを破り，ロスチスラフと共にヴアリンのかたわらにて天幕を手に入れぬ．しかしてその後に，我はヴオロジメルに行き，再びヤロポルクを其処に坐せしめたるも，ヤロポルクは死去しぬ．しかして再び父の死後，スヴイヤトポルクの時に，ストウグナに我等はポロヴエツと夕刻まで戦い，ハレプのかたわらで戦えども，トウゴルカン及び他のポロヴエツの公たちと和平を講じ，グレブの家臣たちよりおのれの総ての親兵団を取りあげぬ．しかして再びオレグはチエルニゴフなる我を目指して総てのポロヴエツをともないて進み来たり，我が親兵団は彼等と小さき盛土に位置して八日間戦い，彼等をして，とりでの中に入るを許さざりき．キリスト教徒の魂と燃えさかる村々及び修道院を嘆きて我は言いぬ．ポロヴエツ人どものほこり高ぶることのなきようにと．しかして兄弟に彼の父の王座を与え，我は我が父の王座なるペレヤスラヴリに行きぬ．しかして我等はボリスの日にチエルニゴフより出でて，子や女たちを含みて百人ばかりなるポロヴエツの軍勢を破り進みたり．しかしてポロヴエツは，狼の如く我等に舌なめずりし，渡しや山々に立ちてありぬ．神及び聖ボリスは我をば彼等が利には引き渡し給わず，害されることなくして我等はペレヤスラヴリに到着しぬ．しかして我はおのが親兵団と共にペレヤスラヴリに三年と三月坐しぬ．しかして我等は戦い及び飢えによる幾多の災厄を耐えたり．しかしてリモフのために彼等（ポロヴエツ）の軍勢に向い進攻し，神の加護によりて彼等を打ち，また他の者たちを捕えたり．しかして再びイルタリイの子等を打ち，ゴルタフに行きて彼等が天幕を占領しぬ．しかしてオレグに向いてスタロドウグに進みたり．彼がポロヴエツに投降せしためなり．ボニヤクに向いてブグにスヴイヤトポルクと共に進み，ロシにも行きぬ．しかしてスモレンスクに進みダヴイドと和を講じ，また再びヴオロニツアと共に進みぬ．その折にトルツイもまたポロヴエツのイチチエイの子等と共に我に向いて来たりし

ために，我等は彼等に対してスラ河に進攻しぬ．しかしてその後に，再び冬に向いてロストフに来たり，三冬の後にスモレンスクに行きぬ．しかして今またロストフに行く．しかして再びスヴイヤトスラフと共にボニヤクを追い，或者は殺せしも，彼等を追い捕え能わざりき．しかしてその後にもボニヤクを追いてロシに行くも，ついに彼を捕えざりき．しかして冬に向いてスモレンスクに行き，しかして復活祭の後スモレンスクを出でぬ．ギユリイの母は死せり．夏にはペレヤスラヴリに来たり，兄弟たちを集めぬ．しかしてボニヤクは総てのポロヴエツと共にスニヤチンに来りたれば，迎えてペレヤスラヴリを出でスラ河に行きぬ．しかして神の我等を助け給うありて，彼等の軍勢を破り，位高き公たちを捕え，降誕祭の後にアパと和を講じて彼より娘をとり，スモレンスクに来たりぬ．しかして後にロストフに行きぬ．ロストフより戻り来たるや再びスヴイヤトポルクと共にポロヴエツに向いてウルバに進めども，神は我等を加護し給いぬ．しかして，またボニヤクに向いてルビンに行けども神は我等を助け給いぬ．しかしてまたその後にスヴイヤトポルクと共に戦いに行けども，また再びスヴイヤトポルク及びダヴイドと共にドンに進めども，神は我等を加護し給いぬ．ヴイリにアエパ及びボニヤクの来りて，ヴイリを取らんとせしことあり．オレグ及び子等と共に彼等に向いてロムンに我の進みたれば，彼等はそれを知りて逃げたり．しかしてその後に，我等が家臣を捕えたるグレブに向いてミンスクに行けど，神は我等を助け給い，我等が思いしことを成就し得たり．ヤロスラヴエツに向いて彼が悪業に耐え能わざるためヴオロジメルに進みたり．しかしてテエルニゴフよりキエフなる父のもとには限りなく乗り行きしことあり．朝に乗り出だして一日を費し夕刻に到着せしなり．この旅の数，大いなるもの八十三に及べど，小さき旅は記憶せず．ポロヴエツの公たちと和を講ぜしこと父の生前と死後にて十九回に及び，多くの家畜とおのれが衣服を手渡し

ぬ．しかして，高位なるボロヴエツの公たちのいましめを解きて放せし数は，シヤルカンの二人の兄弟，バグバルスども三人，オセニの兄弟四人，高位のその他の公たちの数，総て百なりき．しかして生きしまゝ神が我が手に渡し給いし公たちは，息子と共なるスクスシ，ブルチの子アクラン，タレフの公アズグルイ，しかして他の下級なる村長十五人に及びぬ．これらの者たちをば我は生きたまゝともなお来たり，斬りて，このサリニヤ河に捨てたり．しかして，この時，別に打ち殺せし彼等の数は，高位の家臣二百ばかりなり．狩をなしつゝ我が苦労せしこと次の如し．しばしばはチエルニゴフに坐しいたれども，チエルニゴスより出でてこの年までに百ほどの数を追い，労することなくしてそを手に入れぬ．他の狩は別として，父と共にあらゆる獣を狩りしトウロフを除いてかくの如し．しかしてチエルニゴフにて我がなせしことを言えば次の如し．即ち，密林において野生の馬をばおのが手にて生きたまゝ三十頭をつなぎとめ，また記憶によれば，広野に出でてはおのれが手で同じばかりなる野生の馬をとらえたり．二頭の野牛が馬ともどもに我をばその角によりて持ちあげしことあり．一頭の鹿の我を角突きしことあり．おおじかの二頭なる内の一つをば我は足でふみつぶせしも，他の一頭によりて角突かれしこともありき．いのししの我が太ももにきばを立てしことあり．熊の我が膝なるあんじよくをかみしことあり．猛獣の我が太ももをおそいて，馬ともども引き倒せしことあり．されど神は我を害されることなく守り給いぬ．しかして馬から幾度となく落ち，自から二度に及んで頭を打ち割り，両手，両足をおのが若さにまかせてそこね，おのれの生命をおしまず，おのれの頭をかばわざりき．我が従者の為すべきことを我自から行いぬ．戦にありても狩にありても，夜も昼も．しかして暑さにも寒さにもおのれに憩いを与えざりき．市長にも代官にも頼ることなく，自から必要なることをなし，指図を与え，おのが家にありても，斯くの如く振舞いぬ．

狩人には自から狩の指図をなし，馬丁に就ても斯くなしぬ．廐についても小廐についても然り．貧しき奴隷及び貧しき未亡人をば力ある者のはづかしめにはまかさざりき．教会のしきたりと勤行をば我は守りいたり．我が子等よ，或はまた他の者よ，これを読みて我をば非難するなかれ．おのれをも，おのれの勇敢さをも我は誇るにあらず，神をたゝえまつり，神の思ちようをはたゝえるものなればなり．神は罪ある悪しき我をば幾年にわたりて死の時より守り救い，あわれなる我をば怠け者としては創り給わず，あらゆる人間の事業に向くものとして創り給いたればなり．この教えを読みて，あらゆる良き事業に向い，神と神の聖者たちをたゝえよ．子等よ，死をばおそるべからず．戦いをも，獣をも．男子の義務を果すべし．そは神の汝等に与え給うものなればなり．我は戦によりても，獣によりても，水によりても，落馬によりても，いためられることなかりしかば，汝等の内の誰とても，神の命じ給わざる限り，いためられ或は生命を失うことなからんものを．しかして神よりの死の来るときは，父にせよ，母にせよ，兄弟たちにせよ，汝を死より救い得ることなし．されど，もし，用心するが良きことなれば，神の御守り給うは人間の用心にまさるものと言うべし．あゝ，我は多いに耐え，あわれなる者なり．心に多くの戦いをなし，我が心に強を勝たしめたり．死すべき者なるに，恐ろしき最後の審判に如何に立つべきかをおもんばかり，悔悟することなく，おのれが内に心やすらぐことなかりしなり．かく言いしものあり．即ち，神を愛すれどおのれが兄弟を愛せず，いつわりなればなり（ヨハネ伝；Ⅰ，20）と．また言いしものあり．もしも兄弟に罪を許さざれば，汝等が天なる父も汝等に罪を許し給わず（マタイ伝；Ⅵ，15）と．予言者は言う．ずるきことを為すものたちと張り合うことなかれ．不法をなすものたちをうらやむことなかれ（詩篇；XXXVII，1）と．兄弟たちが共にまとまりて暮すより，より良くうるわしきはなし（詩篇；CXXXII，1）と．しか

らずして，総ては悪魔のたぶらかしなり！　それは，我等が賢明なりし祖父たちの頃にも，善にして祝されたる我等が父たちの頃にも戦はありき．悪魔は人類に善を欲せずして我等を滅わすものなり．これを我が汝に書き伝えしは，汝が洗礼し，汝がそばに坐せる我が息子が我に求めたればなり．彼はおのれが家臣をば手紙と共に我につかわして言いぬ．〃話し合いて和睦せん．我が兄弟に神の裁きの来たれり．我は汝と争しゆう者にはならずして，彼等二人が神の御前に立つべきを我等は神に願わん．さればルシの国を亡ぼすことなからん〃．と．しかして我は，我が息子の心やわらげしを見て，心やわらぎ，神をおそれて言いたり．〃彼がおのれが若さと愚かさによりて心やわらげ神に心よせおれど，我はあらゆる人にもまして罪深し〃．と．おのが息子の言うを聞きて我は汝に文を書きぬ．汝は彼を良き様にて迎えるや，或はののしりて迎えるや．そを我は汝が文によりて知りたしと．これらの言葉にて我が先んじて汝に告げしは，心をこみて悔改しつゝ神によりて古きおのれの許しを汝が許されんことを我は待ち望みしことなりき．我等が主は人間にあらずして全世界の神なれば，望み給いしことは眼をまばたく間に為し給い，しかも自からはののしられ，つばされ，打たれつゝも耐え給い，生をも死をも支配し給いつゝ，自からを死に引き渡し給う．しかるに我等は何物ぞ．罪深く悪しき人間ならずや？　今日は生くれども明日は死する身にして，今日は栄光と着れにつゝまれてあれど，明日は棺の中に入りて忘れ果てられ，他の人々は我等が集めし財を分け取らんとす．兄弟よ，我等が父たちを見よ．彼等は何を手に入れしや．彼等にとりて外衣は何するものなりしや？　おのれが魂に為せしことのみ残りたるものを．兄弟よ，先ず汝にはこれらの言葉を以て我に使者をつかわすべかりきなり．我が息子及び汝が息子の殺されし時は，汝が眼は先ず彼の血とうたれし小羊の如く地におちし花の如くしぼみし彼の体を見て，汝は彼のかたわらに立ち，お

のれが魂の思いを見てかく言うべかりしなり．〃悲しきかな．我は何をなせり？　彼が愚かさを利し，この洞ろなる世の不正のために，我は我が身に罪をおい，彼の父及び母に涙を与えたり．〃と．汝はダヴイドに見習いて言うべかりしなり．〃我は知る．我が罪は我が前に立つを〃（詩篇；L，5）と．流血をなせしにあらざるに神聖油を塗られしダヴイドは密通をおこないて，おのれが頭に灰をふり，さめざめと泣きぬ．その時，彼の頭上に神の許しの来たりぬ．しかして神に向いて汝は悔悟すべく，我に向いては慰めの手紙を書き，我が息子の嫁を我に送るべかりしなり．彼女には善も悪もなかりしものなれば，我は彼女をかきいだきて歌うことなく，彼女の夫を泣き，二人の結婚を泣かんとせしものを．我はこの二人の新婚のよろこびを見ず，結婚を見ずざりき．これ我が罪の故か．されば神のために，速かに我のもとへ彼女を最初の使者と共に放免せよ．彼女と共に泣く涙はとゞむべくもあらねど，我は彼女をば身近なる場所に住まわせん．彼女は階上部屋の乾きし木の上に坐して嘆かん．さらば我は自から神のもとに慰めを見出さんものを．我等が祖父たち及び我等が父たちはかゝる道を歩みしなり．即ち彼（イジヤスラフ）には神より救きの来たりしものにして，汝より来たりしにはあらず．もしも汝がおのれが望みをとげてムロムを手に入れるならば，ロストフをば占めることなく我におくれ．さすれば我等は其処にて話し合わんものを．されど自から判断せよ．汝に使者を我がつかわすべかりしや，或は我に汝が使者をつかわすべかりしやを．もしも汝が我が息子に命じて〃父と相談せよ〃と言わば，我は十度なりとも使者を出ださん．勇士が戦場に倒れるは不思議なりや？　我々の先祖たちの良きものはかくして死し行けり．されど他人のものを求め望むべからずして，また我を恥と悲嘆にみちびくべからず．おのれに何物かを獲んために従僕は彼をそそのかしたれど，彼にはわざわいを運び来たりぬ．しかしてもし，神の前に悔い，我に対して良

き心を持たば，僧にてもよし，我におのれの使者を立てよ．正義をこめて文書を書け．さすれば，汝は幸いをもつて国をうるべし．我等が心をおのれに向けるべし．しかして以前にもまして我等は幸福に暮せんものを．我は汝の敵にもあらず，復しゆう者にもあらざるなり．我は涙の血をスタロドウブのかたわらに見るを望まざりき．神よ，汝の手によりても，おのれの命によりても，兄弟の誰かによりても，汝の血を見ることをなからしめよ．もしも我がいつわり言うものならば，神は我を裁き給わん．我は誓わん．異教徒のために汝に向いてチエルニゴフに進みしは，我が罪にして，我はそれを悔いるものなり．それに就きては，我は我が兄弟たちに悲しみつたえ語りぬ．我は人間なればなり．もしも汝に良ければ彼と共におるもよし．もしも汝に悪ければ，汝の洗礼を受けし息子がおのれの幼き兄弟と坐するもよし．祖父のパンを食いつゝ汝はおのれの位に坐するもよし．これらについて自から話し合うべし．もしも汝が彼等を殺さんと欲せば，彼等二人は汝のもとにあり．我は兄弟及びルシの国に災を欲せずして幸を欲するものなればなり．汝がもし強奪によりて手に入れと欲すれば，我等は汝をおもんばかりてスタロドウブにも汝の領地を与えんものを．もしも汝を抜きにしては話し合うを得ざる場合には，我は汝の弟と話し合いをなさん．神の証人となり給うところなり．しかして我等は如何なる悪もなさざりき．我等が和睦するまで兄弟に使者をおくれとも我等は言わざりき．もしも汝等の内の誰かがキリスト教徒に善と平和を望まざれば，その者の魂はあの世においても神の世界を見る能わざるべし．斯く汝に我が言うは必要によりてにあらず．いかなる災によるにもあらず．神の御心によりて汝自からの耳にし得る所ならん．されど我にとりてはこの世の何物にもまして魂は尊きものなり．最後の審判においては，求刑者なくして自から我が身をあばかん．言々．賢明なる教訓者よ．しかして，知性の教え人よ．愚かなる者たちの教師よ，あわれなる者

たちの守り手よ．主よ，智恵の中に我が心をかため給え．父よ，汝，我に言葉の才能を与え給え．我が口を以て汝によびかけるをさまたげざれ．あわれみ深きものよ，落ちし者をあわれみ給え！と．我が望みは神なり．我がかくれ家はキリストなり．我が守りは聖霊なり．我が望み，我が頼りよ．我をいやしむなかれ．祝福されし者よ．汝は我が悲しみにおける助力者にして，病にありても，あらゆる悪しきことどもにありても．ほめ歌われし者よ！
汝を我はたゝえた．我が神なるを知りて見よ．人の心をためし，人の思いを知り，事を判じ，罪を焼き，みなしごにも貧しきものにも乞食にも裁きをなすは神なる我なり．我が魂よ，頭をたれよ．汝によりて為されたるおのれの事業を思いみよ．おのが両眼の前に持ち来たりて，しかしておのれの涙の一滴をそゝげ．明きらけくキリストの所業と総ての考えを知れ．しかして身心を清からしめよ．誠実なるアンドレイ，至福なる父よ，クリチの牧者よ！汝を敬う我々のために祈ることをやめざれ．汝の記念を信仰厚くなせるものは総て，怒りより，嘆きより，また腐敗より，災より，まぬがれしめよ．清き母なる乙女よ，おのが町を守り給え．この町は汝によりて誠の内に君臨しいるものなればなり．この町の汝によりて堅固になり，汝に期待し得て，すべての戦に勝ち，敵を追い払い，敵をして町に従わしめよ．ほめ歌われし母よ．すべての聖者なる聖なる言葉を生み給いし母よ．今なる服従を受け入れて，あらゆる災より，来るべき苦しみより，汝によびかける者を救い給え．汝の僕なる我等は汝に祈らん．我等の心の膝折らん．聖母よ，汝の耳を傾けよ．永遠に悲嘆にしずみし我等を救い給え．神の母よ，汝の町をばあらゆる敵の捕囚より守り給え．神よ，汝の継承に慈悲をかけ給え．我等のすべての罪を除き給え．今，地上において我等汝に祈るものにして，種なくして汝を生みし大地の恩ちよう祈るなり．キリストよ人類に向き給え．救世主よ，汝を生みし母をば汝の誕生後も腐らざるものとして保ち給いし

者よ．我をいつくしみ給え．しかして，我が所業をさばかんとして坐し給うときは，神及び人間をいつくしむ者として罪なく，あわれみ深くあれ．結婚によりて試されざりし清き乙女よ，神によりて喜びを受けし乙女よ，信仰厚きものたちに導きを与え給え．汝の息子に訴え泣きつゝ亡びんとする我を救い給え．我をあわれみ給え．主よ．あわれみ給え．汝が裁きを行うとき，我に火災を宣告し給わざれ．怒りにて我をあばき給わざれ．キリストよ，汝を生みし聖母の，また多くの天使及びじゆん教者の群の汝に祈るなれば．我が主なるイスス・キリストよ．栄光とほまれにふさわしき者よ，父及び子及び聖霊よ，常に，また，今も，永遠にわたりてありませ』．

さて，この様に『過ぎし年月の物語』の中に織り込まれたヴオロジメル・モノマハの教訓は，ボロヴエツの発生源についての古文献を利用した考察の後に位置し，また，ノヴゴロド人と年代記者との話を物語る個所の前に位置している．然し，この長文の全体が果して一貫した教訓であつたがどうかは一読してすぐに気付くであろう．即ち，≪Но все дьяволе наученье!≫『されどこれは総て悪魔のたぶらかしなり』という個所からは，ヴオロジメル・モノマハがオレグ・スヴイヤトスラヴイチに送つた手紙の丸写しなのであり，その手紙は，この長文の末尾五分の一ほどを残して終つている．この五分の一ほどの最後の部分は，教訓よりもむしろ，熱い祈りの言葉である．即ち明らかに，この教訓とても実は三つの部分から成り立つているのである．その才一部に当る教訓そのものとても実は，バイブルの言葉の断片を綴つた信仰をすゝめる部分と，教訓と，ヴオロジメル自身の一生の所業の回想との三つの部分から成り立つている．一般に教訓と言われるこの長文が，ヴオロジメル・モノマハの手にたつた生の資料の書き写しであつたとすれば，その資料を自からの手で書いたはずのヴオロジメル・モノマハは，実は，決してこの長い文章を

通しで書き綴つたのではなかつたであろう．おそらく前半は彼の著作の三つを合わせ，後半には従弟への手紙と，祈りの心澄した文章とを合計五つ組み合わせて，一つの教訓作品の如くに見せて年代記者（ラヴレンチー年代記の）が此処に織り込んだものである．文献的な資料ということになれば，ヴォロジメル・モノマハの教訓という一言でかたづけるのではなくて，彼の少くとも五つの著作が此処には反映していると見なければならないであろう．

さて，この教訓の後に，『過ぎし年月の物語』は次の様な言葉で記事をつゞけている．即ち，『世界が消する時に，アレクサンドル大王によつて山の中にとじこめられた不信仰の異教徒たちがこの世にはびこるであろう』と書いた『教訓』以前の話の筋を追つて，今，山にとじこめられている連中を実際に見たノヴゴロド人の話を聞き，その話を此処につなごうとするのである．『此処で，四年前に聞いたことを物語ろう．ノヴゴロド人のギユリヤタ・ロゴヴイチが私に次の様に言つて語つたところのものである』≪Се же хощо сказати, яже слышахъ преже сихъ 4 летъ, яже сказа ми Гюрята Роговичь Новгородець, глаголя сице:≫ そして，その内容は，ほゞ次の様な意味をもつている．『我はおのれの下級従士をペチヨラへ，ノヴゴロドに貢税を納める人々のもとへ遣わした．わが下級従士は彼等のもとに行き，そこからユグラに向つた．ユグラ人は理解できぬことを語り，北の国々においてサモヤジ人と接して生活している民族である．ユグラ人がわが下級従士に語つたところによれば，〃我々は我等が今まで聞いたことのない驚くべき新しい不思議にであつた．しかしてそれは一昨年にはじまつたことである．海の入江に突き出している山々があり，その高さは天にまで達している．それらの山々には高い叫び声と話し声が（ひゞいている）．しかして（人々は）掘り抜こうとして山を掘つている．その山に小さな窓が開けられていて，そこから人々が語つているが，

彼等の言語は理解することができない．しかして（彼等は）鉄を示し，鉄を所望して手を振つている．誰かゞ彼等に鉄 ——刀或はオノを与えると，彼等はその代りに獣皮を差し出すのである．これらの山々への道は深淵，積雪及び森林のために通ることができない．だから，いつでも彼等のところまで到着できるというわけにはいかない．少し先の方にも北へ行く道がある〃と．‥‥』

ノヴゴロドの人が語つた内容とは此処までである．実際それはノヴゴロドの人ギユリヤタが直接の体験を年代記者に語つているのではなくて，実は，ノヴゴロド人が下級従士を地方に派遣し，その従士が行き先でユグラ人から聞いた物語なのである．年代記者の耳に入るまでには，源のユグラ人 ——→ 聞き手の下級従士 ——→ 主人のノヴゴロド人 ——→ という経路を経ている．およそ，これは，文献を基盤にした記事ではなかつたであろう．ラヴレンチー，イパーチー等の年代記によれば，この所から，『然し我々は以前に物語つた前の（話）に戻ろう』≪Но мы на предняя возвратимъся，якоже бяхомъ преже глаголали≫という言葉までの間に，年代記者が，そのノヴゴロド人ギユリヤタに説明してやる文章がある．『その時，我はギユリヤタに向つて言つた』≪Мне же рекшю к Гюрятѣ≫以下の文章である．『我』≪аз≫という年代記者が，その山中の不思議な民族たちのことを，知つたかぶりにノヴゴロド人に説明してやつている文句である．即ちその不思議な民族を年代記者はアレクサンドル大王によつて山中にとじ込められた連中であるというのである．≪Си суть людье заклененни Александромъ Македоньскымъ царемъ≫ そして年代記者は，なお，この説明にもつたいをつけようとして，明らかに文献を引用している．即ち，『彼等のことについてパタリヤ（パタル）の人メフオジイが語つているところでは』≪Якоже сказать о нихъ Мефодии Патарийскый:≫と述べて引用をはじめている．

その文章は次の様なものである．

и взиде на восточныя страны до моря, наричемое Солнче место, в виде ту человекы нечистыя, от племене Афетова; их же нечистоту видех: ядяху скверну всяку, комары и мухы, коткы, змие, и мертвець не погребаху, но ядяху и женьскыя изворогы и скоты вся нечистыя, то видев Александр убояся, еда како умножаться и осквернять землю, и загна их на полунощныя страны в горы высокия; и Богу повелению, сступишася о них горы полунощныя, токмо не ступишася о них горы на 12 локот. И ту створишася врата медяца, и помазашася сунклитом, и аще хотять огнем взяти, не възмогуть и жещи; вещь бо сунклитова сица есть: ни огнь можеть вжещи его, ни железо его приметь. В последняя же дни по сих изидуть 8 колен от пустыня Етривьскыя, изидуть и си сквернии язы-кы, яже суть в горах полунощных, по повелению Божию.

『(アレクサンドル大王は)東の国々へ太陽の場所と名づけられている海まで進攻し，其処でアフエト(ヤペテ)の種族から出た不潔なる人々を見た．彼等の不潔さを見たのである．あらゆるいとうべきもの，カやのみや，しらみを食い，死人を葬ることなく食い，女の流産したもの及びあらゆる不潔なる家畜を食つていたのである．アレクサンドルはそれを見て，(彼等が)増えて大地をけがすのをおそれた．しかして，彼等を北の国の高い山々の中へ追い込んだ．神の命によつて，彼等の後から北の山々が寄り集つた．彼等の後からはたゞ十二ロコチだけの分がふさがらなかつた．しかして其処には銅の門が造られた．しかして，スンクリト(

сунклит, сонклит, синклит などという形が考えられる・・・・・筆者註）で塗りつぶされた．しかして，もしも人々が（それに）火をかけようとしても，それを焼くことはできない．スンクリトの物質は次の様なものであつた．即ち火もそれを焼くことができず，鉄もそれを破ることがない．ところで，最後の日にはこれらの者たちよりの八種族がエトリフの荒野より出で来たるであろう．北の山々の中にいるこれらの不潔なる種族が神の命によつて，出て来るであろう』

年代記者が『パタルのメフオジイの言つている所によれば』と断る如く，たしかに，この一節は，メフオジイの『告白』≪Откровение≫の一節に準拠したものである．世界の終末についてのメフオジイの言葉なのである．メフオジイの古代スラヴ語訳本は非常に古くから存在したが，その古代語訳を1940年（レニングラード）の『古代ロシア文学部会論文集』が失われた部分をも含めて再構成している．それによつて，古くからあつたメフオジイの古代語による『告白』から，この一節に対応する部分を探し出すのは容易なことである．メフオジイの文章に年代記者がどれほどに手を加え，或はどれほどを省略して，どの様な形でそれを此処に書き抜いたかを知るために，対応部分を次に引用しておこう．

Филипп же, Александров отець, макидонянин бе, и поа жену Хузиту, дщерь Фолову, царя Ефиопьска, от нея же Александр родися... И вшед на восток уби Дария Меденина, и прия земли многы и грады, и в едино сътвори землю и прииде воюя до моря, нарицаемого Солночное место, иде же виде нечистыя человеки, иже суть Иафетови внуци, их же нечистому видев: едаяху бо всяк живот, жюпеличию тварь, гнусное и скверньное, комары и

мухи, котки, змия, мертвыих плъти, женския из-
врагы, еже не съношьши рождено, и всяку тварь
животныих гад, не точию же то едино, нъ и скоты
нечистыя; мертвець же не погребааху, но едяаху.
Да то все видев Александр, бывающаа в них скве-
рны, убоися, еда како доидуть до земли святыа
и осквернять ю от скверненых своих един, и мо-
литися нача богу зело, и повеле събрати я, вся
мужа и жены и дети их, и съпроста рещи всяко
южижство их и погна я от въсточныя земля и гна
я и иде вьслед их, донележе внидоша в края се-
верския; и несть куду влести я ним, ни излести
от них от востока до запада, и ту абие помолися
богу зело со страхом и послуша бог молитву его
и повеле господь бог северьским горам соступите-
ся о них, им же деють нарок Мазы северьскыа; и
съступишася о них, тъчию 12 лактьма не соступиша-
ся о них. И сотворишася от Бога врата медная и
помазаша быша сунъклитом. Да аще имуть хотети
железом рассещи врата, но не могуть, или ижъ-
жещи огнем не могут. Вещь бо есть такова сунъкли-
това, да ни железо его примет, ни огнь жьжет, ни
ту абие угаснеть; всяки бо ся хытрости дьявола
ту сократять и не успеють ничего же. Беси бо
нечист и сквернении и гнусней языци вълшебными
своими злокозненными деды тако утвердиша, да
како любо хытрость не успееть ничего же тому,
яко не мощи им ни огнем, ни железом или киим
умышлением таковая искушити врата и отбежати.
В последняя же дни по пророчеству Езекиину гла-

голюду: в последнаа дни на скончание мира излезеть Гог и Магог на землю Израилитьску иже суть цари язычестии, яже закова Александр об ону страну севера.... яже вогнав аки в ограду Александр и заключи о них врата...

『アレクサンドルの父フイリプはマケドニヤ人であつた．しかして，エフイオピヤの皇帝フォルの娘フジタを妻に迎えた．ところで彼女からアレクサンドルは生れた……しかして（アレクサンドルは）メデニア人のダリイを東方に進攻して殺し，しかして多くの国と町を取つた．しかして国を統一し，戦いながら，太陽の場所と言われている海に来つた．ヤフエトの孫である不潔な人々を進み行きて見た．彼等の不潔さを見たのである．即ち，あらゆる生き物，かぶと虫のたぐい，腐つたもの，けがらわしいもの，カ及びはえ，ねこ，蛇，死せる者たちの体，月足らずして生まれた，女性の排出したたい児，及び，は虫類のあらゆるたぐい，それのみではなくて不潔なる家畜をも：死者たちを葬ることなく食べていたのである．彼等の中のけがらわしいこれら総てのことを見て，アレクサンドルは（彼等が）聖地にまで来たり，おのれのけがらわしさによつて聖地をけがすようなことがあるかも知れないと恐れ，熱心に神に祈りはじめた．しかして，彼等，総ての男たち及び女たち及び彼等の子供たちを集めるように命じた．しかして，彼等の一族をすべて簡単に打ちくだき，しかして彼等を東方の国から追いはらつた．しかして彼等を追い，彼等を追求して進んだ．彼等が北方の境に入り込むまで．彼等のいる其処へは入り込む道はなく，東から西まで彼等の所から出て来ることもできなかつた．しかしてそこで（彼は）再び熱心に，恐れる心をもつて神に祈つた．しかして神は彼の祈りを聞き給い．主なる神は彼等に向つて北の山々に相集るように命じ給うた．ところで，彼等に対する名前を（人々は）北方のマザということにしている．

しかして（山々は）彼等に向つて相集つた．たゞ十二ロコチだけは彼等に向つて相集らなかつた．しかして神によつて銅の門が造られ，スクリトで以て塗られてしまつた．もしも（人々が）鉄で以て門を打ち割り開き，或は火で以て焼こうとしても，（人々はそれを）できないのである．というのは，スクリトの物質はそう言うものだからである．鉄もそれを割り取れず，火も焼くことができない．また火を消すこともできない．というのは，其処では，悪魔のあらゆる奸策は止まず，何も成功しないからである．というのは悪霊が不潔でけがらわしく，しかして腐つた人種をおのれの魔法のたぶらかしの所業でこの様に守り固めたからである．即ち，それに対して如何なる知恵も通用せず，しかして，鉄で以てしても，火で以てしても，また何の企てで以てしても，この様な門を打ちくだき得ず，逃亡できないように．ところが最後の日にはエゼキイの予言が言つているところによれば，世界の終末にゴグ及びマゴグがイズライリの国に，はい出し来るであろうという．彼等とは異教の王たちであり，アレクサンドルが北の向うの国にとじこめたものどもであり・・・・・・・・・アレクサンドルが囲いの中に追い込み，彼等に門の鍵をかけた者たちである』

さて，メフォジイの古代語訳においても，それから取材した年代記者による『過ぎし年月の物語』にしても，山にとじこめられた連中の出口に当る門がスンクリト，シンクリトで塗られているという言葉があつた．そして，それを，火も鉄もおかすことができないものだとしていた．実は，スレズネフスキーもその『古代ロシア語辞典資料』の中で（?）印をつけてもてあました言葉であつた．鉄や火によつても冒すことができないような物質を空想的にそういう言葉によつて固定したものであろうが，ギリシア語に ἀσύγχυτος 即ち『混合されないもの』という言葉があるところを，おそらく，なまつてそのまゝ用いた言葉であつたであろう

上記の年号以下のところに書き込まれている記事は，6618(1110)年の項の最後に，『聖ミハイルの修道院長セリヴエストルがこの年代記書物を書きあげた』≪Игуменъ Селивестръ святаго Михаила написахъ книгы си летописець≫という言葉があるから，古い文献によるよりも，むしろ，自からが知り，経験し，聞き，手近かにある当世的資料をもとにしてこれらの部分を書きあげたのであろう．

『過ぎし年月の物語』が下敷にした主な文献的資料の考察は大体以上にとゞめておいてよいように思われる．

— H —

前項で『過ぎし年月の物語』がその記事の中に多くの古い文献を利用していたことを示した．そして，その折に時によつて，記録的な一連の事件記事が，利用文献の一節を差し込むことによつて途切れていることにも少しふれた．それだけでも分かるように，『過ぎし年月の物語』は何度も何人もの手によつて，関連記事の中に種々のものが後に書き込まれ，書き直され，或は二つ以上の古い記事が時にまとめられて一つに統一されなどして，今日，ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチイ等の年代記にみられる形になつたことが推察される．勿論，その加工者或は加筆者の一人がラヴレンチー年代記の6618(1110)年の項の末尾に署名したシリヴエストル(セリヴエストル)≪Селивестръ≫であつたであつたであろう．この人物だけではなくて幾世代にも何人もの手によつて加筆されたものが『過ぎし年月の物語』の現在に伝わる形のものであつたとすれば，その記事における不統一や矛盾は，多くの不器用な加筆の集積の結果だと見ることができよう．或は数多くの物語や記事を無理に一連の話に統一しようとした結果であろう．この様なつぎはぎによつて創られた『過ぎし年月の

物語』中の典型的な部分は，例えばオリガ女帝に関する物語であろう．6453(946)年の記事から続く物語として見なければなるまい．其処には次の様な内容が書かれている．オリガの夫のイゴリはドレヴリヤネに一層多くの貢税を求めて出撃したが，兵員が少なかつたために敗れ，且つ殺されて，異郷に埋められてしまつた．

イゴリ公の殺された後，その妻オリガは，夫を殺したドレヴリヤネの公から，妻になれと強要される．ドレヴリヤネの使者をオリガは最大の栄誉礼をつくして迎え，船に乗せたまゝ屋敷に運び込んで，あらかじめ掘つておいた大きな穴に船もろとも落して生き埋めにしてしまう．オリガの果した才一の復しゆうであつた．その後オリガはドレヴリヤネのもとに使者を送り，妻になれという要求を聞くから，迎えの重臣を派遣し来たれと伝える．迎えに来た重臣たちを風呂に入れて戸を閉め，焼き殺してしまうのである．即ち才二の復しゆうである．そして自からは嫁として相手方へ親兵団をつれて出発し，夫の墓前に供養をする．迎える相手方が供養の酒によいつぶれるのを見はからつて，彼女は親兵団に命じて五千人もドレヴリヤネを斬り殺してしまうのである．即ちオリガの果した才三の復しゆうである．続いて彼女はドレヴリヤネのとじこもつた町を包囲する．包囲戦をしかれたドレヴリヤネの飢えと疲れを待つて，和睦の提案をする．鳩と雀を三羽づゝ各戸ごとに提出するだけでよいというのである．正直にその和睦の条件をのんだドレヴリヤネは，数多の生きた鳩と雀を三羽づゝ各戸から提出する．夕方を待つてオリガはそれらの小鳥の足に火だねをくゝりつけて放つ．その小鳥たちの火だねのために町は丸焼けになつて，完全な勝利をオリガはおさめることができた．即ち，才四の復しゆうである．ところが，この四つの復しゆう物語には面白い矛盾が見出される．即ち，自からドレヴリヤネの公の嫁になると称して敵地に乗込み，夫の墓前に供養をするという口実で

酒を飲ませた末に酔いつぶれたドレヴリヤネを五千人斬り殺し，オ三の復しゆうを果したのであつた．ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチー各年代記の『過ぎし年月の物語』はこの結びを翌年（6454年）の項にかけて次の様に述べている．

И исекоша их 5000; а Ольга возвратися Киеву,
и пристрои вои на прок их.
Начало Княженья Святославля.
В лето 6454.
Ольга с сыном своим Святославом собра вои многи
и храбры, и иде на Дерьвьску землю. Изидоша Деревляне противу; сънемъшемъся обема полкома на скуп,
суну Святослав Деревляны, и копье лете сквозе уши
коневи, удари в ноги коневи. Бе бо детеск. И рече
Свенелд и Асколд: "князь уже почал; потягнете,
дружина, по князе". И победиша деревляны, Деревляне же побегоша.....

『しかして彼らを五千人斬り殺した．ところでオリガはキエフに帰り，しかして彼等の残り（の者たち）に対して戦いを準備した．

スヴイヤトスラフの治世のはじまり．

6454（946）年．

オリガはおのれの息子スヴイヤトスラフと共に多くの，そして勇敢な軍勢をあつめ；しかしてデレヴアの国へ進攻した．デレヴリヤネは（これに）向つて出撃した．両軍が合戦にはいつたとき，スヴイヤトスラフはデレヴリヤネにヤリを投げた．しかしてヤリは（自分の）馬の両耳のあいだを飛んで（その）馬の足を打つた．というのは（彼は）幼少であつたからである．しかしてスヴエネルドとアスモルドは言つた．〃公はすでに（戦い）はじめた．親兵団よ，公につゞいて進め〃と．しかして（彼等は）デレヴリヤ

ネをうち負かした．ところでデレヴリヤネは逃げた』

先づ才一に何故この物語が6453年から6454年に年号を改められて中断されたのであろう．そして，中断の折に，何故，『スヴイヤトスラフの治世のはじまり』などと銘打つたのであろう．いくら，スヴイヤトスラフという年少の公が其の時に居たにしても，物語は，この後にも長々とオリガ女帝を中心として展開されているではないか．彼女が洗礼を受け，キリスト教に帰依するまでの物語は，この後にも長々とつゞいているのである．スヴイヤトスラフ公が母をしのぐものとして，或は母と別の人格として登場するのは，もつと後のことである．スヴイヤトスラフ公という特異な人格の，そもそもの芽ばえの物語が，彼の母オリガの復しゆう戦の一節に迷い込んだと見るより仕方あるまい．スヴイヤトスラフが幼少の頃から戦争の陣頭に立つていたという物語を，年代記者は話のつじつまを合わすためにオリガの物語の中に組み込んだのであろう．ところが，そのことによつて，スヴイヤトスラフ公の物語をとゝのえる目的は達せられたであろらが，オリガ女帝の方の物語が何とも恰好のつかないものになつてしまつた．戦闘開始の指揮を幼少のスヴイヤトスラフにとらせなくても，オリガ女帝その人がいたはずではないか．才一彼女は勇敢に敵地に嫁といつわつて乗り込み，自から親兵団に命令を下して五千人も斬り殺したほどのつわものではなかつたか．少くとも，彼女の復しゆうの物語はその様に構成されている．種々の物語を書き込み，編集し直している内に，実はこんな形のものが出来上つてしまつたと言わざるを得ない．だから，実際は，『五千人斬り殺した』という言葉の直後には『（他の）デレヴリヤネは逃げた』≪Древляне же побегоша≫という言葉が続き，且つ，この言葉で一つの完成された物語が終つていたものであろうと思われる．古くから伝えられた女傑オリガの伝承的な物語の一つであつたにちがいない．そして，もし，これだけが一つの物語であつたとすれば，

年代記者は才智を働かせて，支配階級の者たちが殺され或は逃亡したドレヴリャネの国の人々については，『しかして他の人々をあるものは殺し，他のものはおのれの家臣たちに奴隷として引き渡した．ところで彼等の残りは貢税を支払わせるために残した．しかして彼等に重い貢税を課した』≪и прочая люди овыхъ изби, а другія работъ предасть мужемъ своимъ, а прокъ ихъ остави платити дань. И възложи на ня дань тяжьку≫ とつゞいて物語はとじられるべきであつたであろう．ところが各年代記の『過ぎし年月の物語』は，そうなつていない．結びであるべき『貢税を課した』という言葉の前に，実は，もう一つの物語が組み込まれてしまつた．即ち，それは，町に立てこもつた敵を包囲して，和睦を申し込みながら，小鳥の足に火だねをつけて夕刻に放ち，町を焼くという物語が組み込まれたのである．だから，結びであるべきこの言葉は，その後へあとまわしになつてしまつているのである．野における戦いと，町に立てこもつたものに対する包囲戦及びそれにつゞく，焼き打ちの策略の物語とは別の物語であつたにちがいない．それらを別々のものだとはせずに，順を追つて実行された四つの徹底的なまでの復しゅう物語のように見せようとして，つぎはぎに組み込もうとした所に，なめらかでない不細工さが現れたのであろう．

また，別の年号の項を見るがよい．即ち，6479(971)年の項である．其処には，グレキとの間に結ばれた古い条約文の写しと断り書きして，幾個条かの条約文が書きとられている．(――――それについては既に前述した――――)．ところが，その条約文の直前のところに，グレキと戦つたスヴイヤトスラフが，既に消耗して数少くなつた親兵団を見て言う文句がある．その所から書き抜いて，条約文をとばし，後半へつないでみるがよい．そうすると自然に次の様な文章が連続してつゞられるではないか．

Видев же мало дружины своея, рече в собе: "еда

како прельстивше изъбьють дружину мою и мене", беша бо многи погибли на полку; и рече: "поиду в Русь, приведу боле дружины".

（これより以下の文章を条約文及びその付随分として省略）

поиде в лодьях к порогом, и рече ему воевода отень Свендел: "поиди, княже, на коних около, стоять бо Печенези в порозех". И не послуша его, поиде лодьях, и .....

『おのれの親兵団が少いのを見て（彼は）独り言をいつた．〃あざむいて（彼らは）我が親兵団および我をも殺さないであろうか〃と．というのは戦いで多くのものたちが倒れてしまつていたからである．しかして（彼は）言つた．〃ルシへもどり，より多くの親兵団をつれて来よう〃と．……（条約文関係の文章）……船に乗つて（ドニエプル河の）浅瀬へ向つて出発した．しかして彼に父の軍司令官スヴエンデルが言つた．〃公よ，馬に乗つて迂回せよ．というのはペチエネギが浅瀬に布陣しているからである〃と．しかして（スヴイヤトスラフは）彼の言うことを聞かず，船で進みはじめた……』

そして，スヴイヤトスラフは，兵員の少いのを見すかしたペチエネギのために，キエフへの道をとざされて，結局，浅瀬で殺されるのである．条約文の個所を除けば，自然のうちに見事ななめらかさで一つの物語が続くのである．とすれば，明らかに文献的な条約文の個所が，この伝承的な面白い物語の途中に組み込まれたと考えざるを得ない．

では，以上二つのことについて，直観と合理性をたよりに，後代の組み込み，加筆による物語の筋の乱れだと見た結論は，あくまでも直観と合理性による結論に過ぎなくて，何物の傍証も得られないであろうか．ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチー各年代記に見られる『過ぎし年月の物語』が，既に，この様な加筆

の末の産物であつたとしたら，加筆されるべき，もとの作品がなければならない．想像される『原初の集』≪Начальный свод≫は，現在に伝えられていない．とすれば，『過ぎし年月の物語』よりも，より一層『原初の集』に近い形をとどめているノヴゴロド才一年代記と比較してみるより仕方あるまい．そこで，上記のオリガ復しゆう物語の個所と，スヴイヤトスラフの物語の条約文の個所とを此処にとり出して，ノヴゴロド才一年代記のその項に当るところと比較してみよう．

オリガの復しゆうの個所には『しかしてドレヴリヤネは逃げた．しかして（人々は）彼等に重い貢税を課した』≪И побѣ-дижа Древляне; и возложиша на них дань тяжку≫（1950年版；科学アカデミー出版所；ノヴゴロド才一年代記；p.113）という言葉がある．ドレヴリヤネが逃げた —— 重い貢税を課したという二つの文章の間には，『過ぎし年月の物語』が伝える町の包囲戦と，小鳥による策略の焼き打ちの物語はその影もみとめられない．この二つの文章の間に，『過ぎし年月の物語』が後代に別の物語を加筆した明らかな証拠になるであろう．（各年代記におけるオリガの物語の記事はそのことごとくを『古代ロシア研究』才五号；p.107～p.140に集録しておいた）．では次にスヴイヤトスラフ公のグレキとの条約文が組み込まれている6479(971)年の項に相当するノヴゴロド才一年代記の記事を見てみよう．其処（同上；p.123）にある対応文章とは；

Видев же мало дружине своея, и рече к собе: "да
како прельстивше, избиють дружину мою и мене";
беша бо мнозе избиене на полку. И рече: "по-
иду в Русь и приведу болши дружине"; и поиде
в лодьях. Рече же ему воевода отень Свенелд:
"поиде, княже, около на конех; стоять бо Пече-
незе в порозех". И не послуша его, нь поидоша в

『ところでおのれの親兵団が少いのを見て，しかして独り言を言つた．〃あざむいて（彼等は）我が親兵団及び我を殺さないであろうか〃と．というのは多くの者たちが戦で殺されていたからである．しかして言つた．〃ルシにもどろう．しかしてより多くの親兵団を連れて来よう〃と．しかして船に乗つてでかけた．ところで彼に父の軍司令スヴエネルドが言つた．〃公よ，馬に乗つて迂回せよ．というは浅瀬にはペチエネギが陣をしいているからである〃と．しかして，彼の言うことを聞かずに（人々は）船で出かけた』

この様にノヴゴロド第一年代記は，条約文とそれに付随的な文章とを全く含んでいない．『過ぎし年月の物語』よりも古い『原初の集』により近い形だと考えられるノヴゴロド第一年代記である．ラヴレンチーをはじめとする年代記の『過ぎし年月の物語』が，嘗つて存在した古い文章の中間に，条約文及びその付随文を加筆したものであることはこれで充分証拠立てられるであろう．

ちなみに，ノヴゴロド第一年代記には，『過ぎし年月の物語』があれほど文献的に引用し，よりかゝつていたハマルトルス年代記からの借用は，その一片さえ見当らない．だから，ハマルトルス年代記から出たと考えられる『過ぎし年月の物語』中の文章も総て『原初の集』を土台とした上に加筆されたものであるといえよう．6476(971)年の項の条約文とその付随分は，一つの物語の中間に差し込まれた形で書きとられる年代記とそうでない年代記とがあるのもこのためであろう．『帝室譜系次第書』≪Книга степенная царского родословия≫第一部第一段第五帝にはスヴイヤトスラフとそのグレキ遠征及び勝利が書きとめられながら一言も条約文にはふれていない．また，プスコフ第一年代記は年号を6480(975)年と変えてスヴイヤトスラフのグレキ遠征を物語りながら，やはり，一言も条約文にはふれていない．と

ころが，ソフイヤ方一年代記においては，6742(967)年から詳しくスヴイヤトスラフの記事を扱つていて，条約文の差し込みの方法はラヴレンチー，イパーチー等の『過ぎし年月の物語』とほとんど変らない．たゞこの年代記では年号が6476年ではなくて6479年に変つているだけである．エルモリンスキー年代記では6478年という年号のもとでこの記事を扱いながら，やはり『和を諸じた』≪створиша миръ≫という言葉を付けただけで，浅瀬へ船で出発する物語を連続させている．ニコン年代記は，ラヴレンチーその他の年代記における『過ぎし年月の物語』のこの個所の文章をやゝ平易に詳しくした形で同じ編集様式をもつている．然し年号は6476年ではなくして6479年としている．その他の年代記のこの項目の取扱いについては省略しておこう．

ともあれ，シヤフマトフがその成立の時期を1093年から1095年の間だと推定した『原初の集』を土台として『過ぎし年月の物語』はハマルトルスの年代記をはじめとするビザンチン文献やその訳文，或は条約文的な資料，口碑，その他の伝承，及び年代記者自身の知つていた当代の出来事，その他を加筆して創られたものであつたであろう．ノヴゴロド年代記が比較的素朴に反映し，『過ぎし年月の物語』がより多く加筆編集の手を加えた，もとの『原初の集』が，推定通り1093年以前に創られたものであつたにしても，果して，その『原初の集』が，白紙の上における全くの『原初』のものであつたかどうかは疑わしい．むしろ，其処には既に幾層にもなお古いものが基礎をつとめていたのではなかつただろうか．然し，現在に伝えられてはいない『原初の集』の論議をするよりも，此処では，『過ぎし年月の物語』の方に問題の重点がある．むしろ，『過ぎし年月の物語』をもう一度詳しく読み直すことによつてこそ，『原初の集』をも含めて，其処に折り重ねられた幾層もの古い層はほぐれ出されるべきであろう．

そこで，ロシア文化史上，ギリシア文明の輸入，キリスト教の

輸入を通じて巨大な足跡を残した画期的な君主ヴラジーミル公（年代記名は東スラヴ的にヴォロジメル公）の記事に立ちかえつてみよう．そのために，筆者は『古代ロシア研究』才六号及び才七号において，あらゆる年代記のあらゆるヴラジーミル記事を古代ロシア語の生の文章のまゝ集録したのであつた．ラヴレンチー年代記の『過ぎし年月の物語』の年号を以てすれば6494(986)年の長い項を見よう．原始スラヴ宗教を捨てゝ新しい宗教を取り入れようとするヴォロジメルのもとへ世界の各宗教の代表者が自分たちの教義を説くためにやつて来るという記事である．勿論そんな事実があつたとは考えられない．むしろ，各宗教の教義を並べることによつて，キリスト教の正しくすぐれていることを英雄ヴォロジメルをちなみにして説こうとしたものであろう．ともあれ，其処には，先づ，ボフミト（マホメツト）の教えの信仰をもつボルガル人が来る．そして，このボルガル人がヴォロジメルに説いたという形で物語られるマホメツト教の教義とは次の様なものであつた．（ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー各年代記による）．

"веруем Богу, а Бохмит ны учит, глаголя: обрезати уды тайныя, и свинины не ясти, вина не пити, а смерти с женами похоть творити блудную; дасть Бохмит комуждо по семидесят жен красных, избереть едину красну и всех красоту възложить на едину, та будеть ему жена; сде же, рече достоить блуд творити всяк; на сем свете аще буде кто убог, то и тамо"; и ина многа лесть, ея же не лзе писати срама ради.

『〃（我々は）神を信仰している．ところでボフミトが我々に教えて言うには，割礼せよ，しかして豚肉を食べず，酒を飲まず，その代り死後には女たちといん慾をなせという．ボフミトは誰

にでも美しい女を七十人づゝ与え，一人の美しい（女）を選び，総てのものの美しさを（その）一人に与える，そしてその（女）がその者の妻となろう．この世では，（彼の）言うには，あらゆるいん薄をなすべきである．この世で貧しいものはあの世でも（そうである）〃と．そしてその他の多くのいつわりが（述べられ），それは恥の故に書くことができない』

酒と女が好きであつたヴオロジメルは，たゞ禁酒と割礼だけを嫌つて，この信仰を拒否したと語られている．続いて，ローマ・カソリツクから派遣された者（ネミツイ≪Нѣмьци≫と複数形を用いている．――現代語でなら『ドイツ人たち』であろうが，此処では一般に言葉の通じ難い外国人の総称であつたかも知れない――）がカソリツク教の教義を語つてきかせる．それによると『空と大地と星と月およびあらゆる生物を創り給うた神を礼拝している』≪кланяемся Богу, иже створил небо и землю, звѣзды, мѣсяць и всяко дыханье≫のであり，教義とは『力に応じて精進寄進することであり，もしも誰かが（酒を）飲み，食べたとしても，そのすべては神の栄光のためである』≪пощенье по силѣ; аще кто пьеть или ясть, то все в славу Божью≫というのであつた．ヴオロジメルは，今度は自分の先祖たちが，その教えを取らなかつたことを理由に拒否して使者を追い帰すのである．言葉通りに読めば，マホメツト教よりも，カソリツクの方が余程先にロシアに入つて来ていたということになろう．『我々の先祖たちがそれをとらなかつた』≪отци наши сего не приняли суть≫という言葉は，そうでなければ生れるまい．先祖たちはその教えを知つていたが取らなかつたという意味で読まれるべきである．然し果してそうであつたかどうか．年代記の書き手はギリシア正教の修道僧であることを忘れるべきではない．そしてその修道僧にも，また彼自身が編集せんとする『過ぎし年月の物語』の素材自身

にも，ロシアの古い伝統がしみ込んでいた．父祖たちを以て範とせよという感覚である．内乱と外敵におびやかされる十一世紀末から十二世紀にかけて，過去は栄光にみちたものであり，同時に再建さるべき目標であつた．先祖たちはその信仰を取らなかつたというのは，何にもました拒否のための理由づけになり得た．先祖が為さなかつたから我々も為さないとは，まさに最大級の拒否宣言になり得た．ところが，986年当時は，ローマという西と，ビザンチンという東の宗教の溝は，相手に対して最大級の拒否宣言をしなければならないほどには深くはなかつたはずである．明らかに，この一節は随分後代になつてから，あたかもヴオロジメルの時代にあつたことのように書き添えたものであろう．

さて，次にヴオロジメルのもとに来たのは，ユダヤ教を信ずるコザルであつた．面白いことに，ローマ・カソリックの拒否されたことを聞いて彼等がやつて来たことになつている．『これを聞いて』≪Се слышавше≫となつているからである．これもまた編集者の手によるものであろう．年代記者が最も高くかゝげようとするギリシア正教を円の中心にすえて，次第にその核心にふれるように，他宗の連中を登場させる手段としては仲々巧妙であつた．その上に，もう一つ，ユダヤ教の使者を此処に登場させて，ローマ・カソリックを非難させようとする術策も含まれていたであろう．だから，ローマ・カソリックの連中はユダヤ教の連中の側から言わせると，自分たちがはりつけにして殺したキリストを信じているのは不合理であるということになる．ユダヤ教の連中は，アブラハム，イサク　ヤコブの唯一の神を信仰しているのである．ところが，このユダヤ教の使者は，ヴオロジメルから，そのおきてを聞かれた時に『割礼をなし，豚肉も，うさぎの肉も食べず，安息日を守ること』≪обрѣзатися, свинины не ясти, ни заячины, суботу хранити≫と答えるだけである．そして，年代記者は，あらかじめ予定したように，ギリシア正教以外のも

のを非難するために，一度利用したユダヤ教の連中を今度はやり玉にあげる．その時には，別の宗派の者を登場させず，ヴオロジメル公とユダヤ教信者との問答の形式をとる．このあたりの編集手腕は実に見事である．その問答は，あらかじめ予定した落し穴への誘導を思わせて仲々面白い．ラヴレンチー年代記その他の『過ぎし年月の物語』から引用してみよう．

Он же рече: "то где есть земля ваша?" Они же реша: "в Ерусалиме". Он же рече: "то тамо ли есть?" Они же реша: "разъгневася Бог на отци наши, и расточи ны по странам грех ради наших, и предана бысть земля наша Хрестеяном". Он же рече: "то како вы инех учите, сами отвержени от Бога и расточени? Аще бы Бог любил вас и закон вашь, то не бысте расточени по чюжим землям; еда нам тоже мыслите прияти?"

『ところで彼（ヴオロジメル）は言つた．〃それでは汝らの国はどこにあるのか〃と．そこで彼らは言つた．〃エルサリムに〃と．そこで彼は言つた．〃それではそこに（今も）あるのか〃と．そこで彼らは言つた．〃神は我々の父たちに対して怒り給い，しかして我々の罪のゆえに我々を国々に散らし給うた．しかして我々の国はキリスト教徒たちにゆだねられた〃と．そこで彼は言つた．〃それでは汝らはいかにして他の者たちを教えているのか．自分たちが神によつてしりぞけられ，散らされているのに．もし神が汝らと汝らのおきてを愛していたならば，（汝らは）他人の国々に散らされることはなかつたであろう．はたして我々も同じように受け入れると（汝らは）思つているのか〃と．

何もかも充分前以て知りつくしていた上で，優越した質問者にヴオロジメルを仕立てあげ，相手を完全に穴へ落す，この手法は，『過ぎし年月の物語』の中で最も傑出した部分である．余程当時

のロシアの神学理論に通じたもの（或は，ものたち）が充分にねり上げた記述であつたと思わなければならない．生のまゝの記述素材をいゝ加減に此処へ織り込んだものではなかつたであろう．だから，その一節の後には，ユダヤ教の側の行動は一切何も語られず，直接，ギリシア正教の哲学者が来るという記述に一転している．あらかじめ予定した落し穴に，予定通り相手を突き落して，一言のつなぎの言葉もなく，ギリシア正教の側からの哲学者の来訪へ話を移す手腕もまたほめられてよいであろう．修道僧たちが，充分に自分たちの教義の心髄を知りつくしていた上でなければ揑ることのできない手法であつたように思われる．実は最大の目的――ギリシア正教の由来と教義を説くこと――の前座的な記述は，前座的であるが故に最も鋭く断ち切らなければならなかつた．ねりにねられた編集方法を我々は此処に見ることができる．此処に至るまでには何度にも及ぶ編集のねり直しが重ねられたことであろう．特に年代記者たちにとつて最も親身なギリシア正教の教義の語り出しだつたからでもある．この語り出しをつなぐ編集方法のねり上げの見事さに比べて，語り終りの部分とその後とをつなぐ場合の編集方法はどうであろう．実は，息をつめるほどに真剣に語り出し，語りつゞけた末に，最後に語り終つて，ホッとした時，次の物語との連絡には，もう息がつゞかなかつた．何度か編集し加筆し書き直した記者たちが，誰もかれも，この失敗をやつたらしい．或は失敗を気づかなかつたらしい．いや，それぐらいのものは，もう，どうでもよいと考えていたのかも知れない．だが，我々にとつては，其処にこそ，『過ぎし年月の物語』の面白い秘密をのぞく窓が開いている．

ギリシアの哲学者は，世界創造から説きはじめる．そして，それぞれの区切りごとに，ヴオロジメルの質問を入れて，再びそれに答える要領で次の区切を語りはじめ，その様にして，キリストへの信仰を説き，信ぜざるものが受けるべき永遠の恐ろしい苦し

みの物語を以て説教を終る．その間に実際用いられた文献的な資料については既に述べたところである．さて，語り終つた時，ギリシアの哲学者はどうしたであろう．『過ぎし年月の物語』はその直後に次の様につゞけているのである．

И се рек, показа Володимеру запону, на ней же бе написано судище Господне, показываше ему одесну праведныя в весельи предъидуща в рай, а ошюю грешники идуща в муку; Володимер же вздохнув рече: "добро сим одесную, горе же сим ошюю". Он же рече: "аще хощеши одесную с праведными стати, то крестися". Володимер же положи на сердци своем, рек: "пожду и еще мало", хотя испытати о всех верах. Володимер же сему дары многи вдав, отпусти и честью великою.

『(哲学者は) かく言つて，ヴオロジメルにとばりを示した．ところでその上には主の裁きの場面が描かれていた．右手の側によろこびの中で楽園へ進み行きつゝある正しき者たちを，左手の側に苦しみに行きつゝある罪人たちを彼に示していたのである．ところでヴオロジメルはため息をついて言つた．〃これら右手のものたちは良きかな．これら左手のものたちはわざわいなるかな〃と．ところで彼 (哲学者) は言つた．〃もしも (汝が) 右手の方に正しき者たちと共に立つことを望むならば，洗礼を受けよ〃と．ところで，ヴオロジメルはおのれの心にとゞめて言つた．〃なおしばらく待とう〃と．あらゆる信仰について吟味しようと思つたからである．ところで，ヴオロジメルはこの者に多くの贈物を与え，彼を大いなる名誉と共に行かせた』

さて，この結びにもあたり，また次の物語との連絡部分にも当るこの文章はどうしたものであろう．熱をこめて述べられたギリシア正教の詳しい教義 ――『過ぎし年月の物語』のこの部分は，

輸入直後のギリシア正教の神学の心髄であつたはずである――につゞいて，最後の審判の図を見せられたヴオロジメルは嘆息さえもらしたと書かれているではないか．当然，すぐに洗礼を受けたという物語の結びがつゞかなければならない．ところが，そうはなつていない．然し実は其処にこそ，面白いからくりがかくされているように思われるのである．此処こそ何等の非常に古い，そして余り上手ではない編集と加筆の手が加えられていると思われるのである．そのために，『なお総ての信仰を吟味してから』洗礼を受けようと心にとゞめて，一応は哲学者を辰らせたという話がゆがんで付随して来たのであろう．ために，『あらゆる信仰を吟味』するにも，もう，その対象は無かつた．別の宗教の教義やおきての点検の記述など，『過ぎし年月の物語』にもノヴゴロド才一年代記にも全く見当りはしない．当然直結されるべきヴオロジメルの洗礼を，こんな下手な理由づけで先にのばすように編集し直したのは，ついでに書きとめておきたかつたヴオロジメル伝承と，もう一つ，当時のギリシア正教の本質をまだもつと述べ立てたかつたからであるにちがいない．武人英雄としてのヴオロジメルの物語を少し宗教的に着色して書きとめること，その折の隙間をぬつて，新しく入つて来た信仰書の訳本のさわりを是非書き入れておきたかつたからであろう．そのためには，最も古くあつた洗礼の物語を，できるだけ先へのばす方が都合がよかつた．一度この目的に沿うように編集し直されると，もう，仲々，洗礼の機会を書きとゞめる場面をもち出せず，次から次へと後まわしになつて，その間に，予定した以上の多くの伝承的物語と教義と，そしてその混合された話の数々を書きつけてしまうことになつたのである．洗礼の場面をもち出すまでに次々ととゞめなく書き加えた物語とは次の様なものである．

その才一は明らかにブイリーナに詠まれるような素材――ヴラジーミル公のまわりに集る英雄たちの話――を下敷にして，

貴族や長老たちを登場させる．其処でヴオロジメルが各宗派から入信勧誘の使者の来訪と，特にギリシア正教の信仰内容をかいつまんで説明し，人々に意見を求めるのである．貴族・長老たちは使者を立てゝ各宗教の勤行儀式を調べさせよと進言するのである．その次二は，使者たちの見聞した各宗教の勤行儀式その他の所業を報告の形で述べるのである．面白いことに使者が調べに行く対象の順番は，先に勧誘に来た者たちの順番と一致している．だから，ギリシア正教を調べて帰つた使者の報告が最も賞讃に満ち華やかであるのに対して，前座的な他宗の調査の結果報告は総て非難がましいものであつた．此処には先の勧誘の折に見られたギリシア正教讃美の目的と手法の同一性がみとめられる．ギリシア正教輸入元の本山讃美が，この世ならぬ美しさと厳かさとでおこなわれたのである．

次三は，ギリシアへ派遣された使者の見聞報告を再び貴族や長老の集る席で行わせる物語である．其処では報告する使者の言葉が中心をなす．入信勧誘に来た各宗の場合と同じ順番で，使者は一層くわしく，多宗の人々の実際の所業を物語るのである．公及び貴族・長老たちは聞き終つて結論を出す．ギリシア正教を受け入れることにしよう，公の祖母オリガも洗礼を受けたのだから——という結論である．

さて，実はこれだけでまたヴオロジメル公が洗礼を受けるべき事態が充分にかもし出されてしまうのである，当然，自から出張するなり，僧を招くなりして，洗礼を受けるべき仕儀にならなければ話の筋としておかしいのである．次三の物語の最後に，『ヴオロジメルは言つた．〃どこで（我々は）洗礼を受けようか？〃と．ところで彼等（長老・貴族たち）は言つた．〃汝に好ましい所で〃と』．≪Володимер рече: "кдѣ крещенье примемъ?" Они же рекоша: "гдѣ ти любо"≫とある．話は，直ちに洗礼の場に及ぶべきであつた．ところが，

先づ洗礼をあと廻しにして，中間に入れた三つの物語も，その三つ目の最後が，また洗礼に及んでしまつた．然も，なお，まだまだ多くの物語をヴオロジメルにはになわさなければならなかつた．いや，むしろ，ヴオロジメル公が洗礼を受ける物語が数多くあつたことであろう．もともと，古い年代記は，その一つか，せいぜい二つを何とかつじつまを合わせて書き取つていたことであろう．後に，その書き取られた物語の結末の部分 —— かくして洗礼を受けたという部分 —— を切り捨てゝ，別の多くの洗礼物語を書き足し，或は，その間に，年代記者にすればおのれらの宗派の立派さと正当さをほめあげる文章を入れたがつたのであろう．だから，古いものの上に別の物語を継ぎ足すことに，洗礼を受けるという結末へ引きづられて来たのである．そして，それにもかゝわらず，あくまでもその結末の部分は切り捨てゝ後へ廻そうとし，再び別の物語を組み入れたものと思われる．洗礼を受けるべき所まで話を進めながら此処でとゞめて，才二次或は才三次的に組み込まれたものが次の物語である．年号だけは一年後の 6496 (988) 年にしている．この様にして再度組み込まれたこの年の物語は，おそらくもともと二つのものであつたであろう．その一つは，コルスニというビザンチン方の町を攻める遠征物語であり，城攻め物語であつたであろう．この町を攻めおとした後の物語は，ヴオロジメルの嫁取りの物語であつた．そして，とうとう，その嫁取りの物語を洗礼と結びつけて，やつと，ヴオロジメルが洗礼を受けるという結果をみちびき出した．当然，もつともつと，以前にみちびき出されていた筈の結末をこゝまで切り捨てゝ引きのばして来た以上，とうとう洗礼を受けるという物語の結末は面白いものでなければなるまい．説教者に勧誘されることによつて，教義を聞き知つた時の感動によつて，勤行儀式の壮厳さを報告されたことによつて，それぞれに洗礼を受けるべき充分な動機と機会があつたはずであり，それぞれの物語ごとに実際に洗礼を

受けたという結末がついていたかも知れない．それの結末を捨てゝ並べた以上最後における結末の導入は以前にもまして迫力があり説得的でなければならない．『過ぎし年月の物語』の記者（編者）はこの辺の呼吸だけは見事に心得ていたように思われる．世に流布していた英雄の嫁取りの説話と疫病治療とをかみ合わせた面白い話を此処にはめ込み，且つ，前後のつじつまを合わせるために幾分かは加筆したのであつた．その物語とは次の様なものである．

и посла Володимер ко цареви Василью и Костянтину, глаголя сице: "се град ваю славный взях; слюшю же се, яко сестру имата девою, да аще ее не вдаста за мя, створю граду вашему, якоже и сему створих". И слышаста царя, быста печальна, въздаста весть, сице глаголюща: "не достоить хрестеяном за поганыя дати; аще ся крестиши, то и се получиши, и царство небесное приимеши, и с нами единоверник будеши; аще ли сего не хощеши створити, не можем дати сестры своее за тя". Си слышав Володимер, рече посланым от царю:"глаголите царема тако: яко аз крещюся; яко испытах преже сих дний закон ваш, и есть ми любо вера ваша и служенье, еже бо ми споведаша послании нами мужи". И си слышавша царя, рада быста и умолиста сестру свою, имянем Аньну, и посласта к Володимеру, глаголюща: "крестися; и тогда постеве сестру свою к тобе". Рече же Володимер: "да пришедъше с сестрою вашею крестять мя". И послушаста царя, посласта сестру свою, сановники некия и прозвутеры; она же не хотяше ити: "яко

в полон", рече, "иду, лучи бы ми сде умрети". И реста ей братья: "еда како обратить Бог тобою Рускую землю в покаянье, а Гречьскую землю избавишь от рати; видиши ли колько зла створиша Русь Греком? И ныне, аще не идеши, тоже имуть створити нам". И одва ю принудиша. Она же седъши в кубару, целовавши ужики своя, с плачем поиде чрез море; и приде к Корсуню, и изидоша Корсуняне с поклоном, и въведоша ю в град, и посадиша ю в полате. По Божью же устрою, в се время разболеся Володимер очима, и не видяше ничтоже, тужаше велми; и посла к нему царица, рькуще: "аще хощеши избыти болезни сея, то въскоре крестися, аще ли, то не имаши изъбыти сего". Си слышав Володимер, рече: "да аще истина будеть, то поистине велик Бог будеть хрестеяньск. И повеле хреститися. Епископ же Корсунский с попы царицины, огласив, крести Володимера; яко възложи руку на нь, абье прозе. Видев же се Володимер напрасное ицеленье, и прослави Бога, рек: топерво уведах Бога истиньнаго". Се же видевше дружина его, мнози крестишася.

『しかしてヴォロジメルは二人の皇帝ヴァシリイとコスチャンチンに使者をおくつてかく言つた．〃見よ，汝等二人の栄えある町を（我は）取つた．ところで（我は）（汝等二人が）未婚の妹をもつていると聞く．もしも彼女を我が妻として与えないならば，汝の町に対して，この町にも我がなした如く，なすであろう〃と．（二人の）皇帝は（これを）聞いて悲しみ，知らせを与えてかく言つた．〃キリスト教徒には異教徒に嫁がせることはふさわしく

ない．もしも（汝が）洗礼を受けるならば，しからば，これも（汝は）受けるであろう．しかして天国をも受け，しかして我々とも信仰を同じくするものとなるであろう．もしもこのことを為すこと欲しないならば，（我々は）おのれの妹を汝に嫁がせることはできない〃と．ヴオロジメルはこれらの者たちの言うことを聞いて，皇帝たちからの使者たちに言つた．〃皇帝たちにかく言え．我々は洗礼を受けよう．今より以前に（我々は）汝等のおきてを調べ，しかして汝等の信仰及び勤行は我の気に入つている．というのは，我等によつて使わされた家臣たちが我に物語つたからである〃と．これらの者たちの言うことを（二人の）皇帝は聞いて喜こび，しかしてアニナという名のおのれの妹に切願した．しかしてヴオロジメルに使者を送つて言つた．〃洗礼を受けよ．そうすれば（我々二人は）おのれの妹を汝につかわすであろう〃と．そこでヴオロジメルは言つた．〃汝等の妹と共に来たり，我を洗礼せよ〃と．しかして皇帝たちは聞き入れ，おのれの妹，二三の高官たち，及び長老祭司たちを派遣した．ところで彼女は行くことを欲しなかつた．（彼女は）言つた．〃捕虜に行くようなものだ．我は此処で死ぬ方がよい〃と．しかして（二人の）兄たちは彼女に言つた．〃神は汝を以てルシの国を悔悟に向わせ給い，ところで（汝は）グレキの国を狂暴な軍勢から救うことになるのではなかろうか．ルシがグレキに如何ほどの悪をなしたかを（汝は）知つているであろう？　しかして今も，もし（汝が）行かないならば，我等に（彼等は）同じことをなすであろう〃と．しかして，やつと彼女を説き伏せた．ところで彼女は船に乗つて，おのれの親戚たちに接ぶんし，泣きながら海を渡つた．しかしてコルスニについた．しかして，コルスニ人たちが出て来て挨拶をなし，しかして彼女を町の中へみちびき入れ，しかして彼女を宮殿に坐らせた．ところで神の御心によつて，この時にヴオロジメルは眼を病み，しかして何も見えず，ひどく苦しんでいた．しかして彼

のもとに皇女は使者をつかはして言つた．〃もしもこの病からのがれることを欲するならば，いそいで洗礼を受けよ．さもなければ，これからのがれることはできないであろう〃と．ヴオロジメルはこれを聞いて言つた．〃もしも真実であるならば，キリスト教の神は真に偉大である〃と．しかしておのれを洗礼せよと命じた．ところで，コルスニの主教は皇女の僧たちと共に説教をおこなつてヴオロジメルを洗礼した．（主教が）彼の上へ手をのせると，たゞちに（彼は）物が見えた．ところでヴオロジメルは急激な治癒を見て，しかして神をたゝえて言つた．〃（我は）真の神を今はじめて見た〃と．これを彼の親兵団がみて，多くの者たちが洗礼を受けた．』

この様に，後になつて，手を加え，最後に織り込んだ物語それ自身がこれまた単一ではない物語の編集であつたことは，その内容から見て明らかに推察されるところである．さて，洗礼という話の結末を此処まで引きのばすことによつて，その間に差し込んだ物語が数多く，しかもなお，それ以外にも，まだまだ，ヴラジーミル洗礼の物語があつたことを，『過ぎし年月の物語』の記者自身が断り書きしなければならなかつた．即ち，自分の占領したコルスニという町で嫁を迎えると共に洗礼を受けたという物語が単に一つの言い伝えにすぎないことを白状するかの様に，『過ぎし年月の物語』は，後に続いて次の様に書きつけているのである．『ところで見よ，本当のことを知らない者たちは（彼が）キエフで洗礼を受けたように言つている．しかしてまた他のものは，ヴアシリイフで（洗礼を受けたもののように言い），またその者たちは，別のことを言つているのである』≪Се же не свѣдуще право глаголютъ, яко крестилъся есть въ Кіевѣ; и ини же реша : Василиви; друзіи же инако скажютъ.≫ この断り書きをもう一度考え直してみるがよい．もしも，勧誘に来たギリシアの哲学者の説教に嘆息するほ

どに感動して，洗礼を受けることに同意した最初の物語が，何の手も加えられなかつたら，直ちに，ヴラジーミルは洗礼を受けたという結びであつたであろう．とすると，それは，断り書きの中で言う『キエフにおいて』≪въ Кіевѣ≫ ということになる．ところが『過ぎし年月の物語』では，知らない者たちの言うことであるときめつけている．然し，それは，強弁にも似ていて，本当は，別の物語を継ぎ足したことを白状しているにすぎない．『過ぎし年月の物語』の編者が台本にした『原初の集』，しかもその『原初の集』が準拠した一層古い何等かの書き物の頃から，おそらく，このヴラジーミル洗礼の物語は幾重にも重ねられていたのかもしれない．『過ぎし年月の物語』の台本である『原初の集』がなお台本にした古い何等かの書き物があつたことは，『過ぎし年月の物語』の記述が何個所かでそれを雄弁に物語つている．

例えば，前にも少しふれた6485(977)年の項にオレグ≪Олег≫の死が記述されている．そして『(人々は)オレグをヴルチイの町のそばの場所に埋めた．しかして彼の墓は今日に至るまでもヴルチイのそばにある』≪И погребоша Ольга на мѣстѣ у города Вручего, и есть могила его и до сего дни у Вручего≫ という言葉がある．『過ぎし年月の物語』はセリヴエストルの加筆署名を以て，ラヴレンチー年代記では1110年即ち6618年で終つているから，素直に読めば1110年までヴルチイのそばにオレグの墓はあつたはずである．ところが，本当は，それより五十年も以前の1044年即ち6552年の記事に『(人々は)二人の公ヤロポルクとスヴイヤトスラフの子オレグとを掘り起し，二人の骨を洗礼して，聖母教会の中にそれらを安置した』≪Выгребоша 2 князя Ярополка и Ольга, сына Святославля, и крестиша кости ею, и положиша я в церкви святыя Богородица≫ とある．だから，実際は『今日に至るまで』の今日とは，少くとも1044

年以前でなければならないし，この部分は1044年以前に書かれたものでなければならないであろう．そして面白いことに，より忠実に『原初の集』を反映したと言われるノヴゴロド第一年代記の6485(977)年の項にも，同じ内容が古代ロシア語よりもより古代スラヴ語に近い文章で≪И пакы погребоша его на мѣстѣ у града, зовомаго Вручьяго; есть могыла его и до сего дне у Вручьяго града≫と記されながら，此処には遺骨の掘り起しと洗礼と移転安置の記事は見当らない．とすると，ノヴゴロド第一年代記も，『過ぎし年月の物語』も共に準拠した『原初の集』或は，なおそのもとになつた古い書き物の，6485(977)年の項を書いた人は，或はその項が書かれた時代は，1044年，即ち年代記年号によれば6552年以前であつたであろう．そこで，1044年以前であつただろうということをたよりに，その年号よりも古い個所だけを見つめてみるのがよいであろう．そこで，この1044年の年号(6552年)の記事から注意深く逆に年代をさかのぼつてみよう．1044(6552)年を末尾として，さかのぼること数年の間に書かれているのは一体何であろうか．特に6545(1037)年の項は注目すべきである．この項は先に断片的に引用したが，明らかに，ヤロスラヴ≪Ярослав≫公にさゝげられた讃美の文章である．そして，そのヤロスラヴ公は，前述の1044年にはいまだ生きて活動している．とすれば，生きて現在活動しつゞけている公に対する讃美の文章であつた．とすれば，最も古い年代記的書き物は，この現帝への讃美で以て終つていたと考えて見ることが合理的であろう．ところが，『原初の集』を『過ぎし年月の物語』よりも忠実に反映したと見られるノヴゴロド第一年代記には，その様な讃美の記事は全くとゞめられていないから不思議である．キエフとノヴゴロドの地域的，或は勢力的相異によるものなのかも知れない．ともあれ，『原初の集』がなお台本にした最古の年代記的書物は大体1037年の項

で終つていたものだと推定しておこう．そして，『原初の集』はそれにでお書き加えて年号をさげて行つたのだとすれば，それは何年までのことであろう．今度は1044年後の記事へ眼を移してみよう．そこで或る一つ一つの事件の年号を付ける態度を取りあげてみよう．

最も明瞭にその態度の特長が出はじめるのが6569(1061)年である．そして，なお，これに附随して面白いことは，この年の記事から，ノヴゴロド第一年代記の記事とラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー各年代記における記事とが珍しく寸分ちがわない形でその文章の隅々まで一致していることである．例えば，ノヴゴロド第一年代記においても，『過ぎし年月の物語』においても，6569(1061)年の項には次の様によまれるのである．前年（6568年）にトルツイ人が敗退した後について，

В лето 6569. Придоша Половци первое на Русьскую землю воевать, Всеволод же изиде противу им, месяца февраля в 2 (вторый) день; и бившимся им, победиша Всеволода, и воевавше отъидоша. Се бысть первое зло от поганых и безбожных враг. Бысть же князь их Искал.

『6569(1061)年．ポロヴエツがはじめて，戦い取るためにルシの国に来たつた．ところで，フセヴオロドは彼等に対して出撃した．二月の月の二日のことであつた．彼等が戦い合つた時，（ポロヴエツ人たちは）フセヴオロドを打ちまかした．しかして戦いつぶして行つてしまつた．これは異教徒の神を信じない敵たちによる初めての災厄であつた．彼等の公はイスカルであつた．』

ノヴゴロド第一年代記と『過ぎし年月の物語』とに同文の記事があり，然も，注意して見ると，年号の取り方において相方とも同じ一つの特長をもつている．即ち，記事中に，二月の月の二日のことであると月日の指定をおこなつていることである．それ以

前には，この様な文中での月日の指定は決してなかつた．年号以外にインジクト≪индикт≫の何年と年を言いかえることがあつても，それは，あくまでも年号指定の直後においてであり，記事文中においてではなかつた．まして月日までの指定はなかつたのである．この月日の指定（ノヴゴロド第一年代記も『過ぎし年月の物語』も共に同じような）は，何を物語るものであろうか．ポロヴエツ人来襲の事件が日付まで間違わずに書きとめられていることは，この外敵の侵入の印象が強烈であつたことにのみよるのではあるまい．年代記者たちにとつて強烈であるべき印象はこれ以外に余りにも多くあつたはずだからである．むしろ，事件後，間もなく書かれたものであることを物語る証拠であると考えるべきところであろう．ということになると，ノヴゴロド第一年代記と『過ぎし年月の物語』の記事が文章の隅々まで一致している以上，その共通の台本であつたと思われる『原初の集』は，1061年の事件の後，余り多くの歳月を経ずしてこのあたりの記事までは書かれていたということになる．最古の台本が先にのべたように，1044年以前に書かれ，それを下敷にして『原初の集』は1061年の後しばらくして書き直され書き足されたということになる．そして，この『原初の集』を，ノヴゴロド第一年代記はより忠実に，『過ぎし年月の物語』は比較的自由に組みかえながら書き直し書きつがれ，ノヴゴロド第一年代記は1447年（委員会写本），1352年(シノダリ写本)まで，『過ぎし年月の物語』は1110年（ラヴレンチー年代記）まで記事がつづいたと言える．

さて，1061(6596)年に，今までになく文中に月日の指定をおこなつたということを記述の相異としてあげたのだが，この年から数年間の記事をもう一度ていねいに調べてみよう．この年，(1061年)，ポロヴエツに向つてフセヴオロドが『出撃した』≪изшелъ≫のは，そして敗退したのは勿論キエフの町からであつた．記述の場所は明らかにキエフにおいてであつたと思われる．と

ころが，その後記述の場がキエフから動き出している．即ち1064(6572)年から1066(6574)年まではキエフからは遠いトムトロカニ≪Тмутрокань≫が記述の中心になり，1068(6576)年には筆は再びキエフに戻つて来る．これは何を意味するのであろう．勿論，事件の筋がポロヴエツという外敵との戦いのために遠いトムトロカニという町に移つたことにもよる．然し，それにしても，公の座のあるべきキエフを完全に筆が離れ，その間一度もキエフに立ちもどる筆の運びをしないのはどうしたことであろう．もしもキエフのペチエルスキー修道院≪Печерский монастырь≫で伝えられるように『過ぎし年月の物語』の古い原版が書かれたものだとしたら，この修道院自身が，或は修道僧である記者が，数年の間キエフを離れたとでも言うことになるのであろうか．或は，キエフの王座からその記者が数年の間，遠くへ(よりたしかに江トムトロカニへ)排除されていたということにでもなるかも知れない．そこで，十一世紀末に創られたといわれる『フエオドシイの一代記』≪Житие Феодосия≫を持ち出して来よう．面白いことに其処には奇妙な一致がみとめられるからである．

即ち，その一代記によれば，大ニコン≪Великий Никон≫という僧がくしくも1061年の二月初旬にキエフの公(イジヤスラフ≪Изяслав≫)の怒りをかつて，トムトロカニに逃げ，1066年まで黒海の沿岸で過したという記事がある．しかもその間，年代記の方では記述の場がキエフからトムトロカニに移つていたのである．そして，ニコンが1066年までいたという黒海の沿岸での事件の記事が『過ぎし年月の物語』の1066(6574)年――即ち記述の筆がキエフに戻る前々年――の項に詳しく書かれているのである．しかも，其処には見事に月と日附まで文中に書かれているのである．その月と日附けも一度ではない．三月三日と七月十日との二度にも及んでいる．一年の間に二度までも月

日を指定するとは何事であろう．そんな記事はそれ以前の年号の項には一度もありはしない．即ち，その文章とは，これまたノヴゴロド第一年代記とほとんど同一文で次の様に『過ぎし年月の物語』には読まれるのである．．この年の記事もまたノヴゴロド第一年代記とほとんど同一文であることを重ねて強調しておこう．

В лето 6574. Заратися Всеслав, сын Брячиславль, Полочьске, и зая Новъгород; Ярославичи же трие, Изяслав, Святослав, Всеволод, совокупивше вои, идоша на Всеслава, зиме сущи велице. И придоша ко Меньску, и Меняне затворишася в град; си же братья взяша Меньск, исекоша муже, а жены и дети вдаша на щиты, и поидоша к Немизе. И Всеслав поиде противу. И совокупишася обои на Немизе, месяца марта в 3 день, и бяше снег велик, поидоша противу собе; и бысть сеча зла, и мнози падоша, и одолеша Изяслав, Святослав, Всеволод, Всеслав же бежа. Посем же, месяца июля в 10 день, Изяслав, Святослав и Всеволод целовавше крест честный к Всеславу, рекше ему: "приди к нам, яко не створим ти зла"; он же надеявъся целованью креста, перееха в лодьи через Днепр. Изяславу же в шатер предъидущю, и тако яша Всеслава на Рши у Смолиньска, преступивше крест. Изяслав же привед Всеслава Кыеву, всади и в поруб с двема сынома.

『プリヤチスラフの息子であるポロチスクのフセスラフが戦いをはじめた．しかしてノヴゴロドを奪い取った．ところでヤロスラフの子等三人，イジヤスラフ，スヴイヤトスラフ，クセヴオロドは軍勢を集めてフセスラフに向つて進攻した．きびしい冬の時

であつた．しかして（三人は）メニスクに来たり，しかしてメニスクの人々は町に立てこもつた．ところでこれらの兄弟たちはメニスクを占領した．男たちを殺し，女及び子供たちを虜にあたえた（捕虜にした）．しかして（三人は）ネミガ（河）に向つた．しかしてフセスラフは（三人に向つて）出撃した．両軍はネミガ（河）で相会した．三月三日のことであり，しかして深い雪があつた．（人々は）相互に攻撃した．しかして激しい斬り合いがあり，多くの者たちがたおれた．しかして，イジヤスラフ，スヴイヤトスラフ，フセヴオロドが勝ち，フセスラフは逃げた．ところでこの後，七月十日に，イジヤスラフ，スヴイヤトスラフ及びフセヴオロドは聖なる十字架に接ぶんし（約束して）彼に言つた．〃我々のところへ来たれ．（我々は）汝に悪をなさないであろうから〃と．ところで彼は十字架接ぶん（約束）に期待して，舟に乗つてドニエプルを渡つた．イジヤスラフが先に立つて天幕に向つたとき，かくして（人々は）十字架（約束）を破つてフセスラフをスモリンスクのそばのルシヤ河のほとりで捕えた．イジヤスラフはフセスラフをキエフに連れ来たり，彼を二人の息子と共に牢に入れた．』

この一致を考慮に入れると，先づ1037年から1039年の間に最も古い年代記集が編集され，1060年代のはじめの記事をキエフのペチエルスキー修道院のニコン《Никон》がそれに加筆編集し直して1073年までの記事を続け，1093年か或はその翌年，翌々年頃に再び誰かの手で加筆編集し直されて，『原初の集』が生まれた．そして，十二世紀はじめ頃に『過ぎし年月の物語』は何回かの加筆の末に創られたという推定が生まれる．

たしかに，大ざつぱにはその通りであつても，この様に度重なる加筆，編集，組み込み等々に際して，それぞれにどんな立場でどんなものが加えられ抜き取られ，ねり直されたかという問題が残るであろう．雑多なものをたゞ雑然と量的にふくらまして来た

だけであつたとは考えられないからである．その意味では，『過ぎし年月の物語』中，年号の新しい記事よりも，初めの頃の年号の古い記事の方が度重なる編集を生き残つたものとして特に面白いであろう．キリスト教輸入前後の原始宗教とキリスト教との混合し合つている時期の記事はその意味でもう一度見直されなければならない．その典型的なものはオリガ女帝の記事であろう．そしてまたヴォロジメル大公の記事である．共にそれらの記事については，『古代ロシア研究』才五号（オリガ女帝）才六号（ヴォロジメル大公）才七号（ヴォロジメル大公）に総ての年代記におけるその部分を集録しておいた．

というのは，其処には明らかに大きな二つの要素或は層がみとめられるからである．即ち，その一つは未だキリスト教を知らざる頃の記述 ——（異教的）—— と，キリスト教の洗礼を受けてからの記述 ——（ギリシア正教的）—— との，言いかえれば，古い民族伝承による英雄性と，キリスト教教会による信仰的物語の聖者性との二つの層が重ねられているのである．異教的原始宗教や，異教的人間像を極度に嫌悪した修道僧によつて，こんな二つの層が最初から自然に交錯したまゝの記述がなされる筈がない．　オリガ女帝の場合には，ロシアで初めてキリスト教の洗礼を受けた者としての非常に古い，非常に短い，非常に漠然とした信仰伝承が存在していたことであろう．そして，それを記録したものが最初にあつたかも知れない．それは教会内において，どれほど増量してみても，雄大な信仰物語を形成するほどのものではなかつたように思われる．増量するにも，そうすべき素材がほとんどなかつた．増量するとすれば，キリスト教と関係のない異教時代からの古い伝承を利用するより仕方なかつた．だから，オリガ女帝が洗礼を受ける物語は，ヴォロジメルの場合とは異つて，既にその事を出しがらして英雄伝承的である．幾度かの増量編集を経て，『過ぎし年月の物語』は奇妙な受け答えの物語を創つ

てしまつた．洗礼を受けるという厳肅さよりも，それはかけ引きの面白さを表面に出した物語になつてしまつた．

В лето 6463.
Иде Ольга в Греки и приде Царюгороду. Бе тогда царь имянем Цемьский; и приде к нему Ольга, и видев ю добру сущю зело лицем и смыслену, удивившася царь разуму ея, беседова к ней и рек ей: "подобна еси царствовати в граде с нами". Она же разумевши рече ко царю: "аз погана есмь, да аще мя хощеши крестити, то крести мя сам; аще ли, то не крещюся". И крести ю царь с патреархом.....
..... И по крещеньи возва ю царь и рече ей: "хощю тя пояти собе жене". Она же рече. "како хочеши мя пояти, крестив мя сам и нарек мя дъщерью? А в хрестеянех того несть закона, а ты сам веси". И рече царь: "переклюкала ся еси, Олга"; и дасть ей дары многи, злато и сребро, паволоки и съсуды различныя, и отпусти ю, нарек ю дъщерью собе.....

『オリガはグレキ(の国)へ行き，ツアリゴロドについた．当時その名をツエミスキーという皇帝がいた．しかして彼のもとへオリガは至つた．しかして彼女が，~~彼~~非常にみめよく，聰明であるのを見，皇帝は知恵におどろいて，彼女に話しかけて，彼女に言つた．〃(汝は)我と共に(この)町で君臨するにふさわしい〃．と．彼女は意味をさとつて皇帝に言つた．〃我は異教徒である．もしも(汝が)我を洗礼せんと欲するならば，みずから我を洗礼せよ．さもなければ(我は)洗礼を受けまい〃と．そこで皇帝は総主教と共に彼女を洗礼した．.....(この間，

一つの物語省略）・・・・・・・・・・・・・・・しかして洗礼ののち，皇帝は彼女を呼び，彼女に言つた．〃（我は）汝をおのが妻に迎えんと欲する〃と．しかして彼女は言つた．〃我をみずから洗礼し，我を娘と呼びながら（汝が）めとろうと欲するはいかに？しかして汝自身知つている（ではないか）〃と．しかして皇帝は言つた．〃（汝は）我を（みごとに）あざむいた．オリガよ〃と．しかして（彼は）彼女に多くの贈物，黄金および銀，にしき及び種々の器を与え，彼女をおのが娘と呼んで彼女に行かせた』

この物語の骨組みは一体何であろう．キリスト教と関係ありそうに見える洗礼という言葉を取り除くなり，何等かの別の言葉に代えたら，其処に現れて来るのは，明らかに，オリガがドレヴリヤネに対して実行した策略による数度の復しゅう物語に余りにも類似してしまう．或はツアリゴロドへ遠征を試みたルシの古い公たちの遠征物語と似てしまうではないか．ロシアの古い遠征物語の伝承と同じく，彼女もまた，黄金と絹織物と銀や或は器を持ち帰つたという．古い英雄伝承以外の何物でもなかつたであろう．男の英雄ではなくて，この場合は女の英雄であつた．おそらくは，女性英雄の伝承がオリガという女帝にまとめられた形で此処に投影されている．然し，年代記者が書きたかつた眼目は，むしろ，キリスト教の洗礼にあつた．そして，そもそもの教会内での年代記作品には，この部分は無かつたであろう．むしろ，最初の年代記作品には一つの完成された短い洗礼物語があつた．それは，上記の引用文及びその訳文中で・・・印によつて省略した中間の一節と，この引用文の直後につづく物語とをまとめて一貫したものであつたように思われる．その主人公であるオリガに民族的代表者を勤めさせ，英雄性を賦与し，ルシの文明の先駆者に仕立てゝ，ルシ・キリスト教文明の源流者にするためには，異教的伝承を，ほんの少し組み替えて，此処に，はさみ込むことが便利であつた．最も古い年代記作品に，後にこの目的で組み込まれたもの

が，伝承から取材した上記引用の一節であったであろう．そして，最古の年代記作品としては……印で引用文中に省略を示した一節と，引用文直後の一節とをまとめた次の様なオリガ洗礼，及び神への讃美文と信仰説教の文章が編集以前に教会の内には存在していたと思われる．然もその文章は一つではなくて二つであっただろう．それは次の文の『キエフに帰りついた』≪приде Киеву≫という同じ言葉の二度に及ぶ使用が雄弁に物語るところである．

Просвещена же бывъши, радовашеся душею и телом; и поучи ю патреарх о вере, рече ей: "благословена ты в женах Руских, яко возлюби свет, а тьму остави; благословити тя хотять сынове Рустии род внук твоих". И заповеда ей о царковном уставе, о милостыни и о въздержаньи тела чиста; она же поклонивши главу, стояше аки губа напаяема, внимающи ученья; поклонившися патреарху, глаголющи: "молитвами твоими, владыко, да схранена буду от сети неприязньны". Бе же речено имя ей во крещеньи Олена, якоже и древняя царица, мати великаго Костянтина. Благослови ю патреарх, и отпусти ю..... Она же хотящи домови, приде к патреарху, благословнья просящи на дом, и рече ему: "людье мои погани и сын мой, дабы мя Бог съблюл от всякого зла". И рече патреарх: "чадо верное! Во Христа крестилася еси и во Христа облечеся, Христос имать схранити тя; якоже схрани Еноха в первыя роды, и потом Ноя в ковчезе, Аврама от Авимелеха, Лота от Содомлянь, Моисея от Фараона,

Давыда от Саула, 3 отроци от пещи, Данила от зверий, тако и тя избавить от неприязни и от сетий его"; благослови ю патреарх, и иде с миром в свою землю, и приде Киеву. Се же бысть, якоже при Соломане приде царица Ефиопьская к Соломану, слышати хотяши премудрости Соломани, и многу мудрость виде и знамянья: такоже и си блаженая Ольга искаше доброе мудрости Божьи, но она человечьски, а си Божья. Ищюши бо мудрости обрящють. Премудрость на исходищих поется, на путех же дерьзновенье водить, на краих же забральных проповедаеть, во вратех же градных дерзающи глаголеть; елико бо лет незлобивии держатся по правду, не постыдятся. Си бо от възраста блаженая Ольга искаше мудростью все в свете сем, налезе бисер многоценьных, еже есть Христос. Рече бо Соломан: желанье благоверных наслаждаеть душю; и приложиши сердце твое в разум; аз любящая мя люблю, и имеющии мене обрящють мя. Господь рече: приходящаго ко мне не иждену вон. Си же Ольга приде Киеву.....

『(オリガは) 洗礼を受けたので，心も身も喜んだ．しかして総主教は彼女に信仰について教え，彼女に言つた．〃汝はルシの女たちの中で祝福されている．光明を愛し，闇をすてたのであるから．ルシの子らは汝の孫たちの末まで汝を祝福するであろう〃と．しかして（総主教は）彼女に教会の法規について，祈りについて，および精進について，恩ちとうと身体を清浄に保つことについて教えた．彼女はそこで頭をたれ，ちでかも水を呑むくちびるの如くに教えを聞きながら立つていた．（彼女は）総主教に頭をさげて

言つた．〃げい下よ．汝のいのりにより，悪魔の網から我がまもられてあらんことを〃と．彼女の洗礼の名はオレナといわれた．いにしえの皇后，コスチヤンチン大帝の母のように．総主教は彼女を祝福し，彼女を行かせた．・・・・・・・・・・・・・・（この間に上記の英雄伝承的物語の後半が差し込まれている）・・・・・・・・・ところで彼女は故郷へ（かえることを）欲し，総主教のもとへ来たり，（家へ（の旅）の祝福を乞い，しかして彼に言つた．〃我が民は異教徒であり，また我が息子も（そうである）．我を神があらゆる悪より守り給わんことを〃と．しかして総主教は言つた．〃信仰あつき子よ，（汝は）キリスト（の名）において洗礼をうけ，しかしてキリストを身にまとつた．キリストは汝を守護するであろう．あたかも太初に（神が）エノフを，しかして後に箱舟のノエを，アヴラムをアヴイメレフから，ロトをソドム人たちから，モイセイをフアラオから，ダヴイドをサウルから，三人の少年を炉から，ダニルをけものたちから守り給うたように，その如くに汝を悪魔から，そして，そのわなから救い給うであろう〃と．彼女を総主教は祝福した．しかして，（彼女は）無事におのれの国に向い，しかしてキエフに帰りついた．さて，このようなことがあつた．ソロマンの時にエフイオピヤの女王がソロマンの英知を聞こうとして，ソロマンの許に来たり，多くの知恵と（その）あかしを見た．そのようにこの祝福されたるオリガもまた神のよき知恵を求めていた．しかしあの女（エフイオピヤの女王）は人間の（知恵を求めたの）だが，この（オリガ）は神の（知恵を求めていたのである）．というのは，知恵は求めるものは見出すものであるから．英知は戸口でうたわれ，道では大胆に声をなし，城壁の端で教えをのべ，城門では大声に述べる（箴言Ⅰ－21・・・・筆者註）．それほどの年月，善きもの達は義に従つてふるまい，恥じることはないからである．というのは，この祝福されたオリガは，成人してから，この世の中におけるあらゆる英知を求

めていたが，高価な真珠，すなわちキリストを手に入れたのである．ところでソロマンは言つた．信仰あついものの願いは魂を楽しませる（箴言Ⅷ－19・・・筆者註），汝の心を理性にそわしめよ．我は我を愛するものを愛し，我を求めるものは我を見出すであろう（箴言Ⅱ－2）〃と．主は言い給うた．〃我の許に来たる者を（我は）追い出さぬであろう（ヨハネ伝Ⅵ－37・・・筆者註）〃と．ところでオリガはキエフに帰りついた・・・・・』

この様に読み直して見れば，オリガが『キエフに帰りついた』と先にある前部と，二度目に『キエフに帰りついた』とある後部とが，文体も異り，目的も異る文章であることが分るであろう．前部は旧約創世紀からはじまる巨大な物語の物語性の高い部分の要約であり，後部は，より信仰論的な立場からの聖書の抜き書きを中心としたものである．そして，この前部には英雄伝承的なロシアの古い物語をはめ込み，後部の直後には，武勇的な息子がオリガの言うことを聞かず，軍事に走つていたという，これまた英雄伝承的な物語を後続させているのである．この英雄伝承的な要素のある個所は6477(969)年までつゞき，其処で再びオリガの死を記する．そしてその折に，キリスト教的説教を兼ねたオリガ讃美・追悼の文章をつゞけるのである．然もその讃美・追悼の文章がやはり前部と後部とに分かれ，前部は讃美・追悼をつとめ，後部は再びバイブルによる説教なのである．

『過ぎし年月の物語』或はその台本をなしていた『原初の集』のなお背後により古い，教会での年代記的作品があつたとしたら，それら宗教的な部分こそがもともとの台本の骨組みであつたであろう．そして，その宗教的な台本のうちで，最もまとまつていた最初の物語が，オリガ女帝に関するものであつた．そのうち，洗礼に関するものが上に引用したものであり，英雄伝承的要素の物語と案外素朴に組み合わされていたのであつた．そして，オリガの死にちなんだものが，異教的英雄行動をつゞけていた息子ス

ヴイヤトスラフの物語の間に見出されるのである．本来，一つにまとめあげられた宗教的オリガ物語である教会的作品が，少くともこの様に三分されて，それぞれの間には英雄伝承作品がサンドイッチされたのである．そのことによりオリガの宗教的側面を教会の記者たちが一層鮮かに浮彫りし得るはずだと考えたからなのであろう．キリスト教的なものの賞讃や宗教的説教や神の栄光への讃美が，一層の効果を求めて断片的にちぎられ，その間に古いロシアの異教的英雄伝承を織り込んだのである．オリガの死に関して，その息子の英雄行動の間に顔を出した最も古い台本と思われる讃美と説教の一節を見なければならないが，キリスト教を信じようとしない息子スヴイヤトスラフについては，前以て別の説教をしていたところから先に引用しておくべきであろう．単に古い宗教的台本と異教的英雄伝承とを組み合わしただけではなくて，其処には適当な接着剤を入れたこともあるという編集方法をみとめておくために．

Неверным бо вера хрестьяньска уродьство есть; не смыслиша бо, ни разумеша во тьме ходящии, и не ведять славы Господня, одобьлеша бо сердца их, ушима тяжько слышати, очима видети. Рече бо Соломан: дела нечестивых далече от разума; понеже звах вы и не послушасте мене, простроx словеса и не внимасте, но отметасте моя въветы, моих же обличений не внимасте: възненавидеша бо премудрость, а страха Господня не изволиша, ни хотяху моих внимати съвет, подражаху же мои обличенья.

（この一節は先に訳文を示したので，再び訳文を付すことはやめておこう）．さて，オリガの死にちなんだ最後の文章とは

Си бысть предътекущия крестьяньстей земли аки деньница пред солнцем и аки зоря пред светом,

си бо сияше аки луна в нощи, тако и си в неверных человецех светящеся, аки бисер в кале; кальни бо беша, грех неомовени крещеньем святым. Си бо омыся купелью святаго, и совлечеся греховныя олежа ветхаго человека Адама, и в новый Адам облечеся, еже есть Христос. Мы же рцем к ней: радуйся, Руское познанье к Богу; начаток примиренью быхом. Си первое вниде в царство в небесное от Руси, сию бо хвалят Рустие сынове, аки началницю: ибо по смерти моляше Бога за Русь. Праведных бо душа не умирают; якоже рече Соломан: похваляему праведному възвеселятся людье, безсмертье бо есть память его, яко от Бога познавается и от человек. Се бо вси человеци прославляють, видяще лежащая в теле на многа лета; рече бо Пророк: прославляющая мя прославлю. О сяковых бо Давыд глаголаше: в память вечную праведник будеть, от слуха зла не убоится; готово сердце его уповати на Господа, утвердися сердце его и не подвижется. Соломан бо рече: праведници въвеки живуть, и от Господа мьзда им есть и строенье от Вышнаго; сего ради приимуть царствие красоте и венець доброте от руки Господня, яко десницею покрыеть я и мышцею защитить я. Защитил бо есть сию блажену Вольгу от противник и супростата дьявол.

（日本語訳省略）

この様な教会的な物語と口頭伝承的な英雄物語との二つの層がオリガ女帝の記述にも，次の偉大なる公ヴォロジメルの記述の折

にも，ボリスとグレブの物語の折にも，ヤロスラフ公の記述の折にもみとめられる．そして，その二つの層のうち教会的な物語を上のオリガの場合の様に抽出して，それらを総て連結統一したら，其処には完全に一つの単一な宗教書が再構成されるし，反対に英雄伝承的な個所を抽出して集めれば，壮大な叙事詩には成りきらなかつた古いロシアの伝承英雄物語集が形成されるであろう．そして少くとも，上にあげたオリガ記述の教会的物語 —— 彼女の洗礼物語と，もう一つ死を記述する際の讃美の文章の二つ，—— ヴオロジメル公記述の教会的物語 —— じゆん教者ヴアリヤギ人の話と哲学者の長い言葉を含めたロシア洗礼の話，—— ボリスとグレブの物語，ヤロスラフ公讃美の文章等々は，文体的にも内容的にも明らかに単一な一人の人物の筆になつたものにちがいない．例えば，いままで異教であつたルシの人のうちで，初めて洗礼を受けた少数の人々を『新しい人々』≪новые люди≫という言葉で呼んだが，その呼び方は，上にあげた教会的な物語全般に亘つて必ず一回は用いられる言葉であつた．それ以上に内容的には，分割し難いきづなにそれぞれの物語が結び合わされていた．例えばオリガをルシのキリスト教の夜明けにたとえ，ヴオロジメルを展開者に仕立て，ヤロスラフを完成者に仕立て，その間にじゆん教者の話を入れた構成そのものが，雄弁にこれを物語つている．だから，ヤロスラフを完成者に仕立てている以上，当然，この文章が最初に書かれた時代がおそらくはヤロスラフ公の直後であつたことは推察されるだろう．だが，そこまで結論を急ぐ前に，『過ぎし年月の物語』が持つ最もドラマチツクなボリスとグレブの物語を検討しておかなければならない．

— 0 —

6523(1015)年の記事が即ちボリスとグレブの殺害の物語で

である．勿論，この年の記事の前部は先に引用したヴラジミル公の死の記事と，彼への賞讃の文章であつたが，途中から，彼の死後の出来事が書き取られる．面白いことに，『過ぎし年月の物語』は，ラヴレンチー年代記，イパーチー，トロイツキー各年代記とも，わざわざ，先づ『ボリスの殺害について』≪О убьеньи Борисовѣ≫と表題をつけてから記述しはじめている．わざわざ記事に表題をつけるこの珍らしい態度は，少くとも，この部分が前後の記事と一貫した平面的なものでないことを言外に物語るものである．さて，その物語の筋は次の様なものである．

父ヴオロジメルの死後，長兄のスヴイヤトポルク≪Святополк≫は，キエフの王座につき，人々を集めて，亡父の財産を分け与えた．然し，その分譲財を入手しても，多くの人々はスヴイヤトポルクに恭順しなかつた．当時，彼の弟ボリス≪Борис≫が遠征中であり，分譲財を入手した人々の一族たちはボリスに従つて出陣中であつたし，より多くは，ボリスをしたつていたからである．ところが，遠征におもむいたボリスの方は敵であるペチエネギ人とは遭遇せず，軍をひきいて帰途についていた．勿論，父の死を知らなかつた．父に最も愛されていたボリスは，この帰途に父の死を知らせる報告を受け取る．リタ河≪Льта≫の岸に軍をとゞめ，父の死によつて起る事態に対処して親兵団に相談する．親兵団は，兄スヴイヤトポルクの坐すキエフに進撃せよと提案するが，ボリスの受け入れるところとならず，ボリスから離れ散つてしまうのである．その時の親兵団の提案の言葉と，それに対するボリスの決定返答の言葉とのかみ合わせは非常に面白い．少くとも，十一世紀初頭或はそれ以前の公と親兵団との関係，モラルを非常によく表しているであろう．年代記者は，そのいづれに重点をあげているのか分らないが，少くとも，身を滅ぼす運命にありながら，なお，モラルを守ろうとするボリスの言葉に感動しているようではある．その両者の言い分の好みを選択する意識

を伝承的な物語の重圧が完全におしつぶしていたかも知れない．

親兵団の提案

≪Се дружина у тобе отьня и вои; поиди, сяди Кыевѣ на столѣ отци≫

『見よ，此処に，汝のもとに父の親兵団としかして戦士たちがいるではないか．行きてキエフの父の座につけ』

ボリスがひきいていた親兵団は父ヴオロジメルの親兵団であつた．父の親兵団は当然，父なるヴオロジメルの王座をつぐべき人を擁立し得たのかも知れない．然し，ボリスはその提案に同意しなかつた．

ボリスの決定返答

≪не буди мнѣ възняти руκы на брата своего старѣйшаго; аще и отець ми умре, то сь ми буди в отца мѣсто.≫

『我はわが長兄に手をあげるべきではない．もし父が我に死せりとせば，この者（長兄）が我にとつて父の代りとなるがよい』

提案が受け入れられず，さりとて，ボリスの言う様に長兄スヴイヤトポルクに従うことをいさぎよしとしなかつた『父の親兵団』は，ボリスから多くの軍勢と共に離れ散つた．物語は，然し，離れ散つた親兵団軍勢の行く先や目的を一切語らない．たゞ，物語はボリスに焦点をしぼるのである．下級従士団と共に残されたボリスのもとへ兄スヴイヤトポルクから偽りの使者が来る．仲良くし，父の財産をも分け前通り分譲しようという口上である．その使者を出した夜，スヴイヤトポルクはヴイシエゴロド≪Вышегород≫に出向き，その町の（おそらくは代官である）プトシヤ≪Путша≫と町の人々を集め，恭順をたしかめてから，この町の人をボリス暗殺に派遣するのである．

暗殺者たちは夜中にリタ河につく，近くに忍びよる．夜明けの勤行を終つて天幕に入り，寝床に横になつたボリスを，暗殺者たち

は外からヤリで突き刺すのである．ウゴル人ゲオルギ≪Георги≫という名の従士が主君ボリスをかばつて，彼の上に倒れ込んだのを，そのまゝ二人もろともに突き刺して殺した．従者ゲオルギはボリスにことのほか愛され，黄金の首輪をはめていたが，これを抜き取ることができず，首を斬つて首輪を取り，死体を捨て去るのである．勿論，他の従者たちも皆殺しにされる．そして『ボリスを殺して天幕につゝみ，荷馬車にのせて彼を運び出した』≪Бориса же убивше····, увертѣвше в шатеръ, взложивше на кола, повевоша и≫.

ところが，此処で物語は奇妙な筋をたどる．即ち，暗殺者たちを派遣したスヴイヤトポルクは，此処でボリスが死んだかどうかを知る由もない筈である．にもかゝわらず，ボリスがまだ息絶えていないからということで，二人のヴアリヤグ≪Варяг≫人を再びとゞめを刺すために派遣するのである．明らかに，二つの別の物語或はバリアントを結び合わせて一つの物語に仕組んだあとが此処にうかゞわれる．

ボリスの息の根を止めるために派遣された二人のヴアリヤグ人のうちの一人が剣を抜いてボリスの心臓を突き，絶命させる．そして，その遺体は，運ばれてヴイシエゴロドの聖ヴアシリイ≪с-вятой Василий≫教会に安置された．そして物語は再び初めに派遣されたヴイシエゴロドの暗殺者たちがスヴイヤトポルクから賞讃を受け，その名は，プチシャ≪Путьша≫，タレツ≪Талець≫，エロヴイチ≪Еловить≫，リヤシコ≪Ляшько≫であると書きとめるのである．とゞめをさすために派遣された二人のヴアリヤグ人には，もう，此処では全く何もふれることがない．明らかに，二つの物語の組み合わせであることが分る．

そして，物語は，つゞいて，グレブの殺害に及ぶ．

父に最も愛されていた弟ボリスを殺し，一人の対抗者を消したスヴイヤトポルクは，もう一人の弟，グレブをも消そうと企むの

である．年代記者はグレブは父に最も従順であつたと説明している．ボリスが父に最も愛され，グレブは父に最も従順であつたという書き方は面白い．スヴイヤトポルクが父の死後，弟たち四人（――もう二人はスヴイヤトスラフとヤロスラフ――）を次々に殺す多くの伝承的物語があつたものと思われる．そして，それぞれにその殺害には個々のバリアントが付随しながら，或程度の一貫性があつたことであろう．

ともあれ，グレブの殺害の物語は，次の様に展開される．スヴイヤトポルクは，弟グレブ≪Глѣбъ≫をあざむいて呼びよせる．父が重病で，会いたがつているというのである．呼ばれたグレブは馬で出かける．此処には非常に古い伝承の影がたゞよつている．ヴオルガ河まで乗つて来た時，突然馬がつまづいて，その為に彼は足をいためるのである．馬が主人の危険をこの様にして知らせるという物語は，数多くのブイリーナ作品に歌われるところだからである．さて，グレブはスモレンスクに来て河舟に乗り，スミヤヂナ河にとゞまる．ところで，此処でも物語は奇妙な筋の混乱をはじめる．再び，別々の物語が此処で組み合わされた証拠である．それは，兄に最後まで殺されなかつたヤロスラフが丁度この時に父の死亡の知らせを受けて，兄弟であるグレブに忠告の使者を派遣するという筋である．長兄スヴイヤトポルクに偽られて呼びよせられたグレブのことも，まして，スモレンスクの近くのスミヤヂナ河に河舟でグレブがとゞまつていることも，ヤロスラフは知つている道理がない．だから，父の死の知らせを受けても，ヤロスラフはグレブがだまされて殺されに行くことをやめさせようと使者を立てるはづがない．然も，ボリスが同じように偽られて殺されたことも知つてはいなかつたであろう．物語がずつと先へ進んでからも，『過ぎし年月の物語』は『ヤロスラフはまだ父の死を知らなかつた』≪Ярославу же не вѣдущю отьне смерти≫と書いているではないか．だから，此処は完

全に別の物語の差し込み或は重ね合せである．ともあれ，ヤロスラフから，知らずに殺されに行くグレブのもとへ来た使者の口上は，『行くな，汝の父は死に，汝の兄はスヴイヤトポルクに殺された』≪Не ходи, отець ти умерль, а брать ти убьенъ от Святополка≫ということであつた．勿論，それを聞いてグレブは父の死と兄の殺害を嘆く．ところが，その時，派遣された暗殺者たちがグレブの舟を占領し，彼を斬り殺すのである．面白いことに，此処では実際に彼にとゞめをさした者の名前があげられている．即ち，それは，殺されたグレブ自身の料理人トルチン≪Торчин≫であつた．ボリスの場合には，最初の派遣された暗殺者たちの名前が述べられ，とゞめを刺しに後に派遣されたヴアリヤグ人はその名を問われていない．今度は派遣された暗殺者の名ではなくて，本当に斬り殺した料理人の名があげられている．この不統一は，やはり，多くの物語の重ね合わせから由来するものであろう．殺されたグレブの死体は一度は捨てられたが，後に，ボリスの場合と同じように聖ヴアシリイ教会に入れられたと記されている．

父の死後，長兄スヴイヤトポルクが偽つて二人の兄弟を殺してしまつたのを聞いて，残つたもう二人の兄弟のうちスヴイヤトスラフ≪Святослав≫はウゴル人のもとへ逃げるが，途中，山中で派遣された暗殺者に殺される．

三人の弟たちを殺したスヴイヤトポルクは，キエフで君臨しはじめる．兄に殺されることを一番あとまわしにされたヤロスラフの話にまで進むと，以上の兄弟殺しの物語が，いかにつぎはぎのものであるかが暴露される．即ち，ヤロスラフの物語は，先づ，父ヴオロジメルの死を知らなかつたという言葉からはじまる．ノヴゴロドにいたヤロスラフが，はじめて父の死の報らせを受けたのは，キエフにいる姉ペレドスラヴアからである．然も，その知らせの口上には既に父の死と共にボリスも殺され，グレブにも暗

殺団が送られたという内容もこめられていた．然も，その直後に，もう，ヤロスラフは，二人の兄弟の復しゅう者としてスヴイヤトポルクに向つて進撃している．だまされて殺されに行くグレブに『行くな』という使者を出したことなど一切ふれられていない．まして，そのグレブもつゞいて殺されたという報告など受けていない．三人目のスヴイヤトスラフが逃亡する途中に殺されたことについても，一向に此処では問題とされていない．歴史的な事実がどうであつたかということを此処で取りあげている訳ではない．物語の構成に統一性がないということを述べたいのである．長兄のスヴイヤトポルクが弟のボリス，グレブ，スヴイヤトスラフを殺す物語，殺しもらした弟ヤロスラフにとむらい合戦をいどまれる物語が，多くの短編的物語の組み合わせであることが分ればよい．その多くの短編的物語は，血生臭い兄弟殺しのすさまじい事件にちなんで，それぞれに伝えられた独立的なものであつたと思われる．それが此処に何とか統合された形で織り込まれたのであろう．

たゞし，以上の物語の筋が連続的に『過ぎし年月の物語』の中に記述されたのではなかつた．むしろ，それぞれの物語の段落ごとに，非常に高調した文体の宗教的正当化，或は宗教的批判説教の文章がはめこまれていた．先にまず兄弟殺しの物語があつて，その段落ごとに説教的文章を織り込み，或は，幾の人についてのとむらい文章をはめ込んだのか，それとも，先づさきに説教的文章やとむらい文章があつて，後にその素材をつとめるべき兄弟殺しの物語が詳しく重ね合わされたのかは分らないにしても，ともかく，兄弟殺しの物語の段落ごとにはめこまれている宗教的文章は，その文体からも，内容からも，述べようとする心の構えからも，これは完全に統一的なものであつて，決して，段落ごとのバラバラの文章ではない．いや，むしろ，オリガ女帝をたゝえた文章及びヴオロジメル公の記述に際して長々と書かれた宗教的文章

と全くうり二つの作品である．というよりも，オリガ，ヴオロジメルへの讃美や，宗教的説教と同一人物によつて，同一時期に書かれた一貫した文章であつたように思われる．キリスト教を先駆的に受け入れた人々に就ての一貫した宗教記述文章であつたであろう．それが，ボリスやグレブの殺される物語を詳しく中間に書き込んだために，サンドイツチされて物語の段落ごとに分離したのであつた．

ボリスの死を記した段落の直後に見られるその様な宗教的文章の一節とは，例えば次の様なものである．

И тако скнчася блаженый Борис, венець прием от Христа Бога с праведными, причеться с пророкы и апостолы, с лукы мученичьскыми водваряяся, Авраму на лоне почивая, видя неизреченьную радость, въспевая с ангелы и веселяся в лику святых.

『かくの如くして至福なるボリスは逝つた．神なるキリストより正義の人々と共に冠を受け，予言者たちや使徒たちに肩をならべ，じゆん教者の群に入りアブラムのふところにいだかれ，言い難い喜びを見つゝ，天使たちと共に讃歌をうたい，聖者たちの仲間に入りて楽しむのである．』

そして一方ではその後に，このボリスを殺した連中を非難する．

Сици бо слугы беси бывають; беси бо на злое посылаеми бывають, ангели на благое посылаеми. Ангел бо человеку зла не створяеть, но благое мыслить ему всегда, паче же хрестеяном помагають и заступають от супротивнаго дьявола; а беси на злое всегда ловять, завидяще ему, понеже видять человека Богом почьщена, и завидяще ему, на зло слеми скори суть. (Рече бо: кто идеть прелестити Ахава? И рече бес: се аз иду). Зол бо человек,

тщася на злое, не хужи есть беса; беси бо Бога боятся, а зол человек ни Бога боится, ни человек ся стыдить; беси бо креста ся боять Господня, а человек зол ни креста ся боить. (Темже и Давыд глаголаще: аще воистину убо право глаголете, право судите, сынове человечестии; ибо в сердци дедаете безаконие на земли, неправду руцы сплетають; учюжени быша грешници от ложесн, заблудиша от чрева, глаголаша лжю, ярость их по образу змиину).

『かくの如き下僕たちは悪魔である．というのは悪魔たちは悪を目的に遣わされているのであり，天使たちは幸いを目的に遣わされているものである．天使は人間に悪を為すことはなく，常に人間に幸いを考えているものなのであり，なおさらキリスト教徒には力添えをなし，敵なる悪魔から守護してくれているのである．ところが悪魔は悪に向つて人間を常に捕らえているのである．というのは，（悪魔は）人間を羨んでいるからである．それは人間が神によつて栄誉を与えられているのを知つているからである．人間を羨み，悪を目的に直ちに遣わされている者たちだからである．（以下はイパーチー年代記に見られて，ラヴレンチー年代記にはない文章である・・・・筆者註）〔というのは，次の様な言葉がある．誰ぞアフヴをかどわかしに行く者ぞ？　悪魔が言つた．見よ，我が行かんと〕．悪事に熱中する人間は悪い．悪魔よりも悪いのではないか．（このあたりより最後にかけては詩篇LXIIIの1～5まで対応する・・・・筆者註）．悪魔は神を恐れているのに，悪しき人間は神をも恐れず，人間にも恥じないからである．悪魔は主の十字架をおそれているのに，悪しき人間は十字架をも恐れていないからである（この後の一節はラヴレンチー年代記にはなくて，イパーチー年代記にみられるものである・・・筆者註）．ダヴイ

ドもまたその様なものに対して言つている．もしも誠に（汝が）真実をのべているのならば，人の子等よ，真実を裁くがよい．何となれば（汝等は）心の中で地上では無法をなし，汝等の手は偽りをおこなつているではないか．罪ある者たちはたい内より遠ざけられ，生まれ出ずるより迷いて偽りを言う．彼等の毒は蛇の形に似ている（詩篇LVIII，5まで・・・・・筆者註）

この様な同質文章はグレブが殺される物語の段落の折にもみとめられる．此処では段落をドラマチックに切つて，殺される直前にグレブが喋く言葉にもそれがみとめられる．

"увы мне, Господи! Луче бы ми умрети с братом, нежели жити на свете сем; аще бо бых, брате мой, видел лице твое ангельское, умерл бых с тобою: ныне же что ради остах аз един ? Кде суть словеса твоя, яже глагола к мне, брате мой любимый? ныне уже не услышю тихаго твоего наказанья: да аще еси получил дерзновенье у Бога, молися о мне, да и аз ту же страсть приял; луче бо ми было с тобою жити, неже в свете сем прелестнем".

これぞ，殺されるべきグレブの口から出た死の直前における祈りの言葉の形を借りていながら，実は，弟の口を借りた兄ボリスへの追悼文ではないか．むしろ，ボリスの死後に書き込まれてもよい文章である．

『あゝ，主よ！　この世に生きているよりも，兄と共に死んだ方が私にはよかつたかも知れない．というのは，我が兄よ，もしも汝と共に死んだのなら我は汝の天使の如き顔を見ておられたであろう．今，何の故に，我一人（この世に）とゞまつたのであろう．我に語りし汝の言葉（今）いづこにありや？　我が愛する兄よ．今，既に再び汝の静かなる教えを（我は）聞くべくもなし．もし（今）汝が神のもとにて信頼を得たらば，我がために祈れ，

我もまた同じ難を受けんとすと．この奇しき世に生きんより，汝と共に（あの生に）生きん』．

そしてグレブ自身の死後には，上述の物語の連びの粗筋を除き去ると次の様な宗教文章が残つて出て来る……の個所は物語の筋に当るところを省略したものである．

Акы агня непорочно принесеся на жертву Богови, в воню благоуханья, жертва словесная, и прия венець; вшед в небесныя обители, и узре желаемаго своего, и радовашеся с ним неизреченьною радостью, юже улучиста братолюбьем своим. Се коль добро и коль красно, еже жити братом вкупе! Оканьнии же възратишася въспять, якоже рече Давыд: да възвратятся грешници в ад. И пакы: оружье извлекоша грешници, напрягоша лукы своя истреляти нащи и убога, заклати правыя сердцем; оружье их внидеть в сердца их, луци их скрушаться; яко грешници погибнуть, изчезающе яко дым погибнуть.....

.....

не ведый Давыда глаголюща: что ся хвалиши о злобе, сильный? Безаконье весь день умысли язык твой, яко бритва изострена створил есть лесть; възлюбил еси злобу паче благостыня, неправду неже глаголати правду; възлюбил еси вся глаголы потопныя, язык льстив: сего ради Бог разрушить ти до конца, и въстеръгнеть тя от села твоего, и корень твой от земля живущих, якоже и Соломон рече: аз вашей погибели посмеюся, порадую же ся егда грядеть на вы пагуба: теможе снедять своего пути плоды, и своея нечести насытяться.....

. . . . . .

И съвкуплена телом, паче же душама, у Въладыкы Всецаря пребывающа, а радости безконечней, во свете неизреченьнем, подающа ицелебныя дары Русьстей земли, и инем приходящим странным с верою даета ицеленье: хромым ходити, слепым прозренье, болящим целбы, окованым разрешенье, темницам отверзенье, печалным утеха, напастным избавленье; е еста заступника Русьстей земли, и светилника сияюща и молящася воину к Владыце о своих людех. Темже и мы должни есмы хвалити достойно страстотерпца Христова, молящеся прилежно к нима, рекуще: радуйтася, страстотерпца Христова Русьскыя земля, яже ицеленье подаета приходящим к вам верою и любовью. Радуйтася, небесная жителя, в плоти быста, единомысленая служителя, верста единообразна, святым единодушьна; тем стражющим всем ицеленье подаета. Радуйтася, Борисе и Глебе богомудрая, яко потока точита от кладязя воды живоносныя; истекають верным людем на ицеленье. Радуйтася, лукаваго змия поправша, светозарна явистася, яко светиле озаряюща всю землю Русьскую, всегда тму отгоняща, являющася верою неуклоньною. Радуйтася, недреманьное око, стяжавше душа на свершенье Божье, святых заповеди приимше в сердци своем, блаженая. Радуйтася, брата вкупе, в местех златозарных, в селех небесных, в славе неуядающей, ея же по достоянью сподобистася. Божьими светлостьми яве облистаеми, всего мира обиходита, бесы отгоняюща, светилника

предобрая, заступника теплая, суща с Богом, божественами лучами ражизаема воину, добляя страстьника, душа просвещающа верным людем: възвысила бо есть ваю светоносная любы небесная, тем красных всех наследоваста в небеснем житьи, славу, и райскую нищю, и свет разумный, красныя радости. Радуйтася, яко вся напаяюща сердца, горести и болезни отгонаща, страсти злыя ицеляюща, каплями кровными святыми очервивша багряницю, славная; ту же красно носяща, с Христом царствуета всегда, молящася за новыя люди хрестьяньскыя и сродникы своя, земля бо благословися ваю кровью; и мощьми лежаща, духом божественым просвещаета: в ней же с мученикы яко мученика за люди своя молитася; радуеться церквы; светозарное солнце стяжавши, въсход всегда просвещаеть в страданьи, в славу ваю, мучеником. Радуйтася, светлеи звезде, заутра въсходящии. Но христолюбивая страстотерпця и заступника наша! Покорита поганыя под нозе князем нашим, молящася к Владыце Богу нашему мирно пребывати в совокуплении и в сдравии, избавяща от усобныя рати и от пронырьства дьяволя. Сподобита же и нас, поющих и почитающих ваю честное торжьство, в вся векы до скончанья.

『あたかも小羊の如く，清らかに，神の犠牲として（グレブは）運び来たられた．香りよき香に運ばれし言葉あるいけにえは，かくしていま冠を受けた．（彼は）天なる住いに入り，望まれしおのれの兄を見て，彼と共に言い難き喜びをよろこびぬ．その喜びはおのれの兄弟愛によりて（二人が）入手せるものなればなり．

（二人の）兄弟が共に住むは，見よ，いかによく，いかにうるわしきことか！　呪われし者たちは，ダヴイドが，〃罪人たちは地獄に戻りぬ〃と言いし如くに帰り来たりぬ．（この後の一節はラヴレンチー年代記にはない．イパーチー年代記にみられる・・・・筆者註）（またダヴイドの言うあり）あしきものは剣をぬき，おのれの弓を張りて，苦しむものと貧しきものとを射ち，正しき者たちの心を殺さんとす．（されど）彼等が剣は彼等の胸にさゝり，彼等の弓はこわれるものなり．（詩篇；XXXVII，14，15・・・筆者註）あしきものは亡び，煙の如く消え亡ぶものなり（詩篇，XXXVII，20・・・・・此処までの一節はラヴレンチー年代記には無い）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・物語の粗筋に当る部分或はその粗筋をつなぐ部分即ち，派遣された暗殺者が戻つてスヴイヤトポルクに暗殺成就を報告する説明句が此処に入れられる・・・・・・・・・・・・・・・・・・そして，宗教的基盤文は其処で今度は非難すべき対象のスヴイヤトポルクをやり玉にあげる・・・・・・・・・・・・・・・（彼は）ダヴイドが次の様に言つているのを知らない者である．即ち，力強きものよ，（汝は）何故に悪業を自慢するや，汝の舌は終日無法を企てたり．と．（詩篇LII，1，2・・・・・筆者註）．また（ダヴイドは言う）．（これより以下はラヴレンチー年代記にはなく，イパーチー年代記にみられる文章である・・・・・・筆者註）．鋭きカミソリの如く（汝は）偽りをなせり（詩篇LII，2・・・・・・・・筆者註）．（汝は）善よりも悪をより好み，正しきを言うよりも，偽りを（言うを好みたり）．（詩篇LII，3・・・・・・・筆者註）．いつわりの舌よ，（汝は）（罪に）沈むべきあらゆる言葉を好みたり（詩篇LII，4・・・・筆者註）．されば神，とこしえまでも汝をくだき，また汝をおのれの村より摘え抜き，生けるものたちの地より汝の根をも絶やし給わん（詩篇LII，5・・・・・筆者註）．ソロモンも言つている．我は汝等の破滅を笑わん．（詩篇LII，6・・・・・・筆者註）．汝等の上に破滅の来たるを（我は）よろこばん．（箴言，I，26・・・・・筆者註）．

なお（人々は）おのれの道の果実を食らい，おのれの不誠実にあくべし（箴言，Ⅰ，31……筆者註）．……
……死んだグレブがどう扱われたかと言う物語の筋が此処につゞく．そして，兄ボリスの横たわる同じ教会に安置されたという物語が終る．再び教会的賞讃祈禱文が此処に始まり，今度は，ボリス及びグレブの二人を主人公にしてたゝえあげる（筆者註）
……しかして（二人は）肉体を，それにもまして魂を共にしたのである．（二人は）全能なる神のもとに参り，終りなきよろこびにひたり，言い難き光明に浴したのである．ルシの国に恢復の贈物を与え，信仰をもつて来たる他の国々の者たちには（二人は）恢復を与えているのである．足なえたるものには歩むことを，めいしたるものには視力を，病めるものたちには治癒を，いましめられたるものには解放を，とぢこめられたるものたちには放免を，悲しめる者たちにはなぐさめを，追われる者たちにはまぬがれることを．（二人は）ルシの国の守護者であり，輝やける光明であり，おのれの民たちを神にとこしえに祈りつゞける者である．その故にこそ我々も，キリストの（二人の）受難者をほめたゝえるべく，熱心に二人に祈つて言おう．よろこべ．ルシの国のキリストの受難者二人よ．信仰と愛をもつて汝等に来たる者たちに恢復を与えたる者二人よ．よろこべ．天なる二人の住人よ．（汝等二人は）天使の肉体にありき．心同じき勤行者なりき．同じ形の一対の人なりき．聖なる者に対して心同じ者なりき．その故にまた（汝等二人は）すべて苦しめる者たちに恢復を与えているのである．よろこべ．神の如き知恵あるボリスとグレブよ．汝等二人は生命を還ぶ水の井戸から流れを汲み出だし，信仰厚き人々の治癒のために流しおるなり．よろこべ．（汝等二人は）ずるき蛇をたゞし，ルシの全土を輝す燈明の如く光輝けるものとして出現せしなり．常に闇を追い払い，不屈なる信仰を以て現れしものよ．よろこべ．まどろまざる眼よ．神の成就

に魂をかたむけて，聖者たちの教えをおのれの心に摂りし，至福なる者たちよ．よろこべ．共にいる兄弟よ．黄金輝く場所におり，天なる村に住み，色あせざる栄光につゝまれてある者よ．汝はその栄光を占めるにふさわしかりき．よろこべ．神の御光に明るく輝らし出されし者よ．全世界をめぐりし二人よ．悪魔どもを追い払い，病をいやしたる二人よ．この上なく良き燈明にして；暖かき守護者よ．神と共にある者よ．神の光に常に照らされてある者よ．勇敢なる受難者たちよ．信仰厚き人々にそが魂を照し明けしものなり．汝等二人を天なる光ある愛が天に揚げしなり．それ故に天上の生活にありてうるわしきもの総てを汝等二人は受け継ぎしなり．栄光をも，楽園の食べ物をも，知恵の光をも，うるわしき喜びをも．よろこべ．（汝等二人は）総ての心をなごませ，嘆きと病を追い払い，悪し慾望をいやし，聖なる血の滴にて，衣を赤くそめぬ．栄光ある二人よ．そが衣をうるわしくたづさえつゝ，汝等二人はキリストと共に常に君臨し，キリスト教徒の新しき人々及びおのが一族たちのために祈れ．大地は汝等二人の血にて祝福されたればなり．遺体として横たわりし者二人よ，神の霊にて光かよわせ，この教会の中にてじゆん教者としてじゆん教者たちと共におのが民のために祈れ．（これ以下はラヴレンチー年代記にだけはみとめられない一節である・・・・・筆者註）．よろこべ，教会を．光輝く太陽を傾け，朝日は常に苦しみの中に輝き，汝等二人のじゆん教者の栄光たらん．（こゝまでラヴレンチー年代記にだけない文章である・・・・・筆者註）．よろこべ．明け方に昇る明るき星よ．キリストを愛せしもの，苦難に耐えしもの，我等が守護者よ！　異教徒たちをば我等が公たちの足下に恭順させよ．我等が主なる神に祈りて，（我等を）一致して健康のうちに平和に過せしめよ，内紛の戦いより，悪魔のずるき潜入よりまぬがれしめよ．汝等二人の誠なる勝利をば永遠に世の末まで歌い尊ぶ我等をばよみし給え』

この様な一まとめにし得る文章がドラマチックな物語の組み込

みによつて中断されていた．然し，如何にそれが中断されていても，オリガ，ヴオロジメルの記述の折に見られた宗教的内容の文章と語彙や文体の点から余りにも共通点が多いことに気づくはずである．そして，それらの文章が何かある書き物として別個に存在していたもののように思われる．或は教会の内に保存された聖なる過去帳のようなものの最古の形であつたかも知れない．然も，これらの文章は誰か一人の手によつて一気に書きあげられたものであると想像される．然も，それが書かれた時期は『過ぎし年月の物語』自身の記事から多少は推察し得られるのだから面白い．

ボリスを筆頭とする三人の兄弟が兄スヴイヤトポルクに殺された後に，彼等兄弟のうちで一人だけ死をまぬがれた者があつた．即ち，ヤロスラフである．ヤロスラフはノヴゴロドの人々を集めて殺人者である兄に立ち向う．その戦いの模様は兄弟殺しの記述された6523(1015)年の後半と翌6524(1016)年の項に書き取られている．そしてドニエプル河の氷上で氷が割れて敗退したスヴイヤトポルクがリヤヒ人のもとへ逃げ，ヤロスラフがキエフの父の王座についた年も同年であつた．ところで，この6524(1016)年の項の最後には面白い特長がみとめられる．というのは，その時，ヤロスラフは二十八才であつたという締めくゝりがついている．よく考えて見ると，これ以前にも，以後にも，王座についた時，或は死亡した時，その他重要な時期に，その人物が何才であつたかというような記事は無かつたのである．ヤロスラフについてだけそれがあるとすれば，少くとも，此処に最大の重点が置かれたと考えるより仕方がない．『過ぎし年月の物語』が此処に重点を置いているという速断をしようと言うのではない．『過ぎし年月の物語』が台本にしたいくつかの素材の一つが此処に重点を置いていたと考えるべきなのである．そう考えて『過ぎし年月の物語』に見られるヤロスラフの記述を眺めて見ると多くの符合す

る記述に突き当る．スヴイヤトポルクという悪者を最大限に非難した文章が6527(1019)年の項にみられ，前記の暗殺者たちへの非難文と一対をなし，6545(1037)年にはヤロスラフのキエフ建設，教会建設の物語がつゞき，書物の利と学問のすゝめを説き，ヤロスラフの時代こそが『キリスト教の信仰が結実しはじめ，ひろがりはじめ，しかして修道僧たちが増加しはじめ，もろもろの修道院が起りはじめていた』≪нача вѣра хрестьяньская плодитися и разширяти, и черноризьци почаша множитися и манастыреве починаху быти≫とあるのは6545(1037)年であり，ヴオロジメルの建てた聖母教会が主要儀式の場となつたことが書かれているのは6547(1039)年であり，ソフイヤ教会の基礎がおかれた記事は6553(1045)年であり，ペチエルスキー修道院の詳しい記事もまた6559(1051)年，ヤロスラフの死を報じて，彼の教訓を書き取つている年号が6562(1054)年であり，はじめて公に『大』≪великый≫という形容詞を冠したのも此処においてであつた．これらは総てヤロスラフ(大)公にまつわる記事であることに注意し，且つ，その直後には，はじめて外敵ポロヴエツの侵入が記述され，愛国心と内紛停止を呼びかけるような切実な記述がつゞくことに注意しよう．なおまた，ヤロスラフの記事中教訓的な部分が総て先にあげたオリガ，ヴオロジメル，ボリス，グレブについての宗教的な文章と余りにも類似することに注意しよう．どうやら『過ぎし年月の物語』が台本にした一つのものは，このヤロスラフ記述で終つていたと思われる．そして，ルシの地におけるキリスト教受け入れの先君たちの賞讃と現代へのいましめとを兼ねた機能をもたせていた．『過ぎし年月の物語』は終りの頃に，『私が彼から多くの物語』を聞いて，それを年代記に書き込んだ』と述べているが，その多くの物語を知つていて年代記者に語つたヤン≪Ян≫は，実に，これらヤロスラフの記述の終つた直後に登場して来る．即ち，よう術師がキエフに来てヤ

ンがこれに立ち向う記事は6579(1068)年の項である．『過ぎし年月の物語』が先で台本にしたものの一つが何処で途切れていたものであるかゞ分るであろう．そして，その途切れる最後のあたりの文章こそが，その台本の書かれた目的の最大のものを表わしていた．即ち，ヤロスラフ公への賞讃的記述であり，同時に，キリスト教への熱いすゝめであり，信仰あつき先君たちへの回帰であり，同時に，隆盛をきわめた教会・修道院の栄光保存であつた．『過ぎし年月の物語』とノヴゴロド第一年代記が，最大の台本にしたものが，ヤロスラフ大公の記述まで終つたと考えられるこの台本——それを現在には伝えられていない『原初の集』であると考えてもよかろうが——が既に例えばボリスやグレブの記述に宗教的文章と血生臭い殺人物語の筋とを混合していたとすれば，台本そのものが既により古い二つ以上の台本の編集物であつたということになる．ボリスとグレブが殺される物語（『過ぎし年月の物語』の中の）が，実はそれを雄弁に物語つていたのである．『原初の集』の前にあつたと想像されている『キエフの集』にも既にもうボリスとグレブの物語における編集混乱があつたのではなかろうか．十二世紀頃の写本を最古のものとして現代に幾つか伝えられているボリスとグレブの受難物語の単一本を対比の素材としながら，（それらの写本が初めて発見されたのは1849年であつたが），『過ぎし年月の物語』及びそれが台本としたより古い年代記的文章の発生源を求めた試みがたゞ一つあるが（Н. Н. Ильин; Летописная статья 6523 года и ее источник; Изд. А. Н. СССР, Москва, 1957），今更，それを引き合いに出すにも及ぶまい．現存しない台本の想定よりも，現存する『過ぎし年月の物語』その物の精密な読み方こそが此処では求められるべきである．

そこで，再びヤロスラフ公の記述が古い台本の終末部分であつて，その後はそれに書き加える形で継ぎ足されたものだとしたら，『過ぎし年月の物語』にも，その辺から何等かの客観的な証拠が生まれて来なければならない．果して，その様なものがあるかどうか？　既に，年号，月，日の設定の仕方に就ては簡単にふれたことがある．そして，その折に設定の仕方の詳しさに差異のあることに言及した．再び此処で『過ぎし年月の物語』全体についてその点を検討して見ると面白いであろう．勿論，ラヴレンチー，イパーチー，トロイツキー 等の年代記に見られるものを中心としてこの点を見てみよう．

『過ぎし年月の物語』が年号を設定する最初は6360(852)年である．6374(866)年には，皇帝ミハイル治世（ビザンチンの皇帝）の才十四年にアスコリドとジルがツアリゴロドに来たという記事が見られるのをはじめとして，時には冬が来たりつゝあつたという様な季節を示す言葉があり，或は朝に，夕刻にという時間を示す言葉さえみられた．それらは，既に引用した『過ぎし年月の物語』の各節からも言えることであるが；さて，年号や時期や時刻ではない月と日を示した記述の仕方は，一体，何年の項から現れたであろうか．

言うまでもなく，その項の文章を先に引用した6569(1061)年からである．（二月二日という日付である）此処で編集態度或は記述態度が変つたことは言うまでもない．だからこの年の後の記述には例えば6573(1065)年には二月三日が，また6574(1066)には二度も月日が示され（三月三日と七月十日である），6575(1067)年には九月十五日が，つゞいて十一月一日が，6576(1068)年には五月二日が，6581(1073)年には三月二日が，

6583(1075)年には七月十一日が，6584(1076)年には十二月二十七日と一月一日が，6585(1077)年には三月四日，七月十五日，6586(1078)年には四月十日，七月二十三日，八月二十五日と，次第に月と日の指定の密度は増して行く．

月と日の指定までが6569(1061)年を境にして確定的に行われることは，この年号あたりから書き手，或は編集者が異ること，或は，台本の切れ目を表すものだと考えられる．『過ぎし年月の物語』が準拠した台本の書き手が誰であつたかは確定し得ないが，少くともその人物は，事件の月日までは確定することはなかつたし，記述の関心は事件の事実とその起つた月日などは集注されていなかつたように思われる．むしろその人物は，おのれの国に起つた種々の事件を記述しながら，その事件の記述にもまして，それに附随して書かれるべき宗教的理念の方に重点を置いていたように思われる．それに対して1061年以後の記事の書き足し手は，むしろ，もつと深く事件そのものを追つたように思われる．そうでなかつたら，事件の起つた月日など書く必要はない．彼自からが編集した古い部分はそれを問題にもしなかつたのだから．そして，もう一つ重要なことは，この記述態度が変る境目以前の部分が多くの台本や伝承の層の寄せ集めであるのに対して，以後の部分は，ほとんど全く正確な当代人による事実記録であり，見聞記録であるということである．『過ぎし年月の物語』が文学的に読まれるにしても，歴史資料として読まれるにしても，この境目による読み方の態度の変更は厳につゝしみ守られなければならないであろう．

この境目を勤めた書き手が一般に考えられていたようにもしニコン≪Никон≫という僧だつたとしても，その個人的な人間決定を此処で問題にしようというのではない．むしろ，彼が古い部分の編集に際しておこなつたことこそが問題にならなければならないからである．十一世紀前半以前の古い記事に就ては，その台本

をなす『原初の集』の埋め草に寺伝や僧の一代記などを集め，なお，文献的に不足する部分を，上述した多くの口頭伝承的なもので補つたと考えるべきである．そして，その古い部分の編集を終る頃から，その人物は自からの見聞をも含めて書き継いでいつたのである．然も，その書き継ぎの年代即ち彼の活動した時代こそは，ロシアの歴史にとつて忘れることの出来ないポロヴエツ人の最初の来襲の時代でもあつた．然もニコンの伝記によれば，彼はキエフからトムトロカニ≪Тмуторокань≫に一時その居所を移しているから，6572(1064)年の項以下にみられるこの地での出来事の記事は，まさに彼自身の経験見聞の記録であつたと思われる．キエフにいたものの能く知り得られないようなところがその記述には認められるからである．そして，もつと後に更に後代の年代記者(編集者)が『ヤン』≪Ян≫から多くの物語を聞いて書き込んだと記述しているが，不思議なことに，そのヤンの父ヴイシヤタ≪Вышата≫ ——— 始めて福音書を古代スラヴ語に訳したというオストロミル≪Остромир≫の息子である ——— の名前がこの年号の記事に鮮かな影をおとしている．だから，老令のヤンから多くの物語を聞いて書き込んだ人の一時代前に，このあたりの記事をニコンが書き継いだものであつたであろう．『過ぎし年月の物語』はだから，最も現代に近い時代から数えて，ヤンから物語を聞いてそれを書き加えた人物と，なおそれ以前に，6572(1064)年頃から後の相当部分とを書き加えたニコンの場合と，少くとも二回の編集加筆を経ていることになる．

それはともあれ，先づ十一世紀の後半にニコンが書き加えたと思われる実録的記事とは，次の様な6572(1064)年からのものであつたと思われる．

В лето 6572.

Бежа Ростислав Тмутороканю, сын Володимерь, внук Ярославль, и с ним бежа Порей и Вышата, сын Ост-

ромирь воеводы Новгородьского; и пришед выгна Глеба из Тмутороканя, а сам седе в него место. Иде Святослав на Ростислава к Тмутороканю, Ростислав же отступи кроме из града, не убоявъся его, но не хотя противу стрыеви своему оружья взяти. Святослав же пришед Тмутороканю, посади сына своего паки Глеба, възвратися опять; Ростислав же пришед паки, выгна Глеба, и приде Глеб к отню своему, Ростислав же седе Тмуторокани. В се же лето Всеслав рать почал. В си же времена бысть знаменье на западе,.....

.....

『6572(1064)年.

ヴオロジメルの子,ヤロスラフの孫ロステスラフはトムトロカニに逃げた:しかして彼と共に,ボレイが,及びノヴゴロドの軍司令オストロミルの子ヴイシヤタも逃げた.しかして(ロステスラフは)来つてトムトロカニからグレブを追い出し,一方,自分は彼の地位に坐した.スヴイヤトスラフはロステスラフに対してトムトロカニに進攻し,一方,ロステスラフは町から,わきへ引き下がつた.彼(スヴイヤトスラフ)を恐れたのではなくて,おのれの叔父に向つて武器を取ることを望まなかつたからである.ところでスヴイヤトスラフはトムトロカニに来たり,おのれの息子グレブを再びすえて,再び引き返した.ところでロステスラフが再び来たり,グレブを追い出した.しかしてグレブはおのれの父のもとにもどり来たつた.で,ロステスラフはトムトロカニに坐した:この同じ年にフセスラフが戦争をはじめた.この時代に西方に(天の)前兆があつた.....(天変についての記述と考察が長くつゞく.....筆者註)』.『イーゴリ遠征物語』が血の叫びをあげたのは,この様な内紛への警告であつたことを此処で想起しておこう.トムトロカニで起つた従兄

弟同志の内紛的なこの争いの記述について，同じ地で起る事件が翌6573(1065)年にも見られる．その主要部分は前に引用した，グレキの間者によるロスチスラフ毒殺の物語である．或はまたこの同じ年号の項の後半における，コルスゑ人によるこのグレキの間者の撲殺の記事である．ロスチスラフがトムトロカニで毒を盛られて死んだのは詳しく二月三日であつたと記されている．これらの記事に続く二十年間ほどの記事は伝承説話的なものも含めてニコンの手になるものであろうと思われる．というのは，『過ぎし年月の物語』がニコンの死を記述しているのは6596(1088)年であるからである．即ち，其処には次の様な記録がある．

В лето 6596.
Священа бысть церквы святаго Михаила манастыря Всеволожа, митрополитом Иваном, а игуменьство тогда держащю того манастыря Лазореви. Том же летѣ иде Святополк из Новагорода Турову на княженье. В се же лето умре Никон Печерьский игумен. В се же лето взяша Болгаре Муром.

『6596(1088)年．
フセヴォロドの聖ミハイル修道院の教会が府主教イヴアンによつて浄められた．ところで，その時にはその修道院の院長職をラゾリが占めていたのである．その同じ時にスヴイヤトポルクがノヴゴロドからトウロフに君臨すべく出かけた．この年にペチエルスキー修道院長ニコンが死んだ．この年，ポルガル人がムロムを奪取した．』

だから，この記事はニコンが書いたものではない．勿論，その直前あたりの記事もニコンの筆になるものではなかろう．この年号以下の記事については，だから，全く別の者二次，次三次の記者を考えなければなるまい．それに就ては，いづれ，ふれなければなるまいが，それよりも先に，再びニコンに話を戻さなければなるまい．1064年頃以後，このあたりまでをニコンの筆になる

ものとしても，では，そのニコンが1064年以前の古い記事を編集し直したときに，加筆したものがなかつたであろうか．古い記事のうちで，民間その他の伝承説話的な内容の部分が特に注意されなければなるまい．伝承的な物語の部分の総てがニコンの筆による書き加えであるというのではない．少くとも，その中で，ニコンが書き加えたものだと言えそうなものが無いはずはない．

1064年からの記事が，しばらく，トムトロカニという土地に起つた詳しい記事であつたことから，そしてニコン自身が，この地にしばらく腰をすえたことがあつたことから考えて，都キエフでなくて，このトムトロカニにしか伝えられなかつた伝承的物語が，もしも，1064年以前の記事にあれば，それこそ，ニコンの書き加えになるものだと言えよう．では，キエフを離れて，『過ぎし年月の物語』の話題がトムトロカニに移るもの，そして，この土地の伝承らしき物語の記事が，1064年以前の記事にあるかどうか．各年代記の『過ぎし年月の物語』の1064年の記事以前の古い部分には，たしかに，トムトロカニという地名が二度出現している．即ち，6496(988)年の項と6530(1022)年の項である．

前者は，聖ヴオロジメル大公が洗礼を受けた後，十二人いた自分の息子を各地に封ずる記事で，息子たちの最後にあたるミスチスラフ≪Мьстислав≫をこの地に『封じた』≪посади≫と述べられている個所である．十二人の一番最後に書き取られているのは，疑えば疑えるであろう．ニコン自身が一時其処に住んだ土地に伝えられた最初の地方公の伝承的な名を，ヴオロジメル大公という巨像の最後の息子として（それもまた伝承の一部であつたかも知れないが）此処に後で書き加えたとも考えられる．

然し，それよりも確信を以て後者の6530(1022)年の記事は明らかに後に加筆された伝承物語であるということができるであろう．これは前者の6496(988)年の記事と結び合わせて読むと一層面白い．即ち，トムトロカニに封じられたミスチスラフのその後

の物語なのである．然も6530(1022)年の項は，このミスチスラフの物語からは決して始まつていない．その書き出しは『ヤロスラフがベレステイに来つた』≪Приде Ярославъ къ Берестию.≫と書き出されている．いや，むしろ，おそらくはこの一行の文章だけでこの年の項の記事は終つていたかも知れない．ちなみに，ノヴゴロド第一年代記にはこの年号の記事は全くの空白なのである．トムトロカニという土地の最初の地方公をミスチスラフとした当地の伝承であつたことは，かくして容易に推察し得られる．その上に，簡明な別個の記事の直後に書き足されたものであることも推察し得られよう．その証拠に『この年』≪В се же лето≫，『この時』≪В се же время≫などという文句からこの記事は始まらず，いかにも的確な年を伏せるものの如く，『これらの時』≪В си же времена≫と『時』を複数形にして物語を始めているではないか．まさに，その推察通り，『それは今日に至るまでもトムトロカニに立つている』という言葉で結ばれている物語なのである．此処に『今日まで』とは，だから，『過ぎし年月の物語』の終末記事が書かれた時までという意味ではなくて，ニコンの死の記事が書かれた1088年より少し前を『今日』と考えて読まれるべき文章である．トムトロカニに伝えられた物語を『過ぎし年月の物語』の古い部分に加筆して組み込んだ一節とは，再び引用すれば次の様な文章である．

В лето 6530 .....
..... В си же времена Мьстиславу сущю Тмутороканю, поиде на Касогы. Слышав же се князь Касожьскый Редедя,изиде противу тому, и ставшема обема полкома противу собе, и рече Редедя к Мьстиславу: "что ради губиве дружину межи собою? Но съидеве ся сама борот; да аще одолееши ты, то возмеши именье мое, и жену мою, и дети

мое, и землю мою; аще ли аз одолею, то възму твое все". И рече Мьстислав: "тако буди". И рече Редедя ко Мьстиславу: "не оружьем ся бьеве, но борьбою". И ястася бороти крепко, и надолзе борюшемася има, нача изнемагати Мьстислав, бе бо велик и силен Редедя; и рече Мьстислав: "о пречистая Богородица! Помози ми; аще удолею сему, сзижю церковь во имя твое". И се рек удари им о землю, и вынзе ножь, зареза Редедю; шед в землю его, взя все именье его, жену его и дети его, и дань възложи на Касогы. И пришед Тмутороканю, заложи церковь Богородица, и созда ю, яже стоить и до сего дне Тмуторокани.

『この同じ頃にトムトロカニにミスチスラフがいた時，（彼は）カソグ人に向つて進攻した．ところでこれをカソグ人の公レヂエジヤが聞いて，その者（ミスチスラフ）に向つて出撃した．しかして両軍が互いに相対してとゞまつた時，レヂエジヤはミスチスラフに向つて言つた．〃何のために（我々二人は）お互いの間で親兵団を亡ぼすのか？むしろ（二人で）相会し自ら戦おうではないか．もしも汝が勝てば，我が財産及び我が妻及び我が子等及び我が土地を（汝は）取るがよい．もしも我が勝てば，汝のもの総てを（我は）取るであろう〃．と．しかしてミスチスラフは言つた．〃そうしよう〃と．しかしてレヂエジヤはミスチスラフに向つて言つた．〃（我等二人は）武器で戦うのではなくて取つ組み合いで（戦おう）〃と．しかして激しく取つ組み合いはじめた．永い間（二人は）取つ組み合つていた時，ミスチスラフは弱りはじめた．というのは，レヂエジヤは大きく強かつたからである．しかしてミスチスラフは言つた．〃おゝ，いと清き聖母よ！　我を助け給え．もしも（我が）この者に勝てば，汝の名において教会を建てよう〃と．しかして（彼

は）こう言つて，彼を大地にうちすえた．しかして剣を抜いてレヂエジヤ を斬つた．彼の国に行き，彼の総ての財産，彼の妻，及び彼の子等を取り，しかしてカソグ人たちに貢税を課した．しかしてトムトロカニに戻り，聖母教会の基礎をおいた．しかしてそれを建てた．それは今日に至るまでもトムトロカニに立つている』

このまゝの物語の形でトムトロカニ地方に説話として伝えられていたものなのか，或は，英雄の一騎打ちの物語だけがあつたのを，教会創設の話として誰かがまとめたものをニコンが書きとつたのか，それとも，ニコン自身が教会創設物語としてまとめて書きとつたものなのか，その点はもう知る由もない．たゞ，この説話は，その後も同地に伝えつゞけられていたものであることはたしかである．というのは，『イーゴリ遠征物語』にその影があるからである．『イーゴリ遠征物語』に詠まれる事件は1185年四月末から五月にかけて起つているし，創られたのは，1187年或は1188年であつたと考えられる．だから，『過ぎし年月の物語』に書き込まれてから百年と少し後の作品である．此処に影がみとめられるというのは，次の様な処である．前置きの導入部分で，伝説的な大詩人バヤン≪Боян≫にあやかつて物語を進めたいと述べられている．そして，そのバヤンという詩人の偉大さと詩的才能による貢献とがしばらく歌われる．其処に次の様な個所がある．下線の部分が即ちトムトロカニでミスチスラフがレヂエジヤに勝つた説話の影にあたる処である．

Боян бо вещий, аще кому хотяше песнь творити, то растекашется мыслию по древу, серым вълком по земли, шизым орлом под облакы. Помняшеть бо, рече, първых времен усобице. Тогда пущаеть 10 соколовь на стадо лебедей: которыи дотечаше, та преди песнь пояше старому Ярославу, храброму Мстиславу, иже зареза Редедю пред пълкы касож-

ьскыми, красному Романови Святославличю.....

『というのは神智あるバヤンは，もしも誰かに歌を創らうとするときには，思いをはせて木にうつり，灰色の狼になりて大地を馳せ，ぬれば色の鷲となりて雲井に舞う．というのは（彼は）遠き世々の戦を憶えているからである．その頃には（彼は）十羽の鷹を白鳥の群に放ち，飛び来たりその者が先づ歌をはじめたのである．．長老なるヤロスラフに，カソグ人の軍勢を前にしてレヂエジヤを斬りし勇敢なるムスチスラフに，うるわしきロマン・スヴィヤトスラヴィチに・・・・・・・・・』

『イーゴリ遠征物語』の中でも面白いことに気づくであろう．賞讃の歌を奉られるヤロスラフやロマンには，決して関係代名詞による説明など行われていない．ところが，ミ(ム)スチスラフだけは＜иже＞を用いて，わざわざ，その功績の説明をしている．説明しなければ，古き英雄ミスチスラフが何物であるのかが叙事詩の聞き手に伝わらないと考えたからであつたかも知れない．とすれば，ミスチスラフのこの説明に当る一句をも含めた物語は，キエフ地方の有力な伝承ではなくて，この時代にも，いまだ，物語好きな人々の間にしか伝えられなかつた地方伝承であつたと言えよう．ということになれば，これは『過ぎし年月の物語』の該当部分の組み込みの事情と符合することになろう．

もしも，中央の都キエフを遠くはなれた土地に伝えられたとおぼしき地方伝承をニコンが『過ぎし年月の物語』の古い年代の個所の編集加筆の際に組み入れたのだとしたら ―― また，地方伝承にそれほど関心を持つていた人物だとしたら，話はもつと広く展開されなければならないであろう．『過ぎし年月の物語』の古い時代の個所には相当多くの地方的伝承が読み取られるからである．コザル人から貢税を集めていた人に，老人が，貢税として差し出された両刃の剣を見て，コザル人の二心を見抜き，良きことの前兆ではないと忠告する物語なども或はニコンの手によつて組

み込まれたのかもしれない．また，ヴォロジメル公の記述の部分では，キエフからわざわざコル地方に場を移して展開される物語があつた．即ち，特にヴォロジメルがキリスト教の洗礼を受ける前の行動記述にはそれが多い．然も，それらは余りにも伝承物語的であるように思われる．少くとも，それらの内のいくつかは彼の手になるものかも知れない．トムトロカニという地方のミスチスラフの説話を取りあげたのがニコンであつたとしたら，そして，その記述に，『今日までも～している』という結びの言葉が用いられていたことに注意するなら，やはり，ヴォロジメル公の記述の中で，地方を舞台にし，且つ『今日までも～している』という結びの記述があれば，少くともそれが説話的でありさえしたら，一応はニコンの手になる加筆部分であると考える方が合理的であろう．その様な部分がたしかに『過ぎし年月の物語』のヴォロジメル記事には存在するのである．その典型的な一例が，ヴォロジメル洗礼以前の6492(984)年の項である．

Иде Володимер на Радимичи. Бе у него воевода Волчий Хвост, и посла и Володимер перед собою, Волъчья Хвоста; сърете е на реце Пищане и победи Радимиче Волъчий Хвост; темь и Русь корятся Радимичем, глаголюще: Пищаньци волъчья хвоста бегають. Выша же Радимичи от рода Ляхов; прешедъше туся вселиша, и платять дань Оуси, повоз везуть и до сего дне.

『ヴォロジメルはラジミチに進攻した．彼のもとには軍司令官のヴォルチー・フヴォスト（狼の尾）がおり，彼をヴォロジメルはおのれよりも前につかわした（この）ヴォルチー・フヴォストを．ヴォルチー・フヴォストはピシチャ川のほとりで彼らを迎えうち（この）ラジミチをうち負かした．これによつてルシもラジミチをののしつて言つた

ビシチヤナ人たちは狼の尾から逃げる（狼の尾をこわがる）と．ところでラジミチはリヤヒの一族から出ていた．（彼等は）そこに移つて住みついた．しかして貢税をルシに払つており，彼らは今日に至るまで貢税の義務を果している』

この様に，『今日に至るまで――している』という結びの言葉を持つ記事は『過ぎし年月の物語』の中には数個を数えることができる．ヴオロジメル公の記事に限つて，なお且つ，都キエフを離れたコルスニ≪Корсунь≫での記事として，見たゞけでも，例えば次の様な一節がある．6496(988)年の項の中程である．

Володимер же посем поем царицю, а Настаса, и попы Корсуньски, с мощми святаго Климента и Фифа, ученика его, поима съсуды церковьныя, иконы на благословенье себе. Постави же церковь в Корсуне на горе, юже съсыпаша среде града, Крадуше присну, яже церки стоить и до сего дне.

『ところでヴオロジメルは（自分の妻に迎えたグレキの）皇女とナスタスとコルスニの僧たちをつれ，聖クリメント及び彼の弟子のフイフの遺体と共に教会の器物及び聖像をおのれの祝福のためにもつて行つた．ところで（彼は）コルスニの人々が土手をくづして町の中央にきづいた山の上に教会を建てた．その教会は今日に至るまでも立つている』

キエフを離れたコルスニという地方の伝承的物語をこの様にニコンが加筆したものだとすれば，ヴオロジメル公の記事に関するもののうちで，コルスニを事件の場とするその他の物語記事も，また彼の手による加筆であつたと考えてよいかも知れない．それらの記事を此処に引用することはもう省略しておこう．

ところで，ヤン≪Ян≫から多くの物語を聞いて，それを『我は』年代記に『書き込んだ』≪вписах≫とした人物は年代的に見て決してニコンではなかつた．ニコンよりも後に再び年代記を編集加筆

した別の人物であつたことは少し前にふれた．ところで，後に別の人物に多くの昔話を語ることのできたヤン≪Ян≫は，その物語を自分で創作した訳はなかつたであろう．より年配の誰かから聞き知つたものであるはずである．では，そのヤンに語りきかせた者はだれであつたであろう．先づ，ヤン自身の父ヴイシヤタ≪Выш-ата≫ではなかつただろうか．ヤンの父は，実に福音書の最初の訳者の子であり，軍司令官であつた．文人的にも武人的にも名門の教養高き人であつたことは前述した．ところで，父ヴイシヤタは，息子ヤンに向つて多くの昔話を語り聞かせる以外にも，多くの人々に，同じように豊かな伝承や説話を聞かせたことがあつたと考えるべきである．『過ぎし年月の物語』自体の記述から見て，実はニコンとヴイシヤタとは全く同年輩のように見受けられる．この二人の関係を想定するのは不自然であろうか．ニコンが地方にある伝承説話に関心を持ち，その幾つかを『過ぎし年月の物語』に編集加筆したほどの人であつたとすれば，ヴイシヤタの語る昔話を汲み取らなかつたはずはないと思われる．ニコンとヴイシヤタとは同時代人であり，一方は修道院長，一方は軍司令官であつた．二人は会つたり，話したりしたことが無かつたとは，これまた考えられない．6572(1064)年の項として『過ぎし年月の物語』が，トムトロカニにロスチスラフが逃げたという記事をもつていることを先に述べた．然も，その時にニコンがトムトロカニに居たことも前述した通りである．ところで，『過ぎし年月の物語』のこの年の記事には，トムトロカニに逃げたロスチスラフに従つて共に行動した人物の名をあげていた．ポレイ≪Порей≫という人物と，もう一人は実にヴイシヤタその人の名である．然も，ヴイシヤタにはわざわざ但し書きをつけたように『ノヴゴロドの軍司令官であるオストロミルの息子』という言葉がつけ加えられている．実際に見物し実際に会つた人物の名をニコンが此処に書き込んだのはたしかであろう．ポレイという名だけが記された人物の方とニコンとは或は疎

遠な仲であつたかも知れない．それに対して，ヴイシヤタの方は父の身分と名まであげて記されている以上，特にニコンが深い注意を払つたためであると思わなければならない．キエフの軍司令官ではなくて，ノヴゴロドの軍司令官であつたオストロミルの息子であつたことに注意しよう．もしこのヴイシヤタが後に息子ヤンに物語つたように，ニコンをとらえて物語をはじめ，或は地方伝承に関心をもつていたニコンが彼をとらえて話を聞いたとすれば，それは，多くノヴゴロドの話であり，ノヴゴロド地方に伝わる物語であつたと思われる．『過ぎし年月の物語』の古い部分及びニコンが死ぬまでの年代の項には，ノヴゴロドを舞台とし，ノヴゴロド人が登場する物語が少くない．即ち，1088年にニコンが死んだという記事以前に，年代設定以前に四回，6370(862)年，6390(882)年，6455(947)年，6478(970)年，6485(977)年，6488(980)年，6496(988)年，6505(997)年，6522(1014)年，6525(1015)年，6524(1016)年，6526(1018)年，6529(1021)年，6532(1024)年，6544(1036)年，6553(1045)年，6560(1052)年，6571(1063)年，6575(1067)年，6579(1071)年,等がある．

これらのノヴゴロド或はノヴゴロド人を記述した『過ぎし年月の物語』の記事の幾分かは，ニコンの手によつて巧みに加筆され組み込まれたものだと考えておいてよいであろう．特に，それら上記の年号項のうちで，物語性の豊かな伝承的な内容のものは，そうだと考えて大過はないであろう．そのうちで，例によつて『今日まで～している』という文句を含んで注目される一節がある．6455(947)年の項である．

В лето 6455.

Иде Вольга Новугороду и устави по Мьсте повосты и дани, и по Лузе оброки и дани; ловища ея суть по всей земли, знамянья и места и повосты, и сани ее стоять в Плескове и до сего дне.....

『6455(947)年。
ヴォリガはノヴゴロドに向い，ミスタ（河）の沿岸に陣屋と貢税を（定めた）。彼女の狩場は全国にわたつてある。しかして，（ゆかりの）しるし，場所，陣屋もある。しかしてドニエプルに沿つても，デスナに沿つても，鳥網場がある。しかして彼女の村オリジチも，今日に至るまである……』

その一節は実に面白いことだが，主人公オリガ≪Ольга≫を此処だけヴォリガ≪Вольга≫と綴つている。ラヴレンチー年代記その他イパーチー年代記なども，此処だけが≪Ольга≫ではなくて，≪Вольга≫と綴り，その前後は総て≪Ольга≫になつているのである。勿論，彼女の息子のオレグ≪Олег≫を生格なり対格にして用いる時にその形が≪Ольга≫となつて，その場合に，或る個所では≪Вольга≫となるようなことは決してない。ましてオレグの生・対格との混乱をさけるためにオリガを≪Вольга≫と綴るなら，いつこもそうならなければなるまい。だから，どう考えて見ても，此処における≪Вольга≫は，明らかに完全に別個の物語の別個の加筆であつたと思わなければならない。他の多くの年代記では，『古代ロシア研究』才五号にオリガ記事を総て取りあげたように≪Вольга≫と綴ることが皆無であつたわけではない。然し，ラヴレンチー年代記などの『過ぎし年月の物語』ほどに，6455年のこの項のような特殊な別格綴りとして利用することは一度もなかつた。古いブイリーナの中にヴォルガ河≪Волга≫を主人公にし擬人的に活躍させた作品があつたが，或は，それとの混乱であろうか。そうだとすれば，この項の説話は非常に古いものになる。ともあれ，『過ぎし年月の物語』に，この項が差し入れられたのは，その他のオリガ記事とは全く違つた形においてであつたと思われる。

さて，次に，ノヴゴロド或はノヴゴロド人の登場する記事中で，ニ

コンの加筆になると考えてよさそうなものを，上記の年号列挙中のものからもう一つ求めて見よう．6488(980)年の記事は，ヴオロジメル公がいまだキリスト教を採取しない以前の物語であつた．キエフにスラヴ原始宗教の主神ペルン≪Перун≫をはじめとする多くの神々の像をキエフの丘の上に建てたという記事であつた．そして記事は，それらの像を人々が礼拝し，いけにえをさゝげていたと報じている．そして，その直後には，教会人らしく，その行為が真の神にそむくものであつたのだと説き，神はそれにもかゝわらず，慈悲深く，人を罰せず，むしろ，現在はその地に聖ヴアシリイ教会が立つているようなめぐり合わせを人に与え給うていると述べている．そこまで説明的に記述するのならば，一方，ノヴゴロドにはヴオルホフ河に臨んだ所に，同じペルンの偶像を立てたという後半の記事にも，何等かキリスト教的後日たんをつけなければなるまい．ところが，ノヴゴロドに原始異教の主神ペルンの像が立てられたという後半の記事は，人々が礼拝していたという言葉で終るのみである．これまた明らかに後の加筆であつたということになりそうである．原始異教の神への礼拝はいけないのだという説教なり，それでもキリスト教の神は慈悲深いから，古き原始の神の座にさえ教会が今は立つているという説法を書きつけるのなら，キエフとノヴゴロドの両者における偶像建立の記事の後におこなわれて然るべきであろう．決して，上手な編集や加筆の手段ではなかつた．

ヤン≪Ян≫の父であり，オストロミール≪Остромир≫の息子であり，しかも自から軍司令官であり，『過ぎし年月の物語』自身の記事によれば，6551(1043)年の記事にあるようにグレキ遠征の指揮もしたヴイシヤタからニコンが聞き取つた物語は，上に述べたようなノヴゴロドの地方的な物語だけであつたとは考えられない．ヴイシヤタ自身が自分の身の物語をも熱をこめて物語つたとしたら6551(1043)年の項は，これまたそれを聞いたニコンの筆

になるものであつたであろう．或はヴイシヤタの息子ヤンが父の自慢話を語つたのを一世代後の別の人がもう一度，ニコンのこの記事に加筆しているかも知れない．それはともかく，少くとも，ヴイシヤタが軍司令官として，ヤロスラフ公の命によりグレキに遠征し，そして，グレキに捕えられた多くのルシ人と共にビザンテンに連れて行かれ，多くのルシ人が眼をつぶされて盲目にされ（≪слепиша Русь много≫）たといわれる以上，ヴイシヤタも或は同じように眼をつぶされたかも知れない．そして三年後に≪по трехъ летѣхъ≫和平が結ばれた時≪миру бывшы≫『ルシの国へヴイシヤタは放された』≪пущенъ бысть Вышата в Русь≫のであつた．ヴイシヤタにとつて，このグレキ遠征の苦々しい物語は，決して，物語をなす折に避けては通れなかつたであろう．息子ヤンにも聞かせたであろうし，ニコンにも物語つたであろう．勿論，自分のグレキ遠征にちなんで，過ぎし時代の栄光ある古いグレキ遠征の物語をも引き合いに出したであろう．とすれば，ヴイシヤタが6551（1043）年のことゝして語つたと思われるこの年の年号よりも古い総てのグレキ遠征の物語もまた，その根源はヴイシヤタの口から出た物語であり，それを聞いたニコンの筆の先にあつたと考えてよいかも知れない．

この様な物語的な素材以外に，キエフのペチエルスキー修道院にまつわる寺伝の如きものは，完全にその院長であつたニコンの編集によつて『過ぎし年月の物語』の中へ持ち込まれたものである．

ロシアにキリスト教が入つて来たそもそもの事情と，初期頃の巨大な信者やじゅん教者や公たちの信仰物語，及びキリスト教がロシアの地に広まつて行く物語をまとめた，最も根元的な古い作品があつて，その行間にニコンが非常に多くの口頭伝承や政治社会・軍事的な世俗記事を書き込んで，先づ『過ぎし年月の物語』の原型がほゞ出来上つたのだとしたら，何故，彼は，宗教的な本来の

作品の中に世俗的な記事をそんなに多く差し込んだのであろう．語彙も文体も内容も全く異質的なものを，これほどやたらに混入させたのは何故であつたであろう．キリスト教的な物語だけに沈潜して，宗教の空気の中だけに生きていることのできない何等かの理由があつたからに相違ない．宗教から世俗への移行があつたからであろう．その原動力は，では一体，何であつたのだろう．我々はニコン自身が自分の時代のことゝして書いたと思われる『過ぎし年月の物語』の記事自体からそれを探ることができる．即ち彼が老年を生きた十一世紀六十年代末の事件についての記事に注目したい．

ロシアがギリシア文明を摂取してさかえ，且つ，独立した後も，この時期は外敵ポロヴエツの侵入がようやく激しさをます時であつた．月と日とを指定して，最初のポロヴエツの来襲を伝える記事が『過ぎし年月の物語』に現れるのは，6576(1068)年であつたことを注意しておこう．翌々年6571(1063)年にはスジスラフ公が死に，五日間ヴオルホフ河が逆流して悪いことの起るきざしを示し，フセスラフによつて町が焼かれた．次の6572(1064)年には，フセスラフが戦争をはじめ，天には不気味な血の色をした大きな星が現われた．物情騒然たる時代であつた．そして再び6575(1067)年にはポロヴエツの大挙侵入が記録されている．そこで，この6575(1067)年の記事には何が書かれていたか．この年の項は月と日まで二度までも指定された記事である．ポロヴエツに敗退した公たちとその後の物語である．

В лето 6575.
Придоша иноплеменьници на Русьску землю, Половьци мнози, Изяслав же, и Святослав, и Всеволод изидоша противу им на лѣто; и бывши нощи, подъидоша противу собе.....
и побегоша Русьскыи князи, и победиша Половци.

.....

Изяславу же со Всеволодом Кыеву побегшю, а Святославу Чернигову, и людье Кыевстии прибегоша Кыеву, и створиша вече на торговищи, и реша послався ко князю: "се Половци росулися по земли; дай, княже, оружье и кони, и еще бьемся с ними". Изяслав же сего не послуша. И начаша людье говорити на воеводу на Коснячька; идоша на гору, с веча, и придоша на двор Коснячков, и не обретше его, сташа у двора Брячиславля и реша: "поидем, высадим дружину свою из погреба". И разделшася надвое: половина их иде к погребу, а половина их иде по мосту; си же придоша на княжь двор. Изяславу же седящу на сенех с дружиною своею, начаша претися со князем. Стояше доле, князю же из оконця зрящю и дружине стоящи у князя, рече Тукы, брат Чюдин, Изяславу: "видиши, княже, людье възвыли; посли, ать Всеслава блюдуть". И се ему глаголющю, другая половина людий приде от погреба, отворивше погреба; и рекоша дружина князю, "се зло есть; посли ко Всеславу, ать призвавше лестью ко оконцю, пронзуть и мечем". И не послуша сего князь. Людье же кликнуша и идоша ко погребу Всеславлю; Изяслав же се видев, со Всеволодом побегоста с двора, людье же высекоша Всеслава из погреба, в 15 день сентября, и поставиша и среде двора княжа; двор же княжь разграбиша, безчисленое множьство злата и сребра, кунами и белью. Изяслав же бежа в Ляхы. Посем же Половцем воюющим по земле Русьстей, Святославу сущю Чернигове,

и Половци воюющим около Чернигова, Святослав же собрав дружины неколико, изиде на нь ко Сновьску. И узреша Половци идущь полк, пристроишася противу; и видев Святослав множьство их, и рече дружине своей: "потягнем, уже нам нелзе камо ся дети", удариша в коней; одоле Святослав в трех тысячах, а Половець бе 12 тысяче, и тако бьеми, а друзии потопоша в Снъви, а князя их яша рукама, в 1 день ноября и възвратися с победою в град свой Святослав. Всеслав же седе Кыеве.

『6575(1067)年

異種族人たちがルシの国に進攻し来たつた．多くのポロヴエツ人たちである．そこで，イジヤスラフは，スヴイヤトスラフも，フセヴオロドも，彼に対してリト（河）に出撃した．しかして夜であつた．互いに対立接近した・・・・・・・・・・・・しかしてルシの公たちは逃げ，ポロヴエツ人たちが勝つた・・・・・・・・ところでイジヤスラフはフセヴオロドと共にキエフに逃げ，一方，スヴイヤトスラフはチエルニゴルフに（逃げた）とき，キエフの人々はキエフに逃げ来て，市場において民会をおこない，しかして（人々は）公に使者をたてて言つた．〃見よ，ポロヴエツ人たちが国中に散つた．公よ，武器と馬とを与えよ．しからば（我々は）もう一度彼等と戦おう〃と．イジヤスラフはこれを聞かなかつた．しかして人々は軍司令官コスニヤチコを非難しはじめた．（人々は）民会から山の手に行き，しかしてコスニヤチコの家敷におしよせた．（人々は）彼を見出さず，ブリヤチスラフの家敷のそばにとゞまり，しかして言つた．〃行つて，おのれの親兵団を牢から解き放たう〃と．しかして（人々は）二手に分かれた．彼等の半分は牢に向い，また半分は橋を進んだ・それらの者たちは公の家敷におしよせた．ところでイジヤスラフはおのれの親兵団と共に二階広間に坐していたとき，（人々は）公

と争いはじめた．（人々は）下に立ち，公の方は小窓から（外を）ながめ，親兵団が公のかたわらに立つていたとき，チユジの兄弟トウクイがイジヤスラフに言つた．〃見よ，公よ，人々が叫びをあげた．使者をたて，フセスラフを守らせよ〃と．しかしてこれを彼が言つているとき，人々の半分が牢から来たつた．牢を開いてしまつたのである．しかして親兵団は公に言つた．〃これは悪しきことである．フセスラフに使者をたて，あざむいて（彼を）小窓のところへ呼びよせ，彼を剣で突きさゝしめよ〃と．しかして，このことを公は聞かなかつた．ところで，人々は叫びしかしてフセスラフの牢に来つた．ところで，イジヤスラフはこれを見て，フセヴオロドと共に家敷から逃げた．人々の方はフセスラフを牢から連れ出した．九月十五日のことである．しかして，彼を（人々は）公の家敷の中央にすえた．（人々は）公の家敷を略奪した．金及び銀，貨幣及び獣皮を数限りなく無数に．ところでイジヤスラフはリヤヒに逃げた．ところでこの後，ポロヴエツ人たちがルシの国を攻め，スヴイヤトスラフがチエルニゴフにいて，しかしてポロヴエツ人たちがチエルニゴフの近くで攻撃していたとき，スヴイヤトスラフは若干の親兵団を集め，彼等に対してスノヴイスクに出撃した．しかして，ポロヴエツ人たちは進み来る軍勢を見て，戦いの準備をした．しかして，スヴイヤトスラフは彼等が多数であるのを見て，おのれの親兵団に言つた．〃攻めようではないか．既に我々には何処に身を置く場所もない〃と．（人々は）馬に鞭をあてた．スヴイヤトスラフは三千人を以て打ち勝つた．ところがポロヴエツ人たちは一万二千人であつた．しかして，（彼等は）打ちやぶられ，他の者たちはスヌヴイ（河）におぼれ死んだ．しかして彼等の公を（人々は）生けどりにした．十一月一日のことである．しかしてスヴイヤトスラフはおのれの町に勝利を納めて戻つた．ところでフセスラフはキエフに坐した』

外敵に対する一応の勝利の記録だとは言えるが，然し，よく読

むと其処には，むしろ，公たちの不一致についての嘆きが読み取られるであろう．実際，この記事の翌年の項には公たちの間の仲間戦争が物語られているのである．外敵にふみにじられ，公たちの不一致に迷わせられていた人々の嘆きと憤りとやり場のない気持が此処にはにじみ出ていないだろうか．宗教的世界の内側にのみあつては，既に，強烈な世俗の出来事には対処し得る筈もなかつた．古い初期のロシア・キリスト教信者たちの物語や，キリスト教がロシアに入りはじめた頃の宗教的物語では，現世に対して全く不足充の違和感があつた．まして，その古い宗教的物語は，輸入もとであるビザンテン（グレキ）を家元と考え，グレキをあがめ，グレキにもたれかゝる姿勢が強く，外敵来襲と支配層の内紛的抗争の乱世には，民族的に生きた機能は果し得なくなつていた．此処で再び家元のグレキにもたれかゝるには，然し，ロシアは既に民族文化を高めたし，グレキそのものが東方のロシアの内外のうれいの受けとめ手にはなつてくれるはずもなかつた．嘗つて，あこがれ，あがめられたグレキは，ロシアの民族的自立の立場から考え直さるべき対象でなければならなかつた．ポロヴエツ人という外敵及びその外敵の異教，そして，いまだ残るおのれの国の原始異教的要素には，教会人としても，自からの力量で自から戦う能力をもたなければならなかつたと思われる．そのためには，グレキから借りた眼鏡を通した姿においてゞはなくて，ロシア宗教人独自の内眼によつて祖国の過去と現在の栄光を定着させなければならなかつた．かくて，グレキは家元の地位から対等の批判対象へ転ぜられなければならないし，精神的独立こそが勝ち取られなければならなかつた．その独立精神は権力闘争の内紛に明け暮れる公たちよりも，それらの公たちを下から突き上げる形で，より下級武人たちの行動に現れ，それこそが，また，年代記者である教会人に高く評価された．記してたゝえられるべき行動として受けとめられた．その様にして，上に引用した記述は読まれなけれ

ばならないと思う．その中でも，特に，キエフの民会での発言とその意気こそは，大書さるべき新しい現象であつただろうし，また，民会に集まる下級者たちのその意気と発言からこそ，新しい統一的ロシアは建て直されるべきであるとされたことであろう．即ち，上部を突きあげる下級者のその発言とは，『見よ，ポロヴエツ人たちが国中に散つた．公よ，武器と馬とを（我等に）与えよ．しからば（我々は）もう一度彼等（ポロヴエツ人たち）と戦おう』という言葉である．『過ぎし年月の物語』に非宗教的な世俗事件の記述が数多く組み込まれた目的は，行きつくところ，この発言の精神顕揚のために他ならなかつたように思われる．その発言の精神こそがニコン当時における最大の倫理であつてほしかつたのであろう．だから，この発言にまで固まりつくまでには，数多くの準備的記述が必要であつた．その用を達するためのものこそが世俗的事件の多くの加筆であつた．だから，それらの記述の中には，公を突きあげてでも，下級者たちで戦おうとする意気を示した多くの準備的物語が伏せられていた．例えば，上記の物語を五十年余りさかのぼつて6526(1018)年の記事を見るがよい．(既にこの記事の文章は先に引用したことがある)．其処には，ボレスラフ≪Болеслав≫に敗れたヤロスラフ≪Ярослав≫を下級者が突きあげる物語が読まれる．敗れたヤロスラフが船で海外に逃亡しようと企てた時に，ノヴゴロドの人々はどうしたであろうか．彼等は代官コスニヤチンをいたぶいて，ヤロスラフの船を破壊し，彼の逃亡をさまたげた．その時に人々の言つた言葉として書きとめられたのは『(我々は)もう一度ボレスラフと，またスヴイヤトポルクと戦いたく欲する』≪хочем ся и еще бити с Болеславом и с Святополком≫という言葉であつた．また，これより三年前即ち6523(1015)年の記事をみるがよい．其処には嘗つて引用した如く，父の親兵団がボリスに戦うことを提案した物語があつた．戦うことを肯定しなかつたボリスに対して，親兵団が取つた態度は，彼から離れ散

るという無言のしつぺ返しであつたではないか．しかもこのボリスの弟ヤロスラフ公がノヴゴロドの民会に出席した時，民会の人々は，肉親に多くの戦死者を出していたにもかゝわらず，何と答えたであろうか．『公よ，たとえ我々の兄弟たちが打ち殺されたとはいえ，（我々は）汝の為に戦うことができる』≪аще, княже, братья наша исѣчена суть, можем по тобѣ бороти≫という言葉であつた．ともに6523（1015）年の項の記事であつた．

勿論，この下級者たちの覚めた独立精神の意気を大記して顕揚することがニコンの最終目的であつたわけではない．それほどに燃える下級者の立派な精神の上に立つて，最高支配者である公たちに注文がつけたかつたのである．もう其処にはビザンチンの教え子としての修道僧の姿は克服され，最高知性者，最高道徳者としてのロシア人の自負と識見とがあつた．公たちの内紛への鋭く厳しい非難が此処から響き出すのである．宗教人が宗教の記述を超えた最大の理由であつた．公たちの内紛停止への注文は，『過ぎし年月の物語』の中に，かくして，数多く加筆され織り込まれる結果ともなつた．6562（1054）年の項の記事として，先に引用した，ヤロスラフ公の息子たちへの遺訓とは，まさにそうしたものの一つであつた．即ち其処に説かれたものこそ，最高知性人がそのまゝ公たち自身に投げかけた注文そのものであつた．その一部を再び次に引用しておこう．外敵を迎えて且つ内紛をくり返す当時（十一世紀末）の公たちに，これほど耳のいたい言葉は他になかつたであろう．まして大先君ヤロスラフ公の遺訓という形をとられてはなおさらのことであつた．

.....сынове мои; имейте в собе любовь, понеже вы есте братья единаго отца и матере. Да аще будете в любви межю собою, Бог будеть в вас, и покорить вы противныя под вы, и будете мирно живуще; аще ли будете ненавидно живуще в рас-

прях и которающеся, то погыбнете сами и погубите землю отець своих и дед своих, иже налезоша трудом своим великым. Но пребывайте мирно, послушающе брат брата.....

『我が子等よ．お互いに愛をもて．その故は汝等は同一の父及び母からの兄弟たちなのである．もしも（汝らが）お互いの間の愛の中にあるならば，神は汝らの中にいまし，汝らに敵対するものを汝らのもとに服せしめ給うであろう．しかして（汝らは）平和に暮すであろう．もしも（汝らが）紛争の中に敵意をもつて暮し，相争うならば，（汝ら）みづからは破滅し，且つ，汝らのみづからの父たち及び祖父たちの国をほろぼすことになろう．その国たるや（父及び祖父たちが）偉大なる労苦をもつて獲得したものなのであるのに．しからずして，兄弟は兄弟の言うことを聞きつゝ仲良く暮すがよい』

この様に，当時の支配層に向つての，血の出るような注文と主張とが，ニコンによつて『過ぎし年月の物語』に強く反映させられていたのである．その準備段階として種々の世俗的軍事的事件の加筆が古い年代項の部分に数多くなされたのであつたと思えばよいであろう．そして，最後の目的であつた注文と主張は，鋭い形で諸所に織り込まれた．ヤロスラフ公の口を借りて，上にあげたような遺訓として書かれたものの他にも，まだ数多くそれを発見することができる．この遺訓の形として述べられた倫理をふみ破ることが如何に悪いことであるかという裏返しの形で書かれたものが，これまた月と日付とを明記した6581(1073)年の項である．明らかに，ヤロスラフ公の教えという形での倫理の破壊を厳しく非難した文章で，十九年前の年代項即ち上記の6562(1054)年の項との関連の上で読みとられなければならないものであろう．ヤロスラフ公の教えの倫理は，年代記者によれば同時にそれ以上に神の誡律なのであり，それを破ることは大罪であると大記した

のである．即ち，政治的主張と宗教的主張とが，充分ロシヤ流に消化された時代にして，はじめて為し得たほどの文章をニコンは『過ぎし年月の物語』の古い年代項の中に繰り込み，新しい当世の出来事を書き足したのであつた．ちなみに，6581(1073)年の項には次の様に読まれるのである．

В лето 6581.
Въздвиже дьявол котору в братьи сей Ярославичих. Бывши распри межи ими, быста с себе Святослав со Всеволодом на Изяслава; изиде Изяслав из Кыева, Святослав же и Всеволод внидоста в Кыев, месяца марта 22, и седоста на столе на Берестовом, преступивше заповедь отню. Святослав же бе начало выгнанью братню, желая болшее власти; Всеволода бо прелсти, глаголя: "яко Изяслав сватится со Всеславом, мысля на наю; да аще его не вариве, имать нас прогнати". И тако взостри Всеволод на Изяслава. Изяслав же иде в Ляхы со именьем многым, глаголя: "яко сим налезу вои". Еже все взяша Ляхове него, показавше ему путь от себе. А Святослав седе Кыеве, прогнав брата своего, преступив заповедь отню, паче же Божью. Велий бо есть грех преступати заповедь отца своего.....

『悪魔がヤロスラフの子たちのこの兄弟の中に紛争をもちあげた．彼らの間には仲間げんかが起り，スヴイヤトスラフがフセヴオロドと共にイジヤスラフに対抗したのである．イジヤスラフはキエフからのがれ出て，スヴイヤトスラフ及びフセヴオロドがキエフに入つた．三月二十二日のことである．しかして，(二人は)父の遺訓をおかしてベレストヴオの王座についた．ところでスヴイヤトスラフは，より大きな権力を望んで兄弟追放のはじめをなしたのであつた．と

いうのは，（彼が）フセヴオロドをたぶらかして言つたからである．〃イジヤスラフは我ら二人に対抗して企てつゝフセスラフと結んでいる．もしも（我ら二人が）彼に先んじなければ，（彼は）我らを追い払うであろう〃と．かくしてフセヴオロドをイジヤスラフにけしかけたのであつた．ところでイジヤスラフは多くの財産をもち，リヤヒ（人のもと）へ行つた．〃これを以て戦士を集めよう〃と言いながら．それらの（財）の総てをリヤヒ人たちは彼から奪い取り，彼をおのれのもとから追い払つた．一方，スヴイヤトスラフは，父の遺訓，それ以上に神の（いましめ）をおかして，おのれの兄を追い払いキエフに坐した．ところで，おのれの父の遺言をおかす罪は大である．』

ところが，これとは反対に，ヤロスラフ公の教えの形で示された兄弟愛 —— 即ち，支配層の内紛停止と，統一権力への志向と，それによる外敵への一致団結した対抗の姿は，種々の年代項の物語を利用しつゝ『過ぎし年月の物語』の各所に讃美されつゝちりばめられたのである．

年号の古い順番からその様に彫りの深い文章を二・三引用してみよう．先づ6527（1019）年の項がそれである．即ち，先にその文章を引用した如く兄弟殺しの悪者スヴイヤトポルクを撃つヤロスラフの記事がその前半である．そして後半には，悪者スヴイヤトポルクの兄弟殺しの罪状を激しく暴露し，『今日まで ～ している』という例の文章で以て，『今日まで彼の墓は荒野にあり，そこから悪しき臭気が発散している』という最大限の非難と，それにつゞく鋭い説教とを書きつけたのである．その辺の文章は，いまだ一度も引用しなかつたので，此処に示しておこう．宗教的説教が支配層への烈しい注文となり，政治論となり，世俗世界での守られるべき倫理ともなつた一つの典型的な文章であろうと思われる．だからまた，『過ぎし年月の物語』における最も熱つぽい，最も典型的な，最も骨子となるべき文章なのである．

Есть же могыла его в пустыни и до сего дне, исходить же от нея смрад зол. Се же Бог показа на наказанье князем Русьскым, да аще сии еще сице же створять, се слышавше, ту же казнь приимуть; но и болши сея, понеже ведая се, створить такоже зло убийство. 7 бо мьстий прия Каин, убив Авеля, а Ламех 70; понеже бе Каин не ведый мьщенья приняти от Бога, а Ламех ведый казнь, бывши на прародителю его, створи убийство. Рече бо Ламех к своима женома: мужа убих в вред мне, и уношю в язву мне; темъже, рече, 70 мьстий на мне, понеже, рече, ведая створих. Се Ламех уби два брата Енохова, и поя собе жене ею; се же Святополк новый Авимелех, иже ся бе родил от прелюбодеяньа, иже изби братью свою, сыны Гедеоны, тако и сь бысть.....

『ところで彼の墓は今日に至るまでも荒野の中にあり，其処からは悪しき臭気が発散している．これこそ，神がルシの公たちへの教えとして示し給うたものなのである．これを聞いて，もし，なお同じことを為すものたちは，同じ罰を受けるであろう．否，これよりもより大きな（罰を受けるであろう）．何となれば，このことを知っていながら同じ悪しき殺人を為すものだからである．カインはアヴエリを殺して七つの神罰を受けた．ところがラメフは七十の（神罰を受けたのである）．というのはカインは神から復しゆうを受けるべきことを知らなかったのに，ラメフは自分の先祖が受けた罰を知っていながら殺人をなしたからである．ラメフはおのれの（二人の）妻に言った．〃我は我がいたでのために人を殺し，しかして，我がきづのために少年を（殺した）．そのために，我には七十の復しゆうが（来るであろう）．というのは，知りながら

（それを）おこなつたからである〃と．（創世紀才四章23の後半～24……筆者註）．見よ，かくしてラメフはエノフの二人の兄弟を殺したのである．しかしておのれに彼等二人の妻をとつた．ところで，まさにスヴイヤトポルクは新しいアヴイメレフである．アヴイメレフとは姦通により生まれた者で，おのれの兄弟たち，即ち，ゲデオンの息子たちを殺したのである．この者もまたかくの如くになつた』

6532（1024）年の項の記事を見るがよい．其処には兄ヤロスラフと弟ミスチスラフの争いが描かれている．然も，弟ミスチスラフが兄弟愛を心得て，なお，権力者としての協力への自覚をも持つていた微妙な心理と，且つまた，民衆が一歩先に公としていたるくべき人に倫理的注文をつけた消息とが，戦争描写の面白さの中に鮮かに織り込まれたのであつた．即ち，この年の項の書き出しの文句は，民衆から出た倫理注文の記述にはじまる．キエフの王座につくべき兄の『ヤロスラフがノヴゴロドにいたとき，ミスチスラフがトムトロカニからキエフにやつて来た．しかしてキエフの人々は彼を迎え入れなかつたので，彼は去つて，チエルニゴフの座についた．その時，ヤロスラフはノヴゴロドにいたからである』≪Ярославу сущю Новѣгородѣ, приде Мьстиславъ изъ Тьмутороканя Кыеву, и не пріяша его Кыяне; онъ же шедъ сѣде на столѣ Черниговѣ, Ярославу сущю Новѣгородѣ тогда.≫実は此処には公たちの倫理による国家統一の念願が伏せられている．公たちの側ではなくて，民衆や宗教人たちによる熱い念願であつたであろう．権力闘争に明け暮れる支配層への不満と，あるべき姿への注文とが此処には重ねられて描かれていた．しかもこの一節がその冒頭と終末に同じ文句『ヤロスラフがノヴゴロドにいたとき』とあるのは明らかな加筆の跡を示すものであろう．記述はこの直後に，国を乱すよう術師のスズダリにおける反乱に及び，再びまた兄ヤロスラフと弟ミスチスラフとの争いに及んでいる．これも，加筆の結末だと考

えられる．兄弟両者が外国の傭兵を先頭に立てゝ戦う夜間の激戦と，傭兵の隊長ヤクンの英雄的な姿の描き方は，『過ぎし年月の物語』のドラマチズムの一つの頂点を形成している．単なる宗教的目的の記述からは生まれ得ない迫力である．

Ярослав ..... посла за море по Варягы; и приде Якун с Варягы, и бе Якун слеп, луда бе у него золотом исткани. И приде к Ярославу; иде Ярослав с Якуном на Мьстислава, Мьстислав же слышав взиде противу има к лиственю. Мьстислав же с печера исполчив дружину, и постави Север в чело противу Варягом, а сам ста с дружиною своею по крилома. И бывши нощи, быть тма, молонья и гром и дождь. Рече Мьстислав дружине своей: "поидем на не". И поиде Мьстислав и Ярослав противу собе, и сступися чело Север с Варягы, и трудишася Варязи секуще Север, и посем наступи Мьстислав со дружиною своею, и нача сечи Варяги, и быть сеча силна; яко посветяше молонья, блещашеться оружье, и бе гроза велика, и сеча силна и страшна. Видев же Ярослав, яко побежаем есть, побеже с Якуном, князем Варяжьским, и Якун ту отбеже луды златое; Ярослав же приде Новугороду, а Якун иде за море. Мьстислав же, о свет заутра, видев лежачие сечены от своих Север и Варягы Ярославле, и рече: "кто сему не рад? Се лежить Северянин, а се Варяг, а дружина своя цела".

『ヤロスラフはヴァリヤギ（人）を迎えに海の彼方へ使者をたてた．しかしてヴァリヤギたちと共にヤクンが来たつた．しかしてヤクンは盲目であつた．彼（の顔）には眼かくしが黄金で織られていた

しかして〔ヤクンは〕ヤロスラフのもとに来たつた．ヤロスラフはヤクンと共にミスチスラフに向つて進攻した．ところがミスチスラフは〔これを〕聞いて，二人に向つてリストヴエン〔河〕に出陣した．ところで，ミスチスラフは〔昨〕夕から親兵団を準備し，セヴエル〔族〕をヴアリヤギ〔人〕に対して先頭にたて，一方，自分はおのれの親兵団と共に両翼に布陣した．しかして，夜で，暗く，稲妻及び雷鳴及び雨があつた．ミスチスラフはおのれの親兵団に言つた．〃彼等を攻撃しよう〃と．しかしてミスチスラフとヤロスラフは互いに進み，セヴエル族の先頭がヴアリヤギと相会した．しかしてヴアリヤギ〔人は〕セヴエル族と戦いながら苦戦した．その後，ミスチスラフがおのれの親兵団をひきいて進撃しはじめ，ヴアリヤギ〔人〕を斬りはじめた．しかして激しい斬り合いがあつた．稲妻がひらめき，武器がかゞやき，しかして大きな雷鳴が〔とゞろき〕，烈しく恐ろしい戦いが行われた．ヤロスラフは打ち負かされているのを見て，ヴアリヤギの公であるヤクンと共に逃げた．しかしてヤクンは其処から逃亡中に黄金の眼かくしを失つた．ところでヤロスラフはノヴゴロドにたどりつき，ヤクンは海の彼方に去つた．一方，ミスチスラフは翌朝早くに，おのれのセヴエル族の及びヤロスラフのヴアリヤギ人が斬られて倒れているのを見て，言つた．〃これを誰がうれしくないものか？　此処にセヴエル人が，またこゝにヴアリヤギが倒れているのに，我が親兵団は無きづである〃と[14]．

この様に『過ぎし年月の物語』には，戦記文学的に数段高い水準がこれらによつてもたらされた．ニコンの手によつて，文学的に非常に高められたこともさることながら，此処には注目すべき際立ての特長がある．兄ヤロスラフの方が傭兵ヴアリヤギを集め，先に弟に戦いをしかけた．弟は同じく傭兵セヴエル族を以て，これを受けた．此処で傭兵同志の戦争が描かれ，ルシの兵員については一度もふれられない．むしろ，親兵団は無きづであつたと言わせている．如何にニコンがルシの内紛や仲間割れを嫌い，避けよ

うとしたかゞ此処には読み取られるであろう．然も，この兄弟の戦争をどれほどか苦々しく思つていた気持が，この傭兵同志の衝突という変つた膳立ての中に現れたと考えるべきであろう．

弟ミステスラフに戦いをしかけた兄ヤロスラフは，迎えうたれて敗退しなければならなかつたという物語を，ニコンは自分たちの主張や倫理や注文に反するものとしてこの様に描いたのである．しかも，実はそれだけにとゞまらなかつた．兄に打ち勝つた弟ミステスラフは，決して兄の逃げたノヴゴロドにまで深追いはしなかつた．いや，むしろ，逆に，兄ヤロスラフに使者を送つて言わしめた口上がある．それこそ，年代記者が声を大きくして言いたかつた言葉なのである．即ちその口上とは，『おのれの（都）キエフ（の王座）に坐せ．汝は長兄なのである』≪сяди в своемъ Кыевѣ, ты еси старѣйшей братъ≫まさに，この正義こそ大書してほめられるべきものなのであつた．然るに，その正義の実現は不可能であつた．其処にこの年代記者の憤りと悲しみがあつた．実現を不可能たらしめているものが，他ならぬ仲間割れであり，いとうべき内紛であつた．年代記者はそれをこう書きとめた．『しかしてヤロスラフはキエフに行くことができなかつた．和平を講じ合うまでは』≪и не смяше Ярославъ ити в Кыевъ, дондеже смирятася≫ 即ち，この口上における『行くことが出来なかつた』≪не смяше ити≫という смяше に注目しよう．この不完了過去≪Инперфект≫にこめられたもどかしさの気持は，そのまゝ実に年代記『過ぎし年月の物語』に加筆した原動力なのであつた．6572(1064)年の記事に見られるように，『ロスチスラフは町から外へ退いた．彼を恐れたからではなくて，おのれの叔父に対して武器を取ることを欲しなかつたからである』≪Ростиславъ же отступи кромѣ изъ града, не убоявъся его, но не хотя противу стрыеви своему оружья взяти≫ その様な精神と態度こそが，外敵と内紛のうれいから祖国を救う唯一の道であることを

述べたかつたのである．

— P —

ニコンによつて，『過ぎし年月の物語』は，宗教的なワクを完全にはずされた．宗教の世界から現実の世界へ引き出され，物語や記録の世界から，それを通じての発言の世界へ連れ出された．政治及び軍事の権力者への容赦ない批判書へとその内容を変えた．ビザンチンを家元とする正教から，ロシアの現実に照して生まれ，作用する宗教へとその思想を変えたと言える．この様にして年代記の仕事は急速にその重みを増したのである．かくして，その重みを増した年代記の権威は，教会のワクを出てロシアの現実に一層深くその触手を動かしはじめる．6596(1088)年の項としてニコンの死が記録される頃から後の『過ぎし年月の物語』の記事は，この事情の上に立つて読み取られるべきものであろう．外敵を防ぐためにも，内紛をおさめて統一した国家を創りたいという悲願は，ますます熱を帯びて来る．そして，その悲願に背く公たちに対する取り扱い方は一層厳しさを増すのは当然であつた．外敵に対する強力な防衛や，遠征の成功を注文することも激しさを増したのである．そして，その立場から『過ぎし年月の物語』は，古い部分を時には，益々，それ向きに脚色加筆されたことであろう．勿論，その折の記者が単一人物であつたわけではない．むしろ，修道院全体の仕事であり，時には修道院を頂点とした文人たち全体の仕事であつた．

ニコン以後の記事については，だから更めて注意深い読み方が要求されるであろう．宗教の世界からニコンによつて世俗界へおどり出た『過ぎし年月の物語』は，外敵撃退と内紛停止・協力とに背く公たちの所業に対しては，益々厳しい取扱いをはじめる．その典型的な記事が『過ぎし年月の物語』全体を通じての最大の

悪者スヴィヤトポルク公についての記事である．内紛による国家不統一と外敵による侵入によるおびえとが，この悪者スヴィヤトポルクの記述の前と中と後に，どれほどの空恐ろしい不吉な前兆として書きとられていることであろう．巨大な悪者が出現し，外敵がせまり，内紛はつのるばかりである時代の，心ある者の不安と絶望と嘆きと，正義実現への待望とが十一世紀末から十二世紀初頭の記事には，数々の前兆という形で，いましめを含みつゝ書き取られている．例えば，6599(1091)年の記事の末尾には次の様な記録が残された．

В се же лето знаменье в солнци: яко погыбнути ему, и мало ся его сота, акы месяць бысть, в час 2 дне, месяца маия 21 день. В се же лето бысть Всеволоду ловы деющю звериныя за Выше-городом, заметавшим тенета и кличаном кликну-вшим, спаде превелик змий от небесе; ужасошася вси людье. В се же время земля стукну, яко мнизи слышаша. В се же лето волхв явися Ростове, иже вскоре погыбе.

「この同じ年太陽にしるしが（あつた）．即ち，太陽は消えようとし，その儘かゝ残り，あたかも月の如くであつた．五月二十一日午後二時のことであつた．この同じ年にフセヴォロドがヴイシエゴロドのこう外で野獣狩りをなし，（人々が）網を投げて叫びをあげた時に，天から，いと大きな蛇が落ちた．人々は総て恐怖した．この同じ時に，多くの人々が聞いたところによれば大地が（物に）衝突した（ような音をたてた）．この同じ年にロストフによう術師が現れた．彼は間もなく滅びた」．

此処で，その記述に，月や日の指定の他に時刻の指定がおこなわれて，以前の記述とその詳細さに差異のあることに注目しておこう．つゞく6600(1092)年の冒頭にも同じく不吉な前兆を示

す記録がある．

В лето 6600.

Предивно бысть Полотьске: в мечте ны бываше в нощи тутъи, станяше по улици, яко человеци ришюще беси; аще кто вылезяше из хоромины, хотя видети, абье уязвен будяше невидимо от бесов язвою, и с того умираху, и не смяху излазити из хором. Посем же начаша в дне являтися на коних, и не бе их видети самех, но конь их видети копыта; и тако уязвляху люди Полотьскыя и его область. Тем и человеци глаголаху: яко навье бьють Полочаны. Се же знаменье поча быти от Дрьютьска. В си же времена бысть знаменье в небеси: яко круг бысть посредь неба превелик. В се же лето ведро бяше, яко изгараше земля, и мнози борове възгарахуся сами и болота; многа знаменья бываху по местом.....

6600(1092)年．

ポロツクにおいて，非常に不思議なことがあつた．夜中に我々の幻覚の中で足音が起り，街通りを人間のように悪魔たちがうめきながらかけ廻つた．もしも誰かゞ家からはい出して（それを）見ようとでもしたら，すぐさま悪魔たちによつて，眼に見えないうちに傷を負わされ，（人々は）そのために（次々に）死んでいつたのである．しかして（人々は）家から外へは，より這い出さなくなつていた．ところでこの後に（悪魔は）日中に馬に乗つて現れはじめ，しかして，彼等それ自身は眼に見られず，彼等の馬のひづめだけが見られたのである．かくして彼等はポロツク及びその領地の人々を傷つけていたのである．ために人々は次の様に言つていた．これは死者達がポロツクの人々を殺しているのだと．このしるしはドリ

ユチツクから起りはじめたのである．この同じ頃に天にしるしが起つた．天の中央に非常に大きな輪ができたのである．この年に，ひでりがつゞいて大地が焼け，多くの松柏林や沼が自から発火したほどであつた．多くのしるしが各所に現れつゞけていた・・・・』

そして6602(1094)年には，『いまだかつてルシの地には聞かれなかつた』ほどの『イナゴの大群が八月二十六日にルシの国に襲来して，あらゆる草と多くの穀物を喰らつた』≪придоша прузи на Русьскую землю, мѣсяца августа в 26, поѣдоша всяку траву и многа жита≫と書かれ，翌6603(1095)年にも『八月二十八日にイナゴが襲来して，大地をおおい，見るも恐ろしかつた．草及びキビを食らいながら北の国々へ進んで行つた』≪придоша прузи, мѣсяца августа 28, и покрыша землю, и бѣ видѣти страшно, идяху к полуночным странам, ядуща траву и проса.≫と記録される．つゞいて6607(1099)年にも天に不思議なしるしが現れ，『この年の四月にヴラジミルの上空にしるしが現れた．二つの輪があり，その中には太陽の如きものがあつて，五時まで続き，また夜中は，あたかも，三つの光の道の如きものが生じて，明け方まで続いた』≪в се же лѣто бысть знаменье над володимерем, мѣсяца априля: два круга а въ нею аки солнце, и до шестаго часа, а ночь аки три стязи свѣтлѣ, оли до зорь≫（この一節のみはラヴレンチー年代記には書きとゞめられず，イパーチー年代記，フレブニツキー年代記にみとめられるものである・・・・・・・・筆者註）．6610(1102)年の項にも次の様な天変が書きとめられている．

В то же лето бысть знаменье на небеси, месяца генваря в 29 день, по 3 дни: акы пожарная заря от востока и юга и запада и севера, и бысть тако свет всю ночь, акы от луны полны светящься. В то же лето бысть знаменье в луне, месяца февраля в

5 день. Того же месяца в 7 день бысть в солнци: огородилося бяше солнце з три дугы, и быша другыя дугы хребты к собе.

『この同じ年に天にしるしが三日間あつた．一月二十九日のことである．東から，また南からも，西からも，北からも火事のような空やけが（あり），しかしてあたかも満月によつて輝く如き光が終夜あつたのである．この同じ年に月の中にしるしがあつた．二月の五日のことである．その同じ月の七日には太陽に（しるしがあつた）．（即ち，）太陽が三つの弓形でかこわれていたのであり，他の弓形はお互いに（その）背を（向け合つていた．）』

つゞいて翌6611(1103)年にはイナゴの襲来が記され，次の6612(1104)年には，

В се же лето знаменье: стояше солнце в кругзе, а посреде круга крест, а посреде креста солнце, а вне круга обаполы два солнца, а над солнцем кроме круга дуга, рогома на север; такоже знаменье и в луне тем же образом, месяца февраля в 4 и 5 и 6 день, в дне по 3 дни, а в нощь в луне по 3 нощи.

『この同じ年，しるしが（あつた）．太陽が輪の中にあり，輪の中央には十字架があり，十字架の中央には太陽があつた．しかして輪の外には両側に二つの太陽があり，太陽の上の輪の外には両端を北に向けた弓形があつた．これと同じようなしるしが月の中にも（現れた）．二月の四日と五日と六日のことである．昼は三日の間，しかして夜には月の中に三晩にわたつて（現れた）．』

つゞいて6613(1105)年には『尾をもつた星が西方に現れ，しかして一ケ月間出ていた』≪явися звѣзда с хвостомъ, на западѣ, и стоя мѣсяць≫と記され，面白いことに翌6614(1106)年には，多くの物語を語つたヤン≪Ян≫の死が報ぜられるのである．

これらのしるしは，権力支配層である公の一族の内紛と外敵の侵入という二重の不幸に呼応する形で取りあげられていた．いましめであり警告であつた．例えば，6600(1092)年の記述では，しるしの出現を記した直後に，次の様な文章がつゞいていた．『我等の罪』とは即ち内紛を主として指していたものであつたと解すべきであろう．

и рать велика бяше от Половець и отвсюду.....
..... В си же времена мнози человеци умираху различными недугы, яко глаголаху продающе корсты, яко продахом корсты от Филипова дне до мясопуста 7 тысячь. Се же бысть за грехы наша, яко умножишася греси наши и неправды. Се же наведе на ны Бог, веля нам имети покаянье и въстягнутися от греха, и от зависти, и от прочих злых дел неприязнин.

『しかしてポロヴエツのために大きな戦争が，しかも，至る所から起つていた・・・・・・・．この頃，多くの人々が種々の病気によつて死んでいつた．十字架の売り手たちがフイリプの日（旧ロシア暦十一月十四日・・・・・筆者註）から肉食禁止日（謝肉祭前の日曜日・・・・・筆者註）までの間に七千個も十字架を売つたと言つていたほどである．これは我等の罪の故である．神が我等に下し給うたのである．我々が悔悟し，罪から羨みからも反目の悪しき所業からも身を避け清めよと命じ給うのである』

天のしるしを実現するように，ポロヴエツは至るところに毎年侵入しては大きい戦いを起していた．即ち6601(1093)年にスヴイヤトポルモのもとにポロヴエツの使者が和平の談合に来たが，その使者をとじこめたために，却つてロシア側から兵を進めて戦いが起る．その戦いは勿論ロシア側の大敗北に終るのである．同年，トルチスクがポロヴエツによつて包囲され，ジエラニ河畔ではまたロシ

ア側が敗北する．6603(1093)年にも，6604(1094)にも，その後毎年ポロヴエツの来襲を報じない記事はない．にもかかわらず，ロシア側の公たちは，この外敵に当面してさえ内紛をやめなかつた．ポロヴエツを迎え打つスヴイヤトポルクは，智恵ある人々に独力による戦いをいましめられ，説き伏せられた形で，やつと弟ヴオロジメルに協力を頼む．ヴオロジメルはその弟ロスチスラフを迎えてスヴイヤトポルクに協力しようとする．三人は聖ミハイル教会に集つて相談するが，『彼等の間には紛争と争論が起つた』≪взяста межи собою распря и которы≫ほどであつた．敵とストウグナ河をはさんで相対した時でさえ，ポロヴエツと和を講じようとするヴオロジメルと河を渡ろうとするスヴイヤトポルクとは意見を異にした．結局，河を越えて戦つたために敗北するのである．敗れたスヴイヤトポルクは再びポロヴエツに戦いを独力でいどみジエラニ河畔で再び大敗する．協力のない内紛と不和のうちに無謀にも進められたスヴイヤトポルクの戦いを年代記者は実に苦々しく思つた．無謀なる戦いと敗戦のために苦しめられる民衆の側の悲惨なる姿を年代記者は『過ぎし年月の物語』の中に怒りをこめて書き込んだ．『過ぎし年月の物語』は始めて此処に至つて，王侯貴族，武人，高級僧以外に，庶民に焦点を合わせる記述を生み出すのである．記述の立場は此処で支配層から庶民層へと大きく移動する．

Створи бо ся плачь велик в земле нашей, опустеша села наша и городи наши, быхом бегаючи пред врагы нашими..... лукавии сынове Измаилеви пожигаху села и гумна, и многы церкви запалиша огнем,..... городи вси опустеша, села опустеша; прейдем поля, идеже пасома беша стада конь, овця и волове, все тоще ноне видим, нивы поростъше зверем жилища быша..... Половци воеваша много ..... и изнемогоша людье в граде

гладом, и предашася ратным; Половци же, приимше град, запалиша и огнем, люди разделиша и ведоша в веже к сердоболем своим и сродником своим. Много роду хрестьяньска стражюще: печелни, мучени, зимою оцепляеми, в алчи и в жажи и в беде опустневше лици, почерневше телесы: незнаемою страною, языком испаленым, нази ходяще и боси, ноги имуще сбодены терньем. Со слезами отвещаваху друг к другу, глаголюще: "аз бех сего города", и другиа: "аз из сего села"; тако съупрашаются со слезами, род свой поведающе, и вздышюче, очи возводяще на небо к Вышнему, сведущему тайная.

.....

『我々の国には大いなる泣声が起り，我々の村々及び我々の町々は荒廃し，（我々は）我等の敵の前を逃走しなければならなかつた・・・・・・・・イズマイルの裔い子等が村々及び穀物置場を焼き，しかして多くの教会に火をかけた・・・・・・・・・町々は総て廃虚と化し，村々は人気がなくなつた．（かつては）馬や羊や牛の群が牧されていた野原を（我々が）通り行こうものなら（我々は）すべてこれらを今は空しいものとして見るのである．畑地は草に蔽われ，野獣のすみ家となり果てた・・・・・・・ポロヴエツ人たちは多くを戦いとつた・・・・・・・・・町の中では人々は飢えに弱り果てて敵軍に降つた．ところで，ポロヴエツ人は町を占領し，その町に火をかけて焼き，人々を分配して，おのれの家族及びおのれの一族のいる天幕へ連れて行つた．多くのキリスト教徒は受難したのである．悲嘆し，苦しめられ冬の寒さにかなしばりになり，飢えと渇きと不幸とで顔を茫然たらしめ，体を真黒にしていた．見知らぬ異国にあつて舌はたゞれ，はだかで歩かされ，はだしであつた．足はいばらで傷だらけにしていた．涙ながらに互いに答えて言

つていた．〃我はこの町の出である〃，また他の者は〃我はこの村の出身者である〃と．この様に涙ながらに尋ね合い，おのれの出生を物語り，ためいきをはき，神秘を知るいと高き神のいます天へ眼をあげていたのである』

この様な荒廃と不幸をもたらす外敵との戦いは6600(1092)年には，至る所に≪отвсюду≫にあり，6601(1093)年には，ストゥグナ河で，トルチエスクで，激しくおこなわれ，6602(1094)年にはチエルニゴフで，6603(1095)年にはペレヤスラヴリで，ユリエフで，6604(1096)年にはキエフのほとりとペレストヴオとペレヤスラヴリで，という具合に，全国の各所はポロヴエツの文字通りの餌食であつた．この不幸の中で『過ぎし年月の物語』は公たちの内紛不和の元兇としてスヴイヤトポルクという悪の巨像を書きとめるのである．そして，その巨像がおとす色濃い影の中に，暗き深い人物たちの影像を深々と彫りあげたのである．即ち，『過ぎし年月の物語』全体を通じて，最大のドラマチズムをもつた記述が，こうして生まれた．『過ぎし年月の物語』は此処に至つて，伝承や歴史や宗教物語の記録から，熱烈な文学作品へと変つたのであつた．

この迫力ある物語の記述は6601(1093)年の項より始まると見てよい．この年，『インジクトの才一年に，ヤロスラフの子にしてヴオロジメルの孫になる大公フセヴオロドが四月の十三日に死去し，十四日に葬られた．それは，受難週（復活祭の前週・・・・・筆者註）の最中で・・・・・』あつた．ところが，フセヴオロド大公の息子ヴオロジメルは，実に正義の人として，我が身を犠牲にしても事の道理を通すべく，王座継承から身を引くのである．

Володимер же нача размышляти, река: "аще сяду на столе отца своего, то имам рать с Святополком взяти, яко есть стол преже от отца его был". И размыслив посла по Святополка Турову, а сам иде

Чернигову, а Ростислав Переяславлю. И минувшю Велику дни, прешедши праздней недели, в антипаскы, месяца априля в 24 день, приде Святополк Кыеву; изидоша противу ему Кияне с поклоном, и прияша и с радостью; седе на столе отца своего и строя своего.

『ところでヴオロジメルは思案しはじめて言つた．〃もしも（我が）おのれの父の王座に坐せば，スヴイヤトポルクと一戦交えなければならぬであろう．というのは，王座は以前には彼の父のものだつたからである〃と．しかして，思案して，スヴイヤトポルクを迎えにトウロフに使者をたて，自からはチエルニゴフに，ロスチスラフはペレヤスラヴリにおもむいた．しかして，復活祭が過ぎ，復活祭週が過ぎて，アンチパスハの日（復活祭後の才一日曜日・・・・筆者註），即ち，四月二十四日にスヴイヤトポルクはキエフに来たつた．キエフの人々は礼をつくして彼を迎えに出て，喜びにあふれて彼を受け入れた．（スヴイヤトポルクは）おのれの父，及びおのれの伯父の王座に坐した』のであつた．

ところが，すぐにポロヴエツとの戦いがもちあがつて，スヴイヤトポルクは独力で出陣しようとする．『知恵ある人々』≪смыслении≫はこれをおしとどめて，自から王座を人に譲つたヴオロジメルに相談せよと言う．ヴオロジメルは弟ロスチスラフをも伴い来たり相談協力しようとする．『知恵ある人々』≪смыслении≫は再び三人の公を前にして忠告する．それほどに，内紛は，既に根が深かつたからであろう．『何故に汝等は相互の間に紛争を起しているのか？　異教徒たちがルシの国を滅しているのに．相互の調整は後にせよ．今はただ異教徒に向いて進め．』≪почто вы распрямата межи собою ? а погании губять землю Русьскую ; последи ся уладита ; а нонѣ поидита противу поганым,≫そして，この言葉とその理念こそ，『過ぎし年月の物語』の最後の精神

であつた．そして，年代記者は，その考えに立つものを『知恵ある人々』≪смыслении≫とよんだのであつた．

さて，ストグナ河をはさんでポロヴエツと対陣した時，またも，内紛は意見の分裂という形で現れる．ヴオロジメルと，ヤン≪Ян≫と『知恵ある人々』≪смыслении≫は，河をはさんだ所で和を講じようとし，スヴイヤトポルクのひきいるキエフの人々は渡河して戦おうとする．明らかに，此処で年代記者の好意はスヴイヤトポルクから離れるのである．『知恵ある人々』≪смыслении≫の理念に対立する形で彼を描きはじめたからである．

『知恵ある人々』≪смыслении≫の意見を尊重しなかつたスヴイヤトポルクは河を渡つて進み，大敗を喫して，ロスチスラフ公は戦死する．ヴオロジメルはチエルニゴフに引き返してしまう．スヴイヤトポルクは数々の小ぜり合いをポロヴエツとやりながら翌年を迎える．ところが，ヴオロジメル，オレグ，スヴイヤトポルクというロシアの公たちは一致協力して外敵に当るべきなのに，全く裏腹なことをするのである．互いに敵と結んで味方を倒そうとするのである．年代記者は怒りをこめて，6602(1094)年の項に次の様にしるしている．

В лето 6602.
Створи мир с Половце Святополк, и поя собе жену
дщерь Тугорканю, князя Половецькаго. Том же
лете приде Олег с Половци, из Тъмутороканя приде
Чернигову, Володимер же затворися в граде, Олег
же приде к граду и пожже около града, и манасты-
ре пожже, Володимер же створи мир с Олгом, и
иде из града на столе отень Переяславлю, а Олег
вниде в град отца своего. Половци же начаша вое-
вати около Чернигова, Олгови не взбранящю, бе бо
сам повелел им воевати. Се уже третьее наведе

поганыя на землю Русьскую; его же греха дабы и Бог простил, занеже много хрестьян изгублено бысть, а друзии полонени и расточени по землям.

『6602(1094)年.

スヴイヤトポルクはポロヴエツ人と和を結び，ポロヴエツの公トウコルカンの娘をおのれの妻として迎えた．この同じ年，オレグはポロヴエツ人と共に来つた．トムトロカニからチエルニゴフに来つたのである．ヴオロジメルは町の中にたてこもり，オレグは町に来襲して，町のこう外を焼き，修道院を焼いた．ヴオロジメルはオレグと和を請じ，町から出ておのれの父の，ペレヤスラヴリの王座についた．オレグはおのれの父の町に入つた．ところでポロヴエツはチエルニゴフの近こうを攻撃したがオレグは妨害しなかつた．というのは，(彼が)彼等(ポロヴエツ人)に攻撃するように命じておいたからなのである．これで彼がルシの国に異教徒をみちびいたのは三度目なのである．—— 彼の罪を神が許し給うように ——．というのは，多くのキリスト教徒が(このために)滅ぼされ，またあるものは捕えられ，しかして，各国にまき散されたからである』

外敵の来襲に備えて一致するどころか，互いに，外敵と組んで，仲間を襲おうとする勢いは翌6603(1095)年に及ぶ．即ち，この年にはスヴイヤトポルクとヴオロジメルとが組んでポロヴエツを攻めようとしてオレグを仲間に引き入れようとする．ところが，これを聞いたような顔をしてオレグは二人に協力しないのである．三人で攻撃に行くことを約束し出発しながら，オレグだけは別の途を進むのである．その罰として，オレグが保護していたイトラリの子を殺すか引き渡すかするように命ぜられる．ところが，この注文をさえオレグは聞かない．翌6604(1096)年になつて，オレグはスヴイヤトポルク及びヴオロジメルから呼び出される．ところが，『オレグは不遜なる考えと傲慢つた言葉を示しつゝ，かく答えた．〃主教も，修道院長も，下民も我を裁くべきではない〃

と．しかして悪しき助言者に聴従しておのれの（二人の）兄弟たちのもとへ行くことを欲しなかつた』≪Олег же въспримъ смыслъ буй и словеса величава, рече сице : //несть мене лѣпо судити епископу, ли игуменом, ли смердом// ; и не въсхотѣ ити к братома своима, послушавъ злыхъ съвѣтник≫ ためにオレグは二人に攻められ，チエルニゴフの町から逃げスタロドウブに逃げ込み，三十三日間の包囲を受けて投降する．ともにキエフに集つて和を固めようという二人の提案を受け入れたように見せかけ，オレグは，ポロヴエツの再三の侵入のどさくさの内に，まぎれこみ，その約束を破つてスモレンスクに行き，戦士たちを集めてムロムのイジヤスラフ公を攻撃するのである．イジヤスラフは戦死し，勝利に酔つたオレグは，ロストフ，ベロオゼロ，スズダリ，を手中にして支配する．ところが今度はノヴゴロドからムスチスラフ公に攻められる．オレグはそのため今度はロストフ，スズダリ，ムロムへと逃げる．こゝでクリヤジマ河をはさんで両者の戦いが四日間おこなわれ，オレグは敗退する．

翌6605(1097)年には，ロシアの公たちの仲は，やゝ好転したかに見える．スヴイヤトポルク，ヴオロジメル，ダヴイド，ヴアシリコ，オレグたちがリユベツチに集つて，和議と協力を約束するからである．

ところが，もうその年に，その舌の根の乾かぬ内から，仲間割れが生ずる．ダヴイドが池の水に石を投げるようなうわさをきくのである．ヴオロジメルがヴアシリコと申し合わせをして，スヴイヤトポルクと自分とにはむかうであろうと考える．ダヴイドはスヴイヤトポルクをけしかけて，ヴアシリコとヴオロジメルを打たせようとする．ヴアシリコはたくみな計略に引つかかつて捕えられ，眼をつぶされて盲目にされる．これを聞いたヴオロジメルはヴアシリコのあだを打つべくスヴイヤトポルクを攻撃する．ヴオロジメルと行動を共にしたのは，ダヴイド，オレグであつた．フセヴオロド公の未亡人と府主教

ニコライの仲介によつて，一時は，流血はさけられた．
ところが今度は眼をつぶされたヴアシリコの領地をダヴイドが横取りしようとして，その弟ヴオロダリにさまたげられる．やむなくスヴイヤトポルクを中傷してその場を切り抜けるが，戻つて来た盲目のヴアシリコの弟ヴオロダリは，おのれの仇敵たちの復しゆうに立ち上る．一方，ダヴイドによつてヴアシリコ兄弟に向つて中傷されたスヴイヤトポルクは，腹を立てゝダヴイドを力づくで追放してしまう．そして，ヴアシリコ兄弟をも滅ぼそうとして，ロジニヤ河に出撃し，今度は反対に二人のために破れて逃亡するのであつた．この後も公たちの仲間争いは永く続くが，以上の争いの中にあつて，特にスヴイヤトポルクがヴアシリコを打つて，その眼をつぶす悪者ぶりが，最も大きく人の印象にやきつく．反対に，眼をつぶされたヴアシリコの嘆きと悔悟とが人の胸を強くえぐるのである．
それらの原文は既に先に引用しておいた．文学的物語としては，両眼をつぶされたヴアシリコの切々たる悔悟と，そのドラマチツクな物語によつて，スヴイヤトポルクの姿が反対に憎悪を以て浮び上るのかも知れない．十一世紀末のロシアの公たちの最も鮮やかな映像定着であつたであろう．

キエフ・ペチエルスキー教父伝によれば，スヴイヤトポルクは人々に多くの強圧を加え，多くの財を取りあげ，そのことによつて，ルシの人々を弱らせ，外敵の侵入が多かつたにもかゝわらず，彼によつて内紛は助長されたという．

こゝで少し立ちどまつて考えて見る必要がある．ニコンが加筆・編集し終つたところから，このスヴイヤトポルクを悪者に仕立て，彫りの深い記事を書いた者は一体誰であつたのか．誰であつたかという個人名の指定よりも，むしろ大切なのは，何故，そういう書き方をしたのか，そして，そう言う書き方をさせるように誰が何故仕向けたのかということであろう．嘗つてニコンが加筆・編集の折にヤンの父ヴイシヤタの物語る話を多く利用したであろうと

と述べたが，今度は，このニコンの後を書きつぐ編集・加筆した人物に，多くのことを物語つて聞かせた者がいたことに注意しよう．即ち，『私はヤンから多くのことを聞き，それを年代記に書きつけた』という記事があつたのである（前記）．そこで，我々は再びヤン≪Ян≫の記事を詳細に『過ぎし年月の物語』の文章から調べてみよう．ヤンの名が始めて『過ぎし年月の物語』に現れるのは6579(1071)年の項であつた．その記事は嘗つて引用したように，ヤン自身の口から出た物語をニコンの後の編集加筆者が此処に織り込んだものにちがいない．ペロオゼル地方のよう術師退治の物語であつた．スヴイヤトスラフ≪Святослав≫公から派遣されたのである．そして，ヤンはスヴイヤトスラフ公の親兵団員として，キエフに住むようになつた．そして，その後，6597(1089)年即ちニコンの死を報じた記事の直後の記事として先に引用した聖母教会の浄めの式が行われた文章によれば，『軍司令官職をキエフの千人頭ヤンが掌握していたとき』≪воеводьство держащю Кыевьскыя тысяща Яневи≫とあるから，フセヴオロド公の時代にはヤンは千人頭の地位にまで昇つていたことになる．ところが，四年後の6601(1093)年の記事をもう一度思い出そう．

其処にはフセヴオロド公は『若い者たちの考えを愛しはじめ，彼等と相談をした．彼等（若い者たち）は，彼（公）をさしておのれの以前の親兵団に不満をいだかしはじめ，しかして，公の正義が人々に伝わらなくせしめた・・・・』≪и нача любити смыслъ уныхъ, съвѣтъ створя с ними; си же начаша заводити и негодовати дружины своея первыя, и людемъ не доходити княже правды≫とある．

この『以前の親兵団』≪дружина первая≫の中の一員がヤン自身であつたことは言うまでもないであろう．とすれば，既にもう彼はフセヴオロドの老年には発言の大きな力はもたなくなつてい

た．実力は『若い者』≪уные≫の手に移つてしまつていたということになる．そして，次のキエフの公スヴイヤトポルク≪Святополк≫の時代には完全に政治権力の場からは遠ざけられてしまつていたと考えるべきである．其処に彼の不満があつた．そしてその不満は同時に，外敵を迎えて，且つ内紛をつゞける，公の一族に不満をもつた修道院の心ある人の気持にも通じ合つたであろう．時には相談し，時には意見を異にしつゝも外敵にあたるスヴイヤトスラフたち同年輩の公たちの記事は，かくして，スヴイヤトポルクの坐したキエフから始められるが，その都度，『知恵ある者たち』≪смыслении≫を聞いたとか聞かなかつたとかという言葉が出て来る．『知恵ある人々』とは即ち，当のヤン及び修道院の人たち（—— 年代記者自身 —— ）のことであつたにちがいない．6601(1093)年の記事中，河をはさんでポロヴエツと対陣した時に，ヴオロジメルが和睦しようと言い出すところがあつた．その提案に対して，『過ぎし年月の物語』は，『この助言提案に対して知恵ある人々，ヤン及び他のものたちは支持主張したが，キエフの人々は（それを）欲しなかつた』≪пристояху совѣту сему смыслении мужи, Янъ и прочии, Кіяне же не вс хотеша≫とあるのは，まさにこれを実証するものである．ヤンは当然『知恵あるもの』≪смыслений≫の一員として，年代記者に多くの物語を語り聞かせた．そして，年代記者も，その理念において当世の公たちに同じ不満をもつていた．ヤンと年代記者の主張は，外敵に対抗するに際して自重せよ，力を養え，仲間争いをとゞめよというにあつた．そして，それは，後年の『イーゴリ遠征物語』の主張とも一致するものであつた．『過ぎし年月の物語』には，このヤンと年代記者即ち『知恵ある者たち』≪смыслении≫の主張が幾度も書きとられ，然も多くは若い権力者には余り大した良い効果を奏しなかつた．例えば，その主張の言葉が密度高く繰り返し現れるのが6601(1093)年の次の様な記事である．

В се время поидоша Половци на Русьскую землю; слышавше, яко умерл есть Всеволод, послаша слы к Святополку о мире. Святополк же не сдумав с болшею дружиною отнею и строя своего, но съвет створи с пришедшими с ним, изъимав слы всажа и в истобъку; слышавше же се Половци, почаша воевати. И придоша Половци мнози, и оступиша Торцийскый град. Святополк же пусти слы Половецьскые, хотя мира; и не всхотеша Половци мира, и ступиша Половци воюючи. Святополк же поча сбирати вое, хотя на не. И реша ему мужи смыслении: "не кушайся противу им, яко мало имаши вои". Он же рече: " имею отрок своих 800, иже могуть противу им стати". Начаша же друзии несмыслении глаголати: " поиди, княже"; смыслении же глаголаху: "аще бы пристроил и 8 тысячь, не лихо то есть, наша земля оскудела есть от рати и от продажь; но послися к брату своему Володимеру, дабы ти помогл". Святополк же послушав их, посла к Володимер, дабы помогл ему; Володимер же собра вои свои, и посла по Ростислава брата своего Переяславлю, веля ему помагати Святополку. Володимеру же пришедшю Киеву, совокупистася у Святаго Михаила, и взяста межи собою распря и которы; и уладившася, целоваста крест межи собою. Половцем воюющим по земли, и реша има мужи смыслении: " почто вы распря имата межи собою? А погании губять землю Русьскую; последи ся уладита, а ноне поидита поганым, любо с миром, любо ратью." Володимер хотяше мира, Святополк же хотяше рати;
.....

『この時，ポロヴエツ人たちがルシの国に向つて進攻した．フセヴオロドが死んだことを聞いて（ポロヴエツ人たちは）スヴイヤトポルクに和平についての使者を派遣した．ところでスヴイヤトポルクは父及び，父の伯父の長老親兵団とは合議せず，自分と共に（トウロフからキエフに）来たつたものたちと相談をして，（ポロヴエツ人の）使者たちを捕えて丸太小屋の中に押し込めた．ところで，このことをポロヴエツ人たちは聞いて戦いをはじめた．しかして多数のポロヴエツ人たちが来たり，トルチエスクの町を包囲した．そこでスヴイヤトポルクはポロヴエツ人の使者たちを放免した．平和を望んだからである．ところがポロヴエツ人たちは平和を望まなかつた．しかしてポロヴエツ人たちは戦いつゝ到来して来た．スヴイヤトポルクは彼等を迎えうつべく軍勢を集めはじめた．しかして彼に知恵ある人士たちは言つた．〃彼等に抗することを試みるな．（汝は）軍勢を少ししか持つていないからである〃と．ところが彼は言つた．〃（我は）おのれの下級従士八百人をもつている．彼等は，彼等（ポロヴエツ人）に対して出動することができる〃と．ところで他の知恵なき者たちは言いはじめた．〃公よ，進め〃と．知恵あるものたちは言つた．〃もしも（汝が）彼等を八千人とゝのえるとすれば，それは悪いことではない．我等の国は戦争のために，また罰金のために窮乏しきつている．おのれの兄弟ヴオロジメルのもとに使者をおくり，汝を援助せしめよ〃と．スヴイヤトポルクは彼等の言うことを聞いて，ヴオロジメルに，自分を援助するよう，使者をおくつた．ところでヴオロジメルはおのれの軍勢を集め，しかしておのれの弟ロステスラフを迎えにペレヤスラヴリへ使者をたて，彼にスヴイヤトポルクを援助するように命じた．ところで，ヴオロジメルがキエフに来たとき（二人は）聖ミハイル（教会）に集つた．しかして（二人は）お互いの間に紛争と争論をもちあげた．しかして和解し，お互いに十字架に接ぶんした．ポロヴエツ人たちが国中を攻めていたときである．しかして知恵あるものたちは彼等（二人）に言つ

に．〃何故に汝等はお互いの間に紛争をおこしているのか？異教徒たちはルシの国を滅ぼしつゝあるのに．互いの話し合いは後廻しにせよ．今は異教徒に向つて進め．平和を以てか，或は戦いを以て〃と．ヴオロジメルは平和を欲し，一方，スヴイヤトポルクは戦いを望んでいた．』

いかにも，『知恵ある人士たち』の様(例)には，物語るヤンも，それを書きとめる年代記者も一員として入つているかの如き口ぶりである．そしてまた実際に，ヤンや年代記者のかゝげる内紛停止と相互協力と，国家統一の高い理念は，そのまゝ次の時代の（『イーゴリ遠征物語』の）理念に通ずるものなのであつた．ロシアの文化史の上で，もしも，現状批判を，これほど高い前向きの理念から厳しくおこなつたものがあるとすれば，それは，まさに『過ぎし年月の物語』の少くとも三度目のこの編集加筆を以て最初であるとしなければなるまい．これだけの厳しい批判を年代記者がおこなつた以上，その批判の矢表に立たされた権力者スヴイヤトポルクは，年代記者の所属するキエフ・ペチエルスキー修道院を心よくは思わなかつたにちがいない．と同時に，既に，それほどまでに，この修道院は公たちに対する巨大な権威ある批判者になつていたとも考えられる．ついにその権威はスヴイヤトポルクの方から折れて出なければならないほどにまで高まつたと思われる．裏から言えば乱世における公たちの権威の方が地におち，苦しむ人々の多くは，公の方にではなくて，修道院の方により多く心を寄せていたということになるのかも知れない．ともあれ，『過ぎし年月の物語』はその頃から，公たちに対する記述のおもむきを変更しはじめる．事実は，修道院の権威ある主張をみとめて，公たちが内紛をとゞめ，一致協力に向いはじめたからなのであろう．当然，悪者扱いしたスヴイヤトポルクに対する記述にも軟らかさと好意とが入つて来るし，天のきざし，或るしるしに対する不吉さ一点張りの記述もやわらいで来る．例えば，天のしるしは，見る側の人

間の在りようによつて，善にも悪にもとれるのだというような註釈がつきはじめるのである．即ち，6610(1102)年の記事には次の様な一節がある．

И сия видяще знаменья, благовернии человеци со въздыханьем моляхуся к Богу и со слезами, дабы Бог обратил знаменья си на добро: знаменья бо бывають ова на зло, ова ли на добро. На приду-щее лето вложи Бог мысль добру в Русьскые кня-зи, умыслиша дерзнути на Половце и поити в зем-лю их, еже и бысть.

『信仰厚い人々はこれらのしるしを見る際に嘆息をまじえ涙を流して，神がこれらのしるしを良きことに向け給うように神に祈つていたのである．というのは，しるしは或るものは悪に向い，或るものは善に向うものなのだからである．翌年には神は良き考えをロシアの公たちに吹き込み給うた．(ロシアの公たちは)ポロヴエツ人たちに対して勇気にはやり，彼等の国に進攻することを合議したのである．しかして，そのことは実現した』

そして，翌6611(1103)年の項の冒頭にも，『過ぎし年月の物語』は『神がロシアの公たちスヴイヤトポルクとヴオロジメルの心によき考えを吹き込み給うた』≪Богъ вложи в сердце княземъ Рускымъ мысль благу, Святополку и Володимеру≫と記述される~~(6614(1106)年の項である)~~．ヤンが実際に死んだ年よりも，数年以前の項からスヴイヤトポルクに対する取扱いが軟化好転したこと，ヤン自身はもう九十才に近かつたこと，ロシアの公たちが修道院の権威に身をよせたこと，協力して外敵にあたりはじめたこと，そのために外敵に対して一時優位に立ち得たこと等々の一致は，また，『過ぎし年月の物語』が最終的に創り上げられようとする時期とも一致する．

ヤンの死を報じた6614(1106)年の次の年，即ち6615(1107)

年の項には，既に，スヴイヤトポルクが修道院に頭を垂れ，修道院の権威にひれ伏し，修道院を心のより所とする記事が書き取られているのである．

Святополк же приде в Печерьский манастырь, на заутреню, на Успенье святыя Богородица, и братья целоваша и с радостью великою, яко врази наша побежени быша, молитвами святыя Богородица и святаго отца нашего Феодосиья. Так бо обычай имеяше Святополк: коли идяше на войну, или инамо, ноли поклонивъся у гроба Феодосьева и молитву взем у игумена, ту сущаго, тоже идяше на путь свой.

『ところでスヴイヤトポルクはペチエルスキー修道院へ聖母昇天祭の朝勤行に来つた．しかして僧団は大いなる喜びを以て彼に口づけした．聖母と我々の聖なる父フエオドシイの祈りによつて我々の敵が打ちまかされるように．というのは，スヴイヤトポルクがこの様に習慣をもつていたからである．即ち，もしも戦争に，或は他の場所に行くような時には，フエオドシイの棺に礼拝し，その時にいる修道院長の祈とうを受けて，おのれの道に出発したのであつた』

勿論，スヴイヤトポルクがペチエルスキー修道院を公家及び国家の公式最古寺院として認め，その権威によりかゝり，或は種々の行事や行動の正当化をこの修道院に求めていたことになる．そして，この修道院で引きつがれて記録されて来た年代記を是認し，年代記者の主張に近づき，そのことによつて，年代記に権力者の側からの権威づけをもおこなつたことになろう．それはまた，年代記者の筆先が，反政府的に走ることをくいとめたことにもなろう．年代記はこの様にして次第に公の権力と教会の主張及び精神的権威を期せずして一致させていつた．この様な推移は数年にして固

まつたものの様である．6608(1100)年の頃からの記述では盛んに公たちの相互間の和解の記事が好意的に増えはじめるからである．そして，ラヴレンチー年代記と例えばイパーチー年代記とでは6618(1113)年の項からその記述を喰い違いさせてくる．即ち『過ぎし年月の物語』は，この年即ち6618(1113)年の頃に，この年の項までが書かれて最終的に完成したもののように考えられる．その折に，冒頭に『これは，ルシの国がどこから出たか，誰がキエフにおいて先づはじめに治めはじめたか，そして，どこからルシの国が始まつたのかの（ペチエルスキー・フエオドシー修道院の修道僧の）年毎の物語である』≪Се повѣсти временныхъ лѣтъ (черноризца Ѳедосьева манастыря Печерьскаго), откуду есть пошла Руская земля, кто в Кіевѣ нача первѣе княжити и откуду Руская земля стала есть≫という前書きが書かれ，その記者が即ちネストル≪Нестор≫であつたと言われるのである．そして，ラヴレンチー年代記はその記述の最後に書き示されているように，6624(1116)年に聖ミハイル教会の修道院長≪игумен≫セリヴエストル≪Селивестръ≫がキエフの公ヴオロジメルの時に再度書き直して，『過ぎし年月の物語』≪Повести временных лет≫をとゝめたのである．だから，1113年頃に，おそらくはネストル≪Нестор≫によつて書きあげられた形のまゝでの『過ぎし年月の物語』は，どの年代記の中にも原型のまゝで伝えられてはいないのである．例えばラヴレンチー年代記は，ネストルの数年後にセリヴエストルが書き直しているが，その署名に見られるように，彼は，ペチエルスキー修道院の所属者ではなくて，自から書きつけたように聖ミハイル教会の修道院長であつた．そのために，ネストルの名前は容赦なく消し去つてしまつたものと思われる．ネストルの名前を『過ぎし年月の物語』の冒頭の前書きにとゞめているのは，僅かにフレブニコフの写本だけである．（『古代ロシア研究』オ一号：p．1．参照）

そこで，ネストルが加筆したと思われる主要な部分を取りあげて考えてみなければならない．

ノヴゴロド第一年代記と比べてみると，『過ぎし年月の物語』（ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチー各年代記等にみられる）の冒頭の導入部分が全く異ることに直ちに気づくであろう．ノヴゴロド第一年代記が年代を設定するのは6362(854)年で，この年をルシの国のはじまりとするが，この年代設定以前の導入部分は，どことして『過ぎし年月の物語』の導入部分に一致する個所はない．また年代を設定して後も少しの間はその記述法がノヴゴロド第一年代記と『過ぎし年月の物語』とでは随分異るのである．それは全く別個の見解からなされた大きな加筆であつたと思わなければならない．ちなみに，ノヴゴロド第一年代記では，年代設定以前の導入部分は次の様に書かれている．

Временник, еже есть нарицается летописание князеи и земля Руския, и како избра страну нашу на последнее время, и грады почаша бывати по местом, преже Новгородская волость и потом Кыевская, и о поставлении Киева, како во имя назвася Кыев.

Якоже древле царь Рим, назвася и во имя его город Рим; и паки Антиох, и бысть Антиохиа великаа; и паки Селевки, и бысть Селевкиа; и паки Александри, и бысть в имя его Александриа; и по многая места тако прозвани быша грады и имена царев тех и князеи тех; тако ж и в нашеи зван бысть град великим князем во имя Кия, его же нарицають тако перевозника бывша; иней же: ловы

деяше около города. И тако бо есть промысл божии, еже яве в последня: куда же древле погании жряху бесом на горах, ныне же паки туды святыя церкви златъверния каменозданныя стоят, и монастыреве велицы поставлени быша, и черноризец в них исполнено бысть, безпрестани славяще бога в молитвах, в бдении, в посте и в слезах, их же ради молитв мир стоит. Аще бо к святым сьи прибегнем, церквам, тем велику ползу примет души и телу. Мы же паки на последование возвратимъся, глаголюще сице о начале Русьския земля и о князех, како откуду быша. Вас молю, стадо христово, с любовию приклоните уши ваши разумно: како быша древни князи и мужие их, и како отбараху Руския земле, и ины страны придаху под ся; теи бо князи не збираху многа имения, ни творимых вир, ни продаж въскладаху люди; но оже будяше правая вира, а ту возмя, даяше дружине на оружье. А дружина его кормяхуся, воююще ины страны и бьющеся и рекуще: "братие, потягнем по своем князе и по Рускои земле"; глаголюще: "мало есть нам, княже, двусот гривен". Они бо не складаху на своя жены златых обручеи, но хожаху жены их в сребряных; и расплодили были землю Русьскую. За наше несытство навел Бог на ны поганыя, а и скоты наши и села наша и имения за теми суть, а мы своих злых дел не останем. Пишет бо ся: богатество неправдою сбираемо извеется. И паки: сбирает, и не весть, кому сбирает я. И паки: луче малое праведнику, паче богатьства грешных многа. Да отселе братия

моя возлюбленая, останемся от несытьства своего, нь доволни будете урокы ьашим, яко и Павел пишеть: емуже дань, то дань; ему урок, то урок; никому же насилья творяще, милостинею оцветуще, страннолюбием, в страсе божии и правоверии свое спасение слевающи, да и зде добре поживем и тако вечнеи жизни причастьници будем. Си же таковая. Мы же от начала рускы земля до сего лета и все по ряду известьно да скажем, от Михаила цесаря до Алексендра и Исакья.

「(これは)公たち及びルシの国の年代記と言われている編年記である．いかに神が最後に我々の国を如何に選び給い，しかして町々が各地に，先づノヴゴロドの領地がしかしてその後にキエフの領地が，いかにして在りはじめたか，しかしてキエフが建てられたことについて，キエフがいかにその名を呼ばれたかについての(編年記である)．

昔，皇帝リムの故に，その名にちなんでリムの町が呼ばれ，またアンチオフによつて，大アンチオヒアが，またセレフキによつてセレフキアが，また，アレクサンドリによつてアレクサンドリアがその名をえたのであつた．しかして多くの年の後にも，町々がその皇帝及びその公たちの名によつて呼び名をえたのである．それと同じように，我が国においてもまた，町が大公キーの名をえて呼ばれた．ところで彼が渡し守であつたとも(人々は)言つている．また他の者たちは町のちかくで狩猟をしていた(と言つている)．しかして，後の時代に起つたことは，まさしく神の御心なのである．即ち，昔，異教の人々が山の上で悪魔にいけにえを捧げていたその場所に今は石造りの，塔頂が黄金の，聖なる教会が立ち，偉大なる修道院が建てられ，しかしてその中には僧が満ち，たえまなく祈りの中で，終夜勤行で，精進で，涙ながらに，神をたゝえてい

るのである．彼等の祈りによつて平和がたもたれている．もしも聖なる教会にはせ参ずる者あらば，魂と体に大きな利益を受けるであろう．ところで我々は再び話のつゞきに戻つて，ルシの国のはじまりについて，公たちについては何処から来たかということについて物語ろう．キリストの羊群よ，汝らに（我は）願う．愛をこめて汝等の耳を賢くかたむけよ．昔の公たち及びその家臣たちが如何にあつたか，いかに（人々が）ルシの国が敵に対していたか，他の国々を平定したかということに．それらの公たちは多くの財を集めはしなかつた．殺人賠償金を取り立てず，人々に税をもかけなかつたのである．然し，正当なる罰金を求めるべきは取り，親兵団に武器代として与えていた．しかしてその親兵団は育てられ，他の国々を戦いとり，辛労し，こう言つていたのであつた．〃兄弟たちよ．おのれの公とルシの国のために貢献しよう〃と．また次の様にも書かれている．不正によつて集められた富は四散すると．また，（富を）集めながら，それらを誰のために集めているのかを知らないと．また，多くの罪人たちの富よりも，正しき者の少い富がまさると．しかしてこのことよりして，我が愛する兄弟たちよ．おのれの貪慾を離れよう．汝等の分際に満足せよ．パヴエルも書いている．貢物を求める者には貢物を，税を受けるべきものには税を納めよ．（ロマ書；才十三章；7・・・・筆者註）誰に対しても強制をなさず，温情と巡礼好遇にみちよ．神のおそれと正しき信仰にあつて，おのれの救いを求めよ．この世にて正しく生くるものはあの世にて永遠の生命を受けるものになろう．かくの如くである．ところで我々はルシの国のはじめから今日の年まで，しかして総てを順番に詳しく物語ろう．ミハイル帝からアレクサンドル及びイサキまで．』

そして，ノヴゴロド才一年代記は，すぐに年号を6362(854)年と設定してルシの国のはじめとし，キー，シチエク，ホリフの三人兄弟の話をはじめているのである．

この導入部分と，ルシの国の始まりを書き出す姿勢には，たとえ，町の呼び名が古い皇帝や公の名によつて起つた昔話として外国の地名や皇帝の名が出て来るとしてもたゞそれだけのことで決して，広い世界的・全人類的な態度はみとめられない．宗教的理念による倫理的主張と，それに根ざしたルシの国のことだけしか視野になかつたように思われる．全人類なり，全世界なりの中で，おのれのルシの国が如何なる図表に位置するのかという広い視野でのとらえ方をしようという構えはこの導入部分には全く見受けられない．おそらくは，ノヴゴロド才一年代記が色濃く反映している『原初の集』がその様なものであつたからであろう．ところが，ネストルは，この導入部分を全く別の見地と全く別の目的と，全く別の構えとで以て，ほとんど独創的なものと入れ替えてしまつたように思われる．入れ替えただけではなくて，非常に詳しく永い記述を此処に綴り込んだのである．それは一口にして言えば，全世界的な視野におけるルシの国の位置づけであつた．だから『過ぎし年月の物語』の大部の導入部分は決してルシの国の物語からは始まつていない．中世的世界観による世界史のはじまりから物語られはじめるのである．ノアの洪水の後にその三人の息子が国を分け，先づシムが手に入れた東の国の列挙がなされる．

Персида, Ватрь, тоже и до Индикия а долготу, и в ширину и до Нирокрия, якоже рещи от въстока и до полуденья, и Сурия и Мидия по Ефрат реку, Вавилон, Кордуна, Асуряне, Мисопотамира, Аравия Старейшая, Алмаис, Инди, Аравия сильная, Кулии, Комагины, Фриникия вся.

『ペルシダ（ペルシア），ヴアトリ（バクトリヤ―― ヒンドウクシの西部とアム・ダリア川の間），長さではインジキイ（インド）まで，巾ではニロクリク（リノクリア）までにも及ぶ．言わば，東から南まで（すなわち），スリア（シリア）もエフラト川（ユーフラテス川）までのミジア

（メデイア）も，ヴアヴイロン（バビロン），コルドウナ（コルドウエナ——チフリス川の上中流）アスリヤネ（アツシリア人），ミソポタミラ（メソポタミア），いと古きアラビア，エルマイス（コーカサス山脈の東端地方か？）インジイ（インド），強きアラビア，クリイ（シリア南部），コマギヌイ（シリア北部），フイニキア全土（フエニキア）．

ハムが手に入れた南の国々の列挙がこれにつづく．

Еюпет, Ефивопья, прилежащия ко Индом, другая Ефивопья, из нея же исходить река Ефиопьская Чермна, текущи на въсток, Фива, Ливия прилежащи до Кириния, Мариния, Сурите, Ливуи другая, Нумидья, Масурия, Мавританья противу сущи Гадире; сущим же ко востоком имать Киликию, Памъфилию, Писидию, Мосию, Лукаонию, Фругию, Камалию, Ликию, Карию, Лудью, Масию другую, Троаду, Еолиду, Вифунию, старую Фругию; и острови неки имать: Саръдани, Крит, Купр, и реку Геону, возему Нил.

『エユペト（エジプト），インドに面したエフイヴオピア（インドより紅海に面したあたりまで）東へ流れているエフイオピア・チエルムナ河がそれから発している．もう一つのエフイオピア，フイヴア（ナイル川中流のエジプトの古都），キリニア（キユレナイカ）にまで接するリヴイア（リビア），マリニア（マウレタニヤ），スリテ（シドラ湾とガベス湾に接する地方），他のリヴイ（リビア西部），ヌミジア（ヌミデイア），マスリア（マウレタニアの東の地方），ガジレに向つてあるマヴリタニア（マウレタニア）である．東に向つては，キリキア（小アジアでキプロスの対岸），パムフイリア（パンフユリア），ピシジア，モシア（ミユシア），ルカオニヤ（リユカオニヤ），フルギア，カマリア，リキア，カリア，ルジア，もう一つのマシア（大ミユシア），トロアダ（トロイヤ）エオリダ（アイオリス），古きフルギア（小フリユギア）を取ることになる．そして，他の島々をも取ることになる．すなわち，サルダニ（サルジニア島），クリト（

クレタ島），クプル（キプロス島）ニル（ナイル川）と呼ばれるゲオナ川である．

最後のアフエトは北の国と西の国を取るのである．即ち，次才に自分の国の地名に近づきつゝ，次の様に書かれる．

Мидия, Альванья, Армения малая и великая, Кападокия, Фефлагони, Галат, Колхис, Боспории, Меоти, Дереви, Сармати, Тавриани, Скуфия, Франци, Макидонья, Далматия, Молоси, Фесалья, Локрия, Пелениа, яже и Полопонис наречеся, Аркадия, Ипирония, Илюрик, Словене, Лухития, Аньдриакия, Оньдреятиньская пучина; имать же и островы: Британию, Сикилию, Евию, Родока, Хиона, Лезвона Кофирана, Закуньфа, Кефалинья, Ифакину, Керькуру, часть Асийскиа страны, нарицаемую, Онию, реку Тигру, текущую межю Миды и Вавилоном; до Понетьского моря на полъношныя страны, Дунай, Дънестр, и Кавкаисинскиа горы, рекше Угорьски, и оттуде доже и до Днепра; и прочая реки: Десна, Припеть, Двина, Волхов, Волъга, яже идеть на вСток на часть Симову.

『ミジア（イラン），アリヴアニア（アルバニヤ），大小のアルメニヤ（東西アルメニア），カパドキア，フエフラゴニ（パフラゴニア），ガラド（ガラテイア），コルヒス（黒海東岸），ヴオスポリ（パンテイカパイオン），メオチ（アゾフ海東岸），ジエレヴイ，サルマチ（サルマテイア），タヴリアニ（クリミヤ），スクフイア（スキテイア），フラツイ（エーゲ海北岸），マキドニア（マケドニア），ダルマチヤ，モロシ（エペロイス），フエサア（テツサリア），ロクリア，ポロポニスとも呼ばれるペレニア，アルカジア，イピロニア（エピルス），イリユリク（アドリア海東岸），スロヴエネ（スラヴ人），ルヒチア（？），アニドリア（アドリア），オニドレアチン海（マド

リア海）である．また，次の島々をも持つことになる．ヴリタニア，シキリア〔シチリア〕，エヴイア〔エウボイア〕，ロドカ〔ドロス〕，ヒオナ〔キオス〕，レズヴオナ〔レスボス〕，コフイラナ〔キユテラ〕，ザクニフア〔ザキコントス〕，ケフアリア〔ケフアレニア〕，イフアキナ〔イタカ〕，ケリクラ〔コルキユラ〕，アシア〔アジア〕の地域のオニア〔イオニア〕と呼ばれる部分，ミド〔ユーフラテス川の分流　メデイア〕とヴアヴイロンの間を流れているチグラ川．ポネチ海〔黒海〕に至る北の国々には，ドウナイ，ドネストル，およびカフカイン山脈〔カルパチヤ山脈〕つまりウゴリ〔山脈〕，そして，そこからずつとドニエプルまで．そして他の川も，すなわち，ジエスナ，プリペチ，ドヴイナ，ヴオルホフ，東方シムの部分へ流れているヴオルガも』．

この様にしてロシア〔ルシ〕の国と民族に話を近づけて来る．勿論，この記述は『古代ロシア研究』才三号；p．72～ p．78 に示されたように，明らかにハマルトルスの年代記を台本にしたのであつた．では，何故，ネストルが，こんなことを『過ぎし年月の物語』の導入部分に書き込んだのであろう．それ以前の古い年代記（僅かにノヴゴロド才一年代記にそれらしい影があるだけで，現在には伝えられていない）には，全く，自国及び自国民族の位置づけなどなかつたのである．明らかにネストルは自国の『物語』を，その物語だけ，自国内だけ，或は宗教的範囲内だけ，では見つめようとしなかつた．もつと視野を広げて全世界的な立場からこれを眺め，位置づけようとしたからに他ならない．だから，『過ぎし年月の物語』に初めてルシ≪Русь≫という民族名が出現する際にも，ネストルはアフエトの種族の内の一つとしてヴアリヤジ≪Варязи≫，スヴエイ≪Свен≫，ウルマネ≪Урмане≫，ゴーテ≪Готъ≫としてルシ≪Русь≫と五番目に書きならべ，その後になお八個の民族名を加え，且つ，その他のものたちと並べ終るのである．あくまでも，多くのものの中の単なる一つに過ぎないという立場を守り，決して，ルシを特別扱いしない所から『過ぎし年月の物語』を始めようとして

いる．

この様にして，当時の民族を地理的に配置し，自国民族ルシの位置づけを終つた後に，ネストルは，此処でも直ちにルシの歴史に入ることをなさず，再び，世界的な視野において，全人類の歴史――即ちノアの息子たちの話に立ちもどつて，語りはじめるのである．そして，その全人類的・世界的な歴史の一こまとしての〔(ルシ)→(スラヴ)→(ポリヤネ)→(スロヴエネ)という〕自国民族の歴史の緒口にたどりつくのである．あくまでも，多くの物の内の一つにすぎないことを強調しているかのようであり，また，ビザンチンだけが唯一無二の文明大国ではないことを示そうとするかのようにもうかゞえる．即ち旧約聖書から素材をとりつゝ一方，広い地理的説明を加えながら，次の様に書いている．

Сим же, Хам, и Афет, разделивше землю, жребьи метавше не преступати никомуже в жребий братень, живяху кождо в своей части. Бысть язык един, и умножившемъся человеком на земли, помыслиша создати столп до небес, в дни Нектана и Фалека; и собрашася на месте Сенар поли здати столп до небес и град около его Вавилон, и создаша столп за 40 лет, несовершен бысть. И сниде Господь Бог видети град и столп, и рече Господь: се род един и язык един. И съмеси Бог языкы, и раздели на 70 и 2 языка, и разсея по всей земли. По размешеньи же язык, Бог ветром великим разруши столп; и есть останок его промежю Асюра и Вавилона, и есть в высоту и в широту локот 5433, и в лета многа храним останок. По разрушеньи же столпа и по разделеньи язык, прияша сынове Симови въсточныя страны, а Хамови сынове

полуденьныя страны, Афетови же прияша запад и полуношныя страны. От сих же 70 и 2 языку бысть, язык Словеньск от племени Афетова, Норци, еже суть Словене. По мнозех же временех сели суть Словени по Дунаеви, где есть ныне Угорьска земля и Болгарьска. От тех Словен разидошася по земле и прозвашася имены своими, где седше на котором месте; яко пришедше седоша на реце имянем Морава и прозвашася Морава, а друзии Чеси нарекошася; а се ти же Словени Хровате Белии, и Хорутане. Волхом бо нашедшем на Словени на дунайския, седшем в них и насилящем им, Словени же ови пришедше седоша на Висле и прозвашася Ляхове, а от тех ляхов прозвашася Поляне, Ляхове друзии Лутичи, ини Мазовшане, ини Поморяне. Такоже и ти Словене пришедше и седоша по Днепру, и нарекошася Поляне, а друзии древляне, зане седоша в лесех; а друзии седоша межю Припетью и Двиною, и нарекошася Дреговичи; инии седоша на двине и нарекошася Полочане, речьки ради, яже втечеть в двину, имянем Полота, от сея прозвашася Полочане, Словени же седоша около езеря Илмеря, прозвашася своим имянем, и сделаша град, и нарекоша и Новъгород; а друзии седоша по десне, и по Семи, по Суле, и нарекошася Себер. Тако разидеся Словеньский язык; темже и грамота прозъвася словеньская. Поляном же живщим особе горам сим, бе путь из Варяг в Греки; и из Грек по Днепр, и верх Днепра волок до Ловоти, по Ловоти внити в Илмерь озеро великое, из него же озера потечеть Волхов и въ-

течеть в озеро великое Нево, того озера внидеть устье в море Варяжьское, и по тому морю ити до Рима, а от Рима прити по тому же морю ко Царюгороду, а от Царягорода прити в Понт. море, в не же втечеть Днепр река. Днепр бо потече из Оковьскаго леса, и потечеть на полъдне; а Двина из того же леса потечеть, а идеть на полунощье, и внидеть в море Варяжьское; из того же леса потече Волга на въсток, и вътечеть семьюдесят жерел в море Хвалисьское. Темже и из Руси можеть ити в Болгарыи в Хвалисы, на въсток доити в жребий Симов; а по Двине в Варяги, из Варяг до Рима, от Рима до племени Хамова. А Днепр втечеть в Понетьское море жерелом, еже море словеть Русское, по нему учил святый Оньдрей брат Петров. Якоже реша, Оньдрею учащю в Синопии и пришедшю ему в Корсунь, увиде, яко из Корсуня близь устье Днепрьское, въсхоте поити в Рим и приде в устье Днепрьское; оттоле поиде по Днепр горе, и по приключаю приде и ста под горами на березе. Заутра въстав и рече к сущим с ним учеником: "видите ли горы сия? яко на сих горах возсияеть благодать Божья, имать град велик быти, и церкви многи Бог въздвигнути имам". Въшед на горы сия, благослови я, постави крест, и помоливъся Богу, и сълез с горы сея, идеже послеже бысть Киев, и поиде по Днепру горе. И приде в Словени, идеже ныне Новъгород; и виде ту люди сущая, како есть обычаи им, и како ся мыють, хвощюся, и удивися им. Иде в Варяги и приде в Рим, исповеда, елико

научи и елико виде, и рече им: "дивно видех Словеньскую землю, идучи ми семо видех бани древены, и пережьгуть е рамяно, совлокуться и будуть нази, и облеются квасом усияным, и возмуть на ся прутье младое, бьются сами и того ся добьють, егда влезуть ли живи, и облеются водою студеною, тако оживуть; и то вторять по вся дни немучими никимъже, но сами ся мучать, и то творять не мовенье собе, а мученье". Ты слышаще дивляхуся; Оньдрей же быв в Риме, приде в Синопию.

この文章のうちで，オニドレイ≪Оньдрей≫がキエフの地に当る所で古くキリスト教の布教をしていたという物語は『過ぎし年月の物語』のうちで，はじめての宗教関係の題材であるが，これとても，民間か或は教会人の深くに埋もれていて，『原初の集』には書かれていなかつたものを此処に組み入れたのであろう．そのため，後々の記述との間に幾つかの前記したような矛盾が起つたものと思われる．それよりも，ネストルがこれを書き入れた頃の時代風潮が一つの主張のようになつて，にじみ出て来た文句が此処には見出される．それは，公たちの内紛をいましめようとすること，祖国統一の熱望をのべることであつた．その気持が自然のうちに，ノアの三人の息子が仲良く暮していたという記述に現れたのであろう．上の引用文及び下の日本語訳文に下線をほどこした部分が即ちそれである．

『シムは，そしてハムも，アフエトも，土地を分けて，兄弟の分前は誰にもふみ込むべきではないとして，サイを投げ，それぞれ自分の部分に住んでいた．言葉は一つであつた．そして，地上に人々が増えた時，ネクタンとフアレクの時代に，塔を天に至るまで建てようと考えた．そして，塔を天に至るまで建て，そしてそのまわりにヴアヴイロンの町を建てるべく，セルナの野に共に集つ

た．そして四十年にわたつて塔を建てた．できあがらなかつた．そして主なる神が町と塔を見るべく天降り給うた．しかして神は言い給うた．〃見よ．民は一つであり，言葉は一つである〃と．しかして神は言葉をかき乱し給うた．しかして七十と二の民族に分け給うた．全土にまき散らし給うた．言葉のかく乱の後に，神は大いなる風をもつて塔を破壊し給うた．そしてその残がいはアシユル（アツシリア）とヴアヴイロンとの間にある．しかして高さ及び広さにおいて5433ロ―コチ（ヒジから中指の先までがロ―コチ）ある．しかして多年の間，残がいは保たれた．塔の破壊の後，そして言葉のかく乱の後に，シムの息子たちは東の諸国を取つた．ところでハムの息子たちは南の諸国を，アフエトのは西および北の諸国を取つた．これらの七十と二の民族のうちには，アフエトの種族から出たスロヴネの民族，すなわちノルツイがあつて，それはスロヴエネであつた．（この一節，『古代ロシア研究』ヲ―号；p．18参照）．多くの年月の後，ドウナイ（河）に沿つてスロヴエネが住んできた．そこには現在ウゴル（ハンガリ―）とボルガル（ブルガリア）の国がある．それらのスロヴエネから，（人々は）地上にひろがり，住んでいた場所を自分の名として呼ばれた．すなわち，たとえばモラヴアという名の川のほとりに来たり住んだ（人々は）モラヴアと呼ばれた．ところで他の（ものたち）は，チエヒ（チエコ）と名づけられた．ところで，さて，白いフロヴアチエ，セレビも，ホルタネも，同じスロヴエネ（人）である．というのは，ヴオルフヴアがドウナイ（河）のスロヴエネを攻撃し，彼らの間に住み，彼らを迫害したのでスロヴエネ人たちは，あるものはヴイスラ（河）のほとりに来たり住み，リヤホヴエと呼ばれた．ところで，これらのリヤホヴエの内で（あるものは）ポリヤネと呼ばれた．他のリヤホヴエはルチツチ，別のものはマゾフシヤネ，また別のものはポリヤネと（呼ばれた）．同様にこれらのスロヴエネも，ドネプル（河）の流域に来たり，そして住んだ．そして，ポリヤネと呼ばれた．ところが他の（ものたち）はドレヴリヤネと（呼

ばれた）．というのは，森の中に住んだからである．ところで，他のものは，プリペチ（河）とドヴイナ（河）との間に住んだ．そしてドレゴヴイチと名づけられた．別のものたちはドヴイナ（河）のほとりに住んだ．そしてポロチヤネと名づけられた．ドヴイナに流れ込むポロタという名の小川のためである．その川からポロチヤネと呼ばれたのである．スロヴエネはまた，イリメリ湖の周辺に住み，その名で呼ばれた．しかして町を造つた．そして，それをノヴゴロドと名づけた．ところで他のものは，ジエスナ（河）の流域に住み，また，セミ（河），スラ（河）の流域にも（住み），セヴエルと名づけられた．かくして，スロヴエネの民族が別れた．それによつて文字もスロヴエネの（文字）と呼ばれた．これらの山々（ウゴル即ちカルパチヤ山脈）に別々にポリヤネが住んでいたころ，ヴアリヤギからグレキへの道があつた．そしてグレキからドネプルによつて，そしてドネプルの上流はロヴオチまでの連水陸路がある．ロヴオチによつて大いなる湖イルメリへ入る．その同じ湖からヴオルホフが流れ出し，そして大いなる湖ネヴオ（ラドガ湖）へ流れ込んでいる．その湖の出口（ネヴア河）がヴアリヤギ海へ入り，そして海によつてリム（ローマ）まで来たる．ところが，リムからその同じ海によつて，ツアリゴロド（コンスタンチノーポル）まで至る．ところが，ツアリゴロドからポンド海に至るその海へはドネプル河が流れ込んでいる．というのは，ドネプルは，オコフスキ森林から流れ出し，南の方へ流れ出ているからである．ところが，ドヴイナ（河）は，その同じ森林から流れ出しており，ところで北の方へ行きヴアリヤギ海へ入つている．その同じ森林からヴオルガ（河）が東の方へ流れ出した．そしてフヴアリス海へ七十の河口となつて流れ込んでいる．この様にしてルシからボルガおよびフヴアリスへ行き，東の方シムの領域にまで達し得る．ところでドヴイナによつてはヴアリヤギへ，ヴアリヤギからリムまで，リムからハムの種族まで（行くことができる．）ところでドネプルはポネチ海（ポントス海，黒海）へ河口となつて流れ込ん

でいる．この海はルシ（の海）と言われ，その海のほとりで，ペトル（ペテロ）の兄弟聖オニドレイが布教していた．（人々が）言つた所によれば，シノピアにおいてオニドレイが布教し，そして彼がコルスニへやつて来たとき，コルスニから近くにドネプルの河口があることを見てとつた．リムへ出かけようという望みをおこし，そしてドネプルの河口へ到着した．そこから，ドネプルによつて上流へ出かけ，そして，たまたま，山々のふもとの岸に来たり，そして，とゞまつた．翌朝，起きて，彼と共にいる弟子たちに言つた．〃これらの山々を見るか？　これらの山々の上に神の恩ちようが輝いているのを．おおいなる町が起り，そして多くの教会を神が建立するであろう〃と．これらの山々に登り，それらを祝福し，十字架を建て，そして神に向つてしばし祈つた．そこに後にキエフが起つた．（彼は）この山から下り，そしてドネプルによつて上流へ出かけた．そしてスロヴエネに着いた．そこには今ノヴゴロドがある．そして，そこにいる人々を見た．彼らのならわしがいかなるものであるか，そして，いかに身体を洗い身をたゝくかを（見た）．そして彼らにおどろいた．（彼は）ヴアリヤギへ行き，リムに着いた．どれほど説教をし，どれほど見たかを語り，そして彼等に言つた．〃スロヴエネの地を見ておどろいた．私がこちらへ来る途中で木の風呂を見た．そして（人々は）過度にそれをもやした．服をぬぎ裸になると，なめしクワスを我が身にふりかけた．そして若い枝を我が身にとりあげ，自分で我が身を打ち，そして生きてはい出せるかどうかのところまで我が身を打ちすえ，そしてつめたい水を浴び，かくして生気づくのである．そして，それを毎日行うのである．誰によつて苦しめられるのでもなく自分自身を自分で苦しめるのである．そして，それは自分に，入浴しているのではなくて，苦業をしているのである〃と．それらを聞いて（人々は）おどろいたものである．オニドレイはリムにしばらくいて，シノピアへ到着した』．

この様に，ネストルは，アフエトに属した北及び西の諸国をとりわけ詳しく述べ，各民族の中におけるルシの位置づけに進もうとするのである．ルシと呼ばれる以前のスラヴ族の地名的な呼び名が詳しく書き取られているのである．そして，続いてネストルは地理的説明に移つた．ルシの国と他の諸国との交易路を詳しく示して，ついに当時の世界を一周したのである．一周することによつて，彼はルシの国が世界の一部分であり，且つ，自分たちの生活圏が世界に通じていることを示した．この様に世界的拡がりによる下地を先づ『過ぎし年月の物語』の冒頭に書き加えてから，ネストルは，初めて，おのれの民族と国家との古い建国的説話に移るのである．即ち，それは，キー≪Кий≫とシチエク≪Щек≫とホリフ≪Хорив≫の三人兄弟及びその妹ルイベジ≪Лыбедь≫の物語であつた．その物語を，ネストル以前の年代記はルシの国の始まりだとして，例えば，ノヴゴロド第一年代記は，わざわざこの説話を以て，6362(854)年と年号を設定し，しかも『ルシの国のはじまり』≪Начало земли Руской≫という見出しまでつけていた．ところが，ネストルは，この古い説話に年号など設けることなく，単に多くの民族の内の一つの民族の古い物語としてしか取り扱わないのである．各地にちらばつているスラヴ民族の一つの，しかも，キエフの町にまつわる単なる説話に過ぎないことをネストルは充分知つていた．だから，彼は，むしろ，その話に何気なく触れただけで，むしろ，彼の筆の勢いは別の方向を向いていた．多くは各地の地名によつて呼ばれたロシアの種族の古い相互関係を続いて書くことの方が彼には重要であつた．具体的な生活の様式，法やおきての古い形をネストルは追求するのである．或は古いロシアの先祖たちが接していた隣接諸民族との関係にふれるのである．ノヴゴロド第一年代記がキーの物語の直後にルシのギリシア遠征の物語を書きつけるのとは大きな相違である．ノヴゴロド第一年代記のように，個人名のないルシの連中がグレキに遠征したというような

物語を『過ぎし年月の物語』は書くことなく，自分たち同族の古い配置図とそれぞれの暮し向きの様相を書き取るのである．此処でロシアの文献は始めて詳しい昔の民族図を展開するのである．

И по сих братьи держати почаша род их княженье в Полях; в Деревлях свое, а Дреговичи свое, а Словени свое на Новегороде, а другое на Полоте, иже Полочане. От них же Кривичи, иже седять наверх Волги, и наверх Двины и наверх Днепра, их же град есть Смоленьск; туда бо седять Кривичи, таже Север от них. На Белеозере седять Весь, а на Ростовьском озере Меря, а на Клищине озере Меря же; по Оце реце, где потече в Волгу, Мурома язык свой, и Черемиси свой язык, Моръдва свой язык. Се бо токмо Слевенеск язык в Руси: Поляне, Деревляне, Ноугородьци, Полочане, Дреговичи, Север, Бужане, зане седоша по Бугу, послеже Велыняне. А се суть инии языци, иже дань дають Руси: Чюдь, Меря, Весь, Мурома, Черемись, Моръдва, Пермь, Печера, Ямь, Литва, Зимигола, Корсь, Норова, Либь; си суть свой язык имуще, от колена Афетова, иже живуть в странах полуношных.

『しかして，これらの兄弟たちの後に彼らの氏族がポリヤネの中で統治権をもちはじめた．ジエレヴリヤネにおいては，それ自からの，またドレゴヴイチたちはそれ自からの，スロヴエニはノヴゴロドにおいて自からの（統治権をもつた）．ところで他の（統治権）がポロタのほとりにあつた．そして彼らはポロチヤネであつた．彼等からクリヴイチが出た．彼らはヴオルガの上流およびドヴイナの上流，およびドネプルの上流に住んでいた．彼等の町はスモレニスクである．

つまり，そこへはクリヴイチが住み，彼らから後のセヴエルが出た．ベロオゼロのほとりにはヴエシが，ところでロストフ湖のほとりにはメリアが，また，クレシチノ湖のほとりには同じくメリアがいる．ヴオルガに流れるオカ河に沿つてムロマが自分の言葉を（もち），チエレミシもまた自分の言葉を（もち），モルドヴアが自分の言葉を（もつている）．というのは，たゞこれだけがルシにおけるスロヴエネの言葉を（もつているのである）——ポリヤネ，ジエレヴリヤネ，ノヴゴロド人，ポロチヤネ，ドレゴヴイチ，セヴエル，ブジヤネ．なんとなれば彼らはブグに沿つて住んでいたから，後に（彼らは）ヴエルイニヤネであつた．ところで，これらは他の種族である．彼らはルシに貢物をさゝげている——チユジ，メリア，ヴエシ，ムロマ，チエレミシ，モルドヴア，ペルミ，ペチエラ，ヤミ，リトヴア，ジミゴラ，コルシ，ノヴアリビ．これらは自分の言葉をもつている．（彼らは）アフエトの子孫から出たもので，北方の国ぐにに住んでいる』

この様にルゞとルシに最も近い関係にあつた種族の名を地理的に書き込み，つゞいて，次にこの地を攻めた多くの民族の往来を書きしるすのである．歴史的叙述とも言えよう．ネストルが主として当時の古い伝承によつて加筆したものであることは，その内容から明らかであろうと思われる．ちなみに，オブリの話は勿論，これに相当すると思われる個所はノヴゴロド第一年代記には全くない．

Дунаи, придоша от Скуф, рекше от Козар, рекомии Болгаре, седоша по Дунаеви, населници Словеном быша. Посем придоша Угри Белии, наследиша землю Словеньску; си бо Угри почаша быти Ираклии цари, иже находиша на Хоздроя царя Перьскаго. В си же времена быша и Обри, ходиша на Ираклия царя и

мало его не яша; си же Обре воеваху на Словенех и примучиша Дулебы, сущая Словены, и насилье творяху женам Дулебьским: аще поехати будяше Обрину, не дадяше въпрячи коня, ни вола, но веляше въпрячи 3 ли, 4 ли, 5 ли жен в телегу и повезти Обърена; тако мучаху Делубы. Быша бо Объре телом велици и умом горди, и Бог потреби я, помроша вси, и не остася ни един Обърин; есть притъча в Руси и до сего дне: погибоша аки Обре. Их же несть племени, ни наследъка. По сих же придоша Печенези; паки идоша Угри Чернии мимо Киев, послеже при Олзе.

『(我々が)既に述べたように，スロヴエネの民族がドウナイのほとりに住んでいたとき，スクフイ(スキタイ)から，すなわちコザレからボルガレと言われるものがやつて来てドウナイに沿つて住んだ．スロヴエネに対する征服者であつた．その後白いウグリが来て，スロヴエネの土地を受けついだ．なんとなれば，これらのウグリはイラクリイ皇帝(ヘラクレイオス)のときに現れたのである．彼はペルシアのホズドロイ(ホスロエ)皇帝を攻撃した．この時代に，また，オブリも現われ，イラクリイ皇帝を攻撃し，彼をすんでのところで捕えるところであつた．これらのオブリはスロヴエネたちに対して戦いを(しばしば)いどみ，スロヴエネであるドレブイを苦しめた．そしてドレブイの女たちに暴行を加えた．もしも(一人の)オブリにとつて乗つて出かけることが必要であれば，馬も牛もつなぐことを許さず，三人なり，四人なり，五人なりの女を馬車につないでオブリを運ぶように命じたのである．かくの如く，ドレブイを(彼らは)苦しめたのである．オブレは体が大きく，心がたけだけしかつたので，神が彼らをほろぼし給うた．ことごとく死に，一人のオブリも残らなかつた．今日に至るまでも，ルシ

には〃オブレのようにほろびた〃というたとえがある．彼らの種族も子孫もない．これらの後にペチエネギがやつて来た．ふたたび黒いヴグリが，後にオレグの時代にキエフのそばを通りすぎた』

ルシを圧する他民族の来襲や圧政をこの様に取りあげたネストルは，結局，それでもルシは生き残り兇悪なオブリの様な敵も最後には滅ぶことを愛国的な姿勢で書き込みたかつたのであろう．ひとたび伝承をたよりに歴史的な物語へ移行しはじめると，筆の勢いは，これだけにとゞまらず，なお，伝承的物語の加筆をつゞけるのである．特に，ラジムとヴヤトコの二人の兄弟から種族名が生まれたという物語は，ネストル以前の『原初の集』に含まれていたと思われるキーたち三人の兄弟とキエフという町の名との物語と対比して面白いであろう．

Поляном же живущем особе, якоже рекохом, суще от рода Словеньска, и нарекошася Поляне, а Древляне же от Словен же, и нарекошася Древляне; Радимичи бо и Вятичи от Ляхов. Бяста бо 2 брата в Лясех, Радим, а другий Вятко; и пришедъша седоста, Радим на Съжю, прозвашася Радимичи, а Вятъко седе с родом своим по Оце, от него же прозвашася Вятичи. И живяху в мире Поляне, и Деревляне, Север, и Радимичи, и Вятичи, и Хрвате. Дулеби живяху по Бугу, где ныне Велыняне, а Улучи, Тиверьци седяху по Днестру, приседяху к Дунаеви; бе множьство их, седяху бо по Днестру оли до моря, суть гради их и до сего дне. Да то ся зваху от Грек Великая Скуфь.

『ところで，ポリヤネは，はなれて住んでいたが，既に述べたようにスロヴエネの氏族から出たものであり，ポリヤネと名付けられた．ところで，ドレヴリヤネもスロヴエネから出ており，そして

ドレヴリヤネと呼ばれた．ところが，ラジミチとヴヤチチはリヤホヴエから出ている．またリヤヒには二人の兄弟がいた．ラジムともう一人はヴアトコである．しかして（彼ら二人は）来り住んだ．ラジムはソジ（河）のほとりに（住み），ラジミチと呼ばれた．一方ヴアトコはおのれの氏族と共にオカに沿つて住んだ．彼（の名）からヴヤチチと呼ばれたのである．しかしてポリヤネ，ジエレヴリヤネ，セヴエル，ラジミチ，ヴヤチチ，フルヴアチは（互いに）平和に暮していた．ドウレビはブグ（河）に沿つて暮していた．そこには現在ヴエルイニヤヴが（いる）．ところでウリチ，チヴエリチはドネストル（河）に沿つて住んでおり，ドウナイ（河）にまでひろがつていた．彼らは多数であり，ドネストルに沿つて海に至るまで住んでいた．彼らの町々は現在に至るまで残つている．それで，それはグレキから大いなるスクフイ（スキタイ）と呼ばれていたのである』

この様に書きつゞける節々にネストルは，例えば『（互いに）平和に暮していた』≪живяху в мирѣ……≫という句を書き入れるのである．当時に世相への熱い呼びかけが此処にも読み取られるのである．その様にしてネストルは当時の世相への語りかけをおこないつゝ，地理的及び歴史的な諸族の説明を終り，ロシア大地に住んだそれら諸族の習慣やおきての記述に移るのである．各種族が各々それぞれの父祖伝来の習慣やおきてによつて暮していることをネストルは強調する．そして，それらを平列して見た上で，自分たち~~自分たち~~の属するポリヤネたちが，いかにすぐれた文明の創造者であるかを言いたげなのである．勿論，最後に，彼は当時の最大の敵ポロヴエツの風習を取りあげることも忘れはしなかつた．そして，その間には，自分の説を一層確保するために，前に述べたハマルトルスの年代記からの一節を引用するのである．ハマルトルスの一節を省略して，『過ぎし年月の物語』の記述を次に引出しておこう．（ラヴレンチー年代記より）．此処にはキエフの町を中心とした者たちの種族ポリヤネの自慢話にも似たほどの優越感が読み取

ьлъдъвъ.

Имяху бо обычаи свои, и закон отець своих и преданья, кождо свой нрав. Поляне бо своих отець обычай имуть кроток и тих, и стыденье к снохим своим и к сестрам, к матерем и к родителем своим, к свекровем, и к деверем велико стыденье имеху; брачныи обычаи имяху: не можаше зять по невесту, но приводяху вечер, а завътра приношаху по ней, что вдадуче. А Древляне живяху звериньским образом, живуще скотьски: убиваху друг друга, ядяху вся нечисто, и брака у них не бываше, но умыкиваху уводы девиця. И Радимичи, и Вятичи, и Север один обычай имяху: живяху в лесе, якоже всякий зверь, ядуще все нечисто, срамомловье в них пред отьци и пред снохами; браци не бываху в них, но игрища межю селы. Схожахуся на игорища, на плясанье, и на вся бесовьская игрища, и ту умыкаху жены собе, с нею же кто съвещашеся; имяху же по две и по три жены. Аще кто умряше, творяху трызну над ним, и посем творяху кладу велику, и възложахуть и на кладу мертвеца, сожьжаху, а посем собравше кости, вложаху в судину малу и поставяху на столпе на путех, еже творять Вятичи и ныне. Си же творяху обычая Кривичи, прочии погании, не ведуще закона Божья, но творяще сами собе закон.

.....

Якоже се и при нас ныне Половци закон держать отець своих, кровь проливати, а хвалящеся о сих, ядуще мерьтвечину и всю нечистоту, хомеки и су-

солы; поимають мачехи своя, ятрови, и ины обычая отець своих творять. Мы же христиане, елико земль, иже верують в всякую Троицю, а едино крещенье, в едину веру, закон имамы единь, елико во Христа крестихомся и во Христа облекохомся.

『(彼らは)おのれの慣習と,おのれら父祖たちのおきてと,言い伝えを持ち,各々おのれの習慣を持つていた.ポリヤネはおのれの父祖たちの温和で静かな慣習を持つている.そしておのれの子の嫁たちおよび姉妹たち,母たち,およびおのれの父たちに対して敬意を,そして姑たち,および夫の兄弟たちに対しては大いなる敬意をもつていた.(彼らは)結婚の慣習をもつていた.すなわち花むこは嫁を迎えには出でず,前夜に(嫁を人々が)連れ来たり,翌朝,与えられるものを(人々が)嫁のためにもつて来るのであつた.ところでドレヴリヤネは家畜のように住みつゝ,野獣のような暮し方をしていた.すなわち互いに殺し合い,あらゆる不潔なものを食べていた.彼らには婚礼はなく,略奪によつて娘たちをかすめ取つたのである.ラジミチもヴヤチチも,セヴエルも同じ慣習をもつていた.すなわち,あらゆる不潔なものを食べながら,すべての野獣のように森の中で暮しており,彼らには父たちおよび嫁たちの前での醜い言葉使いがあつた.彼らには婚礼はなくて村落の間の集団遊技があつた.(彼らは)集団遊技に,舞いおどりに,そしてあらゆる悪魔的な集団遊技に集まり,そしてそこで誰とでも合意に達した女たちを,おのれのために連れ去つたのである.(彼らは)二・三人づつの妻を持つていた.もしも,誰かが死ぬと,彼のために異教供養をなし,そしてその後,大きな木組みを作り,まさにその木組みの上に死者をのせ,横たえて焼いたのである.ところでその後,骨を集めて小さな器に入れ,(十字)路にある柱の上においたのである.それをヴヤチチは現在もおこなつている.神のおきてを知らず自分たちでおのれにおきてをこしら

えているクリヴイチ，その他のいむべき者たちは，この同じ習慣を行つているのである．・・・・・・・・・ハマルトルス年代記よりの一節省略・・・・・・・・・・・・・このように我が現代においてもボロフツイはおのれの父祖たちのおきてをまもつている．（すなわち）血を流し，これらのものたち（流血者）について自慢し，死体の肉およびあらゆる不浄なもの，山ねずみや地ねずみを食べている．おのれの義母，義姉妹をめとり，おのれの父祖の他の慣習をおこなつている．ところで我らキリスト教徒は，聖なる三位一体，一つの洗礼，一つの信仰を信じている．大地のある限り，一つのおきてを持つているのである．キリストの名において洗礼を受け，キリストを身にまとつているかぎり』．

ネストルが如何に自己の属するポリヤネという種族を文明人として高くかかげたかをこの一節から知ることができる．其処には彼の愛国心を読み取ることができるであろう．その愛国心がネストルに思い出させたものは，自己種族の受けた古い受難の物語であつた．おそらくは，この種族に伝えられた最も古くからの伝承であつたであろう．即ちコザレによるポリヤネ圧政の物語である．自分たちの種族がコザレに両刃の剣を貢税として納めたという物語であつた．古くは他の種族に貢税を納める立場であつた自分たちが，今は見事に独立し盛え，そして才一の文明人になり得ていることを強調するように．ネストルは最後にこの古い伝承物語をわざわざ持ち出して来たのである．しかも，ネストルは『過ぎし年月の物語』の導入部分を此処で終るのである．苦難の歴史を背負つたことが度々あつたけれども，我々は見事にそれを乗り切り，なお且つ栄光へ進むものであることを示そうとして．　この叙述の姿勢こそが実はネストルの編集態度であり，主張点であり，それはまた内紛と外敵に苦しむ当時のロシアに対しての『過ぎし年月の物語』の意義なのであつた．

此処に来て，ネストルは初めて年号を設定して詳しく年代記を書

きはじめるのである．ネストルによる年号の示し方が一段と細分化されたことをノヴゴロド第一年代記と比較しながら，此処に注目しておかなければならないであろう．同時にそれは記事内容の精密化とも重り合うものなのであるから．

—T—

ノヴゴロド第一年代記がルシの国の始まり《Начало земли Русской》を事もなげに6362(854)年と設定し，その年号の下に，キー，シチエク，ホリフの三人兄弟の物語，ミハイル帝の時代にルシがツアリゴロド（コンスタンチノーポリ）に遠征した物語，ボリヤネがコザレに両刃の剣を貢税として納めていた物語，ヴァリヤギを迎えに行く物語，リユリツクが支配者になつた物語，アスコリドとジルの物語，等々を一挙にまとめあげているのに対して，『過ぎし年月の物語』は，そんな粗雑な記述には満足しない．

ノヴゴロド第一年代記がルシの国の始めとした6362(854)年よりも二年前，即ち，6360(852)年から『過ぎし年月の物語』の年号設定がはじまる．そして東ローマ皇帝ミカエル三世（在位842～867……ロシア年代記名ミハイル）が治世しはじめた時，『ルシの国』《Руска Земля》が呼びはじめられたと記すのである．勿論，此処には明らかに852年と842年との十年の読みちがいがある．ギリシアの年代記に誌されているルシのツアリグラド遠征（——ノヴゴロド第一年代記では854年の項——）の記事をよりどころに，この年から年号を設定しようとしている．そして，アダムから算定して，ギリシアのミハイル帝の即位までを十年の間違いを含めたまゝ詳しく計算し，ミハイル帝の即位の年からもう一度ルシの国の出来事へ計算を運び移して，オレグ，イゴリ，スヴイヤトスラフ，ヤロポルク，ヴオロジメル，ヤロスラフの各ロシアの公たちの在位期間を詳しく算定するのである．結局，6360(852)年の項は

この年号設定の正当化とその理由の詳しい記述で埋めつくされ，6361，6362，6363，6364，6365の五年間は空白のまゝ残される．然し，ノヴゴロド才一年代記が6362年の項から実に56年間も飛び越えるのと比べれば，五年間の飛び越えの如きは物の数ではないであろう．ではノヴゴロド才一年代記が6428年のイゴリのツアリグラド遠征の記事まで飛び越えた56年の間を『過ぎし年月の物語』は一体何で以て埋めているのであろう．この埋め草については非常に重大な一つの問題が伏在する．

6366年の項にはミハイル帝がボルガルを攻めた記事があるが，これは明らかにギリシアの文献からの書き抜きであつたであろう．ところが，それにつゞく6367年の項と6370年の項（6368，6369両年の項は空白である）からの記事が実は非常に問題である．ネストルが最も苦心し，且つ，最後まで充分には解き明かすことのできなかつた問題があつたかも知れない．即ち，それはヴアリヤグとルシの問題なのであつた．多くの歴史家は，この伝承記事の読み方に常にひつかかるのである．大体，ネストルは，スラヴ民族の各種族をポリヤネを中心として非常に多く書き出し，且つ，それぞれの呼び名を地名や河などによる由来と共に説明していたのだが，ルシ《Русь》という呼び名については，実は一度も，何の説明もなしてはいない．まして，ルシとヴアリヤギとの関係などについては，もてあました結果，はじめから伝承の口うつしにあづけきつている感がある．さて，具体的に6367年の記事に立ち戻つて話をはじめよう．其処には先づ次の様にある．

Имаху дань Варязи из заморья на Чюди и на Словенех, на Мери и на всех Кривичех; а Козари имаху на Полянех, и на Северех, и на Вятичех, имаху по беле и веверице от дыма.

『ヴアリヤギが海の向うからチユジおよびスロヴエネ，メリヤおよび総てのクリヴイチに貢税を課した．ところがコザレはポリヤネ及び

セヴエルヤヴヤチチに（貢税を）課し，一戸より銀貨とリスの毛皮を課した』．

そしてネストルは，二年間の空白の後，6370(862)年の項として，問題の伝承を書きつけるのである．

Изъгнаша Варяги за море, и не даша им дани, и почаша сами в собе володети; и не бе в них правды, и въста род на род, быша в них усобице, и боевати почаша сами на ся. Реша сами в собе: "поищем собе князя, иже бы володел нами и судил по правду". Идоша за море к Варягом к Руси. Сице бо ся зваху тъи Варязи Русь, яко се друзии зовутся Свое, друзии же Урмане, Анъгляне, друзий Гъте ; тако и си. Реша Руси Чюдь, Словении и Кривичи: "вся земля наша велика и обилна, а наряда в ней нет; да поидете княжит и володети нами". И изъбрашася 3 братья с роды своими, пояша по собе всю Русь, и придоша; старейший Рюрик седе в Новеграде, а другий Синеус на Белеозере, а третий Изборьте Трувор. От них прозвася Руска земля, Новугородьци; ти суть людье Ноугородьци от рода Варяжьска, преже бо беша Словени. По дву же лету Синеус умре, и брат его Трувор, и прия власть Рюрик; и раздая мужем своим грады, овому Полотеск, овому Ростов, другому Белоозеро. И по тем городом суть находници Варязи; а перьвии насельници в Новегороде Словене, Полотьски Кривичи, в Ростове Меря, в Белеозере Весь, в Муроме Мурома. И теми всеми обладаше Рюрик. И быста у него 2 мужа, не племени его, но боярина, и та испросистася ко Царюгороду с родом своим. И поидоста

по Днепру, и идуче мимо, и узреста на горе градок и упрашаста, реста: "чий се градок? Они же реша: "была суть 3 братья, Кий, Щек, Хорив, иже сделаша градок ось, и изгибоша, и мы седим платяче дань родом их Козаром. Асколд же и Дир остаста в граде сем, и многи Варяги скуписта, и начаста владети Польскою землею.....

.....

『(スラヴの諸種族たちは) ヴアリヤギを海の彼方へ追いはらい，彼等に貢税を納めず，自分たちが自分たちの中で治めはじめた．したがつて彼らの中には正義がなく，氏族は氏族に対して事を構え，彼らの間には内紛があり，自から互いに戦いはじめた．彼らは自から自分たちの中で言つた．〃我々を統治し，法によつてさばくような公を自分たちのために探し求めよう〃と．彼らは海の向うの，ヴアリヤギのルシのもとへ行つた．というのは，そのヴアリヤギは，このように，ルシと自からを呼んでいたからである．或るものたちがスヴオエと呼ばれ，或るものはウルマネ，アングリヤネ(と呼ばれ)，あるものがグテ(ゴート)と(呼ばれている)ように，そのようにこれらも(そうである)．ルシにチユヂ，スロヴエネおよびクリヴイチが言つた．〃我々の全土は大きく豊かであるが，その中には秩序がない．(我々に)君臨し，我々を支配するために来たれ〃と． 三人の兄弟が自分の氏族と共に選び出され，ルシ全部を引き具して到着した．長兄リユリクはノヴゴロドに，次のシネウスはベロオゼロに，三番目のトルヴオルはイズボルスクに(それぞれ)居を定めた．それらの者たちから，ルシの国が呼び名を得たのである．ノヴゴロド人．これらの人々はヴアリヤギの氏族から出たノヴゴロド人である．というのは，以前には(ノヴゴロド人は)，スロヴエネであつたからである．二年後に，シネウスが死に，彼の弟トルヴオルもまた(死んだ)ので，リユリクが権力を握つ

た．そして自分の家の子に町々を，或る者にはポロテスクを，或る者にはロストフを，他のものにはベロオゼロを，分かち与えた．そしてその町々にとつては，ヴアリヤギは外来者であつたが，ノヴゴロドにおける最初の住民はスロヴエネであり，ポロツクにおいてはクリヴイチ，ロストフではメリア，ベロオゼロではヴエシ，ムロムではムロマであつた．そして，それらすべてをリユリクが統治していたのである．しかして，彼のもとには二人の家臣がいた．彼の一族ではなかつたが貴族であつた．しかして，これら二人は自分の一族をともなつて，ツアリゴロドへ（行く）許しを得た．そしてドネプルに沿つて出発し，通りすがりに山の上に小さな城市（がある）を見てとり，尋ねて言つた．〃これは誰の城市か〃と．人々は言つた．〃かつて三人の兄弟，キー，シチエク，ホリフがいた．彼らがこの町を造り，滅亡した．だから我々は彼らの一族であるのに，コザレに貢税を払いながら住んでいる〃と．アスコルドは，そしてまたジルも，この町にとどまり，多くのヴアリヤギをあつめ，ポリヤネの地を統治しはじめた．ノヴゴロドではリユリクが君臨しているときであつた．』

ネストルはルシという言葉の由来や，最古のロシアの支配者としてのリユリク――一言にして言えばヴアリヤギ招へいの伝説をこの様にまとめ上げたのである．これがあくまでも伝承であり，しかも，ネストルがまとめた形のものであることを我々は充分承知しておかなければならない．勿論，ネストルは，この記事を書くに際して，より古い文献を参照したことであろう．即ち，ノヴゴロド第一年代記に反映している『原初の集』を土台にしたことであろう．ノヴゴロド第一年代記では，このヴアリヤギ招へいの物語は，次の様な形で反映しているのである．両者の相異を充分注意しよう．

И въсташа Словене и Кривичи и Меря и Чюдь на Варягы, и изгнаша я за море; и начаша владети

сами собе и городы ставити. И въсташа сами на ся воевать, и бысть межи ими рать велика и усобица, и въсташа град на град, и не беше в них правды. И реша к себе: "князя поищем, иже бы владел нами и рядил ны по праву". Идоша за море к Варягом и рекоша: "земля наша велика и обилна, а наряда у нас нету; да поидете к нам княжити и владети нами". Изъбрашася 3 брата с роды своими, и поняша со собою дружину многу и предивну, и приидоша к Новугороду. И седе старейшии в Новегороде, бе имя ему Рюрик; а другыи седе на Белеозере, Синеус; а третеи в Изборьске, имя ему Трувор. И от тех Варяг, находник тех, прозвашася Русь, и от тех словет Руская земля; и суть новгородстии людие до днешняго дни от рода варяжьска.

『しかしてスロヴエネ及びクリヴイチ及びメリヤ及びチユジがヴアリヤギに対して蜂起した，しかして彼らを海の彼方に追い払つた．しかして（人々は）自からおのれで統治し，町々を建てはじめた．しかして（人々は）自からお互いに戦うべく蜂起し，しかして彼らの間には大いなる戦いと内紛とがあり，町は町に対して立ち，しかして彼らの中には正義がなかつた．しかして人々は自からの中で言つた．〃公を探そう．我々を統治し，秩序によつて我々をとゝのえることのできるような〃と．しかして（人々は）海の彼方ヴアリヤギのもとへ行をしかして言つた．〃我々の土地は大きく，しかして豊かである．しかし我々には秩序がない．我々に君臨し我々を統治するために我々のもとに来たれ〃と．（ヴアリヤギたちは）おのれの氏族と共に三人の兄弟を選び出し，しかして（三人は）多くの親兵団をおのれに具してノヴゴロドに来たつた．

しかして（三人の内の）最年長者がノヴゴロドに坐した．彼の名はリユリクであつた．しかしてもう一人はベロオゼロに坐した．シネウスである．ところで三人目がイズボリスクに（坐した）．彼の名はトロヴォルである．しかしてそれらのヴアリヤギたち即ちそれらの新来者たちからルシが呼ばれた．しかしてそれら（の者たち）からルシの国が名をえた．しかして，ノヴゴロドの人々は今日に至るまでヴアリヤギの氏族から出ている』

此処では長兄がノヴゴロドに坐したとあるところだけからも，これが明らかに，ノヴゴロド地方の伝承であつて，キエフ地方の伝承でないことが分かるであろう．然も，ネストルが記述したのとは，余程その趣きを異にしている．ヴアリヤギを招へいするために出かけたとあつても，そのヴアリヤギがルシであるとは言つていない．まして，ルシと言われるヴアリヤギを招へいしに人々が出かけたというような文句は一言も見出せない．招へいされて来た新来者であるヴアリヤギが即ちルシと言われる者たちであつたというような結論めいた言い方の個所は，だから，非常に細心な読み方が心要である．訳文のその部分に下線をほどこしておいた．招へいされて来たヴアリヤギたちが，当時のロシアをルシと呼んだという意味に解すべきなのか？そうだとすれば，ルシとヴアリヤギとの等式は成立しない．招へいされて来たヴアリヤギたちがルシであつたために，それが原因でノヴゴロドその他がルシと呼ばれたというのなら，ヴアリヤギ即ちルシであるという等式は成立しよう．ルシが，そして，ルシの国が名をつけられて呼ばれたにはちがいないが，ヴアリヤギによつて呼ばれたのか，或はヴアリヤギが原因でそう呼ばれたのか，≪от тех Варяг≫という古代ロシア語をいくら，これだけで考えつめて見ても，何の結論も出てこない．この簡潔な伝承を，ネストルは，ヴアリヤギが即ちルシであつたから，招へいされて来たそのルシによつて，ルシという名が初めて起つたと理解して記述したにすぎない．ヴア

リヤギ，或はヴアリヤギの特定の部分の連中がルシであつたというような読み方が正当であるという証拠はノヴゴロド才一年代記の中にはどこにもない．ヴアリヤギたちからルシが呼ばれたとあるノヴゴロド才一年代記の記事中，『何々から』≪от……生格≫という古代ロシア語は何を一体表現していたのであろう．

ロシアの最古の文献であるオストロミールの福音書は，その才十六章八節を≪отъшьдъша бѣжаша отъ гроба≫『棺より出でて逃走した』と訳している．即ち①отъとは，出発の場所を示す前置であつた．ところが，同じ福音書のヨハネ伝才一章十三節には≪Иже ни отъ крьви, ни отъ похоти……, нъ отъ Бога родишася≫『それらは血によりてでもなく，色欲によつてでもなく……神によつて生まれた』とある．だから，②発生の原因を示す前置であつたとも言えよう．また同じくルカ伝二十四章二十七節によれば，≪Начьнъ отъ Моусеа≫『モーゼをはじめとして』とあるから③事物や順序の始めを示したこともある．また同じくルカ伝二十四章十三節に≪Дъва отъ нихъ бѣста идяша……≫『彼等のうちの二人が行つた』とあり，④部分の出所を示す時もあり，≪отъ многыхъ лѣтъ≫『多くの年月の昔より』という古代ロシア語に流布した言葉から見られるように⑤時の指定にも用いられ，『過ぎし年月の物語』の911年の項にみられるように，≪Послани отъ Олга великаго князя Рускаго≫『ルシの大公オレグから派遣されたものたち』とあるように⑤現代語なら造格のみを以て示されるような，『なんによつて……何々される』という受動形表現の折の根元者を表す前置詞でもあつた．だから此処から発展して⑦原因や理由を表す時にも用いられることもあつた．その他，отъという前置詞の詳しい分類をあげればきりがないであろう．スレズネフスキーは，これらを十一ほどに分類していたのである．そのうち，⑥として挙げた読み方の場合には，ノヴゴロド才一年代記は，『ヴアリヤギたちによつて（ノヴゴロドその他の地が）

ルシと呼ばれた』と解釈し得るし，⑦として挙げた読み方の場合には『ヴアリヤギたち（がルシであつた）から（それが原因になつて）ルシという名が起つた』と読めるであろう．だからノヴゴロド第一年代記に反映していた古い伝承をネストルが⑦として挙げた読み方をした結果が『過ぎし年月の物語』の記事であつたとは言えるであろうが，それ以上に深く進んで，ヴアリヤギが本当にルシであつたのか，或は，ヴアリヤギがロシアに来てからその地をルシと呼びはじめたのか，その辺の決定までを，ロシアの文献で実施しようというのは，根本的に無謀な話である．たゞ重要なことは，『過ぎし年月の物語』がヴアリヤギ招へいに関する記事として，ネストルの主観的な読み方，或は受け取り方を伝えているということであつて，伝承そのものへの理解の仕方は，その他にも数多く考えられるということなのである．『過ぎし年月の物語』の記事の内容が，伝承に立脚し，なお，その伝承の解釈の一つだけを示しているものであることを忘れてはなるまい．この様なものを唯一重大な資料と見立てゝ，ルシに関する歴史的な事実追求の理論構成をなそうというには，最初から，たよるべきこの文献は余りに不安定である．最近見出された古いウステュグ年代記もまた『過ぎし年月の物語』よりも古い内容を反映しているが，実は其処にも，ノヴゴロド第一年代記とほとんど同じような記事がある．そして，やはり，素直に読むとすれば，招へいされて来着したヴアリヤギたちが，ロシアの地をルシと呼んだと解すべきであるように思われる．（『古代ロシア研究』第五号；p．90～p．91参照）．ルシとヴアリヤギの等式が成立するか否かの問題よりも，実際は，ネストルが何故，等式の成立するような受け取り方なり理解の仕方なりを『過ぎし年月の物語』に書きとゞめたかということの方が，比較にならないほど重要な問題であろう．大体，ノアの息子が三人，キエフの町の創立者キーの兄弟が三人，来着したヴアリヤギの兄弟が三人というような，完全な伝承の中に歴史事実の反

映を筆者は真面目に求めようなどとは思わない．それよりも，ネストルがその伝承を何故『過ぎし年月の物語』のような形に組み替えたかという問題の方が面白いであろう．

ネストルがこの『過ぎし年月の物語』を最終的に書きあげようとした時代は，前述したように，外敵におびえ，しかも公たちが内紛に明け暮れた時代であつたことを想起しよう．彼の国家的・政治的関心や，支配層への注文が，内紛停止による統一国家をめざし，ポロヴエツ撃退にあつたことは言うまでもない．この様な時代に，この様な意図で書きあげられたのが『過ぎし年月の物語』であつたとすれば，おのずから，ネストルによるヴアリヤギ招へいの説話の書き取りの意味もその意図の線上で考えられなければなるまい．国土は大きく，且つ豊かであるが其処には秩序がない．正義がない．だから，人々が相談して，秩序をもたらし，正義によつて政治をおこなう公を探し求めて，それに適する者たちを招いたという説話の意味をネストルは重要だと考えたのである．相互に相対立しながら，それぞれに内紛を繰り返していた時に，正しく国を統一するためにこそ招かれたものが初代の公であつたのだということを，この説話から，ネストルは当時の公たちに進言したかつた．その初代の公の民族的な出身などは，当面の問題ではなかつた．即ち，公がロシアに公としてあるのは，そもそもの国のはじめから，相互対立と秩序の乱れを正すためのものであり，人々がその手段として招へいしたものにすぎないことをネストルは言いたかつたのであろう．しかも，招かれた初代の公（リユリク）が三人兄弟でロシアに招かれて来て，それぞれ各地の公になつたという物語は，この点，一層便利であつた．即ち，内紛をくり返し，外敵に統一抗争しない当時の公たちに向つて，そもそもの公たちのはじまりは，仲良き兄弟であつたことを示したのである．もしもこの伝承がノヴゴロドの伝承であつたとすれば，なおさら，面白い．ノヴゴロドには古くから民会があつた．そして，

公たちは常に民会によつて選ばれ，支持され，或は迎えられた．しかも，このしきたりは，『過ぎし年月の物語』完成以後にも形をかえて伝えられ，例えば，後のアレクサンドル・ネフスキー公なども，その手腕を期待されて招かれた君主なのであつた．だから，この伝承は，当時の仲間割れする公たちに向つての絶好の教訓素材であつた．国のはじまりの物語として一層教訓的比重を増したことであろう．ネストルはそれを期待していた．しかも，招かれて来た初代の公たちが，来着した国の名をルシと呼んだとはせずに，公たち自身がルシであつたとした方が，当時の公たちに，より重き国家責任の意識をになわし得たと思われる．思えば，ネストルのこの伝承組替え手段の鮮やかさは，心憎いばかりであると言わなければならない．然も，ネストルがこの様に組み替えて書きとめた伝承には，なお，もう一つの目的が彼によつて重ねられていた．ネストル当時，たとえ，国家及び中心的支配層の出身がノルマンであつて，はえぬきのスラヴではないとしたところで，既に，もう，それが，どれほどの波紋をも投げるような事態は起さなかつた．当時のロシア国家はポロヴエツという外敵を受けて苦労してはいたが，北方ノルマンから危害を受けるような心配を人々はしていなかつた．ロシアの当時の精神的支柱や傾斜はビザンチンであつた．人々の心の傾きは，北方ノルマンではなくて，南方ビザンチンであつた．と同時に，ビザンチンは宗教と共に政治の面でも，ロシアに対しておのれの風下に立つべきことを要求する態度であつた．ビザンチンの側からすれば，ロシアの国は自己の配下であつた．ロシアの君主である公は，ビザンチンに本山をもつ教会によつて正当化されなければならない以上，ロシアの国家的支配権力とは，ビザンチンの側からロシアに与えてやつたものなのであつた．まして年代記者の属する修道院にあつては，その力と階位の関係は総てビザンチンから出ていた．ところが面白いことに，ペチエルスキー修道院は一般の教会とは少し異つて，

特にビザンチンの代弁者の如きキエフの府主教には対立していた．ロシアの公たちの出所がビザンチンであるとは口がまがつても言いたくなかつた．ロシアがビザンチンから出たものの如く振舞う態度への最も有効な反対手段は，公たちの出身をビザンチンでもなく，当のロシアでもなくて，ノルマンのヴアリヤギであるとする説話こそ，最もうつてつけであつた．ロシアの出所が南方のビザンチンではなくて，北方のノルマンであるという，キリスト教摂取以前の物語は，本来，ロシアはビザンチンから独立的なものであつたことを説くためにも，実に有効であつたであろう．ネストル当時に，支配的上層権力者たちが，自己の民族出身ではなくて，他民族の出身であるとする説は，中世のどの世界でもありふれた現象であつた．別に民族の恥でもなく，むしろ，かけはなれた民族からの出身者であるとする説ほど，却つて，当時にとつては有効で面白かつたかも知れない．物事は自己民族内での自然的発生によるとするよりも，別世界から持ち来たられた現象であるとする方が，より一層あがめられ，重んぜられた．中世の一般的風調であつたにすぎない．その風調を利用しつゝ，ビザンチンからの精神的独立の主張と，公たちへの教訓的注文とを三重にかさねて，ネストルは古い伝承を組み替えつゝ此処にうまく利用したのであつた．だから，ヴアリヤギとルシとを等式で結べるような記事を書いているのは，ネストル及びその文章の写し手たちだけであつて，多くの古い年代記では，むしろ，明らかにヴアリヤギとルシとは別物であることが示されている．例えば，『過ぎし年月の物語』よりも古い最初の年代記的文集を反映していると思われるソフイヤ第一年代記の6551(1043)年の項と，ネストルの『過ぎし年月の物語』の同年の項とを比較してみるがよい．ネストルが，ヴアリヤギとルシの等式を成立させるような記事を冒頭の所に書き出したために，本来，ソフイヤ第一年代記に見られるように書かれていた記事を，つじつまを合

わせるために，ネストルが『過ぎし年月の物語』の中では，どれほど省略して避けて通らなければならなくなつたことか．特に次に引用するソフイヤ才一年代記の下線の部分に注意して，それと『過ぎし年月の物語』の同一個所とを比較してみたい．

В лето 6551.

Паки на весну посла великый князь Ярослав сына своего Володимера на Грекы, дав ему воя многы, Варягы, Русь, и воеводьство поручи Вышате, Яневу отцю. И поиде Володимер на Царьград в лодиях, и прошедше пороги, и приидоша к Дунаю. Рекоша Русь Володимер: "станем зде на поли"; а Варязи ркоша: "поидем в лодиях под город". И послуша Володимер Варяг, и от Дуная поиде Володимер к Царюграду с вои в лодиях.

『6551(1043)年．

再び春に向つて，ヤロスラフ大公はおのれの息子ヴオロジメルをグレキに派遣した．彼に多くの軍勢，ヴアリヤギとルシを与え，軍司令官職をヤンの父ヴイシヤタに委任した．しかしてヴオロジメルは船でツアリグラドに向つた．しかして浅瀬を越え，ドナイに(人々は)到着した．ルシがヴオロジメルに言つた．〃此処の野にとゞまろう〃と．ところがヴアリヤギが言つた．〃船で町の近くまで進もう〃と．しかしてヴオロジメルはヴアリヤギの言うことを聞いた．しかしてドナイからヴオロジメルは船に軍勢をのせてツアリグラドへ出かけた』．

ソフイヤ才一年代記では明らかにルシとヴアリヤギは別物であり，むしろ，対立的でさえある．ネストルはヴアリヤギ招へいの物語の折にヴアリヤギとルシとの間に等式を成立させるような組み替え記事を書いたものだから，ソフイヤ才一年代記のこの部分に当る記事を『過ぎし年月の物語』において取り扱う時に，非常に

困つたことであろう．そのために，ネストルは，『過ぎし年月の物語』の中では，その困る部分だけ避けて通らざるを得なかつた．その結果，この部分を削除して，次の様な記事に仕立ててしまつたのである．（ラヴレンチー年代記による）．

В лето 6551.
Посла Ярослав сына своего Володимера на Грекы,
и вда ему вой мног, а воеводьство поручи Вышате,
отцю Яневу. И пойде Володимер в лодьях, и при-
доша в Дунай, поидоша Царюграду;

『6551(1043)年．
ヤロスラフはおのれの息子ヴオロジメルをグレキに派遣した．しかして彼に多くの軍勢を与え，ヤンの父，ヴイシヤタに軍司令官職を委任した．しかしてヴオロジメルは船に乗つて出かけた．（人々は）ドナイに到着し，しかしてツアリゴロドに向つた』．

何人かの手によつて加筆され編集し直されたために『過ぎし年月の物語』の中には，前後の相矛盾する記述があつたことを幾度か指摘して前述してきた．ところが，この6551年の項は冒頭のヴアリヤギ招へいの記事とは一向に矛盾しないように造り変えられているのである．如何にネストルが，ヴアリヤギ招へいの物語の組み替えに力を入れたかゞ，此処から逆に推察され得るであろう．

この様にして，ヴアリヤギ招へいの記事を終つたネストルは，ハマルトルスの年代記を下敷にし，またより古い年代記集をもとにして適当にロシアの伝承とつぢつまを合わせて，アスコルドとジルの物語を書きしるすのである．ロシアの地からのツアリグラド遠征の物語は，ビザンチンの文献（ハマルトルスの年代記）の記事を符合させながら，多くの伝承を彼は組み込んでいつたのである．例えばアスコルドとジルの記事に就ては面白い組変えがみとめられるノヴゴロド第一年代記によれば，ヴアリヤギ招へいの記事の直後に次

の様な一節がある．

По двою же лету умре Синеус и брат его трувор, и прия власть един Рюрик, обою брату власть, и нача владети един. И роди сын, и нарече имя ему Игорь. И възрастъшю же ему, Игорю, и бысть храбор и мудр. И бысть у него воевода, именем Олег, муж мудр и храбор. И начаста воевати, и налезоста Днепрь реку и Смолнеск град. И оттоле поидоша вниз по Днепру, и приидоша к горам, и приидоша к горам кыевъскым, и узреста город Кыев, и испыташа, кто в нем княжить; и реша: "два брата, Асколд и Дир". Игорь же и Олег, вторящася мимоидуща, и потаистася в лодьях, и с малою дружиною излезоста на брег, творящася подугорьскыми гостьми, и съзваста Асколда и Дира. Слезъшима же има, выскакаша прочии воины з лодеи, Игоревы, на брег; и рече Игорь ко Асколду: "вы неста князя, ни роду княжа, нь аз есмь князь, и мне достоить княжити". И убиша Асколда и Дира; и абие несъше на гору, и погребоша и Асколда на горе, еже ся ныне Угорьское наричеть, идеже есть двор Олмин; на тои могыле постави Олма церковь святого Николу, а Дирева могыла за святого Ириною. И седе Игорь, княжа, в Кыеве; .....

『ところで二年の後にシネウスが死んだ．しかして彼の弟トルヴォルも．しかしてリユリクは支配権，即ち二人の弟の支配権を一人で授つた．しかして一人で支配しはじめた．しかして息子を生んで彼の名をイゴリと名づけた．彼即ちイゴリが成人した時，（彼は）勇敢で賢かつた．しかして彼にはその名をオレグとい

う軍司令官がいた．賢こくて勇敢な男であつた．（イゴリとオレグの）二人は征伐をはじめ，ドネプル河及びスモレンスクの町を手に入れた．しかしてこゝから（人々は）ドネプルを下つて進み，キエフの山についた．しかして（二人は）キエフの町を見て，誰がその中で公としてあるかをたづねた．しかして（人々は）をつた．〃二人の兄弟アスコルドとジルである〃と．そこで，イゴリ及びオレグは通り抜けていく恰好をし，しかして船の中にかくれた．しかして少数の親兵団と共に岸にあがり，ウゴルの国の近くに住んでいる商人のような恰好をしてアスコルドとジルを呼んだ．ところで（アスコルドとジルの）二人が（山の上の町から）下りて来たとき，イゴリの他の戦士たちが船から岸へとび出した．しかしてイゴリはアスコルドに向つて言つた．〃汝等は公ではない．公の一族でもない．然らずして我が公である．しかして公としてあるのは我にこそふさわしい〃と．しかして，アスコルド及びジルを（人々は）殺した．しかして，直ちに，山の上に運び，現在ウゴルと呼ばれている山の上にアスコルドを埋めた．其処には（今）オルマの家敷がある．その墓の上にオルマが聖ニコラ教会を建てたのである．しかしてジルの墓は聖イリナ（教会）の裏にある．しかしてイゴリはキエフに坐して君臨した』

この一節が非常に古い叙事詩の一節であつたのは，例えば，イゴリを『勇敢』≪храбор≫で『賢い』≪мудр≫とし，その軍司令官オレグを同じ形容詞で以て，たゞ，その順序を変えただけで，同じように賢くて勇敢であつたとした個所からだけでも推察されるところである．特に，一時は横を向いて通り抜けるような恰好をしながら，船にかくれ，飛び出して交易商人≪гость≫といつわつて，だまし打ちにするという物語のテーマは，現在もなお，プイリーナの各所に反映しているところである．勿論，これが叙事詩であつたとすれば，その伝承地はキエフではなくて，ノヴゴロドであつたはずである．

ところが，このノヴゴロド第一年代記の記事の少し前にイゴリとオレグに殺されたアスコルドとジルの出身由来を書きとめているのである．

И по сих, братии тои, приидоста два Варяга и нарекостася князема; одиному бе имя Асколд, а другому Дир; и беста княжаща в Киеве, и владеюща Полями; и беша ратнии с Древляны и с Улици.

『（キエフの町の創設者キーの三人兄弟を指して），この者たち，この兄弟の後に，二人のヴァリヤギが（キエフに）来たり，（二人の）公と言われた．一人の名はアスコルドで，もう一人の（名）はジルであつた．（二人は）キエフに公として君臨していた．しかしてポリヤネを支配していた．しかしてドレヴリヤネ及びウリツイと抗戦していた』．

先づ，この部分を『過ぎし年月の物語』はより詳しく解説的に補足記入するのである．年はノヴゴロド第一年代記の方がそのことごとくを6362(854)年とするのに対して，こちらは，実に詳しく6370(862)年から6374(866)年の四年間にひきのばしている．このノヴゴロド第一年代記のこの項の年号と『過ぎし年月の物語』のこの項の年号との十年の差額は，面白い問題を含んでいるであろう．それはともあれ，『過ぎし年月の物語』ではラヴレンチー年代記によれば次の様な記事になつている．ギリシア遠征の主人公にまで育てゝいる所が面白い．

..... и теми всеми обладаша Рюрик. И бяста у него 2 мужа, не племени его, но боярина, и та испросистася ко Царюгороду с родом своим. И подоста по Днепру, и идуче мимо, и узреста на горе градок и упращаста, реста: "Чий се градок?" Они же реша: "была суть 3 братья, Кий, Щек, Хорив, иже сделаша градок ось, и изгибоша, и мы седим

платяче дань родом их Козаром. Асколд же и Дир остаста в граде сем, и многи Варяги скуписта, и начаста владети Польскою землею. Рюрику же княжащу в Новегороде,.....

.....

..... иде Асколд и Дир на Греки, и придоша в 14 лето Михаила царя.

この古代ロシア文の日本語訳は既に先に記しておいたので此処では省略しよう．一読して実に奇妙なことに気づくであろう．ノヴゴロドからアスコルドとジルがドネプル河を下つてキエフに着いた．実はその目的はギリシア遠征なのであつた．途中，キエフを見て二人は人々に向つて誰の町かと尋ねているのである．ドネプルを下る途中で見つけたキエフの町について，ノヴゴロド才一年代記ではイゴリとオレグが同じ条件で同じことを尋ねていたではないか．このあたりは，切紙細工の様に編集された明白な跡である．だから，本当にアスコルドとジルがイゴリに殺される記事（『過ぎし年月の物語』の）では，イゴリは，決して，これは一体誰の町か，公は誰かなどとたづねていない．二度も同じ場面を設定するのは気がひけたのであろう．ノヴゴロドのリユリクの家臣であつたと言うアスコルドとジルが，リユリクの許しをえてギリシア遠征に行く途中に，ふと見出したキエフの町を占領して，自己のものにしたのが本当なら，そしてまた，ミハイル帝の時代にビザンチンに遠征したのが本当なら，その十六年後，即ち6390（882）年に，リユリクの息子イゴリとオレグが，再びドネプルを下降してキエフを見つけた時，この町は何者の物なのかと尋ねるのはいかにも不自然である．だから，『過ぎし年月の物語』ではその個所を前に持ち出して此処では省略してしまつた．勿論，それほど気をつけて，つぢつまを合わせたにしても，やはり，だまし打ちにして殺すくだりは不自然さをまぬがれないであろう．アスコ

ルドとジルにまつわる伝承がノヴゴロドとキエフとのどちらか一方にだけあつたと考えるのは合理的ではないであろう．或は，その伝承物語がバリアントのない唯一のものであつたと考えるのも合理的ではない．伝承物語をどの様にこね上げて，もつともらしい歴史記録めいた書きものにまとめあげるかについては，時代的にも，或はノヴゴロドとキエフという地理的な意味でも，また，ノヴゴロドとキエフの町及び修道院の性格の差の点からも，それぞれにちがつて来たであろう．アスコルドとジルのギリシア遠征などノヴゴロド才一年代記には無かつた．ではそのノヴゴロド才一年代記が書きとめていたアスコルド・ジル殺害の記事は『過ぎし年月の物語』ではどう変つているであろう．ラヴレンチー年代記をはじめとするトロイツキー，イパーチー，ヴオスクレセンスキー各年代記等々には大体同文で次の様にある．（ノヴゴロド才一年代記では軍司令官であつたオレグが此処では幼き公イゴリを押しのけて表面に出ているところが面白い．これもまた実は，その素材が本来は伝承的なものであつたことを意味しているであろう）．

Поиде Олег, поим воя многи, Варяги, Чюдь, Словени, Мерю, Весь, Кривичи, и приде к Смоленьску с Кривичи, и прия град, и посади мужь свой. Оттуда поиде вниз, и взя Любець, и посади мужь свой. Придоста к горам к Киевьским, и увиде Олег, яко Осколд и Дир княжита, похорони вои в лодьях, а другия назади остави, а сам приде нося Игоря детьска. И приплу под Угорьское, похоронив вои своя, и присла ко Асколду и Дирови, глаголя: "яко гость есмь, идем в Греки от Олга и от Игоря княжича; да придета к нам к родом своим". Асколд же и Дир придоста; выскакав же вси прочии из лодья, и рече Олег Асколду и Дирови: "вы неста князя, ни рода княжа, но аз есмь роду княжа",

вынесоша Игоря, "и се есть сын Рюриков". И убиша Асколд и Дира, несоша на гору, и погребоша и на горе, еже ся ныне зоветь Угорьское, где ныне Олъмин двор; на той могиле поставил Олъма церковь святаго Николу, а Дирова могила за святою Ориною. Седе Олег в Киеве.....

『6390(882)年．オレグが多くの軍勢，ヴァリヤギ，チュジ，スロヴエネ，メリヤ，ヴエシ，クリヴイチをひきつれて出発し，クリヴイチと共にスモレンスクに到着した．しかして町を手に入れ，おのれの家臣を据えた．そこから下流へ進み，リュベツイを奪い，おのれの家臣を据えた．（二人は）キエフの山に到着し，オレグはアスコルドとジルが君臨しているのを見て，船の中に軍勢をかくし，他のものを後に残し，自分は幼少のイゴリをかゝえて到着した．しかしておのれの軍勢をかくしてウゴリスコエ（山）のふもとにこぎつけた．しかして，アスコルドとジルに使者をつかわして言つた．〃（我々は）商人であるから，オレグと公子イゴリのもとからグレキに行く途中である．おのれの氏族なる我々のもとに来たれ〃と．そこで，アスコルドとジルが来たつた．すべての他のものたちは船からとび出し，しかして，オレグはアスコルドとジルに言つた．〃汝ら（二人）は公ではない，公一族でもない．しからずして，我こそが公の一族である〃と．イゴリをさし出して〃これこそリュリクの子である〃（と言つた）．しかして（人々は）アスコルドとジルを殺し，山へ運び，彼ら（二人を）山に埋めた．それは現在ウゴリスコエと呼ばれ，そこには現在オルマの家敷がある．その墓の上にオルマが聖ニコラの教会を建てたのである．ところで，ジルの墓は聖オリナ（教会）の裏にある．オレグはキエフに君臨しつゝ坐した』．

『過ぎし年月の物語』におけるアスコルドとジルの物語，ノヴ

ゴロド才一年代記における同じ物語 —— この二つの間の差を埋め継ぐ面白い年代記がある．ウスチユグ年代記である．ノヴゴロド才一年代記では，キエフの創設者キーたち三人兄弟の死後，アスコルド兄弟がヴアリヤギから来てキエフに坐して君臨したとある．そして，そのことは，ヴアリヤギ招へいよりも先の出来事として記述されていた．ところが『過ぎし年月の物語』では，ヴアリヤギ招へい後の出来事として記述され，且つ，アスコルド兄弟はリユリクの家臣であつて，グレキ遠征をリユリクに願い出て，遠征途中にキエフに立ちより，遂にキエフの公として坐してしまつたという物語になつている．ところが，ウスチユグ年代記では，この中間を取りあげて，ヴアリヤギ招へいの際にアスコルド兄弟がリユリクたちと共にロシアにやつて来たことになつている．然もリユリクが家臣にロシアの町々を分け与える際に，その贈与を受けられなかつた二人は，その埋め合わせの如くにビザンチン遠征の許しを得て，その遠征の途中キエフに坐してしまつたという内容になつている．最も伝承叙事詩らしい組み立てになつていて面白いのがこのウスチユグ年代記の記事である．然もこの年代記にはキーの三人兄弟が再び取りあげられ，物語としての起伏を多くしている．即ち，次の如くである．

И беста с ним пришли из варяг 2 человека: имя единому Аскольд, имя другому Дир; ни племени княжа, ни боярска, и не даст им Рюрик ни града, ни села. Асколд же и дир испросистася у Рюрика ко Царюграду итьти с родом своим и поидоша из Новаграда на днепр реку и по Днепру вниз мимо Смоленьск и не явистася в Смоленьску, зане град велик и мног людьми, и приплыста под горы Киевския и узреста на горе град мал и вопросиста ту сущих людеи: "чии есть градок сеи?" Они же реста

им: "были у нас зде 3 брата: Кии, Щок, Хорив да сестра их Лыбедь, иже зделаша град сеи и изомроша; мы же седим зде и даем дань козаром". Аскольд же Дир рекоста им: "и мы есмя князи варяжские", и седоста в городке том княжити, и многи варяги совокуписта, и начаша владети Полянскую землю и беша ратьми со древляны и со югрецы.

『彼（リユリク）と共にヴアリヤギから二人のものが到着した．一人の名はアスコルド，もう一人の名はジルといつた．公の一門ではなく，貴族の（一門）でもなく，そしてリユリクは彼らに町をも，村をも与えなかつた．そこでアスコルドとジルは自分の氏族と共にツアリグラドへおもむく許しをリユリクからえて，ノヴゴロドを出発し，ドネプル河に向い，ドネプルをくだりスモレンスクのそばを（過ぎ）たが，スモレンスクには入らなかつた．というのは，町は大きく，多くの人々がいたからである．そして，キエフの山の下までこぎよせ，山の上の小さな町を見て，そこにいた人たちに，〃この町はだれのものか〃とたづねた．そのものたちは彼らに言つた．〃我々の所にはキー，シチエク，ホリフという三人の兄弟と，その妹ルイベジがいた．彼らがこの町をつくり，死にたえた．我々はこゝに住みコザレに貢税を納めている〃と．そこでアスコルドとジルは〃われらこそヴアリヤギの公である〃と彼らに言つて，君臨するためにその町にとゞまり，多くのヴアリヤギを集め，ポリヤネの国を治めはじめ，ドレヴリヤネ及びユグレツイと戦をおこなつた』

そして，今度は，このアスコルドとジルが殺される物語のくだりも，ウスチユグ年代記は，その書き出しから，余りにも物語的である．特に，幼少のイゴリとオレグの進む途中での詳しい説明が面白い．軍勢を進めてキエフに到着した時に，イゴリとオレグは，キエフの町にアスコルド兄弟が君臨していることを聞き知つ

たと書かれているのが，ノヴゴロド第一年代記や『過ぎし年月の物語』である．ところが，ウスチユグ年代記によれば，ノヴゴロドを出発する時からキエフにアスコルド兄弟が君臨していることを知っていた．そして軍勢を進める目的の一つもアスコルド征伐なのであつた．それにもかゝわらず，キエフに到着したイゴリとオレグは，其処の人々に向つて『誰が君臨しているのか？』と尋ねた挙句に，それがアスコルド兄弟であることを知るという記事になつている．（『古代ロシア研究』第五号；p．95～p．98参照）．そして，もしプイリーナ的な物語の内容を思い起すとすれば，おそらくは，ウスチユグ年代記の記事が一番それに近いように思われるのである．アスコルド兄弟をうまくだまして殺す物語は大体三者ともよく似ているが，このだまし打ちのくだりで，非常に面白い内容を加えているのが，ニコン年代記である．軍勢を船にかくして，平和な商人だといつわり，アスコルド兄弟を町からおびき出すのに加えて，ニコン年代記では，もう一つ，病気だといつわつて相手を安心させている．即ち，

В лето 6389.
Олгово княжение.
Поиде Олег из Новагорода, поим с собою Игоря, и прииде к Смоленьску, и прия град, и посади в нем мужи свои. А оттуду поиде вниз по Днепру, и прииде к горам Киевским; и уведе Олег, яко Асколд и Дир княжита в Киеве. Игорь же и Олег творящася мимоидуща, потаистася в лодиах, и неким дружине своей повеле изыти на брег, сказав им дела тайная, а сам творящеся болезнуа, и ляже в лодии. И посла ко Асколду и Диру, глаголя: " гость есмь Подугорский, и иду в Греки от Олга князя и от Игоря княжича, и ныне в болезни есмь,

и имам много великаго и драгаго бисера и всякого узорочиа; еще же имам и усты ко устом речи глаголати ваша к вам, да без коснения приидите к нам". Пришедшим же им скоро в мале зело дружине, и в лодию влезшим видѣти болнаго гостя, и рече им: "аз есмь Олег князь, а се есть сын Рюриков Игорь княжичь". И в той час убиша Асколда и Дира, и несша их на гору, погребоша ю, еже ся ныне нарицаеть Угорьское, идеже есть двор Олмин; на той могиле постави Олма церковь святаго Николу, а Дирева могила за святою Ириною. И седе Олег княжа в Киеве.....

『6389(881)年.

オレグの統治.

オレグは自分にイゴリをともない，ノヴゴロドから出発し，しかして，スモレンスクに到着し町を手に入れた．しかしてその中におのれの家臣たちを封じた．ところで其処からドネプル（河）に沿つて下り行き，キエフの山に着いた．オレグは，アスコルドとジルがキエフに公として君臨しているのを知つた．イゴリは，しかしてオレグも通過する恰好をよそおつて船の中にかくれた．しかしておのれの一部の親兵団におのれのひそかなる仕事を伝えて岸へあがるように命じた．一方，自分は病気をよそおつて船の中に横たわつた．しかして，アスコルドとジルに使者をたてて言つた．〃（我は）ウゴリの近くの商人である．しかして公なるオレグ及び公の子なるイゴリから（派遣されて）グレキへ行く途中である．しかして今，（我は）病気であるが（我は）多くの大いなる，しかして高価なる真珠及びあらゆる装飾品をもつている．なおこの上は貴下に向つて直接口から口への会談をおこないたい．すみやかに我々のもとに来たれ〃と．ところで，間もなく非常に少数

の親兵団を組んで彼らがやつて来て，病気の商人を見ようと船の中へ入つたとき，（オレグは）彼らに言つた．〃我は公のオレグであり，これはリユリクの子の公子イゴリである〃と．しかしてたゞちにアスコルドとジルを殺し，彼らを山の上へ運んで埋めた．そこは現在ウゴルスコエと呼ばれている．其処にはオルマの家敷がある．その墓の上にオルマが聖ニコラ教会を建てたからである．ところでジルの墓は聖イリナ（教会）の裏にある．しかしてオレグはキエフに君臨しつゝ坐した……』

アスコルドとジルの物語がどれほど多くのバリアントをもつていた伝承であつたかがこれだけで充分判明することであろう．その伝承は各地に，また各時代において種々の色合いのちがいを持ち，生み，そして伝えられたことであろう．ネストルは単にそのバリアントの一部分を『過ぎし年月の物語』の中に編集して書き込んだものにすぎない．キーの兄弟，アスコルドの兄弟，そしてロシアに招かれたリユリクの一族たち，それらの伝承物語がロシアの中心的な種族 —— 例えばポリヤネ —— によつて，同一地域で起つたものであり，一連の歴史事実の反映であると強弁する証拠は何処にもない．それぞれの伝承が発生した時代も地域も，伝承したグループ或は社会的階層も多くは異つたものであつたことであろう．たゞその一部分が，幾層かに積み重ねられ，適当に省略編集されて『過ぎし年月の物語』の中に書きとめられたにすぎないであろう．勿論，キエフという町を中心にして，これらの物語が『過ぎし年月の物語』の中にとゞめられた以上，キエフという町の文化の古い層が既にその頃，もう二重・三重に重ねられていたかも知れない．キエフが考古学的な発掘によつて，もしも，幾層かの文化層の跡を示すとすれば，この問題はまた面白いであろう．別の角度から見るとき，ノヴゴロドの公が商人と称してキエフの権力者をおびき出したという物語から，既に，キエフではなくて，ノヴゴロドの方が高い交易

活動の町であつたという見方も成り立つであろう．しかし，それらの歴史事実の反映を求めるのが此処での目的ではない．6374(866)年の項にアスコルドとジルがビザンテンへ遠征したという記事があつたが，ハマルトルスの年代記にロシア軍の侵入を伝えている記事を利用して，それがアスコルド兄弟の仕業であつたという風につじつまを合わせたものである．としたら，アスコルドとジルは，オレグとイゴリによつて征伐される物語とは別に，一代の英雄であつたという伝承がネストル当時何処か別のところにあつたはずである．この様にヴアリヤギからリユリク一族がまねかれ，アスコルドとジルが殺されるまでの様々の伝承物語が様々に伝えられていたことであろう．そのことを最も有力に証明するのがニコン年代記である．其処には，ネストルが書き取つて題材以外にも，例えばヴアジム≪Вадим≫が殺される話まで含めて取りあげられているからである．ニコン年代記には6367年の項として，ヴアリヤギを招へいしようという相談の記事がみとめられ，6369年の項には招へいの折の使者の口上が書かれて，此処ではルシとヴアリヤギの等式が成立される．ところが，6389年の項で殺されるアスコルドとジルの物語よりも17年も以前の6372年の項では，アスコルドの息子が殺される記事があり，同時にヴアジムも殺されるのがこの同じ年だとされている．或はアスコルドの息子の名がヴアジムであつたというつもりなのだろうか？

В лето 6372.
Убиен бысть от Болгар Осколдов сын.
Того же лета оскорбишася Новгородци, глаголюще:
"яко быти нам рабом, и много зла всячески пострадати от Рюрика и от рода его". Того же лета
уби Рюрик Вадима храбраго, и иных многих изби
Новогородцев съветников его.

『6372(864)年．

オスコルドの息子がヴオルガレのために殺された．

この同じ年にノヴゴロドの人々がはづかしめを受けて言つた．〃リユリク及び彼の一族によつて我々は奴隷にされ，あらゆる多くの災いを受けなければならない〃と．その年に，リユリクは勇敢なるヴアジムを殺し，しかして，他の多くのノヴゴロド人である彼（ヴアジム）の相談相手たちを殺した』

この記事は，ノヴゴロド第一年代記にも，多くの年代記の『過ぎし年月の物語』にも見られないのである．ニコン年代記はつゞいて6373年の項にアスコルドとジルがポロチヤネを征伐して多くの悪をなしたと記し，6374年の項では二人のビザンチン遠征の消息を伝え，且つ6375年の項ではビザンチン遠征から戻つたアスコルド兄弟がキエフにとゞまつて多くのペチエネギを殺し，一方ノヴゴロドからは盛んにキエフへの逃亡者が増加したと伝えている．このことも，勿論『過ぎし年月の物語』は伝えていないのである．『過ぎし年月の物語』の該当部分というのは，いづれにしても，ネストルの主観的な編集によつて多くの伝承物語のほんの一部が記録されたものにすぎないことは推察されるであろう．

『過ぎし年月の物語』の6390(882)年の項の最後にみられるオレグの支配成就と安定もそれらの伝承の一つであつたと思われる．また，6411(903)年の項にみられるオリガという名の妻を迎える記事も，勿論，伝承によつたものであろう．プスコフから人々がオリガを連れて来たとあるのが面白い．先にあげた6415(907)年の項のオレグのビザンチン遠征は，最も鮮やかに伝えられた英雄伝承であつた．オレグの一度目の遠征とそれにつゞく二度目の遠征も，イゴリの死の記事もまたその様な伝承であつた．ネストルはそれらを年号に配列しつゝ如何にも歴史事実らしく見せるために，ハマルトルスの年代記及びその続編の訳本からの記事を織り込んだのである．何処からか新しく入手

したビザンチンとの条約文もその際に利用していた．『過ぎし年月の物語』全体を通じて見て，非常に多くの伝承物語が此処に織り込まれていたことは既に前述したが，その主要なものは，ほとんどネストルの手になつたものであると考えてもよいかも知れない．

オレグの支配権確立を示す『過ぎし年月の物語』（ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチー各年代記）の6390年の項とは，次の様な文章である．

Седе Олег княжа в Киеве и рече Олег: "се буди мати градом Руским". Беша у него Варязи и Словени, и прочи прозвашася Русью. Се же Олег нача городы ставити и устави дани Словеном, Кривичем и Мери; и уставн Варягом дань даяти от Новагорода гривен 300 на лето, мира деля, еже до смерти Ярославле даяше Варягом.

『オレグは君臨しつゝキエフに座した．しかしてオレグは言つた．〃（汝こそ）ルシの町々の母たれ〃と．彼のもとにはヴアリヤギとスロヴエニが居り，他のものはルシと呼ばれた．さて，オレグは町々を配置しはじめ，スロヴエネ，クリヴイチ，およびメリヤに対して貢税を定めた．しかしてヴアリヤギに貢税としてノヴゴロドから一年に三百グリヴナを，平和のために与えるよう定めた．これはヤロスラフの死に至るまで，ヴアリヤギに与えていたものである』

ちなみに，この文章でルシという言葉に注意してみると面白い．ネストルがヴアリヤギとルシの等式を成立させ，それ以後の年代記者たちがそれを何気なく踏襲していたが，その当のネストルが，この一節におけるルシをヴアリヤギ或はリユリク一派の連中とどのように関連させて考えていたのであろうか．それから，もう一つ，此処では，明らかに，キエフが全ロシアの主権的都市になり

，北方のノヴゴロドの権力を配下におさめたことになつていると考えられよう．としたら，少くともこの一節のもとになつた伝承は，ノヴゴロドではなくてキエフの伝承であつたということになる．そして，その主領は，ノヴゴロドに伝えられたと思われるリユリク一派の直系ではなくて，リユリクの幼少の子イゴリの軍司令官オレグという傍系的人物であつた．ノヴゴロドの伝承を直線的に引きのばして伝えているものではなくて，此処ではキエフの伝承を組め入れている．だから，反対にノヴゴロド才一年代記は，決して，オレグを主領としては登場させていないのである．即ちキエフに公として坐した人物はオレグではなくて，イゴリであつた．ノヴゴロド才一年代記では，だから6362(854)年の項の最終部分に，イゴリを主領とした次の様な類似記事がみとめられる．

И седе Игорь, княжа, в Кыеве; и беша у него Варязи мужи Словене, и оттоле прочии прозвашася Русью. Сеи же Игорь нача грады ставити, и дани устави Словеном и Варягом даяти, и Кривичем и Мерям дань даяти Варягом, а от Новагорода 300 гривен на лето мира деля, еже не дають.

『しかしてイゴリは君臨しつゝキエフに坐した．しかして彼のもとにはヴアリヤギ，家臣のスロヴエネがおり，それにより，他のものたちはルシと呼ばれた．ところで，このイゴリは町々を配置しはじめ，スロヴエネ及びヴアリヤギに貢税を納めるように定めた．クリヴイチもメリヤも，ヴアリヤギに貢税を納めるように(定めた)．ところで，ノヴゴロドからは平和のために一年に三百グリヴナを(納めるように定めた)．それを(ノヴゴロドの人々は)納めなかつた』

主領の名前だけが差し変つているだけのように見えながら，『過ぎし年月の物語』の記事との間には非常に大きな差がある

であろう．例えば，ルシと呼ばれた連中の内容，或はヴアリヤギと書かれているものの実体，そして，貢税を誰が誰に向つて納めるのかという内容等々である．種々の伝承を一つにまとめてネストルが『過ぎし年月の物語』の記事のような形にまとめたものだとしたら，その記事を唯一重要な手がかりとする歴史家は早計のそしりをまぬがれないであろう．ニコン年代記は『過ぎし年月の物語』の記事を踏襲し，ソフイヤ一年代記も同じ踏襲を見せながら，ネストルの取りあげ方を一層強く確認するかの如く，例えば，ルシの呼び名についても，『彼（オレグ）のもとには家臣のヴアリヤギ，スロヴエネがおり，しかして，それによつて他の者たちもまたルシと呼ばれた』≪и бѣша у него мужи Варязи, Словѣни, и оттолѣ прозвашася и прочии Русью≫となつている．

この様にネストルはその当時流布していた伝承の数々を集め，或は先人が既に利用していた伝承を再編集したのであつた．だから，それ以後の年代記者たちは，おおむね，ネストルの『過ぎし年月の物語』に準拠するようになつていつた．先人が集めたり利用したりした伝承ではなくて，ネストルが自分で当時の伝承を利用して書きつけた典型的なものを此処で求めるとしたら，それは，先に引用したことのある，6500(992)年の記事であろう．即ち，それはペレヤスラヴリという町の名の由来を物語る話であつた．ペチエネギとロシア軍が対立していた時，敵方からの提案によつて，一騎打ちをし，その勝負を以て全軍の勝負に置きかえようという物語である．ロシアのヴオロジメルが探し出した青年がペチエネギの偉丈夫を打ちまかせその名誉を祝してこの町の名が起つたという話である．これはネストルの手によつて6500(992)年のヴオロジメル公の記事のエピソードとして組み入れられているが，実は，はるかそれよりも以前，即ち84年も昔の6415(907)年の記事にペレヤスラヴリという町の名前が堂々と出

ているのである．然もその記事は，ネストルの勝手な文章ではなくて，明らかに彼が何処からか見つけ出して来たビザンチンとの条約文の写しの一節なのである．月決め糧目を受け取るべき町の出身者を先づキエフの人だとした後に，チエルニゴフ≪Чернигов≫の人と続き，三番目にペレヤスラヴリの出身者とあつて，つゞいて，その他の町々という文章がみとめられる．外国との条約文に既に出現している町の名が，それから84年も後になつて；ヴオロジメルの時代に始めて名づけられたのだというような，とんでもない話をネストルはやつてのけている．勿論，ペレヤスラヴリという町の名にちなんだ英雄一騎打ちの物語がネストル当時存在していたにはちがいない．そしてその伝承はおそらくペレヤスラヴリの地方そのものに伝えられていたものであろう．然し，その伝承がヴオロジメルという大公にちなんだものであつたかどうかは至つて疑問である．少くともネストルがその伝承をヴオロジメル大公の記事のエピソードに利用したことだけはたしかであろう．その際に，ヴアリヤギ招へいと，ルシの呼び名についての説話を書き取る折ほどの細心な関心深さをネストルが持たなかつたために，84年間も前に出現した町の名を忘れてしまつていた．とんでもない矛盾をおかしてしまつたものである．というよりも，ヴアリヤギ招へいとルシの呼び名の記事だけが余りにも細心に用心深く組み立てられたものであつて，その他の多くの記事は前後矛盾してもほとんどは不用心に見のがされて来たのであつた．

古い伝承や文献によらずに，ネストルが自分で経験し，自分で見聞し，或は事件の立ち合い人として，生の事件を直接自分の手で書き加えたと思われる部分に就て検討してみよう．勿論，それは，『過ぎし年月の物語』の終末近くの部分である．其処にはネストルの手になつたと思われる独特の一人称物語が少くとも三個はみとめられるであろう．即ち，6599(1091)年の項に

おけるフエオドシイの遺体を運び移す物語，6604(1096)年の項にあるペチエルスキー修道院へのポロヴエツの来襲の物語，6615(1107)年のスヴイヤトポルクの遠征の成功の物語である．この三者のうち最初の6599(1091)年の項の文章は先に引用しておいた．即ち，一人称で記者自身が直接顔を出す文章である．ノヴゴロド才一年代記は至つて手短かに『修道院長フエドシイを（人々が）ペチエラ（洞穴）から修道院へ運び移した』≪Пренесоша игумена Федосиа ис Печеры в манастырь≫という記事があるに過ぎない．それに対して，『過ぎし年月の物語』では，ノヴゴロド才一年代記にみられる図式的な一般記述法則を破つて，余りに詳細に事の次才を書きつゞつたのであつた．夜中，ひそかに洞穴の中のフエオドシイの棺を掘り起し，協力者とシヤベルを交互にふるい，つかれ果てゝ洞穴の前で寝込んでしまう．修道院で朝の拍子木が打たれるのに気づいた協力者がネストル（≪我≫──≪аз≫）にそれを告げた時，まさにその時に棺を掘りあてたとあるのである．そして，その時の神秘的なおそれをネストルは生々しく書き伝えていたのである．年代記の記述に際して，記者の主観は勿論度々其処に侵入していたことであろう．また，主観によつて多くの素材を整理編集することは当然であつたであろう．然し，記述文そのものは，至つて，図式的・公式的なものが多く，一人称で『我』として登場する記者が自己の心理的体験を生々しく語るのは，この記事において初めてであつた．その態度が，今度は『我』という単数形ではなくて，複数形の『我々』≪мы≫として顔を出すのが，6604(1096)年の項である．ノヴゴロド才一年代記にはこの年の項は全く空白なのである．『過ぎし年月の物語』はこの年の項に実に長い記事を納めている．その幾つかは既に引用したところであるが，ネストルの筆致が一人称でほとばしるところは，ペチエルスキー修道院へのポロヴエツ来襲の記事である．直接の体験でなければ書けない文章であり，同時に，年代記々述の公式を全く無

視した書き方でもある．即ち，其処には次の様な文章が読まれる．

И в 20 того же месяца, в пяток, приде второе Боняк безбожный, шелудивый, отдай, хыщник, к Кыеву внезапу, и мало в град не въехаша Половци, и зажгоша болонье около града, и възвратишася в манастырь, и въжгоша Стефанечь манастырь, и деревне, и Германечь. И придоша в манастырь Печерьскый, нам сущим по кельям почивающим по заутрени, и кликнуша около манастыря, и поставиша стяга два пред враты манастырьскыми, нам же бежащим за дом манастыря, а другим възбегшим на полати. Безбожные же сынове Измаилеви высекоша врата манастырю и поидоша по кельям, высекающе двери, и износяху аще что обретаху в келыи; посем въжгоша дом святыя Владычине нашея Богородице, и придоша к церкви, и зажгоша двери еже к угу устроении, и вторыя же к северу; влезше в притвор у гроба Феодосьева, емлюще иконы, зажигаху двери и укараху Бога и закон нашь. Бог же терпяше, еще бо не скончался бяху греси их и безаконья их; тем глаголаху: "кде есть Бог их? Да поможеть им и избавить я", и ина словеса хулная глаголаху на святыя иконы, насмихающеся, не ведуще, яко Бог кажеть рабы своя напастми ратными, да явятся яко злато искушено в горну: хрестьяном бо многыми скорбьми и напастьми внити в царство небесное, а сим поганым и ругателем на сем свете приимшим веселье и просторонство, а на оном свете приимуть муку с дьяволом, угото-

ваний огню вечному.....

『この同じ月〔六月〕の二十日，金曜日に，神を信ぜざる，いとうべき，肉食獣のポニヤクが，ひそかに，再度キエフに来襲した．ポロヴエツたちは，ほとんど町の中へ侵入せんばかりで，町のほとりの低地に火を放ち，修道院へ向つてとつて返し，スチエファンの修道院及び村々，及びゲルマンの〔修道院〕を焼き払つた．しかして，ペチエルスキー修道院へ攻め来たつた．我々が朝の勤行の後に各庵室で眠つていた時のことである．〔ポロヴエツたちは〕修道院の近くで叫び，修道院の門の前に二本の旗を立てた．我々は修道院の家のうしろへ逃げ，また別の人々は二階へ逃げあがつたのである．神を信じないイズマイルの子等は修道院の門を打ちこぼち，各庵室に散り入り，戸をこわし，しかして庵室において〔彼等が〕見つけたものがあれば〔それを〕ことごとく持ち出していた．その後，我々の神の母なる聖母の教会を焼き，しかして教会に来たり，南向きにつくられているとびら及び北向きの才二のとびらを焼いた．彼等は玄関のフエオドシイの棺のそばに侵入し，聖像を取りはづしてとびらを焼き神及び我々のおきてをそしつた．神が〔これを〕耐え給うたのは，いまだに，彼等の罪及び彼等の無法が終つていなかつたからである．そのとき〔ポロヴエツたちは〕言つたものである．〃どこにこの者どもの神がいるのか？この者どもを助け，この者どもを許してやればよいのに〃と．しかしてまた別の悪しき言葉を聖像に向つて語り，あざけり笑つていた．〔彼等は〕神がおのれの奴隷たちを戦争の災厄によつて罰し給うていることを知らなかつたからである．〔人々が〕炉の中で試された黄金のようになるためなのである．キリスト教徒は多くの悲嘆や攻撃を経てはじめて天なる王国に入ることができるからである．ところで，これらの異教徒たち及び侮辱者たちはこの世では喜びと満足が手に入つていても，あの世では

悪魔と共に苦しみを受け，永遠の業火にやかれる運命なのである．……』

この一節をいかに，年代記の当然の記事のように見せようとしても，それが，およそ，年代記には不向きな個人的な文章であることを，ニコン年代記は見抜いていたのであろう．ニコン年代記にはボニヤクのキエフ来襲を伝える公式的な記録文章があるのみで，この文章はその影だに投影していない．ソフイヤ才一年代記にも一言葉もそれらしい文章は書かれていない．

ネストルのこの様な個人的体験や見聞による記事は『過ぎし年月の物語』の終る6618(1110)年の項を最後としそれ以前の数年間の記事が，おそらく，全部それに当ると考えてよいであろう．たゞ，その終末近くの文章はその後数年して修道院長セリヴエストルによつて，もう一度，書き直されているから，本当にネストルの手になつたまゝの文章が現在に伝えられているかどうかは分らない．ノヴゴロド才一年代記，ソフイヤ才一年代記，或はプスコフ才一年代記その他多くの年代記と比較して見て，ラヴレンチー，トロイツキー，イパーチー各年代記の『過ぎし年月の物語』の記事の相違点を求めれば，ネストルの筆になつた部分は或程度まで明らかになるはずである．それらについての一々の検討は，もう此処では省略しよう．

ネストルという人物が多くの伝承を聞き知つて，それらを数多く『過ぎし年月の物語』の中に埋め込み，且つ，自己の体験や見聞をも書き込んだことは，彼の広汎な記述態度のもたらすものであつた．彼の記述態度が広かつたこと以上に，また，文献的にも非常に博学であつたと思われる．ハマルトルスの年代記及びその続編の古代語訳，多くの聖者伝，或は政治的文書，等々を充分に読みつくしていたことは，『過ぎし年月の物語』の記述態度にも充分うかゞい知ることができた．それらは今まで筆者が引用して来た数々の文章を通じても知ることができる．例

えば，ハマルトルスの年代記は812年まで，その続編は948年まで，またニキフォルの編集した編年記は828年まで書かれていたし，新ヴァシリイ≪Василий Новый≫伝はイゴリのビザンチン遠征の記事を含んでいたし，その他，数々のビザンチンから入つた文献の訳本を利用していたことであろう．それらについては，更めて『古代ロシア研究』誌に今後詳しく発表されて行くことであろう．そして，その際には，それらビザンチンからの文献に書かれている文章をネストルがどれほど祖国びいき，身びいきに着色したかも明らかにされることであろう．勿論，セプタギンタを中心とする聖書の文句は随所に引用されていた．

ともあれ，かくして，最終的にはネストルの手によつて，ほゞ現代，ラヴレンチー年代記などに伝わる『過ぎし年月の物語』の姿が固定されたと考えられる．それが如何に多くの素材と，如何に多くの年月とをかけて此処までの形に形成されて来たかという検討は，ほゞこれで終つてよいであろう．この様にして一応の固定化と完成を見た『過ぎし年月の物語』は，その後のロシアで眼もくらむほどに巨大な量の各種各様の年代記の手本になり，出発点になつていつたのである．そのことは，実に1826年に勅命による出版が始められて才一巻が出されてから，今日1965年に才三十巻が出されるまでの各年代記の巨大な量そのものに示されているところである．

—y—

『過ぎし年月の物語』の記事の中で，特に記録的な部分や物語的な部分のみに就て今まで検討を進めて来た．然し，『過ぎし年月の物語』は，その様な部分だけによつて埋めつくされているのではない．記録的な部分や物語的な部分の記述には，多くの場合，年代記者（たち）による解説・説明或は正当化の文章

が加えられていたのである．勿論，その解説的な文章が一人の人物の一貫した立場からなされたものでないことは，記録的な文章の場合と同様であつたであろう．然し，記録的な文章に比べて，解説的な文章は，より多く，或種の主観的な統一の立場へ向つてまとめられ勝ちである．言いかえれば十二世紀初頭におけるロシアのギリシア正教的世界観という統一的な一点から多くの事件は解説されたことであろう．例えば，年号を設定する以前の記事で『というのは，オブレ（人たち）は体が大きく，心が高慢であつた．しかして神は彼等を亡ぼし給い，ことごとくが死に絶えた』≪Быша бо Обърѣ тѣломъ велици и умомъ горди, и Богъ потреби я, помроша вси≫とある記事のうちで，少くとも，『神が彼等を亡ぼし給うた』≪Богъ потреби я≫は，記事としては余計な解説であつたかも知れない．心が高慢であつたことを踏まえての半ば教訓的な，半ばは当時の世界観から導かれる当然の説明的な文章であつたであろう．だから，ロシアに輸入され，やゝ定着しはじめた頃のギリシア正教の骨組みは，この様な解説的記事によつて探り出すことができるであろう．その骨組みの最も素朴なものは，多くの種族の風習を記録し終るに際して，『しかるに我々，あらゆる土地のキリスト教徒は……』≪Мы же християне, елико земль≫と大きく開き直つて，自分たちのことを述べる折に充分顕現していた．それは≪в святую Троицю, в едино крещенье, в едину вѣру≫『聖なる三位一体を，唯一の洗礼を，唯一の信仰を』信ずることであり，≪законъ имамы единъ≫『唯一のおきてをもつている』ことであつた．その骨組みが，多くの具体的な事件の記述の際にどう顕現していたかを，『過ぎし年月の物語』そのものの示す年号順にあとづけて見ることは無駄ではないであろう．というのは，我々は西欧のカソリック的精神土じょうをロシアには求め得ないし，ギリシア正教の鮮やかな跡は，もうロシアのこの

ような文献にしかないからである．然もそれがロシアの精神土じょうの最も重要な要素を成すものでありながら，全く無視されて来たからである，なおまた，その点を無視している限り，『過ぎし年月の物語』をはじめとする古代ロシア文学作品の精神構造は把握し難いと思われるからである．

6420年の項で『過ぎし年月の物語』はオレグの死を報じていた．占師の予言通り，オレグの愛した馬のために生命を落す物語である．そして，占やより術と神の信仰とのかみ合いの議論を，その直後に長々と書き加えていたのである．その両方の文章は，一方が伝承であり，他方は古い文献からの抜き書きであつたとして，既に引用しておいた．そして，6463年の項では，オリガの洗礼を受ける物語につゞいて，洗礼とは即ち悪魔から身を守るてだてであると主教に語らせ，本当の英知とは洗礼によつて生まれるものであることを長々と説くのであつた．オリガは息子スヴイヤトスラフに洗礼を受けることをすゝめたのであるがスヴイヤトスラフは母のすゝめに耳をかさない．年代記者はそのことを批判して次の様に書きとめているのである．洗礼を受け，英知をもち，そして悪魔をしりぞけた者の最初の理想像が此処にかいま見られるであろう．

Се же ктому гневашеся на матерь. Соломан бо рече: кажай злыя приемлеть собе досаженье, обличаяй нечестиваго проречеть собе; обличенья бо нечестивым мозолье суть; не обличай злых, да не възненавидять тебе. Но обаче любяше Ольга сына своего Святослава, рькущи: "воля божья да будеть, аще Бог хощеть помиловати рода моего и земле Русские, да възложить им на сердце обратитися к Богу якоже и мне Бог дарова". И се рекши, моляшеся сына и за люди по вся нощи и дни, кормящи с своего до мужьства его и до взраста его.

『なおその上に彼は母に腹を立てた．というのは，ソロマンは言つたからである．〃悪しきものを罰するものは，おのれに立腹をうけるであろう．心正しくないものを指弾するものは，おのれに侮辱をうけるであろう（箴言；才九章，七節・・・・筆者註）というのは，非難は心正しくないものにとつては苦しみであるからである．悪しきものを非難することなかれ．さすれば（彼らは）汝をにくまないであろう（箴言；才九章，八節・・・・筆者註）〃と．それにもかゝわらず，オリガは，おのれの息子スヴイヤトスラフを愛していたので言つた．〃神の意志のあらわれんことを．もし神が我が一族およびルシの国に恩ちようをたれ給うならば，我にも神がなし給うたように，彼らの心に神に向う（気持を）起させ給うであろう〃と．しかして，こう言つて，（オリガは）昼も夜もつゞけて息子と家臣のために祈り，おのれの息子を彼が成年に達し一人前になるまでやしなつた』．　此処には記者の主観を通じての，理想の，母親と統治者と，そして信者との三つの像が重ねられている．続く6477(969)年の項でオリガの死を報じ，ひきつゞいて書きあげたオリガ女帝への讃美の言葉も，またその様なものであつた．ところが，これと反対に，年代記者がきびしく非難して書きとめた文章がある．それは，6488(980)年の記事である．其処にはヴオロジメルがポロツクの公ログヴオロドの娘ログネジを妻にしようとして断わられる物語が書きとめられた．ログネジはヴオロジメルよりもヤロポルクの方へ心を傾けていたのであつた．ヴオロジメルはログネジの父や兄弟を殺し，強引に妻として，ヤロポルクに向つて進攻した．ヤロポルクはキエフにたてこもつた．ヴオロジメルはヤロポルクの軍司令ブルドに使者を送つて裏切りをすゝめるのであつた．ブルドは自分の公のヤロポルクを裏切つて，ヴオロジメルに味方し主人殺害に荷担するのである．年代記者は此処で，裏切りについて怒りをぶちまけるような感情的な記述をしたのである．『過ぎし年月の物語』全体

を通して，この個所ほどの激しい非難表明の文章は多くない．その文章がオリガ女帝への讃美の文章の，しばらく後に出現していることも見落せないであろう．讃美と批判，賞讃と非難の激しい文章の交替は，このあたりの記述に『過ぎし年月の物語』が非常に気を配り，力を注いでいることを証明するものである．オリガ女帝及びヴオロジメル大公の記述とは，実に，ロシアにキリスト教が受け入れられた最初の支配者の記述なのであつた．最も集約された強い力が此処にこめられたのも当然であろう．ところで，このブルドの主人裏切りについての非難的記述とは次の様なものである．

О злая лесть человечьска! Якоже давыд глаголеть: ядый хлеб мой възвеличил есть на мя лесть. Се бо лукавьствоваше на князя своего лестью. И паки: языки своими льстяхуся; суди ми, боже, да отпадуть от мыслий своих, по мнοжьству нечестья их изрини я, яко прогневаша тя, Господи. И паки то же рече давыд: мужь в крови льстив не припловить дний своих. Се есть съвет зол, иже свещевають на кровопролитье; то суть неистовии, иже приемше от князя или от господина своего честь, ли дары, ти мыслять о главе князя своего на погубленье, горьше суть бесов таковии: якоже блуд преда князя, и приим от него чьти многи, се бо бысть повинен крови той.

『おゝ，人間の悪しき偽まんよ！　ダヴイドが言つた如く，〃我がパンを食いし者が我に対して大いなる偽をなした，〃というのは，これはおのれの公に対して偽をもつてあざむいたからである．しかして，またさらに〃おのれの言葉で（彼は）あざむいた．神よ，彼らを裁き給え．（彼らをして）おのれの思いを捨てさせ

給え．なお，彼らの不信の多き故に，彼らを見捨て給え．主よ，汝を（彼らは）怒らせたが故に〃（―― 詩篇；五十四章；二十四節 ―― 筆者註）．しかして，さらに，ダヴイドは同じく言つた．〃血において偽まん的である男は，おのれの一生の半ばを全うしないであろう〃と．これは流血をたくらむ悪しき陰謀である．すなわち，おのれの公或は主人から栄誉或は贈物を受けながら，おのれの公の生命を奪うことをたくらむような連中は，残忍であり，そのような連中は悪魔よりも冷酷である．その如く，彼から多くの栄誉を受けながらブルドはおのれの公を裏切つた．この故に（流された）その血に対して彼（ブルド）は責められるべきであつた』．

ヴオロジメル公に就ての記事には，彼が，いまだキリスト教を採取しない以前の行状が数多く書き取られていて，例えば，キエフの岡の上にスラヴ原始宗教の主神ペルンをはじめ数多くの神像を建て，犠牲をさゝげていた様子が書きとめられている．そして年代記者は，その様な異教的な振舞いにもかゝわらず，神はヴオロジメルを罰し給わず，むしろ，大きな恩ちようによつて次の時代にはその岡の上にキリスト教の教会が建つように世情を導き給うたと述べるのである．『罪人に対しても至善なる神は死を望み給わず，その岡の上には現在教会が建つていて，後に述べるように，聖ヴアシリイ（教会）なのである』≪Но преблагий Богъ не хотя смерти грѣшникомъ; на том холмѣ нынѣ церкви стоить, святаго Василья есть, якоже последи скажемъ≫『過ぎし年月の物語』は引きつゞいてヴオロジメルが幾百人の妾たちをたくわえていたことを記述するが，其処ではじめて，女に就ての深い議論をはじめる．大体，『過ぎし年月の物語』は例えばオリガ女帝の記事に女性を登場させたものの，それはあくまで英雄としての女性であるにすぎなかつた．『物語』全体を通じて，女についての議論を書きしるしたのは，後にも先にもヴオロジメ

ル記事の中だけにおいてゞあつた．古いロシアのキリスト教採取直後の女性論の唯一のものであり，また，同時に，当時の宗教的感覚における女性観の唯一のものであつた．その記述は妾を数多くたくわえたヴオロジメルを同じく多くの妾をもつたソロモンに対比して書き終つた直後に出現する．ソロモンの箴言三十一章才十節から才三十二節までの言葉を盛んに織り込みながら，唯一の女性論を次の様に宗教的いましめを含みつゝ展開するのである．

Велий Господь, и велья крепость его, и разуму его несть конца! Зло бо есть женьская прелесть, якоже рече Соломан покаявся о женах: не вънимай зле жене; мед бо каплеть от уст ея, лены любодейци, во время наслажаеть твой гортань, последи же горчае золчи обрящуть; прилепляющеся ей смерть в ад; на пути бо животьныя не находить, блудная же теченья ея, неблагоразумна. Се же рече Соломан о прелюбодейцах, о добрых женах рече: драгъши есть каменья многоценьна; радуется о ней мужь ея, дееть бо мужеви своему благо все житье; обретши волну и лен, творить благопотребная рукама своима; владаеть яко корабль, куплюдеющи, и сбираеть особь богатьство; и въстав и от ноши, и даеть брашно дому и дела рабьням; видевши стяжанье куповаше, от дел руку своею насадить тяженье; препоясавши крепко чресла воя, и утверди мыщю свою на дело; и вкуси, яко добро есть делати, и не угасаеть светилник ея всю ноць; руце свои простираеть на полезьная, локъти своя устремляеть на вретено; руце свои простираеть

убогому, плод же простре нищему; не печется мужь ея о дому своем, егда где будеть вси свои ея одени будуть; сугуба оденья створить мужеви своему, очерьвлена и багряна собе оденья; взорен бываеть, во вратех мужь ея, внегда аще сядеть на сонмищи с старци и с жители земли; опоны створи и отдаеть в куплю; уста же свои отверзе смыслено, в чин молвить языкъм своим; в крепость и в лепоту облечеся; милостыня же ея въздвигоша чада ея и обогатиша, и мужь ея похвали ю; жена бо разумлива благословена есть, боязнь бо Господню да похвалить; дадите ей от плода устьну ея, да хвалять во вратех мужа ея.

『〃主は偉大であり，しかして，彼（主）の強さは偉大であり，その英知には限りがない〃ソロマンが女たちについて後悔して言つた如く，女のミ力は悪であるからである．〃悪い女に関心をよせるな．というのは彼女の，すなわち，いん乱な女の口からは蜜がしたたり，一時は汝の喉をよろこばせるが後程には苦いたん汁を（人々は）見出すであろうからである．彼女（いん乱な女）に身をまかすと，地獄への死がある．というのは，生きる道へふみ出さず，また，彼女のいん乱な生活は愚かであるからである〃．この様にソロマンは非常にいん乱な女たちについて言つた．良き妻たちについては（次の様に）言つた．〃（良き妻は）宝石よりも尊い．彼女の夫は彼女をよろこび（良き妻は）おのれの夫に全生涯を通じて幸をおこなうものである．毛と亜麻を手に入れて，おのれの手で有益なものをつくり出すものである．あきないをなす船をあやつる如く（家政を）なし，しかして，おのれのために富をあつめるものである．しかして，夜の明けぬうちに起き，しかして，家人に食物を，女奴隷たちには仕事を

与えるものである．〔自分の〕財産を考えて物を買い，おのれの両手の働きで畑に植付けをなすものである．おのれの胴には固く帯をつけ，しかして仕事に向つては，おのれの力をつくし，働くことは良いことだと感じ，彼女の灯を一夜中消さないのである．自分の手を有益なことに向けひろげ，おのれの両ひじを紡すいに向け，おのれの両手を貧しきものにさしのべ，果実を貧しきものに与えたのである．彼女の夫はおのれの家のことを心配しない．いつどこにあろうとも，彼女の家のものたちは皆，着せられてあるであろうから．彼女はおのれの夫に二倍の着物をつくり，自分は赤い衣服を〔つくる〕．もしも集会場でその土地の長老たちや住民たちと共に坐ることがあれば，彼女の夫は常に門の所にみられるものである．〔彼女は〕織物を造つて売り出す．おのれの言葉でしやべる時には，おのれの口を思慮深く開くのである．丈夫に，しかも美しくよそおつた．彼女の慈愛が彼女の子供たちをはげまして豊かにした．しかして，彼女の夫は彼女をほめた．というのは，賢い妻は祝福されているからである〔彼女は〕主へのおそれをほめたゝえるであろうから．〔汝ら〕彼女に彼女の口の果実を与えよ．門のところで彼女の夫はほめられるべし』

この文章を以て，年代記者は6488年の項の記事を終つているのだから，年代記者が此処に一つの大きな締めくくりと，特別な倫理教訓を示そうとしたことは充分推察し得るであろう．これに続く6489(981)年の項以下は再びヴオロジメルの軍事行動の記録なのである．そして，再び6494(986)年の項では，グレキの哲学者の論述という形で，世界創造からキリストまで，そしてキリストの宗教の本質までを長々と書きしるすのである．『過ぎし年月の物語』は何等かの事件に関して記録し，それを解説し或は説明し，時にはその事件にちなんで説教をすることが普通であつたが，ヴオロジメルのキリスト教摂取の記事においてだけは，ほとんど独立的に，バイブルの創世記以下の要約を書きとめているの

である．それは『過ぎし年月の物語』の記述の基本的姿勢を示すものであつたかも知れない．

さて，事件の記述に際しての解説的な文章に話をもどそう．

ヴオロジメルが，いまだスラヴ原始宗教の神に犠牲をさゝげていた頃に，ヴアリヤギ人の身も心も美しい青年がくじに当つて犠牲者にされたことがあつた．其処では，この身も心も美しい青年がくじに当つた理由を年代記者は次の様に解説していた．『この（青年の）上に，悪魔の羨望によつてくじが当つた．悪魔はすべての人々に対して権力をもつており，我慢がならず，このこと（身も心も美しい青年がいること）は悪魔にとつては心の中のいばらの如くであつた．呪われた悪魔は，（この青年を）なきものにしようとして，人々をそゝのかしたのである』≪на сего паде жребий по зависти дьяволи. Не терпяшеть бо дьявол, власть имы надо всеми, и се бяшеть ему аки тернъ въ сердци, тьщатеся потребити оканьный и наусти людн≫　この記事は6491（983）年の項に見られ，おそらくは，キリスト教徒としてのロシアでの最初のじゆん教者の物語であつたと思われるが，この様な悪魔を解説的素材にする記事は，6523（1015）年の記事の冒頭にも出て来る．即ち，ヴオロジメルが自分の言うことに従順でない息子ヤロスラフに向けて進攻しようとした際に，彼は重病におかされて，それを果さなかつたという記事がある．親が子に軍勢をすゝめる如きことは，悪魔のそそのかしであり，悪魔の喜こぶ所であると考えたに相違ない．年代記者は，病のためにそれを果さなかつたことを述べて，『しかし，神は悪魔に喜びを与え給わなかつた』≪но Богъ не вдасть дьяволу радости≫と述べたのである．

6568（1060）年の項にはロシアの公たちが協力してトルキ≪Торкы≫に進攻する記事があつた．ロシア軍に圧倒されて敗退するトルキたちを，半ば説明的に年代記は次の様な文章で伝えて

いる．『しかして神の怒りに追い立てられ，或者は冬のために，他のものは飢えのために，また別の者は病と神の裁きのために，逃去の途中で死んだ．かくの如く神はキリスト教徒を異教徒から解放し給うたのである』≪и помроша бѣгаючи, Божьимъ гнѣвомъ гонимы, ови отъ зимы, друзіи же гладомъ, инии же моромъ и судомъ Божьимъ. Тако Богъ избави хрестьяны отъ поганыхъ≫.

また，6581(1073)年の項にはヤロスラフの子等の間の内紛の記事が読まれるが，今度はその記事の終りの部分ではなくて，反対に冒頭に説明的文句が書かれ，『ヤロスラフのこの子等に悪魔は紛争をもちあげた』≪Въздвиже дьяволъ котору въ братьи сей Ярославичих≫とある．おそらくは，この項のこの部分の加筆者が他の項の書き手とは異つていたために，冒頭にこんな文句を入れたのであつたろう．神と悪魔を素朴に対置した説明的記述はこの後にも数多く見られるところである．悪魔にそゝのかされたという説明を避ける折には，自主的な悪業と見立てゝ，その者は神の前に責任を負うべきものであるとしるされるのであつた．例えば，6586(1078)年の項には，七月二十三日と，八月二十五日の二つの出来事の記事がみられ，続いて，オレグとボリスがチエルニゴフに来て民衆に悪業をふるつたという記事がある．そして其処では次の様に厳しい裁きの言葉が書きつゞられるのである．『オレグは，そしてボリスもチエルニゴフに来たつた．(おのれ達が)勝利を得たと考えて，ルシの地に多くの悪をなし，キリスト教徒の血を流した．この血のつぐないを神が彼等の手から取り給うであろう．しかして，キリスト教徒のほろぼされたる魂に対する責任を彼等は負わなければならないであろう』≪Олегъ же и Борисъ придоста Чернигову, мняще одолѣвше, а землѣ Русьскей много зло створше, про ливше кровь хрестьяньску, ея же кровь взищеть Богъ отъ руку ею, и отвѣтъ дати има

за погубленье душа хрестьяньскы ≫. そしてその神とは，『傲慢なるものには逆らい給い，温順なる者には助力を送り給う』≪Богъ гордымъ противится, смѣренымъ даеть благодать≫（同年項）なのであつた．そして，この年の項には，年代記者が理想と考えた人間像を書きつけたのである．自からは多くの悪を人から受けながら，その悪に悪を以てむくいることをしなかつたイジヤスラフ公への賞讃を以て，次の様に，この年の記事をしめくくつたのである．『過ぎし年月の物語』の主張の最大のものの一つであつたと思われる．

Бе же Изяслав муж взором красен и телом велик, незлобив нравом, криваго ненавиде, любя правду; не бе бо в нем лсти, но прост муж умом, не вздая зла за зло. Колико бо ему створиша Кияне! Самого выгнаша, а дом его разграбиша, и не взда противу тому зла; аще ли кто деет: "высечець исече", то не сь то створи, но сын его. Пакы же брата его прогнаста и, и ходи по чюжей земли, блудя; и седящю ему пакы на столе своем, Всеволоду пришедшю побежену к нему, не рече ему: "колико отваю приях? не вдасть зла за зло, но утеши, рек: "елма же ты, брате мой, показа ко мне любовь, введе мя на стол мой и нарек мя старейшину собе, се аз не помяну злобы первыя, ты ми еси брат, а я тобе, и положю главу свою за тя", еже и бысть; не рече бо ему: "колико зла створиста мне, и се ноне тобе ся сключи", не рече, "се кроме мене", но на ся перея печаль братню, показая любовь велику, свершая Апостола глаголюща: утешайте печальныя. По истине, аще что створил есть в свете сем е-

теро согрешенье, отдасться ему, занеже положи главу свою за брата своего, не желая болшее волости, ни именья хотя болша, но за братню обиду. О сяковых бо Господь рече: да кто положить душю свою за другы своя. Соломон же рече: "братья в бедах пособива бывають, любы бо есть выше своего. Якоже Йоан глаголеть: Бог любы есть, пребываяй в любви, в Бозе пребываеть и Бог в нем пребываеть; о сем свершается любы, да достоянье имамы к день судный, да якоже он есть, и мы есмы в мире сем; боязни несть в любви, но свершена любы вон измещеть боязнь, яко боязнь мученье имать, бояйжеся несть свершен в любви; аще кто речеть: люблю Бога, а брата своего ненавидя, ложь есть, не любяй бо брата своего, его же видить, Бога, его же не видить, како можеть любити? Сию заповедь имамы от него, да любяй Бога любить брата своего". В любви бо все свершается: любве ради и греси разсыпаются, любве бо ради сниде Господь на землю и распяться за ны грешныя, взем грехы наша, пригвозди на кресте, дав нам кресть свой на прогнанье ненависти бесовьское; любве ради Мученици прольяша крови своя; любве же ради сий князь пролья кровь свою за брата своего, свершая заповедь Господню.

『イジヤスラフは顔が美しく，しかして体が大きな人物であつた．人となりは悪意がなく，ゆがんだことは憎み，正義を愛した．ずるさは彼にはなかつた．心が素朴な人物で，悪に対して悪を以てなすことはなかつた．それなのに，キエフの人々は彼

にどれほどの（悪）をなしたことであろう．（人々は）彼自身を追放し，なお，彼の家を略奪したのだつたが，（彼は）それに対して悪を以てむくいることはなかつた．たとえ，誰かゞ，〃戦士たちを殺した〃と言うにしろ，これは彼のなしたことではなくて，彼の息子のなしたことなのである．ところでまた彼の(二人の)兄弟が彼を追放し，しかして（彼は）異郷をさまよい歩きまわつたのである．しかして彼が再びおのれの王座に座し，打ち負かされたフセヴオロドが彼のもとに来たつた時には，（イジヤスラフは）彼（フセヴオロド）に向つて〃汝等から（我は）いくばくの（苦しみを）受けたことであろう？〃とは言わなかつた．悪にむくいるに悪をもつてせず，かえつて（彼を）なぐさめて言つたのである．〃我が弟よ，汝は，我に対して愛を示し，我を我が王座にみちびき，しかして我をおのれの長兄と呼んだが故に，我は，見よ，以前の悪を思い出さぬであろう．汝は我にとつて弟なのであり我は汝にとつて（兄である）．しかして（我は）汝のためにおのれの生命をすてるであろう〃と．しかしてその通りになつた．（イジヤスラフは）彼（フセヴオロド）に向つて，〃いくばくの悪を（汝二人は）我に対してなしたことか，しかして，見よ，今や汝に（その同じことが）起つたのである〃とは言わなかつた．〃これは我の関知せぬことである〃とも言わなかつた．しからずして，弟の悲しみを我が身に引き受け，大いなる愛を示し，〃悲しむ者たちをなぐさめよ〃という使徒の言葉を実行したのであつた．まことに，たとえ（彼が）この世で何らかの罪をおかしたことがあつたにもせよ，（それは）彼には許されることであろう．何となれば，より多くの権力をも望まず，より多くの財産をも望まず，おのれの弟のために，弟の恥に報いるために，（彼は）おのれの生命をおとしたからである．かゝる者たちについて主は言い給うたのである．〃おのれの友のためにおのれの生命をおとせし者〃と．ソロモンも次の様に言つた．〃災の中にありて互い

に助け合う兄弟たち〃と．というのは愛は何物にもまして尊いからである．また同じくイオアンは言つている．〃神とは即ち愛なり：愛の中にある者は神の中にある者なり，しかして神はその者の中にいますなり〃と．裁きの日には高き位を〔我等が〕持ち得るように，彼〔イジヤスラフ〕の如くに我らもまたこの世においてあらんがために，愛はこの様に完全であらなければならない．愛の中に恐怖はない．完全なる愛は恐怖を除き去るものである．恐怖は苦しみなのである．恐怖するものは愛において完全ではないのである．誰かよもし〃神を我は愛する〃と言つて，一方ではおのれの兄弟を憎むのであれば，〔これは〕偽りである．というのは眼の前にみているおのれの兄弟を愛さないものは，眼の前には見えない神をば，いかに愛することができようか？この教えをば，〔我々は〕彼〔イジヤスラフ〕から得ているのである．神を愛する者はおのれの兄弟をも愛すべきである．〔下線の部分はヨハネ第一書；第四章；十六節以下この章の終末までの文章とほとんど同じである……筆者註〕．というのは，愛の中においてこそ総てが実現されるからである．愛のおかげで罪も消え，愛の故にこそ主は地上に降り給いて，我々罪深きものたちのために自から十字架にかゝり給い，我々の罪を負い給いて十字架に我が身を釘づけ，我等に十字架を与え給うたのである．十字架によつて悪霊の憎悪を追い払わんがためである．愛の故にじゆん教者たちはおのれの血を流したのである．また愛の故にこそ，この公〔イジヤスラフ〕は主の教えを実行しつゝおのれの弟のためにおのれの血を流したのである』

ロシアの公たちが内紛を繰り返していた時代にあつて，まさにこの文章は，厳しい警告であると共に，記者の深い宗教的立場の吐露であつた．言いかえれば，これこそ，『過ぎし年月の物語』の成立の基本精神であり，基本的な思想的内容であり，姿勢なのであつたと言えよう．祖国を思いて内紛をとどめよ，

兄弟の間の権力争いをやめよ，心して生活を送れという主張は，キリスト教と無関係な古い英雄叙事詩的伝承の素材を組み上げることによつて，その具体的な典型教訓をつくり上げ，その上に，もう一つ，この深い宗教的愛の精神の血をしみ込ませることによつて，『過ぎし年月の物語』は，なまなましい聖典になつたと言えるのである．記録された事件の解説や正当化や批判のために，年代記者がギリシア正教的な思想を，つぎ足して述べたものではないし，また，ギリシア世教の思想を広め，伝導するために，その道具として，多くの世俗的事件を書きつけたものでもなかつた．6594(1086)年の項の後半に書かれている，ヤロポルク公を評価する文章もまた全くその様なものである．ここには，一人の人間として，悪にほろぼされたものに対する年代記者自身の宗教的な温和な愛の深い姿が映し出されている．同時にそれはまた記者が考える悪なるものによる犠牲者へのとむらいの姿勢でもあつた．

многы беды приим, без вины изгоним от братья своея, обидим, разграблен, прочее и смерть горкую прият; по вечней жизни и покою сподобися. Так бяше блаженый сь князь тих, кротък, смерен и братолюбив, десятину дая святей Богородици от всего своего именья, по вся лета, и моляше Бога всегда, глаголя: Господи боже мой! Приим молитву мою, и дажь ми смерть, якоже двема братома моима Борису и Глебу, от чюжю руку, да омыю грехы вся своею кровью, избуду суетнаго сего света и мятежа, сети вражий; его же прошенья не лиши его благый Бог, въприя благая она, ихже око не виде, ни ухо слыша, ни на сердце человеку не взиде, еже уготова Бог любящим его.

『多くの不幸を受け，故なくしておのれの兄弟たちによつて追放され，辱しめられ，略奪され，あげくには悲しき死を受けたのである．しかしながら，永遠の生命と平安とを得たのである．かくの如くこの至福なる公は，物静かで，温和で，温順で，兄弟愛の人であつた．毎年，おのれの総ての財産から聖母（教会）に十分の一をさゝげ，常に神に祈つて言つたものである．〃我が主なる神よ！我が祈りを受け入れ給え．しかして，二人の兄弟ボリスとグレブに（与え給いし）如く，我にも他人の手による死を与え給え．おのれの血によつて総ての罪を洗い，この空虚にして反逆的な世から，敵のわなからまぬがれんとするが故なり〃．と．彼の願うところを神は見捨て給わなかつた．彼は，如何なる眼も見ることなく，いかなる耳も聞くことなく，人間の如何なる心も予感しなかつたような，さいわいを受け取つたのである．それぞ，彼を愛し給う神が用意し給うたものなのであつた．』

年代記者が賞揚した人間の良き資質とは，だから，温順，柔和，愛の深さ，悲しみへの深い反応等々であり，それこそが，彼等の宗教の正当なる現世的顕現でなければならなかつた．6597(1089)年に府主教ヨアン≪Иоан≫の死を書きしるした年代記者は，続いて彼の立派な人となりを次の様にほめたのであつた．

бысть же Иоан муж кытр книгам и ученью, милостив убогым и вдовицам, ласков же ко всякому богату и убогу, смерен же кроторк, молчалив, речист же, книгами святыми утешая печалныя, и сякого не бысть преже в Руси, ни по нем не буде сяк.

『ヨアンは書物及び教えに通じた人物で，貧しき者たち及び寡婦たちに対して恵み深く，あらゆる者 —— 富める者にも貧しきものにも親切であり，温順であり柔和であり，言葉数は少く，

同時にまた雄弁でもあつた．聖なる書物によつて悲しみをもつ人々をなぐさめていたのである．かゝる人物は以前にはルシにいなかつたし，彼の後にもかゝる者は出現しないであろう．』

反対に，心が猛く，無慈悲で，自己主張が強く，協調さや温和さがない時には内紛が起り，その機会に外敵が侵入すると考えた年代記者は，外敵侵入による不幸こそ，実は，神が不遜なる悪徳人たちにくだし給うた罰であると説いたのである．その最もよい例が6601(1093)年の記事である．外敵ポロヴェツ人によつて，時あたかも祭日に，散々に打ちひしがれた光景を描いた記者は，そうなつた理由を次の様に説いているのである．不幸の日が祭日であつたこともまた因縁浅からざる由を考証しながら．

бысть плачь в граде, а не радость, грех ради наших великих и неправды, за умноженье безаконий наших. Се бо на ны Бог испусти поганым, не яко милуя их, но нас каа, да быхом ся востягнули от злых дел. Сим казнить ны нахоженьем поганых, се бо есть батог, да негли встягнувшеся вспомянемъся от злаго пути своего. Сего ради в праздникы Бог нам наводить сетованье: якоже ся створи в се лето первое зло на Вознесенье Господне, еже у Трьполя, второе же в праздник Бориса и Глеба, еже есть праздник новый Русьскыя земля. Сего ради Пророк глаголаше: преложю праздникы ваша плачь и песни ваша в рыданье. Створи бо ся плачь велик в земле нашей, отпустеша села наша и городи наши, быхом бегаючи пред врагы нашими. Якоже Пророк глаголаше: падете пред врагы вашим, поженуть вы ненавидящии вас, и побегнете никому женущю вас; скрушю руганье гордыни вашея; и будеть в

тщету крепость ваша, убьен вы приходяй мечь, будеть земля ваша пуста, и двори ваши пусти будуть; якоже вы худи есте и лукави, и аз поиду к вам яростью лукавою, тако глаголеть Господь Бог Израилев. Ибо лукавии сынове Измаилеви пожигаху села и гумна, и многы церкви запалиша огнем, да не чюдится никтоже о сем: идеже множьство грехов, ту виденья всякого показанье....

『我々の大いなる罪と不正のために，我々の無法さのつのりたることの故に，町には喜びではなくて，悲嘆があつた．というのは，これは，神が異教徒たちを放ち給うたのである．異教徒たちに恵みをかけ給うたのではなくて，我々を罰し給うたのである．我らが悪しき所業から離れるように，異教徒のこの来襲によつて（神は）我々を罰し給うのである．これは，（我々が）おのれの悪しき道から離れられるようにとの神の鞭である．この故にこそ，神は我々に祭日に悲しみを下し給うのである．この年の昇天祭にトリポリであつた最初の不幸が起り，才二の（不幸は）ルシの国の新しい祭であるボリスとグレブの祭日に（起つた）．この故に予言者は言つていたのである．〃汝等の祭日を悲嘆に変らせ，汝等の歌をなげきに（変らせよう）〃と．（　　アモス書；才八章；十節・・・・・筆者註）．我々の国において大いなる悲嘆がおこり，我々の村々及び我々の町々は荒廃し，我等の敵の前で（我々は）逃走しなければならなかつたのである．予言者が（次の様に）言つていた如くである．〃（汝等は）汝等の敵の前で倒れるであろう．汝等を憎む者が汝等を追い立てるであろう．しかして誰一人として汝等を追い立てる者がいないのに汝等は逃げるであろう（レビ記；才二十六章；十七節・・・筆者註）．（我は）汝等が傲慢つて誇りとしているものをほろぼすであろう．（レビ記；

才二十六章；十九節……筆者註）．汝等が力を用うることはいたづらなことであろう．（レビ記；才二十六章；二十節……筆者註）．外敵の剣が汝等を殺すであろう．しかして汝等の国は荒れ，汝等の家敷はほろびるであろう．（レビ記；才二十六章；三十三節……筆者註）．汝らが愚かで，ずるがしこい故に，我もまた，ずるい怒りをこめて汝等に向うであろう．（レビ記；才二十六章；四十～四十一節……筆者註）〃とこの様に主なる神はイズライリに言い給うているのである．何となればイズライリのずるき息子たちは村々や穀物置場を焼き多くの教会を火にかけて焼いたのである．このことは誰一人として不思議に思うはずのものではない』

この様な徹底した恭順の精神で『過ぎし年月の物語』が書かれ，その精神が賞揚され，その姿勢で多くの警世的な発言がなされていたことは，実は，年代記者の理想とするところからは遠い事態が数多く発生していたことをも意味するであろう．特にキエフよりも北部或は東部の地域においては，まだまだ異教的な要素の強かつたことに対する年代記者たちの悲嘆さえもが其処には聞きとれるかも知れない．古代スラヴ民族の魔法使い≪волхв≫たちが『過ぎし年月の物語』の中に登場して来るのは，その最もよい証拠であろうと思われる．オレグが自分の死に方の様子を前以て尋ねた相手（6420（912）年）にはじまつて，6494（986）年の項にも，翌6495（988）年にも，6552（1044）年にも，6579（1071）年にも，6599（1091）年にも，6605（1097）年にも，異教的魔法使い≪волхв≫の影が色濃く投影していたのである．上にあげた年号記事以外に6532（1024）年の項にはスズダリ地方での魔法使いの記事が見られる．

В се же лето въсташа вълъсви в Суждали, избиваху старую чадь по дьяволю наученью и бесованью, глаголюще, яко си держать гобино. Бе мятежь велик и голод по всей той стране; идоша по Волзе вси •

людье в Болгары, и привезоша жито, и тако ожиша. Слышав же Ярослав волхвы, приде Суздалю; изъимав волхвы, расточи, а другыя показани, рек сице: "Бог водить по грехом на кующдо землю гладом, или мором, ли ведром, ли иною казнью, а человек не весть ничтоже".

『この同じ年にスズダリで魔法使いたちが蜂起した．(彼等は)悪魔及び悪鬼のそゝのかしによつて老いたる人々を打ち殺し，これらの人が雹をもつていると言つたものである．その地方全体に大いなる叛乱とききんがあつた．あらゆる人々はヴオルガ河に沿つてボルガル人のもとに行き，はだか麦を運び来たり，しかしてかくして，よみがえつた．ところで，ヤロスラフは魔法使いたちのことを聞き，スズダリに来たつた．魔法使いたちを捕え，流刑に処し，他の者たちはこれを処刑して，かく言つた．〃神はそれぞれの土地に，罪に対する罰として或は飢がを，或は疫病を，或はかんばつを，或は別の刑罰を下し給うのであり，人間は何も分らないのである〃と．』

明らかにスズダリ地方での飢きんの折に異教的占術者たちの指導による民衆暴動が起つたこと，及び，その暴動が大きかつたために，わざわざ一時は，ノヴゴロドからヤロスラフ公が鎮圧に出向かなければならなかつたことを報じた一節である．異教的占術者たちによる民衆への大きな影響力のあつたことを雄弁に物語るものである．そして，その影響力を受けたのは，いまだキリスト教化されない地方的庶民だけではなかつた．キリスト教を受け入れ，然も，都市或はその近辺に住み，なおその上に，支配階級に連らなる人々の間にさえ，否定されるべき異教的迷信は根強く残つていた．その根強さを魔法使いたちが度々刺激して，事を起そうとしたのであつた．地方ではない中央の，然も公の一族にまで，その刺激が及ぶこともあつた．例えば，655

2(1044)年の記事を取りあげて見るがよい．其処には，嘗つてキリスト教を受け入れないままで死んだ『二人の公，ヤロポルクと，オレグ(スヴイヤトスラフの子)の骨を掘り出して，彼等の骨を洗礼し，それを聖母教会に安置した』≪Выгребоша два князя Ярополка и Ольга, сына Святославля, и крестиша кости его, и положища я в церкви святыя Богородица.≫とある．既に埋葬された公たちの骨まで洗礼して教徒として祭るほどにギリシア正教への信仰は厚く，深かつた．だが，その直後に書きとめられている記事を見るがよい．その様な時代に，その様な公たちの一族にさえも，一体，どんな考えが併存していたことであろう．

В се же лето умре Брячислав, сын Изяславль, внук Володимерь, отець Всеславль, и Всеслав, сын его, седе на столе его; его же роди мати от вълховованья, матери бо родивши его, бысть ему язвено на главе его, рекоша бо волсви матери его: "се язвено, навяжи на нь, да носить е до живота своего", еже носить Всеслав и до сего дне на собе. Сего ради немилостив есть на кровьпролитье.

『この同じ年にイジヤスラフの子，ヴオロジメルの孫，フセスラフの父であるブリヤチスラフが死去し，しかして，その息子フセスラフが父の王座に即いた．ところで彼を母が魔法使いの業によつて生んだのである．母が彼を生んだとき，彼にはその頭にはれものがあつた．ところで魔法使いたちが彼の母に言つた．〃見よ，はれものを，彼にほうたいをせよ．(彼に)それを生涯身につけさせるがよい〃と．それをフセスラフは今日に至るまでもおのれの身につけている．それ故に彼は流血に対して非情なのである』

この様な原始宗教的な，異教迷信に対する戦いが年代記者た

ちの属する修道僧団の大きな一つの目的であつたにちがいない．ボリス，グレブ，ヤロスラフ，そして古くはヴオロジメルの各公に対する賞称は，まさに，その姿勢から書かれたのであつた．そして，他者への好作用としてギリシア正教が持つべき態度は，その賞称文の中に見られた通り柔和，温順，兄弟愛というものであつた．その理想像がボリスでありグレブであつた．その理想像に近づき，迷信を遠ざけ，ギリシア正教を身にまとい，神に近づくことの良き手段を具体的に示したものが，先に引用した6545(1037)年のヤロスラフ公にまつわる記事なのであつたと言えるであろう．迷信を遠ざけ，強力にギリシア正教を一般化するためには，もう既に古くから数多く建てられた修道院内だけの活動では間に合わなかつた．或はまた，偶然にもギリシア正教に入信した権力者の半ば物好きさによる寄進によつて生まれた修道院や教会が，たゞ建てられているということだけでは，もはや間に合わなかつた．むしろ，求められるべきは，古来異教時代からの英雄的猛々しさを消し去り，心をなごませ，兄弟愛を深め，恭順温和なる心の姿勢を説くことであつた．その心の姿勢で一般世間へ発言することであつた．『過ぎし年月の物語』の大きな一つの目的が其処にもあつたのである．例えば，その証拠に6559(1051)年の項に，次の様な文章がみられるのも，明らかにこのことを物語るものであろう．修道院を建てる公に就てさえ，その心がけの悪さを説くに至るのである．

Изяслав же постави манастырь святаго Дмитрия, и выведе Варлама на игуменьство к святому Дмитрию, хотя створити вышний сего манастыря, надеяся богатьству. Мнози бо манастыри от царь и от бояр и от богатьства поставлени, но не суть тащи, кащи суть поставлени слезами, пощеньем, молитвою,

бденью: Антоний бо не име злата, ни сребра, но стяжа слезами и пощеньем, якоже глаголах.

『ところでイジヤスラフは聖ドミトリイ修道院を建て，しかしてヴアルラムを聖ドミトリイ（修道院）の修道院長として移した．修道院をこの（ペチエルスキー）修道院以上のものにしようと望み，富力に希望をかけていたのである．というのは，多くの修道院が皇帝たちによつて，貴族たちによつて，しかして，富力によつて建てられた．しかしながら，涙と斉戒と祈りとそして戒心とによつて建てられたものとはその趣きを異にするものなのである．アントニイは黄金も銀も持つていなかつたが，しかし，私が言つた如く，涙と斉戒とによつて（すべてを）獲得したのである』

此処には，年代記者の所属するペチエルスキー修道院の優越さを示そうとする心が，勿論，働いていたにはちがいない．或は，権力者の権力と富力とから疎遠になつたことに対する不満を裏返しに述べたのであるとも考えられよう．しかしながら，それ以上に，今までの様な修道院のあり方や活動では，もう間に合わないと見た年代記者のけい眼を我々は読み取るべきであろう．間に合わないと考えられたからこそ，年代記——『過ぎし年月の物語』は一つの新しい活動手段として書き出されたのであつたと思われる．英雄的業積，権力，富力，外的活動へ向つていた多くの人々の心を，特に，権力者たちや，権力者に保護されていた凡俗な僧たちの心を，一転して，心それ自身の恭順にして柔和なる愛の完成へ向わせるための大転換を，『過ぎし年月の物語』はフエオドシイという高僧の物語を以て企てようとしたと考えられる．だからこそ，それだけの力がフエオドシイ伝には集注されていたのである．

『過ぎし年月の物語』の書かれた姿勢は，だから，幾重もの目的をもつていたのである．祖国の尊厳なる歴史を書きとゞめ

ようとする目的もあつただろうし，公たち権力者に注文をつけようとする目的もあつただろうし，また，既成の教団への批判もあつたことであろうし，何にもまして，人々の心を恭順へ向わせつゝ，ギリシア正教の真髄を示そうとし，それによつて祖国統一と外敵防衛をなそうとしたであろう．或はまた，原始異教にとゞめをさそうともしたであろう．ところが，庶民の原始宗教的感覚へは容易に作用を及ぼし得なかつた．先に魔法使い≪волхв≫の登場する記事の一つを引用したが，その≪волхв≫が現代にまで残るブイリーナの中ではヴオルフ≪Волх≫という英雄の名前として活躍することを見てもこの消息は充分推察し得るところである．そして其処には如何に原始異教的な要素が強く残りつゞけていたことであろう．フセスラフ≪Всеслав≫をその母が魔法使いの業によつて生んだとは先にあげた6552(1044)年の記事であつたが，ブイリーナでは鮮かにこの記事と呼応して，その主人公の名はヴオルフ・フセスラヴイエヴイチ≪Волх Всеславьевич≫であり，しかも，母が彼を生むいきさつも，また，『過ぎし年月の物語』の記事に呼応する如く，母が蛇をふみ，蛇に太ももまで入り込まれた為に身ごもつたとある．

原始異教的な風情を多分に織り込んでブイリーナの冒頭には次の様に歌われているのである．

По саду, саду по зеленому ходила, гуляла
Молода княжна Марфа Всеславьевна;
Она с каменю скочила на лютого на змея.
Обвивается лютый змей около чебота зелен сафьян,
Около чулочика шелкова, хоботом бьет по белу стегну.
А втапоры княгиня понос понесла,
А понос понесла и дитя родила.
А и на небе просветя светел месяц,
А в Киеве родился могуч богатырь,

Как бы молоды Волх Всеславьевич.
Подрожала сыра земля,
Стряслося славно Индейское,
А и синее море сколыбалося
Для-ради рожденья богатырского
Молода Волха Всеславьевича.
Рыба пошла в морскую глубину,
Птица полетела высоко в небеса,
Туры да олени за горы пошли,
Зайцы, лисицы по чащицам,
А волки, медведи по ельникам,
Соболи, куницы по островам.

『緑なす園を若き公女マルファ・フセスラヴィエヴナがそぞろ歩きしていた．彼女は石から飛んで残忍な蛇を踏んだ．残忍な蛇は（彼女の）靴の山羊皮に，絹の長靴下のあたりに巻きついて，その長鼻をもつて白き太ももものあたりを突いた．その時に，公夫人は下痢をはじめた．下痢をはじめて子供を生んだ．ときに空には明るい月が輝き，キエフには強き勇士が生まれたのである．言うならば若きヴオル・フセスラヴィエヴイチである．大地はふるえ，栄えあるインドの帝国はふるえ，青海原は揺れ動いた．若き英雄ヴオルフ・フセスラヴィエヴイチの誕生の故である．魚は海の深みに逃げ，鳥は高く大空に飛び，野牛と鹿は山の彼方に去り，うさぎときつねは森の茂みに，狼と熊はもみの林に黒てんとてんは島々に（逃げた）』

成長するに及んでヴオルフが習つた術もまた原始異教の色濃いものであつた．

А и будет Волх десяти годов,
Втапоры поучился Волх ко премудростям:
А и первой мудрости учился-------

Обвертываться ясным соколом;
Ко другой-то мудрости учился он, Волх, -----
Обвертываться серым волком;
Ко третьей-то мудрости учился Волх -----
Обвертываться гнедым туром золотые рога.

『ところでヴオルフが十才になつた，その時に，ヴオルフは術を習いはじめた．先づ最初に学んだ術とは —— 鮮やかなタカに身を変えることであつた．かのヴオルフが学んだ才二の術は —— 灰色なる狼に身を変えることであつた．ヴオルフが学んだ才三の術とは —— 黄金の角ある鹿毛なる野牛に身を変えることであつた．』

ブイリーナは，この後に一九七行に及ぶヴオルフの種々の英雄的活躍を描き出しているのである．この原始異教な英雄物語でも，実はなお，多くの庶民にすれば格調の高いものであつたことであろう．こんなブイリーナの内容よりも，もつともつと，反ギリシア正教的な物語や風物が『過ぎし年月の物語』のネストルによる成立当時には存在していたにちがいない．年代記者にすれば，それは当然否定されるべきものでありながら，その根強さは不気味さまでも加味されて，民間に生きつづけていたことを無視することはできなかつた．6572(1064)年の項の記事にみられた奇妙な子供の死体は，漁師が網で引きあげたものであつたが，その醜悪さは，再び人々をしてその死体をセトムリ河に捨てさせたほどであつたという．即ち，顔に恥づべき器官があつて，その他諸々のいまわしい語り種が生まれていた．年代記者は，それを，『余りに恥かしいために口にすることができない』≪нелзѣ казати срама ради≫として筆をおつたほどである．もとより，人々に喧伝され，世をさわがしていた物語であつたにちがいない．そして，それに引きづられた年代記者自身が，昔エルサレムに起つたという数々の無気味な現象を書きしる

すほどであつた．それほどまでに，一般の人々には深々と迷信的なものが根を張りつめていた．だからこそ，年代記者は，誠にいまいましいほどの筆の運びを以て，6575(1067)年の項に厳しい非難の文章を書かなければならなかつたのである．即ち，修道僧≪черноризец≫，世捨人≪единец≫，ぶた≪свинья≫に途中で出くわすと縁起をかついで家に引きかえしたり，くしゃみ≪захыканье≫が頭の健康によいと信じたりすることを悪魔のたぶらかしによるとして厳しく批判していたのである．また，大道芸人≪скоморох≫，ラッパ≪труба≫，琴≪гусли≫による異教的娯楽を批判し，ルサリイ≪русальи≫（スラヴの原始的祭り）や，或は人々が押し合いへし合いして足踏みおどりをしていることをいましめ，それでは神からの罰を受けるのも当然であると書いているのである．

それらの悪魔をよろこばすような所業に対する最も尊厳なギリシア正教のしるしこそ，まさに十字架であつた．神を信ずる者は，だから，十字架に口づけをして約束のしるしとしたのである．〃十字架に口づけする〃≪цѣловати крестъ≫とは『約束する』ことなのであつた．この厳粛であるべき行為さえも，実は，当時，他ならぬ公たちによつて破られたことがあつた．年代記者が最も非難の声を大きくして書きとめたのは，だから，公による仲間の裏切りと合わせて，それ以上に十字架への裏切であつた．公たちが，そんなことをしているから，外敵が襲来するのだと述べ，それこそ，神の下し給う罰であると記録したのであつた．十字架に口づけして約束しながら，イジヤスラフはフセスラフを捕えて牢につないだ．このことを非難しつゝ，一方では，心正しく十字架の教えに従つたフセスラフをほめて，年代記者は，6575(1067)年の項に次の様に書いたのである：

Всеслав же седе Кыеве. Се же Бог яви силу крестную, понеже Изяслав целовав крест, и я и; тем-

же наведе Бог поганыя, сего же яве избави крест честный. В день бо Въздвиженья Всеслав вздохнув рече: "о кресте честный! Понеже к тобе веровах, избави мя от рва сего". Бог же показа силу крестную на показанье земле Русьстей, да не преступають честнаго креста, целовавше его; аще ли преступить кто, то и зде прииметь казнь, и на придущем веце казнь вечную. Понеже велика есть сила крестная: крестом бо побежени бывають силы бесовьскыя, крест бо княземь в бранех пособить, в бранех крестом сограженми верни людье побежають супростаты противныя, крест бо вскор избавляеть от напастий призывающим его верою; ничтоже ся боять беси, токмо креста, аще бо бывають от бес мечтанья, знаменавше лице крестом прогонними бывають.

『ところでフセスラフはキエフに坐した．さて，神は十字架の力を示し給うた．というのは，イジヤスラフは十字架に口づけしながら，彼（フセスラフ）を捕えたからである．それ故に神は異教徒たちを来たらしめ給うたのである．そして明らかにこの者（フセスラフ）を聖なる十字架が救つたのである．聖十字架祭の日にフセスラフは歎息して言つた．〃おお，聖なる十字架よ！（我は）汝を信じていたのであるから，我をこの牢より救い出せ〃と．ところで神は十字架の力を示し給うたのである．（人々が）十字架に口づけしながら，聖なる十字架を犯さぬよう，ルシの国への教えとして．もし誰かゞ（十字架への口づけの約束を）破るならば，（その者は）この世においても罰を受け，来るべき世においても永遠の（罰を受けるであろう）．十字架の力は偉大であるからである．というのは，十字架によつて悪魔の力は打負かさ

れ，十字架は戦争において公たちを助け，戦争において十字架に守られている信仰厚き人々は抗なう敵に打ち勝つのであり，信仰を以て十字架に切願する者たちの不幸を速かにまぬがれしめるのである．たゞ十字架以外には，悪魔たちは何も恐れはしないのである．もしも悪魔たちによる幻影が起るなら，顔を十字架で被うだけで，（悪魔たちは）退散させられるのである』

この十字架への口づけと，その宗教的・精神的意味は，大きく実際の生活を支配していたようである．それを証拠立てる記事は数多いが，その中でも，6605(1097)年の記事は引用に価するであろう．

Святополк же прогнав Давыда, нача думати на Володаря и на Василка, глаголя: "яко се есть волость отца моего и брата". И поиде на ня. Се слышав Володарь и Василко, поидоста противу, вземше крест, его же бе целовал к нима на сем, яко "на Давыда пришел есм, а с вама хочю имети мир и любовь". И преступи Святополк крест, надеяся на множьство вой. И сретошася на поли на Рожни, исполчившимся обоим, и Василко възвыси крест, глаголя: "яко сего еси целовал, се перьвее взял еси зрак очью моею, а се ныне хощеши взяти душю мою; да буди межи нами крест сь". И поидоша к собе к боеви, и сступишася полци, и мнози человеци благовернии видеша крест над Василковы вои, възвышься велми. Брани же велице бывши и мнозем падающим от обою полку, и видев Святополк, яко люта брань, и побеже, и прибеже Володимерю;....

『ところでスヴィヤトポルクはダヴィドを追放して，ヴォロダリ及びヴァシルコを討とうと考えはじめ，かく言つた．〃これは我が

父及び兄弟の領地である〃と．しかして彼等（二人）を討つべく進攻した．ヴオロダリとヴアシルコはこれを聞いて，迎え出撃した．（その折に二人は）十字架をたずさえた．その十字架と言うのは（スヴイヤトポルクが）彼等（二人）に〃我はダヴイドに向つて（攻め）来たつたのであつて，汝等（二人）とは平和と愛とを持ちたいと思つている〃と（言つて），それに口づけした（約束した）その十字架なのであつた．しかしてスヴイヤトポルクは多くの戦士を得んことを期待して十字架（誓い）を犯したのである．彼等はロジニヤ（河）のほとりの野に相会した．両軍が戦いの準備を整えた時に，ヴアシルコは十字架をさし挙げて言つた．〃これに汝は口づけした．見よ，最初に（汝は）我が両眼を奪い取り，しかして，今，また我が生命を奪わんと欲している．我等（と汝と）の間にこの十字架をして在らしめよ〃と．しかして，（彼等は）互いに兵を進め，両軍は相会した．しかして多くの信仰厚き人々はヴアシルコの戦士たちの頭上に極めて高くかかげられた十字架を見た．ところで戦いは激烈であつた．しかして両軍の多くのものたちが倒れた．スヴイヤトポルクは戦いが激しいのを見て，逃げた．しかして，ヴオロジメルに逃げ来つた』．．．．

ヴオロダリとヴアシルコは，この様にしてスヴイヤトポルクに勝つたのであつた．其処には，信仰厚いヴアシルコたちと，そしてこれを描く年代記者が，十字架の意味するギリシア正教の信仰正義を顕揚しようとする意気が読み取られるであろう．そして，実はそれこそ，『過ぎし年月の物語』の基本的な姿勢に他ならなかつたのである．だからこそ，外敵ポロヴエツに押され通したロシア軍が久しぶりに勝利をおさめた時には，6611(1103)年の項であるが，その勝利を年代記者は，日付けを大きく文頭に書き出しつゝ『四月八日に神は大いなる救いをおこない給い，我々の敵どもに対する大いなる勝利を与え給うたのである』≪Дни 4 априля мѣсяца велико спасенье Богъ створи, а на врагы

наша дасть победу велику ≫と書き，しかも，あらかじめ，その戦いの始まる寸前の記述の折に，諸公たちが敬けんに神に祈つたこと，祈りに際して教徒にふさわしく，このましい態度をとつたことを書きしるしたのである．それこそ，事々にそうあつてほしいと願つた年代記者の心にかなうものであつた．即ち，次の様にしるされていたのである．『ところでルシの公たち及び総ての戦士たちは神に祈りつゞけていた．しかして，或者は蜜飯によつて，或者は貧者たちへの施しによつて，また別の者たちは修道院への寄進によつて，神及び聖母に祈り誓つていたのである』≪Русскіѣ же князи и вои вси моляхуть Бога, и обѣты вздаяху Богу и Матери его, овъ кутьею, овъ же милостынею убогымъ, иніи же манастыремъ требованья ≫このように，あらかじめ，神への深い心の傾斜があつたからこそ，そして，その傾斜が一時的なものではなくて，二度も使用された動詞インパーフエクト形に示される如く，永続的なものであつたからこそ，神は助け給うたのであることを年代記者は大書したかつたのであろう．そして，その折の勝利の翌年6612(1104)年には，太陽と十字架が重なつたような天空のしるしが出現したことを書きとめたのであつた．面白いことに，『彼から私も多くの物語を聞き，彼から聞いたことをこの年代記に（私は）書き込んだ』≪от него же и аз многа словеса слышахъ, еже и вписахъ в лѣтописаньи семъ отъ него же слышахъ ≫と年代記者が書いた．その語り手ヤンが死んだのは，実にその翌々年6614(1106)年のことであつた．然もそのヤンのとは，年代記者の言葉によれば，『敬けんで，柔和で，温順な人物で，あらゆる（悪しき）事柄を避けた人』≪мужь благъ, и кротокъ, и смѣренъ, огребаяся всякоя вещи ≫であつたのである．同時に，この人物像は年代記者の基本的姿勢の顕現のようにも思われるのである．『過ぎし年月の物語』は，このヤン

の死を報じた後，たゞ僅かに数年の記事を綴つて終るのである．ヤンの姿勢と年代記者の姿勢とが重なり合つていたことが，このことからもまた推察されるであろう．ラヴレンチー，イパーチ一等の年代記で『過ぎし年月の物語』が完了する年号，6618(1110)年の項には，この年代記者の姿勢が，修道院を通じて神及び天に向う形で示され，神への深いおそれとなつている．そしてそれを以て結びの言葉としているように思われる．その結びの言葉とは，神へのおそれにひたつた心が見た超自然的な現象なのであつた．これが結びの言葉である以上，その現象へのおそれと，天使の解説と，そして，天使を通じての神への信仰姿勢こそが，『過ぎし年月の物語』を貫く大きな精神の柱の一つであつたことは間違いないであろう．これを単に落雷の記述として読み流すことはできないように思われる．

Том же лете бысть знаменье в Печерьстем монастыре, в 11 день февраля месяца: явися столп огнен от земля до небеси, а молнья осветиша всю землю, и в небеси погреме в час 1 нощи; и весь мир виде. Се же столп первее ста на трапезници каменей, яко не видети бысть креста, и постояв мало, съступи на церковь и ста над гробом Феодосьевым, и потом ступи на верх, акы ко встоку лиць, и потом невидим бысть. Се же беаше не огненый столп, но вид ангелеск: ангел бо сице является, ово столпом огненым, ово же пламенем. Якоже рече давыд: творя ангелы своя духы и слугы своя палящь, и шлем суть повеленьем Божьим, аможе хощеть Владыка и Творець всех. Ангел бо приходить кде благая места и молитвений домове, и ту показають нечто мало

виденья своего, яко мощно видети человеком; не мощно бо зрети человеком естьства ангельскаго, яко и Моиси великый не взможе видети ангельскаго естьства, водяшеть бо я в день столб облачен, а в нощи столп огнен; то се не столп водяше их, но ангел идяше пред ними в нощи и в дне. Тако и се явленье некоторое показываше, ему же бе быти, еже и бысть: на 2-е бо лето не се ли ангел вожь бысть на инополеменникы и супостаты, якоже рече: ангел пред тобою предъидеть, и пакы: ангел твой буди с тобою? Яко пророк Давыд глаголеть: яко ангелом своим заповесть о тебе схранить тя. Якоже пишеть премудрый Епифаний: к коей же твари ангел приставлен: ангел облаком и мъглам, и снегу и граду и мразу, ангел гласом и громом, ангел зимы и зноеви, и осени и весны и лета, всему духу твари его на земли, и тайныя бездны, и суть скровены под землею, и преисподнии тьмы, и сущи во безднах, бывшия древле верху земля, от нея же тмы, вечер и нощь, и свет и день, ко всим тварем ангели приставлени. Такоже ангел приставлен к которой убо земли, да соблюдають кужьдо землю, аще суть и ногани; аще Божий гнев будеть на кую любо землю, повелевая ангелу тому на кую любо землю бранью ити, от оной земле ангел не вспротивится повеленью Божью. Яко и се бяше и на ны навел Бог, грех ради наших, иноплеменники поганыя, и побежахуть ны повеленьем Божьим: они бо бяху водими ангелом, по повеленью Божью. Аще ли

кто речеть, яко ангела несть у поганых, да слышить, яко Олександру Макидоньскому на Дарья, и пошедшю ему и победившю землю всю от въсток и до запад, и поби землю Егупетьскую, и поби Арама, и приде в островы морьскыя; и врати лице свое взыти в Ерусалим, победити Жиды, занеже бяху мирни со Дарьем, и поиде со всими вои его, и ста на товарищи и почи, и приспе ночь, и лежа на ложи своем посреде шатра, отверз очи свои, види мужа стояща над ним, и мечь наг в руце его, и обличие меча его яко молонии, и запряже мечем своим на главу цареву, и ужасеся царь велми и рече: не бий мене, и рече ему ангел: посла мя Бог уимати царе великии пред тобою и люди многи, аз же хожю пред тобою, помагати ти; а ныне ведай, яко умереши, понеже помыслил еси взити в Ерусалим, зло створити ереем Божьим и к людем его, и рече царь; молю тя, о господи, отпусти ныне грех раба твоего; аче не любо ти, в ворочюся дому моему. И рече ангел: не боися, иди путем твоим к Иерусалиму, и узриши ту в Иерусалими мужа в обличеньи моем, борзо пади на лици своем и поклонися мужю тому, и все еже речеть к тобе створи, не преступи речи ему; в онь же день преступиши речь его, и умреши, и въстав царь, иде в Ерусалим, и пришед въспроси ереев: иду ли на Дарья? и показаша ему книги Данила пророка, и рекоша ему: ты еси козел, а он овен, и потолчеши и возмеши царство его. Се убо не ангел ли вожаше Олександра? не погани ли побежаше, и вси Елини кумирослужебници?

Тако и си погании попущени грех ради наших. Се же ведомо буди, яко в хрестьянех не един ангел, но елико крестишася, паче к благоверным князем нашим: но противу Божью повеленью не могуть противитися, но молять Бога прилежно за хрестьяньскыя люди. Якоже и бысть: молитвами святыя Богородица и святых ангел умилосердися Бог, и посла ангелы в помощь Русьским князем на поганыя, якоже рече в Моисееви: се ангел мой предъидеть пред лицем твоим, якоже рекохом преже. Знаменье се бысть месяца февраля в 11 день, исходящю сему лету 18.

『その同じ年，二月の十一日にペチエルスキー修道院にしるしがあつた．火の柱が大地から天にまで現れ，稲妻が地上全体を照し出し，しかして天には夜の一時に雷鳴があつた．しかして総ての世の人が見たのである．この柱は最初に石造の僧院食堂の上に立ち，十字架が見えないほどであつた．しかして，しばらく立ち現れてから教会の上へ進み，フエオドシイの墓の上に立つた．しかしてその後，（教会の）上に進み，東方に顔を向けている如くであつた．しかして，その後，見えなくなつた．ところで，これは火の柱ではなくて，天使の出現なのであつた．というのは，天使はこの様にして現れるものなのである．或は火の柱として，或はまた炎として．ダヴイドが（次の様に）言つている如くである．〃（神は）風をおのれの天使となし給い，炎の出づる火をばおのれのしもべとなし給う〃．（詩篇；一〇四篇；四節・・・・・筆者註） 主にして万物の創造者なる神はその望み給う所へ（天使たちを）神の命によりてつかわし給う．天使たちは敬けんなる場所及び祈りの家々のある所に来り，しかして，おのれの出現を，人間たちが見得る程度のかすかな何らかのものとして

其処に示すのである．人間たちには天使の本来の姿は見ることができない．偉大なモイセイさえも天使の本来の姿を見ることができなかつたのである．日中には雲の柱が彼等をみちびき，夜中には火の柱が（彼等をみちびいた）．だが，これは彼等を柱がみちびいたのではなくて，天使が夜も昼も彼等の前を進んでいたのである．この様にこの（天に現れた）しるしは，当然出現することになつていた．そして実際に出現した或る現れを示していたのである．というのは，二年目に異種族たち及び敵に対する指導者として現れたのは，これは天使なのではなかつただろうか．〃天使が汝の先に立つている〃と言われているではないか．また，〃汝の天使が汝と共にあるように〃とも言われているではないか．（・・・・・これ以下の文章は主としてイバーチー年代記による・・・・・筆者註）予言者ダヴイドが言つている如くである．〃おのれの天使たちに汝（が歩む諸々の道）に関して汝を守るよう命じ給う〃（詩篇；九十一篇；十一節・・・・筆者註）至賢なるエピファニイも（次の様に）書いている．〃いかなる創造物にも天使はつけられている．天使は雲にも霧にも，雪にも，あられにも，厳寒にも，天使は顔にも雷鳴にも，天使は冬にも，暑さにも，秋にも春にも，夏にも，地上のあらゆる生命ある創造物にも，大地の下にかくされた神秘な淵にも，淵の中にあるものにも，穴の闇にも，以前に大地の上にあり，そのために，闇と晩と夜と光と昼とが起つている総てのものに，総ての創造物に天使たちはつけられている〃と．その様に天使は，その土地を守るために，どの地にも付けられている．たとえ，その土地が異教の土地であつてもである．もしも神の怒りが或る何処かの国に向けられ，或る何処かの国へその天使に命じて軍勢を向け給うとすれば，その国の天使は神の命令に抗し得ないであろう．今やこれと同じことがおこつたのであり，我々の罪の故に神は異教の異種族を我々の上へ導き給うたのである．しかして（異種族たちは）

神の命令によつて我々を打ちまかしたのである．というのは，彼等は神の命令によつて天使たちに導かれていたからである．もしも誰かゞ，異教徒たちのもとには天使たちは居ないと言うのであれば，マケドニアのアレクサンドル（大王）がダリイに向つて武装し，彼に向つて遠征し，東から西まで（その）全国を勝ちとり，エジプトの国をほろぼし，アラムを殺し，海の島々に来たつたことを聞かせるがよい．彼はエルサレムを占領してユダヤ人を打ちまかすために —— ユダヤ人たちはダリイと和を結んでいたからであるが —— エルサレムに向つた．しかして，おのれの総ての軍勢をひきいて進み，陣営をしいてとゞまり，しかして，憩つた．夜になつて彼は天幕の中のおのれの床に横たわつた．おのれの両眼を見開いて見ると，自分の上に立つている一人の人物に気づいた．抜身の劍を片手にもつていたが，その劍の姿はあたかも稲妻のようであつた．しかして（その人物は）おのれの劍を皇帝の頭上に振りはじめた．皇帝は非常におどろいて言つた．〃我を殺すな〃と．しかして天使は彼に言つた．〃汝の前に強き帝たち及び多くの人々を服せしめんとして神は我を遣わし給うたのである．我は汝の前を進み，汝を助けている．されど，今は，（汝が）死するものと知れ．何となれば，汝はエルサレムに入り，神のユダヤ人たち及び神の人々に悪をなさんと企てたからである〃と．しかして皇帝は言つた．〃おゝ，主よ，汝に我は祈る．汝の僕なる者のこの罪を許せ，もしも汝に（それが）好ましくなければ，我は我が家に戻るであろう〃と．しかして天使は言つた．〃恐れるな．エルサレムへの汝の道を進め．しかしてエルサレムにおいて，我が姿をなせる（一人の）人物を見たならば，その人物の前に，おのれの顔を深く垂れて礼拝せよ．しかしてその人物が汝に言うところの総てを実行せよ．その人物の言葉を犯すべからず．その人物の言葉を汝が犯すその日の内に汝は死すであろう〃と．しかして皇帝は立ち上り，エルサレム

に進んだ．到着してユダヤ人たちに（彼は）尋ねた．〃（我は）ダリイに向つて進むべきか？〃と．しかして（彼等は）予言者ダリイの書を彼に示して，彼に言つた．〃汝は雄山羊で，彼は羊である．（汝は）打ちくだきて，彼の王国を入手するであろう〃と．このように，アレクサンドルを導いたのは天使ではないだろうか？逃亡したのは異教徒ではないだろうか？総ての異教偶像礼拝者たちではなかつただろうか？この様に，またこれらの異教徒たち（ポロヴエツ）も，我々の罪の故に（神によつて）（我々に）放たれたものなのである．キリスト教徒の中にあつては，単に一人の天使のみならず，洗礼を受けた者たちの数だけの天使がおり，なおそれ以上に我々の信心深い公たちには天使が多くいることが明らかでなければならない．然しながら，神の命令には，天使たちは，抗し難いものであり，（天使たちは）キリスト教徒の人々のために熱心に神に祈るものであることを知るべきである．即ち，神は聖母及び聖なる天使たちの祈りによつて，神は心なごませ給い，ロシアの公たちに異教徒征伐の助けとして天使たちを遣わし給うたのである．（神が）モイセイに言い給う所によれば，〃これは我が天使の汝に先だちてみちびくものなり〃とある．我々が先に述べた如く，このしるしは，この（66）18年のはじまる二月十一日にあつたことである．』

敬けんに神へ向うこの様な姿勢には，外敵を前にして燃え上る祖国統一と国内勢力の相互和解との熱望が伏せられていたにちがいない．その内で，神へ向う心と相互和解とは直線的に連なるであろうが，祖国ロシアの統一の念願については，年代記者の宗教性を離れたところに立つて，もう一度，見直しておかなければならないであろう．

— Φ —

祖国統一の念願とは，祖国の統一のない所に起るものである．むしろ，祖国の統一の無さを痛々しく描くところに，統一の念願は読み取られるであろう．実に『過ぎし年月の物語』とは一面において一貫して分裂抗争の痛々しい物語であつたとも言える．この分裂抗争の痛々しさを，如何に年代記者が祖国統一の念願によつて蔽いかくそうとしても，かくしきれるものではなかつた．

『過ぎし年月の物語』は初めて年号 — 6360(852)年 — を設定してから数十年後にルシの公として，イゴリ≪Игорь≫の行動を書きとめている．そして，此処で，スヴエネリド≪Свенельд≫という武将らしき人物が登場する．然し，このスヴエネリドという人物に就ては，非常に奇妙な記述がうかゞわれる．先づ，6453(945)年の記事に，はじめて彼が登場する個所には次の様に書かれているのである．

В лето 6453.

В се лето рекоша дружина Игореви: "отроци Свенельжи изодѣлися суть оружьем и порты, а мы нази; поиди, княже, с нами в дань, да и ты добудеши и мы". Послуша их Игорь, иде в Дерева в дань, и примышляше к первой дани, насиляше им, и мужи его; возъемав дань, поиде в град свой.

『6453(945)年．

この年に親兵団がイゴリに言つた．〃スヴエネリドの下級従士は武具装束をつけているが，我々ははだかである．公よ，我々と共に貢税をとりに行け．しかるときは汝も獲物を得るであろう．しかして我々も〃と．イゴリは彼らのいうことを聞き，ジエレヴア(の国)へ貢税をとりに行つた．しかして(イゴリは)以前の貢税に増税したり，彼らに乱暴を働いたりした．彼の家臣たちもまた(そのようにした)．(イゴリは)貢税をとつておのれの町へ

帰途についた．』

明らかに，此処では，スヴエネリドはイゴリの権力の支配下にはない．イゴリの親兵団が無装備であるのに，スヴエネリドの場合は，下級従士たちでさえ，武具装束をつけていたのである．当時のルシの公イゴリは，明らかに，同じルシの中に対立者をもつていた．少くとも実質的には統一君主ではなかつたように読み取られる．ところが，此処で面白い記述が続けられるのである．イゴリは貢税をより多く集めるために深入りし過ぎて，遂に遠征先で殺されるのである．イゴリの妻オリガはその時に幼少の息子スヴイヤトスラフと共にキエフにいた．その幼少のスヴイヤトスラフの養育係がアスムド≪Асмуд≫で，『軍司令官はスヴエネリドであつた』≪воевода бѣ Свѣнелдъ≫と書かれているのである．同じ6453(945)年の記事である．イゴリの実質的な対抗者ほどにも見なされたスヴエネリドが何故，そのイゴリの幼少の息子の軍司令官であつたのだろう．しかし『過ぎし年月の物語』は実際に翌6454(946)年の記事として，幼少のスヴイヤトスラフをいたゞいて，オリガと共にイゴリの仇伐ちに出かける記事をのせている．そして，なお面白いことに，その後二十六年経て，6480(972)年の項には，このスヴエネリドは，自分の君主であつた筈のスヴイヤトスラフがペチエネギの公クリヤに殺されると，すぐさま，都キエフのヤロポルクのもとに戻つている．そして，三年後，6483(975)年には，スヴエネリドの子が森で狩をしていた時に，オレグがこれを見つけて殺したと記され，オレグの兄ヤロポリクの麾下にいたスヴエネルドは息子の仇としてオレグを憎み，ついに，オレゲはこのためにヤロポルクに殺されたのであつた．スヴエネリドが息子の仇であるオレグの死をたしかめた記事は，6485(977)年の項に見られるのである．『過ぎし年月の物語』が伝えるスヴエネリドとは，この様な人物であつた．『過ぎし年月の物語』は，まさに，この様に着色し，解釈

して，この人物を記録したが，それは，『過ぎし年月の物語』の着色と解釈であつたに過ぎないであろう．ためしに，ヴオスクレセンスキー年代記の6420(912)年の項，及びソフイヤ第一年代記の6422(914)年の項にほぼ同一文章で見られる記事をたしかめて見るがよい．其処では，スヴエネリドは初めからイゴリの軍司令官となつているではないか．然し，それでいながら，イゴリの完全な麾下の人物ではなかつた．

Иде Игорь на деревляны, и победи я, и възложи на ня дань болши Олговы. И бе у него воевода именем Свентелд, и премучи Углеци, и възложи на них дань Игорь и вдасть Свентелду; и не вдадяшется един град, именем Пересечен, и седе около его 3 лета, и едва взя и. И беша седяще Углици по днепру вниз; и посем приидоша межи во днепр, и седоша тамо. И дасть же и дань деревскую Свентелду, имаше же по черне куне от дыма; и реша дружина Игореви: "се дал еси единому мужу много".

『イゴリはジエレヴリヤネに進攻し，しかして彼等を打ちまかした．しかして彼等にオレグの（貢税）よりも一層大きな貢税を課した．しかして，彼のもとにはその名をスヴエネリドという軍司令官がいた．しかして，ウグリチたちを大いに苦しめ，イゴリは彼等に貢税を課してスヴエネリドに与えた．しかして，ベレセチエンという名の町だけは与えられなかつた．イゴリはその町の近くに三年間坐し，ほとんどその町を手に入れた．しかしてウグリチたちはドニエプル河に沿つて下流に棲していた．しかして，この後，ドニエプルの中流に来たり，其処に定住した．しかして，一戸から黒テン(の皮一枚づつ)を取り，(イゴリは)スヴエネリドにジエレヴアの貢税をも与えた．しかして，イゴリの親兵団は言つた．〃見よ，(汝は)一人の男にだけ多くを与えた〃と．』

『過ぎし年月の物語』や，ソフィヤ第一年代記，ヴオスクレセンスキー年代記等の記事から見て，スヴエネリドは明らかに巨大な富と権力をもつた人物であつたにちがいない．独自の親兵団を公の親兵団よりも多くきらびやかに維持し，それをさゝえる富も，独自に貢税を集める権力を盾て可能であつた．そして，実にそのことへの反目が，公及びその近側に起つたことを『過ぎし年月の物語』は伝えていたのであつた．都キエフにおいてさえ，実は，その様な権力の散開が認められたのである．まして，都と離れた所においてはなおさらであつた．イゴリの妻オリガが夫の死後，ジエレヴの国の公マル≪Мал≫から嫁に来いと強要される折にも，その使者の口上には，我々の『公たち』≪князи≫と明らかに複数形が用いられていたではないか．だから，この公たちが，リユリク≪Рюрик≫の子孫たちであつたもの達をも含めて，お互いに勢力争いをしていたことは想像にかたくない．『過ぎし年月の物語』は，その事実を，公の一族ではない，単なる軍司令官という名のスヴエネリドの原因に帰して，公の兄弟争いの責任を彼とその殺された息子のせいにしてしまつたのであつた．そのことによつて，公の血統には兄弟争いの責任を持たせないでおこうという記者の作意が働いていなかつたと言えようか？　そして，その公の兄弟争いに終止符を打ち『独りでキエフに君臨し』≪княжити в Киеве един≫た人物こそ，キリスト教を輸入したヴオロジメル公であつたと『過ぎし年月の物語』は書きとめたのであつた．そして本来，公の一族には争いの責任はなく，然も，キリスト教的名君ヴオロジメル公によつて，ルシの国は統一されたという物語に仕立てゝしまつたのである．明らかに此処には，キリスト教の信仰に生きる修道僧年代記者らしい，祖国統一の念願と宗教信仰の一体化した理想の投影が読み取られるであろう．

ヴオロジメル公の時代をキリスト教摂取とキエフ統一国家の様相

を，そうあつてほしい理想として高くかゝげたかつたのが年代記者（たち）の念願であつたであろう．だが，それは，あくまでも，理想的な念願でありつゞけた．実際は，血縁の公たちの痛々しい内紛流血が絶えなかつたし，統一国家など実現しはしなかつた．『過ぎし年月の物語』は実に，理想や念願とは裏腹な血生臭い物語を痛々しく書きつゞけなければならなかつた．たしかに，『過ぎし年月の物語』は，ヴオロジメルがヤロポルクに勝つてからは，実に三十五年間に及んで内戦を書きとめていない．それだけに，ヴオロジメルの時代は，先づ，回帰すべき統一国家像として書きとめられ易かつたのであろう．そして，統一国家の念願に答えてくれるような平和は，時の公を賞讃の的にかかげながら，高く評価して書きあげられたものであつた．つゞいてヴオロジメルの息子たちの間に火を吹いた内戦は，ヤロスラフ公とミスチスラフ公が国を分割することによつて終りを告げ，五十年ばかり内戦を見なかつた．ヤロスラフ公への年代記者の好意的な大傾斜の所以である．だからこそ反対に，公たちの内紛が公の一族によつてではなくて，家臣たちの不心得から油をそゝがれるような事態を記録する場合には，その不心得者に対しては，年代記者のありつたけの憎悪がこめられたのであつた．6488(980)年の記事に見られたブルド≪Блуд≫の主人裏切の行為は，まさにその典型的なものであつた．『かくの如きものは悪魔どもよりも，えげつない』≪горьше суть бесов таковии≫とののしられたのであつた．そして，そののしりの姿勢は，奇しくも，キリスト教的モラルと一致したのであつた．そして，キリスト教的モラルの姿勢を以てする統一国家の待望とは，決して，武力による専制者の出現を望む形のものではなかつた．むしろ，兄弟愛によつて公たちが協力し合い，若きは老令者に従うという形での国家の出現なのであつた．或は，もし，それが不可能ならば，せめて，最少限度，お互いの分野を犯さないと

いう協調なのであつた．『過ぎし年月の物語』が，その冒頭に，ノアの三人の息子が，互いに相手の領分に踏み込まずに暮していたと書いたのも，その願いの現れであつたと見るべきである．スヴイヤトポルクが，ボリスとグレブを殺した記事では，殺された側のボリスとグレブは高き兄弟愛に生きた犠牲者として深く嘆かれたが，勝ち誇つたスヴイヤトポルクが『おのれの兄弟を全部殺し，ルシの権力を一人で我がものにしよう』≪Изобью всю братью свою и приниму власть Русьскую един≫と語るのを書きとめる折には，その様な形での統一者ならば，決して待望していないとする年代記者の憎悪が込められていたのである．だからこそ，年代記者は，このスヴイヤトポルクに度々『呪われたる』≪окаянный≫という形容詞を冠していたのであつた．そして，『過ぎし年月の物語』が至賢なる名君とほめあげたヤロスラフ公こそは，実に，このスヴイヤトポルクを打ち負かした人物なのであつた．だから年代記者には，このヤロスラフ公の時代の空気が，その理想への望ましい次一段階の見本として映じていたように思われる．かくあつてほしいという希望に近いものとして，ヤロスラフ公の時代の出来事は，だから，明るく，楽しげに，賞讃を交えて書きとめられたように読みとれるのである．ためしに，ヤロスラフに関する『過ぎし年月の物語』の記述を追つてみるがよい．

スヴイヤトポルクを相手とする永い戦いの後にヤロスラフが勝利をおさめたのは6527(1019)年のことであつた．その年の項の終りには，『ところでヤロスラフはキエフに坐した．おのれの親兵団と共に汗をふき（労苦を終つてがいせんし），勝利と大いなる功績を示した』≪Ярославъ же сѣде Кыеве, утеръ пота съ дружиною своею, показавъ побѣду и трудъ великъ≫と書かれた．そして亜々年6529(1021)年には，ブリヤチスラフ（ヴオロジメルの孫，即ちイジヤスラフの息子）がノヴゴロドを攻略したのを

，ヤロスラフは出撃して取り返し，ほとんど平和な統一国家の姿に時代は近づくかに見えた．ところが，6531(1023)年に，この名君ヤロスラフをトムトロカニのミスチスラフ≪Мьстислав≫が襲うのである．ところが此処で，『過ぎし年月の物語』はその書きぶりを大きく変えているのである．即ち，その時，ノヴゴロドにいたヤロスラフの留守に，ミスチスラフが都キエフに入城しようとして，キエフの人々に受け入れを拒否されたと大書したのである．さてミスチスラフの軍とヤロスラフの軍はリストヴェナ河で相会した．その折の記述は既にその文章を引用したが，ともかく，結果的にはヤロスラフ公が敗北したのであつた．ところが，この6532(1024)年の記事の終末部分から翌々6534(1026)年にかけての記述は，特に注目すべきである．というのは，年代記者の念願が叶えられるほどの事態が，兄弟愛の思想のもとで実現したからである．年代記者が，祖国の姿は，せめても，かくあつてほしいと願つた事態が実現したからである．その記述の筆の運びの喜ばしげであることを我々は読み取りたい．同時に，十二世紀初頭の年代記者が，この時代への回帰を人々に訴えたいとする姿勢もまた読み取られるべきであろう．ラヴレンチー，イパーチー等の年代記の『過ぎし年月の物語』には，次の様に書きとゞめられている．

И посла Мьстислав по Ярославе глаголя: "сяди в своем Кыеве, ты еси старейшей брат, а мне буди си сторона"; и не смяше Ярослав ити в Кыев, дондеже смиристася. И седяше Мьстислав Чернигове, а Ярослав Новегороде, и беяху Кыеве мужи Ярославли. В том же лете родися у Ярослава другый сын, и нарече имя ему Изяслав.

В лето 6534.

Ярослав совокупи воя многы, и приде Кыеву, и

створи мир с братом своим Мьстиславом у Городьца. И разделиста по Днепр Русьскую землю: Ярослав прия сю сторону, а Мьстислав ону; и начаста жити мирно и в братолюбьстве, и уста усобица и мятежь, и бысть тишина велика в земли.

В лето 6535.

Родися 3-й сын Ярославу, и нарече имя ему Святослав.

В лето 6536.

Знаменье явися на небеси, яко видети всей земли.

В лето 6537.

Мирно бысть.

『しかして，ミスチスラフ（勝利者である弟……筆者註）は，ヤロスラフ（負者である兄……筆者註）を迎えに使者をたてゝ言つた．〃おのれのキエフに（公として）坐せ．汝は長兄であるからである．しかしてこの国は我に与えよ〃と．しかして，二人が和解するまでは，ヤロスラフは敢えてキエフには行き得なかつたのであつた．しかしてミスチスラフはチエルニゴフに，ヤロスラフはノヴゴロドに坐していて，キエフにはヤロスラフの家臣たちがいたのであつた．（この間，都キエフにはどの公も居なかつたことになる．平和のない時には，かく，都にさえ居り難いことを，年代記者は強調したかつたのであろう……筆者註）．この年に，ヤロスラフのもとでは才二の息子が生まれ，彼の名をイジヤスラフと呼んだ．

6534（1026）年

ヤロスラフは多くの軍勢を集めてキエフに来たり，おのれの弟ミスチスラフとゴロデツツのほとりで和を結んだ．しかして（二人は）ルシの国をドネプル河に沿つて分けた．ヤロスラフは此方の側を，ミスチスラフは彼方の側を受け取つた．しかして二人は，平和に兄弟愛の内に暮しはじめた．しかして，内紛と反乱は止み，

ルシの国には大いなる平安があつた．

6535(1027)年．

ヤロスラフに才三の息子が生まれ，その名をスヴイヤトスラフと呼んだ．

6536(1028)年．

天にしるしがあつた．国中から望見された．

6537(1029)年．

平和であつた．』

父の軍勢をひきい，父に最も愛され，軍勢に信頼されていたボリスが，父の急死後，『キエフに行つておのれの父の王座につけ』≪пойди, сяди Кыеве на столе отни≫と親兵団にすすめられながら，『おのれの長兄に向つて我は手をあげることをなすべきではない．もしも我が父が死んだのなら，この者（長兄　スヴイヤトポルク……筆者註）が我にとつて父の代りになるべきである』≪Не буди мне възняти рукы на брата своего старейшего; аще и отець ми умре, то сь ми буди в отца место≫と答えたのも，まさに，年代記者の，かくありたいと願う姿に一致するものであつた．然し，実にその信念のために，ボリスは遂に暗殺されるのであつた．同じように，『父に対して従順であつた』≪бе бо послушлив отцю≫グレブもまた，そのこと故にスヴイヤトポルクに殺されたのであつた．其処には年代記者自身の願望の踏みつけられる悲憤と，踏みつける者への憎悪とがこめられていたのである．年代記者の願望は，実は，この様に，裏返しになつた形でしか表明されないことの方が多かつた．直接に表明されるためには，具体的な事件を離れなければならないような内紛状態ばかりが続いていた．例えば，その典型的なものが，ヤロスラフの息子たちへの遺訓という形で述べられた言葉であつた．既に引用したことのある6562(1054)年の記事はそうであつた．その遺訓の結びとして，『過ぎし

年月の物語』は，その冒頭にかゝげたノアの息子たちの話を此処でもまた反すうしていたと思われる．即ち，先に引用した遺訓は，実に次の様な言葉で結ばれていたのである．『しかして（ヤロスラフは）彼等（息子たち）に町々を分ち与え，彼等に兄弟の領分をおかさず，（兄弟をそれぞれの領分から）追い出さぬように遺訓し，（長子の）イジヤスラフに向つて言つた．〃もしも何者かが，汝の兄弟をはづかしめようと慾するならば，汝は，はづかしめられるものに助力せよ〃と．かくの如く，彼はおのれの子等に愛の中にあるように教訓したのである』≪И тако раздѣли имъ грады, заповѣдавъ имъ не преступати предѣла братня, ни сгонити; рекъ Изяславу : 〃аще кто хощеть обидѣти брата своего, то ты помагай его же обидать〃. И тако уряди сыны своя пребывати въ любви.≫

然し，実際の動きは，この教訓と全くうらはらであつた．弟たち ——スヴイヤトスラフとフセヴオロドは6581(1073)年には早くもキエフの王座から長兄イジヤスラフを追い出し，追い出されたイジヤスラフは弟たちに対抗するために西方の外国の勢力にさえ頼るのであつた．この様なルシの国の状態が続く限り，草原の外敵ポロヴエツの恰好の餌食になることは火を見るよりも明らかであつた．そして，心ある年代記者がこの悲痛な状態から抜け出す道を苦しみつゝ探し求めたのは当然であつた．然し，その探索を年代記者はあくまでも具体的な事件の中に求めようとした．その事件が，どれほど自分の願望を熱切るような質のものであろうとも，決して，虚構を『過ぎし年月の物語』の中へ組み入れようとはしなかつた．そして，ヴオロジメルやヤロスラフの時代を，公がキエフの王座にあつてルシの国全体を深い愛の内に統治した時代だと考えて，『過ぎし年月の物語』に記述しつゝも，その時代へ再び戻り得るものだとは少しも期待はしていなかつたかに見える．その様な過去への回帰よりも一層焦眉

な問題があつた．外敵ポロヴエツに対抗することであり，そのためには，ともかくも，内紛を停止することであつた．むしろ，その一つの目標として，ヴオロジメルやヤロスラフの物語が後で書かれたのであつて，その物語の内容に当るものが先に実在したのではなかつた．より適確に言うならば，理想的なルシの統一国家と言い得るようなものは，一度も実在などしなかつたのである．そのことを百も承知の上でなければ，統一の熱い願望に燃える年代記者が，最後まで血生臭い実際の事件を追求することはできなかつたであろう．むしろ，願望に押されて，虚構の中へ逃げ込んだはずである．『過ぎし年月の物語』は，そうならなかつたところにその大きな価値を保有し続けられる理由がある．

さて，ヴオロジメルやヤロスラフの時代の記述にみられた，年代記者の願望の照り返しではなくて，実際に願望通りの事実が生まれそうになつたことを『過ぎし年月の物語』はその終末近くになつて，うれしげに書き残しているのである．即ち，6605(1097)年の記事の冒頭である．

В лето 6605.
Придоша Святополк, Володимер, Давыд Игоревичь, и Василко Ростиславичь, и Давыд Святославичь, и брат его Олег, и снящася Любячи на устроенье мира, и глаголаша к собе, рекуще: "почто губим Русьскую землю, сами на ся котору деюще? А половци землю нашю несуть розно, и ради суть, оже межю нами рати; да ноне отселе имемъся в едино сердце и блюдем земли, кождо да держить отчину свою: Святополк Кыев Изяславлю, Володимер Всеволожю, Давыд и Олег и Ярослав Святославлю; а им же роздаял Всеволод городы, Давыду Володимерь,

Ростиславичема Перемышль Володареви, Теребовль Василкови". И на том целоваша крест, "да аще кто отселе на кого будеть, то на того будем вси и крест честный"; рекоша вси: "да будеть на нь крес честный и вся земля Русьская", и целоваше-ся поидоша всвояси.

『スヴイヤトポルク，ヴオロジメル，イゴリの子ダヴイド，及びロステスラフの子ヴアシルコ，及びスヴイヤトスラフの子ダヴイド，及びその弟オレグが来たり，和平締結のためにリコベチに集まつて，互いに語つて言つた．〃何のために（我々は）お互いに紛争を事として，ルシの国を破滅させているのか？一方，ポロヴエツたちは我々の国を不和にみちびき，我々の間に戦争があるのを喜こんでいる．今後は心を一つにしてルシの国を守ろうではないか．各自がおのれの世襲領地を保有することにしよう．即ち，スヴイヤトポルクはイジヤスラフの（世襲領地）キエフを，ヴオロジメルはフセヴオロドのそれを，ダヴイド，オレグ及びヤロスラフはスヴイヤトスラフのそれを（保有し），また，フセヴオロドが町を分け与えた者たち——即ちダヴイドがヴオロジメリを，ロステスラフの子等はペレムイシリをヴオロダリが，テレボヴリをヴアシルコが（保有することにしよう）〃と．しかして（彼等は）このことを約して十字架に口づけした．〃もしも誰かゞ誰かに歯向つて立つならば，皆が，そして聖なる十字架も，その者に向つて立つであろう〃と．しかして全員が言つた．〃その様な者に対しては，聖なる十字架及びルシの国の全体が向うように〃と．しかして，互いに口づけし合つて帰途についた．』

此処には，ほとんど全部の有力な公の一族が集つたことになる．そして，その頃社会的に形成された世襲領地の保全を話し合つたことになる．ノアの息子の手本は此処に至つて実現したかに見えた．相互にその領分をおかさないで，協力しながら平

和に暮そう，協力して外敵に当ろうと言うのである．然しながら，この考えは，むしろ，公たちの内紛の結果に，やむなく生まれたものであろうし，一時は，この原則によつて，内紛を抑止し得たかも知れないが，実は，其処には大きな理想の消滅という犠牲があつた．即ち，キエフを都とし，王座を此処に設定しようという大きな統一国家の待望の破棄であつた．実にこれこそ，本当は，最年長の公が国家主領であるべしとする古い理想の消滅なのであつた．年代記者は果してそれをわきまえていたであろうか？．最も高くかゝげたい理想を一度はおろして見て，次善の願望をかゝげて見たとき，理想とは既に古びた古代社会の生み出したものに他ならず，次善の願望とは十一世紀末ロシア社会がやむなく創り出した統治手段に他ならなかつたことを，年代記者は深くは，わきまえていなかつたようにも思われる．ノアの子等の物語を冒頭に持ち出して『過ぎし年月の物語』を始めようとする姿勢がそれを物語つているであろう．次善の願望であつた分割統治手段こそは，一皮むけば，余りに悲惨な矛盾を自からの内に秘めているものであることを，年代記者は見通していなかつたように思われる．国家統一をますます困難にし，却つて内紛の温床をなしていたものこそ，次善の統治手段であつた．この夢が破られる事件を書きとめる折には，だから，『過ぎし年月の物語』の筆の運びは益々痛々しさを増すのであつた．その後の各年代項の事件の記事はまさにその様なものであつた．ヴァシルコが両眼をつぶされる物語は，その内でも最も痛々しい記事であつた．内紛は終止符を打たれるどころか反対に益々激しさを増して行つたのであつた．この矛盾の袋小路へ入り込んだ時に，『過ぎし年月の物語』は非常に面白い記事を書きとめるのである．即ち，もう一度次元を高めた国家統一理念の生産である．其処には或はネストルを超えたセリヴェストルの筆の跡があるかも知れないが，6605(1097)年の記

事中にみられる，フセヴオロドの末亡人と府主教ニコライの忠告の言葉である．兄弟間の内紛に明け暮れて，外敵に攻められ，父祖の国を滅そうとするのかという忠告の言葉である．そして，それを聞いたヴオロジメルの態度であつた．そして，また『過ぎし年月の物語』の最終的な理想態度とは，ヴオロジメルの遺訓に現わされた宗教的姿勢による国家統一理念であつた．その理念は，今度は，約束履行の義務を負うべしという考えにさゝえられていたのである．ヴオロジメル・モノマハ≪Володимер Мономах≫の教訓にはその点が強く表面に押し出されていたのである．ロスチスラフの子等を追放して，その領地を奪おうとする，自分の兄弟たちからの提案の使者を迎えた時，彼はその提案に同調はしなかつた．彼は答えているのである．『もしも汝等がたとえ怒ろうとも，（我は）十字架（約束）を犯して汝等に同調することはできぬ』≪Аще вы ся и гневаете, не могу вы я ити, ни креста переступити≫と．また，これと同じ考えが自分の子等に遺訓をなす折の言葉にも展開されるのである．『もしも汝等が兄弟たち或は誰かに向つて十字架に口づけ（約束）するようなことがあれば，……守りて，犯すべからず……』≪Аще ли вы будете крестъ целовати к братьи или к кому, ……блюдете, да не приступни,……≫ この二つは，実は『過ぎし年月の物語』が終つた後，数年後，即ち6633（1125）年の項として，各種の年代記に書き取られている文章であつた．だが，『過ぎし年月の物語』は，このヴオロジメル・モノマハの生存中に完結していることを考え合わせるとよい．また，『過ぎし年月の物語』そのものの中にも，この思想は鮮やかに反映している．それは，ヴオロジメル・モノマハが敵との約束をさえどれほど重要視したかを物語る一節としてゝある．即ち，6611（1103）年に，久しぶりにポロヴエツ人たちに勝ち戦のなし得た物語を伝える文章が終るところに，ヴオロジメル・モノマハが敵

の捕虜を扱つた物語がある．約束の背反を厳しく問いつめる彼の姿として描かれているではないか．

И убиша ту в полку князий 20: Урусобу, Кчия, Аръсланапу, Китаонпу, Кумана, Куртка, Ченегрепу, Сурьбаря, и прочая князий их; а Белдюзя яша. Посем же седоша братья, победивше врагы своя, приведоша Белдюзя к Святополку, и нача Белдюзь даяти на собе злато и сребро, и коне и скот; Святополк же посла и к Володимеру. И пришедшю ему, нача впрашати его Володимер: "то веде, яла вы рота? Многажды бо ходивше роте, воевасте Русскую землю; то чему ты не казаше сынов своих и роду своего не преступати роты, но проливаше кровь хрестьяньску? Да се буди кровь твоя на главе твоей". И повеле убити и, и тако расекоша и на уды...

「しかして，（ポロヴエツたちに勝つたロシアの公たちは・・・・筆者註）その時，戦闘において（ポロヴエツの公たち）二十人を殺した．即ち，ウルソバ，クチイ，アルスラナバ，キタノバ，クマン，クルトク，テエネグレバ，スリバリ，及びその他，彼等の公たちを．ところで，（ロシアの公たちは）ベルジユジを捕えた．この後，おのれの敵どもを打ち破つた公兄弟たちは停戦し，ベルジユジをスヴイヤトポルクのもとへ連れ来たつた．しかしてベルジユジはおのれの身代金として金，銀，馬及び家畜を差し出しはじめた．ところで，スヴイヤトポルクは彼をヴオロジメル（モノマバ）のもとへ送つた．しかして，彼が到着したとき，ヴオロジメルは彼を問いたゞしはじめた．〃これは，吾いが汝等を打ちまかしたということではないか！　というのは，（汝等は）幾度か誓いをたてながら，やはりルシの国を攻めたからである．ところで，何故に，汝は，おの

れの子等及びおのれの一族に誓いを破らぬように指示しなかつたのか？　キリスト教徒の血を流さぬようにせしめなかつたのか？　今こそ，汝の血が汝の首に流れるがよい〃と．しかして，ヴオロジメルは彼を殺すように命じた．かくして（人々は）彼を寸断した．』

かくして，年代記者は，遂に，祖国統一の根底に，『信義を重んずる』ことを探し当てたのである．そして，それを具現してくれそうな統治者として，当時，一方の有力者であつたヴオロジメル・モノマハに期待したのであつた．そして，実は其処で『過ぎし年月の物語』は終るのである．

ともあれ，公たちの間に起つた，そして，当時，起り続いていた内紛は，『過ぎし年月の物語』の記者にとつては，誠に愚かな，粗野な，いまわしい出来事の連続であつたにちがいない．だからこそ，その内紛の原因の多くを，『悪魔のたぶらかし』≪кознь дьявола≫によるものだと説明し，公たちの『争い』≪котора≫を，サタン≪сотона≫の奸策によると説いたのであろう．そして，反対に，ノアの三人の息子たちが，そうしたように，『兄弟の領分を誰も犯さない』≪не преступати никому же в жребий братень≫ことは，同時に神の教えであり，父祖の遺訓であり，人間としての信義であるべきだとした．だから，例えばスヴイヤトポルクのように兄弟たちを殺し，或は両眼をつぶし，或は追放して，独りキエフの王座についたような記事は，この理念によつて裁かれるように記録されているのである．『スヴイヤトポルクはおのれの兄弟を追放し，父祖の遺訓を，それ以上に神の教えを犯して，キエフに坐した．というのは，おのれの父の遺訓を犯すことは極めて（重い）罪であり……他人の境界を犯すことは良くないからである』≪Велий бо есть грехъ преступати заповедь отца своего……,не добро бо есть преступати предела чюжего≫6581(1073)年の記事であ

る．そのスヴイヤトポルクに両眼をつぶされ，結局は，なぶり殺しに殺されたヴアシルコが，曾つて，スヴイヤトポルクと戦つて旗色が良かつた時，どうしたであろうか．『過ぎし年月の物語』が気高いじゆん教者として賞讃するヴアシルコは，相手に打ち勝つても，決して，他人の領分にまでは押し入ろうとしなかつた．そう言う形で，書きとめられているではないか．『ヴオロダリとヴアシルコは（スヴイヤトポルクに対して）勝利を得て後，其処にとゞまつて，かく言つた．〃我等は我等の境界内にとゞまらねばならぬ〃と．しかして何処へも兵を進めなかつた』6605(1097)年の記事である．≪Володарь же и Василко победивша, стаста ту, рекуща: //довлѣеть нама на межи своей стати//, и не идоста никаможе.≫

年代記者によれば，公はおのれの世襲領地内にとゞまり，しかも，なお，全ルシの広い視野に立つべきであつた．むしろ，おのれの分限の中におりながら，ルシの統一国家へ向つて協力の姿勢を取るべきなのであつた．ヴアシルコはその姿勢の人であつたために，年代記者によつて，ルシ最高のじゆん教者にまつり上げられたのであろう．この視点から書かれた最も典型的な記事がある．6586(1078)年の記事である．スヴイヤトスラフの子オレグとヴイヤチエスラフの子ボリスとが，自分たちの二人の叔父を攻撃する．これを書きとめた年代記者はたゞちに，神が二人に責任を問い給うであろうと批判したのであつた（原文引用は既に終つた）．打ち負かされたフセヴオロドが援助を求めて長兄のイジヤスラフに身を寄せたとき，イジヤスラフは自分もかつて王座を追われて異国をさまよつたと語り，彼をなぐさめ，協力を約束するのであつた．そして，その約束を彼は見事に守り通したのである．自からの生命を捨てゝ．年代記者は，その故にこそ，永い，うるわしい彼への賞讃文を書き綴つて『過ぎし年月の物語』の中に組み込んだのであつた．修道僧であつた年代記者が，公

たち政治支配者に向つて，教訓ともなるべき調和統一の理想の形を示そうとしたとき，修道院の模様を持ち出して来るのは自然の勢いであつた．政治的支配者たちも，自分たちを見習つてほしいと言わんばかりに書き込んだものこそ，実は，ペチエルスキー修道院の物語であつたと思われる．其処には，次の様なうるわしい情景が読み取れるからである．即ち，フエオドシイの死後の物語である．

Стефану же предержащю манастырь, и блаженое стадо, еже совокупили Феодосий, таκы черньце яко светила в Руси сьяють; ови бо бяху постници крепкии, ови же на бденье, ови на кланяньe коленьное, ови на пощенье чрез день и чрез два дни, ини же ядуще хлеб с водою, ини зелье варено, друзии сыро. В оюбви пребывающе, меншии покаряющеся старейшим и не смеюще пред ними глаголати, но все с покореньем и с послушаньем великым; такоже и старейшии имяху любовь к меньшим, наказаху, утешающе, яко чада възлюбленая. Аще который брат в етеро прегрешенье впадаше, утешаху и епитемью единого брата разделяху 3 ли, 4, за великую любовь: такова бо бяше в братьи той, вздержанье велико. Аще брат етер выидяше из манастыря, вся братья имяху о том печаль велику, посылаючи по нь, призываху брата к монастырю; шедше вси кланяхуся игумену, и моляху игумена, и приимаху брата в манастырь с радостью.

『ところでステファンが修道院を治め，フエオドシイが集めた至福なる（僧たちの）群を治めたとき，それらの修道僧たちは，燈明の如くルシにおいて輝いていたのである．というのは，或

者たちは厳しい精進にはげみ，或者たちは不眠通夜にはげみ，或者たちは膝を折つて礼拝にはげみ，或者たちは一日或は二日の断食修業にはげみ，他の者たちは水だけでパンを食べ，また他の者たちは煮た野菜を，或は生の野菜を食べていたのであつた．（全員が）愛の中にありつゝ，下級者は上級者の言うことを聞き慎しみ，上級者の前では敢えて口さえきくことをしなかつた．然し常に従順さをもち，偉いなる恭順さをもつていた．また同様に上級者たちは下級者たちに愛情を以て向い，いつくしむ子供たちの如くに下級者たちをいつくしみ教えたのである．もしも，或る兄弟（僧）が何等かの罪におちるようなことがあると，（僧たちは）（その者を）なぐさめ，一人の兄弟（僧）の罰金を三人或は四人で分担してやつていたのである．偉大なる愛の故である．この兄弟僧たちの愛はかくの如くであつた．節制もまた立派であつた．もしも，或る兄弟（僧）が修道院を去ると，兄弟僧たち全員はそのことについて大いなる嘆きを抱き，彼を呼びに人を派遣し，兄弟（僧）を修道院へ戻びもどしていたのである．全員が修道院長のもとへ行つて頭を垂れ，修道院長に切願して，（逃げた）兄弟を喜びと共に修道院へ迎え入れていたのである．』

政治的支配者である公たちも，また，内紛をやめて，この様な長幼の序と深き愛に生きてほしいと言いたかつたのであろう．もし，そうでなければ，ロシアは永遠に統一できないと年代記者は考えていたのであろう．然し，実際は，当のペチエルスキー修道院においても，その様な理想的な人間関係は実現されてはいなかつた．修道院の中においてさえ，派閥の争いは絶え間がなかつたのである．キエフ・ペチエルスキー教文伝によれば，此処に登場したスチエフアンという修道院長とて，実は，フエオドシイの生存中にフエオドシイの意志に反して仲間が擁立した人物でありフエオドシイを院長の座から追つたのであつた．それにもかかわ

らず，年代記者は，その争いには一言もふれず，虚構と思えるほどの理想的な人間関係図を『過ぎし年月の物語』の中に定着させてしまつたのである．とりもなおさず，争いなき平安な祖国の統一を年代記者が夢み，その手本を公たちに示して見せたかつたという熱意を思わせる一節として，これは，読み取られなければならないであろう．この様に理想への熱意の故に，事実以上に着色され，或は時に虚構をまことしやかに書き立てた個所が，だから，『過ぎし年月の物語』には数多くあることであろう．この作品が，古代ロシアの単なる歴史記録だとして受け入れられ，取り扱われることの危険な所以である．勿論，一般に，古い時代の歴史書とは，概して，そのようなものであつたであろう．後代の年代記者たちが，『過ぎし年月の物語』を最も尊重し，其処に書かれた内容を本当の事実だと受け取つたのは当然であつた．そして，最も大切なことは，後代の年代記者たちが，其処に書きあげられた内容と，それ以上に，書きあげる際の精神の構えを高く評価したことを注目しなければなるまい．ロシア諸年代記への『過ぎし年月の物語』の影響は，だから，書きつがれた記録の内容よりも，むしろ，その書き方の構えにあつたと言えるであろう．

— X —

ネストルが総まとめをした『過ぎし年月の物語』はそのまゝの形では現存はしていないが，例えば，ラヴレンチー年代記の『過ぎし年月の物語』の結語では，セリヴエストル≪Селивестръ≫がもう一度書き直したものとして，その年号を6624年とし，≪а иже чтеть книгы сія, то буди ми в молитвах.≫『これらの書（『過ぎし年月の物語』を決して単一の書物だとは見なさなかつたことを複数形で示したのであろう…… 筆者註）を読むものをして我が祈り

の中にあらしめよ』とある．このラヴレンチー年代記における結びの言葉だけを取りあげるならば，セリヴエストルは，『過ぎし年月の物語』を宗教的な面からだけ取りあげて書き直したかの様にも受け取れよう．然し，宗教的な面はあくまでも背景的立場であるに過ぎなかつた．その背景の上に突出したいくつかの主張があつた．その主張の姿勢は，実に，ネストルのそれと全く同一であつた．というのは，ニコン年代記の6624年の項に，ラヴレンチー年代記が簡素化したと思われる，もとの全文が書きあげられているからである．其処には，如何にルシの国全体に視野をひろげ，統一の希望に燃えていたかゞ読み取れるであろう．『全ルシ』≪вся Русь≫が一度と『ルシの国』≪Русская земля≫が二度も用いられ，一方には『全』≪вся≫が，一方には『祖国』≪отечество≫が冠せられていることは，そのまゝ，ネストルの姿勢の何よりの顕現であつたであろう．即ちニコン年代記の6624年の項には次の様にある．

В лето 6624.

Се яз грешный инок Селивестр, игумен святаго Михаила, написах книги сиа, глаголемыа Греческым языком храограф, Русским же языком тлъкуется временник, еже есть летописець, во священно и божествено священноначалства господина Никифора митрополита Киевскаго и всея Руси, во обладание державы Киевскиа православнаго и благочестиваго великого князя Владимера Маномаха, сына Всеволожа, внука Ярославля, правнука великаго и равнаапостольнаго святаго Владимера, нареченнаго во святем крещении Василиа, крестившаго всю Русскую землю. Писа же вся сиа любве ради Господа Бога, и пречистыа Богородици, и святых его, и своего ради отечества Русскиа земли,

во спасение и ползу всем, и мол всех прочитающих книги сиа, да помолятся о мъне во святых своих молитвах, да сладостный и радостный глас слышу от Господа Бога в день он суда великаго, и избавлен буду безконечных мучений, и обещанных благых от Господа получю, молитвами пречистыя Богородици и всех святых, аминь.

自分が来世で救われたいという，むき出しの願望が此処には読み取れるほどの文章でありながら，其処には，特に前半にネストルと同じ構えが読み取れるのは，さすがであると言わなければなるまい．ちなみにこのニコン年代記の文章の意味は次の通りである．

『6624(1116)年．

聖ミハイル(修道院)の修道院長である，我，罪深き修道僧セリヴエストルが，これらの書物を書いた．グレキの言葉ではフロノグラフ≪хронограф≫と言われ，ルシの言葉では年代記≪лѣтописець≫である編年記≪временник≫と訳されているものである．キエフ及びルシ全土の府主教ニキフオル様の神聖なる教会権力をたゝえる為であり，フセヴオロドの息子にして，ヤロスラフの孫，そしてヴアシリイの聖なる洗礼において名を受け，ルシ全国を洗礼した偉大にして且つ使徒にもたとうべき聖ヴラジミルの曾孫であるヴラジミル・マノマハなる正教の敬けんなる大公のキエフ国家統治の為なのである．すべてこれらの書物を書いたのは，主なる神及び聖母及び神の聖者たちの愛故であり，またおのれの祖国ルシの国の故であり，万人の救いと益の為である．しかして，これらの書物を読む総ての人々は，願わくば，それぞれおのれの聖なる祈りにおいて我が為に祈つてほしいのである．かの偉大なる裁きの日に主なる神の甘美にして楽しい御声を私が聞き得ますように，そして，私が無限の苦しみからまぬがれ得るように，

そして，神によつて約束された幸をば，聖母及び総ての聖者たちの祈りによつて私が受け得るように．アーメン．』

セリヴエストルがネストルの『物語』を書き直し，書き加えた際にも，だから，実際は，ネストルのレールの上を動いて，多少，その先を伸ばしたに過ぎなかつたであろう．古代ロシア文学の金字塔である『イーゴリ遠征物語』が，理念的にも（——宗教的色調だけは別として——），或は比喩に用いる題材の上からも，『過ぎし年月の物語』に強い影響を受けていたことは言うまでもない．その『イーゴリ遠征物語』や『過ぎし年月の物語』が叫び警告していた，内紛の停止が実現しないまゝ，古代ロシアは，外敵のポロヴエツに痛めつけられ，果ては，タタールの大軍に押しつぶされて，遂に，所謂三百年に及ぶ暗黒時代を迎えなければならなかつた．そして，踏みつぶされた古代ロシア国家が再び蘇生するのは，昔つての栄光に輝いたキエフの都や，富み栄えたノヴゴロドの町においてゞはなくて，遥か東のモスコにおいてであつた．次才にタタールの重圧をはねのけて，祖国の栄光を取りもどして行くモスコ公国が，『過ぎし年月の物語』の理念を再び呼び戻したのは当然のことであつた．だから，巨大な量に及ぶロシア年代記の中にあつて，特に，モスコ年代記が，最も強烈に，『過ぎし年月の物語』の影響下にあることは当然と言わなければなるまい．モスコ年代記は，その記事の年号の古い部分をほとんど『過ぎし年月の物語』からの引き写しで埋めている以外に，例えば，6636(1128)年の記事の如きは，ヴオロジメル公がキリスト教を摂取する以前の行状を反すうして，『過ぎし年月の物語』の6488(980)年の項を再構成したものであつた．そして，その翌年，6637(1129)年に，ポロヴエツに打ち勝つたムスチスラフ≪Мьстиславъ≫の記事を，『ヴオロジメル・（モノマハ）が自からドン河のほとりに立ち，神を信ぜざるものどもを追い払い，ルシの国のために多くの汗を拭いた（多くの労

苦をなした』≪Володимеръ бо самъ собою постоя у Дону и прогна безбожныа и много пота утеръ за Русскую землю≫ことを回想して今度の事件もそれと同じであるとし，『かくして，神はルシの国を異教徒たちから救い給うた』≪И тако избави богъ Русскую землю от поганыхъ≫と書きしるしたのは，『過ぎし年月の物語』の記述姿勢と全く同一であつた．

この記事から，時代が百年ほどさがつて，6720(1212)年の記事にまで来たつても，同じように，僧としての年代記者の顔が記事の間にのぞき出ている．6737(1229)年，6738(1230)年の記事とても同じである．この傾向は，それ以後二百年ほどの年号記事にあつても大きくは変らない．特に，外敵の侵入を受け，内には不幸が相つぐ折には，『過ぎし年月の物語』の姿勢の反すうがはげしくなつて来る．例えば，6916(1408)年の項の記述はその典型と考えてよいであろう．プスコフの国に≪Пьсковъскую землю≫にネムツイ≪Немци≫が大軍≪велика сила≫で来襲≪Приходиша≫したと伝え，イヴアン公≪князь Иванъ≫がタタールと共にフヨードル公≪князь Федоръ≫を攻めて，両公国を我がものにするという内紛の不幸を伝える．この二人の公が和睦すると，その直後には大火≪пожаръ великъ≫がロストフの町に起り，人と富が焼失する．それを境にして，各地の公たちが一致協力の姿勢を取りはじめると，今度は各地に悪疫≪моръ≫が流行して人々をなやますのであつた．公たちは再び相互に軍を進めあつて分紛をくり返す．ところが，その冬に，巨大な外敵がルシの国に侵入して来たのである．モスコ年代記集は以上の前書きについて，この不幸を次の様に書きしるしている．この年の冬，ブラト帝≪Булат царь≫の命によつて，エジゲイ公≪князь Едигеи≫がルシの国に攻め来たつた．上記の帝の息子四人とその他の公十人が同行していたのである．ヴアシリイ大公≪князь великы Василеи≫は，これを聞いてタタール軍に対抗することなく，

コストロマ≪Кострома≫に退去した．十二月一日にエジゲイは大軍をひきいてモスコに攻め来たつた．『（彼等は）悪しき狼の如く全国に散じ，あらゆる町々にも，あらゆる地方にも，郷にも村にも（あふれ），タタールのいないような場所は一個所も残らなかつた．』≪Разсыпашася по всеи земли, акы злии волци, по всем градом и по странам и по волостем и по селом, и не остася таково место, иде же не были Татарове≫のである．モスコの近くに布陣したエジゲイは使者をイヴアン大公≪князь великы Иван≫に派遣する．協力してモスコを攻め落そうとするのである．然し，イヴアン大公は，タタールと組んで祖国の都を攻め落そうとはしなかつた．外敵と組んで同族を裏切り；権力を利己的に伸そうとする如き行為は，『過ぎし年月の物語』において，しばしば，厳しく批判されたところであつた．年代記者は充分それを承知して，『イヴアン公はこれを為すを欲しなかつた』≪Князь же Иван не хотѣ сего сотворити,≫と書き，『過ぎし年月の物語』と同じ言葉で，『十字架への接ぶんを，しかして以前よりの和平と友愛とを裏切ること』≪ни изменити крестного целованна и давного мира и любви≫を欲しなかつたと書き直すのであつた．そしてイヴアンはモスコへ出かけるふりをして途中で引き返してしまうのである．その間，『モスコの町は敵軍にとりかこまれて，大いなる悲しみの中にあり，人々はたてこもつていた』≪Град же Москва в печали велице бысть вои объстоимъ, а людие в немъ затворишася≫のである．このモスコに立てこもつた公の名前を年代記は三人書きあげ，それに加えて，貴族たち，主教たち，あらゆる階級の僧たち及び『多数の民衆』≪многое множство народа тмочислено≫であつたと述べている．『大いなる悲しみに取りつかれ，何処からの助力をも見出し得ず』≪Скорбью же великою одержими бяху ни откуду пособья обретающе≫と書かれてい

る．そして，この言葉に続いて，『過ぎし年月の物語』が，教父伝的文章を駆使した如く，用語も文体も；発想法も，ほとんど，その文章の影響のまゝに，次の様に綴られているのである．（ロシア年代記集才二十五巻；p．238 ——— 十四世紀末モスコ年代記集才三三三葉～才三三四葉）．

точью от единого бога помощи получити прашаху и пречисте матери его молящеся, скорои в бедах помощници христиньскому роду, и пост и молитву створиша, мольбы же и моленья приносящи с слезами и въздыханием и покаяние же чисто от душа коижде положиша, от грех очищающеся и смерти ожидающе. Всеблагыи же и милостив и человеколюбець бог услыша скорбь людей своих и молитв и моления и въздыхания их не презри, но обычным своим человеколюбием помилова люди своя, от безбожных Измаилтян избави.

『ただただ，唯一なる神よりの助けをえんとして（人々は）乞い求めつゞけていた．しかして，神のいと清き母に，不幸の中なるキリスト教徒一族の速かなる助け人として祈つたのである．しかして，精進と祈りとをおこない，涙とため息とを交えつゝ，祈りと願いをあげ，各人その心から清き悔悟をなし，罪より清められつゝ，死を待ち望んでいた．至福にして慈悲深く，人間を愛し給う神は，おのれの民たちの悲嘆をきこしめし給い，民たちの祈りをも，願いをも，溜息をも軽んじ給わなかつた．（神は）おのれの常なる人間愛もておのれの民をいつくしみ給い，神を信ぜざるイズマイルの輩どもより（我等を）まぬがれしめ給うたのである』

そして，タタールがモスコの近辺を荒し廻つて引きあげる情景を描く折にも，『過ぎし年月の物語』で年代記者が主観的に顔を出して，ふみつけられた祖国の人々の痛々しい悲嘆を述べ，

その筆の裏では，悲壮なほどの祖国愛を神の愛を説いたように，此処でも，その記述の呼吸は全く同一であつた．即ち，

Отшедшим же Татаром с множеством полона и всякого товару и всякого узорочья наимавшеся, полона же только множество ведяху, яко тысяща число превъсхождаше. Жалостно же бе видети, достоино слез многых, яко един Татарин до четыредесяти христьян ведяше с нужею повязавши, многое же множество исъсечено, инии же от мраза изомроша, друзии же гладом и жажею умираху. Отци и матери плакаху, зряще чад своих разбиваемых и умерьщвяемых, тако же и чада рыдааху разлученна от родитель своих, и не бысть помилующаго, ниже избавляющаго, ни помогающего. И бысть тогда в всеи Рускои земли всем христьяном туга велика и плачь неутешим и рыдание и кричанье, вся бо земля пленена бысть начен от земли Рязаньскые и до Галича и до Белаозера, вси бо подвизашася и вси смутишася, многы бо напасти и убытки всем человеком здеяшася и болшим и меншим и ближним и далним, и не бысть такова, иже бы без убытка был, но вси в тузе и скорби мнозе и печалью одержими. Сию же скорбь за много времяне неци от книжник провозвестиша, глаголюще: "яко в придущее лето будет скорбь людем". Еже и збысться в время се. Во многых же местах от святых икон миро исхожаше, а от иных и кровь идяше на показание нам грешным, преже бо казненья бывают знамения и пращенья, да аще не покаемся, тогда по том казнь божья приходит на ны за наша прегрешения.

『ところで，タタールたちが，多くの捕虜及びあらゆる物資及びあらゆる高価な物を奪つて引きあげた時，捕虜の数だけでも，優に幾千を上廻るほどのものを引きつれて行つたのである．一人のタタールが四十人に及ぶキリスト教徒を強制的にしばりあげて引きつれていくのを見るのは，悲しく，多くの涙をさそつたのである．余りにも多くの人々が斬り殺され，また他の者たちは寒さのために凍死し，また他の者たちは飢えと渇きのために死んでいつたのである．おのれの子供たちが打ちさいなまれ，殺されて行くのを見て，父たち及び母たちは泣き，また子供たちは，おのれの親から引きさかれることを泣きさけんでいた．しかして，（その子等に）情をかけてやるものも，なぐさめてやる者も，助けてやるものとてもなかつた．しかして，その時には，ルシの国土全体にわたつて，総てのキリスト教徒たちに，大いなる哀傷と，てい泣はとゞめようとてなく，泣き叫びの声は満ちあふれていた．というのは，全土が，リヤザンの国からガリチまで及びベロオゼロまでも捕囚されていたからであり，総ての人々は苦しみ，すべてのものは動乱し，多くの災難と損害があらゆる人々に，年長者にも年少者にも，近き者たちにも遠き者たちにも，ふりかゝり，損害を受けないようなものは一人もいなかつたからである．総ての人々が悲嘆にくれ，深い悲しみに沈み，嘆きにとりつかれていたのである．この悲嘆をば，遥か以前から学者の或者たちは『来たるべき年には人々に悲嘆がおとずれるであろう』と述べ伝えていたのであつた．それがこの時代に実現したのである．多くの土地においては，聖なる聖像から聖油が流れ出て，また他の（聖像）からは血が流れ出ていたのは，実に罪深き我々に（これを）示さんが為なのであつた．というのは，前兆及び恐ろしききざしとして（神の）罰が現れ，もしも（我々が）悔悟しないならば，その後，神の罰は我々の罪の故に我々の上に来たるのである』

外敵の侵入及びその侵入による不幸を，年代記者は，神が罪の故に下し給う罰であると受けとめ，且つ，そうなるまでには，数々の前兆があつたと書きとめる姿勢は，まさしく『過ぎし年月の物語』の伝統であつた．そして，正視し得ないほどの悲惨な場面を，深い嘆きを突き抜けた，透明な筆致で書きあげ，却つて，そのことによつて，鋭い愛国的主張を言外に燃えさせたのは，これまた，『過ぎし年月の物語』が外敵ポロヴエツの侵入による悲惨な場面を書きとめた筆の運びと寸分違わないのである．モスコ年代記集の，この一節は，そのまゝの形で，ヴオロゴドスコ・ペルムスキー年代記，ニカノロフスキー年代記等にも読み取られるのである．

このエジゲイ≪Едигей≫を主領とするタタールの侵入を取り扱つたロシア諸年代記中で，その記事が最も詳しく，然も，『過ぎし年月の物語』を最も鮮かに反映しているのは，何といつても，パトリアルフ或はニコン年代記≪Патриаршая или Никоновская Летопись≫であろう．其処では，『過ぎし年月の物語』のネストルの直後の編集者セリヴエストル≪Селивестр≫の名前さえ明記して，（ロシア年代記全集才十一巻；二——頁）この記事が6917(1409)年の項で書きあげられているのである．その長文の記事に眼を通しつゝ，『過ぎし年月の物語』の姿勢や理念の反映する個所は，特に，原文引用をおこないつゝ，次に取りあげて見よう．

上に述べた数個の年代記と同じく，ニコン年代記も，この年6917(1409)年の項を冬に至るまでの記事で埋めた後，『その冬に』≪Тоя же зимы≫として『十二月二十日に』≪мѣсяца Декабря в 20 день≫と指定して，エジゲイがルシの国に来襲したことを詳しく伝えている．エジゲイのひきいる将たちの名前も詳しく列挙している．つゞいてヴアシリイ大公がエジゲイの来襲を聞いて悲しみに沈む記事があるが，悲しみ，なやまなけ

ればならない理由説明が此処では書きとられているのである。即ち，タタールたち —— ニコン年代記では，タタールと呼び，時には，異教徒外敵を一つに称して，イズマイルのやから≪Измаилтяне≫と呼んでいるが —— は，ずるくて，最初から偽りの和平をヴァシリイ大公と結んでいたからであるという。ニコン年代記は，此処で異教徒外敵についての一般論を展開し，統一さるべき祖国を望みつゝ，内紛不和をくり返すルシの公たちをも引き合いに出して来る。ルシの公たちの不和の種をまき，或はその不和を利用する外敵への憎しみを書きつけ，これを悪魔の故であるとするのである。

Никогда же бо Измаилтяне истинну глаголют христианом; аще убо когда немнози обрящутся Измаилтяне, тогда лестно и злоковарно и мир и любовь сотворяют, и честь дают, и тем злохитроство свое крыют и яд свой тайно имеют, и мир глубок обещавают, и таковым пронырьством Русскых князей друг з другом враждують, и от любве их отлучают, и особную рать межи их составляют, и в той разности сами втайне подкрадают их, злии волцы христианом обретаются наученим отца их сатаны. Якоже и ныне во дни сиа случится;.....

『というのは，異教徒外敵は絶対にキリスト教徒に対して真実を語ることはないのである。もしも，多少の異教徒外敵が居合わせるならば，その時には，人をだましてずるがしこく，和平と友交を結び，また，贈物をさゝげ，栄誉を（人に）与え，その様にして，おのれの悪がしこいことをかくし，おのれの毒をひそかに持ちつゞけるのである。しかして，深く和平を約束し，しかして，その様なずるさを以て，ルシの公たちを互いに敵対させ，公たちの友愛を分離させ，公たちの間に特に戦争を起さ

せ，しかして，その不和につけ込んで，自分たちは，ひそかに，彼等をかすめ取つているのである．キリスト教徒に（かゝる）悪しき狼が見られるのは，彼等（異教徒外敵）の父なる悪魔のそそのかしによるのである．全くそれと同じようなことが，今日もまた起つたのである……』

そして，年代記者は，『過ぎし年月の物語』と同じく，神を持ち出して愛国の情に燃えて，説き進めているのである．

Но Господь Бог своею благодатию и пречистаа Его Мати Богородица безделны советы разоряху; и егда вмале попустит им Бог ратовати нас, и мы тогда от дел и обычаев греховных отступити обещаваемся, и Бог милостию своею и пречистыа Его Богородица тишину нам дасть и благоданьство, и мы тогда в забытье приходим, от правды заблужаем, и друг друга ненавидим, и брат брата ратуем, и чюжаа возхищаем, и лукавьствуем; и того ради Господь Бог возставляеть на нас враги наша и посещает жезлом безаконна наша и ранит: многи бо, рече, раны грешному. Злочестивии же Агаряне, яко волны ухищряюще, подкрадают нас, да неколи князи, надеющеся, с ними истинно мирующе, и любовно пребывающе, безстражни от них будут, да обретше они время удобно себе,.....

『しかしながら，主なる神は，おのれの恩ちようにより，いと清きその母なる聖母も彼等（敵ども）の無益な相談を打ちくだき給うていたのである．しかして時に，敵どもに神がほんの少し我々を懲たせるよう仕向け給うような時には，我々はその時になつて，罪深い日頃の所業や習慣から離脱することを誓うのである．そうすると神はおのれの恩ちようを以て，またその母なるいと清き聖母も，我々に平和と平安を与え給うのである．しかし

て，その時になるとまた我々は，（それを）忘れてしまい，正義から迷い離れ，相互に憎しみ合い，兄弟が兄弟に戦いをしかけ，他人のものをかすめ取り，ずるい行いをくり返しているのである．そのために，主なる神は我々に向つて我々の敵を立たしめ給い，我々の無法を杖をもつてたづね給い，打ち給うのである．罪あるものには，きず多しと言われている通りである．兇悪なる異教徒たちは，あたかも狼の如くに奸策をめぐらして我々に近づき，もしも一時，公たちが期待して彼等と本当に和睦し，平和に時を過し，彼等に何の警戒もせずにいるなら，彼等は，おのれに都合のよい時を見出して……』

敵を信用して，和を結び，敵との和平締結によつて，味方同志の公たちの間に却つて内紛が起る．それこそ，実は敵の望むところであることを年代記者は強調しようとする．敵と通じて，味方の公たちを裏切り，自己の勢力を拡大しようとする愚かさを熱烈にいましめるのであつた．にもかゝわらず，タタールのエジゲイは，おのれの全軍を統率した上で，ヴァシリイ大公に偽りの和を請じ，多くの贈物を以て彼に栄誉を与えた．そして他のロシアの公たちの権力を協力して打ちくだき，ヴァシリイ大公をロシア全土の最大権力者にしようと話をもちかけて来たのであつた．ところがその頃，この話をもちかけられたヴァシリイ大公は，自分の妻の父〈TCTb〉であるリトアニヤの公と不和状態にあつた．リトアニヤ及びキエフの国を妻の父が支配していることが気に入らなかつたからである．ヴァシリイ大公は，エジゲイと協力することによつて，自己勢力の拡大を計ろうとしたのであつた．それを見抜いていたエジゲイは全面的にヴァシリイ大公に協力することを申し出るのである．ニコン年代記は，此処まで説明的に書いて来て，記述の筆にドラマテズムを盛るべく，エジゲイの言葉を組み込むのである，『他のルシの公たちは，我と汝との和平協力を見てとり，汝に向つては事を構えず温順になり，汝

をおそれるであろう．というのは，我が全帝国を以て汝に協力しているからである．その故に汝は，おのが地位を高め，万人をふるえ上らせることができるであろう』≪да и прочии увидятъ князи Русстии любовь нашу с тобою, и мирни и кротции тебѣ будутъ и устрашатся тебя, яко мнѣ царством помогающу тебѣ, и того ради вознесшеся, и устрашиши всѣхъ≫しかも，このエジゲイは，ロシアの公たち同志を戦わせようとして，一方ではトリアニヤ公にも使者を送つて，ヴアシリイ大公への憎悪をあふり立てようとするのである．ニコン年代記の記述は，このあたり，直接に使者口上の形などを利用して，物語の起伏を激しくしている．ヴアシリイ大公と協力を約束しながら，一方ではヴアシリイ大公を撃てといわんばかりの使者をリトアニヤ公に送つたエジゲイの口上として，ニコン年代記は，それを詳しく次の様に作文している．其処にも，また，『過ぎし年月の物語』が利用していた古い使者口上の素朴な形式の投影を見ることができるであろう．

Ты мне буди другъ, а яз тебе буду другъ; а зяти своего князя Василья Дмитреевича Московьскаго познавай, яко желателен бе в чюжиа пределы вступатися и не своя восхищати, и се убо и тебе подвизается ратовати и твоя пределы возхищати; блюдися убо от него, понеже и словеса мне многа глаголаше на тебя таковаа и таковаа, и сребра и злата много посылаетъ ко мне и ко царю, чтобы или аз самъ, или царя увещал со всею Ордою поити ратью на тебя и пленити и жещи землю твою, и чтобы ему засести грады твоя: сице убо онъ въздвизает нас на вражду к тебе, моя же любовь к тебе не угаснет никогдаже; сиа же вся моя словеса в себе точию имей и никомуже повеждь.

『汝は我が友たれ．しかして我は汝の友となろう．しかして，汝の娘のムコなるモスコのヴアシリイ・ドミトレーヴイチを知れ．即ち（彼は）他人の領域に踏み込むことを望み，他人のものを奪おうと望んでいたのである．だから，見よ，今（彼は）汝に向つて，戦い且つ汝の領域を奪い取らんとして軍を進めつゝあるのである．彼を警戒せよ．（彼は）我に向つて汝への多くの（悪しき）言葉を繰り返して告げ，多くの銀と金を我及び帝に贈り来たり，時には我自からが，また時には帝を説きふせて，我が全軍と共に（彼は）汝に進攻しようとし，汝の国を奪い焼こうとしたのである．汝の町々を彼が入手しようとしたためである．かくして，彼は，我等を汝への敵意に燃えさせているが，一方，汝に対する我が友情は決して消えることはないであろう．この総ての我が言葉をおのれの心に正しくとゞめ，誰にも口外することのないようにせよ』

この口上によつて，ロシアの公たちの間の紛争が大きく燃えあがることを，ひそかに望んで，エジゲイは得意であつたと記されている．そして，ニコン年代記の記述は，その折のエジゲイの心を，彼の独り言として書きとめている．さて，この口上を受けたヴアシリイ大公は自分の貴族や家臣たちを集めて，その口上を伝える．モスコの連中はそれを大いに喜び，エジゲイの友情を『モスコ全体が喜んだ』≪вся Москва веселяшеся≫のであつた．そして，モスコの連中は，タタールの軍隊と結んで先づリドヴア≪Литва≫を攻めるが，『多くの血が流れた』≪кровь многа проливашеся≫のだが，捕虜を手に入れ，財を奪うことによつて太つたのはタタールであつた．そしてまた，そのことを，モスコの連中は喜こんでいたのだが……と，年代記者は書いてから，然し，『老いし長老たちはこのことを良しとせずして，言つた』≪старцы же старые сего не похваляша, глаголюще≫と記し，その長老の厳しい批判の言葉を書き取つているのである．

其処には『過ぎし年月の物語』の主張の一つが，そのまゝの形で反映しているのである．

несть добра дума бояр наших, иже приводят на помощь себе Татар, наимюще их сребром и златом; не таковых ли ради преже сего Киеву и Чернигову напасти и беды многи прилучишася, имеюще брани межи собою, поднимающе Татар на помощь, и воюще брат брата и смерти предающе, и братние пределы восхищающе, а Половцы разсмотривше Русский наряд и все воиньство и крепость князей наших онех, и воеваша всех и сподолеша всем; егда и ныне такова хотят быти?

『我々（の国）の貴族たちの考えは良くない．彼等は銀及び金を以てタタールをやとい，おのれのために援軍としてタタールを招き来ているのである．かゝるものたちのためにこそ，先づ，キエフ及びチエルニゴフに不幸と禍の多くが起つたのではなかろうか．（かゝる者たちは）相互に争いをなし，タタールを応援に立たせ，兄弟が兄弟に向つて戦い，死を与え，兄弟の領域をうかがい取つている間に，一方では，ポロヴエツたちがルシの軍備を，我が国の或る公たちの堅固さとあらゆる軍力とを，調べ知り，しかして，総てを戦い破り，且つ，総てに打ち勝つて来たのではないか．しかるに，今もまたかゝるものになろうとするのか？』

そして，年代記者は書をつゞける．即ち，ところでヴアシリイ・ドミトレエヴイチ大公は，おのれの妻の父なるヴイトフト・ケストウチエヴイチ・トリアニア大公と戦い，（人々は）つかれ果て，しかして，戦闘停止を受け入れた．しかしながら，両者の間の怒りは増大し，多大なる苦しみと損耗とを双方は受けた．モスコに，長老の貴族たちがおらず，若い者たちが総てのことについて相

談し，和平破壊と戦と流血とを喜こんでいたのが原因であり，彼等の中には多くの支配秩序が乱れつゞけていたからなのである．一方エジゲイは両者のものたちの間に争いを絶えず起させていた．それというのも，一方は妻の父であり，一方は娘の夫であるという（二人の）近親関係から，ともに，戦いを（二人は）大して欲してはいないこと，及び流血を望まないこと，平和と友交とを望んでいることを知つた上でのことなのである．彼（エジゲイ）はこの二人を絶え間なくけしかけて争わせ，ルシの軍備を調べ，ルシの軍勢事情を観察し，ルシを戦いとろうとして，自分に都合のよい時機をうかゞつていたのである．ところが，この時，スシヴイトリガイロ・オルゲルドヴイチ公がモスコのヴアシリイ・ドミトレエヴイチ大公に使者をつかわして，二人で一方的にヴイトフトを（攻めようと）欲したのである．ところが，実は，スシヴイトリガイロは信仰上はリヤフ人であつたが，攻撃については勇敢で，防衛については堅ろうな気質の人物であつたので，この者のことを，大公はその全貴族と共に喜こび（迎え），彼に多くの町々を与えた．（それは）ほとんどモスコ大公国の半分にも及ばんとしたほどであり，栄光あるヴオロジメルの町も，その中の黄金の頂をもつたと言われている『いと清き聖母昇天』大教会も含まれていた．この教会は，黄金の五つの頂きをもち，その中には，多くの奇跡としるしをなし，異教徒をおそれさせるいと清き聖母の驚嘆すべき聖像が（安置されて）あつたのである．しかして，このようなものが，外来者のリヤフ人に与えられ，そのためにこそ，多くの禍が我々を捕えたのであり，かの勇敢なる公スシヴイトリガイロ・オルゲルドヴイチ自身も，その友敢なる軍勢も，エジゲイの来襲の折には弱輩の少年のように，混乱を起し恐怖してしまい，逃走に向わざるを得なかつたのである．……と年代記者は書きつゞけるのだが……此処には，長老たちの尊重さるべきこと，若年者たちが国をあやまる危険性の多

いこと，神をおそれ，尊ばないような折には，明らかな天罰の下ること……等々，そして，何よりも，仲間割れは故に乗ぜられるものとして，最も警戒されるべきことについての，『過ぎし年月の物語』の思想反すうが明らかに読み取られるのである．

さて，年代記者は，ヴアシリイ大公とヴイトフトが共にウグラ河≪Угра рѣка≫に来たつた時，しばらく対峙して，和睦したと書きしるすが，その用語を『(彼等は)古の流儀にのつとつて和を摂つた』≪взяша миръ по старинѣ≫とし，且つ，『過ぎし年月の物語』の締めくくりの言葉と全く同様に『各々帰途についた』≪разыдошася кождо во свояси≫とその用語とシンタツクスまで踏襲したのであつた．

これにつゞく記述によれば，この年の事件は次の様に展開する．

ルシの人々が戦いにつかれ果てている機会を利用してエジゲイは，ヴイトフトを攻める為だと称してヴアシリイに援軍を要求する．その使者の口上の真偽の判定に迷い，問い合わせの使者をルシの側から立てて，その返事を待つている間に，エジゲイは出陣してしまつたのである．ところが，待ちぼうけのモスコに向つて，実はエジゲイが進軍しつゝあつたのである．あわてたヴアシリイは妻子だけを伴つてコストロマに逃がれ，モスコは包囲されてしまつた．町の中では，反乱が起り，人々は恐れて逃亡しはじめ，盗人が横行した．町に火がつけられ，炎は音をたてゝ上り，四方からタタールは押しよせた．かくして，エジゲイは，反抗する者とてなくなつたところへ軍勢を進めてコロメンズクの郡をも手に入れたのであつた．――年代記者は『過ぎし年月の物語』と同じ手法で書きつゞける．『かくして主なる神は，我々の故どもの前に我等を押えしづめ給うた．我々の罪の故である』≪И тако смири насъ Господь Богъ предъ враги нашими, грѣхъ ради

наших≫もしも一人のタタールが出現すると，ルシの人々の多数がその一人のタタールに抗することができず，もしも二人或は三人のタタールが出現すると多くのキリスト教徒たちは妻や子を捨てたまゝ逃げ出すような状態であつたと記されている．タタールの軍勢は各地を攻略し，多くの人々を捕虜にし，ペレヤスラヴリを攻めて火をかけ，ロストフ，ドミトロフ，セルプホフ，ヴレヤ，ニージニイ・ノヴゴロド，ゴロジエツ，その他の町や村を押えては火をかけ，ふみつぶした．その他に，多くのキリスト教徒たちが凍死した．厳しい冬であり，寒風が吹きすさんだ季節だつたためである．エジゲイは逃げたヴアシリイを求めて手下を各地に派遣したが，彼を求め得なかつた．それでも，モスコだけは，やゝ，まともに残つたのは『神によつて守られていた』≪Богомъ съхраненъ бысть≫であり，『いと清き主の聖母の祈りによつた』≪молитвами пречистыа Его Матери Богородици≫であつた．エジゲイ自身はモスコの町に入らず，いつでもこの町を入手できるとして，その近くで越冬しようとしていたのである．エジゲイは此処でトヴエリのイヴアン・ミハイロヴイチ≪Иван Михаилович≫公に武器と軍勢を共にして協力せよと使者を立てる．ヴアシリイ大公を裏切ることも，エジゲイの求めを拒んで怒りを買うことも彼は欲しなかつた．ところが，あたかもこの時に，タタールのブラト帝≪Булат≫が別にルシの地に侵入し，エジゲイをまごつかせたのである．弱気になつたエジゲイは，残つたモスコ市民と和を誇じ，三千ルーブルだけ入手して引きあげたのであつた．勿論，多くの捕虜を引きつれていた．これこそ，年代記者によれば，『人間を愛し給う神のお情けであり，聖母と全ルシのピヨートル大府主教の情のおかげ』≪Человѣколюбца Бога милость и пречистыа Его Матери Богородици и великаго чюдотворца Петра митрополита всея Русии≫なのであつた．『神がタタールたちをおそれさせ，追い払い給うた』≪Господь Богъ устрашилъ

ихъ и отгналъ》のである．

さて，モスコから退去したエジゲイは，ヴァシリイ大公に使者を立てゝ，双方の協力体制をつくろうとする．ニコン年代記は此処で，甘言と術策と巧妙な言い廻しによつて綴られた非常に長い使者の口上を書きとめるのである．読者でさえその術策の巧妙さに乗りそうなほどの長い口上文を以て人々の倫理感をかき乱した後に，ニコンの年代記記者は，一転して，『過ぎし年月の物語』の鮮やかな倫理感に立ち戻るのである．『過ぎし年月の物語』の影響の跡が最も鮮やかに反映する個所は実は此処であつた．其処には，ネストルの直後の編集者セリヴェストルの名さえ読み取ることができる．即ち，上記の口上文よりは少し短い形で次の様な文章を読み取ることができる．

Нам же разумети подобает, откуду Агаряне тако возсташа на нас: не яве ли есть, яко за грехи наша попущаетъ их на нас Господь Богъ, да обратимся и покаемся? Много бо суть в нас неправды, зависти, ненависти, гордости, разбои, татбы, грабления, насилованиа, блуды, пианьства, обьядениа, лихоиманиа, ложь, осужение, смех, плесание, позорища бесовьскаа, возвышение, възвысящееся на разум Божий, и всяко непокорение закону Божию, и заповедей Господних презрение, и таковых ради грядет гнев Божий на сыны непокорениа. И аще от зла обратися и покаемся, помиловани и спасени будем от человеколюбца Бога; аще ли не обратимся и не покаемся, супротивнаа обрящем. Сиа вся написаннаа аще и нелепо кому видится, иже толико от случившихся в нашей земле несладостнаа нам и неуласканнаа изглолавшим, но взустителнаа и к ползе обретающаася и возставляю-

щаа на благаа и незабытнаа; мы бо не досажающе, ни поношающе, ни завидяще чти честных, таковаа вчинихом, якоже бо обретаем началнаго летословца Киевскаго, иже вся временнобытства земскаа, не обинуяся, показуеть; но и пръвии наши властодръжцы без гнева повелевающе вся добраа недобраа прилучившаася написовати, да и прочиим по них образы явлени будуть, якоже при Володимере Маномасе оного великаго Селивестра Выдобыжскаго, не украшая пишущаго, да аще хощеши, прочти тамо прилежно, да почет почиеши. Всяко бо благаа и спасенаа нестоящаго и будущаго века не во гневе и гордости и щаплении обетаются, но в простоте и умилении и смирении; смиреним бо вся благаа обретаются, без него же ничтоже бывает. Темъже и преже начялнии отцы безгневием и простотою и смирением вся блага и настоящаго и будущаго века обретоша и нам предаша, мы же, сим учящеся, таковаа вся прилучившаася во дни наша не преминухом наших дозрящих сих и прилежно внимающих, да таковым вещем разсужение разсудно да разсужают, и лутчаа и благаа да избирают, юннии же старцев да почитают и сами един без искуснейших старцев всякого земскаго правленна да не самочинъствуют. Красота убо граду старыа мужи, и честна дума с старыми и белыми сединами сущих; есть же и старость немноголетнаа, а четсна, по Соломану, седины бо есть , рече, мудрость человеком, и възраст старости житие нескверно; но убо всяко от всех слышится, яко красота граду есть старчество, понеже и Богом по-

чтено есть старчество; глаголеть бо Писание: вопроси отца твоего и возвестит ти, и старца твоа и рекут ти.

『異民族たちが何処から我々に向つてこの様に襲い立つたのかを，我々は知ることが必要である．我々に向つて主なる神が彼等を我々の罪の故に放ち給い，我々が心を正し，悔悟するようになし給うのは，明らかなことではないであろうか？．我々の間には，不正，羨望，憎悪，慢心，内紛，盗み，略奪，強制，いんとう，飲酒，飽食，収賄，虚偽，誹謗，非難，嘲笑，おどり，悪魔的な見せ物が多くはびこり，神の知恵にまで登らんとするあらゆる思いあがりがあり，神の法には従おうとする心が全くなく，主のいましめを軽蔑しているのである．かかることどもの故に，恭順ならざる息子たちに対して神の怒りが来たるのである．もしも〔我々が〕悪から心を正し，悔悟するならば，人間を愛し給う神により〔我々は〕愛され，救われるであろう．もしも〔我々が〕心を正さず，悔悟しないならば，敵するものたちに〔我々は〕当面するであろう．この様に書いて来たことは，我々の国に生まれ合わした限りの者にとつて，たとえ，心にそまないように思われ，我々にとつて快くなく，語り述べた者にとつても，心のなごむようなものではないにしても，然し〔実は〕望ましいものであり，利益になることであり，幸を呼び起すものであり，忘れるべからざるものなのである．我々は〔人を〕辱かしめることもなく，軽蔑することもなく，誠実な人々の誠実さをねたむこともなく，かゝる〔教訓〕を説き述べたのである．即ち〔我々が〕キエフの原初の年代記者に見出したようなことがらである．その年代記者は，あらゆる時折りの地上の出来事を非難することなく示しているのである．然し，我々の最初の時代の君主たちは，怒り止揚して，事件のあらゆる善と不

善を伝え書くように命じていたのであり，それ以後の者たちにとつては，この態度こそ明らかな手本にならなければならない．ウオロジメル・モノマハの時代に，かのヴイドブイジスキー・大セリヴエストルが，〔物事を〕飾り立てることなく書いたような〔態度である〕．もしも欲するならば，熱心にそれを読むことによつて，〔人は〕尊敬の念にかられるであろう．現在及び未来の世の，あらゆる幸と救いは，怒りや，高慢さや，華美の中には見出されるものではなくて，素朴さと，なごやかさと，恭順の中に見出されるものなのである．恭順さによつて，あらゆる幸は見出され，恭順さなくしては何一つ在り得ないのである．それだからこそ，昔にあつても，初期の父たちは，怒りなき心と素朴さと恭順によつて，現在及び未来の世の，あらゆる幸を見出し，しかして我々に伝えて呉れたのである．我々もまた，これらに学び，我々の時代に起つたあらゆるかゝる事柄をのべるに際しては，これらの洞察力あり，深く心を至す我々の先達たちを決して避けては通らなかつた．かゝる賢明なる者によつて物事の判断は行われるべく，しかして，人々もそれにならつて判断を行うべきである．しかして，良き幸を〔人々は〕見出すべく，年若きものも老令なるものを〔先人を〕尊うべく，最も優れた長老者たちを除外していては，おのれら自からだけではこの地上のあらゆる采配はふるえないものと知るべきである．老令なる人士は町の美であるというべく，老令にして髪の白い者たちとの相談こそは，ほめられるべきである．老令というのは単に年を重ねた以上に誠実なものなのである．ソロマンによれば，白髪とは，人間の英知であり，老いた年令とはけがれなき生活であるという．誰もが誰もから耳にしている如く，長老の動きは町の美であり，それは神によつて祝福されているからなのである．聖書も言つている．汝の父に問え．〔父は〕汝に答えるであろう．汝の長老に〔問え〕，〔長老は〕汝に語るであろう．と』

この年の記事は，ほとんど此処で終る．この後に数行書き加えられた文章は，別の事件（——ヴォルガ河とカマ河でのタタールとの戦いのために，ノヴゴロドの代官アンファル≪Анфалъ≫が捕えられて連れ去られた——）の記録にすぎない．

さて，『過ぎし年月の物語』が此処で特に反すうされた条件として，タタールが都モスコを荒したという民族的な不幸を示しておかなければならないであろう．民族のたい頭とその民族に蔽いかぶさる不幸とが重なつた時に，少くとも，修道院の出身者らしき年代記者たちが，年代記記録の姿勢を求めて回帰して行く先が，『過ぎし年月の物語』であつたことを，我々は此処で知ることができる．そしてまた，曾つて，『過ぎし年月の物語』が当時のルシの支配者の政治や軍事の動行に向つて，批判と主張とを持つていたのと同じように，此処でも，同じ姿勢の批判と主張とをもちつゞけていたように思われる．それほどまでに，『過ぎし年月の物語』の記録姿勢は巨大な残映を持ちつゞけていたと思われる．

だからこそ，実に十七世紀に至るまで後に参考文献に示すような年代記が書きつがれ，或は書き直される間に，古い時代の記事は勿論のこと，その時折の事件の記録に際しての姿勢や理念もまた，『過ぎし年月の物語』の強烈な残映の上に組み立てられたのであつた．それこそが，ロシアの独自の年代記文学の基盤であつたように思われる．

—完—

人 名 索 引
(Указатель личных имен)

Август Кесари 263, 266, 285, 286,
Авель 189, 190, 298, 305, 379, 555,
Авиа 262, 265, 373, 383,
Авимелех 273, 283, 299, 503, 505, 555, 556,
Авраам 262, 265, 269, 270, 272, 273, 283,
Аврам 253, 262, 265, 273, 283, 296, 301, 321,
352, 398, 400, 401, 503, 505, 516,
Авриан 277, 287,
Аврилиан 264, 267,
Автухи 393, 395,
Агаи 276, 286,
Агамемнон 359,
Агафон 393, 395,
Адам 261, 262, 263, 265, 266, 271, 272, 276, 278,
277, 280, 281, 282, 285, 286, 287, 288, 289,
290, 291, 352, 378, 380, 388, 425, 508,
Аданаи 397, 399,
Адриан 264, 267,
Аепа 438,
Азариа 262, 265, 273,
Азгугуй 438, 457,
Аир 273, 283,
Аклан 438,
Александр 263, 266, 277, 280, 286, 288,
Александр(царь византийский) 38, 40, 286, 287,
353, 420,
Александр Дмитриевич 281, 291,
Александр Македонский 263, 266, 269, 270, 274,
284, 424, 426, 465, 467,
469, 470, 582, 584, 678,
Александр Мамал 264, 267,
Александр Невский 107, 396, 616,
Алеша Попович 75, 77,
Аманати 273, 283,
Амартол 240, 241, 245, 249, 252, 257, 261, 268,
347, 351, 358, 359, 360, 361, 363, 377,

379, 380, 402, 403, 426, 589, 602, 619,
631, 632, 640, 641,
Амесия 262, 265, 278, 283,
Амон 423, 424,
Амос 262, 266, 273, 284,
Анастасий 253, 255, 264, 264, 267, 278, 299, 288,
Анастасие Артемь 264, 268,
Анастасий (царьградский) 393, 395,
Анатолий 333,
Андрей Юриевич 281, 290,
Андрей Ярославич 281, 291,
Андриян 276, 286,
Анни 20, 27,
Анолинарий (Александрийский) 393, 395,
Антиох 213, 214, 274, 275, 285, 284, 298, 305,
582, 584,
Антоний (игумен) 330, 331,
Антоний 28, 277, 286, 310, 311, 317, 321, 322,
664,
Антоний Пороский 338, 343,
Антонин Галл 277, 286,
Антонин Ивир 277, 286,
Анфаль 722,
Аньна 489, 491,
Аод 273, 283,
Апа 438, 456,
Аполлониян 253, 255,
Арам 675, 678,
Арий 278, 287, 394,
Арисох 263, 266,
Аркадии 264, 267, 278, 287,
Арсам 263, 266,
Артáван 274, 284,
Артаксеркс 263, 268, 274, 284,
Артаксеркс(долгорукий) 274, 284,
Арфаксад 262, 265, 272, 282,
Архилай 275, 285,
Аръсланапа 694,
Асадук 435, 435, 454,
Асинь 436,
Асколд 35, 59, 92, 126, 249, 250, 528, 606, 619,
620, 621, 622, 623, 624, 626, 627, 628,
629, 630, 631, 632,
Асколд (воевода) 473,
Асмуд 681,

Афет 241, 242, 243, 244, 272, 282, 466, 467, 469, 588, 589, 590, 591, 593, 594, 597, 598, 599,
Ахазь 262, 265, 273, 274, 283,

Батубарс 436, 438, 454, 457,
Белдюзь 694,
Белкатгин 436, 454,
Беренди 148,
Блуд 645, 646, 684,
Болеслав 79, 81, 80, 82, 550,
Боняк 437, 438, 455, 456, 640,
Борис Василкович 281, 291,
Борис Владимирович 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 188, 189, 280, 290, 294, 298, 299, 302, 305, 346, 401, 437, 453, 455, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 518, 520, 521, 522, 523, 526, 527, 551, 651, 657, 685, 688,
Борис (князь Болгарский) 352,
Борис Вячеславич 696,
Борис(князь Ростовский) 281, 291,
Бохмит 480,
Боян 194, 536, 537,
Брячислав Изяславич 546, 547, 662, 685,
Будый 80, 81,
Булат (царь) 703, 717,
Бурчевич 438,

Вавильий 279, 289,
Вадим 681, 682,
Валаам 253, 256,
Валтасарь 262, 266, 274, 284,
Варак 273, 283,
Варда Фока 259, 260,
Варлам 663, 664,
Варух 274,
Варяжько 79,
Василей 703,
Василий 279, 280, 288, 290, 429, 447, 512, 514,
Василий Дмитреевич Московский 708, 709, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718,

Василий Казимирович 75,
Василий Новый 363, 364, 367, 368, 641,
Василко Костянтинович 281, 291, 489, 490,
Василко Ростиславич 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150--159, 161, 162, 164, 174, 572, 573, 670, 671, 690, 691, 696,
Василь 174, 175, 195,
Велмуд 38, 40,
Вигилий 393, 395,
Витофт 714, 715, 716,
Володарь 573, 670, 671,
Володимер (князь былин) 184,
Володимер Давыдович 184, 206,
Володимер Игоревич 184, 185,
Володимер Всеволодович 28, 30, 31, 106, 107, 139, 143, 144, 145, 149--159, 161, 162, 163, 165, 174, 205, 280, 290, 324, 422, 426, 445, 463, 464, 568, 569, 570, 576, 577, 578, 579, 690, 691, 693, 694, 695, 700, 701, 719, 721,
Володимер Святославич 54, 55, 79, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 89, 95, 101, 111, 169, 171, 181, 182, 190, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 208, 224, 225, 270, 271, 280, 289, 290, 291, 298, 305, 346, 349, 368, 369, 370, 373, 374, 375, 376, 381, 382, 384, 388, 390, 392, 395, 396, 400, 401, 404, 416, 417, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 500, 508, 510, 511, 516, 526, 533, 538, 539, 543, 568, 606, 635, 636, 644, 645, 646, 647, 649, 650, 662, 663, 683, 684, 685, 689, 690, 692, 700, 701, 702,
Володимер Ярославич 12, 13, 14, 28, 421, 422, 530, 531, 618, 619,
Волх(герой былин) 63, 64, 65, 665, 666, 667,
Волчий Хвост 198, 538,

Вольга (герой былин) 61, 65, 66, 67, 70,
Всеволод Изяславич 280, 290,
Всеволод Костянтинович 281, 291,
Всеволод Олгович 290,
Всеволод Святославич 184, 185, 696,
Всеволод Ярославич 83, 99, 100, 101, 185, 186, 190, 211, 407, 416, 417, 421, 435, 495, 498, 499, 546, 547, 548, 553, 554, 561, 568, 574, 576, 577, 652, 654, 689, 700, 701,
Всеволод Юрьевич 281, 290,
Всеслав Брячиславич 15, 21, 138, 139, 185, 186, 211, 338, 435, 453, 498, 499, 546, 547, 548, 662, 665, 668,
Вятко 601, 602,
Вышата Остромирович 12, 13, 14, 16, 22, 24, 33, 34, 35, 82, 119, 120, 221, 530, 540, 541, 543, 544, 573, 618, 619,
Гаие 264, 267,
Гал 277, 287,
Галв 276, 286,
Ган 277, 287,
Гедеон 273, 283, 423, 424, 426, 555, 556,
Гедивон 385, 389,
Георги (сын Угърский) 113, 114, 512,
Георгий (царьградский) 393, 395,
Глеб Василкович 281, 291,
Глеб Володимерович 111, 112, 115, 116, 117, 204, 280, 204, 281, 290, 291, 294, 300, 302, 346, 401, 402, 437, 438, 455, 456, 509, 512, 513, 514, 515, 518, 520, 521, 522, 523, 526, 527, 531, 657, 658, 659, 663, 685, 688,
Глеб Святославич 20, 27,
Глеб Юрьевич 281, 290,
Гог 469, 470,
Гордии 277, 286,
Горислава 85, 86,
Горясер 115, 116,
Гофоил 262, 265, 273, 283,
Григорий 286,
Григорий (Богословец) 393, 394,

Григорий (чудотворец) 227, 286,
Гюрии 438, 456,
Гюрята Рогович 345, 464, 465,

Давыд 262, 265, 273, 282, 283, 298, 305, 460, 504, 505, 517, 519, 645, 673, 676, 674, 677,
Давыд Владимирович 164, 165, 174, 175, 176,
Давыд Игоревич 144, 145, 146, 149, 150--159, 161, 162, 163, 670, 671, 690, 691,
Давыд Святославич 141, 142, 144, 145, 147--159, 437, 438, 455, 456, 572, 473, 690, 691,
Дамас (римский) 393, 394,
Данил 274, 284, 504, 505,
Данил Александрович 187,
Дарие 263, 266,
Дарии 262, 266, 274, 284, 675, 678,
Дарии Иарсаманин 274, 284,
Дарии Македонин 467, 469,
Дарий Остапьянин 274, 284,
Девора 273, 283,
Декие 264, 267,
Деместиян 253,
Демьян (презвутер) 325, 326, 327,
Дикии 277, 287,
Диоклитиян 264, 267, 277, 287,
Диоскор 278, 287,
Дионисие 263, 266,
Дир 35, 59, 92, 126, 249, 250, 528, 606, 619, 620, 621, 622, 624, 628, 629, 630, 631, 632,
Дмитрий Александрович 281, 291,
Дмитрий Борисович 281, 291,
Дмитрий (святой) 38, 40, 312, 321,
Добрыня (герой былин) 70, 71, 72, 73, 74, 75, 77, 89,
Добрыня (воевода Владимира) 79, 82, 84, 85, 86, 87, 88, 89,
Доментиян 276, 286,
Доместиян 264, 267,
Домнин (Антиохийский) 393, 395,

Евга 379, 384, 388,

Евер 262, 265, 272, 282,
Евергет 263, 266,
Евтух 278, 287,
Едикей 703, 704, 708, 711, 712, 713, 715, 716, 717, 718,
Езекии 262, 266, 273, 283, 468, 470,
Елена 370,
Елизар 275,
Елисей 262, 265, 273, 283,
Еловить 512,
Елом 273, 283,
Емерей 274,
Енос 261, 265, 271, 272, 282, 299, 306,
Енох 299, 306, 262, 265, 272, 282, 505, 503, 555, 556,
Епифан 263, 266,
Еремия 326, 327,
Ерина 265, 268,
Есевон 293, 283,
Еффем 338, 348,
Ефтан 273, 283,

Захарии 278, 288,
Зеноб 9,
Зинон 278, 288,

Иакий 329, 330, 331, 332, 333, 334,
Иаков 262, 265, 273, 283,
Иан 28
Иапси 279, 288,
Иаред 261, 265, 272, 282,
Иван 275, 285,
Иван (епископ) 28,
Иван (князь) 703, 704,
Иван Михаилович 717,
Иван Порфирогент 280, 290,
Иван(царь греческий) 239,
Игнат 276, 286,
Игорь Рюрикович 37, 39, 42, 43, 44, 45, 47, 55, 59, 66, 92, 101, 127, 168, 177, 179, 194, 237, 257, 270, 271, 280, 288, 353, 356, 358, 359, 360, 361, 362, 368, 472, 606, 607, 620, 621, 623, 624, 625, 627, 628, 629, 630, 632, 634, 641, 680, 681, 682, 683,

Игорь Святославич 128, 184, 185,
Игорь Ярославич 211,
Иезекий 229,
Иехониа 262, 266, 284,
Измаил 423, 424, 425, 426, 556, 567, 638, 639, 705, 709,
Изяслав Владимирович 85, 86, 181, 145, 312, 318, 321, 331, 662, 685, 686, 687,
Изяслав Давыдович 108,
Изяслав Мстиславич 281, 290,
Изяслав Ярославич 134, 137, 138, 140, 185, 186, 190, 191, 211, 227, 280, 290, 407, 434, 436, 452, 453, 454, 460, 497, 498, 499, 546, 547, 553, 554, 572, 652, 653, 654, 655, 668, 669, 686, 687, 689, 696,
Илиа 262, 265, 283, 273,
Илии(жрец) 273, 283,
Илья(ерусалимский) 393, 395,
Илья(герой былин) 68, 69, 70, 75, 77,
Иоаким 262, 266, 274, 284,
Иоан 275, 283, 286, 387, 653, 655,
Иоан(богослов) 276, 286,
Иоан(игумен) 335,
Иоан(магистр) 259, 260,
Иоан(митрополит) 28, 532, 657,
Иоан Черниговский 338, 343,
Иоасафат 262, 265, 273, 283,
Иоаф 262, 265, 273,
Иоахаз 262, 266, 284,
Иорамь 262, 265, 283, 293,
Иосиа 285,
Иосие 262, 266, 273, 284,
Иосиф 276, 383, 386, 387,
Ипполит 277, 286,
Ираклии 264, 268, 278, 288, 599, 600,
Ирина 279, 288,
Ирод 275, 282, 283, 285, 286, 402,
Исаий(епископ) 28,
Исаак 262, 265, 273, 283,
Исаия 293, 294, 298, 305,
Исакий 420,
Искал 495,

Исус навгик 273, 283,
Иуалентиан 264, 267,
Иувиань 264, 267,
Иид 262, 266,
Иулиан(преступник) 264, 267, 278, 287,
Иуль Кесарь 263, 266, 275, 285,
Иустин(богослов) 286,
Иустин 264, 268, 278, 288,
Иустин(нетии Устьяна) 278, 288,
Иустин Фракс 264, 268,
Иустинин 278, 288,
Иустиниян 264, 268, 279, 288,
Иулии Август 275, 276, 285, 286,
Июда 253,
Ияков 276, 286,
Кааф 262, 265, 273, 283,
Каин 189, 190, 298, 299, 305, 307, 378, 379, 555,
Кианан 261, 262, 265, 272, 282,
Кайафа 253, 256,
Камбуси 272, 284,
Камвись 263, 266,
Карин 277, 287,
Карь 264, 267, 277, 287,
Карл 38, 40,
Каур 9,
Кий 4,5, 6, 7, 8, 9, 10, 34, 36, 56, 57, 58, 61, 62, 249, 582, 584, 585, 597, 606, 609, 610, 622, 623, 627,
Кир 262, 266,
Кирилл Туровский 98,
Китаонна 694,
Клавдии 264, 267, 276, 277, 286, 287,
Клеопатра 263, 266, 275, 285,
Клестин 393, 394, 395,
Климент 337, 342, 539,
Коксусь 438,
Колчи 161, 162,
Комод 277, 286,
Коноб 20, 27,
Косньчятин 550;
Коснячько 546, 547,
Костянтий 264, 267, 277, 287,
Костянтин 264, 267, 277, 280, 290,
Костянтин Борисович 281, 291,

Костянтин(царь Византийский) 237, 264, 267, 269, 270, 271, 347, 351, 352, 356, 358, 369, 370, 397, 489, 490,
Костянтин(иконоборец) 213, 215, 264, 268, 269,
Костянтин(сын Львов) 279, 288,
Костянтин(сын Ираклиев) 264, 268, 278, 288,
Костянтин Всеволодович 281, 291,
Костянтин(посадник) 80, 81, 82,
Костянтин(внук Иракилиев) 278, 288,
Костя 264, 267, 277, 287,
Куман 694,
Курил(Александрийский) 393, 395,
Курил (Ерусалимский) 393, 394,
Куртк 694,
Курь 78, 79,
Куря 681,
Кчий 694,
Кюр 274, 284, 288,
Кюриней 285,

Лавдон 273, 283,
Лазарь 174, 175,
Ламех 262, 265, 272, 282, 299, 306, 555, 556,
Ларион 308, 309,
Лев 268, 279, 280, 288,
Лев(великий) 264, 267,
Лев(византийский) 236,
Лев Конон 264, 268, 279, 288,
Лев(сын Константинов) 264, 268,
Левгий 262, 265, 273, 283,
Левонтий 393, 395,
Леон(великий) 38, 39, 40, 41, 251, 252, 278, 288,
Леон(малый) 278, 288,
Леон(отец Костянтина иконоборца) 213, 215,
Леонид 277, 286,
Леонтий 279, 288,
Лихачев 89, 364, 367,
Лот 296, 301, 424, 503, 505,
Лука(епископ) 28,
Лыбедь 4, 5, 597, 627,
Маврикий 213, 215, 264, 268, 288,
Магог 469, 470,
Мадияне 273, 283,

Макарии 279, 288,
Максемьян 277, 287,
Максим 277, 286,
Максимин 264, 267,
Мал 194, 683,
Малелеил 261, 265, 271, 272, 282,
Мамврий 20, 27,
Манамах Юрий Владимирович 281, 290,
Манасия 262, 266, 273, 284,
Мануил 281, 290,
Маркиан 264, 267, 278, 287,
Маркин 277, 286,
Марко 276, 286,
Марие Юрьевский 338, 343,
Мария (Богородица) 383, 382, 386, 387,
Мария(жена Иеова) 29, 30, 338, 343, 344,
Марфа Всевлавна 665, 666,
Матфей 328,
Мафусал 262, 265, 272, 282,
Менандр 254, 267,
Ментей 9,
Мефодий 352,
Мефодий Патарийский 345, 346, 423, 424, 425, 426, 465, 467, 470,
Мелетий 393, 394,
Михаил 2, 65, 268, 269, 270, 279, 288, 289,
Михаил(святой) 146, 324, 471, 532,
Михаил(царь царьградский) 35, 250, 420, 584, 585, 606, 607, 623,
Михаил(зять Ставракиев) 279, 288,
Михаил Трибекович 327,
Михаило(герой былин) 70,
Михайло Юриевич 281, 290,
Митрофан 393, 394,
Моах 423, 424,
Мойсей 20, 27, 262, 265, 269, 270, 273, 283, 380, 503, 505, 613, 674, 676, 677, 679,
Михей 262, 265, 283, 273,
Мстислав Владимирович 140, 204, 207, 208, 209, 281, 290, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 556, 557, 558, 559, 572, 684, 686, 687, 702,
Навузардан 268, 266, 274, 284,

Навуходоносор 257, 262,
Наста(десядинный) 80, 82,
Настас 539,
Нахор 262, 272, 282,
Неврод 379,
Невронь 271, 281,
Немерьян 277, 287,
Нектан 590, 593,
Нерон 264, 267, 276, 286,
Неруи 264, 267, 276, 286,
Нестор 2, 218, 228, 230, 291, 324, 339, 341, 581, 589, 597, 599, 601, 602, 605, 606, 608, 610, 612, 614, 616, 617, 618, 619, 631, 632, 633, 635, 636, 637, 640, 641, 692, 699, 702, 718,
Несторий 278, 287,
Никанор 274, 284,
Никифор 265, 268, 279, 288, 700, 701,
Никифор(патриарх) 269, 351, 352, 641,
Николай 573, 693,
Никола(митриполит) 100,
Никон 2, 497, 499, 529, 532, 533, 534, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 543, 544, 551, 553, 558, 559, 560, 574,
Никон(игумен) 329,
Ной 241, 242, 262, 265, 272, 282, 379, 385, 389, 503, 505, 586, 590, 614, 689, 695,

Овчи 438,
Октавин 275, 285,
Олег 37, 39, 38, 40, 41, 42, 93, 94, 95, 101, 194, 234, 236, 252, 269, 270, 271, 280, 288, 289, 352, 353, 354, 355, 358, 601, 606, 620, 621, 623, 624, 625, 627, 628, 631, 632, 633, 635, 643, 660,
Олег Святославич 139, 140, 141, 142, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 156, 155, 157, 158, 159, 371, 372, 437, 438, 453, 455, 463, 498, 570, 571, 572, 651, 662, 681, 690, 691, 696,
Олена 277, 287,
Олма 620, 621, 629, 630,
Ольга 82, 90, 91, 92, 101, 117, 127, 176, 177, 179, 280, 288, 368, 369, 370, 472, 473, 474, 477,

487, 500, 501, 502, 504, 505, 506, 507,
509, 515, 516, 526, 541, 542, 632, 543,
644, 645, 681, 688,
Ольский 280,
Оньдрей 347, 348, 349, 350, 592, 593, 596,
Оньдреян(римский) 359, 393, 395,
Орест 359,
Оригеон 277, 278, 286, 288,
Остромир 2, 14, 32, 204, 221, 530, 531, 541, 543,
613,
Офон 276, 286,
Офонаси 393, 394,
Оховия 283,
Охозиа 262, 265, 273, 283,
Охония 274, 284,
Охось 263, 266,

Павел 276, 285, 286, 420,
Памъфил 43, 45,
Памъфил(деместик) 362, 363, 364, 366,
Передслава(сестра Ярославля) 225, 515,
Петр 276, 286,
Петр(александрийский) 393, 395,
Петр Гугнивый 393, 395,
Петр(брат Оньдрея) 592, 595,
Петр(архиепископ) 717,
Перун 198, 199,
Пилат 383, 387,
Пилат (александрийский) 393, 395,
Порей 530, 531, 540,
Поромон 226,
Провь 264, 267,
Прол 277, 287,
Протинакс 277, 286,
Птоломей 263, 266, 274, 275, 284,
Птоломей Евергеть 263, 266,
Птоломей Сотир 263, 266,
Птоломей Филадерфь 263, 266,
Птоломей Филопатор 263, 266,
Путша 112, 114, 511,

Рагал 262, 265, 272, 282,
Радим 601, 602,
Ределя 207, 208, 209, 534, 535, 536, 537,

Рим 582, 584,
Рогнеда 79, 644,
Ровоам 262, 265, 283, 273,
Рогволод 84, 85, 644,
Роман 280, 288, 298, 305,
Роман (князь Новгородский) 197,
Роман Ростиславич 281, 290,
Роман (царь византийский) 237, 256, 358, 359, 360, 368,
Ростислав Владимирович 183, 530, 532,
Ростислав Всеволодович 28, 30, 31, 422, 427, 436, 445, 455, 540, 559, 569, 570, 576, 577, 693,
Ростислав Мстиславич 281, 290,
Рюрик 279, 289, 606, 608, 609, 610, 611, 612, 620, 622, 623, 625, 626, 627, 629, 630, 632, 633,

Сакзь 436,
Сал 262, 265, 272, 282,
Самагар 273, 283,
Самоил 273, 283,
Самсон 273, 283,
Сарра 269, 301,
Саул 253, 256, 273, 283, 435, 454,
Свавк Скордятич 434,
Свендел 77, 78,
Свеналд 78, 79, 239, 473, 477, 478, 680, 682, 683,
Святогор 61, 67, 68, 69, 70,
Святополк Изяславич 15, 21, 31, 55, 99, 100, 139, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150--159, 161, 162, 165, 215, 421, 422, 637, 670, 671, 690, 691,
Святополк Ярополкович 79, 80, 81, 82, 112, 113, 111, 115, 116, 117, 188, 189, 203, 204, 270, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 304, 305, 307, 402,
Святополк Ярославич 280, 290, 421, 422, 435, 436, 438, 453, 455, 456, 498, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 522, 525, 526, 532, 546,547, 548, 550, 554, 555, 556, 561, 565, 566, 568, 569, 570, 571, 572,

573, 575, 577, 578, 579, 580,
685, 688, 694, 695, 696,
Святослав Владимирович 112, 229, 292, 293, 294,
297, 305, 331, 510, 514,
515, 575,
Святослав Всеволодович 124, 281, 291,
Святослав Игоревич 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54,
55, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 65,
66, 77, 78, 92, 101, 119, 120,
195, 196, 222, 223, 224, 239,
270, 280, 289, 473, 474, 475,
476, 477, 507, 606, 643, 644,
681,
Святослав Ярославич 16, 17, 18, 21, 24, 79, 81,
211, 227, 228, 229, 231, 407,
423, 452, 498, 499, 546, 547,
688, 689,
Севгир 287,
Севир 277, 286,
Седекие 262, 266, 274, 284,
Селевк 274, 284, 582, 584,
Селивестр 2, 160, 324, 325, 471, 493, 692, 699,
700, 702, 708, 718, 719, 721,
Селивестр(Римский) 393, 394, 581, 582,
Семеон(Болгарский) 358, 359,
Семеон(Греческий) 251, 252, 416,
Семец 436, 454,
Серух 262, 265, 272, 282,
Сидирит 263, 266,
Сим 241, 242, 243, 244, 262, 265, 272, 282, 586,
590, 593, 594,
Симон 20, 26, 254, 257,
Синеус 279, 289, 608, 609, 620,
Сиф 261, 265, 271, 282,
Скева 253, 256,
Сновид Изечевич 148,
Соловьев 32,
Соломон 262, 265, 269, 270, 273, 283, 401, 405,
504, 505, 506, 508, 519, 522, 643, 644,
647, 648, 719, 721,
Софония 274, 284,
Срезневский 470, 613,
Ставуг Тортятич 437, 452,

Ставракии 265, 268, 279, 288,
Стемид 38, 40,
Стефан(византийский) 237, 356,
Стефан(Володимерский) 237, 356,
Стефан(епископ) 337, 342,
Стефан(игумен) 229, 697,
Стефан(первомученник) 276, 285,
Стефан(черноризец) 329,
Сурьбарь 694,
Сусьвитригайло 715,

Таким 277, 287,
Тарасий 393, 395,
Тивелии 263, 267, 276, 278, 286, 288,
Тивелии Апсимар 264, 268,
Тивелий Иапсии 288,
Тимофей (Александрийский) 394, 395,
Тит 264, 267, 276, 286,
Тит Антонин 264, 267, 276, 286,
Триян 264, 267,
Торчин 514,
Триверии 264, 268,
Троян 276, 286,
Трувор 279, 289, 608, 620,
Тугоркан 437, 455,
Тур 87, 88,
Туряк 174, 175,

Уалентиниан 264, 267,
Уаль Гратиан 264, 267,
Увалениян 278, 287,
Увалентиян(новый) 278, 287,
Увалерьян 277, 287,
Увеналий (Ерусалимский) 393, 395,
Успаниян 364, 367,
Улан 161, 162,
Улемардах 262, 266, 274, 284,
Улисиян 277, 287,
Урусоба 694,
Успасьян 276, 286,
Устьян 278, 288,

Фалек 262, 265, 272, 282, 590, 593,
Фар 262, 265, 272, 283,

Фарлоф 39, 40,
Федор 43, 45,
Федор(князь) 703,
Федор(стратилат) 362, 363, 364, 366,
Федор (Антихохийский) 393, 395,
Федосии 279, 288,
Фекла 279, 289,
Феодор 258,
Феодосии 28, 29, 30, 229, 230, 264, 268, 280,
290, 313, 321, 326, 327, 329, 332, 335,
336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343,
344, 345, 406, 413, 497, 580, 637, 638,
639, 664, 673, 676, 697, 698,
Феодосий(великий) 264, 267, 278, 287,
Феодосий(малый) 267,
Феодора 279, 289,
Феофан 43, 45, 258, 259, 260, 262, 363, 364,
Феофан (Антиохийский) 393, 395,
Феофил 279, 289,
Феофил Трофорь 265, 268,
Фефел 239,
Филиппик 264, 268,
Филикс 279, 288,
Филип 264, 267, 274, 277, 284, 286,
Филипп(отец Александра Македонского) 467, 469,
Филомитор 263, 266,
Фиск 263, 266,
Фиф 539,
Фока 43, 45, 264, 268, 278, 288,
Фока(патрекий) 632, 363,
Фол 467, 469,
Фола 273, 283,
Фотьи 35, 36,

Хам 241, 242, 243, 244, 272, 282, 587, 590, 593,
594,
Хереан 9,
Хоздрои 278, 288, 699, 600,
Хорив 4, 5, 9, 58, 585, 597, 606, 609, 610, 622,
623, 627,
Хузита 417, 469,

Цемский (Иван) 289,
Цемский(царь греческий) 239, 501,

Целий 286,

Ченегрепа 694,

Шахматов 426, 479,
Шаркань 438, 457,

Щек 4, 5, 9, 58, 585, 597, 605, 609, 610, 622, 623, 627,

Юрий Всеволодович 281, 291,

Якун 557, 558,
Ян Вышатич 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 53, 54, 55, 56, 221, 406, 530, 539, 540, 544, 564, 570, 573, 574, 575, 578, 618, 619, 672, 673,
Ярополк Владимирович 281, 290,
Ярополк Изяславич 15, 21, 181, 436,
Ярополк Святославич 78, 79, 84, 86, 87, 88, 270, 271, 280, 289, 299, 371, 372, 436, 454, 455, 493, 606, 644, 656, 657, 662, 681, 684,
Ярослав Владимирович 10, 12, 13, 14, 15, 21, 79, 80, 81, 82, 83, 87, 115, 116, 133, 135, 188, 189, 203, 204, 207, 208, 210, 224, 225, 226, 270, 280, 290, 295, 296, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 305, 307, 308, 309, 319, 402, 403, 406, 416, 417, 426, 438, 445, 494, 509, 513, 514, 515, 525, 526, 527, 528, 534, 536, 537, 543, 544, 550, 551, 552, 553, 554, 556, 557, 558, 559, 568, 606, 618, 619, 633, 650, 651, 660, 661, 663, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 700, 701,
Ярослав Всеволодович 281, 291,
Ярослав Святославич 145,

(конец)

参　考　資　料

Лаврентиевская летопись 1846 г.
Троицкая летопись 1846 г.
Отрывок из хронографа Геория Амартола 1846 г.
Отрывок из Софийского харатейного номоканона 1846г.
Отрывок из харатейного Паремейника 1846 г.
Отрывок из Патерика Печерского 1846 г.

Ипатиевская летопись 1843 г.
Густинская летопись 1843 г.

Новгородская первая летопись 1841 г.
Новгородская вторая летопись 1841 г.
Роспись, или краткий летописец Новгородских владык 1841 г.
Отрывок из разряда Новгородских летописей 1841 г.
Новгородская третья летопись 1841 г.
Извлечение из рукописи об осаде Тихвинского монастыря Шведами, в 1613 году. 1841 г.

Новгородская четвертая летопись. 1848 г.
Псковская первая летопись 1848 г.

Псковская вторая летопись 1851 г.
Софийская первая летопись 1851 г.

Софийская первая летопись 1853 г.
Софийская вторая летопись 1853 г.
Отрывок летописи по Воскресенскому повоиерусалимскому списку 1853 г.

Воскресенская летопись 1856 г.
Средний текст летописи Нестора 1856 г.
Воскресенская летопись 1859 г.
Патриаршая или Никоновская летопись 1862 г.
Патриаршая или Никоновская летопись 1885 г.
Патриаршая или Никоновская летопись 1897 г.
Патриаршая или Никоновская летопись 1901 г.
Патриаршая или Никоновская летопись 1904 г.

Дополнения к Никоновской летописи 1906 г.
Так называемая Царственная книга по списку московской синодальной Библиотеки № 149. 1906 г.
Повесть о честнем житии царя и великого князя Федора Ивановича всея Руссии. 1910.
Новый летописец 1910 г.

Летописный сборник, именуемый Тверскою летописью 1863 г.

Летописный сборник, именуемый летописью Авраамки 1889 г.

Западнорусские летописи 1907 г.

Симеоновская летопись 1913 г.

История о Казанском Царстве (Казанский летописец) 1903 г.

Львовская летопись (Первая часть) 1910 г.
Львовская летопись (Вторая часть) 1914 г.

Книга степенная родословия (Первая часть) 1908 г.
Книга степенная родословия (Вторая часть) 1913 г.

Русский хронограф (Первая часть) Хронограф редакции 1512 года 1911 г.
Русский хронограф (Вторая часть) Хронограф западно русской редакции 1914 г.

Ермолинская летопись 1910 г.

Типографская летопись 1921 г.

Летопись по Уваровскому списку 1949 г.
Начало летописи по Эрмитажному списку 1949 г.
Тексты летописи основного Уваровского списка, восстанавливемые по Эрмитажному списку 1949 г.

Вологодско-Пермская летопись 1959 г.
Окончание Синодального списка 1959 г.
Окончание Академического списка 1959 г.

Окончание Воронцовского списка 1959 г.
Повесть о Мамаевом побоище по Лондонскому списку 1959 г.
Сказание об иконе Владимирской божьей матери и находжении Темир-Аксака по Лондоскому списку 1959 г.
Варианты по Лондонскому списку 1959 г.

Никаноровская летопись 1962 г.
Сокращенный летописный свод 1493 года. 1962 г.
Сокращенный летописный свод 1495 года 1962 г.

Летописный свод 1497 года 1963 г.
Дополнение к летописному своду 1497 года 1963 года.
Летописный свод 1518 года (Уваровская летопись) 1963 г.
Дополнение к летописному своду 1518 г. по Синодальному списку № 645. 1963 г.
Летопсисец начала царства царя и великого князя Ивана Васильевича 1965 г.
Александр-Невская летопись 1965 г.
Продолжение Александро-Невской летописи 1965 г.

Владимирский летописец 1965 г.
Новгородская вторая (Архивская) летопись 1965 г.

Новгородская первая летопись старшего извода (Синодальный список) 1950 г.
Новгородская первая летопись младшего извода 1950 г.

Летопись по Лаврентьевскому списку. Повесть временных лет 1962 г.
Суздальская летопись по Лаврентьевскому списку 1962 г.
Суздальская летопись. Продолжение по Академическому списку 1962 г.

Ипатьевская летопись 1962 г.

Патриаршая или Никоновская летопись 1965 г.

Новгородская харатейная летопись 1964 г.

Н. К. Гудзий: Хрестоматия по древней русской литературе 9-17 веков. ГУПИ,Москва, 1962 г.

С. М. Соловьев: История Росии с древнейших времен ИСЭЛ, Москва 1959 г.

В. Н. Татищев: История Российская. ИАНК СССР, Москва-Ленинград, 1962 г.

Академия НК: История русской литературы. Москва 1958 г.

Н. К. Гудзий: История древней русской литературы Москва 1956 г.

Д. С. Лихачев: Культура Руси. Москва-Ленинград 1962 г.

Н. Г. Бережков: Хронология Русского летописания Москва 1963 г.

Б. А. Рыбаков: Древняя Русь Москва 1963 г.

Г. П. Федотов: Святые Древней Руси Нью-Йорк 1960 г.

Академия Наук: Исследования и материалы по Древнерусской литературе. Москва, 1961 г.

Севернорусские сказки в записях А. И. Никифорова. Москва, 1961 г.

В. Я. Пропп и Б. Н. Путилов: Былины. Москва, 1958 г.

Академия Наук: Былины Печоры и Зимнего Берега. Москва, 1961 г.

Академия Наук: Очерки по истории философской и общественно-политической мысли народов СССР. Москва,1955 г.

И. И. Срезневский: Материалы для словаря древнерусского языка том 1-3 Санктпетербург, 1893 г.

Я. С. Спринчак: Очерк русского исторического синтаксика. Москва, 1960 г.

Д. С. Лихачев: Повесть временных лет. ИАН СССР.
Москва-Ленинград 1950 г.

Н. Н. Ильин: Летописная статья 6523 года и ее
источник. Москва 1957 г.

Исследования и материалы по древнерусской литера-
туре. ИАН СССР. Москва 1961 г.

И. И. Смирнов: Очерки социально-экономических
отношений Руси 12-13 веков.
Москва 1956 г.

Труды отдела древнерусской литературы
том 12-Том 20.
Москва-Ленинград 1956 г. -- 1964 г.

М. Ю. Брайчевский: Когда и как возник Киев
Киев 1964 г.

В. Д. Королюк: Западные славяне и Киевская Русь.
Москва 1964 г.

Библиография Русского Летописания АН СССР
Москва-Ленинград 1962 г.

Н. В. Водовозов: История древней русской литера-
туры. Москва 1958 г.